

偽物の名武偵

コジローⅡ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界に新たに設立された新資格、『武偵制度』。その資格を有した民間の武力集団『武偵』を育成する東京武偵高校に、一人の少年・有明錬が在籍していた。ひよんなことから武偵に『なってしまった』彼が持つ特質は2つ。ありえないほどの幸運と、周囲と自らが巻き起こす勘違いの数々。この2つの武器を手に、やがて彼の名は轟くことになるのだった――。※この二次創作は、自ブログ『コジローの虹日和』とのマルチ投稿中です。

目次

第零章 スタートライン

0.	くだらないプロローグ	1
1.	卒業は硝煙と共に	13
2.	Examination ①	28
3.	Examination ②	42
4.	Examination ③	63
5.	Examination ④	88
6.	Welcome To Next Stage	122

第一章 緋弾のプロローグ

7.	それはきつと運命を	146
8.	神崎・H・アリアによる唯我独尊な命令	176
9.	誰もが真意を胸に秘め	198
10.	瑠璃色少女は確かな感情を持つか？	220
11.	『97. 1%』の学科	251
12.	一つの事実、数多の意味	284
13.	それぞれの雨	319
14.	世界で最も過激な天空へ	348
15.	そして2人の4世は銃口を向け合う	371
16.	あるいは運命のような再戦	392
17.	カメラアの瞳をした少女は	416
	流れ弾（アウト）1〜3	437

第二章 銀氷の架け橋

18.	月光の下で	445
19.	今はまだ平穏であろう日々	467

20.	主人公たちの知らない攻防	498
21.	おそらくは世界一不適當なプロポーズ	525
22.	夜空に咲く火の花よ	551
23.	雷氷のシャル・ウィー・ダンス	582
24.	その水平線の先へ	625
	流れ弾（アウト）4〜6	660
第三章 黄月のプルマージュ		
25.	闘劇の前の小劇場	669
26.	世界を揺らす最初の一波	700
27.	正義の扉を開ける鍵	735
27.	5. 終着点へ向かう物語	763
28.	かくして彼は境界線を越える	793
29.	4000年の大地を歩きましょう	820

第零章 スタートライン

0. くだらないプロローグ

——この世界もなかなか変わったモンだな。

と中学2年生の俺、ありあけれん有明錬は思っていた。

いや、別に達観したじいちゃんみたいな性格してるとか、そういうことじゃねえよ？ 断じてな。

そうじゃなくて、単純にこの世界に広まっている『とある存在』について、俺は冒頭の感想を述べたんだ。

——武偵。

正式名称を『武装探偵』と呼ばれる彼らは、日々凶悪化の一途を辿る犯罪者たちの横行を防ぐべく生まれた国家資格を取得している。

彼ら武偵に許されたのは、語源どおりの武装許可と逮捕権。簡単に言ってしまうえば、警察に準ずるほどの権利を有した民間の武装集団なのだ。

そしてこの武偵……はつきり言って、なろうと思えばほとんどの人間がなれる。

なんたって、武偵を育成するための学校なんてのさえ、この世界中に点在しているんだからな。おまけに、武偵女子高まで存在するどころか、高校生はおろか中学生や果ては、ごくごく稀だが小学生まで武偵を目指す始末。どれだけこの制度が一般に根付きつつあるかは察してあまりある。

……まあ、なんだ。つまり、武偵という存在は、プロアマ問わないのであれば、かなりの数が溢れかえっているということになるわけだ。

いやいや、ホントに変わったもんだよ、全く。

武偵が誕生したのはこの百年以内の話なんだが、それまで民間人が犯罪者を取り締まる、なんてことはなかったらしい。ま、違法に銃を仕入れるような連中相手にかかっていく民間人なんてそうはいなかっただろうが。

それが今や、『正義の味方』がその数を急速に伸ばす時代だ。

もつとも、その代わりに今度は簡単に銃を手に入れられる時代になってしまったことで、犯罪率も同時に上昇しているらしいんだが。

まあ、とはいっても俺にとってそれは関係ない話だ。

なぜなら、別に俺は武偵を目指してるわけでも、犯罪者を目指してるわけでもないからだ。

武偵に興味があるかないかを問われたら、そりや多少はある。今や武偵を目指すやつは珍しくないし（というかそれなりに選ばれる進路ですらある）、友達にもそういうやつは何人かいるし、実際に武偵に助けられた人々から見れば彼らはヒーローにも等しいらしい。思春期の少年特有の、そういう『正義の味方』への憧れが一切無いと言え、嘘になる。

ただ……なあ。

自慢じゃないが、俺はあいにくと自分で自覚する程度には普通の人間だと思ってる。取り立てて頭がいいわけでも、抜群に運動が出来るわけでもない。大した特技の一つも持ってないしな。

——だから。

結局のところ、俺が武偵に関わることは多分ないんだろうと思っていた。

ありきたりな人生レベルを歩んでいくんだと思っていた。

普通に中学を卒業して、普通に高校で過ごして、普通に社会人になって、普通に一生を生きていくんだと思っていた。

別に、それでいい。文句なんてない。

俺が進むのはきつと、誰もがそうだと納得するような、『普通の一生』のはずだったんだから。

だけど。

『普通じゃない一生』は。

——あっさりど、やってきた。

* * *

それは、中学2年の冬のことだった。

「——動くんじゃねえぞ、お前ら。動けば、命の保障はしねえ」

フルフェイスマスクのせいが若干くぐもった声を聞きながら、俺は、無抵抗の意思を示すため、周りの人たち同様に両手を上げた。いわゆるホールドアップというやつだ。

俺たちに指示した主（体格と声からして男だろうな）はといえば、右手に黒光りした拳銃を握り、店員に金を要求していた。

——さて。

勘のいいやつならもうわかるかもしれないが、実は俺は今銀行強盗というなかなかレアな状況の真っ只中にいる。

シヤレにならない。冗談じゃない。寒風吹きすさぶ中、お金をおろしに來ただけだったのに、どうしてこんなことになっちまった。

背筋にじんわりと汗が滲み、それが余計に現状の不安感をあおる。ああ自分は今緊張状態にいるんだな、と現実から遊離を始める脳内が他人事のように思考する。

……いや落ちつけ、有明鍊。自分が置かれている状況から目を逸らすな。

それができれば、また話は変わってくる。いかに逼迫した危機的状況であっても、視点を変えれば活路は見つかる。

たとえば、そう。犯人の男の様子。そこに目をつければ、分かってくることもある。

「は、早くしろ！ 急げ！」

……多分、これが不幸中の幸いだな。

犯人の声は震えてるし、客の方に意識がいつてない。とにかく金を引き出すことを優先している。完全に切羽詰っていて、俺たちを今すぐどうしようとは考えていねえはずだ。

まあ、大抵こういうのは借金とかで追い詰められた人間がやることだからな。プロの犯罪組織とかならともかく、素人の単独犯が人質に向かつて発砲なんてできねえだろ。……多分。

それに、おそらくだが警察にも連絡がいつているはずだ。確か、カウンターの下だったかには通報用の非常スイッチがあるからな。銀行員の誰かがそれを使用してくれさえすれば、警察が駆けつけてくれる。

だから、人質は桜の代紋背負った国家権力がことを収めてくれるまでじつとしていれればいい。そうすれば、危険はないはずだ。

よし、理論武装完了。今すぐパニックになりそうな脆弱な自身の精神は、なんとかこれでもってくれそうだ。

そう。

例えば、犯人が自棄をおこしたり、誰かが犯人を取り押さえようとかして事態が悪化しない限り、俺は冷静を保て——

「うわああああああああああああああああああああ！」

あれえ、フラグでしたかー!?

突如、俺の近くにいたスポーツマン風の青年が大声を上げながら犯人に飛び掛かっていった。

それは勇気ある行動ではあったんだろう。漫画ならばここで犯人確保、大団円を迎えることになるだろう。

だが残念ながら、そして当然ながら、ここは現実。決意が無謀に、勇気が蛮勇に、あっさり顔と顔を変える世界だ。

もちろんあんな声を聞けば犯人だつて気づく。が、店内ということであまり離れてなかったということもあり、咄嗟に反応できず青年に突撃された。

そのまま揉みあい発展する2人。床を転がりながら主導権を奪い合う。

突然のことに反応できない俺たちが見守る中——

「テメエー！ 大人しくしやがれ！」

「ぐ、う……ッ！」

——軍配が上がったのは、犯人の方だった。

青年を組み伏せ、どこから取り出したのかサバイバルナイフまでつきつけている。

「ブツ殺されてえのか！」

「ひ、ひっ!? こ、殺さないでっ」

何してくれとんじやお前ええええええええええ！ 犯人刺激しただけじゃねえか！

と、内心叫びたい気持ちでいっばいだつたが当然そんなことはでき

ず、俺は犯人が暴走して乱射なんて始めないことを祈っていた。もはや取り繕うことはできない。ただただ、自分の無事を願う。

が、俺のそんな思いを裏切るように、

「おい——そのガキ」

「……………え？」

いきなり犯人が俺の方を向き、そう言ってきた。

思わず、左右を見回す。右には婆さん。左にはおっさん。

指名されたのは……………俺だ。

犯人の男は、青年が逃げ出さないようにきつちりと押さえつけながら、俺に指示を出した。

「テメエの足元に落ちてるモンをこっちに持ってこい」

「……………足元？」

言われて視線を落とす。

するとそこには、いつの間にもやら犯人がさっきまで持っていた拳銃が転がっていた。おそらく先ほどの揉み合いで転がってきていたのだろう。

あいつが言っているのは……………これ、だよな。確実に。

「早くしろ！…できねえってんならこの男を殺して、お前も殺すぞ！」
「ッ!」

犯人に急かさされ、慌ててその場にかがみこみ銃を手取る。

と、俺はその際思わず引き金に指をかけるように持ってしまった。実は俺は趣味でモデルガンを持ってんだが、どうにもその時の癖が出てしまったらしい。

ズシツとした質感が、俺の手を通して伝わる。静かに黒光りする、殺人兵器。これが人の命を奪う武器の重みかと思うと、こんな小さな物が死神の鎌ほどに恐ろしく見えてきた。

俺が使うわけでもないのに、銃を握った手が僅かに震える。

……………クソツ、なにやってんだ俺は。こんなモン、早く渡しちまえよ。そう思った俺は、一先ず拳銃を軽く持ち上げて。

ゆつくりと立ち上がり顔を上げる——その寸前に、手が、さきほどよりも大きく震えてしまった。

「あ」

思わず零れた小さきな眩きとともに。

パンツ、という乾いた破裂音と、それとは別に何か、金属がぶつかり合ったような甲高い音が聞こえた。

はて、これはなんだろう？

「……………」

……………イヤイヤイヤイヤ!

ど、どどどどどうしよう?! 冷静に考察してる場合じゃねえよ!

誰に言われなくとも、この俺本人がはつきりと理解していた。あまりにも単純な、しかしどうしようもなく決定的な行動。

俺が——撃つてしまったということ。

「あ、あ……………」

耳が、困惑したような犯人の声を捉える。

そりやそうだ、人質がいきなり発砲するなんて露ほども思っただけだったろうよ。

——終わった。完全に。ヤバイとか、そういう次元じゃない。完全無欠に、人生の終了だ。その引き金を文字通り引いたのは、俺なんだが。

サツと顔から血の気が引く。

こんな真似をしでかした俺を、犯人はきつとただではおかないだろう。

おそらく……………俺は殺される。

「ははっ……………」

思わず、諦めたように小さな笑いが零れた。

僅か先に訪れるであろう未来を想像してしまった俺は……………顔を上げることができずにその場に立ち尽くすしかなかった——

* * *

「あ、あ……………」

銀行強盗を目論見、青年を1人取り押さえていた男は今、目の前の少年を見て震えた声を出していた。

その理由は、少年が自分の要求に従うどころか、あろうことか発砲

したから——ではない。

もちろん、それも理由の一端ではある。

が、より正確に言うならば、

少年が撃った弾丸が、自分の持っていたサバイバルナイフを弾き飛ばしたからであつた。

それも、自分が見ている限りでは、まるで偶然引き金を引いてしまったかのような気安さで。

が、当たり前前の話だが、偶然でこんな結果が出るわけがない。

つまりは、今のは必然の現象。まさしく熟練の技術が生み出した一発だつたのである。

(な、んだよあのガキ……!?! どうしてあんな年端もいかねえようなガキに、こんな芸当ができるってんだ?!)

故にこそ、男は戦慄する。つい先日拳銃を手に入れた自分とは、まったく格が違うであろうこの少年に。どれほどの研鑽を積んでい
るのか、その底が見えない少年に。

なにより。

顔すら上げずに悠然と立ち続ける少年の静かな威圧感に、男は圧き
れていた。

と、その時、

「ハハッ……」

少年の小さな嘲笑が、僅かに大気を揺らした。

それが何を意図したものだつたのかは、男には予想できない。た
だ、何か不吉な気配だけを感じ取つた。まるで、何かの合図のような
この嘲笑に、男の総身に震えが走る。

心臓を直接握られているような、強烈な圧迫感。

(ヤバイ……このままだと、何かヤバイッ!?)

不気味なほど静かに佇む少年と、緊張に脂汗を流す男。

——そして生まれた空白の時間。

男も、少年も、そのほかの誰も動かない。

静止。

静止。

あたかも時が止まったかのように思われたその時――

「――武偵だ！ 強盗罪及び鉄刀法違反の現行犯で逮捕する！」

勢いよく、銀行内に何者かが踏み込んだ。

突然のことに全員の視線が一点に集まる。

そこには、1人の男が拳銃を構えて立っていた。

正義の味方。

武装探偵――警察に準ずる権力を持った『便利屋』が、事件の幕を引くべく現れた瞬間だった。

* * *

――結論から言えば、俺が殺されることはなかった。

あのあとすぐに、1人の武偵が突入してきて、事件を解決したからだ。一体何があったのかは知らないが、犯人は抵抗らしい抵抗もせずにあつかりと捕まった。ただ、武偵に連れられて外に出るとき、やたらと俺をちらちら見てきていたのが気になった。

で、だ。事件が解決したのは言うまでも無く諸手を挙げて喜ぶべきことなんだが、ここで1つ問題が残る。

そう――俺の拳銃使用の件だ。

俺は警察でもましてや武偵ですらない。発砲許可どころか帯銃許可すら持っていない。

だから俺はなんらかの罰則があるのかと思ってたんだが……事件を解決した武偵が人質や店員の話から誤射であるとして、お咎めなしとなるように対処してくれた。

後で聞いた話だと、武偵という制度が設立されたからか、武器の使用に関する法律が若干変わっているらしかった。

ま、なにはともあれ、こうして俺は武偵という存在に助けられたわけだ。

しかし、なかなかかつこよかったな。武偵つてのも。ヒーローつてのも、あながち間違っちゃないのかもしれない。

まあ、だからといって俺のこの先の人生が変わるわけではないんだけどな。

結局、俺みたいな人間とは住む世界が違う、ということを見せ付け

られただけだし。

だから、これでこの話は終わりだ。ただの被害者Aが主人公に助けられたという、その他大勢の1人の物語に過ぎない。

これから俺はまた、あの平々凡々な日常へと帰って行くのだ――

* * *

――と思つてたんだがなあ。

「有明錬君。君、武偵になる気はありませんか？」

俺も巻き込まれた銀行強盗事件から明けて3日後。

有明家――つまり、俺ん家のリビングには今、4人の人間がいた。

俺、母・有明涼、父・有明仁、そしてもう1人。

俺はちらりと、向かいのソファ―に腰を据えた長身痩躯の男を観察する。銀縁の眼鏡が理知的な顔立ちによく映えている彼は、どうみてもデスクワーク向きの人間に見えるが、これが意外と武闘派つてんだからなあ。

そんな感想を俺に抱かせたこの男こそ、3日前の事件を解決した武偵・出雲九矢武偵だ。

出雲武偵はプロライセンスを持った現職の武偵らしい。第一線での仕事も多くこなす、かなり出来る武偵……らしい(本人によれば、だが)。

で、今そんな人と俺たち有明家がテーブルを挟んで対面しているのはなぜかと言えば、この人がいきなり家を訪ねてきて、なんと俺を武偵に誘ったりしだしたからだ。

面食らつて訳がわからない俺たちはとりあえず彼を招き、今まさに彼から話を聞くところというわけだ。

挨拶と自己紹介を終えた出雲武偵は、眼鏡を一度上げて説明を始めた。

「3日前の事件、私はあの時巻き込まれた人たちの話を聞いて、君の発砲は緊張状態による誤射だと判断しました。……だけど、犯人の男に話を聞いて見ると、まったく意見が違った。彼はこう言っていましたよ。『誤射？ バカ言うなよ、あんなこと偶然できるわけがねえ』……と。さらに話を聞くと、なんと君は犯人のサバイバルナイフを撃ち弾

いたらしいですね？ 事実、防犯カメラにもその映像が残っていた。周りの人は拳銃を持っていた君を注視していたようだから、気づかなかったようですが」

……？

出雲武偵の話に、俺は心当たりがあった。

もしかして、あの時間聞いた破裂音以外の音は、ナイフを弾いた音だったのか？

なんてこった。ということは、少しでもずれば、犯人が捕まっていた青年にあたってたじゃねえか。

今更ながらそのことに思い至った俺は、体を一度震わせた。

そんな俺に、出雲武偵は続ける。

「確かにそうだ、と思いましたがよ。君と犯人の距離はおよそ4メートルほどだった。まあ、これは距離の上では偶然の範囲に収まるでしょうが、なんと言っても当たったのはナイフの腹というごく小さな的です。犯人にも人質にも当たらず、偶然そこに当たったなんて確率の低い可能性より、君が自分で狙って当てたのだと考えたほうが納得がいく。いえ、これは大事にならなかつたから言えることですが、大した腕前と度胸ですよ。どうも君には射撃の才能があるらしい。……どうですか？ その才能、活かしてみるのはありませんか？」

ニコリ、と薄く笑いながら、出雲武偵は俺に尋ねる。いやまあそれはいいんだけど、なんか目つきがちよつと怖いんだが。

しかし……何言ってるんだろうかこの人は。

腕前とか度胸とか、別に俺にはないってのに。

というか、だ。そもそもあれはただの誤射——

「なるほど、鍊にそんな才能が！」

「言われてみれば、私この子の部屋でモデルガンを見たわ！」

——であつて、俺が意図したわけじゃ……って、あれえ？

「ええ。私は確信を持っています。あなたがたの息子さんは、稀有な才をお持ちであると」

「うんうん、さすがは俺の息子だ。こいつはいつの日か大物になると、俺はつねづね思っていたからな！」

「プロの武偵からスカウトされるなんて、すごいことよね？ まーど
うしましょ、私、近所の皆さんに自慢しちゃうかも」

当人を置いて盛り上がる3人の会話に、俺は呆然となる。

……え、えーっと。

なんか、話が変わる方向に進んでいったやしませんか？

「ところで出雲さん。武偵ってのは、そんなに簡単になれるものなん
ですかね？」

「もちろんすぐにプロになれるわけではありません。ですが、武偵を
養成するための学校があります。そこで学ばれてみてはいかがで
しょうか？」

「ああ、たしか東京武偵高校中等部だったかしら？ あそこならここ
からも近いし、通学も楽ね」

待ってくれ。俺を置いて話を進めないでくれ。

何が一体どうなってんだ。

「ええ、ご存知でしたか。3年からの転入となると少々厳しいかもし
れませんが、彼ならばきつと大丈夫でしょう」

いやいや。一体なにを根拠に言ってるんだ。

「せっかく見つけたった錬の才能なんだ。親としてバックアップしてや
らんとな」

父さん。俺にそんな才能ないんだ。

「そうね。私もこの子を応援したいわ」

母さん。頼むからもっと別のことを応援してくれ。

「……………」

などなど思ったんだが、俺は結局一言も口を挟まなかった。という
か、なんかありえないほど両親がヒートアップしていき、挟む暇がな
かった。

そうして俺が何も告げられないまま、どんどん話は白熱していき、
最後にようやく俺が武偵を志すか否かを、両親は聞いて来た。

ただ、その顔はどういうわけか俺が断るなんて微塵も思っていない
ようだった。

……って、仮にも武偵は危険な道だぞ？ なんだってそんな顔が出

来るんだ？ まあ、楽天的な親であることは認めるが。

——つと、それよりも早く答えないと。

そうだな。とりあえずは、

「あーつと……まあ、ちよつと考えてみるわ」

無難に、そう答えておいた。

* * *

——そして。

最終的に、俺は東京武偵校中等部へと転校することを決めた。

自分に大した能力がないのはわかっていたが、それでももしかしたら出雲武偵が言うように、少しでも才能があるのかもしれない、と思っただけだ。銀行強盗の時はあれだ、眠っていた才能が目覚めたとか、そういう可能性もあるしな。

まあ、それは冗談にしたつてだ。言つたら？ 憧れがないわけじゃないって。だったら、何もせずに諦めるより、何かした方がいいと思つたつと——それだけの話だ。

……もつとも。

俺は後々思うことになるんだけどな。

ああ、やめときやよかつた——つてな。

まあ、後悔は先にできないからこそ後悔なんだから、そんなことに意味はないんだけど。

しかしなあ……なんでなんだろうな？

俺自身、思つてもみなかつたことなんだが。

なぜか……そう、本当になぜか。

俺の武偵としての日々が、長く長く続いていくことになるとは……このときの俺はこれっぽっちも知らなかつたのだ。

1. 卒業は硝煙と共に

——春。

それは出会いの季節であり、別れの季節でもある。

俺が通う——いや、通っていた『東京武偵高校中等部』でもそれは変わらない。

校庭に植えられた桜の木は花開き、ちらちらと舞い始める様は、新たな門出を祝うようにも訪れる別れを惜しむようにも感じられた。

別れの日。

そして同時に旅立ちの日。

そう……卒業式だ。

常ならば剣戟の音や銃声が響き渡っているはずの体育館も、さすがに今このときばかりは、装飾華美とまではいかないにしても、一応の体裁は整えられている。館内には多少乱雑に並べられた（このあたり武偵校らしい）パイプ椅子が列を成し、しかし俺たち卒業生はそれに腰を下ろすことなく、式の終了を迎えるために全員起立していた。

「——以上を持ちまして、第〇〇回東京武偵高校中等部の卒業式を終了いたします」

司会を務める教頭先生の声を聞きながら、俺はこの1年間のことを思い返してみる。

ああ……なんだろうな。一言でいうなら——

——ひたつつつつつつすらに大変だった！

だつてさあ、聞いてくれよみなさん！

この学校の連中と来たら平気で銃ぶつ放すし、教師からはなんかよくわからん信頼を受けてやたら高難度の任務をさせられるし、やっかいな上にとんでもなく個性的な後輩はできるし！

本気で死ぬかと思つたことが何度あったことか……。まあ、どういう奇跡か、こうして生き残っているわけだが。

ああ……生きてるってすばらしいなあ。

と、そんな風に俺が脳裏を駆け回る受難の日々に感慨に浸っていると、隣に立っているクラスメートの男子が声をかけてきた。

「よお、錬。ま、あれだな。なんとかお互い生き残ることができたな。まー、つっても、中学でそんな結末になるやつなんてほとんどいねーだろうけどな」

「あー……まあな。そりゃそうかもしんねえが、俺は正直、死にかけてことも多かつたけどな」

「お前の場合は特別だろうよ。会長とどつか任務クエストに行くことも多かつたんだろ？ 他の『10』のメンバーともよく一緒にいたみたいだよ？」

『裏任務』のことか？ ありや、本気でヤバイ。受けねえ方が身のためだぞ」

どれほどヤバイかの詳細は言えないが。機密保持というか、守秘義務というか、そういった事情が絡んでくる。まあ、基本的に武偵は自分が受けた任務を話さないものだけだな。

「受けない方がいいもなにも、あれはお前らしか受けられねーだろ。ま、それはともかく、やつぱお前は凄いや。たったの1年で天辺にまで上り詰めたんだから。ホント、武偵の才能あるよお前。このまま武偵続けていけば、すげえ奴になりそうな気がする」

「武偵の才能、か……」

男子の言葉に、俺は僅かに目を細める。

才能。

武偵としての。

とてもじゃないが、俺は、俺には、そんなものがあるとは思えない。実際、訓練はきついと思うし、任務は仲間に助けてもらってやつとこさこなせているだけだしな。それにしても、なぜかやたらと仲間は俺に感謝するんだが……まあ、社交辞令だろうけど。

どうにも、俺はあまり武偵向きの人間じゃない……と思う。

ただ、なあ。

だからといって、じゃあ武偵を辞めればよかつたじゃないか、という風にはならない。

理由はいくつかある。

1つ目、これは規則的な問題なんだが、そもそも武偵校というもの

は原則1年の変わり目——つまり4月にならなければ一般校には転校できないようになってる。というのも、武偵は校則により銃器または刀剣を所持していて、それは公安委員会に登録しなければならぬ、と武偵法で決まっている。が、当然そんなものを持ったまま転校できるわけがない。だから、その登録——銃検の更新期である4月しか学校を辞められない。3年になってこの学校へ入った俺は、どのみち1年間は武偵を続ける他道はなかったんだ。

が、とはいえ俺に辞めるつもりはなかった。転出届も出してないしな。

それは、2つ目の理由に関係ある。今度は、んー、なんというか人間関係（というのもまた違う気もするけど）についてだ。

これは既に前述していることだが、なぜか俺は教師たちから期待を背負っている。これに関しては、俺もなぜなのかはわからん。どうも編入時であった『レクリエーション』が原因らしいんだが……いやでもあの時俺はやたらとパニックってた記憶しかないんだがなあ？

おまけに、うちの両親まで相当な期待を持つてるようだし。ありや、5月だったかな？　うちの担任が余計なこと言ったせいで、両親は感心しきりだった。今じゃすっかり俺がエリート武偵になるものだと疑わねえ。一流の武偵企業は収入も相当なものらしいから、親としては喜ぶべきところなのかもしれないが……にしたって、お気楽すぎるぜマイ・ペアレンツ。まあ、とはいえ今まで育ててもらった恩は当然ある。できることなら、俺はその期待を裏切りたくねえんだよな。

とまあ、そんなこんなで俺は今までやってきたわけだ。

そして、俺はこれからも武偵を続けていく。

1つ目の理由はもう関係ないが、2つ目の理由と『もう1つの理由』が、俺を前に進ませる。

それが俺が決めた、俺の道だ。

——しかし、だ。

「まあ、武偵は確かに続けるけどよ。お前……っーか、どいつもこいつも俺を持って囃しすぎだ。言つとくけどな、俺に才能なんざねえぞ」

「はあ？」

男子は「なに言ってるんだこいつ」みたいな顔になる。

「おいおい、それをお前が言うかよ。お前に才能がねーつつつたら、この学校の生徒はもれなく進路変更するはめになるぞ？ 元生徒会長やOBさえ倒したくせによお」

「……ありや、ただの誤解だ。運がよかつただけだ」

「いやいや、運だけであの人たちが負けるわけねーだろー？」

「……はあ」

そう。そうなんだ。

俺は、同級生でもある元生徒会長や、抜き打ちで後輩を鍛えにきたOBの先輩を倒したということになっている。

が、当然ながらせいぜいが平凡止まりの俺に、そんな真似ができるわけがない。みんな、勘違いしているだけなんだ。

……いや、まあ、確かに戦ったには戦ったけど。だけど、どういうわけかいつの間にか戦闘は終わって俺が勝ったことになっていた。まったく意味のわかんねえことにな。どういふことなんだろうな、ホント？ 誰か教えてくれるやつがいるなら、俺にさっさと教えてくれ。

「ま、なにはともあれお前の強さは周知の事実なんだ。高校に進学しても、せいぜいその強さを見せ付けてやれ。頼むぜ、最強！」

バアン！ と俺の背中を叩くクラスメート。おい、痛えじゃねえか。

しかし……進学、ね。

さつきこいつが言ったように、例年のこととして俺たち卒業生のほとんどはこのままエスカレーター的に高校——東京武偵高校高等部に進学する。

高等部はレインボーブリッジの南方にある人口浮島^{メガフロート}——通称『学園島』と呼ばれる場所に設立されている、武偵の総合教育機関だ。

で、その中等部生徒にあたる俺たちは、卒業後その高等部に進むということになる。

もつとも、もちろん全員が全員そうなるわけじゃないけどな。3年

間の武偵校生活を通してやはり普通の道へと進路を変える者も、ごく僅かだがいる。が、そういう奴は大抵2年か1年の時点ですぐに変えている。3年までこんな学校にいるやつは、本気で武偵を志そうとしている連中が大半だからだ。

だが、今年に至っては、少々例外的だ。なんと今期卒業生全員が、このまま武偵関連の進路を目指すってんだからな。噂に聞いた話だと、高等部への進級率も9割を超えていたらしい。これも、あの厄介な元生徒会長のカリスマってことなんかね？

ちなみにだが、俺もその9割超に入っている。わざわざ他の所へ行くほど他所の武偵高の情報を持つてるわけじゃねえし、主体性のない話になるが、とりたててどこに行きたいってのもねえしな。

「進級、ねえ……。まあ、あんまり期待してねえけどな」

ため息をつきながら、俺は若干苦い顔になる。

中等部でさえ、あれほどぶっ飛んでたんだ。高等部がここよりも穏やかなところだなんてことは、俺には到底思えない。……。あ、なんかちよつと進学後悔してきたかもしんねえ。

と、俺の台詞のどこがおもしろかったのか、男子が吹き出した。

「あつははー。言うなよ、錬。ま、お前の実力なら確かにすぐ上位に入れるだろうけどな！ つーか、本来ならインターンでもう高等部あつちに行つてもおかしくねーもんな。てか、『10』のメンバーも何人かもう向こうに行つてんだろ」

「まあな」

インターンとは、簡単に言えば成績が優秀な生徒が一足先に高等部で学ぶっていう制度だ。

この制度を利用すれば、中等部在籍時であっても、飛び級制度のように高等部に所属することが出来る。才能ある連中が、自身のレベルアップのためにこの選択肢を取ることが多いな。

つと、そういうや、2学期に俺にも話が来てたな。もつとも、俺は受けなかったが。

確か、担任の話じゃ……。、

『有明君は、武偵としての技術は十分だわ。だけど、去年まで一般中学

にいたから、正直武偵としての知識は乏しい。だから、私は1年間中等部で学んだ方がいいと思うのだけれど……。もちろん、あなたがインターン制度を利用したいって言うなら先生は応援するわ』
だったか。

「応援するわ、と言われてもなあ。」

さすがに高等部で俺の実力が通用すると思うほど自惚れちゃいねえし、というかそもそもそんな真似したら下手すりや死にそうで怖い。ヘタレで悪かったな。

「インターンなんて、興味ねえよ。そういうのは、行きたいやつだけいきやいだろ」

なるべくそっけなく言う俺に、男子はニヤリと笑いながら俺は知ってんだぜとか言い出し、

「とかいって、本当は座学がダメダメだったからだろ？ 高藤先生に聞いたぜ。お前腕はいいのに知識はからつきだったからなあ。一般中学から転校してきたから、しゃあないっちゃしゃあないけどな」

「っせえよ」

座学がダメ？

当たり前だろそんなの。こんな学校でもねえかぎり、普通は尾行の基本や爆弾の配線なんて学ばねえだろ。少なくとも俺がいた中学は教えてくれなかった。

まあ、とかなんとか言いつつ、今では否応無くそんな知識が身につけてしまったが。

——つと。

「おい、そろそろ退場だぞ」

「おつ、ホントだ。いやーサンキュな、錬。お前のおかげで退屈な卒業式を乗り越えられた」

お前、そんなことのために話振りやがったのか。俺も暇つぶしにはなったから別にいいけど。

うちのクラスの退場に合わせて、俺も体育館後方の出口まで歩き始める。

教師や保護者たちが俺たちを拍手で送り出す。まるでシャワーのように耳朶を叩くその音に祝福されながら、俺は体育館を出た。

そのまま、最後のHRを受けるために、俺たちは今日で最後になる自分たちのクラスへと向かう。

「ふう……」

その道すがら、俺は安堵の息を吐く。

なにはともあれ、これで卒業式は終了だ。予想してたよりは大分大人しいものになったな。

これでしばらく荒事とはおさらば。春休みの間は、精々平和に過ごすしよう――

――なんていう俺の考えは、非常に甘かったといわざるを得ない。

ここは武偵養成学校。

このまま無事卒業なんて、ありえなかったのだ。

* * *

「――というわけですね、みなさん。高等部は今までよりもさらに大変になると思います。だけど、先生はみなさんなら必ずやりとげられると信じています」

と、卒業式後のHRで俺たちの担任、高藤霞^{かすみ}先生は言った。

栗色のストレートポニーが特徴的な、まだ若い先生だ。彼女はこの1年間、怒ったところを見なかつたほど穏やかな先生で、いつでも悠然としている。だからといって甘いだけかと言えば、そうではなく、きちんと諭してくれる先生だ。俺は素直に、彼女が担任でよかったと思う。

しかし、先生。こういつちやなんだけど、すごくベタな台詞ですね。別に本人には言わねえけど。

「だからみなさんも、ここでの生活を忘れずに精一杯頑張つて『――ジッ』――?」

? なんだ?

教壇で話していた高藤先生の言葉に、突如ノイズが走った。

いや、違うな。これは、校内放送用のマイクが入った音だ。教室前方、黒板の斜め上くらいの位置に設置されたスピーカーから、ノイズ

は聞こえてきた。

つまり、今この時誰かが放送室にいて、これから何かを放送しようとしているのだ。

——そこまで考えて、なぜかものすごく嫌な予感がした。

なんというか、まるで嵐の前触れのような、何かが起こるぞと宣告されているような、そんな予感が。

そして。

その予感は当たっていた。

『ハロー、3年生の諸君。聞こえてるかな？ 君たちの元生徒会長、鈴木時雨だ』

スピーカーから聞こえてきたのは、若干低い女の声。

声量的には、ごく普通。なのにその声に独特の威圧感を感じるのは、彼女の役職が原因だろうか。

「時雨……」

口の中で小さく呟く。

——最悪だ。

このタイミングで、あの女が、俺をこの学校でもっとも振り回した元生徒会長が動いたとなれば、ただで済むはずがない。きっとこれから、おそらく俺にとっては厄介な事態になるぞ。

ざわざわと、教室内がにわかに騒がしくなる。

みんなも、俺が考えていることと同じ結論に至ったんだろう。そして多分、他のクラスの連中も同様に。

おいおい時雨……お前、こんな最後の最後で、一体なにをおっぱじめる気だ？

『まずは、同じくこの学び舎を去る私が言うのも少々おかしいが、卒業おめでとう。こうして全員無事に卒業できたこと、元生徒会長として、そして仲間としてうれしく思う』

と彼女は前置きをおいて、

『だが……このまま卒業とは、なんともつまらないと思わないか？

これでは一般中学と変わらない。私達は武偵の卵だ。ならば、最後まで武偵らしくいかないか？』

あんやろ……卒業式ではやけに大人しかった（これにはちやんとした理由もあるが）のは、こういうことか。

止めろ、時雨。つまらなくなってる。平和な卒業式だった、それでいいだろ？ このまま卒業することになったって、それはそれで全然いいことじゃねえのか？

だが、そう思ったのはどうやら俺だけだったようだ。

教室内の雰囲気が変わる。動揺から高揚へ。この1年の経験則でわかる、こいつらどいつもこいつもわくわくしてきてやがる。

そしてそれは、俺にさえわかることなのだから、当然こいつらを引っ張ってきた時雨もわかっているはずだ。わかっていて、時雨は放送を流した。だからこそ、彼女の声には全員自分の話に乗ってくるという自信があった。

だから。

あいつは実に楽しげに、それが一体どういう騒ぎを起こすのかもすべてを理解した上で。

何気なく。

あつさりど。

実にとんでもない発言をした。

『私はここで——「^{カーニバル}撃ち上げ」を提案したいと思う』

「な、に……!?!」

鈴木時雨の宣言に、俺は自らに戦慄が走るのを感じた。

それは、彼女の言葉が意味するところを把握できなかったから、ではない。むしろその逆。時雨が放った『提案』がどういうものなのかをよく知っていたからだ。

よりにもよって……よりにもよってそれかよ!?

——『^{バスター}撃ち上げ』

それは、毎年の文化祭終了後に行われる、恐るべき慣習の名前だ。文化祭が終わりを告げた後の、大騒ぎ。つまりは言ってしまう一般的な学校における『^{バスター}打ち上げ』ということなんだが、この学校にはそれが二種類ある。

1つは、『^{バスター}打ち上げ』。こっちはその名の通り普通にみんなでわいわ

い騒ぐだけだ。お菓子を持ち寄り、ジュースを用意し、みんなで飲めや騒げやお疲れ会。祭の後特有の寂寥感なんてなんのそので、大盛り上がりするわけだ。別にこの学校じゃなくても見ることの出来る、極めて普遍的な催しだろう。

だが、問題はもう1つの方で、それこそが『撃ち上げ』^{カーニバル}である。これこそ、まさにこの学校のぶっ飛び具合を象徴するようなイベントだ。

なぜなら……『撃ち上げ』において、俺たちは食ったり飲んだりしない。撃つたり斬つたりするんだ。

お菓子を食わずに、鉛弾を食らう。

ジュースを飲まずに、血を飲みこむ。

当然全員参加じゃない。ないが、頭のおかしいことにかんりの人数が参加する。参加理由はさまざままで、日ごろのうっぶんを晴らしたいとか、尊敬する先輩に上勝ち（下級生が上級生に勝つこと）したいとか。

俺もいろいろあつて今年の『撃ち上げ』に参加してしまつたんだが、あれはまさに地獄だつた……。さながら、古代ローマの闘技場の^{コロッセウム}ような、そんな阿鼻叫喚の騒乱だつたな。

だつていうのに、だ。あの女はまたそれを行おうとしているらしい。

俺が過去を追想する間にも、時雨の説明は続く。

『参加者は3年限定。通常「撃ち上げ」は1対1が原則だが、今回は^{バトルロイヤル}乱戦でいこう。戦いたい者と、好きに戦うといい。その方が盛り上がるだろうしね』

その言葉を合図に、クラスのほぼ全員が自分の武装を取り出し始めた。おい反応はえーよ。

ダメだこいつら。完全にやる気じゃねえか。つか、高藤先生も止めてくださいよ。なんで「やれやれ困つた子達ね」みたいな感じで苦笑してるんですか。

まあ、いい。こうなつてしまつた以上はもう俺がどうこう言つてもどうしようもない。ま、幸い今回は乱戦ということだ。つまり、戦わ

なくてもいい。みんなにや悪いが、俺はどっか適当なところで時間を『なお、A組の有明鍊に勝った者には、私が個人的に賞品を贈呈しよう』潰すとするか……ん？　今なんか、すごく不吉な言葉を聞かなかったか？

しまった、聞き逃したか。

俺は、さっきの台詞を聞くために隣の席の女子に顔を向ける。

「なあ、悪いんだけど今なんて——」

——言っただ、と聞こうとした俺に、

なぜか銃口が向けられていた。

……えーつと、これは確かH&K・USPコンパクトだったか？

USPの短銃身化したやつで、携帯性を向上させた銃だ。撃ち易さもさることながら、耐久性にも優れている。外国ではこいつを採用している警察もあるそうだ。

で、なんでこの女子は俺にそんなものを向けてるんだろうな？

まったくもって意味がわからない俺に、彼女が言った。

「じゃ、そういうことで」

いや、どういうことで?!

まさか、隣の席ってだけで『撃ち上げ』の標的にされたのか?!

ということはさつき聞き逃したのは開始の合図だったのかと思ひ、まわりを見回すと、

1人残らず俺に銃口やら剣先を向けてくれやがっていた。

「……………」

俺、絶句。

みんな、笑顔。

『『じゃ、そういうことで』』

だから、どういうことだあああああああああああああ！

心の中で絶叫しつつ、俺はすばやく立ち上がり、椅子を足場にして飛ぶ。

直後、室内を多種多様の銃声が満ちた。どうやら、ほぼ一斉に撃つたらしく、さつきまで俺が座っていた椅子はいつそ可哀想なほど撃ちまくられていた。

あ、危なかった。単純に急いで逃げ出そうとしたただけだったんだが、結果的に避ける事ができた。

つーか……お前らいくら非殺傷弾ゴムスタンつっても、その数当たったら死ぬぞ?! 絶対頭とか当たるやつもあつたらる?!

「覚悟しろよ、錬!」

「ッ!」

急いで教室から脱出しようとした俺に、今度はサーベル装備の男子が襲い掛かってくる。

刃無しノーエッジだろうし防刃制服着てるから大事にはなんねえだろうけど、それ骨ぐらいはいくこともあるんだぞ!?

という俺の懸念も知らず、彼はサーベルを上段に構える。

や、やばい、このままじゃやられる!?

どうすれば——そうだ! 命乞いだ!

『撃ち上げ』最中とはいえ、1年間同じ教室で学んだ仲間だ。きっと精神誠意頼めば見逃してくれるはずだ。

だから俺はまず、誠意を見せるために、パンツ! と顔の前で両手を合わせ、「頼むから勘弁してくれ!」と言——おうとしたところで、

「え、真剣エッジ・キャッチング白刃取り……! お前、こんなことまで出来たのか!」

「へ?」

先にそんなことを言われてしまった。

ので、思わずつぶっていた両目をそろそろと開いてみると——
いつの間にか、俺の両手の間に刀身が挟まっていた。

……………?

あ、あれ? なんすか、これ?

「さ、さすがは校内最強。やつぱり錬のやつはレベルが違うな……」

「ああ。さすがに鈴木会長に勝つただけはある」「私たちがじゃ、束になつても勝てないってこと……?」

クラスメートたちがなんか言ってるが、どうでもいい。

なんにしても、とにかくこれはチャンスだ。

俺はみんなが呆然としている隙に身を翻し、そのまま教室から脱出した。ついでに、そのさい発煙弾スモークも投げておく。なんともな話だが、

この1年ですっかりこういう対応が出来るようになってしまった。

空気の抜けるような音と共に、瞬間的に教室内が白煙に見舞われた……はずだ。見えないから確認はできないが。

背後で起こった混乱を背に、俺は廊下を走る。

全く、なんだってんだあいつらは。ふざけた真似をしやがって。1人狙いとはな、武偵の名が泣くぞ。

と、その時。

ヒュン——ツ！ と、俺の右耳が風切り音を捉えた。

「うおっ!？」

口をつけて、驚愕の声が出る。

これも、経験則でわかる。

か、顔の横を弾丸が通り過ぎていきやがった……！

なんだ、一体誰が撃った？

それを確認するため背後を振り向けば、そこには数人の生徒がいた。あいつら、全員他クラスのはずだぞ。

「クソッ！」

それだけ確認した俺は、すぐさま階段まで走りぬけ、階下に下りる。

その途中、

『あーあー。聞こえるか、錬?』

この放送……時雨か！

『私の用意した趣向はどうかかな？ おそらく、3年全員が君の敵に回ったと思うが』

やっぱりそうか。俺が聞き逃したあの部分で、何かやりやがったな。

下の階に下りたところで、また3年に遭遇した。そいつが拳銃を構えたのを見て、俺は走る最中に抜いた俺の銃——グロック18C——で威嚇射撃して黙らせる。

そのまま進路を変えて、さらに下の階へと降りていく。

『まあ、乱戦にした以上、どのみち君を狙うものは多かったと思うがね。万に一つでも勝利できれば、箔がつく』

「何が箔だ！ んなもんつくか!」

聞こえてないと知りつつも、とりあえず反論だけはしておいた。
「つかそもそも、なんでこいつはこんなことしやがった？」

という俺の疑問には、即座に答えが返ってきた。

『なあに、大丈夫さ。私に勝った君なら、どうとでもできるだろう。私に撃ち上げて勝った君なら』

——ッ！

瞬間、全てを理解した。

この『撃ち上げ』は……俺に対する嫌がらせだ。

あいつ、自分が負けた（ちなみに俺は勝ったとはまったく思っていない）のをまだ気にしてんのか。

『というわけで、まあ精々がんばりたまえ』

ブツツ、というマイクの切れる音とともに時雨の音が聞こえなくなった。

「がんばれ、だと……？ クラスどころか学年全員が相手なのに……？」

そんなの——

「——上等じゃねえか」

いいさ。やってやる。

もうキレた。嫌がらせとか、知ったことか。

俺だってたまには我慢の限界を超えることだってあるんだぞ。

こうなったらなにがなんでも逃げ切って——平和な春休みを手に入れてやる！

絶対に！

* * *

こうして。

俺の、いや俺たちの、最高に荒っぽい卒業式は終わりを迎えた。

これが後々の人生でいい思い出になるかはわからないが、とりあえずこれで俺の東京武偵高校中等部での生活は幕を閉じたということだ。

それは、1つの終わり。

そして、次の幕が開く。

俺の舞台は新たなステージへと移る。
そう——東京武偵高校へと。

2. Examination ①

ジリリリリ——チンツ。

「……朝か」

早朝からやかましく枕元で鳴り響く目覚まし時計を止め、俺は起床した。

窓から差し込んでくる朝日に刺激され、思わず腕で両目を覆う。近くの樹にでもとまっているのか、鳥の鳴き声が聞こえた。

俺は寝起き特有の気だるさを感じながらも、寝ていたベッドから上半身を起こす。

いい目覚め——とは生憎言えないが、まあそれでも今日はマシンな方だろう。これだけすぐ起きれたんだからな。いつもは大概二度寝コース直行なのに。

その原因はなんだろうかと考えてみて、思い当たる。人間ってのは、どうやらそれなりに融通が利くらしいな。なんたって、今日が大事な日だとわかってるんだから。

俺は、壁にひっかけてあるカレンダーに視線を向ける。

視線の先には、赤マルで囲まれた日付が存在していた。

——3月17日。

今日の、日付だ。

「……ついに、この日が来たか」

小さく呟き、俺はベッドから降りる。

そこからはいつもどおり。1階に降りて（俺の部屋は2階にある）顔を洗い、朝食を食べ、少し休憩。後に再び2階に上がってきて、服を着替える。

袖を通すのは、『防弾制服』。そう……東京武偵高中等部の制服だ。

こいつを着るのは、あの大騒ぎの卒業式以来、実に3日ぶりのことだ。

この制服も、もうおさらばかと思ってたんだけどな。もう一度着る機会があることをすっかり忘れてた。

着替え終わった俺は、中等部に転校する時に購入した防弾性のカバ

ンをひつつかむと、そのまま玄関まで向かった。靴を履き、横開きの扉を開いて外に出る。送り出す声はない。両親はすでにどちらも仕事場にいたはずだ。

燦々と降り注ぐ朝日を浴びながら、俺は一つ息を吐いた。

「——うっし。そんじゃあ、行こうか」

目指すは、東京武偵高校。

* * *

3月17日。

レインボーブリッジ南方に存在する人口浮島——通称『学園島』。その上に存在する東京武偵高校では、この日一般入試が行われる。

受験人数はかなりの数にのぼり、中には東北や九州から来るやつらも少なくないのだとか。さすがに首都に造られただけはあるって、どうも日本の武偵高のなかでも最高ランクの学校——第Ⅰ級武偵高——らしいからな。だからこそ、こぞって受験する者が多いんだが。

が、まあ、俺たち東京武偵高校中等部の卒業生は、本来そんなものは関係ないはずなんだ。

なぜなら、俺たちはエスカレーター式により、入試無しで進学することになっているからだ。何もしなくても入れるのに、わざわざ受験するやつはいないだろ。

では、なぜ俺たちまで入試に参加することになるのか？

この答えは実に簡単で、俺たちにとっての入試とは、ランク分けの試験になるからだ。

武偵高では、それぞれの武偵にランクが付いている。E、D、C、B、A——そして、S。武偵高に通う生徒は、この6つのいずれかのランクに属することになる。

無論、1回いいランクになったからといってずっとそのままってわけじゃない。胡座あぐらをかいて怠けてたら、『格落ち』（下位のランクに落ちること）になることもある。武偵ランクは実績や試験なんかで決まるからな。

そしてその第Ⅰ回目のランク決定が入学試験——つまり、今日になるわけだ。

「D……いや、できたらCくらいまではいきとてえなあ。さすがに、Eってことはねえだろうけど。……ない、よな？」

学園島行きのモノレールの中、俺は窓の外に広がる海を眺めながら呟いた。

いや実際どうだろうか？ 下手したら、Eランクも十分にあり得る気がする。

まあ、そうはいつてもとりあえず試験を受けないことには始まらない。せいぜい、こいつを頼りにするしかねえ……か。

防弾制服の上から、左脇に手を当てる。そこから返ってくるのは硬質な感触。ホルスターで吊つてある俺の愛銃、グロック18Cの感触だ。

オーストリアのグロック社が生み出したグロックシリーズの始まり、グロック17にフルオート機能が搭載された機関拳銃・グロック18……の改良版が、このグロック18Cだ。装弾数は17。口径は9mm。武偵の銃としてはそれなりにポピュラーな物だな。

なんだかんだで、この1年こいつには助けられたなあ。元々は俺の銃じゃねえんだけど、今じゃすっぴかり相棒だ。

最終的に、俺がどのランクになるのかはわかんねえけど。

せめて、この銃と、この銃を俺に与えてくれた人に恥じないくらいには頑張ろうと、俺は思った。

* * *

「おー、広えなあ。さすがに島1つってだけはある」

モノレールに揺られてたどり着いた学園島をぶらぶらと歩いていたら俺が抱いた感想は、そんな実に単純なものだった。

いやまあ、当たり前すぎてつまんねえ感想だけだな。

この学園島の敷地面積は、確か南北に2キロ、東西に500メートルだったか。高校にしちや、バカでかすぎる敷地だ。もつともその分施設やら学生向けの商店やらがあるんだが。現に、こうして歩いているだけでもコンビニやらなんやらがちらほら見受けられるしな。

そんな中を俺は歩を進めながら、これからの行動を考えてみる。

「どうすっぴかな……。もうちつとブラブラするか、それとももう試験

会場に行くか」

腕時計で確認したところ、現在時刻は8時ジャスト。

俺たち受験生は、9時30分までにそれぞれの志望学科の試験会場に集まらなければならない。が、逆に言えばそれまではどこをうろつこうと勝手というわけだ。

ちなみに、迷って試験会場にたどり着けないなんてことは多分無い。受験生には受験票と一緒に島内地図が配布されてるしな。それを無くしたりしない限りは、まあ大丈夫だろう。

「んー……決めた。もうちよいブラつこう。どうせ試験会場に行っても、あつて顔見知りには会う程度だからな」

それに……、と地図を見る。

俺が受ける予定の『探偵科』の専門棟はここからだと、それなりに近い。なにかあつても時間までには行けるだろ。

——おっと、言い忘れてた。

これはどこの武偵高でもそうなんだが、高等部には中等部との差異がいくつかある。例えばそれはランク分けの制度であつたり、民間からの依頼——『依頼』^{クエスト}——を受けられることであつたりするんだが、その一つに『専門科目』というのがある。

中等部では、言わば武偵としての基礎を学ぶことに主眼を置いていて、いわゆる広く浅く鍛えていく。

が、これが高等部になるとその反対、狭く深くを重視するようになる。自分が得意な分野に突出した訓練を受けるようになり、またそうすることで将来の武偵像を形作っていくのだ。

そのための『専門科目』。武偵としての分野分けが行われるというわけだ。

科目は全部で14。

アサルト、スナイプ、レザード、ダギキュラ、インケスタ、レピア、アムド、ロジ、強襲科、狙撃科、諜報科、尋問科、探偵科、鑑識科、装備科、車輛科、コネクト、インフォルマ、メデイカ、アンビュラス、通信科、情報科、衛生科、救護科、超能力捜査研究科、特殊捜査研究科。

ほとんどは読んで字のごとくの内容なんだが、おいおい説明しようかと思う。中には意味不明の学科もあることだしな。

で、ここに教師たちが所属する教務科^{マスターズ}、生徒全員が所属する

一般教科ノルマールが加わって、この東京武偵高は構成されているというわけだ。

ちなみに、外国の武偵高にやうちにはない学科とかもあるらしい。俺が知ってるのは、ローマ武偵高の殲魔科カノッサとかかな。

閑話休題。

それで、結局何が言いたいのかと言えば、俺が受験するのは探偵科だという話だ。探偵科ってのは、その名のとおり「探偵学と推理術による調査・分析」を学ぶ学科だな。

もつとも中等部の連中からは強襲科を勧められたんだけどな。けど、あそこはマジで危険だらけの学科らしいからなあ。なんたって、学科内容が「拳銃・刀剣その他の武器を用いた近接戦による強襲逮捕」だからな。さすがに気後れする。

ま、なんだかんだあつて最終的には探偵科にしたんだけどな。一番まともな学科って話だし、俺が尊敬している武偵関連の史実の人物が探偵だったから。

——つと、いつまでもだらだらと自分語りしててもしょうがねえな。

というわけで、地図を小さく畳んで尻のポケットにしまい、俺はしばらくのんびり学園島を回ってみることにした。ま、あんまり遠くまではいけねえけどな。

「ふーん、噂通り随分遠くから来てるやつがいるな。ありや、札幌武偵高サッポロ付属の制服か。おつ、福岡武偵高フクオカ付属のやつもいる」

どうも俺と同じ考えのやつが多かったのか、散策している途中、結構な数の中学生を見かけた。当然受験生だろうが。

つっても、その中でも一番多いのはやつぱりウチの学校の連中だったけどな。附属校だし。何人か知り合いにも会った。

しかし、なんだ。これだけ集まると、やけに個性的な奴もいるもんだな。さっきなんて、ツーサイドアップの金髪でやたらフリフリの制服着た女の子見たぞ。実に派手だ。あ、あとどうみても小学生にしか見えない女の子も見た。インターンかな？

そんなことを考えながら歩いていると、ふいにこんな会話が耳に届

いた。

「キキ！ お前、もう十分見学しただろっ！ そろそろ帰れよ！」

「えー？ いーじゃんもうちよつとくらい。私も来年受験するんだし。お兄ちゃん冷たいなあ、轢いちやうぞ？」

「妹つれて受験に来る野郎がどんな目で見られるかちつたあ考えてくれよおおおお！」

ん？ 兄妹ゲンカか？ こんなところで。

気になってちらりと視線を向けると……うおっ、たっけえ。

すげえ身長タツバの高い兄妹を見つけた。兄貴のほうは180、妹のほうは160は多分越えてるだろうな。

やっぱ身長つてのは遺伝なのかなとか考えていると、突如体を軽い衝撃が襲った。どうやら、誰かにぶつかっただけらしい。

「——つと、悪い」

俺は、すぐさま謝る。『過失には迅速な謝罪を』。俺の元相棒の言葉だ。

相手が転んだりしてないか確認するために顔を上げると、そこにはやたらと爽やかな顔したやつ（ぶっちゃけイケメン）がいた。

イケメン君（仮）は柔らかく微笑むと、謙遜するように左手を軽く突き出した。

「いや、こつちこそゴメン。僕も地図見ながら歩いてたから、お互い様だよ」

おっと、性格まで爽やかだな。うん、すごくモテそうだな。

イケメン君（仮）は「それじゃあ」と軽く手を振って去っていった。めずらしいなー、武偵でああいうタイプ。武偵を志す奴って、大抵どこかしらトチ狂ってるからなあ。俺は違うと思いたいが。

めつたにいない普通人タイプの武偵に出会うという出来事を経て、俺はさらに散策を続けた。

それから5分ばかり歩いたところで斜め前に見えた建物は……地図によると狙撃科の専門棟か。ここは確か、「主に狙撃銃を使用した遠隔からの戦闘支援」を学ぶ学科だっけ。

狙撃か……あいつらの中じゃ、くるるの得意分野だったな。

「ん……う？」

ぼんやりと中学時代のことを思い出していた俺の視界に、何か違和感が映った。

何だ？　と思つてよく目をこらして見ると……、

「屋上に……人？」

そう。

どういふわけか狙撃科の屋上に、人……それも女の子が立っていた。

身に纏っているのは武偵高の制服じゃない。てことは、彼女も受験者なんだろうが……なんか風格あるな。なぜか、孤高の狼を幻視した。

風に流れる髪は、ライトブルーのショートカットヘア。距離が離れているから大分曖昧な目算になるが、身長はかなり小柄だろう。

ここまでなら普通の女の子なんだが、そこはさすがに武偵高。全然普通じゃない箇所がある。

女の子が背中に背負った狙撃銃（遠目なので詳しくは分からん）が彼女は武偵なのだど如実に語っていた。それが凜々しい立ち姿と相まって、一線を画す雰囲気を出している。

そんな彼女の立ち姿をぼんやり眺めていると——ふいに、高所ゆえの強い横風を受けたのか、彼女のスカートがかなり危ない位置まではためいた。

「やべっ。ジロジロ見てたら覗きみてえじゃねえか」

さすがに入学さえしてないのに覗き魔なんて噂が流れたら困る。

というわけで、不名誉な謗りを免れるべく、俺はすばやくその場を離脱した。

その最中にも、俺の頭の片隅には、あの不思議な少女の姿がちらついていた。

* * *

——非常に、まずいことになった。

学園島の片隅で、俺はダラダラと冷や汗を流していた。

現在時刻は、9時。別にこれは問題じゃない。これだけあればまだ

集合時間には間に合うだろう。

そう。だから問題はたった1つ――

――地図が無いってことだけだ。

「……………」

つて、やべえよやべえよ！ 完全に道わかんなくなっちゃったよこれ！

はたから見たら完全に変人だろうが、俺は頭を抱えて慌てまくる。適当にポケットに入れたただだからなあ。いろいろ回って出し入れしてるうちに落つことしちまったか？

「どうする？ 教務科――武偵高の教職員が在籍する学科――に行つて予備をもらうか？ ……つて、そもそも教務科の場所もわかんねえじゃねーか！」

ダメだ。焦つて1人つつこみを入れてしまった。

どうする、どうする――いや、待てよ？ 教務科？

頭の中で、カチリと閃きが起こる。

そうだ、教師だ。教師に会つて場所を聞けばいいんだ。それだけなら教務科に行く必要もない、どこかの棟に入れば、1人ぐらいいはいるだろ。

おあつらえ向きに、すぐ近くにはどこの学科かは知らんが、おそらくは専門棟がある。これはもう、天の采配としか思えねえ。

俺は現状を打開すべく、一も二もなくそこへ飛び込んでいった。

――今だから言えることだが。

ある意味で、これは本当に天の采配だったのかもしれない。

* * *

ガラス戸を開き、俺は建物の内側へと体を滑り込ませた。

見渡してみると、棟内にはまばらに受験生がいた。ということは、ここは多分受験会場の1つで合ってるんだらう。

よしよし、いいぞ。これなら教師もいるはずだ。

「さて……………どこから探すかね？」

一瞬悩み、それからとりあえず歩いて窓から中を確認していくことにした。

廊下を進みつつ、教師の搜索を始めた……のだが。

「んー、なかなかいねえなあ……」

窓の外から覗きこんでみるも、教師がいない。まあ、確かにまだ試験開始までには結構時間があるから別段おかしなことじゃねえけど。それとも、この棟の試験会場は1階じゃないんだろうか？

まあ、それならそれでそのうち見つかるだろうと思ってる廊下を早足で進み……前方を歩く黒髪の男子生徒を抜かそうとしたところで――

「だつ、誰か！ 助けてください、変な人達が……きやつ!?!」
「うおっ!?!」

悲鳴が一つと、驚きの声の一つ。

次の瞬間、俺の目の前で、その男子生徒が前に倒れこんだ……女子を押し倒しながら。

「ありゃ」

ま、曲がり角だったからな。お互いに死角になって見えなくてぶつかっても仕方なかっただろうさ。

そんな探偵科でなくとも出来る当たり前の推理をしてから、俺は押し倒された女子になんとなく目をやって……驚きに目を見張った。

なぜなら、男子生徒とぶつかった女子は……『巫女服』を着ていたからだ。しかも、黒のロングストレートヘアという、まさに大和撫子を絵に書いたような娘だった。あと、かなりスタイルよさそう。

この女の子、多分『女巫校』(神学校の一種で、裕福な神社の娘が通う学校)の生徒だ。たしかそういう学校があると、後輩の朱鷺に聞いた覚えがある。あいつ、女とコスプレが好きだからなあ……。

しかし、巫女か。神社じゃなく武偵高こんなところにいるってことは……十中八九志望学科はあの『オカルト学科』だろうな。

そうやって頭の中で、俺が一番ぶつ飛んでると思ってる学科を思い浮かべていると、

「――おいおい、逃げなくてもいいだろうがよ？ こっちは親切で言ってるんだぜ？」

女の子曰くの『変な人達』(指輪やらネックレスやらをつけているな

んともいかにもな連中だ)である3人組が現れた。
「……。つーか、お前ら……仮にも武偵志望が人の嫌がることすんなよ」

「てか、巫女さんにぶつかつた男の方は大丈夫だろうか？　なんか、巫女さんに覆いかぶさつたまま、微動だにしてないんだが。まさか、気絶したとか？」

「思っていたら、リーダー格の男が黒髪の男に気づいたらしい。」

「おー？　なんか先客が来てるみたいじゃねえか？」

「ち、違います、この人は……たまたまぶつただけで……！」

黒髪の男は関係ないと巫女さんがフォローするも、リーダー(ぼい奴)は黒髪の男に近づき、

「悪いなア、その姉ちゃん俺らと遊ぶ予定なんだよ。なんだったら後でお前にも分けてやるから、ひとまず退いてろよ」

言いながら、男の肩にポンと手を置いた。

次の瞬間――

――ゴッ！　という鈍い音を響かせてリーダー格の男は吹きとんだ。

冗談のように、地面と水平に数メートル空を舞った男は、すぐに床に打ち付けられることになった。

「が、あ……ッ」

そして、一つ呻いたかと思うと、意識を失ったのか立ち上がることもなく伸びた。

……何が起きたかと訊かれれば、それを説明するのは簡単だ。実に単純明快、肩に手を置かれた男が、置いた男を殴って気絶させたのだ。それも、つい先日まで中学生だったとはいえ、町の不良数人が相手でも勝利を収める武偵という存在を。

「おい見ろよ、一発だぜ」「武偵は打たれ強いってのに」「それだけ重い一撃だったってこと？」

騒ぎを聞きつけて遠巻きに眺めていた(武偵にとってはこんな騒ぎは日常茶飯事だ。自己責任ということで、誰も止めに入らなかつた)ギヤラリーに、ざわめきが広がっていく。

一方仲間をのされた残りの2人は、驚きながらもバックステップで後ろに下がった。ここで逆上して一気にかかかっていかず一度距離を取るの、なんとも武偵らしい。こいつは本格的に武偵同士のケンカになってきたな。そのうちアルIIカタ戦とかに発展しねえだろーな。

「……………」

……って、何のん気に見物してんだ俺は！ そんな暇ねえじゃん！
危ない危ない。あやうくここで時間が潰れちまうところだった。
本来の目的を思い出せ、有明鍊。

うーん、しかしどうするか。廊下の奥に行つて階段を上りたいんだが、そのためにはあの2人組が邪魔だしなあ…………。

「——ん？　ありゃあ…………」

その時、俺は2人組の片方、俺から見て左側に立っているアフロヘアーの男のポケットから何か筒状の物が飛び出しているのに気づいた。

あれは…………地図じゃねえか！

そうだ、なんで思いつかなかつたんだ。よくよく考えれば、俺と同じように受験生なら地図は所持しているはずだ。だったら誰かに見せてもらえばいいだけの話だったんじゃないか。焦りすぎだろ、俺。

まあいいや、そうとわかつたら…………そうだな、あのアフロに見せてもらおう。他の人にわざわざカバンから出したりしてもらうのも迷惑だろうし。ついでに、ケンカの仲裁にもなるかもしれないな。

つーことで、俺はアフロの下へ向かうべく歩き始めた——のだが、少し進んだところで誰かに腕を掴まれた。

「…………なんだ？」

まさか止められるなんて予想してなかったので、振り返りつつ尋ねると、俺を引き止めていたのはさつきリーダー格をぶつ飛ばした黒髪の男だった。

そいつが、俺の質問に対する答えか、こんなことを言ってきた。

「必要ないさ」

…………いや、え？　何言つてんだこいつ？

必要ないって、

「そんなわけにもいかねえだろ」

そう。そんなわけにはいかない。

だって俺は地図を持っていないんだから……って、あれ？　ちよつと待てよ、こいつがそんな事情知ってるはずがねえんだが。

——ああ、そうか。わかつたぞ。今のはケンカの仲裁は必要ないって意味だったのか。

自分の勘違いに気づいた俺はすぐさま彼に、

「心配すんな。大丈夫だ、すぐ終わる」

君たちのケンカの邪魔をする気はありませんよ、ちよつと話すだけですよ、という意思を言外に込めて言ってやった。

仲裁する必要がないと本人が言ってるんだから、勝手にやればいい。別に俺はそこまでお人よしじゃない。ただ、俺もそれじゃあ困るんだよ。

俺の言葉に納得したのか、黒髪の男は俺の腕を掴む力を緩め、

「……ふう。分かった、お言葉に甘えさせてもらうぜ。……で、アンタはどつちとやるんだ？」

……んん？

なんかいまいち言葉に違和感を感じるんだが……ま、いつか。とりあえず、どつちに用があるのか、という質問だろう。なら答えは一つだ。

俺は地図を持ってしているアフロ君を指差し、

「俺は左のアフロに用がある」

「オーケー。じゃあ、俺は右だな」

ん？　「俺は右」？　どういう意味だ？

なんかおかしい。会話が噛み合っていない気がする。

不思議に思った俺は、「お前、なんか勘違いしてねえか？」と聞こうとして——

「ああ!?　2対2だア?!　上等だガキ!」

「ユータをやってくれた礼は返させてもらうぜ!」

次の瞬間、距離を取っていた2人組が突如こちらに駆け出してきた。おまけに動きを見る限り、どうやら銃を取り出そうとしているっ

ぽい。

——つて、ええ!? なんで!? なんであいつらいきなり襲い掛かってきてんの?!

まったく意味がわかんねえんだが! しかもなんか俺も標的に入ってるっぽいし!

「チツ!」

あまりの理不尽さにムカついたので舌打ちしつつ、俺はグロック18Cを吊つてある制服の中に右手を入れる。

なにが原因かはよくわからんが、襲い掛かってくる以上は迎撃するしかない。よくよく思い出してみれば中学時代にも似たようなことはよくあったしな。

というわけで、恨むなよアフロ。恨むならいきなり突撃してきた自分を恨め。あと、できたら後で理由を聞かせてくれ。

俺はグロックのグリップを握り、すばやくホルスターから抜き出し、相手よりも早く発砲するために、制服から出すと同時にアフロの防弾制服目掛けて引き金を引いた。

パンツ! というこの1年ですっかり耳慣れた音とともにグロックの銃口から9mmパラベラム弾が飛び出す。

その弾丸は、350m/秒の速度で飛翔し空気を引き裂きながら、アフロの防弾制服にぶち当たつてやつを悶絶させ……てない。

あの、なんかアフロさん普通に向かってきてるんですけど。

——あ、外したわこれ。

俺のバカ! かつこつけて早撃ちファストとかするからこうなるんだろうが!

いや、それとも銃が悪いのか? と最低な責任転嫁をして、一瞬頭を下げて銃に目を向けるも、もちろんいつもと何も変わってない。

——つて、何してんだ俺は。相手も銃を出しかけてたんだから、目を逸らしてる暇なんかねえだろ!

「ツ!」

一発くらいもらうのを覚悟して顔を上げると……どういうわけか、アフロはその場に立ち止まって片手で頭を抑えていた。何やってん

だ、あいつ？

ついでに言えば、その足元にはなんか長方形の板みたいなのが倒れている。さつきあんなのなかったよな？ どこから出てきたんだ、あれは。

なにはともあれ、これはチャンスだ。距離はつまつていて彼我の距離は3、4メートルほど。おまけに相手は立ち止まってる。ターゲット

若干なんか卑怯な気もしたが、俺は改めてグロックを構え――

「がッ!？」

今度こそ確実に防弾制服に撃ちこみ、アフロを昏倒させることに成功した。

撃たれ弱かったのか、あるいは当たり所が悪かったのか。アフロは一発で倒れ、そのまま廊下に倒れ伏した。

やれやれ……後で教師か救護科――武偵病院に勤務する医師の育成・医療活動の実践を学ぶ学科――に連絡しとかなきゃな。試験もまだなのに、面倒なことになっちまったぜ……。

はあ、とため息を1つ吐き、せめて試験ではこんな荒っぽいことにならなきゃいいんだけどなと思いつながら、俺はグロックをホルスターにしまった。

――まあ、結論から言えば。

こんなのは今日これから起こることに比べたら、序の口でしかなかったんだけどな。

3. Examination ②

——3月17日。

とおやま
遠山キンジは大いに焦っていた。

(やばい……わざわざ地元の女子を避けてここを受験したつてのに、遅刻で落ちてちゃシャレになんねー……!)

東京武偵高校。その専門棟の1つ『探偵科』インケスタ棟に向かいながら、キンジは走っているために噴き出した汗を腕でぬぐった。

中肉中背で、黒髪の少年である。とりたてて特記するようなところはない普通の外見なのだが、その実その身にとんでもない秘密を抱えていたりもする。

彼は神奈川武偵高校付属中学の卒業を経て、今日この東京武偵高に入学試験を受けに来た、武偵志望の少年だ。ちなみに、なぜ中学からそのまま神奈川武偵高校に進まなかったのかは、ここでは述べないでおく。

それはともかく、キンジはその武偵への新たな第1歩目からつまづきかけていた。それも寝坊という実に情けない理由で。

さすがにキンジもそんな理由で不合格になどなりたくはない。なにより、そんなことになったら兄になんと言えればいいのか。

(えつと、今がここだから……ッ！ 探偵科棟はあそこか!)

故にこそキンジはここ最近で一番の走りを見せ、ようやく試験会場の前までたどり着いた。

「はっ、はっ、はあ……なん、とか。遅刻せずですんだか……」

息を整えながら、キンジは自動ドアをくぐり、探偵科棟内へと身をすべらせた。

……が、そうしたところでキンジは違和感にぶつかった。

(なんだ……? なんでもまだこんな人にいるんだ?)

そう。

なぜか、入ってすぐの廊下には、まだ大勢の人がいたのだ。それも、わりと誰も彼もが余裕の表情をしている。キンジがギリギリだと感じるぐらい試験開始直前のはずなのに。

キンジは内心で困惑し、次いで、そういえばと思い返した。

(いや、待て。そもそも、俺がここに来るまでにもまだ学園島を歩いているやつらがいたぞ……?)

どういうことだ? とばかりにキンジは左腕に巻いた腕時計を確認する。

時計の針は、今が9時28分であると確かに示していた。

やっぱりおかしい。集合時間は9時30分のはずだから、この時間ならみんな教室に入っている方が自然のはずだ。いくら棟内にいるとはいえ、ここまでのんびりしていいとは思えない――

「……………まさか」

ふいに、眩きが零れた。

キンジは思考を進める途中で、とある可能性を思いついた。思いついて、しまった。

その『とある可能性』が現実の物となっているかを確かめるために、キンジはポケットから携帯電話を取り出した。彼の性格を表す様にストラップ一つ付いていない(そもそも今まで付けた事も無い)、簡素な折りたたみ式のそれを開き、注視する。

液晶画面には、はつきりと表示されていた。

――9:00、と。

「故障かよー」

『(ビクッ)!?』

思わず大声でつつこんでしまい、周りの注目を集めてしまった。

恥ずかしさを誤魔化すようにキンジはすぐに携帯電話を仕舞いなおし、入り口にあつた張り紙の指示にしたがい2階に上がるべく、廊下を歩き始めた。

(クソッ! とんだ恥かっちゃった!)

試験もまだなのに何をやってるんだ自分は、と懨然とした表情を作りながら、キンジはさらに進んでいく。

そして、その歩みが曲がり角にさしかかったあたりで――

「だっ、誰か! 助けてください、変な人達が――」

「え?」

死角になっていた廊下の曲がり角から、巫女服姿の女の子が飛び出してきた。

それだけでもう自称普通人のキンジとしてはつつこみどころ満載なのだが、今はそれどころではない。間近に、女の子が迫っているのである。男ではなく、女が。

(なん……ッ!?)

車が急に止まれないのと同じく、人だつて急には止まれない。

だから、当然の結果として、

「きやつ!？」

「うおつ!？」

2人はぶつかりあつてしまい、男女の違いからか、少女が後ろ向きに倒れ始めた。

ふらりと重力にしたがつて少女の体が落下を始める。このまま行けば、彼女は背中を強打することになるだろう。

(危ない!)

キンジはそれを防ぐため、とつさに少女の手首をつかむ。白魚のようにシミ一つ無い真っ白な腕の、男にはない柔らかさを感じたのも束の間、ふんばりきれずキンジは少女諸共もろともに倒れこんでしまった。

——前方へ。

「痛、つ……ッ」

思い切りついでしまった手の痛みに呻き、思わずつぶつてしまつていた目をうつすらと開ける。

そして、すぐにその行動を後悔した。

(——ッ!?)

キンジの両目に飛び込んできたのは、床に伏した美人と評すべき黒髪の少女の姿だった。

目の覚めるような、整つた容貌だった。髪と同じく綺麗な黒の双眸を縁取る、冗談みたいに長くぱっちりとした睫毛まつげ。ラインの整つた鼻筋。艶やかに輝く唇。それらを雪のように白い素肌が、映えさせている。

流麗かつ艶美に流れる黒髪が、今は大きく広がつて、ただの廊下を

妖しく演出していた。

これだけでも、キンジにとっては十分にまずかった。だというのに、おまけに床に倒れた拍子に緋袴や白衣が若干着崩れている。

さらに言えば、この倒れた少女に覆いかぶさる自分というシチュエーションだ。これではまるで、そう……自分が少女に襲い掛かっているみたいではないか。

と、そこまで思考を巡らせたところで——
ドクンツ！ と。

キンジの……否、遠山の血が騒いだ。

(マズイ、これは……なるッ！)

体の芯へと、血が集まっていく。段々と強くなる血流を自覚しながら、しかしキンジはそれに抗えない。

少女を押し倒しているという状況が。少女の着衣の乱れが。彼を、変えていく。

遠山キンジを、『ヒステリアモード』へと変えていく——！

(……なって、しまった)

誰にも聞こえないほど小さく、キンジはため息をついた。

決してなりたくはなかった、このモードには。これは、自らにトラウマを植え付けた力だから。

だがなってしまった以上、今更その事実は覆らない。このモードが収まるには、少なくとも数十分はかかるのだ。

それに——

「悪いなア、その姉ちゃん俺らと遊ぶ予定なんだよ。なんだったら後でお前にも分けてやるから、ひとまず退いてろよ」

どうやら、なっている間に、状況が変わったらしい。

気づけば、茶髪の不良然とした男——巫女服の少女が『変な人達』と称した内の1人が、キンジの肩をポンと叩いた。

(さあ、キンジ。こいつは、誰だ?)

キンジは、頭の中で自問自答する。そして、その答えはすぐに出た。こいつは、自分の下にいる女の子の——巫女服の少女の——白雪の

……敵だ！

そう認識した瞬間。

——キンジは、茶髪の男を殴り飛ばしていた。

「が、あ……ッ」

吹き飛び、無様に廊下を転がり、そして気絶する茶髪の男。そして、それを見て騒ぐ、いつの間にか集まっていた受験生たち。^{ギャラリー}

——が、それらは今のキンジにとってはどうでもいい。

キンジは『変な人達』の残り2人——アフロの男とサングラスをかけた男を、横目で軽く見た。

その眼光に圧されたか、あるいは仲間が負けたことで警戒したのか。彼らは、バックステップで後退していた。

（距離を空けたか。まともな判断だが……今の俺には無意味なんだよ）

油断とか、自信とか、そういった感情から来た評価ではない。ただ単純に、単なる事実として、現在のキンジ相手にはあの程度の輩が弄す策など、全てが下策に等しかったのだ。

さて、どう料理するかとキンジが思案しかけたところで、彼は巫女服の少女——否、自分の幼馴染である星伽白雪^{ほとぎしらゆき}が驚きに目を見開きこちらを見ていることに気づいた。

ただこれは自分が幼馴染の遠山キンジだと分かったからというよりも、単純にキンジの技量に驚愕している、といったところだろう。

キンジはその様子にクスツと笑い、

「大丈夫だ、お嬢さん。君は見てくれるだけでいい。俺がすぐに終わらせてみせるよ」

「え、え……っ!？」

甘く、労わるような声で、やたらと格好をつけて白雪に告げた。

そんなキンジに、白雪は今度は困惑に顔色を変えた。

キンジは内心で苦笑する。

（まあ、そうだろうな。いきなりこんなキザったらしい台詞言われたら。俺だってできるなら言いたくないんだが……）

ヒステリアモードの今では、それは無理な相談だった。

それよりも、とりあえず早く連中をぶちのめしてしまおう、とキンジは決めて、白雪から目線はずした――

――刹那、すぐ傍らを1人の少年が通り抜けようとした。

(な、に!? 今の俺が、こんな近くに来るまで気づけなかった!?)

声にこそ出さなかったが、キンジは心中で大いに驚嘆した。

……ありえない、話ではない。

だが、ヒステリアモード時の自分なら、たとえ10人バラバラに尾行されても、その位置を捕捉できる自信がある。これは、それほどの能力なのだ。

なのに、これほどの接近に気づけない場合があるとすれば……極端に影の薄い人間か、あるいは常から気配を消している達人級の人間か、そのどちらかぐらいだろう。しかし通常、それほどまで影の薄い人間など存在しない。ということとは、この少年は後者ということになる。すなわち、一流、あるいは超一流と呼ばれるレベルの実力者ということだ。

が、それならそれで一体何をするつもりだ? と疑問を抱いたところで、キンジは少年の視線がまっすぐに2人組に向いていることに気づいた。

そこから導かれる答えは、

(こいつ、もしかして俺に加勢するつもりか……?)

なるほど、それならば確かに合点がいく。いくのだが――

キンジは、奴らに向かっついていこうとする少年の腕を掴んだ。

それに少年は反応し、こちらに顔を向けて言った。

「……なんだ?」

一見、普通の少年だった。無理やり特筆すべきと言え、キラリと光を放つ若干悪い目つきくらいだろう。とてもではないが、自分から気配を誤魔化せるような人間には見えなかったことに、キンジは内心少し驚いた。

が、それでもキンジは少年に告げた。

「必要ないさ」

そう。

助太刀は必要ないのだ。どころか、言い方は多少悪くなるが、足手まといですらある。ヒステリアモードの自分にとっては。

だが、それに対して少年の言葉はこうだった。

「そんなわけにもいかねえだろ」

躊躇うことなく、少年は言つてのけた。まるで、自分の行動に一切迷いを持っていないかのように。

それから一瞬考えるように口をつぐんで、彼は再び開いた。

「心配すんな。大丈夫だ、すぐ終わる」

それを聞いて、なるほどキンジは得心した。

どうやらこの少年はあいつた『悪』(というのは大げさだが)が許せないらしい。少なくとも、思わず自分から出てきてしまうほどには。実に、武偵向きの性格だ。

そして、キンジはそこに、他人であるはずの少年から遠山家の生き方を見た気がした。

古来より遠山家は、なによりも『義』を重んじてきた。誰かを守るために『正義の味方』であり続けた。弱きを助け、強きを挫く。そんな、まさにヒーローとでも呼ぶべき生き方を、職は多岐に渡るが、何百年も続けてきたのだ。

武装検事だった父も。

武偵である兄も。

そしてキンジも、その道を進むために武偵高こに來た。ヒステリアモードという自身のトラウマに苛まれながらも、いつかはこの力を使いこなし、遠山家の人間として『正義の味方』を目指すことを決めていた。

……だから、だろうか。キンジは、自分と同じく『正義』を志している少年に、

「……ふう。分かった、お言葉に甘えさせてもらうぜ。……で、アンタはどっちとやるんだ？」

気づけば、そんなことを言っていた。

足手まといと断じたはずなのに、するりと口をついて言葉が出ていた。だが、不思議と違和感は感じなかった。なぜだろうか。初対面の

人間に対して、気づかぬうちにキンジは信頼を寄せていた。というよりも、同じ道を進む者への共感と言ったところか。

対して少年は、その台詞こそを待っていたように、間髪を入れず答える。

「俺は左のアフロに用がある」

そして、キンジも。

ごく自然に返す。

「オーケー。じゃあ、俺は右だな」

遠山キンジと有明錬。

後に、あたかもそれが運命であるかのように長く関わることになる2人が、初めて共闘に臨んだ瞬間だった。

——と、2人で担当を決めた直後、機会を計っていた2人組にも聞こえたのか、怒声が飛んできた。

「ああ!? 2対2だあ?! 上等だガキ!」

「ユータをやってくれた礼は返させてもらうぜ!」

気合一声、2人組は駆け出し、こちらへと走りこんできた。しかも、あちらも役割分担したようで、アフロが傍らの少年に、サングラスがキンジに進路を向けている。

その途中彼らが拳銃を取り出そうとし始めたのを見て、少年が短く舌打ちした。

キンジはその示すところを正確に読み取った。

(同感だな。今俺たちの後ろには受験生ギャラリーがいるってのに、連中構わず撃つ気でいやがる。外れたら、関係ない奴に当たるかもしれないに)

心中で悪態をつき、また戦闘中でさえ自分ではなく他人を気遣う少年の姿勢に、キンジは感嘆した。

その間に、少年はすばやく懐に手を入れ、そこから拳銃を抜き出す——と同時に、発砲。乾いた音が、棟内に響き渡る。

俗に言う、早撃ちファースト。構える暇さえ取らない速射の行方は……しかし、アフロにはなかった。

キンジは、見たのだ。放たれた一撃が、何を撃ち抜いたのかを。

そして、弾丸が外れたと勘違いし、にやりと笑ったアフロが走りながら拳銃——自動拳銃オートマチック・FNファイブセブンを構えた。

一瞬の後、アフロに向かって廊下に設置されていた立て看板が倒れた。

突然の出来事にアフロは驚きに体を止め、そして止めてしまったがゆえに看板が彼の頭を直撃する。

思わずと言った様子で頭を押さえたアフロの足元に、看板が滑り落ちた。

その隙を見逃さず、少年は狙い通りとでも言うようにアフロを拳銃で撃ち、見事昏倒させることに成功していた。

(上手い……！)

一見すれば、偶然の産物による勝利。運よく看板が倒れたおかげで、勝てたように見える。

が、ヒステリアモードの目はしっかりと捉えていた。

少年が放った弾丸が、看板の傾倒を防ぐために窓との間に張られていたロープを切り裂いていたのを。それも、狙う暇などほとんどない早撃ちで。

同時に、看板をぶつけるというワンアクションで、相手の動きを止め、混乱をもたらし、さらには発砲すらも阻止することを企んだ、瞬発力に富んだ知力。

なによりも、それを一発で成功させた技量と度胸。

——まさしく、絶技。自分のように遺伝さいのうではない、弛まぬ鍛錬で手に入れたであろう極致であった。

キンジは先ほどの少年を足手まといなどと思った自分を恥じた。と同時に、それならば今度はと自分も迎撃に移る。

(なら、次は俺の番だな)

キンジは、アフロがやられてそちらに意識が行っていたサングラスの男の右手を見やった。

そこには、黒光りする拳銃——回転式拳銃リボルバー・レミントンM1858が握られている。

(まずは——)

自身も制服の懐のホルスターからベレッタM92Fを抜いたキンジは、照準をサングラスの拳銃に合わせ、

(――過ぎたオモチャから捨ててもらおうぞ！)

引き金を引き、サングラスの手から拳銃を撃ち弾いた。レミントンM1858はカラカラと廊下を滑っていく。

これで戦意がなくなれば、とも思ったが、やはりそう簡単にはいかないらしい。サングラスは今度はナイフを取り出し、キンジ目掛けて襲い掛かってきた。

(これ以上は弾の無駄だな)

キンジは一切焦ることなく、ベレッタをホルスターに戻す。

その間にサングラスは距離を詰め、

「死ねオラー！」

思い切り、上段からキンジにナイフを振り下ろしてきた。

が、キンジはあっさりとそれを避けて振り下ろされた腕を掴み、勢いはそのままに一本背負いでサングラスの男を床面に叩きつけた。

ズダンッ！ という派手な音を響かせ、サングラスの男はリノリウムの床に背中を打ち付けられた。防弾制服着装とはいえ、かなりのダメージが入ったはずだ。

「ぐ、あ……ッ」

激しい衝撃と痛みに、サングラスは呻く。畳の上ではない柔道技は、冗談抜きの戦闘技術へと変貌を遂げるのだ。

呻いてから数秒して、サングラスの男は意識を手放した。

それを確認したキンジは、戦闘の終了を確信し、白雪の下へと帰還する。共闘した少年と少し話もしたかったが、それは後回しにした。ヒステリアモードの特性ゆえ、どうしても女性を優先してしまうからだ。

白雪はキンジが近づいたところで、おろおろとしながらもお礼を言い始めた。

「あ、ありがとうございます。私……ここの受験生で会場に行こうとしたんですけど、地図を家に置き忘れちゃって……。それで、さっきの人たちに道を訊こうとしたら、あんなことに……」

(なるほどな。この娘はしつかりしているようで、たまに抜けてたからな。今頃、星伽神社じゃ粉雪こなゆきや華雪はなゆきが大騒ぎだろう)

と、白雪の妹たちのことも考えながら、キンジはフツと微笑した。本当に、この白雪という少女は変わっていない。幼い頃、キンジが青森にある彼女の実家——星伽神社——に滞在させてもらっていた時から、真面目でもあり、しつかり者でもあり、しかし反面天然な面も併せ持っていた。欠点とまではいわないが、その癖は今でも直っていないようだった。

そんな白雪の様子に懐かしみを感じつつ、キンジは軽く髪をかきあげた。

続けて、いつまでも自分のことに気づかない幼馴染に、キンジはネタばらしを始めた。

「東京こっちに来るからどれだけ成長してるかと思えば。相変わらず危なっかしい子だな、白雪」

「え……キ、キンちゃん!？」

白雪は自分を助けた男が幼馴染であったことに、両手を口元にあてて驚いた。

無理もない。キンジと白雪が最後に会ったのは、かれこれ10年以上も前のことなのだ。その幼馴染とまさかこんなところで再会できるとは、白雪には予想すらしていないことだった。

「キンちゃん……本当にキンちゃんなの?!」

「白雪には、俺が幻に見えるのかい?」

慌てて真偽を問う白雪に、キンジは優しく疑問形で肯定する。

それに白雪は感極まったのか、

「キ……キンちゃん……キンちゃあああんツ!」

ガバアツ! と音がするぐらいの速さと強さでキンジに抱きついたのであった。

* * *

「……お。あっちも終わってる」

俺がアフロを倒している間に、黒髪の男子生徒はサングラスをかけた方を倒していたらしい。正直、1人相手するのに必死で、サングラ

スまで意識がまわっていないなかったので助かった。いや、元はと言えば俺はまったく関係ないのだけど。

しかし……結局ケンカの邪魔しちまったけど、よかったんかな？ いや、いいよな。だって向こうから向かってきたんだし。

それでも一応「邪魔して悪かったな」と黒髪に言おうとしたんだが、彼は戦闘が終わるや否や巫女さんに近づいて、いきなりラブコメを始めやがった。なんか抱き合ったりしてる。

……死ねばいいのに。

ちなみに、ギャラリーと化していた受験生たちは事態の終着を感じ取ったのかすでに散っていた。

「——つと、いけね。それどころじゃねえや」

危うく目的を忘れるところだった。俺はここに戦闘をしにきたわけじゃない。

さっそくアフロから地図を回収しよう。追いはぎみたいで少し嫌だが、襲撃されたんだ。これぐらいは許されてしかるべきだと思う。

というわけで、俺はアフロの傍まで近寄っていった。と、その途中、アフロの近くに看板が転がっていることに気づいた。

俺は目をこらし、そこに書かれている内容を読み取ってみる。

えーと、なにになに……？

『受験者は奥の階段より2階へ。各自教室に入室し、任意の座席で待機すること』、か。やっぱ、試験会場は2階だったのか」

まあ、どうでもいいや。もう教師を探す必要もないしな。

俺は気絶しているアフロの至近までたどり着くと、まず気絶していることを確かめた。いきなり復活したら怖いしな。うん、ちゃんとオネンネしてるようで安心した。

しかしこいつ、結局なんだっていきなり襲ってきたのだろうか？

……あれか、キレる若者、というやつだろうか。

ま、今となつてはもうわからんし、時間がないからどうだっていいが。あとは教務科マスタースにでも任せよう。

「さて、と」

俺は未だポケットから飛び出している地図を取るために屈もうと

して——その寸前、誰かに声をかけられた。

「あ、あのっ」

「ん？」

振り向けば、そこには件の巫女くんだんさんがいた。

おー、改めて間近で見ると、変な感想だがホントに巫女さんっぽい。なんか、コスプレのなんちゃって巫女さんとはまるで雰囲気が違う。

……あれ？ つーか、なんでここにいの？ 黒髪とラブコメってたはずじゃねえのか？

何か俺に用でもあるんだろうかと身構えていると、「えっと、ありがとうございますごさいました！」と、彼女はいきなり深くお辞儀してお礼を言った。

……え、えー？ どゆこと？

一体なんのこと——あ、もしかしてさっきの戦闘のことか。

つってもなあ、あれは礼を言われることじゃないな。あれはただ、地図を借りようとした俺が暴走する若者の被害に遭ったというだけの話だったんだから。

だから正直に、俺は否定した。

「別に大したことはしてねえよ。ありや、自分のためにやったただけ」すると、彼女はわずか目を見開き、「キンちゃんみたい……」と小声で呟いた。キンちゃんって誰？

って、どうでもいいんだよそんなことは。それよりもそろそろ急がなきゃ試験に遅れちゃう。

つーことで、俺はもう1度振り返りアフロから地図を奪う、もとい借りようと屈む——

「あ……教務科に連絡、するんですか？」

またかよ。

再びさえぎられた俺は、彼女の言葉に何と返そうか考える。

えーと、教務科に連絡するかって？ まあ、さすがにムカついたんで後でしようかとは考えちゃいたが、別に今は時間がないからどうでもいい。さっきも言ったが、こんなことでいちいち目くじらたてたら、とてもじゃないが武偵なんてやっていけない。つか、「襲われまし

た」とか訴えたって、どうせ「じゃあ自分でやり返せ」とか言われるに決まってる。

ていうか、この子なんで微妙に止めて欲しそうな顔をしてるんだ？ 自分を襲った連中が通報されるのを嫌がる理由なんてねえだろうに。

……ああ、なるほどそういうことか。

推理できた。この子はおそらく——自分で通報とどめを刺そうとしてるんだろう。

そうか。だから、俺に先取られるのを快く思っていないってことか。そういうことなら、丁度いい。俺のかわりにこの恨み晴らしてもらおう。

俺はひらひらと手を振りつつ、巫女さんに言った。

「そのつもりだったんだけどな。……でもまあ、あんたが嫌だっつんなら止めとくよ。好きにすりゃいいさ」

だから、思う存分通報してやってくれ。

という意味で視線を向けると、彼女はほつとしたような顔になつて、

「ありがとう、あなたが優しい人でよかった。やっぱり、このまま受験できなくなっちゃうのは、可哀想だと思うから……」

……あれ？　なんか、俺の思惑と違ってないか？

想像と違った返答を返され、困惑する俺。よくわからんがなぜか安堵の表情を浮かべる巫女さん。

そしてそこに、新たな人物が加わる。

「やれやれ。俺に言わせれば、シラユキ。君の方こそ優しい娘だと思うよ。自分を襲った相手にそこまで気を使えるなんて、大した子だ」

「キ、キンちゃん!?　そんな、優しいなんて……」

巫女さんがキンちゃんと呼んだのは、さっきの黒髪の男だった。いつの間にか、彼もこっちに來ていたらしい。

なるほどな、こいつがキンちゃんか。

で、巫女さんの方がシラユキというらしい。漢字は……まあ、普通に考えて白雪かな。間違ってたらすまん。

……つて、だからさつきから話がそれすぎだ。なんで地図1つ取るだけでこんな長引いてんだ。

さてと、じゃあ地図を取るために屈んでつと——

「ああ、アンタ。さつきは助かった、ありがとな」

もういいつつんだよだからよおおおおおおお！

再三にわたってさえぎられたことにイライラしはじめるも、なんとか自制してキンちゃんに言葉を返す。

「そつちの子——白雪、だっけか？　にもいったけどな、別に礼とかいいよ。俺は俺のやりたいようにやっただけだ」

言ってから、俺はさらに続ける。さつきの二の鉄は踏まない。はつきりと時間がないことを伝えるんだ、俺よ。

「それより、俺はもう行くぞ。悪いけど地図を失くしちまってな、俺は早く探偵科棟を探さなきゃなんねえんだ」

よし、言った。これでも俺を邪魔することはないはずだ。

しかし、予想に反し、キンちゃんと白雪は顔を見合わせ、こんなことを言ってきた。

「探偵科棟ってここだぞ（だよ）？」

まったく、しつげえなあ。あんまりしつこいと嫌われるぞ——え？

「……ここ？　探偵科棟って、今いるこの棟なのか？」

こくり、と同時に頷く2人。

………。

なるほどな、つまり俺は知らずに目的地についていた、と。へーそうなんだ。

——マジでか！？

うおー！　すげえミラクル！　なんつー偶然だよ、オイ！

これもきつと日ごろ苦労している俺への神様からのプレゼントだろう。そうに違いない。

「探偵科棟を目指してたってことは……なんだ、アンタもここで試験を受けるのか。じゃあ、俺と同じだな」

自分の思わぬ幸運にテンションが上がっていると、キンちゃんが言った。

「ん、そうなるな。——つと、俺は有明鍊。よろしくな」

俺は、ここが探偵科棟であると教えてくれた恩も込めて、キンちゃんに挨拶がわりに右手を差し出す。

彼もそれを握り返しながら、

「俺は遠山キンジだ。よろしく。で、こつちが」

「あ……星伽白雪です。よろしくね、有明君」

キンちゃんに促され、白雪がペコリとお辞儀する。

よし、記憶した。遠山に星伽だな。

……つて、あれ？ ちよつと待てよ。ここが探偵科つてことは……、

「星伽。お前、超能力捜査研究科志望じゃないのか？ 服装からつきりそうだと思うってたんだが」

小首をかしげて、俺は星伽に尋ねる。

——超能力捜査研究科。通称・S研。

前にも説明した14の学科の一つなんだが、正直これが全学科中で一番ぶつ飛んでいると認識している。ただしそれは危険度の面ではなく（最も危険なのは特殊捜査研究科——特殊条件下に於ける犯罪捜査を学ぶ学科——と言われている）、問題なのはその学科内容だ。

「超能力・超心理学による犯罪捜査」を学ぶ学科。それが超能力捜査研究科である。

……ああ、うん。言いたいことはわかるぞ？ 一般人なら「なんだ超能力つて」と呆れるか、一笑に付すのが関の山だろう。

——しかし、だ。俺も半信半疑ではあるんだが、現実はこの超能力というやつは存在するらしい。思念動テレキネシスやら脳波計スキャンメトリやら、漫画の世界のような『力』つてのは確かにあるんだよ。馬鹿げたことに。

そして、その『力』を奮って活躍する武偵——通称『超偵』——を育成することがあの学科の目的だ。

で、その性質上、あそこに集まるのは変わった連中ばかりらしい。例えば、降霊術使いのシャーマンだったり、ESP使いのエスパーだったり、鬼道使いの巫女さんだったり、多種多様な変人さんたちが大集合している。

ここまで言えばわかるだろうが、つまりはそういう理由で俺は星伽がS研を志望しているのだと思い、同時になぜ探偵科の試験会場であるここにいるのかが疑問だったんだ。

が、その疑問はすぐに氷解する。他ならぬ、星伽の言によって。

「ううん、有明君の言うとおりでだよ。でも私、お家に島内地図を置き忘れちゃって……」

えへへ、と恥ずかしそうに誤魔化す星伽。これを男がやろうもんなら、速攻で連続射出で蜂の巣にしてやるんだが、星伽が女子でよかった。

しかし、これで解った。つまるところ、星伽は俺と同じで、道に迷ってたってわけか。

つーことは、だ。

「じゃあ、急いで試験会場に行ったほうがいいんじゃないか？ そろそろ時間も近いだろうし」

「あ、うん。……あ、でも私、結局場所聞けてないよ……」

ずーん、という感じで落ち込む星伽。心なしか、顔に縦線が入った気がする。

んー……よし。

俺は数秒間考え、アフロのポケットから地図を抜き出し、それを星伽に差し出した。

「ほれ。これ、使えよ。こいつら3人組だから、1人が無くても大丈夫だろ」

「ええっ!? で、でもでもそんな勝手に盗ったら悪いよ……」

おたおたと手を振りながら、星伽は拒否する。根が真面目だと、こういう時融通きかねえよな。

しかたない。ここは遠山にもフォローしてもらおう。

「お前だつてそう思うだろ、遠山？」

「有明の言うとおりで、白雪。あんな真似をされたんだ、これぐらいは許されるさ」

いいぞ遠山、もっとやれ。

というか、星伽はホントにこのナンパ軍団のお咎めなしでいいんだ

ろうか？ 聖人君子にでもなるつもりか？

「キンちゃんがそう言うなら……」

微妙に気まずそうな星伽だったが、遠山の後押しもあって、結局彼女はようやく自らの試験会場へと赴いていった。

それを見送ってから、俺は考える。ここが探偵科棟つてことはまだ時間的余裕はあるよな。

……よし、今のうちにアフロたちを起こそう。そして、なんで俺まで狙ったのか問いただそう。さっきは時間的余裕がないことで、もう理由を聞くつもりはなかったんだが、ここが探偵科棟だつてんなら話は別だ。ついでに、教務科への自首も促したい。甘ちゃんな星伽とは違う、罪には厳しい男、それが有明錬だ（嘘。ホントはただの腹いせ）。もし暴れたら、やたらと強い遠山君に任せようと心に決めながら、俺はまずアフロを起こした。

彼は俺たちを見てひどくおびえたような顔をしていたので、まずこっちに敵意がないこと、ついでに星伽の意を汲んで、教務科には通報しないこと（通報はしない。あくまで自首に持つていく）を伝えた。よし、いよいよここからが本題だ。まずは、なんで俺も標的にしたのかだな。

「おい、おま——」

「そ、そうだったのか……俺たちはあんなことをしたのに、あの娘は……！ こうしちやいらねえ！ おいケン！ 起きろ！」

「——ん……タクロー？ 一体どうし——うおっ!? こいつらツ」

「落ち着けケン！ いいか、よく聞け、実はカクカクシカジカだったんだ！」

「なにい?! あの女の子が!? ……くそう、俺たちはそんな子にあんな真似を……！」

「後悔するのは後だ！ ユータを起こしてすぐに試験会場に行くぞ！ あの子の厚意を無駄にするな、全員で合格して、あの子に礼を言いくんだ！」

「おうー！」

「……………」

……いや、ちよつと。

俺が引き止める間もなく、それどころかそもそも俺を無視して、アフロと復活したグラサンは茶髪を起こし、さつさと2階に上がっていつてしまった。

えー……。

遠山が、呆然とする俺に声をかける。

「お前、いいやつなんだな。白雪が許したとは言っても、ここで気絶してちゃ試験は受けられないしな。だからわざわざ起こしてやったんだろ？」

「……………ああ、そーだな」

……もういいよ、それで。

* * *

結局なんで自分が襲われたのかはわからないままだったが、気を取り直して俺は遠山と共に2階へと上がった。

2階には教室が3つ並んでいた。あの看板にや確か、各自教室に入り任意の席に座れとか書いてたつけ。てことは、あの3つのどこでもいいってことか？ ……適当すぎんだろ東京武偵高……。

若干呆れてしまったが、なんとか切り替えて遠山に問いかける。

「で？ どこに入んだ？」

「やっぱりこれは、そういうことだよな。なんというか、適當っていうか……。とりあえず、一番手前の教室にしようぜ。それで、空いてなかったら移動しよう」

「ん。じゃー、そうすつかね」

俺たちが昇ってきた階段に一番近い教室の後ろ側の扉の前で、遠山はちらりと窓ガラスごしに室内を確認する。俺もその横について覗いてみると、ちらほらと空席が散見できた。ラッキー。

遠山がガラリと扉を開け、2人して教室内に入る。時間的にはまだ10分くらい残ってたからギリギリというわけじゃねえんだが……さつきの騒ぎを見ていた連中が多いのか、大分注目を集めてしまった。

遠山とバツの悪さから顔を見合わせて、とりあえず各々が選んだ席

に座る。ちなみに、俺とは少し離れていた。

席につくまでの途中、俺は教室内をぎつと見回して、何人か覚えのある顔を見つけた。東中（東京武偵高校中等部の略）のやつらが数人、それにここに来た当初見かけたツーサイドアップの金髪少女やイケメン君だ。ちなみに、あの3人組はいない。どうやら別の教室らしい。

あいつらも探偵科志望だったのか、なんて比較的どうでもいいことを考えながら、俺は頬杖をついて窓の外を眺め始めた。

——10分後。

ガラアンツ！ というけたたましい音と共に、前側の扉が開き、長いポニーテールをなびかせる背の高い女性が入ってきた。背後には長大な刀——斬馬刀を背負っている。なにあれ怖い。

突然のことに反応できない中、彼女はそのまま教壇の前まで歩き、クルリとこちらを向いた。

……ニイ、と口元をゆがめながら。

そして、威圧感たっぷり口を開く。

「よう来たなあ、お前ら。ウチは、蘭豹^{らんびょう}。今日1日、ウチがお前らの試験官や」

開口一番彼女が放ったのは、自己紹介だった。

な、なんかやたらと好戦的っぽいやつがきたな。あれマジで探偵科の教諭なのか？ 想像と違うぞ。

しかも、腰に吊ってるのって『象殺し』とか呼ばれてる巨大拳銃・M500じゃねえか。あんなもんどちかかってーと強襲科^{アサルト}の武器^{エモノ}だろ。

ま、まあでも人は見かけによらないっていうしな。あんな感じでも、きつと推理はすごいんだろ。うん。なぜか激しく間違ってる気がひしひしするけど。

それよりも……いよいよだ。

いよいよ、ランク分けの試験が始まる。

気を引き締める。ここからが正念場だ。

唇をぎゅつと引き結び、心のギアを上げる。ここまでの観光気分の

浮かれた気持ちを振り払い、意識を目前に迫った試験へと向ける。

そんな俺に、いや俺たちに、蘭豹は言う。

「ウチが言うのもなんやけどな、全員死ぬ気で試験に臨め。そやないと……ホンマに、死ぬで？」

こ、こえー。なんだあいつ。台詞が完全に強襲科じゃねえか。

いやいや、びびるな錬。あれはただの脅しだ。冷静に考えろ、探偵科でそんな切った張ったの試験になるわけがない。普通は、推理力とか捜査力とかを調べるはずだろ。

つまりこれは嘘^{ブラス}。ここからすでに試験は始まっているということだ。

おう、そう思ったら急に安心してきた。

そうだ。俺は、決めたんだ。あの、俺が尊敬する探偵のようになる。そして、いつか目指した夢を果たすのだと。

そう。この――

「まあ、それでも無事に合格したら……せやな、そんな時はウチが鍛えたるわ。お前らが志望して、ウチが請けもつとる――」

――探偵科で！

「――強襲科で！」

……。

……。

……。

あれ？

4. Examination ③

——ちよつと、待ってくれ。

試験官を名乗る女の言葉に俺が思ったことは、それだった。

3月17日、9時40分。レインボーブリッジ南方に浮かぶ人口浮島に建設された東京武偵高・探偵科棟^{インケスタ}。その一室は、俺の認識によれば、本日行われる入学試験……その会場のはずだった。

ただし、棟に冠された名の通り、探偵科の入学試験の会場だ。……と、俺は思っていた。

だが、だとしたらあり得ないはずの台詞を、教卓でニヤリと豹のように笑いながら、試験官——蘭豹は言ったのだ。

つまりは……これが探偵科ではなく強襲科の試験である、と。

はつきりそう言ったわけじゃない。ないが、文脈から類推するにほぼ間違いなくそういう意味であり、さらに続けて蘭豹が述べた説明により、それは確定的となった。

曰く、

「ああ、そういうえば、なんで強襲科^{アサルト}の試験会場が強襲科の体育館やなくて探偵科棟で行うか言うたらんかったなあ。一昨日くらいに送った紙見て、疑問に思ったモンが大抵やる。あれは、対外的な印象を考えた結果や。やからお前ら、ウチが今から教えるホンマの理由、親にチクったりすんなよオ？ ……実はなあ、先日強襲科^{ウチ}のバカ共が爆弾の取り扱い間違つて、体育館半壊させてもうてな。そこで急遽、こういう形で試験することになったってわけや。……あーメンド。なんでウチがこんなこと説明せなアカンのや。撃ち合うんならどこでもええやろが」

だだよ。

ところどころ腑に落ちないところがあつたり、最後の部分で目の前の女傑の危険さが若干垣間見えたりしたが、それはともかく、つまりはそういうことらしい。

だがこの現状——探偵科の試験を受けに来たら強襲科の試験を受けることになった——は、話を聞く限り学校サイドのミスではなく

(多少の責任は否めないが)、単純に俺のミスだ。
なぜならば。

「……マジかよ、おい」

蘭豹から衝撃の事実を突きつけられた俺は、とある心当たりに行き着いて、慌てて持参していた学生カバン(防弾性)からクリアファイルを引つ張り出し、そこから一枚のB4用紙を抜き取った。

それは、一昨日急に武偵高から送付されてきたものだ。その時はちよつとした用事もあつて、後で見ようと思ひ机の上に置きっぱなしにしてたんだが、俺はそれを今日の朝まで忘れていた。だから家を出る前にカバンに仕舞い込み、こうして今始めて目を通すことになったわけである。

俺が持つそのプリントには、こんな文面が踊っていた。

『試験会場変更の通知 東京武偵高校・強襲科の体育館が使用不可になったので、強襲科の試験会場を探偵科専門棟へと変更する。なお、それに伴い探偵科の試験会場を一般校区A棟へと変更する。各人、間違いがなきよう確認すること』

「は、ははっ……」

思わず、俺は乾いた笑いを零した。

書いている。完全に、きちんと。今しがた蘭豹が言った事が。

薄っぺらい紙切れが、如実に「読まなかったお前が悪い」と語りかけてくるようだった。

……オーケー、認めよう。こいつは、完全に俺のミスだ。——が、まだリカバーはきくはずだ。

自らが犯した過ちを承知した俺は、しかしそれでも言うほどこの状況を問題視しちやいなかった。

なぜならば、言つてしまえばこれはただ教室を間違えたというだけの話なんだから。

探偵科でも試験はすでに始まつてしまつているかもしれないが、今ならばまだ間に合う。当然ペナルティやらなにやらはあるだろうが、どうせすでに合格は決まつている身だ。となれば響くのは武偵ランクの方だろうが、別段そこまでこだわりがあるわけじゃねえ。せいぜ

い、スタートダッシュが切れなくて残念、程度だ。ゆっくり遅れを取り戻していけばいい。

だから俺が取るべき選択肢は至極簡単なものなんだ。ただ一言蘭豹に、「すいません間違えました」と伝えればいいだけだ。

よし、と脳内で方針を固め、俺はパイプ椅子に座る蘭豹に目を向ける。さあ言うぞ、と意気込んだところで、さすがは強襲科教官と言わべきか視線だけで気づいた蘭豹が俺に向かって小首を傾げ、ドスの効いた声で訊いた。

「なんや、そこのお前。なんか用でもあるんかい？」

「いえ」

即答である。

俺自身でさえ無意識のうちに、彼女に反抗（というのもちよつと違うが）する心がへし折られていた。

猛禽類のように鋭い眼光、全身から滲み出る強者の貫禄、そして極め付きに手慰みのつもりかクルクルと手の内で回る大型拳銃・M500。

これらすべての要素を持つ蘭豹には、従順に従う以外の選択肢などない気がした。特に、スミス&ウェッソンS & Wが『世界最強』を目指して開発した回転式拳銃・M500——使用弾丸は市販品では最強を誇る・500 S & W弾だ——をまるで玩具のように扱うところにそこはかかない危うさを感じる。口答えなどしようものなら、その威力を我が身で体験することになるかもしれない。……実際、中学時代に聞いた話だが、教師が生徒に発砲することはあるらしい。恐ろしや、武偵高。

そんなこんなで現状を打開するチャンス逃してしまった俺に、蘭豹が言った。

「ははあん、なるほどな。ウチは探偵科やないけど、これくらいは推理できるで。お前——ウチに見とれとったんやろ。この、マセガキがア」

ちげえよ、バカ。

とつさに口を突いて出かかった言葉を俺は慌てて飲み込んだ。

一歩間違えばお陀仏もあり得たことに戦々恐々とする俺とは対照

的に、蘭豹はにまにまど口元を歪める。それがまたリアルに豹が笑ったように見えて、俺だけじゃなく他の生徒もビビらせているわけだが、当人は気づいていない様子だ。

というか、あいつまさか喜んでんのか？

あんなナリでも、どうやら男に興味を持たれるのは嬉しいいらしかった。

* * *

「やったー！ 1番！ 理子、1番だよー！ 1班のみんな、りこりんをよろしくねー！」

と、やたらとハイテンションな声で宣言したのは、ふんわりとゆるやかに波打つクリーム色の長髪をツーサイドアップテールに纏め上げた、天真爛漫な少女だった。元気だなあ、おい。

なにが嬉しいのかくると教卓の前で回る彼女を見つつ、俺はチラリと手に持った5cm四方の紙に目を向けた。

1班……ってことは、俺と同じか。女子と戦うのはやだなあ、時雨を思い出しちまう。そういや、あいつが受けてる尋問科——逮捕した犯罪容疑者への尋問を学ぶ学科——はどんな試験なんだろうなあ。

まあ少なくとも俺とこよりや安全なんだろうなと思うと、思わずげんなりとしたため息が出た。

担当教官である蘭豹の説明が終わったことで、現在俺を含む受験生たちは一人一人教卓の上に置かれた紙箱からくじを引いていた。

今回行われる強襲科の試験内容は、端的に言っちゃえばバトルロワイヤルだ。学園島内に建設された14階建ての戦闘訓練用の廃ビル（というのを見た目だけで、実際は強度や障害物の配置など考え抜かれて設計されているらしい）で、15人の受験生が互いに索敵しあるいは遭遇して、捕縛又は撃破を行うという内容らしい。

使用可能武装は、なんでもあり。といっても無論、死亡確率を抑えるために（あくまで可能性が下がるだけだな）、弾丸は非殺傷弾、刀剣は刃無し、致死性の毒や武器は禁止だ。防弾制服の着用も義務となっている。

この試験内容を聞いたとき、俺は思わず卒倒しかかった。さすがは噂に悪名高い強襲科、入学試験からしてぶっ飛んでやがる……。

ちなみに、体育館が爆破される前は試験会場はもちろん試験内容も異なっていたらしく、当初の予定では、体育館内で行う一対一の模擬戦だったとか。で、どうせ変更するならもつと凝ったものにしよという方向で強襲科教師陣はまとまったそうだ。蘭豹の話じや受験生の総合力を見るためとかなんとか言ってたが、絶対試験官が楽しむためだろ。

閑話休題。

それで、今行っているくじ引きは、つまりこの試験の組み合わせを作るためのもんだ。15人を一組として、それを3つ作り、順番に試験していくわけだ。

この組み合わせ次第では、最悪瞬殺や無撃破ノーキルといった結果もあり得る。俺はもちろん、他の連中も自分と同じ班になる連中が誰か、注目していた。

さてさて……どうなるかね？

そんなことを思いながら、俺は頬杖をつきつつ、静かに第1班の完成を待っていた。

* * *

「1班、全員武装はできたな？」

見た目は完全に廃墟と化したビルの入り口前、そこに俺たち1班は集まっていた。ちなみに、2・3班の姿はない。彼らはまだ探偵科棟で待機中だ。

1班を横一列に整列させた蘭豹が無線でどこかと（おそらくは他の試験官と）連絡を取っている間、俺は武装の確認をしていた。

任務前に行うこの行動はもう癖みたいになっちまってる。優秀な武偵は決して油断をしないし、事前の準備を怠らない。そして、中学時代に行動を共にしていた東京武偵高等部十傑『10』ディエチは間違いなく優秀な部類だった。この習慣は間違いなくあいつらの影響だろう。

1人……上手くいけば、2人くらいはいきてえな。

愛銃・グロツク18Cをホルスターにしまい直しながら、俺は頭の

中で算段を練る。

ここに至つて、俺はすでに覚悟を決めていた。蘭豹が怖かつたから、という情けない理由だけじゃねえ。ここで逃げるようならばどのみち武偵なんて道は続けられないと思ひ至つたからだ。

……とはいえ、実際のところはただ状況に流されているだけつてのが、なんともはや情けないところだが。

と、武装確認を終えた俺に、隣に並んでいた遠山キンジが話しかけてきた。

「有明。お互い、頑張ろうぜ」

おいおい……こんなめちやくちや強そうな奴に頑張られたら、下手したら俺死ぬんじゃないか？

よし、防護策を張つておこう。

「手加減してくれよ？ 俺は弱えからな」

ここは少しでも自分が弱いことを印象づけて手加減してもらおう、という実に狡い手に走る俺。

間違つても頭とか撃たないでね、というニュアンスで俺が言うと、遠山はおもしろいジョークでも聞いたといった感じで軽く笑つた。

えー……なにその笑い。こいつ、手加減する気ゼロですか？ あれか。獅子はウサギをなんちゃらつてやつか。はい終わった。こいつと出会つた瞬間、俺終わったな。

そんな感じで若干諦めの境地に入っていると、通信が終了したらしい蘭豹から俺と遠山に叱咤が飛んできた。

話しかけたの遠山こいつなのになぜ俺まで、と思わなくはないものの、撃たれては堪らないので大人しく従う。

それに満足した蘭豹は、腕を組みつつ受験生おれたちを見回した。

「チンタラやつてもしやあないし面倒エリアマップやから、もう始めるで。説明終わつたら、さつき配つた棟内地図エリアマップに従つて、お前ら指定の場所に散れ。全員配置にいたら、ウチがビル内のブザーを鳴らす。それ聞こえたら、あとはお前ら勝手に殺しあえや」

なんつー説明だよ、オイ。

最後の一言に呆れる中、同じく1班の……えーつと、理子だったか

? が元気よく右手を挙げて発言する。

「はいはい、りこりん質問があります! ん〜とお、罨とかつてアリアリのアリ?」

口元到人差し指を当ててかわいらしく尋ねる彼女(あざとい気もするが)に、蘭豹は眉根を寄せながら答えた。

「ああん? 武偵やぞ、当たり前や。罨でも銃でも剣でもなんでもいから、とにかく他の連中ぶつ殺したモン勝ちや」

「うーラジャー! これはやる気が出てきましたよお」

今のどこにやる気である要素があつたのだろうか、と疑問が残るがここでそれを理子にたずねてまた怒られる愚を犯すほど俺は馬鹿じゃない。

ごくりと唾と一緒に疑問も飲み込んで、蘭豹の言葉に耳を傾ける。

蘭豹の方も伝えるべきことは消化しきつたようで、ホルスターからM500を抜きつつ言った。

「質問はこれで終わりやな? なら、さっさと行かんかい! 武偵憲章5条『行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし!』」

『はー!』

蘭豹の命令に、俺たちは答えて。

M500による号砲を背に、一斉に所定の位置へと駆け出した。

いよいよ、強襲科の入学試験イグザミネーションが幕を開ける――

「さて、と。まずはどうするか……」

外付けされたいくつもの階段から俺らはバラバラにビル内に侵入し、配布された棟内地図スターティングポイントに書かれた初期位置に、俺は陣取っていた。ちなみにここは4階。俺の試験はここから始まるわけだ。

太陽光以外の光源がない薄暗い室内で、コンクリート剥き出しの柱に背を預け、片膝立てで待機する。蘭豹が言っていた開始ブザーが鳴って、はや5分。すでに試験は始まっていた。

しかし、だからといってすぐさま動きだす奴はバカか実力者のどちらかだ。が、俺はそのどちらでもない。

俺はまず周囲に人が居ないことを確認すると、続いてこれからの方

針を立てていく。どうせやんなら全力だ。

さて、どうする？ 罾を張って待ちに徹するか、打って出るか。

ひとまず思いついた二択は、一長一短だ。前者ならば生存確率が上がる代わりに、大量撃破は望めない。後者ならば撃破するチャンスは増える代わりに、生存確率が大きく下がる。

つつても、取れる手は多分後者だろうな。罾つつつても、手持ちがこれじゃあ、な。

今俺が所持している装備は、グロツク18Cに、ダガーナイフが2本、閃光弾フラッシュが1発に発煙弾スモークも1発、ベルトに仕込んだワイヤー、9m×19の予備弾倉スベアマガジンが2つ。

それと——
「……ま、こいつはいいだろ。ルール違反だし、中学でも使わなかったしな」

一瞬制服の胸ポケットに手を当て、すぐに離す。これは高校入試程度には過ぎた代物だ。

その他の装備は標準的なものだ。ま、こんだけありや、とりあえずこの試験の間の戦闘には支障はないだろう。

だが、これで罾を作れるかと訊かれれば、難しいといわざるを得ない。使えそうなものはちらほらあるが、それも技量あつての話だ。『10』の中には屈指の罾トリックマスター使いも居たし、それなりに教えてもらつてもいたが、生憎と俺にそつち方面の才能はなかつたらしい。てんで成長しなかった。

となると……だ。進撃するしかねえよな。

ま、初めからわかつてたことだけどな。どうせ俺程度が作った罾じゃ誰もひつかかりそうにねえしな。

ここはいつちよ——腹あくくるか！

と、俺が決意した時だった。

——カツン、と足音が響き渡つた。

「ッ!？」

突然の事態に驚愕した俺の行動は、存外早かった。それが体に染み付いた経験ゆえかどうかはわかんねえが、慌てて柱から離れて近くの

物陰に身を潜ませる。

クソ……ミスったな。こんなことなら、初めから身を隠すべきだった。武装を羅列するよりまえに、そっちのほうが先決だった。

反省はあとでするとして……一体、誰だ？ 足音も消さずに、堂々ときやがった。自信があるのか素人なのか……まあ、考えるまでもなく前者だろうが。となると、実力者か？

相手にある程度当たりをつけると、俺は採るべき行動を思い浮かべていく。

こつちから仕掛けるか？ あるいはカウンターを狙うか？ 逃走すべきか？

考える時間は多くない。戦場での決断は迅速にしなければならぬ。

どうする？ と自問した次の瞬間、俺の耳に場違いな明るい声が届いた。

「くふふつ。かくれんぼは苦手なのかな？ 足音を聞いてから慌てて隠れるなんて、ちよつと反応遅いよー？」

甘い。そんな印象を持つ、幼い声だった。

だがこれには聞き覚えがある。それも、つい先ほど。

「……………」

俺は声の主を思い出しながら、物陰から離れ、その姿をさらした。口調からして、俺の位置はすでにばれているだろう。隠れっぱなしで催眠弾でも投げ込まれてもやっかいだ。

そして、俺の目に映ったのは、この薄暗い廃ビルの中でさえ燦然と輝くハニーブロンドのツーサイドアップテール。この年頃の女子にしては幾分低い身長と、それと反比例するような成熟した体つき。お……マーベラちよつと黙ろうか俺。

無邪気に、しかしどこか妖艶に笑みを浮かべるのは……、

「理子……でよかったか？」

「くふつ。覚えててくれたんだ。理子の名前」

そう。先ほどのくじ引きでもっとも目立っていたといっても過言ではない少女——理子だった。

俺が名前を呼んだことが嬉しかったのか、小さく笑って理子は飛び跳ねた。

その行動の幼さに苦笑しつつ、俺は言った。

「悪いけど、名字聞いていいか？ 勝手に名前呼びつてのもどうかと思うしよ」

ちなみに、今現在俺は銃を抜いてない。というか、抜いたら多分撃たれるから抜けない。いや、抜かなくてもどのみち撃たれるか？

……あれ、俺詰んだ？

「んーん。理子でいーよお？ もしくはりこりん！ あ、ちなみにフルネームは峰^{みね}理子だよ」

「そうかい。じゃあ、俺も名乗っとく。有明錬だ、よろしくな」

あ、乗ってきた、これが強者の余裕か。などと思いつつ、名乗られた以上は名乗るべきだと変に律儀なところを見せてみたりする。

俺が名前を告げると、理子は何かを考えるようにうなり、急に思いついたように手を叩いて、

「じゃあ、レンレンだ！ 理子、君のことレンレンって呼ぶ。ちなみに、答えは聞いてないっ」

と、そんなことを言ってきた。

レンレンって……まあ、なんでもいいけどよ。

俺は理子に「あーそうかい……」と気だるげに返事を返し、そこでふと頭に浮かんだことを訊いてみた。

「しかし、お前……なんだってこんなバカ正直に歩いてきた？ あれじゃあ、狙ってくれていってるとるようなもんだぞ？」

「別にいーよ？ 狙っても。りこりんはそんなことではやられたりしないのですー！」

きやはー！ という感じに笑いながら敬礼する理子。

その挙動に若干イラツときつつも、さらに尋ねる。

「おいおい、そいつはまた随分な自信だな。先手を取らせても、自分は負けねえって？」

「そーだよお、くふふふつ。理子はあそこじゃ弱いけどお、それでも中学出たてのシロウトなんかには負けないんだぞつ。がおー！」

人差し指で角を作りながら、理子は大口を叩いた。

「……………」

今のは……今のは、少しキタ。

『あそこ』ってのはよくわからなかったが……素人とは、言ってくれるじゃねえか。

俺は確かにそんなに強くなってるし、だからこそ強くなりたいと思う。思うが、しかしそれは無理だと分かっていた。才能に恵まれた連中に囲まれた去年、自分の矮小さは十分に思い知らされた。

……それでも、俺にも意地ぐらいある。あの地獄みたいな1年間を生き延びてきたという意地が。

それをその気がないとはいえ貶されて黙ってられるほど、俺は大人じゃねえ。

男の子なんでな、これでも。

静かに闘志を燃やす。

四肢に力がこもる。

——勝つ。

ただその二文字を胸に、俺が眼光に力を込めたその時、

「実際、君で4人目だもん。みんなすぐに負けちゃうからちよつとつまんなかったかなー？」

ジユワツ、と情けない音と共に心の火が鎮火した。

ダラダラと何か嫌な汗が噴出し始めるのを、俺は確かに感じた。

いやいやいやいや無理だってこの子めちやくちや強いじゃんまだ開始5分しか経ってないのに3人撃破ってどゆこと!?

こ、これはさすがにちよつと勝てねえぞ。俺の試験、ここで終了ですか？

い、いやまだだ。まだ終わらんよ！

一瞬諦めそうになるが、なんとか立て直す。冷や汗で背中を冷やししながら、俺はとりあえず命乞いをしてみる。

「おー怖え。そんだけ強いんなら、戦^やりたくねえなあ。見逃してくんね？」

「ブツブツ！これは強制イベントだから、スキップ不可なのです！」

ですよねー。できるだけさらつと言ってみただけどダメでしたー。両腕でバツテンを作る理子は、どうやら逃がしてくれる気はないらしい。まあ、こうなるだろうなどは予想がついていたが。

もはや勝機は消えた、と俺はのろのろと右手を持ち上げ、ホルスターに手を伸ばす。せめて、やれるだけはやろう。

しかしその手がグリップを掴むよりも早く、理子が言った。

「でも、レンレン理子とお喋りしてくれたからハンデくらいならあげてもいいよ」

「あん？」

「どうということだ？ と聞き返そうとした俺の目に、理子が構える姿が映った。

深く腰を落とし、左足を大きく前に出して、それと平行するように左腕も伸ばす。珍しい型。しかし、俺には見覚えがあった。

視界がダブる。理子に重なるように、よく知る人物のシルエットが重なる。

これは、絵馬えまの——ッ!?

瞬間、俺は悟った。ハンデとはつまり、拳銃を用いない打撃技ストライキングのこと。そして、あの体勢から繰り出される第一打は——

「——行くよ？」

理子が告げた、刹那。

ドンツツ！ と。

俺の両腕を衝撃が襲った。

「ぐ……ッ！」

小さく呻く。ビリビリとした腕部の鈍痛を感じながら、やっぱりか、と自身の予想が正鵠を射ていたことを確認する。

理子が一瞬で俺との距離を詰め、俺の胸あたりに鋭い掌底を放ってきた。

それに対し俺はすぐさま両腕を胸の前で交差させ、その一撃を防いだ。小柄なだけあって、衝撃は少なかった。

今の攻防の、それが正体だ。

び、びつくりしたな……。

自分の攻撃が失敗した理子は一度離れて、

「おーすごいぞレンレン！ よく防げたね？」

「……知り合いに1人、使い手がいてな。活歩……だっけか？」

「だーいせーいかーい！」

やっぱな……。

今理子が使ったのは、中国武術だ。日本ではなじみが薄く、実物を見るチャンスはせいぜいテレビや本の中くらいだろう。

そして一足飛びに近づいてきた歩法は、活歩とかいうらしい。日本では縮地法と呼ばれ、八極拳や螭螂拳とうろうにおいては箭疾歩せんしつぽと呼ばれることもあるとか。

しかし、危なかった。絵馬のやつがやたらと俺に使ってきてたおかげで、なんとか反応できた……。

かつての後輩の一人が修行と称して行っていた模擬戦で見えていなければ、モロに喰らっていただろう。この反応速度をたたき出すまでに受けた拳の数は三桁に昇っただけに、俺はひそかに己の成長に涙した。

つか、だ……こりや、まずいな。理子はハンデとか言ってたが、全然じゃねえか。俺にとっては普通に強敵だ。

かといつて、銃を抜くわけにもいかない。その場合も理子が素手でいてくれる保障はどこにもない。

……しかたない。ここは——逃げよう。

さっきので確信した。こいつ強すぎ。絵馬より速かったぞおい、どうすりやいってんだよってことで逃げます。

というわけで、善は急げだ。

次の瞬間、俺は制服から発煙弾をすばやく抜き取って床に叩き付けた。

途端、爆発のように膨れ上がった白煙が室内を白く染め上げていく。奇襲や逃走を主として使われるため、その展開速度は半端じゃない。あつという間に視界は白色に覆われた。

「うえ!? レンレン躊躇無く発煙弾使ってきた!? ちよ、空気読もうよ！ 今バトルパート突入の雰囲気だったよ?!」

そうだな、俺もそう思う。

まったくもって正しい理子の糾弾をよそに、俺は全力ダツシユでその場から離脱を始めた。

わははは！ 悪いな、理子！ 三十六計逃げるにしかず！

小物そのものの台詞を脳内で発しながら、俺は両足を駆動させる。そして、

ガツツ、と廃ビルゆえの地面の亀裂につまずいて。

ズシヤアアアツ、と思いつきり顔面からこけた。

「ぐう……ツ!?」

は、鼻が！ 鼻が！

めちやくちや痛い。ちよつと泣きそうだ。

お、おのれ、天罰かこれは？

痛みを堪え、なんとか立ち上がる。そのまま鼻の頭を押さえながら、俺はよろよろとふらつきながら歩く。その際に俺の耳はビーツというなんか変な音を捉えていたのだが、あいにくと耳よりも痛打した鼻の方に意識がいつていたために、全く気にすることはなかった。

クソ。こんなところでタイムロスしてる場合じゃねえ……！ 発

煙弾は煙が広まるのは早いが、代わりに晴れるのも早いってのに——「いやあ、なんていうかレンレンってすごく残念な子なんだね……」

「ツ!?」

かけられた声に俺が振り返ると、そこには呆れ顔の理子がいた。

そりや、そうだろ。逃走用に煙をたいたのに、晴れるときになってもまだ逃げ切れていないなんて間抜けもいいとこだ。

ど、どうする。これはもう、チエツクメイトをかけられちまったんじゃねえか……?」

「なんか、理子しらげちやった。レンレンならちよつとは相手になるかと思っただのになあー」

ぶう、と頬を膨らませながら言う理子。

か、勝手なことを言いやがって。何が相手になるかもだ。

——って、げっ!?

「そういうことなので、レンレンにはそろそろゲームオーバーになっ

てもらいまーす！」

元気のいい台詞と共に、艶かしい脚線美を見せ付けつつレッグホルスターから理子を取り出したのは——ワルサーP99。ワルサー社が生み出した初のポリマーフレーム拳銃で、ドイツの警察でも使われる自動拳銃だ。

これは多分、宣告だ。

拳銃^{あれ}を取り出したってことは、本当にもう終わらせる気だ。間抜けにもこの段階に至ってさえ拳銃を抜かなかった俺よりも、すでに抜いている理子の方が確実に早く撃てる。

「チツ」

理子には聞こえないように小さく舌打ちする。

どうする。どうする。どうする。

ここからなんとか起死回生を図る俺の前で、理子は歩きながらゆつくりと銃口を俺に向ける。弾は……込められているだろうな。間違いない。

拳銃を抜く……ダメだ、さつき考えたろ、あつちの方が早い。じゃあ飛び掛る？ 馬鹿か、俺は銃弾より早く動けんのか。

必死で頭を回転させる。だが、俺は天才じゃないし、漫画の主人公的『土壇場の発想』もまるで思い浮かばない。

「おやすみ、レンレン」

これでとどめだというように、理子は言った。その口調からは、勝利を確信していることが読み取れた。

絶望的状况。

終わり。

まさしく最高潮に緊迫した場面……なんだが。

……つーか、ちよつと待って。こんなときになんだが、さつき思い切りぶつけたせいで鼻血が出そうだ。鼻の奥がむずむずして、ちよつと笑ってしまった。

——って、そんな場合じゃねえだろうがよ！ ええい、なんでもいい！ とにかく行動しろ俺！

俺は、せめてもの抵抗として、大きく後ろにバックステップした。

瞬間、

理子が、「わきゃ!?」と悲鳴を上げた。

……は? なんであつちが悲鳴?

意味がわからん俺の前で、理子が大きく体を前に倒し始める。

当然距離をとった俺にそれを止められるはずもなく、理子はそのま

ま――

ゴツツツツ! と。

割と洒落にならない勢いで地面に向かって頭突きをかました。

「うきゅ〜……」

と、まさしくボタンキューといった感じで、理子はうなる。

動かないところを見るに……どうやら気絶しているらしかった。

「……………」

……え、なにこれ?

* * *

3月17日。

この日行われる東京武偵高・強襲科の入学試験には、峰理子と呼ばれる少女が参加していた。

1班から3班まで、それぞれ15人ずつに分かれて行われるこの試験において、彼女は1班に振り分けられた。そして今理子は、試験会場である廃ビルの4階にいた。

いや、より正確には、対峙していたというべきか。

理子の眼前には、ざんばらに切りそろえられた黒髪と、鋭い双眸が特徴的な少年がゆるりと立っていた。

彼は、理子と同じく受験生の一人だ。試験前に集合したときに、顔は覚えている。

少年は、軽い調子で口を開いた。

「理子……でよかったか?」

「くふっ。覚えててくれたんだ。理子の名前」

理子もまた軽く（というか明るく）返して、その場で一つ跳ねる。

その行動が少年にはどう映ったのか、彼は苦笑して、

「悪いけど、名字聞いていいか? 勝手に名前呼びつてのもどうかと

思うしよ」

この質問に、理子は内心で首をかしげる。

(あつれー? この状況、結構向こうからしたらピンチなんだと思うんだけどなあ? おまけに武器も出さないし)

もしや暗器使いか、と思考を巡らせるが、すぐさまそれはないと思いき直す。なぜなら理子は試験前に錬が拳銃を点検している場面を見ていた。戦う前からすでに情報戦と言う名の争いは始まっていたのである。

となれば残るのは、余裕を見せているか罠かのどちらかになる。

それを見極めるために、そして今後を見据えてさらに情報収集するために、理子は錬の会話に乗ることを決めた。

「んーん。理子でいーよお? もしくはりこりんで! あ、ちなみにフルネームは峰理子だよ」

「そうかい。じゃあ、俺も名乗っとく。有明錬だ、よろしくな」

そんな錬の名乗りを聞いて、理子がわずかに眉を寄せた。

(有明錬……? それって確か、東中の……)

心中で、自分が集めた情報と錬の名前を照合する。そして、ヒットした。検索結果は、『要注意人物』。

理子の得意分野は情報戦だ。ゆえに彼女は今回の入学試験においても、あらかじめ有名な人材についてはある程度調べていた。もつとも、目的はそれだけではないのだが。

それはともかくとして、そのうちの1つに有明錬の名があった。

有明錬。

一般中学から3年時に東京武偵高校中等部に編入、卒業するまでの1年間で頂点まで上りつめた天才。

というのが、彼のパーソナルデータだった。これだけを鵜呑みにするならば、眼前にいる少年は少なくとも学生レベルで見ると強者である。

——だが。

(んーおかしいなあ。そんなに強そうには見えないんだけどなあ?)

どう鼻屑目に見ても、そこまでの評価を受ける男には見えなかつ

た。

峰理子は知っている。本当の強者は、たとえ隠そうとしてもなおあふれ出る『強者のオーラ』を纏っていることを。あの場所では誰もが一騎当千の化け物ばかりだったから、比べるのは酷だが、それでもあるのだ。覇気とも呼ぶべき、そのオーラは。

だが、有明錬にはそれがない。やはり、噂は噂でしかなかったということか。

(……いいや、どうでも。暇つぶしに遊んで、あとはテキトーに倒しちゃお)

錬に見切りをつけた理子は、あっさりとそう結論づけた。

すでにある程度の戦果は上げているのだ。せいぜい他の参加者が潰しあうまでの時間稼ぎにでもなってもらおうとしよう。

理子は、そんな内心を一切悟らせることなく、今まで考え事してましたと言う風にポンと一つ手を打って、

「じゃあ、レンレンだ！ 理子、君のことレンレンって呼ぶ。ちなみに、答えは聞いてないっ」

と、珍妙なあだ名を献上してやった。

錬は脱力したように肩を落とし、

「あーそうかい……。しかし、お前……なんだってこんなバカ正直に歩いてきた？ あれじゃあ、狙ってくれていってやるようなもんだぞ？」

「別にいいよ？ 狙っても。りこりんはそんなことではやられたりしないのです！」

「おいおい、そいつはまた随分な自信だな。先手を取らせても、自分は負けねえって？」

「そーだよお、くふふふふつ。理子はあそこじゃ弱いけどお、それでも中学出たてのシロウトなんかには負けないんだぞつ。がおー！」

理子の言は、はたから見れば大口を叩いたように見えただろう。

だが、本人からすれば大口でもなんでもない。武偵志望とはいえ所詮は平和な国の中学生、くぐってきた修羅場が違う。そんな連中に負けるはずがなかった。

だからそれは至極当然の返答だった。恥じることない、遠慮などしない、理子の本心だった。

理子は、さらに続ける。

「実際、君で4人目だもん。みんなすぐに負けちゃうからちよつとつまんなかったかなー？」

ここに来るまでの3人の受験生たちを理子は脳内に浮かべる。が、総括して『弱い』という端的な酷評に落ち着いた。むろん一般的な見地から見れば彼らは弱いと一概に断じることとはできなかったが、理子からしてみればお話にならないレベルだった。

(さて、君はどんなものなのかな?)

少しは歯ごたえがあるかと期待して、理子は口元を薄く歪める。それはまるで、ハンターが獲物を見つけて舌なめずりしているかのようであった。

そんな理子に、鍊は軽薄に冗談を飛ばす。

「おー怖え。そんだけ強いんなら、戦^やりたくねえなあ。見逃してくんね?」

「ブツブー! これは強制イベントだから、スキップ不可なのです!」

理子もまた簡単に返しながら、次いで、

「でも、レンレン理子とお喋りしてくれたからハンデくらいならあげてもいいよ」

と、遊び混じりの提案を鍊にした。

いぶかしがる彼に向け、理子は構えを取る。彼女が得意とする格闘戦法、中国拳法の型を。

そして、「行くよ?」と告げた次の瞬間、

理子は一足飛びで鍊に掌底を放った。

「ぐ……ッ!」

呻きながらも、鍊はしつかりと反応してきた。両腕^{クロスマーンプロック}を交差して防御によって、理子の攻撃は弾かれる。

(ヒュウ。やるう〜)

理子はアタックチャンスを潰されたことをしつかり認識し、一旦距離を取り、

「おーすごいぞレンレン！ よく防げたね？」

と、面白そうに笑いながら錬を賞賛した。

これはお世辞ではなかった。正直理子としては今ので決まってもおかしくないと思っていたのだが、腐っても中等部最強ということか。

「……知り合いに1人、使い手がいてな。活歩……だっけか？」

「だーいせーいカーい！」

自らの技が看破されたことに焦ることもなく、理子は変わらぬ爛漫さで肯定した。

しかしその胸中には、一つの疑問が浮かんできていた。

（今の、いくら知ってたからって、それだけで対応できるようなものじゃないんだけどなあ。わっかんないなー、レンレンって強いのか？ 弱いのか？）

いまいち安定しない錬の實力に、理子の心証がゆれる。彼をどう位置づけすべきか、定まらない。

しかし、一方でどこか楽しくなりはじめてもいた。

理子にとってこの試験は茶番もいところである。例えるならば、幼稚園のお遊戯会に混ぜられた大人の心境。これで辟易するなという方が無理だ。

が、ここにきて少しは骨のありそうな奴に会った。退屈のなかに飛び込んできた玩具。理子は錬をそんな風に思い始めていた。

もし、理子が錬よりも先に同じくビル内にいるとある受験生に出逢つていればまた違った展開になったのだろうか、これは現実だ。
IFは関係ない。

そして、現実であるということは、絶えず状況は進むということだ。理子が錬の實力を疑問視している間に、彼は一手を放っていた。

錬の手が制服に伸びる。それを視認した理子もまた、拳銃を取り出そうと動く。が、それよりも一刹那早く、錬は何かを掴み出し、それをコンクリートの地面へと投げ落とした。

そして広がる白煙。理子はすぐにその正体を発煙弾だと見抜き、

「うえ!? レンレン躊躇無く発煙弾使ってきた!? ちよ、空気読もう

よ！ 今バトルパート突入の雰囲気だったよ?!」

と、口調だけはおちやらかしたままで錬を非難する。

が、警戒は怠らない。これが逃走ではなく奇襲のための煙幕である可能性は十二分にあった。

しかし予想に反して何事もなく、やがて煙は晴れていった。発煙弾は確かに展開速度においては確かな性能を誇っていたが、その反面煙が消失するのも早いという性質も兼ね備えていた。

そして、理子の目に映ったのは……こちらに背を向けて歩く錬の姿だった。

(え、えー……?)

理子は目を点にしつつ、ためしに声をかけてみた。すると、彼はあつさりと振り返った。いまだ、銃一つ抜かないままで。

その姿を見た理子は、なんだか彼を警戒していた自分が馬鹿らしくなってきた。やはり噂など、蓋を開ければこんなものだったのか。

「なんか、理子しらげちやった。レンレンならちよつとは相手になるかと思っただのになあー」

ぶう、と頬を膨らませながら言う理子。

錬からすれば何を勝手なことをといたところかもしれないが、理子からすればちよつとどころかある程度の期待をかけていたのだ。その心境は、確実にマイナスのものだった。

——だから理子は、終わらせることを決めた。

理子はホルスターから愛銃・ワルサーP99を抜きつつ、

「そういうことなので、レンレンにはそろそろゲームオーバーになつてもらいまーす!」

射線を錬の胸元に合わせながら、ゆっくりと彼に向かい歩いていく。

一歩ずつ。しかし、確実に。

「おやすみ、レンレン」

これでとどめだというように、理子は言った。その口調には、勝利の確信がにじんでいた。

そして、理子は引き金にかけた指に、力を込めた。

その力が臨界点に達し、トリガープルを迎える——その、直前。
錬の口元が、小さく弧を描いた。

(笑っ、た……?)

絶体絶命の中ふいに見せた有明錬の微笑。それを理子はいぶかしんだ。いぶかしんでしまった。

そしてそれは決定的な隙を生み出す。

錬の意味深な笑みに理子が疑問を抱き。

それが解消するよりも早く、錬は大きく地を蹴り、後退する。

そして、峰理子を倒す策が完成した。

ピンツ、と足元で音が鳴り。

直後、理子の両足を何かが拘束した。

(なんっ……!?)

突如の事態に峰理子の思考が一瞬止まりかける。が、すぐに復帰させ、理子の脳細胞が与えられた情報から何かの正体を看破する。

答えは、ワイヤー。

武偵養成校の学生ならばほとんどが装備している、ベルト内蔵型のワイヤーが理子の両足首を縛る犯人だった。

その刹那、理子は全てを理解した。

錬が発煙弾を投げ、視界が煙ったあの時。彼はおそらく、ワイヤーのフックを地面の亀裂に引っ掛け、逃げるフリをしながら伸ばしていったのだ。その際にただ直進するだけではなく、『輪』が出来るように歩きつつ、理子が確実に弾丸を当てられるように近づかせるための距離を稼ぐ。そしてまんまと近寄ってきた理子の立ち位置が『輪』に重なった瞬間、錬が大きくバックステップを取ったことで、『輪』は一瞬にしてその面積を縮める。そして、『輪』は理子の脚を捕らえる足枷へと変貌を遂げたのだ。

突然のことに理子は大きくバランスを崩す。思わぬ反撃を喰らったからか、さきほどの驚愕が抜けきれていないのか、珍しく理子はそれになんの対処も出来ないまま。

ゴツツツツ！ と、勢いよく地面にキスするハメになった。

「うきゅ〜……」

理子は、強者だ。

だが、年齢的には中学出たての少女でもある。

そんな彼女が頭部を襲った強烈な一撃（？）に耐えられるかと言え
ば……まあ、答えは見ての通りであった。

* * *

「ん……」

錬が4階を去って10分ほど経過したころ、峰理子の意識は浮上し
た。

初めに感じたのは額にへばりつくような鈍痛。ズキズキと蝕む痛
みに一瞬顔を歪めて理子は身を起こした。

「あー……たんこぶになってるよねえ、これ」

ぼんやりとした声色でそんなことを呟きつつ、理子は現状を認識す
る。両足には依然、ワイヤーが巻きついている。ペタンと下ろした臀
部からは、コンクリートの無機質な冷たさが伝わってきた。

だが、そんなものはどうでもよくて。結局、今の理子の状態は一言
で言い表せる。

敗北した。

端的に言えば、それだけだった。

「ちよーっと、舐めてたかなあ。あれが『東中最強』か……」

脳裏に浮かぶのは、一つの顔。

有明錬。

『東中最強の男』。

油断がなかった、とは言わない。前述していた通り、理子にとって
この試験の参加者など雑魚も雑魚、敗北など埒外で苦戦すらも想定し
ていなかった。

だから足元をすくわれた、と言い張ることはできる。この負けはた
だの気の緩みからきたもので実力的には勝っていたと、遊んでいたら
出し抜かれただけなのだ、そう言い切れることもできる。

実際この戦いを見ているものがいたならば、納得してくれるだろ
う。終始ペースを握っていたのは理子だったと証言してくれるだろ
う。

だけど。

「遊んでたのは、果たしてどっちだったのかなー……?」

当の本人が、それをどこかで否定していた。

——謎がある。

思えば錬は一度も自分に対して攻撃してこなかった。どころか、武器を抜きさえしなかった。蓋を開けてみれば、彼女があしらわれていただけだった。

おまけに、一貫して見せていたあのおどけたような彼の言動。戦闘の場にそぐわない態度。

あれも、ただ遊んでいただけだったとしたら——?

だとすれば、有明錬はその実力の一端さえ露にしていけないことになる。

銃撃も、体術も、武装すらも理子は見ることさえ叶っていないのではないか?

仮に、ここが命がけの戦場で。有明錬が峰理子の敵で。そして彼が本気で戦ったならば。

自分は果たして、生きて逃げ帰ることができるのだろうか。

(……目標がそれな時点で、もう敗北を認めてるよねえ)

困ったように苦笑して、理子は——否。

世界的犯罪集団『イ・ウー』。

その構成員、『理子・峰・リュパン4世』は小さく、己を下した男の名を呟いた。

* * *

峰理子が誰にも聞こえぬ呟きを零した、その頃。

「これで8人目か」

12階で、一人の少年が拳銃——ベレッタM92F——を静かにホルスターに戻した。

辺りには、硝煙の臭いが漂っている。それはすなわちつい先ほどまで戦闘があったことを意味する。

その証拠に、少年の足元には敗北者たる男子生徒が一人気絶して横たわっていた。

ちなみに、これで少年が撃破あるいは捕縛した(ちなみに『撃破』が男子、『捕縛』が女子である。偶然ではない)人数は述べ8人に及ぶ。『内訳』は、受験生が5人、そして教師が3人である。

「まあ、さすがにモニタリングだけで全員の様子を見ることはできないだろうしな。監視役はある意味当然か。……というか、あれは倒してよかったのか? 向こうから仕掛けてきたんだから、問題ないとは思うんだが……」

少年の推測は真実を射止めていた。今回の試験会場は14階建ての廃ビル。当然試験状況を見るために至る所に監視カメラが設置されてはいたが、さすがにそれだけで全域をカバーできるわけではない。

そこで学園側が取った対応策が5名の教師たちによる、人間を用いた監視だった。カメラが映らず、なおかつ動きがあつた受験生に貼り付け逐次採点をしていくわけである。

が、ここは武偵校。さらにその中でも悪名轟く強襲科。それで終わるわけがなかった。

なんと、教師陣には受験生に対する攻撃許可が出ていた。なんでも、想定外の事態による危機管理能力を試す、という名目で。まあ、実態はただ監視するだけの役割を退屈に感じた試験官たちの暴走なのだ。

で、彼らはそれを行動に移したわけなのだが、相手が悪かった。その相手というのが、今ぶつぶつと悩んでいる少年なのだ。

一人目の教師がしかけた強襲をなんなく撃退した彼は、そこから逆襲を始めた。受験生を倒すついでに発見した教師たちをいぶり出し、沈めていった。

こうして誰も予想しなかった『試験官狩り』を続ける少年は、ふと思いついたように、
「そういうえば、有明の方はどうなったかな。生き残つてるといいんだが」

そう言って、次なる獲物を求めて歩き始めた。

——激突は、近い。

5. Examination ④

理子が勝手に自爆(?)した後。

ベルトのワイヤーが伸びていることに気づいた俺は、ダガーナイフでそれを切断し、上階へと上がるため、輝が走った階段を上っていた。そこには俺にしては珍しく(自分で言っていて悲しくなるが)、きちんとした理由がある。

繰り返しになるが、このビルは14階建てだ。ということは、普通に考えれば1階につきおよそ1人の受験生が配置されていると考えるのが、まあ妥当じゃねえだろうか。

ここで問題になってくるのが、俺の初期位置と理子の撃破数だ。4階からスタートした俺のところまでやってきた理子は、その時点で3人倒していた。理子が俺の初期位置よりも上の階からやってきたのならばなんら問題ねえんだが、これが下からとなると順当にいけば全員が倒されちまってるだろうな(さつき言ったように外付け階段もあるので確定的ではないけど)。

となると、今更下に下りたところで待っているのは理子に狩られた獲物のみだ。それじゃあ、全く意味がねえ。

だからこそ、目指すは上階。当初の予定どおり、打って出ることにしたのだ。

常日頃から自分は凡人だと思っている俺がここまで積極的に動くのは、やっぱり理子が関係している。現在俺が知ってる脱落者は、理子を入れて4人。思っていたよりペースが早え。このままいけば無撃破も十分ありえた。

が、さすがにそれはまずい。評価的なものもそうだが、なによりも「二人も倒せなかったなんて知られたら、あいつらになにされるかわかんねえんだよな……」

俺は、階段を昇りつつ小さく呟く。

あいつらってのは、俺の中学時代の最たる仲間、東京武偵高等部が誇る『10』メンバーのこった。まあ、正確には俺もそのメンバーの一人(ちなみに知らない間にリーダー的ポジションに祭り上げられ

ていた。なぜだ）だから、俺を除く9人だが。

あいつらはどうも、学園十傑というその肩書きを誇りに思っている節がある。そんな連中に仮にも名を連ねる俺が、入試で誰にも勝てなかったと知られればどうなるか。火を見るより明らかだ。

かつて自分の窮地を幾度となく救ってくれた仲間の力が、そのまま今度はこちらに矛先を変える場面を、俺は少し想像してみた。

……おかしいな、冬でもないのに体中が震えてきたよ。

まあ、それはともかく、だ。

今、俺の脳裏には一つの疑問が浮かんでいた。

「しっかし……なんだって理子のやつ、いきなりぶっ倒れたんだろうな？ 何が原因だ？」

そう。それがさっぱりわからなかった。

うんうんと唸りつつ、着実に上階へと向かう俺。

そして刹那、俺の頭脳を電流が駆け抜けた！

わかった……わかったぞ。

理子は――

「ドジッ娘ってやつだったのか……！」

* * *

俺がそんな風に理子戦の分析をしているうちに、気づけば5階へと到達していた。

といっても、景色的にはあまり代わり映えがしない。相変わらず薄暗い室内、変わった事といえば内装がいくつか変化していることだろうか。いや、よく見りや階段の位置も変わってら。

そりやま、全階が同じ造りつてのはねえだろうし、なによりそんなの戦闘訓練用としちゃ不適格だろうしな。

と、適当に評価してから、俺は今度はしっかりと隠れながら5階の探索を始める。

忍び歩きにより自分の気配を消し、反対に相手の足音を探る。

とりあえず人の気配はねえが……気は抜けねえな。

今度は理子戦の二の舞にならないように、あらかじめグロックを右手に握り締めながら俺は進む。

ふー。どうやら、危険はねえようだな。もしかして、この階には誰もいねえのか？

そんなことを考えつつ、俺の足が曲がり角に差し掛かったときだった。

突然、足元に違和感が生まれた。

「うおっ!」

ま、また亀裂に脚を取られたのか!? バカですか俺は!?

慣性の法則により、前進のために使われていたエネルギーはその方向性を変えて、全力で俺の転倒を支援していた。

やばい、と思う暇もあればこそ。

重力に従い、グラリと前のめりに倒れていく体。このままだと俺はまた鼻血を出す羽目になるだろう。

しかし舐めるなよ、人は成長する生き物だ!

このまま顔面強打^{B A D E N D}を迎えるほど俺の学習能力は麻痺しちやいない。

倒れるならば、受身を取ればいいじゃない。

咄嗟に閃いたアイデアに飛びついた俺は、グロックを持っていない左手を前に突き出した。

そして掌に伝わる、鈍い感触。

「……………」

鈍い感触? え、なんで? 普通そこはコンクリートの硬い感触じゃね? というかそもそも俺、倒れてないんだが。

「なんだ?」

とりあえず、顔を上げてみる。

すると俺の目に映ったのは、いつのまにか俺の左手が胸のあたりに当たっている男子生徒の姿。多分、受験生だろう。

……………つて、敵じゃん!?

予想だにしなかった形の遭遇に俺の頭が一瞬真っ白になった瞬間。グラリ、とそいつは後ろに倒れ始めた——つて、あぶねっ。

「うわっ」と

慌てて体勢を立てなおし、俺は諸共こけることをなんとか回避し

た。

そんな俺の前で、男子生徒はついに床に倒れ伏した。起きあがってこないところを見るに、どうも気を失っているらしい。

あー……これ、十中八九俺のせいだよなあ……。多分こいつ、こけそうになった俺を受け止めてくれようとしたんだろう。でも俺が左手出してたせいで、突き飛ばしちまったんだな。

……にしちゃあ、倒れるまでにタイムラグがあった気がしたけど。しかし、なんだこれは。後味悪すぎるぞ。すごく親切な人だったのに、俺のせいで気絶させてしまうとは。恩を仇で返すとはこのことだ。時雨に殺されるぞ……。

と、とりあえず謝っておこう。

「悪いな」

う、うわー……。

我ながら愛想の欠片もない、そつけない謝罪だな、おい。これ、謝る気ゼロに聞こえちまうんじゃないかねえか……？

まあ、この人は気絶してるから聞こえねえし、他に誰が聞いてるわけでもねえんだから問題ないっちゃないんだが。

せめて心の中でだけでも全力で謝ろう。本当にすいませんでした、そしてありがとうございます。

試験後きちんと詫びを入れることに決めて、俺はその場を後にする。これが学校生活における事故だったなら、アシビュラス救護科に一報ぐらい入れるんだが、生憎と今は試験中。おまけに後々事実関係が明らかになれば、この出来事もアクシデント扱いになって、結局俺の撃破数は増えないだろう。

つまり実質現状の俺はまだ、無撃破状態が継続中。余計な気を回している余裕はなかった。

というわけで。

若干の罪悪感を抱えながら、俺はさらに歩を進めていくのだった。

「……どうせなら女の子がよかったな」

そんな本音をぼそっと呟きながら。

* * *

有明鍊の予想は当たっていた。

おそらく1階につきおよそ1人が配置されているだろう、という予想である。

それはここ、5階フロアにおいても例外ではなく、この階を初期位置に設定された受験者の少年が1人いた。

出身中学において平均的な成績を保持していた彼は、いわゆる教科書どおりの動きを得意とする武偵だった。

それはアドリブに対して弱い、という側面を持つのだが、そこはこれからの彼の課題としてひとまずおいておく。今重要なのは、彼がこの試験においても従来の性質を發揮し、セオリーどおりの行動を取っていたということだ。

(仕掛けは上々。後は仕上げをご覧じろつてね。——それじゃあ、攻めるか)

少年はまず試験開始から、早々に罠の作成に励んでいた。もちろん強襲科志望なのでそれは保険のようなものだったが、これが意外と時間がかかる作業だった。

罠を仕掛け終わったのが、つい先ほど(大体試験開始から10分ほど経過した頃である)。そこから進撃を開始することに決めた彼は、まず初期位置である5階から、下の階へと降りていくことにした。上を目指し続けて無駄に多く戦闘するよりも、戦うポーズをおそらくは監視しているだろう試験官に見せつつ、長く生き残ることに主眼をおいていたからである。

(おっと。抜き足スニーキングは基本だよね)

初期位置であろうとこれだけ時間が経てば、すでに上下の階から侵入しているものがあるかもしれない。そう考えた彼は拳銃を構えつつ抜き足で下り階段を目指した。

それは確かに正しい選択だった。まさしく教科書どおり、武偵なら十中八九そうするだろう。

だが、それは無駄に終わる。

この時、5階にいたのは少年だけではなかった。

有明鍊。

少年に引導を渡す存在が、すでにここにいた。

(足音は聞こえない……誰もいないのか?)

そして少年は、武偵とはいえまだ卵であった。自分が足音を消しているならば、相手も消しているかもしれない。その可能性に思い至らなかった。たとえ思い至っていたとしても、彼には忍び足で接近してくる相手の察知などまだ出来なかったのだが。

だから、彼はその存在に気づくのが遅れた。

致命的なほどに。

(よし、この角を曲がればもう階段——)

そう思った、次の瞬間。

彼の鳩尾みぞおちを、槍のような掌底が貫いた。

「い、ふ……ッ!?!」

突然の一撃に苦悶の声を上げる少年。全く予想していなかった攻撃が、彼の肺から空気を排出させ、意識を揺らす。

(よ、まれた——!?! 足音を消していたのに!?!)

想定の外。遭遇することまではあるだろうとは思っていたが、まさかこんな問答無用の先制攻撃を喰らうとは思わなかった。

そしてその事実が、この襲撃者が相当の実力者であることを如実に語っていた。

少なくとも彼では絶対に勝てないと思うほどに。

酸素不足によって視界のブラックアウトが始まる。さらに訪れる浮遊感。少年は自身の体が背後に向かって傾きつつあることを知った。

次いで、背中に衝撃。それは少年が倒れたことの証左だった。

ちかちかかと暗闇と天井が入れ替わり瞳に映る。彼が意識を保てるのもあと僅かだろう。

そんな少年の耳に、小さな声が届く。

「悪いな」

それは、勝者から敗者への宣告だった。

口調からはつきりと感じる、あざけりの気配。それは、あまりにも開いている実力差を指しているのか。

(く、そ……クソ……！ チクシヨウ……！)

胸を、悔しさが満ちていく。敵の姿すら見ることができずに敗北してしまうことに、情けなさを感じる。

嫌だ、と思う。

このまま終わりたくない、と思う。

しかし世界は少年に甘さを見せず。

ここで少年の記憶は一度、途切れることになる。

* * *

「ふむ……いい手際だ」

誰にとつての幸か不幸か、先の戦闘を目撃していた者がいた。

その者は今現在、尾行という形で有明錬の監視をしていた。一定の距離を保ちながら、しかし決して見失わず、彼は錬を追いかけ続ける。

一見して、一般人らしからぬ男だった。

迷彩ジャケットに銃弾ベルトを装備した、髭面の男。どこの軍人だ
とつっこまれそうな趣だが、しかし『プロ』という意味ではあながち
的外れではない。

男の名は、あまぎきこうま天崎孔真。

マスターズ東京武偵高教務科に籍を置く、強襲科担当の教師である。

そしてなぜその天崎がここにいるかといえば、それは彼が監視役として配置された5人の試験官の一人だからである。

天崎は当初、峰理子の監視についていた。これは、試験前に連絡を取っていた蘭豹からの指示だ。試験前に既に理子の実力がある程度見抜いていたのか、それとも別の理由があるのかは定かではないが、とにかくその命を受けた天崎は理子をマークしていた。

実際のところ、それは正解であった。この年代にしては驚異的な実力を誇る（それでもまだ全力は出していないのだが）理子は、開始5分という短時間で3人の受験生を下した。彼女に張り付いていたことで、さらに3名のある程度のデータが取れたのである（理子が本気ならばそんな暇もなく倒されていただろうが）。

だから彼女が4人目と遭遇したとき、天崎は理子の勝利を疑っていなかった。

が、終わってみれば、その勝負は4人目——有明鍊の圧勝だった。この結果は天崎に自戒を促す。勝手にわかっていた気になっていた彼は、己の甘さを恥じた。

そのようなプロセスを通して、天崎は監視対象を鍊へと変更した。この時点で蘭豹と連絡を取り、残る受験生が5人という報告を受けていた（これは驚くべきペースである）。そこまで人数が落ち込んでいゝるならば、このまま鍊に付いていた方がいいと天崎は判断したのだ。ただ。

報告の中で聞いた事柄が、天崎の興味を引いていたので、そちらに行きたい気持ちも多分にあつたのだが。

『試験官狩り』、ね。峰、有明、『試験官狩り』。今年は豊作だな、おい。できるなら、そいつの方も見てみたいんだが……

とはいえ、試験官は遊びではない。自分の仕事を放り出すほど、天崎は無責任でも恥知らずでもなかった。

（それに、同じ受験生同士、有明とはぶつかることになるだろう。焦る必要はない、か）

と、結論づけ、天崎は『試験官狩り』に対象を移す考えを却下した。この天崎の結論が、後に彼自身を追い詰めることになるのだが、それを知るものはただの一人もいなかった。

* * *

「……暇だ」

現状を考えればとても出てこないような台詞をこぼしつつ、俺は6階へと来ていた。

で、なんで暇かと言えば……会わないんだ、誰にも。

まあ、14階建てだしても大分人数は減ってるだろうしみんな慎重になつてるだろうから、会わないのは仕方ないのかもしれないねえけど。

……いや、まあわかつてるよ？ そんなこと言ってる場合じゃねえってことは。

ただなー、なんつーか、そろそろ集中力が切れつつあるんだよな。

ドジッ娘りこりん（俺命名）とカインドボーイA君（俺命名）との戦闘（？）を通したことによって、なんか緊迫した空気が吹き飛んで

しまったというかなんというか。

今度こそ転ばないように気をつけつつ、薄暗いビル内を歩き回る。一人で。

……気が滅入りそうだ。

うーん、どうすつかな？ しりとりでもするか？

……一人で？

いやいやそれはないだろ、と即座に却下。つまらない上に、考えててまったく楽しくない。

そうだなあ、じゃあ……久々に『漫画台詞遊び』でもするかな。

ふと思いついたのは、そんな考えだった。

『漫画台詞遊び』とは、中学時代に漫画好きの連中とやった遊びで、互いになんか漫画に出てきそうなかつこいい台詞を言い合うという、今考えれば中二チックかつ実にくだらねないゲームである。

……ホントにくだらねえな、オイ。

が、まあ……漫画は嫌いじゃないし、気はまぎれそうだ。今、ポンと思いついたからって理由もあるが。

よし。じゃあ、さっそくやってみよう。

んー、そうだな。ただ漠然と考えてもパツと出てこないし、今のシチュエーションに合ったやつで考えてみるとしよう。

キーワードとしては、廃墟、隠密行動、戦闘といったところか。

そうだな、例えばこんなのはどうだ？

「いつまで隠れてるつもりだ？ さっさと出てこいよ、そこにいるのはわかってんだ。そろそろ闘やろうぜ」

——あ、やべ、口に出しちゃった。

これは恥ずかしい。しかも、台詞考えるのに夢中で立ち止まっちゃってる。

嫌だなあ、こんなの誰かに見られたら。

とか考えつつ、若干頬に熱を感じた時、

「——ほう。俺に気づいていたか。やはりお前は、今年の受験生じやかなりの上玉らしいな」

背後から、そんな返事が返ってきた。低く重圧感のある、威圧的な

声である。

……………え!?

慌てて後ろを向けば、そこには迷彩ジャケットに銃弾ベルトを装備した髭面のおっさん——どうみても中学生には見えない男が立っていた。

えーつと……どちらさま？

* * *

「いつまで隠れてるつもりだ？ さっさと出てこいよ、そこにいるのはわかってんだ。そろそろ闘やろうぜ」

と、監視対象である有明鍊に声をかけられ、天崎はご指名どおりに物陰から姿を現した。

「——ほう。俺に気づいていたか。やはりお前は、今年の受験生じやかなりの上玉らしいな」

自分の存在を捕捉できていた賞賛として、ほめ言葉も添えておく。

その声に、鍊は振り返った。

(こうしてみれば、いかにも普通の少年といった感じなんだがな……) 中肉中背のいたって平均的な体格。適当なところでぎんばらに切られた黒髪。わずか双眸がギラリとした輝きを放っていたが、特段どこにでもいる少年に見えた。

見えた、だけが。

もちろんその実がまったく違うことを、すでに天崎は知っている。なぜなら——彼は、見ていたからだ。鍊たち、受験生の戦いを。

4階、峰理子戦における非武力による鎮圧。

5階、打って変わったような瞬殺。

天崎はここまでの戦闘で、有明鍊を有望な人材だと認識している。が、同時に少々の危険性も感じていた。

天崎にそう思わせるに至った因子は、6階進入直後の「暇だ」という鍊の台詞だ。

他人の内心を真の意味で理解することなどできはしないが、それでも天崎は鍊の口調からある程度の心情を掴み取っていた。

あれはまさしく、獲物がいないことへの不満そのものだった。

あんな戦闘では足りないよ、そういう獰猛性の顕れだった。

武偵という仕事柄を考えれば、それは珍しいことではない。遺憾なことではあるが、武偵になることで手に入る『直接的な力』を目的に、この道に足を踏み入れる人間は少なくないのだ。

問題は、錬が強力な戦闘能力を持つていたことだった。

（そういう奴は、力に飲み込まれやすい。武偵から犯罪者に転向するケースはままある。……へし折るならば、今のうちだな）

挑戦させ、屈服させ、そして更正させる。荒っぽいやり方ではあるが、効果的なのもまた事実だった。

ただ。

（俺に、できるか？）

天崎には、逡巡があった。

先ほどの錬の台詞から察するに、おそらく天崎の存在はとうに察知されていたらしい。それでもなおなんの反応も取らなかったのは、試験という最優先目標があったからだろう。

だが、いつまで経つても出てこない敵に痺れを切らした錬が、こうして今天崎に勝負をしかけた。構図としてはこんなところだろう。

だとすれば。

泳がされていたのは、こちらの方だったということになる。

——脳裏に、『試験官狩り』の名がよぎる。

なまじ、この試験だけでも前例が出来てしまったことで、天崎は錬にも同等の実力があるのではと疑った。

ならば、天崎孔真では、有明錬には勝てないかもしれない。

それでも。

（子供の道を正してやるのは、大人の仕事だ。教師も生徒も、強いも弱いもない。ずっと昔から、そう決まってるんだ）

天崎孔真は、有明錬には引かない。

ただそれだけの感情にしたがって動く天崎は、己に覚悟を決めるように薄く笑った。

* * *

こ、怖えーなにあのおっさん。なんか知らんが笑ってるよ。変態か

?

思わぬ事態に内心の動揺が半端じゃない。心の内を伝う冷や汗を感じながら、とりあえず俺はおっさんの素性を尋ねてみた。

「あんた、一体誰だ？」

「ほう。峰のときもそうだったが、お前はこれから戦う相手にわざわざ名を訊くのか。……いや、これは余裕、ということか？ まあ、いい。俺の名前は天崎。天崎孔真だ」

「……………」

「ごめん、なに言ってるのかわかんない。

俺、なんで受験生じゃないやつがここにいいのか訊いたつもりだったんだが……。

ひよつとして、あれか。変質者なのだろうか。どこかの戦闘狂で、この試験に目をつけ潜り込んできたとかそういう設定ですか？ 確かに、ここならいろんな奴を撃ち放題ではあるんだが。

だが、そうだとしたら問題どころの騒ぎじゃない。責任問題だぞ、これ。

でもなあ、それならそれで蘭豹のやつは何やってんだよ。俺たちを監視してるなら、なぜこいつを捕らえない？

まさか、容認しているのか？ これも俺たちの実力を測るために、あえて泳がせているのか。

様々な考えが頭を巡る中、そこで変質者(仮)が右腰に手を伸ばす。「俺としても、もう少しお前と話してみたいんだが、悪いが言葉よりもこつちで語る方が得意だな。お前もそうだろう?」

は？ なにが？

という俺の疑問に答えるように変質者を取り出したのは1丁の拳銃——げっ、S&W PC356か!?

この銃、もとは競技用の色が強かったんだが、武偵全盛期のこの時代じゃ、普通に実践用に使われている。しかもその弾丸は9mmパラベラムじゃなく、356TSWとかいうやつで、弾薬は9mmと同程度のくせに、357マグナムクラスのパワーが出るらしい。

そんなもんを突然向けられた俺は、舌打ちしながらも柱の陰に飛び

込む。

直後、銃声が轟き、さつきまで俺がいた床が爆ぜた。

げー！ あいつマジで発砲しやがったよ!? おまけになんつー威力だよバカつたれ！

「クソが！」

悪態を付きつつ、俺はグロツクの切り替えレバーをフルオートに変える。どうせセミで撃ったってあたりやしねえんだ。

あんによろう、もう怒ったぞ。そっちがその気なら、こっちも容赦しねえぞ。どうせ防弾チョッキは着てるみたいだしな。捕まえて教科にぶち込んでやる。ついでに蘭豹も問い詰めてやろうか。……いや、そっちはやめとこう。

ともかくまずは勝つてからだ、俺は柱から半身を出し、

「おらッ！」

思いっきりトリガーを引く。

ガガガガガガッ！ とすさまじいばかりの反動が俺の右手を襲った。

そしてその結果として変質者（仮）を襲うのは、秒間20発以上の速度で飛び出す弾丸の群れだ。

見てから避けたんじゃ、絶対に避けきれない。

が、俺の反撃は読まれていたのか、変質者（仮）はすばやく俺同様に柱の陰に身を引つ込ませた。

クソ、やつぱはブレるなフルオートは。大まかにしかわからなかったが、かなり散らばって飛んでったぞ。まあ、俺の腕が悪いってのもあるんだろうが。

「こんなことしてる場合じゃねえんだが……そうも言ってもらえねえか」

イレギュラーな事態にため息をつき、俺は戦闘を決意する。

さて、と……どう攻めたもんかな、こりや。

* * *

（おいおい……大人しいガキじゃないとは思ってたが、まさか『9条破り』をこうもやすやすとやってくるか。まあ、防弾装備を見越した上

でだろうが……)

天崎は柱に背を預け、反撃がこないことを確かめつつ、先ほどの連射を回想する。

狙われたのは、心臓、ノド、ついでとばかりに拳銃。拳銃は武装解除を狙ったことだろうからよしとしても、前2つは非防弾装備クリティカルバレットならば相手を死に至らしめていた。

それは武偵法9条——『武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない』という法律を明らかに違反する行為だ。

(思った以上の問題児だな、これは。技術のわりに狙いがエグい。何かワケアリの過去でもあるのか……?)

今考えることではないと思いつつも、天崎は錬の過去に潜んでいるかもしれない『闇』に思いを馳せる。

それが間違いであることなど知らないままで。

* * *

マズイな……千日手に入っちゃまった。

互いに仕掛けず膠着した現状に、俺はマガジンを入れ替えながら軽くため息をついた。

向こうは、俺のフルオート射撃を。

そしてこっちは変質者(仮)の大威力の弾丸を。

それぞれ警戒していることで、結果的にどちらも攻めることができなくなっていた。

本来ならば、こう着状態はそこまで悪いことでもないんだが……、「つつてもそういうわけにもいかねえんだよな……」

そう。今回ばかりはそうはいかなかった。

なにせ、あいつと違って俺は試験の最中だ。明確なタイムアップがある以上、ここで手をこまねいていれば、結局は撃破数0のまま終わってしまう。

それは、もはやこの試験における最悪の事態といえる(『10』ファイエーチからの制裁の意味で)。

となると、だ。

「しかたねえ——仕掛けるか」

決して奴には聞こえないように口の中で小さく呟き、俺は懐から閃光弾フラッシュを取り出した。

確実に決めるならば、隙をつくるしかない。そして、これはそのための武器でもあった。

意を決して俺がそれを変質者（仮）がいるであろう遮蔽物目掛けてぶん投げた——次の瞬間、

ピカッ！ と太陽が生まれたように室内の薄闇が消え去った。

さあ行け、有明鍊。今こそがチャンスだ！

俺はすぐさま柱の裏から出て、一気に閃光弾の着弾点目掛けてダッシュする。その際にダガーナイフを一本取り出し、左の逆手で構えることを忘れない。

右手に拳銃。左手に刀剣（つつてもダガーナイフだけだな）。俗に言う一剣一銃ガン・エッジってやつだ。見よう見まねだけだな。

俺の作戦は唯一つ。あのふざけた威力の拳銃が出てくる前に、接近戦で一気に決める！

「ッ！」

その時、柱の陰からあの変質者（仮）が飛び出した。見れば、両手で目を覆っている。ご丁寧に、右手には銃を握っていた。どうやら、綺麗に目潰しが決まったらしい。

ざまあみやがれ！ ぶっ潰してやる！

そして、俺が殺傷圏内イン・レンジに入ってダガーを横に振りかぶった——と全く同時、

変質者（仮）が寸分たがわず俺に銃口を向けた。

「な——ッ!?!」

しまっ……!?! 演技か!?! 閃光をくらったフリして、俺を誘い出しやがったな!?!

しかし、相手の狙いを看破できても、今更攻撃を止めるわけにはいかない。ここで下手に手を変えると、何もできないまま俺が撃たれてゲームオーバーだ。

俺が先にこいつを倒すか、あいつの銃口が先に火を吹くか。

一瞬の勝負。

俺は、祈るような気持ちでダガーナイフを真横に一閃させた——
直後、ギインツ！ という甲高い音と共に、強烈な衝撃をナイフを
通して左手に受けた。

な、なんだ？ 何が起きた？

「なん、だど？」

困惑する俺の耳朵を、変質者（仮）の驚愕に彩られた声が叩く。
そして俺は、原因不明の振動に手がしびれ、思わずダガーを取り落
としてしまう。

どういうことだ。今俺は何をされた？

疑問が頭を駆け抜ける中、変質者（仮）は心底驚いたように固まっ
ている。

なにがなんだかわからんが……反撃のチャンスはここしかない。

俺は右手に握ったグロツクを、変質者（仮）のドテツ腹目掛けて構
え、

「沈みやがれ！」

叫びとともに、発砲した。

今度は避けられることもなく、俺の拳銃から放たれた銃弾は、連続
して変質者（仮）を打ち据えた。

………ん？ 連続して？

あ。

フルオート解除するの、忘れてた。

「ぐ、ふ……え、えげつないな、お前……ッ！」

最後に、非難するような目でそんなことを言っ

——変質者（仮）は、地面にキスする羽目になった。

その様子を見届けてから、

「あー……マジで悪い。セミに切り替えるの忘れてた」

ガシヤン、とマガジンを排出しながら、俺は変質者（仮）に頭を下
げるのだった。

* * *

戦況の膠着は、天崎にとっても好ましくなかった。

この戦闘は、それはそれで重要なことではあったが、とはいえ彼は今試験官の任を負っている。このまま試験終了時間まで錬にかまけている訳にはいかなかった。

だからこそ、錬が閃光弾で事態を動かしてくれたのは、彼にとっても助けになった。もつとも、あと少し遅ければ自分も似たようなことをしただろうから、事態が動き出すことは時間の問題だったが。

天崎は、視界に閃光弾が映るやいなや、すぐさま両目を両腕で覆い被害を防いだ。もともとこうなる可能性も考えていたがゆえに、対処も早かった。

だが、これでは終わらない。

天崎はさらに、錬の策を逆手にとった。強襲する錬を油断させるべく、わざと目をくらまされたフリをした。

結果、彼は錬の意表を突き、勝利を確信する錬に銃口を向けた。

「な——ッ!?!」

錬の驚きの声を聞き、天崎は策がはまったことを悟る。

逆転に成功した天崎。彼もまた、勝利を確信した。

(騙し合いは苦手か、有明。試験官が受験生を倒すのはルール違反だが、喧嘩を売ったのはお前だ。恨むなよ……ッ!)

だからここらで眠れ、というように天崎は容赦なく錬目掛けて発砲する。

S & W PC356から、猛烈な勢いで、356TSW弾が飛び出す。9mmパラベラムよりも上を行く大威力の弾丸が、錬の胸元に打ち込まれる。

だが。

その弾丸を。

錬はダガーによる一閃で切り裂いた。

「なん、だど!?!」

驚愕。あり得ない、という感情が天崎の脳内を席卷した。

2つに分かれた1発の弾は、それぞれが見当違いの方向へ飛ぶ。

——それは後に、遠山キンジが『銃弾切り』と名づける、極限の技だった。

そして、それほどの技を使った錬は、もう用がないというようにダガーを捨て、グロツクを構え、

「沈みやがれ！」

お返しだとばかりに、フルオート射撃を天崎の腹部に見舞った。崩れ落ちる天崎。同時、彼は敗北を悟る。

(チツ……嫌な予感当たるもんだ)

負けるかもしれない。そう思った。だから負けたのかもしれない。その真偽は分からない。ただ、天崎の眼前には厳然として『負け』が横たわっていた。

(あー……しようがねえ。続きは、こいつが入学してからだな。せめて、卒業までにはこのはねつかえりをなんとかしなきゃなあ……)

倒れるときまで教師らしく。

でかい仕事ができた、と笑いながら天崎は静かに目を閉じた。

* * *

「――ふう」

変質者(仮)の意識がないことを確認した俺は、疲労を吐き出すように大きく息をついた。

いやしかし、危なかったな。なんで勝てたのかはよく分からなかったけど、それでもなんとか勝てた。

つか、結局このおっさんは誰だったんだ？ いまいちよくわかんねえんだよな。

まあ、いいか。危機は去ったんだ。後は試験が終わってから教務科にでも任せよう。

というように結論付け、俺は地面に転がったままのダガーナイフを手を取った。

陽光にかざして観察してみる。すると、刀身に亀裂が走っているのが確認できた。取り落としたときの状況からして、なにか硬いものにもぶつかったんだらうか？

しかし……あーあ、今にも折れそうになってんなあ。残念だが、これ以上は使えそうにねえな。

実質まだ一度も使ってなかったようなもんだから、これは痛い。た

だでさえ少ない近接戦用の武器が一つ無くなってしまった。

ま、過ぎてしまったことはしかたない。とにかく、先に進もう。まだ試験は終わってないんだから。

「いやまあ、ぶっちゃけもう俺としては今の戦闘で十分なほどなんだけどな」

と、若干後ろ向きなことを言いつつ、俺は気だるさが残る体を引きずって7階に上がることにした。

コツン、コツンと僅かに音を立ててしまいがちながら、階段を上る。

この階段を上る、という行為がもうすでに嫌になりつつあった。なんかさつきから、上の階に上がるたびにトラブルに遭っているような気がするんだが。

つか、これ大丈夫なのか？ もうかなりロスしてる気がするんだが。後どれくらい受験生は残ってるんだろうか。

というか、今残ってるってことは、ここまで勝ち抜いた実力者（俺のぞく）ってことだろ？ そんな連中に俺勝てるのか？

ビル内が暗いからか、それとも思うように試験が上手くいかないからか。俺の思考はどんどんとネガティブな方向に向かっていき、無意識に顔が下がっていく。

だが、現実には止まらない。そんなことを考える内に、俺の足は階段を登りきり、そして7階フロアに到達した。

おっと……もう着いたのか。顔を上げる。

そして、数人の受験生や大人が倒れている中で悠然と立ち尽くす、遠山キンジの姿が視界に映った。

「……は？」

始めに感じたのは疑問。

次いで、驚愕。

まさか……もしかして、あいつこの人数をたった1人で倒したのか？

力なく床に倒れ付し、あるいは柱に背中を預け、そして一様に動かない受験生たち。

その中心で、まるで死人しびとの山を築き上げた死神のように立ち尽くす遠山。

一見して明らかならそれは、勝者と敗者たちの光景だった。ありえない、と思った。

だが同時に、峰理子を思い出せばこんな人間がいてもおかしくないな、とどこかぼんやりとそんなことを思った。

硬直した世界。

まるで一服の絵画のように完成されたその光景は、しかし当の主演によってその静止を解かれた。

「——有明か。ここにいてるってことは、お前も何人か倒やったのか。どれだけ減った？」

こちらに気づいたらしく、遠山は俺に向き直りつつ、そんなことを訊いてきた。

俺は、ハツとしつつも、なんとか返す。

「……挨拶も無しかよ。ま、この状況じゃそれが当たり前だけどな」
できるだけ緊張を隠した俺の口調にか、遠山はわずかに口元を緩めつつ、「そうだな」と言った。

とりあえずすぐに仕掛けてはこなかったことに安堵しながら、遠山の質問にどう答えたものか考える。

どれだけ減った……か。

そう言われても、俺自体はゼロなんだが……まあ、そうだな。俺が知る脱落者の分だけ、話しておくか。

えーと、理子が3人やつて、その理子が自爆して、事故で1人減つて、まあこれはあんまり関係ないが変質者を1人倒したから……、

「受験生が5人、変質者おっさんが1人だな」

「おっさんってお前な……。やっぱりお前も教師に気づいてたんだな」

呆れたように苦笑する遠山。

その台詞の中に、俺は違和感を発見した。

教師……？ 一体、なんのことだ？

何を言っているのかいまいちわからなかったので訊きかえそうと

するも、それは遠山の続く言葉に遮られる。

「俺が倒したのが、受験生が7人、教師が4人だから……これで残るのは、俺と有明、いるとしてもあと1人か」

……なにこいつの戦績。化け物？

っていうか、「教師を倒した」ってどういうことだよ。いたのか、ここに。

じゃあ、「悪いが言葉よりもこっち（※拳銃です）で語る方が得意だな（キリッ）」とか発言するような変質者を捕まえろよ、ちゃんと。

……って、あれ？ 今何気にスルーしたけど……残ってるのがあと3人だけだった？

な、なんてこった!? てつきりまだそれなりにはいると思ってたのに!

てことは、俺が低評価を免れるためには、こいつかもう1人に勝つしかねえじゃねえか!?

できんのか、そんなこと。

今や、武装は予備弾倉無しスベアマガジンの拳銃と1本のダガーのみしかないこの状況で。

——いや。

やれるか、じゃない。

やるしかねえんだ。

それしか、俺の生き残るおしおきを逃れる道はない……!

瞳に決意を滲ませて、心には炎を燃やす。

一度両目を閉じ、開くと共に俺は切り出した。

「遠山。申し訳ねえが、こっちにもいろいろあつてな。——勝たせてもらうぜ」

それは明確な挑戦状。

俺なんかは何を言ってるのかと、心のどこかで冷静な俺がささやく。

が、今は無視だ。そんなのに構ってる場合じゃない。

「ッ! 闘るや気が。いいぜ、俺も1度お前と闘ってみたいと思つてたところだ」

——乗ってきた！

台詞と共に、遠山は拳銃——ベレッタM92Fでトントんと肩を叩いた。

あの野郎……拳銃戦アルカタを誘ってやがるのか。

アルカタ。

近接拳銃戦とも呼ばれるそれは、武偵がよく使う戦法だ。防弾制服の上からでは銃弾が貫通しないことを利用して、拳銃を一撃必殺の刺突武器ではなく衝撃を利用する打撃武器として使用する。

いわば拳銃による殴り合い。それが、アルカタだ。

それを、遠山は提案している。言葉には表さず、今ここで。

そして、その誘いに俺は——

乗った。

「じゃあ——始めんぞ！」

言って、駆け出す。戦術はさつきと同じくガン・エツジだ。

俺の言葉に反応するように、遠山もまた駆け出す。装備はベレッタのみ。

ダダンツ！ と地を蹴る音が重なる。それはまさしく、開戦を告げる号砲だった。

耳元で風が唸る。景色が視界を流れる。

俺たちは一瞬で肉薄し——鏡合わせのように、同時に発砲した。

乾いた音がまたもや重なり、しかしそれが耳に届くよりも前に、俺たちは横っ飛びをする。互いに、右に。

空気を切り裂きながら飛翔した2発の弾丸は、それぞれが元居た空間を貫いて消えていった。

お、おおう。よく避けられたな今の。ほぼ偶然ではあるんだが。

自分で自分にちよつとびっくりだ。さすがにあの地獄の1年を乗り越えたから、地力はあるのか。

わずかではあるが成長を実感し、再び俺たちは距離を詰める。

間髪を入れず、遠山は銃身を横に流すようにして弾を撃った。

「ぐっ！」

どこで撃つか読めなかった俺は、左肩に被弾した。ビリビリと金属

バットで殴られたみたいな衝撃が響く。

——が、そんなもの予想済みだ。

端から避けようなんて思っていない。そもそも、俺に近距離で銃弾を二度も避ける技術なんてない。なら、当たって砕けろで行くしかねえじゃねえか！

そして、ダメージを覚悟していたのなら、それを我慢することくらいはできる。生憎とこちとら去年は散々ボコられたんでね。

俺はさらにもう一步、足を前に踏み出す。それはつまり、中距離チャカじゃなく近距離ナイフの距離に入ったことを示していた。

——当たれッ！

左手に握ったダガーを、さっきの変質者戦のように横一文字に振るう。

ヒュンと風切り音が鳴り、しかし、ヒットはしない。遠山の軽いバックステップで避けられた。

——そこまでは予想済みだ。

まだ、俺の攻撃は終わっていない。

俺は振るった勢いを殺さず、その場で一回転するように回る。そして、丁度再び正面を向いたところで、ダガーを遠山に向かって投擲した。

おおっ、珍しく上手くいった！

刀剣による二段構えの攻撃術。これは、昔時雨に教えてもらった技だ。あいつは、確か『一閃飛刀』とか言ってたっけ。

ちなみに、名前が中二だな、と笑ったら思いつき殴られた。

それはともかく、俺はこれを一度喰らったことあるからわかる。これならさすがに遠山も意表を突かれるはず。

——そう思った俺は、非常に甘かったと言わざるを得ない。

遠山に飛来するダガーは、甲高い音と共に弾き飛んだ。

えー!! マジかよ普通に打ち落とされた!?

さらに、続く次弾で俺はグロックを弾かれた。カラカラと床を滑りながら、グロックは崩れかけた壁裏に飛んでいく。

「チッ！」

「マズイ、早く銃を取らねえと！」

俺は、拾いに行くまでのせめてもの抵抗として、足元に落ちてたコンクリート片を遠山に蹴りあてようとするも、それさえも空中で撃たれて粉々になった。

パラパラと舞う粉塵に混ざって俺の勝機も散っていった気がするの、はたして気のせいだろうか？

クソ、この薄暗さでしかも飛来するコンクリートを撃つって、どんな腕前だっつんだよ。

これは次が来るか……と警戒したんだが、なぜか追撃は来ず、俺はなんとか壁裏に滑り込みグロツクを拾い上げることができた。

荒くなつた息を落ち着かせながら、俺はなんとか逆転の目を考える。

「ハッ……ハッ……こいつは勝ち目薄いなチクシヨウ……泣きそうだ」

少し、弱音を吐きながら。

* * *

(……やっぱり有明のやつ、強いな。まだヒステリアモードだったのに、一度目の交戦で倒せなかった)

遠山キンジは、一度距離を取って物陰に身を隠しつつ、有明錬の実力を分析していた。

総合的には、キンジの方が上回っている。それは間違いない。技術面、というのなら分からないが、身体能力で言えばキンジの方が上だろう。

(ま、こっちはドーピングに近い真似やってるからな。出力じゃ一般人の限界を超えてるはずだ)

こっちが一撃入れたのに対し、向こうの攻撃は通ってない。その事実だけでも、キンジと錬の力関係は分かる。ヒステリアモードならそれは必然だ。

しかし、である。

逆に言えば一撃しか入らなかったのだ。ヒステリアモードの自分が。

その一撃にしたって、錬が覚悟して当たりに行った印象を受けた。あの二段構えのナイフ術を放つために。

それに対応することは難しくなかった、と遠山キンジは回顧する。意表はつかれたが、曲芸まがいの技ならば嫌というほど兄に見せられた。それにより耐性ができていたキンジにとって、対処はたやすかった。

が、問題は。

(ただ次に見せたあれには驚いたぜ。思わず追撃し損ねちまった)

『あれ』とはキンジが錬のグロックを弾いた後に見せられた技のことだ。

ナイフも失い、銃も手放された錬に、当然キンジは追い討ち——あるいは、とどめを撃った。

だが、あろうことか錬はその弾丸を、コンクリートを蹴り上げて防いだのである。あたかも、ナイフを撃ち落としたキンジに対する意趣返しのように。

アクション
能動ではなく受動。

曲芸度では、投擲術とは段違いの技だった。

(勝手に名づけさせてもらうなら……『銃弾封じ』ってどこか)

心の中で錬の技を命名しつつ、キンジは知らず自分がかすかに笑っていることに気づいた。

端的に言えば、この勝負——少し楽しくなってきたのだ。

これは別にキンジが戦闘狂だということを表しているわけではない。ただ、初めてだったのだ。ヒステリアモードの自分と互角に渡りあう同年代と出会ったのは。

中学時代。キンジはとある理由からヒステリアモードを多用させられていた。その過程で彼は、敗北どころか劣勢さえ味わったことはなかった。

そのころキンジを倒せたのは、自分よりもはるかにヒステリアモードを使いこなす兄だけだった。だがそれも実力が離れすぎていて、勝負とさえいえないものだった。

しかし、今。

初めてヒステリアモードのキンジと伍する相手が現れた。
しのぎを削る勝負に、どちらが勝つかわからない勝負に、キンジは
中学生の男子らしく昂揚していた。

ただ、それが遺伝子という自分の力ではないことだけが、心に影を
落としていたが。

それはつまり、通常モードの自分では、相手にならなかったという
ことに他ならないのだから。
しかし。

「それでも、全力で行くぜ有明。俺はお前に、勝ちたいからな」
キンジは、後ろめたさを押しつける。

そんなものより、負けたくないという気持ちを優先した。
武偵として。

『遠山』として。

そしてなにより——男として。

——ふと、思う。

もしかしたら……ライバルとは、こういう気持ちにさせてくれる相
手のことを言うのだろうか、と。

* * *

いやマジ強えよあいつ。勝てんのか、これ？

6階の戦闘のときのような膠着状態に辟易としつつ、俺はちらりと
右手に視線を向ける。

ついに、俺の装備はグロツクだけになっちまった。あれだけいろい
ろ持ってたのに、だ。

残された手札は少ない。

こうなりや……フルオートの弾幕作戦しかねえか？

「ちよつと卑怯な気もするけどな。ベレッタにや、確かフルオートは
付いてなかったはずだから」

頭の中で授業で習った情報を思い出し、わずかに眉を上げる。

つつても、そうも言ってられねえんだよな。俺はもう、あいつを倒
すと決めたんだ。というより、倒すしかねえんだが。

閃光弾も発煙弾も、もうない。一気に攻め込むしかねえんだ。

じゃあ——行くぞ。

「ふ——ッ！」

短く息を吐き、俺は壁裏から飛び出す——と、なんと遠山も同じタイミングで出てきやがった。

一瞬意表をつかれたが、すぐに気を取り直し、即座にフルオート射撃で弾幕を張る。

しんと静まり返っていた室内を、轟音が満たした。

だが——マジかよ。

マガジンに装填されていた全ての薬莖が地面に落ちても、遠山に銃弾が触れることはなかった。

あいつ——側転で全部避けやがった……！！

信じられないほどの立ち回りに、一瞬諦めがよぎる。

これで、こっちの武装はあと一枚だけ。

残るのは、この身体一つきり。

「お、あああああああああ！」

それでも、もう後戻りはできない。現実が進む。決して止まらな

い。

今更どこかに隠れる時間はない。

俺はグロツクをホルスターに収める時間を惜しみ、すまなく思いつ

つも床に投棄し、駆ける。

——走れ！

目標は、遠山キンジ。

今俺にできる、最後の攻撃方法——すなわちゲンコでテメエを

ぶっ倒す！

「舐めるな有明！」

遠山は側転から体勢を直す隙で俺の接敵を許しながらも、すばやく

ベレッタを構えてきた。

速い。これじゃあ、殴る前に俺が撃たれる。

しかたなしに、俺は上体を反らし、なんとかベレッタの射線から逃れようとする——はずだったんだが、勢いが付きすぎて、そのまま後ろに倒れそうになった。

ば、バカか俺は?! こんな土壇場で何こけそうになってんだ! ホントに雑魚だなチクショウ!

このまま無様に背面ダイブしてたまるかよ!

「らッ!」

俺は急いで両手を背後に伸ばし、掌が地面を捉えたと同時にバク転の要領で体勢を整えた。これぐらいは、さすがに武偵だからできる。とその後、つま先に何か当たるといったような感触がした。

「ぐッ!?!」

しかも、なぜか遠山の呻き声つき。

なんだ? 俺なんかしたか?

気になってとりあえず腰を落として構えつつ遠山に視線を向けると、彼は顎ら辺を腕でぬぐっていた。

「……やってくれるじゃねえか、有明。少し、脳が揺れた気がするぞ」
え? マジで俺のせい?

よ、よくわからんが……俺がやったのか?

なんか、向こうは完全にそう思ってるっぽいし、今更「何の話だ?」なんて訊けない雰囲気だぞ。

仕方ない。適当に合わせよう。

「お前も俺の肩に一発入れただろうが。お返しだ、バカヤロウ」

こんな感じでいいのか? 戦闘中だからか、少し言葉が荒っぽくなってしまったが。

それを聞いた遠山は、「へッ」と小さく笑って、

「お前、銃はどうした。なんで捨てたんだよ」

「ああ? 弾切れだ。ついでに予備弾倉もな。だからオメエを倒すのは、拳でっつーこった」

「ストライキング打撃技ってことか。……いいぜ、乗ってやる。俺だけ銃やらナイフやら使うのも、あとで言い訳に使われたらたまらねーしな」

「言い訳だあ?」

どういう意味ですか?

言葉に込められた意味合いが分からない俺のいぶかしがるような声には答えず、遠山は本当に拳銃をホルスターに仕舞いやがった。ハ

ンデのつもりかこの野郎。理子といい、俺はどんだけみんなから弱そうに見られてるんだ。……いやまあ、あながち否定はできねえけど。とはいえ、これは都合がいい。あいつの銃技がふざけたレベルである以上、これは勝機だ。

「……後悔すんなよ、遠山」

「しないさ。これで、対等だ」

一応あとでインネンつけられないように念を押す俺に、遠山は肯定で答えた。

それを聞いて、安心したぜ。後で体育館裏とかに呼び出されたら怖いからな。

「……………」

2人、無言で構える。

ギリギリと足に力を込め、いつでも飛び出せるようにする。そして。

——同時に、飛び出した。

* * *

再びの攻防は、まったく同じタイミングによる飛び出しから始まった。

先手は、錬。グロックによるフルオート攻撃がキンジを襲った。

(手が単純だ……なにか、狙っているのか?)

それが罠である可能性を考慮しつつ、側転で回避したキンジに拳銃を手放した錬が迫ってくる。

が、キンジは即座に反応、ベレッタを向け迎撃に移った。

「舐めるな有明！」

吼えながら、引き金を引く。だが、その時にはすでにキンジの攻撃を予想した錬が、上体反らしで銃弾を避けていた。

しかし、急回避のため勢いが付きすぎたのか、若干後ろに倒れかけている。

(もらったー！)

キンジは、内心で自分へ圧倒的な有利が傾いたことを悟る。これは、チャンスだ。

鍊はすでに銃を捨てている。この状況で一度足を止めてしまえば、確実にキンジのベレッタが鍊を仕留める。

つまり、こここそが、遠山キンジ絶好の勝機になる。

——はずだった。

「ぐッ!？」

突如、キンジの顎に痛撃が走った。

その原因は、鍊の右足。スウエーからバク転、そこに視界の外から蹴りを合わせて来たのだ。

本来なら。

ヒステリアモードの反射神経で避けることは十分可能だったろう。だが、これもまたヒステリアモードの頭が即座に答えを出す。

今のは完全に転倒しかけていた、ピンチだったはずだ。それは演技とは到底思えなかった。だからキンジはチャンスだと思ったのだ。

だが、鍊はそれを逆手に取った。

自身最大のピンチを、即座に攻撃へと繋いでみせた。

いかにヒステリアモードといえど、無敵ではない。たとえば狙撃のように予想外の攻撃までは反応できない。

奇しくも、そこを突かれてしまった。

「……やってくれるじゃねえか、有明。少し、脳が揺れた気がするぞ」
「お前も俺の肩に一発入れただろうが。お返した、バカヤロウ」

顎をぬぐうキンジに、鍊は軽口で返す。

(ああ、チクショウ……強いな、本当に。でも——俺も負けねえ)

瞳に、輝きが宿る。

これだ。このシューゲーム。勝敗の傾き。それこそが、遠山キンジの脳髓を興奮させる。

超えられない壁ではなく。超えるべき壁でもなく。

超えたい壁が、キンジの前に立ちはだかる。

負けたくない気持ちだが、勝ちたい気持ちがあふれ出す。

これで、一発ずつ入れた。ならば、次はどうするか。

答えは決まりきっている。

零れそうな笑みを抑えながら、キンジは問うた。

「お前、銃はどうした。なんで捨てたんだよ」

「ああ？ 弾切れだ。ついでに予備弾倉もな。だからオメエを倒すのは、拳でつつーこった」

「打撃技ってことか。……いいぜ、乗ってやる。俺だけ銃やらナイフやら使うのも、あとで言い訳に使われたらたまらねーしな」

「言い訳だあ？」

言外に、「するわけねえだろ」と言われた気がする。が、そんなことはわかってる。今のは、冗談みたいなものだ。

キンジがベレッタを仕舞うと、鍊が言った。

「……後悔すんなよ、遠山」

キンジも、返す。

「しないさ。これで、対等だ」

そう、対等。

真正正銘の、真剣勝負。文句なしの、決着がつく。

「……………」

声はない。否、いらぬ。

だが、わかる。手に取るように。互いの呼吸が重なっていき、飛び出す瞬間を教えてくれる。

まだ。

まだ。

まだ。

——今！

2人、全くの同時で地を蹴った。

刹那、互いの拳が交錯した——

* * *

交錯した——と思った、

ビ————ツ！

瞬間、廃ビル内に大音量の機械音が流れた。

これは、バスケットでいうところのブザービート。

つまり——試験終了の合図だ。

「…………よく、止めたな有明」

「武偵は時間厳守。そんなぐらいい、俺だつて守るさ」

互いに寸止めした拳を収めながら、俺は遠山に返した。

……いや、まあ正直言えばかなり危なかったけどな。ブザーにびつくりして止めてしまったってのもあるし。向こうはきちんと止めたのに俺だけ勢い余ってブン殴つちまったら、かなり気まずいしなあ。よく空気を読んでくれたぜ、俺の右腕。

と、若干胸をなでおろしていると、遠山が俺に顔を向け、

「引き分けだな」

「……そだな」

そう返す俺の声音は暗い。

空気を壊したくなかったし事実は一応合ってるから同意したが……引き分け、なあ。

いやあ、それはどうだろな？ 正直、ハンデとかブザーとかに助けられただけのような気がする。少なくとも銃技は俺のはるか上を行っていると思う。

しかも……遠山おまえはそりゃ引き分けでもいいだろうさ。なんせ合計で11人も倒したらしいしな。

その反面、俺は結局撃破数ゼロ。お前と引き分けなんて、とてもじゃねえけど言えない戦績なんだよ。

はあ……結構頑張ったんだけどなあ。

グッバイ、俺の人生。ハロー、おしおきタイム。

「——強襲科は」

「あん？」

若干落ち込んでいると、遠山が再び声をかけてきた。

今、ブルー入ってるから、あんまり話すような気分じゃねえんだけどな……。

「強襲科は、しよつちゆう戦闘訓練してるって話知ってるか？」

遠山が言ったことは、俺には覚えがあった。

強襲科は、それこそ戦闘専門の集団とっていい。学ぶことと強くなるのがイコールの世界。おのずと、主な授業内容は戦闘訓練になる。

「あー、まあ知ってんよ。これでも俺、東中出身だから、高校の話はよく聞くんちや聞くな」

「そうか。じゃあ続きは、そのときだな」

やたら晴れやかな顔で語る遠山に、俺ハテナ。

……続き？ なんの？

詳しい自己紹介……とかだろうか。確かに俺はまだこいつのことあんまり知らんが。でも、なんで戦闘訓練中？

激しい疑問に何も言えない俺の無言をどう受け取ったのか、遠山は構わずに「そろそろ出るか」とだけ言った。

まあ、そつちは賛成だ。いつまでもここにいでもしかたないしな。

だから俺は「おう」と返事して——遠山と2人、出口目指して階下へと下っていった。

——で、外出たらなんか蘭豹がにやにやしなから俺たちをねめつけた。「なかなかオモシロそうな新人やなア？」と、かなり不安になる一言と共に。

ちなみに。結局最後まで残ったのは、俺と遠山だけだったらしい。アンノウンだった最後の一人は、理子が仕掛けた罠にひっかかっていたとか。すげえな、あいつ。ホントにドジツ娘か？

まあ、なにはともあれ。

こうして、俺たちの試験は幕を閉じた。

2・3班の試験が終わるのも待ち、それが終わった後、俺は帰路へとつく。

結果発表は、3日後。合否とランク付けの書類が送られてくる予定になっている。まあ、俺たちエスカレーター組はランク分けだけだな。

つーか……やっぱ俺はEランクなんだろうな。結局何も出来なかったし。

ああ……死んだなあ。

近いうちに訪れるであろう未来に早くも憂鬱になりながら、俺はモノレールの中から夕陽を眺めていたのだった——

* * *

——3日後。

俺は武偵高から送られてきた1枚の書類を、穴が開くほど眺めていた。

そこには、簡潔にこう書かれていた。

『有明 錬 入学時武偵ランク——強襲科・Sランク』

「……………」

……………なんで？

6. Welcome To Next Stage

「すまない」

と、その人は僕に頭を下げた。
本当に申し訳なさそうな顔で。罪悪感でいっぱいだという顔で。
その人は、僕に謝った。

それがどうしてかわからなかったから。

僕はその人に訊いた。

「何を謝ってるの？」

と、訊いた。

だって、わからなかったから。

謝ったのがその人で。

謝られるのが僕で。

そんなのはおかしいんだってわかっていたから。

僕は子供だけだ。

謝るのは悪いことをした人だっていうことは、知っていたから。

「すまない」

だけど、その人はもう一度謝った。

それは僕の質問に対する答えじゃない。

どうしてだろう。

どうして、この人は謝るんだろう。

おかしい。

こんなのは、おかしい。

間違ってる。正しくない。

だって。

だって、本当は――

「――ぐおっ!?!」

な、なんだ!?! なにが起きた!?!

穏やかに眠っているはずの朝。

突然腹部に強烈な衝撃を受けた俺は、思わずベットから飛び起き

た。

バサリ、と未だ感じる寒さに耐えるためにかけていたタオルケットが宙を舞う。

ぐ、うう……腹が、まるで蹴られたかのような鈍い痛みを発しているぞ……。

「Good morning. 目は覚めたかな錬？」

「なんっ……は?! 時雨?!」

かけられた声に目を向けると、そこには同級生でもあり元・東京武偵高校中等部生徒会長でもある女子——鈴木時雨が立っていた。

地毛である薄い茶髪は、サイドポニー。整った目鼻立ちに翠玉色すいぎよくのカラーコンタクトが特徴的な、可愛いよりは綺麗という言葉が似合う少女だ。

身長は女子にしちや少々高めだが、出るところはちゃんと出てる。今はそのスタイルのいい身体は、東京武偵高の制服で包まれていた。

……って、俺は何を冷静に見てんだ。それよりも、なんで時雨が俺のベツト脇につつ立ってたかを考えろよ。

つか、そもそも、

「お前、どうやって侵入はいった？ 鍵はちゃんと閉めてたはずだぞ？」

「ふむ？ これはおかしなことを訊くな。なんのための開錠バンブキーだ、ピッキングしたに決まってるだろう？」

「さも当たり前前みたいに言うんじゃねええええええええええええ！」

あーもー！ 武偵ってのはどいつもこいつもデフォでこんな真似しやがる！

恐るべき理不尽さを以って侵入してきたらしい時雨に呆れつつ、俺は背伸びをしながらため息をつく。

「勘弁しろよ……。お前だけに限った話じゃねえけどな、お前らいつも勝手に入りすぎだ。父さんも母さんも朝めちやくちや早く家出るからバレてねえつつつても、立派な不法侵入だぞ？ 武偵3倍法で牢屋にブチ込まれてえのか？」

「そんなことより早く準備したまえ、錬。遅刻しても知らないぞ？」

「話聞いてくれませんかねえマジで！」

あまりにもあつさりと俺にスルーを決め、「下で朝ごはんを作ってくると言つて（俺の部屋は2階だ）部屋を出ていった時雨に一度ため息をつきながら、俺はそれでも言われたとおりに準備を始める。

ベッドから降り、欠伸を噛み殺す。それから、壁にハンガーで吊るしてあつた服に手を伸ばした。

着替えるのは、東京武偵高の防弾制服。ああ、もちろん、高等部の方だ。

校章入りのブレザー。赤というよりも焦げ茶に近い配色をしている。デザインのには、そんなに目を見張るところはねえな。中3のときも、ほぼ一緒だったし。

丈を合わせて以来一度も着ていなかった制服に、袖を通す。ただの通過儀礼にすぎないが、それでも何か『新しさ』を感じるには十分だった。

そう。

「今日から、高校生か……」

——今日は、4月7日。

東京武偵高校入学式の朝だった。

* * *

俺の家には、よく武偵中学時代の友達や後輩が無許可でちよいちよい入ってくる（つまり、紛うことなき不法侵入である）。

その内の1人が時雨だ。彼女はたまにこうやって（頼んではいねえんだが）朝飯をつくりに来てくれる。ついでに、毎日の弁当もこいつが作ってくれていた。

とまあ、これだけ聞けばなにやら甘い話を想像しそうなもんなんだがな。

ところがどっこい、これは別に時雨が俺に好意を持っている（男女の仲的意味で）とか、そんな甘酸っぱい理由からじゃない。

『報酬』なんだ、これは。

中学時代。俺は、ことあるごとにこいつにいろいろ手伝わされてきた。生徒会関連や、学園トップ10の実力を持つやつらのみに回される教師からの依頼——通称『裏任務』クエスト・リパース（後半、手伝いじゃなく俺自身

にも依頼が来るようになったが) など、それは多岐に渡った。

そして、その働きに対するこいつの報酬が、俺の胃袋を養うというものだったわけだ。

「今だに思うけどよ……生徒会とか他の雑用はともかく、『裏任務』の見返りが飯つてのはどうなんだ？ 何度か死にかけた覚えがあんだが」

「おや、これでいいと言ったのは鍊の方だったと記憶しているが？」

1階、ダイニング。

4人がけのテーブルで朝食を取りながら、俺と時雨は話していた。

食卓には、古式ゆかしい朝食が並んでいる。絶妙にだしが効いた味噌汁、ふつくらと炊き上がり真っ白に照り映えるごはん、焼き加減は完璧かつ仄かな甘みが舌を喜ばせる卵焼き。メニュー自体は実にシンプルなんだが、だからこそ、作ったやつの実力がモロに出る。

……うめえ。

本人の気分とは裏腹に、無邪気に喜ぶ俺の舌を無視しつつ、俺は苦言を呈す。

「そりやそうだが……オメエ、確か『私に出来る最高の報酬を出そう』とか言ってなかったか？」

「だからこうして、私に出来る最高の特技ほうしゆうを出しているんだろう？ それともエツチいご褒美の方がよかったかな？」

「ばっ……ざけんな！」

慌てて怒鳴る俺に、時雨はクスクスと笑って返す。

くそう、手玉に取られてんな俺。中学の時からそうだったが、こいつには舌戦で勝てる気がしない。

俺は諦めて、白旗を振る。

「つたく……もう、いいよ。今更言ってもしやあねえしな。それより、これからはもうこうやって勝手に入ってくんじゃねえぞ。明日からは男子寮に引越すんだし、お前の手伝いはもうすることもねえんだから、朝飯とか弁当はもういい」

東京武偵高の生徒は、原則入寮が義務付けられている。ただ、そんなに厳しい規則じゃないし、適当な理由の一つでも作れば簡単に無視

できるルールだ。まあ、わざわざ自分から遠くに居を構えるやつはいないので、大抵は寮暮らしを始めるんだが。

かくいう俺もその一人だ。距離的には実家（こゝろ）からでも通えないことはないんだが、別にそこまでして実家暮らしする理由もないしなあ。両親も忙しいから、家でもあんまりあわねえし。

「つれないね、錬。別に、報酬じゃなくとも、私が君にお弁当を用意する口実は作れるんだけどね」

「あん？　なんだよ、その口実って？」

「私と恋人になれば、ほら。彼女が彼氏にお昼を作るのはおかしなことじゃないだろう？」

「アホか」

一顧だにせず、俺はバツサリと切り捨てる。経験上、これがこいつの冗談つっつかからかってるだけだっことはわかってる。

時雨はやれやれとでも言いたげに肩をすくめて、

「鈍感なのかからかいすぎたのか……いずれにしても、これは厄介だな」

「？　何か言ったか？」

「いや？　それよりも……確かに錬の言うとおりかもしれないね。そろそろ君も私の慈悲を卒業する時期かもね。自炊、がんばりたまえよ？」

「わーってら」

武偵高の寮では、決められた時間に食堂で飯を食ったりしない。武偵憲章4条『武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用の事』に従って、自炊が義務づけられているのだ。

だから俺も、明日からは自炊生活が始まるわけだ。

……まあ、実は少し不安だけどな。やったことねえから。

「——つと。もうこんな時間かよ」

これからのことに若干懸念を持ち始めた俺の目が、壁にひっかかった丸時計を捉える。そろそろ出ないと、遅刻まではいかなくとも、少し遅めになりそうだ。

というわけで、俺たちはわずか急いで朝食を食べ終え、家を出て学

園島行きモノレール駅へと向かった。

* * *

これで2度目になる学園島は、もう武偵高の制服一色になっていた。

学園島についた後、時雨は友達と待ち合わせしていたらしく、俺たちはそこから別行動を取るようになった。

俺はそんな約束なんざしてなかったもので、一直線に式場を目指す。で、式場つてのは、一般^{ノルマル}校区の体育館のことだ。その後、すぐクラスごとのHRがあるから、全員そこで入学式に参加するんだ。

俺は何組になるんだろうか。何組でもいいから、なるだけ平和なクラスがいいな。……いやまあ、そもそも俺の学科がまず平和じゃないんだが。

微妙に痛くなってきたこめかみを押さえていると、

「——あれ、有明君?」

「お、本当だ。久しぶりだな、有明」

「ん?」

背後から、なにやら聞き覚えのある声で、俺の名前を誰かが呼んだ。

誰かと思っただけで見てみたら——

「おー確か……星伽に遠山か。入試以来だな」

星伽白雪と、遠山キンジ。

入学試験で一番思い出深い2人組が、防弾制服姿で並んでいた。

うーん。やっぱ、似合うやつらは似合うな、この制服。遠山のやつは普通にかっこいいし、星伽にも意外にピッタリきていた。巫女服しか知らなかったから、新鮮ではあったが。

しかし……星伽さん、スカート短すぎませんか? まあ、これは女子全員に言えることだが(装甲的にそれはいいのか?)。スタイルのいい彼女が着るとスラリとしたラインのふとももなんてなんともゲブンゲブン。

っーか、こいつらやっぱ合格^{うっか}つたのか。まあ、遠山は随分活躍したみたいだしな。星伽もがんばったんだろう、きつと。

つもる話はままあれど、再会の挨拶もそこそこに、俺たちは流れで

3人並んで体育館に向かう。立ち話してたら、遅れちまうかもしねえからな。

つと、そういやこれは言つとかねえと。

「よかつたな、お前ら。無事に合格したのか。星伽も、試験間に合ったんだろ?」

当時のことを思い出しつつ、そんなことを口に出す。

今となつちや、なつかしい思い出だよな。地図なくすわ、喧嘩に巻き込まれるわ、受験会場を間違えるわ。散々だったぜ。そういや、あの不良連中は受かつたんだろうか?

俺の質問に星伽はふわりと微笑みながら、

「うん。あの時は時間がなかつたから簡単になつちやつたけど……改めて、ありがとうございます」

「別にいいつつつたら、それは。なあ、遠山?」

「俺はなんとも言えないけどな。ただ、お前がそう言うなら、白雪もこれ以上は押し付けがましくなるから止めとけ」

「う、うん。わかつたよ、キンちゃん」

遠山にそういわれて、少しシユンとしつつも首肯する星伽。

キンちゃん、か。久々聞いたな、それ。

っーか、

「そういやお前ら、知り合いだったんか? 星伽はあだ名呼びだし、遠山は名前呼びだろ?」

「俺はそのあだ名止めろって言ってるんだけどな。俺は、子供のころに一時期、こいつの実家——星伽神社に世話になつてな。それで、こいつとは幼馴染ってわけだ」

ふーん。それがこの前偶然会つたつてのか。世の中はなんともせめえなあ。

……ん? 星伽神社?

んー、どつかで聞いたような気がするが……まあいいか。しっかし、

「ガキのころから知り合いつつても、仲いいお前ら。わざわざ一緒に登校するぐれえなんだから」

「あー……それは、だな」

? なんて口ごもるんだ?

なんとも言いがたい表情をしながら、遠山は目を逸らす。するとすかさず、星伽が割り込んできた。

「キ、キンちゃんとはさつき偶然駅で会ったの。待ち伏せとかしてないよ。うん、待ち伏せとかしてないから」

じゃあなぜ2回言う?

言葉の裏になにやら不穏な気配を感じた俺は、それでも何も言わず納得したフリをする。誰だつて竜の尾は踏みたくないのだ。

「だ、だけどあれだね、何もしてないのにバツタリ会っちゃうなんて、う、ううう運命の2人みたいだね!」

そんな俺をよそに、キヤー! という感じで両頬を手で押さえる星伽。それから「ダメだよ白雪、人がいる前でこんなこと言って、はしたないよ」とかなんとかブツブツ言い出した。

……こ、怖え。

「と、遠山。これ、星伽大丈夫なんか?」

「わ、分からん。正直、俺も少し怖い」

じゃあ大丈夫じゃねえだろうが。

……ま、まあいいか。これはキンちゃんと白雪の問題だ。俺にや関係ねえんだから。

触らぬ神に祟りなし。こいつらには、せいぜい遠いところで幸せになつてもらおう。

——ところがどっこい。実は後々俺も大いに関係してしまうことになるんだが、それはまた別の話である。

キーワードは、『三角関係』、だ。

* * *

一般校区の体育館に着いた俺たちは、入り口で受付を済ませた後、それぞれの席に腰を下ろした。

ここは強襲科の体育館とは違い、武偵高らしくない実に普遍的な造りになっている。ま、こんなところまでトンデモ施設に造る意味もないので当たり前っちゃ当たり前のことなんだが。

ステージには大きく校旗が掲げられ、館内には少しでもイメージアップを狙っているのか厳かなBGMが流れている。

少々乱雑に並べられたパイプ椅子の一つに座りながら、俺はふと中学の卒業式を思い出していた。

あそこで、俺の道は一つの区切りをつけた。突然の環境の変化に戸惑い続けた1年間、今でもよく音を上げなかったと思う。

そして今。

俺は、新たなステージの入り口に立っていた。

高校生、というステージの入り口に。

この先、一体なにが待っているのだろうか。

希望だろうか。

絶望だろうか。

それは、今の俺には決してわからない。

だからこそ、俺はこれから歩いていくんだ。進んできた道を一度だけ振り返って、新しい道を踏みしめていく。

道を、歩き終えた時。少なくとも、自分にぐらいは胸を張れるように。

そんなことを俺が思ってた。

そしていよいよ、校長である緑松武尊みどりまつただけるの挨拶が始まる、東京武偵高校入学式が幕を開けた。

「——近年、皆さんも知るように犯罪率は年々高まっています。この事態に対抗するために生み出されたのが武偵制度であり、君たちはこれからその次代を担う……」

スピーチを通して、館内へと伝わる緑松校長のスピーチ。

わかっちゃいたが……めっちゃくちや普通だな。

これは東京武偵高こだけに限った話じゃないが、武偵養成学校ってのはだいたいどこも、こういう事務的な行事は真面目にやる傾向がある。

その理由はまあ、後ろに目をやればわかる。

振り向くわけにはいかないので俺には見れないが、体育館の後方には、報道陣プレスが並んでいるはずだ。

武偵の歴史は、まだ浅い。が、武偵養成校の歴史はそれに輪をかけて浅い。

だからというか、一応世間の注目を集めているんだ。この学校は。そんな学校で入学式が行われれば、彼らがこぞって取材に来ることは自明の理といえた。

ま、だから言ってしまうはこの穏健さは、要は対外的な印象のためというわけだ。良くも悪くも注目されているおかげで、ボロが出せないんだ。だからあの卒業式のとき、時雨もマスコミが出払う式後に『カーニバル撃ち上げ』を提案したんだろうな。

もつとも、と俺は頭の中に中学時代のその他の行事を思い出しつつ、

「その代わり、校内の連中だけがやる行事の時はかなりブツとんでるけどな」

ごくごく小さな声で、俺は苦笑まじりで呟いた。

中3のころを思い出す。文化祭しかり、体育祭しかり。一般校では決して味わうことができない（そしてあんまり味わいたいとは思わない）大騒ぎだった。聞いた話じゃ、修学旅行でもいろいろあったらしい。そもそも俺が転校した日にやった『レクリエーション』からして、マトモじゃなかったしな。

しかも、これも聞いた話になるが、そういった行事は高等部から踏襲した部分が多いらしい。つまり、俺はあれをまた3セットばかり繰り返すことになる。まさに先が思いやられること山の如しだ。何言っただらうね、俺。

とまあそんな具合に若干暗澹あんたんとした気分の俺をよそに、入学式は真面目かつ楚々として進んでいく。

定番の電報やらPTAがどうか、面倒なことこの上ないプログラムをこなし、そのまま何事もなく閉式の儀を終えた。

——で、時は進み。

「A組……か」

入学式終了後、俺は体育館前に張り出されたクラス分け表を見てそう言った。

新入生たちでござった返す中、俺は自分の名前と所属クラスを確認する。どうやら、俺はA組に振り分けられたらしかった。

今年は、どうなるんだろうなあ。去年はすごかった。騒乱のオンパレードみたいなクラスだったんだよな。

せめて、命の危機がない程度ならいいのだが。

そんな思いを胸に俺は、1年A組がある一般校区B棟の一階へと入っていった。

廊下を真っ直ぐに進む。一般校区であるはずなのに、そこらの壁には弾痕やら、切り傷がついていた。ああ、懐かしいなこの感じ。なんというか、見慣れた光景だ。

……うん、いい感じに俺の感性も壊れつつあるな。

自分が変わってしまったことに怖さを体感していると、目的地に着した。

「ここがA組か」

『1-A』とプレートがくっついた扉の前で、俺は深呼吸をする。

中からはガヤガヤと話し声が聞こえてきている。俺は他の人に遠慮してクラス分けを見るのが遅かったから、すでに大部分の奴らが入ってるんだろう。

遅れた手前、ちよつと緊張するがそうも言ってもらえない。

「——行くか」

覚悟を決め、俺は引き戸に手をかける。

頼むぜ、神様……どうか、どうか（比較的）平凡なクラスであつてくれ……！

都合のいいときだけ引つ張り出してくる神様に願をかけつつ——引いた。

ガラリと右にスライドした扉の奥に、俺がこれから1年間共に過ごすクラスメート達の全貌が露わになる。

——瞬間、俺は確信した。

神様、あんた俺のこと嫌いだろ。

「ハハッ……」

ここまで来ると笑うしかねえな。

俺は、目に入った面子を見てそう思った。つか、ホントに笑った。遠山キンジ、星伽白雪、峰理子、鈴木時雨、ライトブルーの髪で狙撃銃を背負った少女、まんま小学生みたいな女の子、前髪で目を隠してすげーオロオロしてる少女、さわやか風イケメン、ついでにかなり背の高い男子。

目に付くだけで、これほど印象深い（後ろ2人はまあ普通だが）人物たちが散見できる。

こ、濃い……！ 濃いぞ、キャラが！

衝撃の光景に、思わず立ち尽くす。

経験上、こういうクラスは最もいろいろ起きるクラスだということ俺は知っている。中学時代、『魔のクラス』とか呼ばれてた3―Bはまさしくトラブルの根源のようなクラスだったが、そこにもやたらとキャラの立つたメンバーが大勢いた。何を隠そう、真ん中ら辺の席からこちらをにやにやと見ている時雨も、3―Bに在籍してたからな。……まあ、俺もB組だったんだが。

これは……マズイかもしんねえ。1年間何事もなく過ごせる気が全くしねえぞ。一体どういうことだと、

「あー！ レンレン！ レンレンだあ！ レンレンがいるよおー！」

愕然とする俺にやたらとハイテンションで声をかけてきたのは――

――峰理子。あのドジツ娘（俺視点）だった。

視線を向ければ、シャカシャカと両手を上下に振りながらこっちに近づいてくる。なんの動きだ、それは。

あいかわらずのツーサイドアップテールに、武偵高の制服姿（なんか勝手にめちやくちやフリルつけて改造^{イジ}ってやがる）。元気いっばいといわんばかりのテンションだった。

俺はその澁刺さにしり込みつつ、

「お、おう理子か。お前もA組だったんだな」

「そーだよお、くふふっ。レンレン、運命ビンビン感じちやったりした？ した？」

「してねえよ」

まあ、ある意味では運命的にイロモノっぽいクラスになっちゃったが。

漫画だったら縦線が入っているであろう顔をする俺に、理子は人差し指を口元に添えて妖しく笑う。

それがまた容姿の幼さとの妙なギャップを演出して、胸がドギマギとなる。

心拍数の上昇を感じる俺に、理子は明るい口調で、

「んーでもでもお、理子はレンレンと同じクラスになれて嬉しかったよ？」

「なっ……!?!」

台詞自体は、そこまで大したものじゃない。例えばそれは、友人との再会を喜ぶような、健全なものだったはずだ。

だけど、それが今はなぜか、ひどく羞恥を感じさせた。

わけもわからず俺はひどく狼狽してしまい、それを理子に見透かされる。

「きやははっ、レンレンが赤くなっただけ！ クララが立っただけ！ フラグも立っただけ！」

「テ、テメエー！ からかってんじゃねえぞ！」

理子がちやかしたことに乗じて、俺も慌てて返した。

続いてふざけた真似を非難しようとするも、気配を読んだのか理子はすばやく逃げていった。

クソ、なんて逃げ足の速い野郎、じゃない女なんだ。あつという間に女子の群れに逃げ込みやがった。これじゃ、割って入ることもできねえ。

しかたなしに俺は、黒板に張られた座席表に従い、自分の席に座る。

というか、なんなんだ俺は。あんぐらいで動揺しちまうとは。ギャップ萌えでもあんのか？

生まれてこの方一度も自覚したことのない性癖があるかもしれないことに、俺はがしがしと困ったように頭をかいた。

と、丁度その時、俺が入ってきたのと同じ扉が開いて、同時にふんわりとした優しい声が教室に流れた。

「はい、皆さん席についてください。さつそくですが、HRをはじめますよお」

入ってきたのは、緩やかにウェーブしたロングヘアにふち無し眼鏡の、やたらと温厚そうな先生だった。クリーム色のスーツに、同色のタイトスカート。服装こそピシツとしていたが、全身から溢れる温和なオーラが、大人の女性というよりもお姉さんという印象を与える。

ほえー、この人マジで武偵高の先生か？　なんかすげえ普通の人っぽいんだが。

どことなく、去年の担任だった高藤霞先生を想起させる。あの先生も、保母さんでもやってそうな優しい人だったからなあ。

彼女は教壇に登り教卓につくと、一度ゆつくりと俺たちを見回して、

「えーと、先生の名前は高天原^{たかまがはら}ゆとりと言います。担当学科は探偵科^{インケスタ}です。みなさん、1年間よろしくお願いしますねー」

ほわほわとした笑顔を振りまきながら挨拶した。

いいなあ……すぐ癒される。世界中、こんな平穩そうな人ばかりだったらいいのに。

などと詮無いことを俺が考えている間にも、学校生活における諸注意（例えば、みだりに発砲しないとか）やプリントを配つたりしてHRは進んでいった。

そして、いよいよよというかなんというか……新クラスにおける最初のイベント、自己紹介が始まった。

「ではみなさん、お待ちかねの自己紹介の時間ですよ。といっても、規則上名前と学科——あ、これにはランクを含んでも構いませんよ——しか言っちゃだめなんですけど。でも、クラスメートに対する挨拶ぐらいはいいですよー」

笑顔で人差し指を立てて説明する高天原先生。

彼女の言った『規則』。これは武偵高ならではのやねえだろうか。

名前と学科以外の個人情報^{パーソナルデータ}を言わないのは、それは個々人で聞き出すべき情報だからだ。仮にも俺たちは武偵の卵。コネクションの構

築も今のうちから慣れておくべきだ、という考えの下に、こういう形になった。2年からは、クラス分けしても自己紹介しないらしいしな。

ああ、それからなぜ学科も言うかというのと、このクラス分けは専門学科じゃなく一般学科で分けられているからだ。だから、強襲科アサルトの俺と超能力捜査研究科Sの星伽が同じクラスになっているように、いろんな学科の奴が入り混じっているってわけだな。

「じゃあ、出席番号1番の君からお願いするわね」

——つと。そんなことを考えていたら、話が進んでいた。

というか、1番って俺じゃねえか。まあ、有明だからな。

おし。じゃあ、いっちょやってみつか。

俺はその場で起立し、身体の向きを教室の中心へ変える。窓側の一番前だから、こうした方がクラスの連中と向き合える。

途端、視線が集中する。う、慣れてねえんだよなこういうの。あんまり注目されるの好きじゃねえし。

まあ、いい。パツとやってパツと終わろう。

俺は一息いれて、自己紹介を始めた。

「名前は、有明錬。専門学科は強襲科で——」

と、そこまで言ったところで、一瞬逡巡が生まれる。

あー……どうしようか。これは黙つとくか？

……いや、どうせすぐにバレる。ならもう今言つとこう。

情報科インフォルマ——情報処理機器を用いた情報収集と整理を学ぶ学科——

の情報伝達速度を思い出し、俺は素直に開示することを決めた。

「——ランクは、Sだ」

一言で、簡潔に告げる。

それを受けて、クラスがざわめいた。どよめきが手に取るように伝わってくる。

そりゃあ、そうだろうなあ。たぶん、俺が逆の立場でもそうするだろう。1年からSってよっほどのことだぞ。

ただ、惜しむらくはというか、別に俺はそのよっほどじゃないってのがネックなんだよなあ。

おそらくは、あのSランク認定は何かの間違いなんだろう。多分、理子の自爆とかあの変質者との戦いとかが、なんかミスって評価されちゃったんだと思う。ただまあ、だからつつつて、自分から「ランクを下げてください」なんて言うのも変な話だしな……。

それに、勘違いだろうがなんだろうがそういう評価を受けたんだ。だったら、それに見合うように努力したいしな。

だからそうだな、代わりといっちゃなんだが、ここでみんなの誤解を解いておこう。誤解させたままじゃ、後々面倒なことになりそうだし。

謙虚って大事だよな。ビバ、長いものに巻かれる精神（ちよつと違うか）。

脳内で即座に文章を練り上げ、同時に推敲する。そうして、誤った認識を正すための一文を構築する。

よし、こんな感じかな。

「つつつても、勘違いしねえでくれ。本当の俺は、こんなもんじゃねえ。Sランクなんざ、俺にはつり合わねえんだよ」

ふー、まあこれなら問題ないだろう。緊張したせいで、頭に思い浮かべたのと違ってちよつと初対面にしては荒い口調になっちゃったが。生意気だとか、後でからまれないだろうか。

よし、印象を良くする為に、少し笑っておこう。イメージ的には二コツ☆って感じだ。鏡がないので見ることは出来ないんだが、なかなかいい感じになったんじゃないだろうか。

よし、これで俺の番は終わりだ。さつさと座ろう。

『……………』

……あれ？　なんで俺が着席しても次のやつが自己紹介しねえんだ？

つーか、なんかやたらと静まり返ってる気がするの、俺の気のせいでしょうか。

10秒、15秒……どんどん過ぎていく静寂の時間に、俺の心にむくむくと不安が湧き出す。

え、えー、俺なんかしちまったんだろうか？

内心でダラダラと冷や汗を流しながら、頼みの綱・高天原先生に視線を送ってみる。お願いします先生、フォローしてください。こういう空気苦手なんです。何か気に食わない発言があったとしても、わざとじゃないんです。みたいな感じで。

間違っても不快な思いをさせて手助けしてもらえなくならないように、さつきみたいにそつと微笑を添えて穏やかな雰囲気を出すことも忘れない。

そんな俺の思いが通じたのか、高天原先生はハツとして、

「——あ、じゃ、じゃあ次の生徒さん、お願いできますか……？」

「は、はい」

高天原先生の指示により、再び自己紹介は始まる。緊張を孕んでいた場の空気は弛緩し、ようやく時が動き始めた。

そのことにほつと息をつく。あー、ビビった。

なんだったんだ、さつきの空気は？ 知らないうちにスベったのだろうか。

結局その謎は解けることはなく、そんな俺を尻目にHRは進んでいった。

* * *

「名前は、有明錬。専門学科は強襲科で——ランクは、Sだ」

なんでもないことのように錬が告げた直後、1—Aをどよめきが包んだ。

あるいは目を見開き、あるいは耳を疑い、あるいは声を上げた。

それほどの衝撃が、彼ら彼女らを襲っていた。

なぜなら、彼らは卵とはいえ武偵。Sという格付けがどれほどの偉業なのか、理解しているからだ。

そもそも、Sランク自体が全世界でも700名弱しかいないのだ。その時点で、これが常人の枠には決して収まらない存在であるということが見て取れる。

しかも、錬が冠すのは強襲科のSランクだ。それは、1人で特殊部隊1個中隊と渡り合える、という意味合いを込められた、文字通り格の違う戦闘力を持つ者しか与えられない称号である。

荣誉、などという簡素な言葉で表せるレベルではない。

それは洋の東西問わず、世界中の武偵たちの憧れと言えた。
だが、

「つっても、勘違いしねえでくれ。本当の俺は、こんなもんじゃねえ。
Sランクなんざ、俺にはつり合わねえんだよ」

有明鍊はその世界クラスの称号を、こんなものと、つり合わないと、
そう一刀両断した。

侮辱もはなはだしい、と誰かは思った。冗談にもならない、とまた
違う誰かが思った。

無論、単純に驚愕や憧れを抱いた者もいる。だがこの瞬間、鍊の発
言を好意的に受け取った者はそう多くなかった。

それはつまり、有明鍊という男に負の感情を抱いたということでも
ある。

最悪の滑り出し。

これからこのクラスで、ひいてはこの学校で良好な人間関係を築き
たいならば、言ってはならない台詞だった。

事実、このままなら、スタートは順調とは言えなかつただろう。

そう——このままならば。

80を超える瞳に見つめられ。好悪混じった感情を突きつけられ。
それでも有明鍊は、不敵に笑った。

『……………』

そして、彼ら彼女らは魅せられた。

その笑みに。これは決して冗談でもなんでもない、と言わんばかり
の双眸に。

全ての印象は払拭され、後にはただ一つの感情が残った。
すなわち。

この瞬間、誰もが有明鍊を認めたのである。

教室内に、沈黙の妖精が舞い降りる。皆、各々が今の心境を持って余
していた。

そんな中、高天原教諭を始めとする一部の生徒たちは、とあるラン
クを想起していた。

Sランクの上。
生ける伝説たち。

世界でもたった7人しか名乗ることを許されない世界最高のランク——『Rランク』を。

RがRoyalの頭文字である通り、Rランク武偵とは各国の首脳や王族付きにされるほどの凄腕だ。

そんな『武偵の頂点』に高校1年生である錬が届くとは、到底思えなかった。

しかし、

(あの目、ふざけているようには見えない……。まさか、本気で目指しているというの？ 世界のトップ7達を……)

半信半疑ではあるが、高天原は錬の決意を読み取った。少なくとも、その眼差しに嘘はないように彼女には思えた。

確かに、今の錬では足元にも及ばないかもしれない。

だが、5年後は？ 10年後は？

手が、届くかもしれない。超人たちが住まう領域に、足を踏み入れることができるかもしれない。

可能性の話。それはつまり、未来の話。

それがどうなるかなんて、誰にも断じることができない。だからこそ、そんな『いつか』も実現しうる。

ごくり、と高天原は息を飲んだ。

もしかしたら、自分は今、始まりを見ているのではないか。

彼女は、そんなことを思った。

——と、その時、用は済んだとばかりに錬があっさりと腰を下ろした。

そして、彼は微笑を浮かべながら、高天原をまっすぐに見つめた。

目と目が合う。彼の吸い込まれるような黒瞳には、やはり不敵な色が浮かんでいた。

まるで、「このくらいの事で呆気に取られるなよ」とでも言うように。

そこで我に返った高天原は、慌てて出席番号2番の生徒を指名し、

続く自己紹介を促した。

(……………)

3番目、4番目と続く中、高天原はちらりと鍊を覗き見る。

彼は頬杖をつきながら、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

その眼差しが見据えるのは、青き天空か、あるいは宣言した未来か。

探偵科担当の高天原にも、それは推理できなかつた――

* * *

あー……今日の晩飯何かなあ。

俺は自分の番が終わったのをいいことに、ポーつと外を見ていた。

――つて、やべ。ちゃんと自己紹介聞いとかねえと。1週間で全員

の顔と名前を一致させられるようにならねえと、教務科マスタースに内申点引か

れちまうんだよな。

まあ、つつても今全員覚えてたら長くなるんで、とりあえず俺が気

になった連中だけ覚えていくことにしよう。

まずは、柔和に整った顔の、爽やか風味のイケメン君。襟元まで伸

びた茶髪が垢抜けた雰囲気を出している。

彼は、女子のハートを打ち抜くであろうイケメンスマイルと共に話

し始めた。

「不知しらぬ火亮いりやうです。強襲科のBランクですが、在学中に1つでもランク

を上げられるように頑張りたいと思っています。これから1年間、よ

ろしく」

お、おおう。すげー模範的な挨拶だな、おい。優等生タイプだ。

武偵高じゃ天然記念物並だよなとか思いつつ、次は時雨だ。

スラリとした立ち姿に、感嘆の声がちらほらと。凜々しい魅力を持

つ時雨は、男女問わず人気だったからなあ。

「鈴木時雨だ、よろしく諸君。専門は尋問科ダギョウラでBランク。ちなみに、一

番初めに大言をかました有明鍊の嫁だよ。冗談だがね」

ある意味で俺がSランクだと言った時よりクラスがざわめいた。

よし、後であいつシメよう。まあ、十中八九負けるだろうが。

ホント、あいつはああいうところがなけりやいい奴なんだけどな。

いや当然すげーいい奴ではあるんだが、玉たまに瑕きずというかなんという

か。

それはともかく、続いては遠山の番だ。

「遠山キンジ。強襲科Sランクだ。よろしく」

俺が言うのもなんだが無愛想な自己紹介だったんだが、2度目となるSランク宣言はバツチリ聞き取ったらしく、「あいつもかよ……」みたいな呟きがあちこちから漏れた。安心しろ、俺と違ってそいつはガチのSランクだ。

当の本人は大して気にしたような様子はなく（あとで聞いたら内心緊張していたらしいが）、それ以上は何も言わず着席した。

お次は、ただでさえ前髪が長い（ついでに後ろも長い黒のロングヘアだ）のに俯いているせいでまったく目元が見えない（かろうじて銀縁メガネをかけているとわかる）女子。……おい、なんだその驚異の胸囲は。星伽に届くレベルだぞ。なんか、全体的にエロい。

彼女はやたらとビクビクと小動物チックに震えながら、

「な、なか、中空^{なかそらち}知み、みさみさ、です！ ああ、じゃない、ですつ！

美咲^{みさき}です！ こね、通信科^{コネット}——通信機器を用いた情報連絡によるバックアップを学ぶ学科——のえろい、ちがつ、ええAランクですつ」緊張してんのかやたらとどもりながら言い終えた中空知は、これ以上耐えられないとばかりに高速で腰を下ろす。これで、なんで通信科のAランクが務まるんだ？

まあいい、どんどんいこう。

今度はまんま小学生みたいな身長で、ショートカットの髪を耳の横でくくっている女の子だ。つか、もしかしてホントに小学生^{インターン}じゃねえだろうか？

擬音をつけるならば、にぱー☆といった感じの笑顔を振りまきながら、女の子は自己紹介をする。

「平賀^{ひらが}文^{あや}ですのだ！ あやややって呼んで欲しいですのだ！ あやは^{アムド}装備科——装備品の調達・カスタマイズとメンテナンスを学ぶ学科——のSランクだから、みんなも武装のことならあややにお任せなのだ！」

天真爛漫という言葉がこれほど似合う人もいねえだろ、つてな感じ

の平賀（ちゃん？）。つか、またSランクかよ。「Sランクのバーゲンセールだな」って呟いたその男子、その気持ちすげえわかるぞ。Sランクとはなんだったのか。

おっと、続いて星伽か。

入学試験の時とは違つて制服姿の彼女は、鴉の濡れ羽色をした長い黒髪をしゃらりと揺らしながら、音を立てずに起立する。

「えっと、星伽白雪です。専門学科は超能力捜査研究科で、ランクはAランクです。みなさん、これから1年間、よろしくお願いします」

折り目正しく礼をしながら、真面目を貫いた挨拶を披露する星伽。浅い付き合いだ、なんともあいつらしいな。

さーて、お次は……げ、理子か。なんか、嫌な予感がすんぞ。

星伽と正反対にガターン！ と椅子を鳴らせながら立ち上がった理子は、まるでアイドルさながらにウインクして手を振る。

「峰理子ですーすー！ みんな、りっこりっこりんにしてやんよつ。強襲科のBランクだけどお、くふふつ、レンレンにあんなことやこんなことされなかつたら、Sになつてたかもねえー？」

レンレン、の所で俺の方を向いて（つか指もさして）とんでもない発言をかました理子。……無視だ、無視。こういうときにはスルーが一番だと、俺はすでに去年学んでいる。

というわけで理子の発言はスルーしつつ「あーん、レンレン冷たいぞおー！」うっせえ！

次だ、次。今度は、かなり背の高いツンツン髪の子に移るとすつか。

というか、俺こいつ見覚えあるぞ。確か入試のとき、妹と一緒に来てたやつだ。

もし仲良くなることがあればそれをネタにしてやろう。普段の俺なら初対面の人間にそんなこと思わないんだが、なんかこいつイジラレキャラの素質がありそうなんだよなあ。

「オレあ、武藤剛気！・車輛科——車輛・船舶・航空機の運転操縦を学ぶ学科——のAランクだ。乗り物のことならなんでもござれ。ま、いっちょよろしく頼むぜ」

ほー名前どおり豪気な野郎だな。若干暑苦しそうではあるが。それよか、いいなあ車輛科でAって。いろいろ乗れんだろうな。羨ましいぜ、チクシヨウ。俺も履修しようかな？

と言ってる間に、いよいよ最後。

トリを飾るのは、ライトブルーのショートカットで、小柄な身体と対照的な武器^{エモン}、狙撃銃を背負った女子だ。

黄金色をした澄んだ眼差しは、まっすぐ前を向いている。それはつまり、誰も見ていないということだ。

そんな姿にどこか孤独さを感じる中、彼女は淡々と告げた。

「レキ。狙撃科Sランクです」

……あ、それだけ？ あっさりしてんなあ、おい。

4人目のSランクってインパクトまで薄れちまったみたいだ。いや、それでももちろんみんな驚いてつけどな。というか、Sランク人って。過剰戦力だろ、これ。

俺的自我介绍だけじゃなく、全員含めてレキが最後だったので、高天原先生がパンと軽く手を打って締めに入る。

「はい、みなさんありがとうございます。一期一会の精神で、仲良くしていくんですよー？」

と前置きしてから、

「今年私たちのクラスは、Sランクさんが4人もいるんですね。これは、体育祭^{ラ・リッッサ}でクラス部門の優勝が狙えるかもしれません。アドシアードは、選手として参加できるのは2年からのなので、それまで待つてくださいいねー」

という台詞に始まり、その後もちよこちよこと明日からのことなんかを話して、そしてHRが終わりを告げた。

つつてもそれから、さっそくいろいろあつたんだけどな。Sランクに対する質問攻めとか（「あれ、本気なんだよね？」とかわけのわからんことも聞かれた）、なぜか速攻仲良くなった時雨と理子が2人がかりで俺を色情狂にしたてあげようとしてきたり（グロックで黙らせたら）、遠山と俺が引き分けたという話が広まって無理やり再戦させられそうになったり（クラスメートどもは賭けの対象にする気でいや

がった)、入学初日とは思えんほど騒がしい一日だった。

そして、これから俺の予想通り尋常じゃなくトラブルが起こりまくる1年になるんだが……それはまた、いずれ話そうと思う。

だから、まずはこの物語を始めさせてくれ。

その物語のスタートラインは今から丁度1年後――

――空から女の子が降ってくるところから始まる。

第零章 スタートライン

END

第一章 緋弾のプロローグ

7. それはきつと運命を

——俺、有明鍊が東京武偵高校に入学してから、2度目の春がやってきた。

つまり、生きて1年間を過ごしたということである。

正直、今でも実感は沸かない。去年の嵐のような1年間で、俺は何度死地に立たされたかわからないほどだった。

生きてるっていいね、すばらしい。

それでもその代わりにいろいろな経験は積めたように思う。駆け抜けた日々の中には確かに大切なものはいくつもあって、それは俺を成長させてくれた……はずだ。

出逢い、別れ、戦い、涙。目を閉じれば、今でも思い出すことができる。

機会があれば語るのもやぶさかじゃないんだが、あいにくと今はそんな暇がねえんだよな。

今日は始業式。新しい1年の始まりを告げる行事が行われる。

さすがにそれに遅刻するのはまずいので、俺は自転車漕ぎつつ、この1年ですっかり見慣れた通学路を、一般校区的ノルマルマイルの体育館へと進路を取っていた。

カラカラとタイヤを鳴らしながら、近代的なビル群——専門科棟——の間に敷かれた道路の端を、俺は自転車を走らせる。

「今年こそは……あんまり危なげなく1年間を過ごせるといいんだけどなあ」

ふとそんなことを口に出して、ペダルにかけた足に力を入れた。

俺が現在住んでいる第3男子寮から一般校区までは、実は学園バスが出ている。毎朝寮の前に停まり、学生たちを呑み込んでいくその光景は、多分この学校にしては珍しく、ありきたりな風景なのだろう。で、学園まで直通の上に無料となれば、当然大多数の人間はそれを使う。武偵は奇襲に備えていつも同じ道は歩かないのがセオリー、と

かいつて学校側はあんまり推奨してないんだけどな。しかしそこはプロではない高校生、無駄に労力を費やそうなんてやつは、ほとんどいなかった。

で、なんで俺がその通例に従ってないかといえば、アウトローを気取っているとかさんなかつこいい理由ではなく、単にあんまり人ごみが好きじゃないからだ。だから、こうしてチャリ通という選択を取っている。チャリとは言っても学園島は平地だから、のんびり行けるしな。まあ……さすがに雨の日くらいはバスで行くが。

俺が人にそれを話すと、たいてい変わったやつだなとか言われるんだが……別に、チャリ通も結構悪くねえんだぜ？

鉄の箱の中じゃ感じられないことだって、たくさんあるのだ。

例えば、一例を挙げるならば。

朝日を浴びながら飛ぶ、鳥のさえずりとか。いいな、実に平和的だ。ピチチチチ、という鳴き声には愛くるしさを感じる。

他にはそうだな。

キラツと輝く太陽とかいいな。陽光が燦々と降り注いで、地球を暖めているのを体感する。春だからな、ぽかぽかしてて心地いいぜ。

あとは忘れちゃならないのが。

『その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります』

ふと後ろを見た拍子に目に映った、短機関銃サブマシンガンつきのセグウェイに追いつてられる友達の姿だな。お、あいつも自転車か。いい運動になってそうで羨ましいぜ。

よし。

「明日から自転車通学をやめよう」

鳥の鳴き声？ 太陽の輝き？ なにそれおいしいの？

やっぱり文明の利器を頼るってのは大事だよな。

俺は一つ頷いて、主義を変更することを一切の躊躇いなく決めた。ついでに、あいつと友達でいるのも今この瞬間からやめよう。グッバイ。お前と過ごした日々、悪くなかったぜ。

さてと、それじゃあ進路を変えてつと——

「——鍊！ 聞こえてるだろ！ おい鍊！」

……遅かったか。

背後から飛んできた呼びかけに、俺は危機回避が失敗したことを悟る。

仕方なく振り返りつつ、大声で友達（仮）に返した。

「うるせえぞ、キンジ！ コンビ解消しても、まだ俺に厄介事を運んできやがんのか！ 死神かテメエ！」

あーあ……数分前の俺のお願い、もう崩れちゃったよ。

ほら見ろ、巻き込まれちゃった。いつもこのパターンでトラブル（それも決まって荒事）が舞い込んできやがる。俺はなるだけ穩便に過ごしていきたくってのに。……まあ、悲しいことに慣れちゃった自分がいるんだが。せっかく念願叶って探偵科インケスタに転向することもできたつてのになあ。

それにしても何だありや？ と（かろうじて）友達こと遠山キンジの自転車に追走する物体を観察してみる。

一時期流行ったセグウェイとかいう乗り物が、人間の代わりに短機関銃——イスラエルのIMI社が生み出した名銃、UZIウージーを乗っけていた。

おい、いつから銃が乗り物を操縦する時代になったんだ。

セグウェイってあんなに速く走行できるんだな、と益体もないことを考えつつ、俺が選ぶべき行動を脳内で取捨していく。

……決めた。

これは——逃げの一手だな。助けられる手段があればどうにかしてやったが、あいにくとその手段が思い浮かばない。

幸い、今ならばまだ距離がある。逃走は容易に思えた。

せめて、お別れの挨拶くらいは残しておこう。

「悪いが、俺はおさらばさせてもらおうぜキンジ！ 短い付き合いだっ——」

——たな、と続けてこの場を即時離脱しようとした俺の耳に、ボーカロイドを使用した合成音声によるセグウェイの警告が入ってきた。

『お前 が 逃げたら 撃ち やがります』

……………え？

声に振り返ってみると……あれ、なんか銃口こっち向いてね？

「いやいやいやいやなんで俺を狙ってんだよクソツタレ!？」

バカな、俺は無関係のはずなのに……!!

神様俺何か悪いことしましたかー! と心中で滂沱の涙を流す。

とその時、スピードを上げたのか、キンジが俺の真横に並んできた。

汗だくの顔が間近に迫る。寄るな、おい。

しかも、殺人セグウェイのお供付きって。

ふざけた真似をした同級生(ランクダウン)に俺は抗議の意を唱えた。

「おいキンジ! 何勝手に横付けしてんだコラ!？」

「よく聞け、錬。このチャリのサドルにはプラスチック爆弾⁴が仕掛けられてる。しかも、俺1人だけじゃなく隣を走っているチャリがあれば、そいつもまとめて吹っ飛ぶくらいの容量だ!」

「何で今それ説明したのキンジ君?! 巻きこむ気満々?!」

やめてくれよ、そういうの!

「武偵憲章1条に、仲間を助けよってあるじゃねえか!」

「よく読め、仲間を巻き込めとは書いちゃいねえんだよ! つーか、4条はどうした?! 武偵なら自立しやがれ!」

ガヤガヤ言い合いながら、俺たちは進行方向を体育館から人気がないであろう第2グラウンドに向けた。非常に納得いかないものはあるが、さすがにこの状態で体育館に突っ込むわけにはいかねえからな。

……つーかさ、キンジ。お前、そういう配慮ができるなら、なんで俺にもそういう優しさを見せてくれねえんだ?

というか、

「そもそもお前、元・Sランク武偵だろうが! 自分でなんとかしやがれ!」

「お前だつて元・Sランクだろ! 後でアメ買ってやるから何とかしてくれ!」

「小学生か俺はあ! んなもんで釣られるかバカ!」

この野郎、実は余裕あんじゃねえのか?

そろそろ拳の一発くらい出してもいいだろ、と思い始めたとき、キングが顔を上げて叫んだ。

「なツ!? なにやっつてんだアイツ?!」

「あん?」

つられて、俺も同様の方向に目を向ける。

そこは、とあるマンション——第1女子寮——の屋上。その縁に、武偵高の制服姿をした、女の子がいた。

風になびくは、長いピンクのツインテール。日の光を背後に背負いながら、彼女はただ泰然とその場に佇んでいた。

なんだ、あいつ何しようとしてんだ?

俺がそう疑問に思った——

瞬間、その子は勢いよく飛び降りた。

「なん……ツ!?」

落ちる。7階建てのマンションから。

数秒後に訪れるであろう最悪の光景が脳裏によぎる。死を、予見する。

しかし、それは現実になることはなかった。

彼女はあらかじめ用意していたらしいパラグライダーを広げ、風を上手く捕らえてふわりと空に浮かんだ。

あ、あつぶねえ……。

ほっと息をつく俺に構わず、彼女は俺たちに向かって滑空を始めた。ある程度の高度を保ちつつ、確実に近づいてくる。上手いな。

というかあの子、俺たちを救助するつもりか……?」

だがどうやって、と俺が眉をひそめた横で、キングが声を張り上げた。

「バツ、バカー! 来るな! このチャリには爆弾がしかけられてる!

お前も巻き込まれるぞ!」

おい! テメエ、俺のことは道連れにしようとしやがっただろうが!

という抗議をしている場合じゃないので黙って漕いでいると、女の子が俺たちに頭を下げるよう指示し、従った瞬間二丁拳銃ダブ銃による水平

射撃で、セグウェイを破壊した。

台座を打ち抜かれ、滑りながら後方へと消えていくセグウェイ。す、すげー、なんつー腕前だよ。俺にや、逆立ちしても無理だな。と、気流を捉えて俺たちの数メートル前方を飛ぶ女の子が、迷うように俺たちを交互に見た。

どうした、といぶかしむのは数秒。すぐに理解する。

なるほど、どっちを先に助けるべきか迷ってんのか。確かに、この状況で2人同時に救助はできねえだろ。

……って、マズイ。キンジのほうを見てる。あの子、このクソ野郎を先に助けるつもりか。

おのれ、そうはさせるか！

「気にすんな！ 放つといて構わねえ！ 自分でなんとかする！」

「錬、お前……！」

ふん、今更文句言っても遅いぜキンジ。

そうだ、放つといてしまえ、こんな友達甲斐のねえ野郎！ 仮にも元・Sランクだ。自分1人でどうとでもできるだろ。俺は無理だが。

俺の必死の願いが届いたらしく、女の子は一度頷き、

「死ぬんじゃないわよ、あんた！」

威勢のいい声で女の子はキンジに警告する。

ああ、いいんだよそんなわざわざ心配してやらなくても。自業自得だ。

そして女の子は、クルツとパラグライダーのブレークコードに足を引っかけ、逆さづりになる。曲芸師も真つ青の離れ業だ。

……あ、見えそう——じゃねえ、彼女の狙いがわかった。一気にチャリで突っ込んで抱きつけてことか。随分と大胆な作戦を考えたもんだ。

突飛な女の子の発想に感心する中、彼女は声優でもやっていけそうなアニメ声で指示を出す。

「武偵憲章1条！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ』——いくわよ！ 全力でこぎなさいっ！」

それに、俺も覚悟を決める。

そして、俺の体は枯葉のように無残に吹き飛ばされた。重力に喧嘩を売るような、水平飛行。意識が飛ぶ。

が、それは再びの地面との接触によって強制的に中断された。今度は自分の意思ではなく、またもやゴロゴロと地面を転げまわる羽目になった。

しかしそれにも当然終わりはある。回転するためのエネルギーを使い果たした俺は、仰向けになって、大きく息を吐いた。

「~~~~~ぶはあっ！ ハッ……ハッ……し、死ぬかと思っ
た……！」

体中が発する痛みに顔を歪め、それでも命があることに安堵する。息を吐き、吸う。それだけの行為が、いやに幸せに感じた。

あー……よく生きてたな、俺。
「痛っ、つつ……！」

身体の節々にダメージを感じながらも、なんとか上半身を起こす。倒れそうになる体は両手をつつかえ棒にすることで支える。

煤で汚れた頬を拭い、俺は視線を下げて全身を確認した。

あーあー……なんて有様だよ、おい。素肌の部分には血が滲んでるし、制服もボロボロだ。

だけど、これでも大分マシなんだろうなあ。防弾制服だったからこそ、この程度で済んだんだ。

ま、今日のはまだ軽症な方だな。これ以上の怪我なら、何度か負ったことがあるし。

それはそうとして、と俺は未だ粉塵漂う爆心地に目を向ける。無残にも俺とキンジのチャリが黒煙を上げているのが、遠目に見える。あの様子じゃ、間違っても二度と乗ることはできないだろう。

それにしても、よくあそこまで離れられたもんだな、俺。火事場のバカ力すげえ。人間に眠る身体能力の底力を感じた。

あークソ、しかしついてねえなあ今日は。なんだって俺は朝から爆殺されかけなけりやなんねえんだ？

そもそもなんでこんな目に遭ったんだっけ、と思いついてみると、
「——そうだ、キンジだ！ あの野郎が俺を裏切りやがったからだ！」

脳内に、あのクソ野郎の顔が浮かぶ。

そうだ、全部あいつが悪かったんじゃないか。

まず第一に、あいつは一切関係ないはずの俺を事態に引きずりこみやがった。……いや、これに関してはなぜかセグウェイは俺も狙ったから、百パーあいつが悪いとはいえないが。

だが、俺を助けてくれようとした女の子の救援に割り込みやがったのは許せん。人の好意を横取りとはなんたる悪逆非道。

この恨み、はらさでおくべきか。俺は自分からケンカふっかけるよ
うなキャラじゃないが、こういう時には話は別だ。

武偵高らしく、やられたらやりかえす！

「待ってるよ、遠山キンツ……あいてて！」

勢いよく宣戦布告しようとして痛みを悶えるあたりがなんとも俺らしいと考えながら。

俺はキンジに報復を敢行するため、鈍痛が残る身体を引きずり歩き出した——

* * *

東京武偵高・強襲科所属のSランク武偵、神崎・H・アリアは、学園島第2グラウンドのそばに建設された第1女子寮の屋上から、眼下を見下ろしていた。

少女、というにはいささか幼い風体の娘であった。140cmをわずかに超えたばかりのその小柄さは、彼女をどう鼻肩目に見積もっても中学生以上には見せない。しかしてその実態は高校2年生だというのだから、発育という名の個性は確かに十人十色だと教えてくれた。
いた。

ゆらゆらと、アリアの側頭部からはピンク色のツインテールが風に遊んでいる。容姿と同じく幼い顔立ちには、今は険の強い色が浮かんでいた。

高度20mの断崖絶壁。地上よりも勢いを増した風が吹く中、しかし彼女は一切臆すことなく視線を対象に向ける。

(仕掛けてきたわね……『武偵殺し』)

赤紫色の瞳に映るのは、道路を並走する2台の自転車——そして、

それにさらに追従するセグウェイである。

が、このセグウェイ、普通ではない。

なぜなら、本来人が乗るべき操縦席には誰もおらず、代わりに短機関銃が備え付けられているのだ。

本来なら見ることでできない異様な光景だが、アリアからすればまさかというよりもやはりかという感情の方が強かった。

そして、彼女は爆走を続ける自転車のほうにも異常があると睨んでいた。

アリアの予想が正しければ……おそらくどちらか（あるいはどちらも）の自転車には爆弾が仕掛けられているはずだ。前例を頼りにするならば、おそらくC4。一人殺すには十分な爆薬が詰められているだろう。

なぜならばそれこそが、近頃世間を騒がせた犯罪者『武偵殺し』の手口なのだから。

（でも、使ってるのがあんなオモチャなら、きつと本人どころか手がかりも出やしないわね。……だけど、救出はしなくちゃ）

アリアは、とある理由からこの『武偵殺し』を追っていた。だからこそ、奴が犯行に及ぶ際に発信する電波をキャッチすることができたし、発生すら知られていないこの事件に駆けつけることができたのだ。

全ては、そう。『武偵殺し』へと通じる何かを見つけるために。

だが、アリアがやるべきことは、奴に繋がる手がかりを探すことだけではない。それは、神崎・H・アリアのプライベートな目的だ。その過程で被害者を発見したならば、それを助け出すのは武偵として当然やるべきことだった。

「——スウッ」

大きく、息を一つ吸う。

瞳を閉じて——開く。

そして彼女は、ピンク色のツインテールを翼のように風になびかせ——飛んだ。

ゴウッ！ と耳元で気流がうねる音が聞こえる。全身に風圧を感

じながら、アリアは自由落下を続ける。

下で、アリアに気づいたであろう自転車の主……2人の男子生徒が、表情にありありと驚きを浮かべるのが見えた。

落ちるとでも思ってるのかしら、とアリアは心外に思いながら屋上に用意していたパラグライダーを展開する。

(こんなに早く使うことになるなんて……結果的に、あかりの頑張りのおかげで助かったわね)

胸中でパラグライダーを夜通し改良してくれた後輩の労をねぎらい、急激に速度を落として滑空に入ったアリアは、高度を下げつつ彼らに近づいていく。

と、

「バツ、バカ！ 来るな！ このチャリには爆弾がしかけられてる！

お前も巻き込まれるぞ！」

被害者の内の一人——遠山キンジが、アリアに注意を喚起した。

バカ、の一言に少しカチンときつつ、

「そのバカたち！ さっさと頭を下げなさい！」

武偵は、一発もらったら一発返す。

バカと呼ばれたのでバカと返しながら、アリアは左右のレッグホルスターから2丁のガバメントを抜いた。

そして、それに少年たちが反応を返すよりも早く、彼女は水平射撃でセグウェイを破壊していた。

残骸となって転がっていくセグウェイを尻目に、アリアはパラグライダーを操縦して今だ走り続ける自転車2台の前方へと躍り出る。

その際に2人の自転車を観察してみたのだが、爆弾を目視することは叶わなかった。おそらくサドルの下に設置されているのだろう。

(爆弾が仕掛けられてるのは……あっちの1台だけ？ ——ううん、違う)

アリアは自身が立てた考えを、一瞬で否定する。

先ほど叫んだキンジの言を鑑みるならば、一見彼の自転車にのみ設置されているように思う。が、だとするともう一人——有明鍊がこの場から逃げない理由がなくなる。仮に、爆弾が無くセグウェイのみが

脅威だったとしたら、その脅威が取り除かれた今、彼まで並走し続ける意味がない。まさか、そんなことにも気づかないほどのバカじゃあるまいし。

よって、あの2人ともが爆弾に狙われているという推理が成り立つ。

が、だとすればそこには一つの問題が浮上する。

(どうする？ 今あたしが思いついた方法じゃ、どちらか片方しか助けられない。強引に2人とも救出しようとするれば、絶対墜落する。この状態のあたしが、あいつら2人とも連れて危険領域から離脱できる方法がない……！)

代替案が思いつかないアリアは、二人を交互に見る。

キンジ。錬。キンジ。錬。

どちらを選ぶべきか答えは出ない。当たり前だ。これは命の選択、簡単に決められるはずがなかった。

そうして悩むアリアが、三度キンジに顔を向けたとき、

「気にすんな！ 放つという構わねえ！ 自分でなんとかする！」

今の今まで沈黙を守っていた錬が、アリアに叫んだ。

彼は、おそらく気づいたのだろう。アリアが、迷っていたことに。

だからこそ、自分を犠牲にして仲間を助けてくれと、そう頼んだのだ。自分はいいからこいつを助けてやってくれと、アリアに頼んだのだ。

武偵憲章1条の半分、『仲間を助けよ』。

その武偵の理念に、彼は準じたのだ。

「錬、お前……！」

そして、キンジもまたアリアと同じ結論に至っていた。

錬の決断に、キンジが声を漏らす。

そうだ、思えばいつもこの少年はそうだった。「俺は、いつだって俺のことしか考えてねえよ」。そう言いながら、彼はいつだって最後には自分よりも仲間を優先していた。その姿を、キンジは何度も見ていた。

キンジは、元・パートナーとはいえ、軽々しく錬を巻き込んだこと

を今更ながらに悔やんだ。

そして、一方アリアは鍊の言葉を受けて、武偵憲章1条のもう半分——『仲間を信じよ』——を実行に移す。

そこに、彼女は躊躇いを感じなかった。ただ、体が動いた。

本来彼女は、そんな簡単に誰かを信じることができる性格ではない。だが、鍊の顔が……まるで、「自分は絶対に助かる」と確信しているようなその表情が、アリアの背を押した。

「死ぬんじゃないわよ、あんた!」

言葉でどうにかなるはずがないと知りつつも、アリアはそう言った。

なぜなら今から鍊に頼まれたとおり、キンジを助けなければならぬいからだ。

(あの表情、何か策があるんだわ! だったら、あたしはあたしのやるべきことをやる——!)

一抹の不安を残しながらも、アリアは託された要請を果たすために、すばやく身体の上下を入れ替えブレードコードに両足をひっかけた。

そして、声を張り上げてキンジに呼びかける。

「武偵憲章1条! 『仲間を信じ、仲間を助けよ』——いくわよ! 全力でこぎなさいっ!」

その一声でキンジもアリアの狙いに気づき、また気づいたことで顔を引きつらせた。

が、自分が助かるにはそれしかない。キンジは「こんな助け方があるかよっ!」と抗議しながらも、スピードを可能な限り上げる。

見る間にアリアとキンジは接近していく。

10m……5m……3m……。

そして。

その距離がゼロになるのに、そう時間はかからなかった。

ドンッ! と、ほとんど正面衝突と言つていい勢いで2人は抱き合い、キンジは空中へとさらわれた。

キンジの手を(あるいは足を)離れた自転車は、慣性の法則に従い

前進を続ける。

これにより、2人が爆発の直撃を受けることはなくなった。

だが――

(ダメ……！ 距離が足りない！)

アリアの『直感』が告げている。未だ、被害距離イン・レンジであると。

論理的な根拠はない。だが、わかる。

もう少し……もう少し距離がなければ、ダメージを受けてしまう。

さらに、吹き飛ばされれば着地の如何によつては擦過傷を負う危険性もあるだろう。

失敗した、とアリアが顔をしかめて。

そして有明鍊の操る自転車が、2人を追い抜いた。

(な……ッ!?)

あり得ない行動に、アリアは大きく瞳を見開く。

なぜ自分から爆弾に近づくのか、とアリアが困惑した瞬間、一瞬こちらを向いた鍊と目が合った。

少年の瞳は、この状況にあつてなお静かな黒をたたえていた。

そして同時に、アリアはその双眸から『メツセージ』を受け取った気がした。

そう――「俺に任せろ」と。

(まさか……自分の自転車ごと、あたしたちから引き離すつもりなの?!)

信じられない判断であつた。そんなことをすれば、自分に襲い掛かる爆薬の量は単純計算で2倍になり、それだけ死亡確率も跳ね上がる。

が、それにもかかわらず、鍊は取った。

仲間を優先する道を。

死の危険を、いとわずに。

(なんて、やつ……)

心中でアリアは、そう呟き。

直後、背後で爆発音が轟いて。

アリアはキンジと共に、爆風に流されていった――

そして遠山キンジが目覚めて最初に見たのは、トランプ柄のブラだった。

「?!?!」

キンジの口内から、声にならない叫びが溢れる。

ブラ。つまり女性の下着。キンジが忌避する物の中でも確実にトップ3入りするであろう代物だった。

それが突然目に飛び込んできたのだから、キンジの動揺は半端ではない。誰だって、自分が苦手なものを見たいとは思わないだろう。

ただ不幸中の幸いがあるとすれば、サイズがかなり心もとないことだろうか。

子供っぽい柄をした布を押し上げる程度には、ある。あるが、間違っても双丘と言えるレベルではない。せいぜいが更地に薄く砂を盛ってみましたという程度の質量しかそこには存在していなかった。

(せ、セーフだ！ これなら——って、『65A↓B』？ ああ、ブッシュアップ・ブランジ『寄せて上げるブラ』ってやつか。偽装失敗してるだろ、これ)

なんとか危険な事態を避けて少し冷静になったキンジが、女性に隠された秘密を暴いて(かつ侮辱して)いると、妙な圧迫感を感じた。

なんだと思いい状況を確認してみると、なぜだか自分は跳び箱に嵌っているらしかった。しかもブラの装着者である少女と一緒に。おまけに、抱っこした状態で。

爆風にあおられたパラグライダーは、その向かう先を第2グラウンドに併設された体育倉庫に決めた。それだけならまだしも、2人そろって倉庫内にあつた跳び箱の一番上の段にぶつかり、それを弾き飛ばしながらすつかりその中へと入ってしまったらしい。

んなアホな、と思いつつそれが事実だと認識したキンジは、次に爆発の影響か、気絶しているらしい少女に目を向けた。

目の覚めるような、美少女。キンジの第一印象はそれで、そして次に感じたのが、

(ちっさいな、この子。中等部……いや、インター飛び級の小学生か?)

といった具合に少女の正体を推測し、そしてブラウスについた名札

(武偵高では4月の間名札をつけるルールがある)を発見する。

(『神崎・H・アリア』……あれ、なんか)

どこかで聞いたような名前だな、と思ったキンジ。すると連鎖的に、既視感がキンジを襲った。名前もそうだが、改めて見てみるとこの顔もどこかで……。

脳内をチリつかせる、誰かの影。その姿をキンジが捉えようとした、その時。

「へ、ヘンタイ————ッ！」

と、大音声がキンジの鼓膜を直撃した。

「え、な……!?!」

突然のことに狼狽するキンジに、目を覚ましたアリアは羞恥に頬を染めながら拳を振り下ろす。

その一撃が脳天にヒットしたことを確認し、アリアはまくれていたブラウスを一気に引き下げた。

そして、逆襲の始まりである。

「ヘンタイ！ チカン！ 人でなし！ 恩知らず！」

「ちよっ、待て！ 待ってくれ！」

キンジの制止などどこ吹く風で、アリアはポカポカとキンジを叩く。彼女からしてみたら、目覚めた時に服がまくれていた状態だったのだ。どう考えても、犯人はこいつしかいなかった。

しかしキンジとしても故意ではない罪を押し付けられてはたまらない。暴れる彼女の両手を押さえ込み、反論する。

「だから、待って！ これは俺がやったんじゃないよ、ここに嵌った衝撃でこうなっちゃったんだよ！」

「ウソ言いなさい！ そんな都合いい話があるわけないでしょ！」

「いや本当なんだって！」

アリアの眼前で、キンジが必死な顔を作る。

あろうことか冤罪を主張するキンジに、アリアはついにキレた。

こんなやつ助けるんじゃないよ、と後悔しつつアリアは自身がお十八番としている台詞でキンジを糾弾する。

「風穴開けるわよ！」

「なんだその理不尽は！」

負けじとキンジも言い返した。

その、瞬間。

(——え?)

キンジとアリアの脳裏に、同時にいつかの光景がフラッシュバックした。

キュルキュルと、記憶が巻き戻っていく。一ヶ月、二ヶ月、もつと前。

巡り、巡り、巡り、やっと辿りついた記憶の旅の終点。

そう。そうだ。あの日も、自分たちはこうして言い合った——目の前の、相手と。

そして。

「——キンゾー？」

「——アリカ？」

2人は、同時に呟いた。

* * *

見いつうけえたあぞお、キンジいいいいい。

視界に収めた怨敵の姿に、俺は痛みも忘れて口角を上げた。

敵は本能寺——じゃない、体育倉庫にあり。あいつとは逆方向にぶつ飛んでつたから、やたらと距離が離されてしまったが、やっと追いついた。キンジは、第2グラウンドの隅っこに建てられた体育倉庫の入り口に突っ立っていた。見る限り、無事だ。まあ、だからどうというわけではないが。

ようし、ここで会ったが100年目。今こそ我復讐せり。

——って、げっ!? なんじゃ、ありや?!

なんか、キンジから10メートルぐらい離れたところに、6、7体ぐらいセグウェイが転がってやがる。あの殺人マシン、まだあんなにいたのか。

しかし……キンジの奴、全部ぶっ壊してやがる。んだよ、あいつやっぱ自分でやれるんじゃないやねえか。

……いや。

今俺は見たぞ。あいつが、カツコつけるように前髪なんぞをかきあげたのを。

普段のあいつはあんなキザだったらしいマネなんぞしねえ。つーことは……、

「ヒステリアモードか」

去年教えてもらった（というか頼むから説明させてくれとキンジに一方的に教えられた）キンジの秘密を口に出し、その事実が示す意味に俺の額に井桁が浮かぶ。

あの野郎、俺が死に掛けてる間に、（おそらくは）さっきの女の子といちやいちゃしやがったな……！

一瞬で俺は沸騰する。どこまで俺を怒らせれば気が済むんだ、あいつは。

ふざけんな！ もう許さん、ぶっ殺してやる！

ついに報復のチャンスを得た俺は、キンジから7メートルくらいの位置まで近づき、

「キンジッー」

せめてもの情けとして、呼びかけてやる。もう遅いがな。

それにキンジがこちらを向いた瞬間、俺はヒップホルスターから愛銃・グロツク18Cを抜く。

間髪を入れずに構え、そのままキンジ目掛けて発砲――

――する寸前で、射線上にもう1台のセグウェイが割り込んできた。

まだいたのかよ!?

と驚きながらも、俺の指はすでに引き金を絞っていた。

勢い余って3発ほど撃ってしまった弾丸が、割り込みをかけられたせいで、偶然セグウェイが搭載したUZIに全弾命中する。

バガンツ！ と激しい音を立てて、UZIはバラバラに破壊された。

く、くそう……なんて邪魔な！ 奇襲が失敗しちゃったじゃねえか

！

幸福の女神でもついてんのか、あの男には。

だとすればこれは俺の運が悪かったんだなと自分を納得させながら、俺は拳銃をホルスターへと戻した。

こうなった以上、もう攻撃のチャンスはないと見ていい。ヒステリアモードのキンジはハンパじゃない。俺じゃ絶対勝てない。

恨みを晴らせなかったことに落胆しながら、俺はキンジの下へ向かう。その途中、UZIが転がっていたので、マガジンを引き抜いて中の9mm弾だけもらった。短機関銃だけあって、20発ぐらい入ってたな。何か一つぐらい得しないと、やってられねえよ。

「悪いな、鍊。助かった」

ポケットにしまったUZIの弾丸をジャラジャラ言わせながらすぐ近くまで近寄った俺に、キンジは声をかけてくる。

助かったってなんのことだ？

つーか、何爽やかに笑ってんだこの野郎、ヒステリアモードでさえなけりや——いやまあ、そうでなくとも多分負けるが。

「まだ油断すんじゃないぞ」

俺はまだお前への復讐を諦めたわけじゃないぞ、という意味を込めて、せめてもの反撃をする。小さすぎて、自分が情けなくなってくるが。

「ああ、わかってる。気をつけるさ」

……なんだこの返事。これは挑戦を受けるってことか？

上等だ、いつか闇撃ちしてやるよ。

と、

「それよりお前、ずいぶん汚れてるな。大丈夫か？」

「ん？ あー……ま、見た目ほどひどくはねえよ。防弾制服の恩恵もあったしな。それほど大怪我にやなっちゃんねえよ」

「そうか……」

ほっ、と心底安心したという表情のキンジ。その様子からは、心配していたという心配が伝わってくる。

……なんだよ、クソ。そういうことされたら、怒るに怒れねえじゃねえか。

思わぬ態度に氣勢を削がれた俺は、なんだか馬鹿らしくなって怒り

を収めることにした。仕方なく、な。

「……で？ さつきの女の子はどこ行った？ 一緒じゃねえのか？」
頭の中を切り替えて、俺はキンジに尋ねてみる。

こいつがここにいてるってことは、あの子もいるってことだろ。助け
てくれようとした相手だからな。気にならないわけがねえ。

……って、

「おい、どうした？ そんな苦虫を噛み潰したみたいな顔して。近く
にいんだろ、あの子？」

「あ、ああ。まあ、そうなんだが……」

と、キンジは困ったように体育倉庫の中にあつた跳び箱に顔を向け
た。

つられて俺も眼を向けると、そこでは、なぜかさつきの女の子が隠
れるように跳び箱の中から顔だけ出して、こつちを見ていた。

状況が分からず、俺はキンジに説明を求める。

「おい、なんだよこれ。一体どうしたんだ、あの子」

「あー……それを説明する前にだな。お前に言うべきことが——」

俺の質問にキンジが、何かを言いかける。

だがそれが最後まで紡がれる前に、箱入り娘（上手くね？）が跳び
箱から飛び出してこちらに駆け寄ってきた。

彼女はキキツと急ブレーキをかけ、キンジにビシイ！ と人差し指
を突きつけた。

「い、言っとくけどね、お、恩になんて着ないわよ！ あんなオモチヤ
ぐらいあたし一人でも何とかできた。これは本当よ、本当の本当！

……そ、それに今のでさつきの件をうやむやにしようたって、そう
はいかないんだから！ あれは強制猥褻きようせいわいせつ！ レッキとした犯罪よっ

！」

「……ふう、よく聞いてくれ。さつきも言ったが、それは悲しい誤解
だ」

えー、なにこれ。またキンジのやつなにかやったの？

ホント、次から次にトラブルを起こす奴だな、こいつは。

というか俺もう帰っていいかな。

「誤解だろうが6階だろうが、あたしのむ、むむ胸を見たでしょ!? それ
は事実よ!」

「それは……まあ、否定できないが」

「ほら見なさいッ!」

一方的にまくし立てる女の子に、あまり強く言い返さないキンジの
言い合いは、はたから見るとなかなか面白い見世物ではあった。

俺は一つ息をつき、そろそろ仲裁すべきかもな、なんて思っていた
んだが。

続くアリアの台詞で、そんな考えは吹き飛んだ。

「久しぶりに会ったと思ったら、あんたいつの間にかそんなヘンタイに
なったわけ? キンゾー!」

「……………」

…………え?

久しぶりに会った、だって? それに、キンゾーだと?

おいおいお前、その名前は……。

「いやだから俺はヘンタイじゃ……はあ、おい錬。お前からもなんと
か言ってくれ」

たじたじといった具合のキンジが、俺に辟易とした調子で助けを求
めてくる。

だが、生憎と俺はそれどころではなく。

気づけば俺は、震える声でキンジに声をかけていた。

「お、おいキンジ……こいつ、今、『キンゾー』だったか?」

「……気づいたか」

「ちよつと! なに無視してんのよ、キンゾー!」

俺とキンジの会話に割り込んでくる女の子。

だが俺の疑問には、図らずも彼女自身が答えをくれた。

『キンゾー』。正しくは、『金三』^{きんぞう}。俺が知る限り、その名を知っている
人間は3人のみだ。

一人は当のキンジ、もう一人は俺、そしてもう一人は……。

俺は、プルプルと微妙に振動させた人差し指で彼女を指差し、キン
ジにひきつった顔を向けた。

「……………マジ?」

「ああ、大マジだ。いいか、鍊。この子は——」

「まだ無視する気!? いい加減にしないと——」

もう半ば以上、この子の正体を確信する俺に。

キンジと女の子は。

「——アリカだ」

「——風穴開けるわよ!」

同時に、言ってきたのだった。

* * *

有明鍊がキンジたちと合流を果たす、その少し前。

相も変わらず跳び箱に嵌ったままで、キンジとアリアは互いを呆然と見合っていた。

「き、キンゾー? 本当にキンゾーなの?」

「あ、ああ……。じゃあ、お前もアリカでいいんだよね?」

「うん……」

交わす言葉も、どこか呆けている。2人が驚愕の只中にいることは、もはや疑いようもなかった。

「……………」

どうすればいいかわからず、そして何を言えばいいのかわからず、2人は密着状態を維持したまま、お見合いを続けていた。

永遠に続くかと思えるような静寂の間。だが永遠などというものが存在しない以上、それはいずれは破られる。

今回は、突如2人が入る跳び箱を襲った複数の衝撃によって。

「ッ! まだいたのね!」

その正体に気づいたのは、アリアだった。次いで、キンジも悟る。

今のは、着弾の衝撃。つまり今、自分たちは銃撃されているのだと。

だが、誰が? 唯一心当たりになりそうなUZIはさきほどこの小さな女の子が破壊したはずだが。

「いたって……何がだ!」

『武偵殺し』のオモチャよ! あのヘンな二輪! 数は7!」

(ま、まだいたのかあれ……! しかも、7台も!)

今のキンジには見る事ができなかったが、確かに体育倉庫の外では、計7台のUZ I付きセグウェイが襲撃をしかけていた。

アリアはそれに拳銃1丁で応戦する。跳び箱の側面に空けられた穴から銃口を突き出し、反撃を開始した。

が、圧倒的に火力が足りない。1対7。しかも相手はサブマシンガン。おまけにこちらはすし詰め状態。不利な要素しかなかった。

だからこそ、アリアはキンジに助勢を請う。

「キンゾー、手伝って！ 戦力が足りないわ！ あんたも応戦しなさい！」

「む、無茶言うな！ こっちはお前が乗ってるせいで身動きすら出来ないんだぞ！」

「うっさい！ なんとかしなさい！」

できるか！ と内心で叫び、キンジは思考を巡らせる。

アリアの命令はいくらなんでも無茶苦茶だったが、確かに火力負けしているのは事実。このまま押し切られれば敗北が必至であることは、キンジにも理解できた。

しかし。

（だからといって、じゃあどうする!? 今の俺じゃあ、こんな状況どうしようもないぞ！）

情けないとは思いますが、それは言い逃れできないことだった。確かに、今のキンジではアリアの力添えにはなれない。

だが。

その状況を変えたのは、奇しくもアリアであった。

おそらく無意識ではあろうが、彼女はより狙いをつけやすいように、顔を跳び箱の穴に近づける。すると当然それに連動して、彼女の体もまた前面に移動する。

そしてさらに当然の帰結として、アリアの体——より正確に言うならば胸部が、キンジの顔面に押し付けられた。

（あ——）

その瞬間、遠山キンジは切り替わった。

ブラまでは耐えられたキンジの性的興奮は、胸の柔らかな感触に

あつさりと引き出された。

ドクドクと血潮のうねりを感じながら、キンジは低い声でアリアに尋ねる。

「——やったか、アリカ」

「ううん、向こうは一時撤退してるだけよ。すぐに戻ってくるでしようね」

言葉通りにセグウェイを射程圏外まで追い払ったアリアに、キンジは薄く笑った。

そして、

「強い子だ。それだけでできれば上出来だよ」

「——は？」

突如様子の変わったキンジにアリアがいぶかしんだ直後、キンジはお姫様だつこでアリアを抱え上げた。

思わず声を上げるアリアに、キンジが微笑む。

「ご褒美にちよつとだけ——お姫様にしてあげよう」

「は、はう!?! ど、どどどどうしたのよキンゾー!?! おかしくなっちゃったの!?!」

「そんなつもりはないんだけどね」

跳び箱から跳躍で抜け出し、真っ赤に紅潮するアリアを重ねて置かれていたマットに座らせるキンジ。

アリアにはもう、なにがなんだかわからない。わきやわきやと両腕を振りながら一体なんの真似だと詰問する。

それにキンジは、ただ一言で答えた。

君を守る——と。

そしてその宣言は現実のものとなる。体育倉庫の外に出たキンジはセグウェイ全機をあつさりと撃破してみせた。

それを見たアリアは、感嘆の声を上げて立ち上がる——と、ストーンとスカートが落下した。

どうやら先の爆発の煽りを受けて、留め具が壊れてしまったらしい。アリアは先ほどとはまた違った意味で頬を染めた。

慌てて跳び箱に帰還したところで、キンジが戻ってくる。

「どうだったかな、お姫様？」

その第一声がまたキザつたらしくて、でもそれが妙に心をくすぐつて、アリアはどもりながらもなんとか返した。

「ふ、ふん。まあまあね、き、キンゾーのくせに、やるじやない！」
それはどうみても照れ隠しだったのだが、それはさておきアリアはなんとかスカートとチャックをくつつけようと苦心する。

その様子にキンジが事情を察し、彼は自らのベルトをアリアに投げ渡した。その意味を察したアリアは、大人しくそれをスカートに通していく。

女性の着替え（というほどでもないが）をじっくり観察する趣味のないキンジは、倉庫から出る。もはや残骸と貸したセグウェイを眺めながら、そういえば鍊は大丈夫なんだろうか、とぼんやり思う。

そして、彼はチラリと振り返ってアリアの姿を視界に収める。

その容姿に、キンジははつきりと覚えがあった。切り替わったキンジならば、交わした言葉すら思い出せるほど鮮明に。

彼は困ったように一度髪をかきあげて、

（ああ……本当に、アリカなんだな）

と、心中で呟いた。

* * *

あー……アリカですか。そうですか。

なるほどなあ、言われてみれば確かにこんな顔だった。あん時とは髪型が違ってたからよく分からなかったが、このちっこさで赤紫色の瞳の女の子なんて、まさしくアリカだよなあ。

というか、

「で？ なんだってそのアリカがこんなところにいんだよ？」

「わからん。武偵校ぶていこうの制服を着てるってことは、ここの生徒なんだろうが……」

「だよな」

キンジと2人、このちんまい子がなぜここにいるのかを議論する。おかしいな、なんで日本にいるんだこいつ？

と、その時アリカがギンツとこちらを睨みつけてきた。

「なによ、あんた。なれなれしくその名前であたしを呼ばないで」
「はあ？ 何言ってるんだ、ちびデコ」

いきなりの悪態に、思わず言ってはならないことを言ってしまった。

や、やべー。ぶつ殺されるかも。

が、予想に反して彼女が爆発することはなく、代わりに一瞬眉をひそめたかと思うとすぐにくりつとした両目を見開いて、

「そのふざけた呼び方……あんた、ひよつとして錬夜^{れんや}!?!」

「おう。なんだオメエ、気づいてなかったのか」

「ふん。今気づいたんだから問題ないでしょ？ それよりあんた、また一段と目つき悪くなったわね。なんか髪も伸びてるし」

「まーな」

この野郎、人のコンプレックスをあつさり指摘しやがった。

言ってなかったが、俺の目つきは悪い。すこぶる悪い。昔からその傾向はあったんだが、最近は顕著になってきている。ただ見ているだけなのに睨まれたと受け取られることもしばしばあるほどだ。

そして、俺は去年よりも髪を伸ばして後ろで一房にくくっていたりする。別にイメチェンとか狙ったわけじゃないんだが、まあ願掛けみたいなもんかな。俺は卒業したときにこいつを切ると決めている。つまり、生きてここを卒業するという誓いの表れなんだ、これは。

つーか、なんか随分と弛緩した雰囲気になっちまったなあ。始業式の朝っぱらから、なにを俺たちは同窓会みたいなことをしてんだか。

——つと、そうだ。

俺は結局なんでアリカが怒っていたのかわからなかったことを思い出し、キンジに訊いてみることにした。

「でよお、キンジ。お前一体なにやってアリカを怒らせたんだ？」

一切の遠慮なく、軽い口調で放たれた俺の問いかけ。
しかしそれを聞いた2人の表情が、ピシッと固まった。

あー……地雷踏んだか、これ？

「ぼつ、馬鹿！ せつかく流れそうな雰囲気だったのに……!」

「ふ、ふふふふ……そうよ、そうだったわね。その話がまだ済んでな

鬼の形相で追いかけてきたアリカが叫ぶのを聞きながら、俺は立ち上がる。

おいキンジ。お前、なんか犯罪者にされてるぞ。ほら、さっさとあいつのとこ行って鎮めて来い。ついでに捕まっちまえ。

「それから錬夜！ あんたが怪我してたら救護科呼んであげるつもりだったけど、犯罪者を幫助ほうじょするっていうんなら話は別よ！ あんたもあたしの標的だわ！」

「んだとツ!？」

いやホントふざけんな！ 俺、何一つ悪くねえのにいつもこんな目に……！

呪いでもかけられてんのか、俺は。

「覚悟しなさい、あんたたち！ ひざまずいて泣いて謝っても許さない！」

怖えよ！ 何その性悪女王みたいな宣言!？」

アリカは背中からジャキジャキと日本刀ポンとうを二振り抜き出し、構えながら俺とキンジに向かって駆け出した。

あわや細切れか、と戦慄したのだが、

「——みやきやつ!？」

どういうわけか、彼女は接近してくる途中でスッ転んでしまった。

え……？ どういうことだ？ なにやってんの、あいつ？

その光景を見てハテナマークを飛ばす俺に、隣で立ち上がったキンジが言う。

「さすがに元パートナーとかなんというか……考えることは同じだったってことか。お前がタマばら撒いてくれたから、俺がやる手間が省けたな」

同じく立ち上がった俺は、キンジの台詞を噛み砕いて理解する。

……ま、まさかアリカのやつ、さつき転がってつた9mm弾を踏んづけたのか!？」

ちよっ、じゃあ俺がスッ転ばせたみてえじゃねえか！

また一つ理不尽な恨みを買ってしまい顔を青ざめる俺の肩を、キンジはポンと叩いた。

「ほら、逃げるぞ錬。あいつが冷静さを取り戻したら、今度こそあの
二刀流ダブラで八つ裂きにされちまう」

「あ、おい、待てよー!」

せめて、弁解させてくれ!

という俺の心の叫びも尻目に、キンジは飛び出した。

当然一人でここに残ることがどれだけ愚かしいことかを理解して
いる俺は、それについていくしかなかった。

そんな俺たちの背中に、

「この卑怯者! でっかい風穴あけてやるんだからあ!」

アリカは、実に空恐ろしい台詞を投げかけるのだった。

* * *

——後に、遠山キンジは述懐する。

「これが俺たち、『アルケミー』と。後に『緋弾のアリア』として世界
中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神崎・H・アリアとの。硝煙の
ニオイにまみれた、最低最悪の『再会』だった」——だどよ。

その意見にはまあ、俺もおおむね賛成しよう。

だが、そこに一つ付け加えさせてもらおうとするならば。

遠山キンジ。

神崎・H・アリア。

有明錬。

——俺たちの、再会。

それはきつと運命を。

——変えてしまう、再会だった。

8. 神崎・H・アリアによる唯我独尊な命令

「この卑怯者！ でつかい風穴あけてやるんだからあ！」

と叫んでから、神崎・H・アリアはペタン、とその場に座り込んだ。その足元には、10数発の銃弾が転がってある。そのせい先ほど転倒したことを思い出したアリアは、その内の一つをムカつきまぎれに掴んでブン投げた。

金色の弾丸が描く放物線を見ながら、アリアは小さな吐息をつく。

(キンゾーと錬夜……か)

思い浮かべるのは、2つの影。

遠山キンジ。

有明錬。

つい先ほど逃げていった、少年たちである。

久しぶりだったな、とアリアは過去を回顧する。

彼らと出逢ったのはそう、今から半年ほど時計を巻き戻したところだった。

といっても、行動を共にしたのは、たったの3日だけ。おまけに最後の日以外は敵同士としての関係しかなかった。それが突然の再会において友好的な（アリア視点でだが）会話を交わせたのは、やはり3日目の出来事がそれだけアリアにとって印象的だったからだろう。少なくとも、きっかけ一つで思い出せるくらいには。

その理論で言えば、キンジたちも自分のことをちゃんと覚えてくれていたのだと気づき、アリアは少しだけ頬を染める。嬉しさと照れくささ、その両方で。

ぶんぶんと頭を振って熱を冷まして、軽く目を瞑る。

(相変わらず凄かったな)

と、アリアは思う。

瞼の裏に浮かぶのは、鮮やかにセグウェイ全てを沈めたキンジの姿と、傷つくことを一切いとわず仲間を救おうとした錬の姿だ。

彼らを見て、アリアは素直に感嘆する。

アリアは、武偵である。それも、故郷であるイギリスにいたころは、

ロンドン武偵局のお抱えとして、欧州に名を轟かすほどの実力者だった。

中でももつとも有名なものが、今まで標的にした犯罪者を全て捕まえているという話だ。それも、99回連続、全てをたった1回の強襲でケリをつけている。

しかし、かような実力を持っていてなお——遠山キンジと有明錬の2人をアリアは評価していた。

アリアは自問する。

自分には、あれほど手際よく迎撃を行えただろうか？ 自分には、あれほど危険を顧みず誰かのために動けただろうか？

答えは、きつと否。

「うん……やっぱり凄い」

もしもこの場にあの少年たちが、いや、彼女を知るものが近くにいるならば絶対に言えないことをアリアは目を開いてポツリと呟いた。

思い出が、視界に重なる。いつかの日を思い出して、アリアは彼らが変わっていなかったことを知る。

……いや、まあ。

（で、でもあれはダメだわ！ あ、あああれは強^{きょうわい}猥！ お姫様抱っことかそんなんじゃない！）

という風に、ただだけないこともあったのだが。

ただ、アリアは知らない。正確に言えば、過去にアリアがキンジの実力を目撃していたとき、彼は切り替わっていた。のだが、そのタイミングにはアリアに構えるような暇がなく、戦闘時だけで時間切れが来ていたという事実は、キンジと錬の2人しか知らないことであつた。

咄嗟に思い出してしまった光景に、誰にしているのかよくわからない言い訳を胸中で叫ぶアリア。

その姿ははたから見れば完全に変な光景だったろうが、そんなことは現在進行形で悶々としているアリアにはわからなかった。

というか、それは今はどうでもいいのだ。いや、よくはないが。

そんなことよりも重要なのは。

(あいつらと、また会えたってこと。そして、この武偵高の生徒だつていうこと)

何よりも僥倖だったのは、そこだった。まったく予想していなかったことだが、これはアリアがこの東京武偵高にいる目的を果たすための、重要なフアクターだった。

「パートナー……」

と、アリアは小さく呟いた。

同時に、思った。いや、期待した、といってもいいかもしれない。

あの2人なら。

あの2人なら、アリアが欲して止まなかった存在に、なってくれるかもしれない。

「——調べてみよう、あいつらのこと」

そのためにはまずそうするべきだ、とアリアは思いつく。

確かに、アリアと彼らは旧知の仲ではある。が、とはいえほとんど知らないといってもいいレベルの情報しか持っていない。なにせまだアリアが知る個人情報、名前くらいしかないのだから。

そうとなれば善は急げだ。急ごうがなんだろうが回り道をしない猪突猛進さこそが、アリアの本領だった。

アリアは立ち上がり、パンパンとスカートについた砂を払う。それから彼女は、強襲科^{アサルト}へと調査のために足を向ける。あれだけの戦闘能力なのだ、きつと強襲武偵^{アサルトD.A}だろう、と推理とも呼べないような推理でアリアは進む。

まずは聞き込みだ。資料はあとでいい。とりあえずどんな武偵かとか実績とかを聞いてみよう。

繰り返しになるが、幸い名前は知っているのだ。

「待ってなさいよ、キンゾー！ 鍊夜！」

その響きは悪くない、と彼女は思う。

彼らがあつても、捜し求めていた人たちであつたならなおさら特別な名になるだろう。

そう——アリアの『パートナー』になれる者たちだつたなら。ちなみに。

この少し後、聞き込み先で「そんな名前の生徒は知らない」と言われて首を傾げる未来の自分を、アリアはまったく知ることはなかった。

* * *

「死にそう……つか、死にかけたよなあ、俺」

と、俺は自分の席でぐったりと伏せながら、深いため息を吐いた。
マスターズ 爆弾事件の報告を終え、ボロボロの制服を購買部で買い替
え、救護科で軽い治療を終えて、俺は今この新クラスにいる。

新学期により新しくクラス分けされたことで、俺は1年A組所属から2年A組所属ということになった。

ちなみに、席は廊下から2列目の前から3番目。有明だから窓際の前らへんが普通の席だろ、と思うかもしれないが、武偵高ではちよつと違う。確かに1年の一番初めはそんな分け方なんだが、これがその次からは変わる。一言で言ってしまうえば、早い者勝ち方式になる。拙速を尊ぶ武偵を目指す以上、新たな節目から遅れるようなやつに席の自由権はない。

でもよ、教務科の皆さん……この制度、おかしくね？ 今日の俺たちみたいなのがあって来るのが遅れても、席は残った場所ってんだから。いやまあ、別にそこまでこだわりねえけど。

反対に、中にはやたらこだわる奴もいるけどな。去年、1年C組の新木君あらきが席替えのためだけに5時から学校に来てたつてのは、有名な話だ。本人の話じゃ、狙撃を警戒してのことだったらしいが。

……って、別にどうでもいいかそんな話は。

なんか、疲れて思考が変な方向に行ってる。これは一回休んだほうがいいかも知れんね。

アリの力は……まあ、後で考えよう。わからなけりや、最悪インフォルマ情報科でも使うか。ここの制服を着てたつてことはここの生徒つてことだろうし、そうなりやその存在を情報科が知らないはずないからな。

だからなにはともあれ、休憩だ。体を休めなきや、今日の授業を乗り切ることもできねえ。

「おい、飯塚いづつか。悪いけど、先生来たら起こしてくんね？」

「なんだよ、鍊。お前始業式もフケたくせに、そんなこと言ってるのか。まあ、いいけどよ」

「馬鹿。サボったわけじゃねえ、いろいろあったんだ。とにかく、頼むぞ」

「うーい」

たまたま前の席にいた探偵科インケスタの男子に目覚ましを頼み、俺は一時仮眠に入ることにする。

今日は、朝からとんだ目に遭ったんだ。もうこれ以上、なにか起きてくれるなよ。

という願いがわずか10分程度で裏切られることになるとは露にも知らず、俺は疲れた身体を癒すために眠りに落ちていった――

* * *

「――ん。鍊。おい、鍊、起きろ」

「……ん」

俺の名を呼びかける声に、沈んでいた意識が浮上する。

薄目を開ければ、目に入るのは見慣れない教室の光景。

あー……そっか。俺、新しいクラスで寝たんだっけ。

ふあ……ちったあ、眠れたみてえだな。少し、楽になった気がする。

「さんきゅ」

俺は、約束どおりに起こしてくれた飯塚に伏せたまままで礼を言う。起きたにや起きたんだが、駄目だ、まだ眠い。

もうこのまま先生の話ブツチして二度寝しようかなとか考えていると、飯塚が俺の肩をトントンと叩いた。

「おい見ろよ、鍊。去年の3学期からの転入生だよ。強襲科にあるなカワイイ子いたんだな」

「あー？ 転入生だ？」

別にどうでもいいよ、そんなの興味ねえし。しかも強襲科女子って。地雷要素じゃねえか。

などと全学年の強襲科女子に9mm弾やら投げナイフやら拳やらTNT火薬やら飛ばされそうなことを考えつつ、まあ見るだけならい

いかと思いなおす。どれ、眠気覚ましにこいつの言うカワイイってのがどんなもんか見せてもらおう。

「そう思つて顔を上げた俺は――」

教壇に立つている高天原先生の隣にアリカが佇んでいるのを見た。

「……………」

……………え――ツ!?

ななななんで!? なんであいつがいんの!? こけさせた俺を殺しに来たの!?

違う違う、あれは俺じゃなくてキンジが悪いんですー! と心の中で平謝りしながら、俺は飯塚の背に隠れる。こいつは、今年も同じクラスの車輜科Aランク武偵・武藤剛気ほどじゃないんだが、背が高めなんぞな。目隠しくらいにはなるだろう。

と、そんな俺の耳に、アリカのアニメ声が飛び込んできた。

「先生。あたしはあいつの隣に座りたい」

はい?

意味がわからず飯塚の陰からこつそり見てみると、アリカはちつこい手で誰かを指差していた。

その先にいるのは――キンジだ。

やった! と思わず内心でガツツポーズをした俺を、一体誰が責められようかいや責められまい(反語)。

キンジさまあ! 俺の願いが通じたんだ! アリカは、俺じゃなくてキンジを標的にしたらしい。きつと、犯罪者の幫助ほうじょ云々も勘違いだと気づいてくれたんだろう。

「よ、良かったなキンジ、なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ! 先生! オレ転入生さんと席代わりますよ!」

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえ。じゃあ武藤君、席を代わつてあげて」

いいぞ、剛気、高天原先生(今年も担任だったらしい)、もっとやれ。ただでさえ転入生という珍しいイベントに加えたアリカの行動に、がぜんクラスが盛り上がってくる。基本的にこいつら、お祭り好きだからなあ。

と、そんな雰囲気もなんのその、アリカは教壇から降りて、つかつかとキンジの席の前まで歩いていった。

そして、彼女は腕を組みつつ、

「キンゾー……ううん、キンジ、でいいのよね？」

開口一番、そんな確認を取った。

げ、名前バレてら。俺のもバレてんのかな。

アリカの質問を受けて、キンジが顔を渋くする。

「……どこで知ったんだ？」

「さつきちよつとね。まさか、偽名とは思わなかったわ」

「それはお互い様だろ。お前こそ、神崎・H・アリア……が、本名なんだよな？」

「ええ、そうよ」

ん……？

2人の会話に、俺は眉をひそめる。え、なに？ まさかあいつも偽名だったのか？

てことは……あー、あん時俺ら、互いに偽名を本名だつて勘違いしてたのか。ま、結局最後まで本名名乗らなかつたしな。

半年越しに明かされた真実に俺が呆れていると、

「——つと、そうだ。キンジ、これさつきのベルト」

と、訂正された名前を呼びながら、キンジのベルトを放つて返却した。あー、そういやさつき、そんな話キンジから聞いたっけ。

で、キンジがそれをキャッチした、その時。

ガターンツとけたたましく椅子を鳴らしながら、これまた2年連続同じクラスの峰理子が立ち上がった。

あいかわらずのフリフリ改造制服姿で、彼女は大声でしゃべりだす。

「分かった！ 理子、分かっちゃった！ これ、フラグバツキバキに立ってるよ！」

なに言ってるんの、こいつ。

「キーくんベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！ これ謎でしょ!? 謎でしょ!? でも理子には推理で

きちゃった!」

ピコーン! と効果音が出そうな感じで人差し指を立てる理子。

推理、ねえ……。いい予感しねえなあ。

『探偵科のお騒がせ娘』の異名を持つ理子の言葉に、俺はいぶかしさ全開で彼女を見る。

理子は入学時は強襲科だったんだが、半年くらいして「理子飽きちゃった」とか言って、探偵科に転科した経歴を持っている。まあ、そっちの方が性に合ってたのか、ランクはAになったんだけどな。

ただし、それは調査とか情報戦においての話だ。それもまあ探偵としては確かに重要な技術ではあるんだが、肝心の推理はいつもトンチキなものを出してくるんだよなあ。

さて、今日はどんな迷推理が飛び出すか。

嫌な予感がしつとも見守る中、理子は神をも恐れぬ大胆推理をぶちかました。

「キーくんは彼女の前で、ベルトを取るようななんらかの行為をした! そして彼女の部屋にベルトを忘れていった! つまり2人は——熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよ——!」

ええええええええっ!」

ば、バカっ! おおお前なんてことを! ちよつとぐらいふざけた推理ならまだしも、これはアウトだろ!」

だってさつき、キンジ(と巻き添えで俺)はアリカ——じゃない、アリアだっけか? に銃で撃たれたり投げられたり斬りかかられたりしたんだぞ!? 絶対え、嫌わてるはずなのに、そんな奴と恋人同士なんて言われたら……って、ほら見ろ! アリアめちやくちやプルプルしてんじゃない! 100パーキレてるだろ、あれ!」

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつのまに!? 影の薄い奴だと思ってたのに!」 「女子どころか他人……いや錬以外に興味が無さそうなくせに、裏でそんなことを!」 「せつかくレン×キンだと思ってたのに! フケツ!」

ガクガクと震える俺の憂慮など一切斟酌しんしゃくせずに、ギャラリーは勝手なことを言いまくる。

こ、この、気づけバカども！　アリアの震えがどんどん強くなっていることに……！

つーか、「錬以外に」ってなんだよ。変な意味みてえだろうが。後、その女子。お前にいたっては完全に違う目線で俺とキンジを見てるだろ。

って、今はそれどころじゃねえ。早く、理子を止めないと。このままだと、またアリアはさっきのように暴れてしまうかもしれない。そうになったら、俺にも被害が来る可能性がある。

だからこそ俺は、最悪の事態を回避するために意を決して立ち上がる。

そんな俺に与えられたのは、いきなり腹部を襲った強烈な衝撃だった。

「ぐふおえっ！」

多分誰にも聞こえないくらい小さく、俺は呻く。痛みのせいで上手く声が出せなかった。

こ、これは、強襲科時代なんとも喰らったからわかる。防弾制服に銃弾が撃ち込まれた痛みだ。というかさつき、銃声が2回しつかり聞こえたし。

その犯人は、両手を広げて2丁のガバメントを握ったアリアだ。こいつ、とうとうブチギレて、発砲しやがった。別に推奨はされてないだけで、禁止ではないからな。校内での発砲は。

で、タイミング悪く立ち上がった俺が、丁度その射線上に入ってしまった、というオチらしい。

「ぐ……ッー！」

必死に鈍痛に耐えながら、俺はゆっくりと席に座りなおす。さすがに、「痛ってー！」なんて叫んだりはしない。いちいちそんなことやってたら、いい笑いものになる。

だが、痛いものは痛い。すごく痛い。おのれちびデコ、後で覚えとけよ。

今ここでやり返すことを諦め、しかたなしに俺が脳内で羊を数えながら気を紛らわしていると、

「れ……恋愛だなんてくつだらない！ 全員覚えておきなさい！ そういうバカなことを言うやつには——風穴あけるわよ！」

アリアが、本日2度目となる風穴宣言をした。もう、勝手にしやがれ。

と、言いたいことを言っただけ満足したらしいアリアは、フンツと一つ鼻を鳴らして、

「ねえ、キンジ。あんた、鍊夜が何組か知らない？」

キンジに、そんなことを尋ねた。

……え、俺？

ちよつ、待てキン——

「……何いってんだ、鍊ならあそこにいるだろ」

あつさりとキンジは俺の方を指差して、バラした。まあ、キンジが言わなくてもどうせ他のやつらがバラしただろうけどな。みんな、こつち見てるし。

アリアはその視線に導かれるようにこちらを向き、

「なんだ、あんたも同じクラスだったんじゃない。探す手間がはぶけたわ。さつきぶりね、鍊夜。あんたは鍊でいいんだっけ？」

あーあ。見つかったよ。

ここで無視するわけにもいかない俺は、嘆息しながらアリアに返す。

「まあ、な。そういうお前はアリア改め、アリアでいいんだろ？」

「そ。改めてよろしく、神崎・H・アリアよ」

「調べたんなら知ってるだろうが、有明鍊だ。久しぶりだな、ちびデコ」

……あ、また言っちゃった。やばい、どうにも当時の癖が出てる。

案の定アリアは柳眉を逆立て、怒りを露にする。

「ちよつと、鍊！ あんたその呼び方やめなさいって言ったでしょ！」
「わ、悪い！ 今のはマジで間違えた。なんか懐かしくて思わず言っちゃったんだよ」

ウソじゃない。本心だ。正直に言ったので許してください。

これは今度は流れ弾じゃなく直接撃たれるかと戦々恐々とする俺

に、アリアは大きいため息をついて、

「……はあ。まあ、いいわ。あんたはそういうやつだったわね。ただし、今のは再会に免じて許すだけ。次はないわよ?」

「あ、アイアイ・ママ」

わかったわね、とジロリとねめつけるアリアに俺はカクカクと頷く。

——つと、そうだ。

「そーいやお前、さつき探す手間が省けたつってたよな? なんか用でもあつたのか? 再会の挨拶とかか?」

「まあ、それもあるんだけど……ん、今じゃなくていいわ。——鍊、とりあえずあんたも、あたしの隣に来なさい」

「……は?」

え、何言つてんのこの子?

と言おうとしたら、キンジの右隣のさらに右隣（つまり新アリアの席の右隣）に座っていた矢野が「せ、せんせー! あたし、有明君と席代わります!」と剛気の焼き増し台詞で席交換を申し出た。よつぽどさつきの銃撃がインパクトあつたんだろうな。俺が矢野の立場でもそうするだろう。

だが残念ながら俺は当事者。何されるかわかつたもんじゃない、絶対面倒なことになるだろう。このまま唯々諾々と従つてたまるか!

「あのよ、なんだって俺がそんなことしなきゃ」「風穴あけられたいの?」「ならないんだって思ったけど、やっぱそれでいいや」

弱えー! 弱すぎるぜ俺えー!

でもしかたなくね? 台詞と一緒にガバメント（しかも2丁とも）向けられたら、従うしかなくね?

そんなわけだとほとほとキンジの2個右隣の席につく。アリアは、俺とキンジの間の席に、まるでそれが自分の定位置のように堂々と座った。

最後に、

「う、うわー、レンレンにまでフラグ立っちゃってるよ」

と、理子がめずらしく小声で呟いた。

今すぐ折れる、そんなフラグ。

「あつはつは！ 新学期早々君も大変だね、鍊」

「るせーよ、時雨。おめーは順風満帆なようだなによりだな、オイ」と、皮肉を交えながら、俺は鈴木時雨にそう言った。

今は昼休み、場所は一般校区ノルマルマイルの中庭。昼休みが始まった途端にクラスの子バカたちがアリアとの関係性を聞き出そうとしてきたので、毎度おなじみ発煙弾スモークでまいてきた。多分アリアも喰らってるだろうから、後でぶち殺されるんじゃないかと怯えていることは内緒だ。

で、校舎裏でキンジと飯食ってから、休憩がてらジュースでも飲もうと、自販機のあるここに来たわけだ。

そしたらそこには時雨が何人かの女友達といたんだが、彼女は俺を見つけると友達と別れてこっちに来た。

ので、今は2人で自販機横の壁に寄りかかってジュースを飲みながら、俺の愚痴につきあってもらっているところだ。

中学のころからいささかの陰りもみせない、むしろさらに磨きがかかった美貌を持つ彼女といれば、当然周囲の視線はこちらへ突き刺さってくるんだが、もう慣れた。これが昔はとてもじゃないが耐えられなかったんだから、ある意味俺も成長してんだよなあ……。

などと変なところでセンチメンタルな気分になる俺に、時雨はオレンジジュースを一飲みして、

「いやはや、しかし驚いたよ。まさか君やキンジから聞いていた『アリア』が、あのアリアのことだったとはねえ。世間は狭いというか、なんとというか」

「同感だ。二度と会いたくないと思ってたわけじゃねえが、二度と会うことはないとは思ってたからな。ビックリしたのはこっちだぜ。ま、それはキンジと……多分、アリアもだろうけどな」

「だろうね。だが、とはいえあの難物が誰かに興味を持つとは珍しい。知己とはいえ、君たちは彼女に目を付けられたんだろう？ ちよつとしたニュースだよ、それは。情報科あたりが号外でも出すんじゃないかな？」

「それは全力で遠慮してえが……難物ねえ」

どっちかってと危険物って感じだが。

サイダーで喉を潤し、俺は時雨に尋ねる。

「つーか、そもそもお前アリアのこと知ってんのか？ 去年はあいつとクラス違うはずだし、お前は尋問科ダギユラだから、強襲科のあいつとは接点ねえだろ」

「なに、直接会うことだけがすべてじゃないよ。君はそういうのに疎いから知らないかもしれないが、強襲科を中心として、彼女は結構噂になってる」

噂？

「神崎・H・アリア。君ももう知っているとと思うが、彼女は去年の3学期から転校してきたらしくてね。転入してからこっち、武偵ランクSの肩書きに恥じない実力を周囲に示しているらしい」

「へー。Sランク、か。どおりですげー腕してたわけだ」

「そういや、半年前会ったときも、半端じゃない実力だったっけな。ただ天は二物を与えずとはよく言ったもので、彼女にも問題があった。その実力が高すぎると、本人の性格に難があるので、孤立してしまっているらしいよ。もっとも、私から言わせれば去年の錬とキンジのコンビのほうが凄まじかったにも関わらず、君たちに人望があったことを鑑みれば、単に彼女の性格に起因しているのだと思うけどね」

「……よせよ。昔の話な上に、いつも言ってるだろうが。ありやキンジに対する評価だ、俺は関係ねえ」

「やれやれ、意固地だねえ君も」

困ったように時雨は笑い、俺はもう一口サイダーを飲む。

「そう、あの評価を受け取っていいのは、キンジだけだ。コンビこそ確かに組んじやいたが、俺がしたことなんてあいつの邪魔ぐらいだったのだから。」

俺の態度に時雨は何を思ったのか、すこし黙ってから、

「……もう一つ情報があつてね、アリアはただのSランクじゃない。彼女は、二丁拳銃と二刀流を得意とする戦闘スタイルから、『双剣双銃カドト』

の『アリア』と呼ばれているそうだよ」

『双剣双銃』……『二つ名持ち』セカンドホルダーか。そりやすげえ」

高名な武偵になってくると、『二つ名持ち』といって自然と異名が付けられることがある(ちなみに理子のは違う)。世の中には、名前だけでなくもこの二つ名だけで犯罪者に恐れられる武偵もいる。もつとも、普通は学生の身分で付くようなものじゃねえんだけどな。

——つと、もうこんな時間か。そろそろ戻らねえと、授業が始まっちゃう。

俺は近くにあつたゴミ箱にカンを放り入れながら、時雨に礼を言う。

「サンキュな、時雨。愚痴聞いてもらったのもそうだし、情報ももらった。今度、なんかで借りは返す」

「気にすることもないと思うけどね。中学時代の相棒のよしみ思ってくれて構わないよ」

と、実に気風のいい返事を返して、時雨は去っていった。さて……と。キンジの方も、なんか情報は得たのかね？

* * *

放課後。

俺は、キンジと2人、第3男子寮への道を歩いていた。

空は既に日が落ち始め、世界を茜色に染め上げている。長く伸びた影に一日の終わりを漠然と感じながら、俺はキンジの話を聞く。

「つたく、あいつら……他人事だと思って、楽しみやがって」

「ま、そりゃ同感だがよ。そもそもなんでアリアは、あんな風に俺たちに固執したんだろうなあ？ まあ、半年前にあんな出会い方をした以上多少は気持ちもわかるが、それにしたって度が過ぎてねえか？」

帰りのHRで高天原先生の話が終わるのも待たず、アホなクラスメートは俺たちを昼休み同様問い詰めようとしてきたので、キンジと協力して逃げ出した。誰も話を聞いてくれないことに、高天原先生、ちよつと泣きそうな顔してたな。

キンジは嘆息してから、

「わからん。ただ、聞いた話じゃ、アリアは朝の爆弾事件の後俺たちの

ことを調べまわっていたらしい。どこから聞いたのか知らんが、俺たちが元・強襲科生だつて情報を仕入れて、強襲科の生徒に聞き込みしてたそうさ。情報科にも出向いてたそうだから、大方俺たちの資料でも漁ってたんだろ」

「そりやまた徹底してんなあ、オイ。朝、あいつが濁した『用事』つてのに関係あるんだろうが……何狙ってたんだ、あいつ？」

「俺にもわかんねえよ」と漏らすキンジに、俺はとりあえず時雨から聞いた情報を話してみることにした。ま、別に後で直接本人に聞いてもよかつたんだがな。とりあえず事前に考えられることは考えようつてわけだ。

アリアが強襲科のSランクであること、双剣双銃という二つ名を持っていること、それと――

「強すぎて、あるいは性格に難があつて、孤立してるんだとよ」

「ああ、それは俺も聞いた。ワンマンプレイは相変わらず、だな。だけど、あれでも男連中の間じゃ人気者らしい。写真部が盗撮した体育の写真とか、高値で取引されてるらしいぜ」

盗撮つて。大丈夫かよ武偵高。

しかし、人気はあつても孤立している、か。昔時雨が「人気があることと人望があることはイコールじゃない」とか言ってたが、まさにそんな感じだな。

「あと、友達すらいないらしいぜ。昼休みにも、1人で弁当食つてたらしい」

「げ、マジかよ。不憫だな、あいつ。でもまあ、さすがにその情報は関係ねえだろ」

「そりやそうか」

締め不重要度が全然高くない情報をやり取りして、情報交換は終わった。

そうこうしている内に、寮はもう目と鼻の先というところまで来ていた。近くにはコンビニが一軒営業しているのが見える。

――あ、そうさ。

「悪い、キンジ。先帰つててくんね？　ちよつと用事が出来た」

「？ わかった。じゃあな、錬」

「おう」

手を振るキンジに俺も返し、俺はつま先の向ける先を変える。

さつてと。コンビニ行って夜飯でも買ってくるかね。いつもは自炊なんだが、今日はもういろいろありすぎて疲れた。飯作る気力がない。

というわけで、俺はコンビニから漏れる光に向かって歩いていった。

* * *

(今日は本当に……ありえんことが起こりすぎた)

キンジは、第3男子寮の自室に入るなり、ソファに寝転んだ。あまり高くはない品とはいえ、キンジの気だるさを残す体を受け止めるには十分な柔らかさを発揮する。それだけでキンジはもう、少しだけ疲れが取れた気がした。

それもそのはず、朝からあれだけいろんなことがあって、やっと手に入れた静かな時間なのだから。

まずは、朝一番に幼馴染である白雪の来訪。これはまあ、いつものことではあるから、まあいい。ただ会話中にチラリと白雪の下着(黒のブラ)が見えてしまったのはいただけなかったが。

次に、爆弾事件。あれはおそらく、最近話題になっていた『武偵殺し』の模倣犯(本物はすでに捕まったと聞いている)だろう。だがだとすると、その狙いはなんだろうか。たいてい爆弾魔は無差別に犯行を起こすから、あれもその類か？ が、万が一キンジ個人を狙ったのだとすれば、何の目的で？

誰かに恨みを買われるようなことなんて――

(……まあ、あるか。武偵なら、恨みの1つ2つ珍しくない)

もつとも、それは大抵恨みの前に「逆」が付くのだが。

それはともかく、3つ目。これが一番大きなことだが、『アリカ』――いや、アリアと再会したことだ。懐かしさを感じる暇もない騒乱の渦中による再会ではあったが、それはそれである意味自分たちらしいと思う。

ただまあ、それはいい。世界は広くて狭い。偶然再び邂逅することぐらい、あつてもおかしくないだろう。

だが疑問なのは、アリアがキンジたちのことを嗅ぎまわっていたことだ。これは錬も言っていたが、多少はまあわかる。偽名まで使うような出逢いだったのだ、それくらいは武偵として十分理解できる。

だがさすがにやりすぎだ、とキンジは思う。調べ方が尋常ではない。そこまでする必要がどこにある？

——まさか、と一抹の不安がよぎる。

(俺を……『ヒステリアモード』の俺を、『正義の味方』として利用する腹か？)

——ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

キンジがヒステリアモードと呼称している、遠山家に伝わる遺伝体質(キンジは端的に病気と言っているが)である。

このモードに入った遠山家の人間は、一時的に常人の約30倍の神経伝達物質を分泌し、中枢神経系の活動を劇的に亢進させる。

つまり、その人間隔離した強さを誇るようになるのだ。

だが、これには欠点……というか、あるトリガーがいる。

それは——性的に興奮すること。

さらに、ヒステリアモードの本分は、超人的な力を発揮することではなく、子孫を残すためのものだ。ゆえにこのモードのキンジは、女性に優しくなり、キザになり、そして強くなるのだ。自分を女性によく見せて、子孫を残せるようにするために。

そして過去、ヒステリアモードの詳細は知らないまでも、キンジを興奮させると強くなり女の絶対的味方になる、ということを知った者たちがいた。

それが、キンジが通っていた神奈川武偵高付属中学の女子たちである。

彼女らはひよんなことからこの事実を知り、以後キンジを『正義の味方』と呼び体のいい便利屋——もっと言えば、なんでも言うことを聞く奴隷に近い存在として扱った。

なにせキンジはこの体質を嫌っていたせいで、女性に関して無知か

つ初心なところがある。つまりは簡単に興奮させられるので、さぞ扱いやすかっただろう。

そんな状況に嫌気が差したキンジは、地元を離れ東京武偵高に進学した。

今度は、この体質に振り回されないように。父や兄と同じく、自在に扱えるように。

だが今、まさかまたあの繰り返しになろうとしているのか……と、そこまで考えたところで。

（いや、それはない。アリアは、ヒステリアモードには気づいていないはずだ。それに万が一そういうつもりなら、鍊にまで目つけた理由がない）

と結論づける。

アリアにヒステリアモードを見せたのは、今日を含めて2回。勤のいい奴ならばバレる可能性はあるが、気づいた様子はなかった。過去ヒステリアモードを利用されたキンジだからこそ、その情報の流出には一際敏感だった。

そして、なによりそこに鍊が絡む理由が不透明だ。ヒステリアモードがアキレス腱に成りうるのはキンジのみなのだから。

しかしだとすると、議論はまた最初に戻る。結局、アリアが自分たちを調べ回っている「ピンポーン」説明がつかないのだ。

これは一度、誰か探偵科の生徒にでも依頼したほうがいいかもしれない。いや自分も探偵科だが、所詮今の自分は「ピンポーン、ピンポーン」Eランク。餅は餅屋、という言葉に従おう。

あるいは、情報科あたりか。情報を集めてから、改めて探偵科生に推理してもらうのもいいかもしれない。いや、だとすると理子に頼むという手も「ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン！——」

「あーもううっせえな！ 放課後くらい静かに過ごさせろよ！」

少し前から激しく自己主張していたインターホンにキレながら、キンジはソファから降り玄関に向かった。

一体、どこのどいつだ。この部屋はキンジが転科したこととたまたま相部屋の男子がいなかったことで、1人部屋なのだ。したがって、

ルームメイトが帰ってきたという線はない。

他に候補と言えば、白雪、武藤、不知火、鍊くらいのものだが、武藤は車輛科、不知火は強襲科で放課後訓練をしていて、今この寮にはいない。白雪はこんなふざけたチャイムの鳴らし方はしない。

じゃあ、鍊か？ とキンジは予測を立てながら扉を開けて――

「遅いっ！ あたしがチャイムを押ししたら、5秒以内に出ること！」

直後、鍊とは似ても似つかないアニメ声でそう命令された。

というか、眼前にいるこのちっこかわいいツインテール娘は……、

「あ……アリア!？」

「Hello. キンジ。ちよっとお邪魔するわよ」

「お、おいつ!？」

制止も聞かず、侵略者^{インベーター}ことアリアは、持参してきたらしいトランプ柄のトランクを転がしながら室内に侵入する。その様は実に平然としており、キンジが入るなど叫ぶも、逆にトランクを運べと命令する始末だ。

しかも勝手にトイレを探しだして入ってしまったのだから、他の男子寮生に騒ぎを知られることを恐れたキンジには、おとなしくトランクを自室に引き入れるしか選択肢がなかった。

(なんなんだ、あいつは……！　とうとうこんなところまで来やがった！)

戦々恐々としながらも、キンジはすごすごと引っ込んでいく。

しばらくするとアリアはトイレから出てきて、室内を鑑定するように見回しながら、一番奥のリビング、その窓際まで歩いていった。

「あんた、ここ1人部屋なの？ 他の住人は？」

「……今は俺1人だ。それがどうした？」

「どうせなら鍊も一緒に住んでれば手間が省けたのにつて思っただけよ。……ま、相部屋じゃないのはいいわ。大した問題じゃないし」

よくわからんがそれはきつと俺にとつては大問題なんだろうな、と思いつつアリアの目的を思案したところで、件の彼女が振り返った。しやなり、とピンク色に輝くツインテールが波打つ。

夕陽による逆光を背に、アリアはキンジにビシッと指先を突きつけ

た。

そして、実に力強い笑みと、赤紫色カメリアの瞳で、

「キンジ。あんた、あたしの——」

と、言いかけて。

あつさりと指を下ろした。

「……やっぱいいわ。これは、鍊と一緒に言うから。とりあえず、鍊の部屋に行くわよ」

(な、なんだったんだ……?)

無駄に身構えていた手前、拍子抜けしてしまった。が……なんだ今のは。アリアが言いかけた台詞、なにか凄く嫌な予感がするのだが。「鍊の部屋って、確かこの隣だったわよね。あんたたち、どうせなら一緒に住めばいいのに」

などと勝手に言いつつ、アリアはさっさと部屋を出て行ってしまう。口に出さずとも「ついてきなさい」と言われているのはわかりきっていた。

ここで無視するという選択肢もあるにはあるが、それを選ぶと教室のときみたいにガバメントが火を吹くような気がしたのでやめておいた(そしてそれは正しい)。

しづしづアリアに続き、キンジはお隣さんの扉前に立っているアリアの横に並ぶ。

さてはこいつ、鍊の部屋にも行くつもりだったけど、俺の部屋のほうがエレベーターから近いから荷物置いていきやがったな、と探偵科らしく推理しながら、キンジはルームプレートに目をやった。

入っているプレートは2枚。

一つは、『有明』。もう一つは、『式しき』。

それを確認したアリアは、んー、と首を捻り、

「ねえ、キンジ。この式しきってやつ、今部屋にいるのかしら？ あたし、鍊にしか用ないんだけど」

なんとという傍若無人っぷりだ、と顔をひきつらせつつも質問には答えやる。身の安全的な理由で。

「いや、こいつはいない。今頃、確かドイツに短期留学しているはず

だ」

「ふーん、なら好都合だわ」

式にとつても好都合だろう。もしも今この部屋にいたら、追い出されていた可能性もあったのだから。

それはともかく、とアリアは滑らかなシミ一つ無い指をインターホンに乗せ。

——押した。

* * *

「あん？」

コンビニでから揚げ弁当を買って帰り、玄関で靴を脱いで廊下上がると、インターホンが鳴った。

えー……勘弁してくれよ。こっちは疲れきってるつのに。誰だよ、こんな時に。

とはいえ、居留守を使うほど俺はこの寮の連中に恨みを持っているわけではないので、コンビニの袋を靴棚の上に置き、玄関を開けた。

——そして、思わずすぐに閉めたくなった。

「見なさい、キンジ。鍊は5秒以内に開けたわ。武偵にはこういうすばやい行動が求められるのよ」

「慎重になることだって、武偵には必要な条件だ」

とかなんとか、俺の前で言い合っているのは、

「キンジ……に、アリア？」

そう。そこにいたのは、声に出したとおりの人物、遠山キンジと神崎・H・アリアだった。

……いや待て。キンジはまだわかるにしても、なんでアリアがいる？

「そうよ。じゃ、ちよつと入れてもらおうから」

「はい？ いやお前なに言ってる——つておいおいおい!？」

なんでぐいぐい部屋に入ってるのこいつ!?

しかもそれに続いてキンジも「すげえデジャヴユだ」とかなんとか言いながら続く。一体何なんだお前ら。

こいつらが奥に進んでるのに、家主の俺が玄関に棒立ちしてるわけ

にもいかないので、俺も慌てて追いかける。

俺がリビングに入ったところには、なんか2人で話していた。

「ほら、お望みどおり錬も来たぞ。そろそろ説明しろ、アリア。お前、これは一体なんのつもりだ」

「そんなに焦らなくても、ちゃんとわかってるわよ」

何だ。こいつら一体、何しようとしてんだ？

まったく状況がわからない俺に構わず、アリアはビシツと効果音がつきそうな鋭さで俺とキンジの中間あたりを指す。

「キンゾー、錬夜……ううん、キンジ、錬。あんたたち——」

視線はあくまでまっすぐに、一切臆さない頑強さを灯して。

威風堂々とした立ち振る舞いにはいささかの儂さも感じさせず、ただツインテールだけ揺らめかせて。

そして——告げた。

「——あたしのドレイになりなさい！」

「……………」

……え、SMですか？

9. 誰もが真意を胸に秘め

ドレイ。それは、主人の所有物。

ドレイ。それは、永遠の労働者。

ドレイ。それは……SMのM担当？

「……………」

と、そんなくだらないことを考えながら、俺こと有明鍊と遠山キンジは無言でいた。

ていうか、目の前にいるこのちびデコ、今なんだった？

「ドレイになりなさい」、だと？

俺は一瞬その言葉が聞き間違いじゃなかったかどうかを吟味してから。

ぺちつ、とアリアのおでこに右の掌を当てた。

「うにゃ!? い、いいいきなりなにすんのよ鍊!」

「いやわけのわからんことを言い出したから熱でもあんのかなと」

突然のことに赤面するアリアに、俺は真面目な顔して言ってる。

うーむ……熱はないみたいだな。

ということは、こいつは正気で今の発言をしたというわけだ。

……馬鹿だろ、こいつ。

俺が呆れ返ってジト目になる中、アリアはソファにボスンと座りながら、

「ふん、そんなことよりさっさと飲み物ぐらい出しなさい! お客に

対するマナーがなってるわね!」

と、そんな命令をしてきた。

いやそもそもお前は客じゃなくて押しかけただけだろとか、マナーという言葉の意味を辞書で引いて自分の行動を当てはめてみるのかと思うことは多々あったんだが、そんな俺の心情はこのおちびさんには関係ないのである。

彼女はビシツと指を突きつけて、

「コーヒー! エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ! 砂糖はカンナ!
1分以内!」

なにそれ呪文？

「いや、1分って。お前、傍若無人すぎるだろ」

「あたしがやりなさいといったらやる！ ドレイでしょ、あんた？」
「なるとか言った覚え一言もないんですけどねえ!？」

と抗議しつつも、どうせごねたところでこいつが意見を翻すはずがないことはとつくにわかっていたし、そもそも従わなかった場合また銃弾が飛んでくるので、俺はおとなしくキッチンに引込む。くそう、負ける俺も俺だが、なんだあの暴君は。

ぜんぜん変わっちゃいねえ、と心中でため息をこぼしつつ準備をしていると、アリアと2人きりになるのが耐えられないらしいキンジがやってきた。

キンジは一切手伝うそぶりなんて見せず(ぶつとぼしてやろうかお前)、俺に尋ねてくる。

「鍊。お前、あの呪文みたいなコーヒー作れるのか？」

「んなわけねえだろ。エスプレッソまでならわかるが、そのあとの注文がよくわかんねえ」

パウダー状のエスプレッソの豆はある。エスプレッソマシーンもある。時雨と俺のルームメイト・式天真しきてんまが根っからコーヒー党なもので、うちには常備されているのだ。

で、一方俺はコーヒーにそんなこだわりはなかったんだが、使い方は習っていた(というより覚えこまされた)。やたら複雑だったが。

しかし……ルンゴとドツピオってなんだつけ？ 聞き覚えはあるんだが。

以前暇つぶしに時雨がエスプレッソを作っているのを見学していたときに、あいつはそんなことを言っていた気がする。あの時あいつ、なんて言ってたつけ。

……まあいいや。もう俺の適当な感じでやろう。文句を言われても作れないものは作れないのだ。

「あいつは小学生みたいなナリだから、苦いのダメそうだな。薄くなるように長めに抽出すつか。あーでも、エスプレッソって1杯じゃ少

ねえんだよな。2倍ぐらい入れとこう」

「こちやこちやとエスプレッソマシーンを操作し、俺自身なんと呼べばいいのかわからないコーヒーが製造されていく。

これはこれでいいとしても……カンナつてのはなんだ？ 砂糖つていつてたが。

もういいか、なんでも。砂糖なんてどれも同じだろ。豆の隣においてた、この何語かよくわからんパッケージの砂糖を使おう。この前時雨が使ってたのを見た。

アリアの好みなんて知ったこっちゃないので、感覚で適当にカップに投入していく。ここまで来ると実験みたいでちよつと楽しくなってきたのは内緒だ。

というわけで、実に適当極まりない作り方で俺流エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ（笑）は完成したのだった。

……お、おお。ブチ殺されるかもな、俺。こだわりを持つてる奴に下手なコーヒーはホントにやばいからな。前に喫茶店で天真がブチギレていたのを思い出す。

割と洒落にならない不安を抱えながら、俺はアリアにお手製実験ドリンクを差し出す。

アリアがそれを一口飲んだ瞬間、俺が逃走のために足裏に力を込めたとき。

「あら、ちゃんと出来てるじゃない。あんた、コーヒー作れたのね」と、信じられない感想をアリアが言った。

ええ、マジで?!

文句を言われることしか想定してなかっただけに、俺は胸中で驚きに驚いた。

ば、バカな、あんな適当な製法で褒められるなんて。

……いや、待て。こいつ、ちゃんと味を分かつて言ってるのか？ ホントは見栄はってなんか知ってる名前言っただけじゃねえの？

あー、なるほど。それなら納得だ。背伸びしたい年頃なんだな、こいつは。

ちゃんと子供らしいところがあるじゃねえか、と俺は妙に安心しな

がら、俺も乗ってやることにした。プライドを傷つけるほど、俺は鬼畜じゃないんでな。

「そりやどうも。たいした出来じゃねえけどな」

「謙遜するのはよくないわ。過小評価は、過大評価と同じくらい愚かなことよ」

などと、片目をつぶって薄く微笑みながら言うアリア。

おーおー言うねえ。そんなちっちゃくせに、大人びた台詞を。

……とは、無論口に出しては言わないのが俺である。

「お前の持論はどうでもいいがな。それより、だ」

と、こちらも俺が作ったなんちゃってコーヒーを飲みながら、キンジが言った。

「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその……お前を怒らせるようなことをしてしまったことは謝る。でもだからって、なんで俺たちのところへ押しかけてきた？ 知り合いは知り合いだが、ここまですることはないだろう？」

あー、そういやそうだった。流れに乗せられてすっかり忘れてたが、そもそもこいつは俺たちを調べまわる必要なんざねえだろ？ 再会の挨拶や朝の件で怒られるってことならまだしも、なあ。

再び顔を出した疑問に内心で首をかしげていると、逆にアリアがキンジに聞いた。

「分かんないの？」

キンジも答える。

「分かるかよ」

そりやそうだ。質問したのはキンジの方なんだから。

キンジの返答をどう思ったか、アリアは「あんたならとつくの昔にわかってると思ったのに」とやたらと理不尽な感想を零した。

で、今度は俺の方に顔を向け、

「鍊は？ あんたもわかんない？」

俺もかよ。

いきなりのフリに、俺は頭の中でどう返答したものか考える。とりあえず、まずははつきりさせたいことがあるので、そこから聞いてみ

よう。

「質問に質問を返すことになるんだが、お前が今朝言いかけた用件つてのはさっきのドレイがどうちゃらつてやつか？」

「正解。いいわよ、そうやって会話で情報を引き出すのは武偵の重要な技能だわ」

おい。そんなゲーム感覚で採点してんじゃねえよ。

辟易としながら、続ける。

「じゃあ、次だ。それはそのまま俺たちの情報を集めていたことに繋がっていて、ついでに言えばここに乗り込んできた理由にもなっている？」

「それも正解。うん、だんだん近づいてきたわね」

だんだんと、アリアの笑みも深くなっていくんだが。あれ、これ大丈夫なのか？　なんかどんどん自分から泥沼に嵌っていつてるような感覚がするんだが。

ま、まあいい。さらに考えを進めていこう。では今度は、なぜこのタイミングなのかということだ。調べようと思えば、こいつは3学期から転校してきたのだから、いくらでも調べられたはずだ。ではなぜそうしなかったか？

今日突然、ということとは当然そこにはなにかしらのきっかけがあったはずだ。そしてそれは、今朝の事件以外はありえない。あそこでアリアは、俺たちがこの学校にいることを知ったんだろう。

だとすれば。

「最後の質問だ。お前が俺たちを急に調べ始めたのは、なんらかの理由で俺たちに目をつけたからか？　もちろん、旧知だという理由以外で、だ」

「——正解。では、そこから導かれる答えは？」

すっかり先生気分なのか、気をよくしたアリアは笑顔を隠さなくなってきた。

こいつに乗せられるのは癪だが、まあ考えてみよう。

つってもなあ、今の質疑応答でわかった情報程度じゃ、結局答えはわかんねえんだよな。でもこの流れ、今更わかりませんでしたとは言

えない雰囲気だし。

——いや、でも待てよ？　そもそも、もとはノーヒントからの出題だったんだ。てことは、こいつは既にヒントを提示している、もしくは簡単に手に入る情報からわかる解答ってことか？

だとしたら、もう俺はその答えに片足をつつこんでいることになる。

思い出せ。今まで得た情報を。

推理しろ。それらを元にして。

パシパシと、頭の中でなにかが形づくられていく。漠然とした情報郡が、一つの完成図を描く。

瞬間、俺の脳裏に一筋の閃光が走った。

「……………」

そうか……そういうことだったのか……。

答えは、どうでもいいかと思って隠されていた。「重要ではないか」と思っていたものこそ重要なものである」と、時雨が言っていた通りだ。

俺は、キンジと交わした情報交換、その最後を思い出す。夕焼けの中交わしたなんでもない雑談の中に、正答は潜んでいた。

アリア。つまり、お前は——

「仲間が欲しいってところか？　貴族様？」

俺は、ある種の確信を持ってアリアに告げた。

やばい……あまりにも切ない真実に、思わず目元がうるみそうになっってくる。

キンジは言っていた。アリアは、昼ごはんをいつも1人で食べるほど孤独なやつなのだ。

だが、実はこいつはそれを寂しく思っていたのだろう。口ではなんと言おうが本当に孤独に耐えることは、人間には出来ない。

つまりこいつは、友達が欲しかったのだ。

しかし生来の性格のためか、アリアはなかなか友達を作ることができないでいた。だから、顔見知りでありまた同級生でもある俺たちと友達になろうと画策したわけだ。おそらく、席を隣にしたのも昼休み

に机をくっつけて飯を食べるためだろう。なるほどその光景は確かに友達らしい。ただわからねえのが、なんでそのために俺たちの経歴を調査あつたのかってことだが……まあ、そういう方面からどういう人物かプロフィールリングすることはできるからな。おそらくは万全の体制を敷こうと思うがゆえの行動だったのだろう。

しかしなんて不器用な女だ、神崎・H・アリア。あまり協調性のあるやつじゃねえのは知ってたが、まさかこれほどだったとは。わがままであると同時に寂しがりやなんて、最悪の組み合わせじゃねえか。

しかも照れ隠しのつもりだろうが、いきなりドレイ呼ばわりはねえだろうドレイ呼ばわりは。素直に友達になりましょうとも言えねえのか。

まあ、本気でドレイにするつもりだったってオチよりは、よっぽど可愛げがある。遺憾に思う気持ちがないでもないが、まあかなり泣けるオチだったので水にながすことにしよう。

あ、ちなみに最後につけた貴族様つてのは、俺なりの皮肉だ。別に言う必要もなかったんだが、これで溜飲を下げるということだ。

なんで貴族かといわれれば、女王様にしちやチビガキすぎるし、王女様には(幻想と知りつつも)清楚なイメージがあるから除外。あと、昔後輩の明ライトに借りた(押し付けられた?)ラノベに出てきた魔法学院の貴族の女の子がアリアみたいなきゃらだったからだ。

以上が、俺の推理。一片の隙もない、完璧な理論だといえよう。

そしてそれを聞いたアリアは、パチンと指を鳴らした。

「ベンゴー・ なによやるじゃない、錬！ しかももうそこまで調べてたなんて……仕事が速いじゃない」

俺の推理が正鵠を射ていたからか、アリアは上機嫌そうに口元に笑みを浮かべ、そう言ってきた。きつと、素直に言えなかった真意(友達になりたい)を俺が正確に見抜いてやったから、それが嬉しいんだろう。

どうだ、見やがれ蘭豹。お前俺が転科するとき「お前は頭使うより銃使うほうがよっぽど向いとるやろが」って言ってたけどな。俺にだって、推理の1つや2つできんだよ。

「お前、いつの間に……あ、さつき俺と別れた時か!？」

自分の中に眠っていた推理力に内心俺も少し喜んでいると、キンジが驚いたようにそう言ってきた。

へ？ いつの間になってなにが？

何を言っているのかよくわからない俺が疑問符を浮かべる中。

「キンジも早く錬に追いつきなさい。ただし、安易に錬から聞こうとしてもダメよ。武偵なら、自分で調べるの」

アリアが腕組みしながらキンジにそんな指示を出す。

おいおい、自分で言えよそんぐらい……とは思ったが、まあそれを言うのは酷つてもんだらう。きつとこんな方法でさえ、アリアには精一杯だっただろうから。

「はあ……俺は、錬みたいに優秀な武偵じゃないんだけどな……」

キンジがそんな台詞と共に息吐いて、肩をすくめる。いやいや、たまたまだよキンジ君。

と、その時。

くきゅーくと、なにやら可愛らしい音が聞こえた。

俺は、その音の発生源に目を向ける。やはりというかなんというか、そこにはブラウスに包まれたアリアのお腹があつて、

「……も、もう夕食には丁度いい時間だわ！ だ、だからこれは、おかしなことでもなんでもない！」

あー、そうだね。別にそんな真っ赤になって言い訳する必要もねえだろうに。

俺はキンジに視線をやつて、

「どうするキンジ？ そろそろ飯にすつか？」

「そう、だな。話もまだ終わってないし、俺も今日はいろいろあつて腹が減った。続きは食いながらにするか。お前、晩飯は？」

「から揚げ弁当を買つてる」

「じゃあ俺たちは下のコンビニでなんか買ってくる。財布が部屋にあるからな、一回戻るわ。ああ、鍵開けとくから俺の部屋入っていいぞ。……ほらいくぞ、アリア」

犬歯をむき出してがるると唸るアリアを引きつれ、キンジは部屋

を出て行く。その後ろについていきながら、俺も外へと向かう。そのついでに、靴箱の上に放置していた俺の晩飯を確保する。

まあ……朝からなんだかんだで、やつとあいつとも落ち着いて話せるんだ。積もる話や聞きたいこともある。

だって、あれから半年も経っているのだから。

そんなことを頭の片隅で考えながら、俺は弁当片手にキンジの部屋へと向かった。

* * *

「あら、ちゃんと出来てるじゃない。あんた、コーヒー作れたのね」

と、神崎・H・アリアは鍊が出てきたコーヒーを一口飲み、素直にその味を賞賛した。

もちろん、それは実家で味わったプロが淹れたものとは比べるべくもない出来ではあったのだが、まさか注文に沿ったものがきっちり出てくるとは思っていなかった（もつとも、エスプレッソぐらいは作れるだろうとタカをくくってはいたが）のだ。これは想定外の収穫といえた。

思いがけない鍊のスキルを快く思いながらソファに身を沈める彼女に、同じく鍊のコーヒーを飲むキンジが尋ねてきた。

曰く、なぜ自分たちを追いかけるのか、と。

（おかしいわね？ もう調べてると思ったのに。キンジはもしかして、戦闘専門なのかしら？）

頭の中でそんな推測を立てながら、アリアはパートナー候補であるキンジに聞き返すことにした。

実を言えばそんなことはなく、むしろヒステリアモードならば知能こそが本領となるキンジだが、当然それはアリアの与り知るところではない。

「分かんないの？」

「分からん」

間髪をいれないキンジの返答にアリアは一瞬眉根をよせ、ならばと今度は相手を変えて同じ質問をする。

その向かう先は、有明鍊。もう一人のパートナー候補である。

「鍊は？ あんたもわかんない？」

問われた鍊は、一瞬なにかを考えるように黙りこみ、そしてアリアに逆に訊きかえした。1つ、2つ、3つ。アリアはその一つ一つにイエスと答えていく。

そして聞くべきことを聞き終えた鍊は、静かに腕を組んだ。

その様は、まさしく真剣といった様子だった。きつとそれだけ、アリアの質問を真面目に考えているのだろう。

室内に静寂が流れたのは、一体どれほどの間だったろう。鋭利とも言える鍊の眼差しに、アリアはいつしか時間の感覚を忘れていた。

やがて鍊は腕組みを解き、スツとアリアを見据えた。

瞳が、合う。

あたかも、今朝と同じように。

(もしかして)

と、アリアの感覚が囁く。

それは期待。否、直感的ではあったが、半ば確信にも近い。

アリアには、鍊の眼差しが語っているように見えた。自分にはわかつている——と。

そして。

アリアの確信は現実の物へと変わる。

「仲間が欲しいってところか？ 貴族様？」

その口調は、疑問系でこそあるが確信に満ちているように思えた。

さらに、彼の目にはこちらを労わるような、心配するような、どこか優しい色がたたえられている。

(あの目……もしかして、ママのことまで調べたの？ だから、鍊はこんな風にあたしを心配してくれているような目で見るのかしら……？)

アリアの脳裏に浮かぶのは、彼女の母。神崎かなえが、アクリル板越しにこちらを見つめている光景だった。

無論、鍊に母親のことを知っているのかと聞くつもりはない。知っているのならわざわざこちらから言うまでもないし、逆にもしも知らないのならば今はまだ話して巻き込む気は無い。アリアはまだ、鍊、

そしてキンジの実力を完全に見極めていたわけではないのだから。

中途半端な力は、神崎・H・アリアには必要ない。そういう領域に、この16歳の少女はたった独りで立っているのだ。

だから代わりに、アリアは後半の台詞について思考する。

（あたしが貴族^{マスターズ}つてことを知ってるのは、せいぜいあかりや教務科ぐらいなのに。そのレベルまで調べてるってことは、もうかなり調査済みとみていいかもね。……少しぐらい泳がせて時間を与えるつもりだったのに、行動が早い）

神崎・H・アリアは、冗談抜きで貴族である。『H』家と呼ばれるイギリス人ハーフの父親の家は、イギリス国内でもかなり高名な一族だ。さらに、祖母がデイム——王室から叙勲される称号を持つている。そして、その『H』家の嫡女であるアリアもまた、英国貴族なのだ。

が、武偵高でその事実を知るものは限られてくる。少なくともアリアが知っている限りでは、後輩である間宮^{まみや}あかり、そしておそらく教務科くらいのものだろう。

しかし、その情報をすでに錬は得ていた。それも、彼女と出会った1日の間に。学校があったことを考えれば、もつと早いだろう。

確かに優秀な武偵（^{インケスタ}探偵科や^{インフォルマ}情報科などに限られるが）ならば調べられないレベルではないが、にしても早すぎる。しかも、去年まで^{アサルト}強襲科にいたことを鑑みれば、ある種異常なことと言えた。ずば抜けた戦闘能力を有し、調査能力まで優れているとなれば、まさしく武装探偵の面目躍如である。

やはり、自分の目は間違っていないかった。パートナーにするかどうかはともかく、錬は間違いなく今まで出会った中で最高クラスの武偵だ。

アリアは、考えていたなかで最良の結果が出たことに指を打ち鳴らし、

「ビンゴ！ なによやるじゃない、錬！ しかももうそこまで調べてたなんて……仕事が速いじゃない」

内心から溢れる喜びをもはや隠そうともせず、少しはしやぎながら錬の推理を肯定した。

そんなアリアをよそに、キンジもまた驚いていた。

(ど、どういうことだ？ 帰りに情報交換した限りじゃ、こんなこと全然言っでなかったつてのに……)

まさか、キンジに隠していたのか。いや、それはない。メリットもなければ、そんなくならないことをする奴でもない。そんなことは、去年パートナーだったキンジには分かりきっていた。

が、だとするとなぜ？

「お前、いつの間に……あ、さつき俺と別れた時か!？」

錬に尋ねる最中、キンジは気づいた。

そういえば、錬は最後まで一緒に帰ったわけではない。途中で、別れたはずだ。

(てことは、あの時からさつきまでの、たったあれだけの時間で調べ上げたつてのか……!)

早い。早すぎる、といつてもいい。

錬が優れた実力を備えていることは百も承知だったが、まさかここまでだったとは……。

未だ底が見えない元・パートナーにキンジは戦慄した。

「キンジも早く錬に追いつきなさい。ただし、安易に錬から聞こうとしてもダメよ。武偵なら、自分で調べるの」

すっかり上機嫌になったアリアは、弾んだ口調でキンジを叱咤した。といつても、別に調べがつかないならつかないでも構わない、と思っていたが。

(キンジは多分、根っからの強襲武偵アサルトDAなんだわ。だったら、戦闘で一緒に戦えるなら、それで十分。配フォーメーション置はそうね……あたしとキンジがフロントで、錬は後方支援バックファイヤつてところかしら。ううん、2人は元々パートナーだつて話だし、コンビにさせてあたしが補うのも面白いかも)

パートナーに選ぶかはまだ保留にしていた彼女の思考が、いつの間にか浮かれてついつい先走り始めていたことに、本人は気づいていなかった。もしも彼女の頭の中を覗ける日本人がいたら(というか武偵

高にはいるのだが）、『取らぬ狸の皮算用』ということわざを教えてくださいたかもしれない。

それはともかくとして、キンジが弱気な返答を返し、その後ちよつとしたことを経て彼らは夕食をとることにした。

* * *

「あーんっ……ふみゅ〜」
『ももまん』。

それは、松本屋が生み出した桃みたいな形をしたあんまんだ。ぶつちやけただ形が違うだけじゃね？ と俺は思っていたのだが、一昔前はこれがブームになったりしたんだ。世の中、何が当たるかわかんねえな。

が、俺はそのももまん全盛期でさえ、一気に3個も4個も平らげるような奴は知らない。

そう。今日の前で丁度4個目を食べ終えて幸せそうな顔した、神崎・H・アリア以外には。

「……なあ、キンジ。ありや、あんなうまそうに食えるほどのもんだっけか？」

「まずくはなかったし、普通にうまいといえばうまかったが……あそこまではちよつとな。見てるだけで胸焼けしそうだ」

「だよな」

とかなんとか言ってる間にもアリアは5個目を食いにかかっている、俺とキンジは同時に胸のあたりを押さえた。

——今俺たちは、キンジの家のダイニングでテーブルについている。キンジとアリアがコンビ二で買い物を終え、思い出話を交えながらの夜飯にするためだ。

で、その席で俺はさつき買ったから揚げ弁当（結構うまい。自炊がめんどいときはこれでいいかもしれない）、キンジはよく買うハンバーグ弁当を食っている。そんで最後にアリアが、ももまんを7個も買って今すべてを食い尽くそうとしているのだ。

ちなみにこれは完璧な蛇足だが、食事を始めるに際して、俺たちは再会を祝して祝杯（麦茶だが）を上げていたりする。これは俺が冗談

で提案したことなんだが、思いのほかアリアが食いついてきて、結局実行した。キンジはまあしぶしぶといった様子だったのだが、それでも乗ってくるあたりこいつもこの再会にはいろいろと思うところがあったのかもしれない。

俺は残り3つになったから揚げの数をさらに減らしつつ、アリアに問いかけた。

「んぐっ……そういやよ、アリア。あれからアガンベン家はもうなつたんだ？」

「当然、裁かれたわよ。一族郎党とまではさすがにいかないけど、それでもあれだけのものが出てきちゃったわけだしね。存在を黙認していただけても軽い処分が下って、利用していた連中は根こそぎ逮捕されたわ」

「うわー、怖えなそれ。外国の刑罰ってなんか重そうじゃねえか。なあ、キンジ？」

「重そうっていうか、お前世界の刑罰についてなら、全学科共通の教科書に書いてただろ。読んでないのか」

「あー……そういや、そんな気もするな。意外と真面目だな、お前」

「無駄に内申を下げたくないからな」

他愛もない話を続けながら、俺たちは箸をすすめる。

と、ひと段落ついたと思ったのか、キンジがアリアに割り箸を向けながら言った。

「……ところで、アリア。お前が言ったドレイってなんなんだよ。あれはどういう意味だ」

それはねキンジ君、友達のことだよ。

という具合に解説してやってもよかつたんだが、アリアが婉曲に言っている以上、俺がドストレートに言うのは躊躇われた。やれやれ、気を使うってのも大変なものだ。

アリアは5個目のももまんを制覇し、6個目をひとかじり。あたし幸福ですと言わんばかりの笑顔を顔に浮かべながら、

「あむ……強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に

武偵活動をするの」

……ん？　なんか、ちよつとちがくね？　友達になるだけじゃねえの？

とそう思ったんだが、すぐに思いなおす。これはあれだ、束縛というやつだ。友達が少ないやつは、そいつらが他の友達（自分が親しくない相手）といるのを好ましく思わない場合があると聞く。だから、少しでも一緒にいられるように転科しろってことだろう。

ウチのカリキュラムじゃ、午前4時間が一般^{ノルマ}教科で、2年A組で授業を受けるが、午後からは専門学科ごとに授業を受けるからな。キンジとアリアじゃ科が違うから、そこで離れることになっちまうんだ。……って、あれ？　これよくよく考えたら、俺にも言ってるね？

と、今まで気づかなかつた事実^{ノルマ}に思い至っていると、キンジがいきなりおろおろと慌てだした。

「な、何言ってるんだ。俺は強襲科が嫌で、一番マトモな探偵科に転科したんだぞ！　それに、俺は一般高校に転校して、武偵自体やめるつもりなんだよ。……それをよりによって、あんなトチ狂った所に戻るなんて——無理だ」

ああ、そういやそうだったつけ。

キンジは、来年の3月をもってこの武偵高を辞めるつもりらしい。まあ、あんなことがあつたんだ。仕方ないのかもしれないけどな。ここを辞めるって意思は固いだろう。

……俺？　俺は辞めないさ。まだ、約束も守れてねえんだから。

とまあ俺の話はどうでもいいが、アリアはキンジの発言を受けて、いきなり話をぶつとばした。

「あたしにはキラいな言葉が3つあるわ。『ムリ』、『疲れた』、『面倒くさい』。この3つは人間の持つ無限の可能性を、自ら押し留めるよくない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね？」

……どうしよう。しよつちゆう言ってるんだけど。3つとも全部。

ま、まあでも言ったからどうなるってわけでも……いい、一応聞いてみるか。念のため。

「ちなみに、言ったら？」

「風穴」

うん、実に予想通りかつシンプルな回答をありがとう。

これからは絶対言わないようにしましょう。

「お前が嫌いな言葉はよくわかった。だけどな、なんで俺なのかわからん。自慢じゃないが、俺はお前が仲間に引き入れるほどの武偵じゃない。鍊はともかく、俺じゃ役者不足だ」

「おい、キンジ。お前今、なにげに俺を売らなかつたか？」

「気のせいだ」

そうか。ならいい——つて、んなわけねえだろ!? 友達を平気で差し出してんじゃねえよ! アリアじゃねえけど、風穴あけてやろうか、アアン?

と言った場合、キレてベレッタが出てくるかもしれないので黙っていると、アリアがいつのまにか7個目のももまんを食べ終えながら言った。

「ウソいいなさい。半年前とそして今日、あんたが優秀だってことはもうお見通しなんだから。それに、あたしはもう決めたの。仲間にするなら、あんたたち2人とも一緒だって」

そりやそうだろ。友達が欲しいなら、1人より2人の方がいいに決まってる。

だが事情を知らないキンジは、アリアに訊き返す。

「だから、なんでだ？」

「あんたたちが元・『パートナー』だからよ。いい? 優れたパートナーは、相棒の能力をずっとずっと引き上げてくれる。これは、絶対。だからあたしはあんたたちコンビが欲しいのよ」

スツ——と、ももまんを食っていたときの表情はどこへやら、アリアは真剣な目をして俺たちを見据えていた。

なんだ、やたら力こもってんな。こいつにも昔、そう思わせてくれるようなパートナーがいたんかね?

だがまあ、確かにパートナーってのは悪いもんじゃない。実際俺は去年、キンジに助けてもらえばなしだった。だからアリアの言うことも、分からねえでもねえんだが……。

俺は一つ吐息を零し、

「……つってもな、アリア。俺たちのコンビはもう解消したんだ。俺とキンジが組むことはもう無えんだよ」

「……鍊の言うとおりだ。終わってるんだよ、俺たちは」

キンジもまた、何かを諦めたように呟く。

コンビを組むことはもうない。

そう。あの日、俺たちはそう決めた。

だからもう、俺たちは組まない。そういう約束だからな。

……だつてのに。

「やだー！」

「はあ!?」

たつたの2文字でこのちびっ子は俺たちに反論した……というか、単に駄々をこねたというか。

「やだやだやだ！ あんたたちは、あたしのドレイにする！ これは決定！ 絶対の絶対にしてやるって決めたの！」

いやいやいや。そんな手足をバタバタしながら言われても困るんだが。そしておそらくテーブルの下ではスカートが大変なことになっているだろうが、この場面で下を覗き込んだら、きつといろんなモノを失うよなあ。

「ふ、ふぎけんな！ とにかく、お前もう帰れ！ いくら知り合いだつていっても、そこまで従う義理はないぞ！」

おお、すごいぞキンジ。珍しく男を見せたじゃねえか。

立ち上がって玄関を指差すキンジ(帰れという意味表示だろう)に、アリアはふくれっ面になりながら、

「言われなくても、そのうち帰るわよ。キンジと鍊が強襲科であたしのパーティーに入るって言うまで、だけどね」

え、えー。なにコイツ、頑として退く気ねえな。

でもなあ、と俺は窓の外に目を向ける。そこにはすでに夜の帳が広がっており、見えるのは東京の灯りだけだった。

「おいアリア、つってもおめえ外見てみるよ、真っ暗だぜ。いくらなんでも、こんな時間まで女子が男子寮にいるわけにはいかねえだろ。ま

さか、泊まっっていくわけじゃあるめえし」

「あら、やるじゃない錬。よくわかったわね」

「……………はい？ 何が？」

「あつさりと言いつ返された俺は、今自分が何を聞いてしまったのかと首を捻る。

そんな馬鹿な俺に優しいアリア様は懇切丁寧に説明してくれやがりました。

「あたし、ここに泊まるから。もちろん、あんたたちが首を縦に振るまでよ」

「はあああああああああああああ!?」

男2人の絶叫が、夜の第1男子寮に響き渡った。

な、なにこいつ怖すぎるだろ!?! 俺たちへの執着心マックス?!

い、いくらなんでもそれは度がいきすぎてねえか…………?

まさか、これが噂のヤンデレってやつか。「2人がうんって言ってくれないなら、あたしが風穴あけてあげるね…………」とか言いながら病んだ瞳でガバメントを抜くつもりか。げに恐ろしきはヤンデレなり、という格言ができそうだ。

……………っていうか、そもそもこれがアリアの友達獲得計画だって推理は本当に当たってんのか？ なんか、そこはかとなく前提から勘違いしてるような気がしてきたんだが。

「ちよっ…………ちよっと待て、何言っただ！ 絶対ダメだ帰れ！」

「うるさい！ 泊まっってくつたら泊まっってくから！ 長期戦になる事態も想定済みよ！」

キンジの抗議を一顧だにしないアリアがビシイ！ と指差したのは、リビングに置いてあるトランプのマーク柄のトランク。ああ、見覚えねえもんが転がってると思ったらアリアのだったのか。

なんつー手回しのよさだよ、と俺の額を冷や汗が流れる——が。よくよく考えれば、こいつはここに泊まると言っていた。なら、下手に追い出そうとして被害を受けるよりも、いい方法がある。

俺はキンジの肩にポンと手を置き、

「諦めろ、キンジ。もう大人しく降伏して、こいつを泊めてやれ」

「はあ!? 何言ってるんだお前、他人事だと思いやがって! できるかそんなこと!」

「俺がどうかという問題じゃねえよ、お前こいつが素直に言うことを聞くような奴だと思おうか? こいつがそんなに殊勝なやつなら、俺たちはあそこまでボロボロになって帰国するようなこともなかったろうよ」

「ぐ……!」

俺の言い分の正しさを理解したのか、キンジは黙り込む。

……よしよし。これでキンジにアリアを押し付ける作戦は成功だ。後は自室で悠々自適に「じゃあお前も泊まれよ!」ってはあ!? 何言い出すんだこのネクラ男め!

「い、いやわざわざそんなこととする理由はねえだろ。俺は自分の家があるんだし。そ、それにアリアだって何人も男が同じ部屋で寝るのは嫌だよな?」

「別に構わないわよ。あんたたちなら」

「な……!」

う、嘘だろ……こいつ、そこまで感性がお子様なのか!?

想定外の事態にどうにかして逆転を図ろうとするも……駄目だ、キンジのやつが据わった目で俺を睨んでやがる。死なばもろともとはよく言ったもんだぜ、おい。

……はあ。しかたねえよな、もう。

「……わかった。キンジはアリアをここに泊める。で俺もここに泊まる。そういうことでいいな?」

「……ああ」

「うんうん。やっと素直になったわね。その調子よ」

今満面の笑みを披露しているこいつにグロツクを向けたらどうなるだろう。

そんなくだらない考えがよぎる中、アリアはさらに傍若無人さを発揮する。

「じゃあ、あたしはお風呂に入ってくるわ。ホントならあんたたち2人とも出て行ってもらおうところだけど、大人しく言うことを聞いたか

ら出なくてもいい。ただし覗いたら、風穴カーニバルを開催するから、覚悟しときなさい」

なんだその全世界から批判を浴びそうなカーニバルは。というか、その単語を俺の前で出すな。嫌な思い出が蘇る。

トランク片手に本当に風呂場に入っていたアリアを見送り、俺とキンジは顔を見合わせ、

「……………はあ」

と、大きいため息をつくのだった。

* * *

始まりがあれば終わりがある。それが当たり前のことであるように、騒動だらけだった今日という日もまた、終わりを迎えようとしていた。

学園島を静かに月明かりが照らす。その光は第1男子寮の一室にも降り注いでいて、遠山キンジを優しく癒していた。

(疲れた……………)

寝室に2つある2段ベッドの一つ、その下段に横たわりながら、遠山キンジは深い深いため息をついた。

疲れた。切にそう思う。

キンジは今やつと、本当にやつと休息を得ていた。肉体的には言わずもがな、主に精神的な意味で。

なにせ、ついさつきまで騒ぎの連続だったのだ。最前も、アリアが風呂に入っている間に白雪がやってきてどうにかアリアの存在を誤魔化したり、アリアと鍊がどちらが2段ベッドの上段で寝るか争い(珍しく鍊はこだわりを見せた)結局どちらも上で寝ればいいという結論に落ち着いたり、せめてもの仕返しなのか鍊がアリアを怪談話で脅かそうとしたり(不覚にも自分もちよつと参加してしまった)、最後の最後まで騒がしかったのだ。

そしてその全ての原因であるツインテール娘は今、もう一つのベッドの上段で、スヤスヤと幸せそうに寝息を立てていた。

「……………」

ちらりと、アリアがご就寝なさっているベッドに目を向けると、そ

の床にはマジックで「ここから入ってきたら殺す」という実に物騒な警告（これが冗談ですまないのが武偵高たるゆえんだ）がかかれており、ついでに地雷も数個仕掛けられていた。

本人は念のためにやっているだけでほとんど冗談みたいなものだと口をついていたが、おそらく越境した瞬間本当にトラップ（とアリア）はキンジを殺しにかかるだろう。

（なんつー理不尽だよ……）

と、キンジは一人ごちる。

こいつは悪魔かなにかだと悪態をつきながら、キンジはこの押しかけ少女——神崎・H・アリアという女の子について、頭を巡らせ始めた。

（本当に、なんなんだこいつは……。久しぶりに会うなり、いきなり押しかけて、好き勝手ほざいて、おまけに強襲科に戻って一緒に武偵活動しろだど？）

ふざけるな、と言いたい。

アリアにはアリアの事情があるのだろうが、そんなことは知ったことではない。たかだか3日（今日を入れても4日）程度の付き合いしかない人間のために自分の都合を押し殺すほど、キンジはお人よしにはできていない。自分の頭上で眠りこけている男ならばわからないが。

それに、とキンジはさらなる批判材料を思い浮かべる。

アリアは言ったのだ。キンジに向かって、「鍊と再び組め」ということと同義の台詞を。

（鍊とまた組む……いや、それは無理だ）

知らず、アリアに禁じられた言葉を胸中で呟く。

キンジにはもう、鍊と組む気はなかった。

ただ、これは別に鍊が嫌いだからという理由ではない。むしろ、去年の1年間に2人で越えた死線を考えれば、親友とさえ言える。

だから、落ち度は鍊にはない。あるのは……自分だ。

なぜなら、キンジは——

（……なに考えてんだ。別にもう関係ねえだろ。俺はアリアの申し出

を受ける気はないし、そもそも武偵自体辞めるつもりなんだから)

思い浮かべた情景をカットして、キンジは強く目を瞑る。

そう。キンジはいずれ——より正確には、来年の3月には武偵を辞めて一般校に転校する。そのための申請書もすでに持っている。

(俺は将来、特にやりたいことはない。何になつたつていい。何にもなれなくたっていい)

遠山キンジは、既に未来を見ていない。未来を見ずに、ただ『今』から逃れる方法だけを、強く渴望していた。

転校して、武偵をやめて、非日常から日常へ逃げ込んで、そうしてキンジはすべてを吹っ切りたいと願っていた。

(もう武偵だけにはなりたくない。武偵だけはイヤなんだ……)

キンジの頭に、『兄』の——遠山とみやま金一きんいちの姿がちらつく。

今の自分を見て、金一はなんと言うのだろう。

決して叶わない仮定を胸に、キンジの意識は深く深く沈んでいった

* * *

誰もが真意を胸に秘め、ゆえに誤解は加速する。

彼らが進む先に待つ結末がいかようなものか。

——それはまだ、誰にもわからない。

10. 瑠璃色少女は確かな感情を持つか？

「ただいまー」

「おかえり、鍊」

「……は？　なんでアリアが俺んちにいんの？」

「？　なんでって……彼女なんだから、いてもおかしくないでしょ？」

「………はい?!　彼女?!　お前が俺の?!　え、どゆこと?!」

「なに1人で騒いでるのよ、鍊ったら。それより……えいつ」

「おおおおおおお!!　ちよちよちよ、お前なにいきなり抱きつ

いてんの?!」

「んー……なんとなくそういう気分なの」

「なんとなくって！　なんとなくって……！　い、いいのか？　こん

なこと起こり得ていいのか？　いや、いいんだよ！　だって俺、今ま

でやたらといろいろ巻き込まれてきたじゃん!?　そろそろ報われて

もいいよねってことでこの幸せを享受したいと思います！」

「………ねえ、鍊」

「なんだよ、アリア——いや、なんだい、マイルスウィートハニー？」

「……もしかして、さっきまで誰か女といたんじゃないでしょうね？」

「ん？　あー………そういや、なんか理子といたような気がしてきた。

でもそれがなんだって」「裏切り者」「いうんだよ………はい？」

「裏切り者！　なによ、なんであたし以外の女と仲良くしてんのよ！」

「ええええええ!!　な、なに?!　どったのお前?!　なんでいきなりブ

チギレてんの?!」

「うるさい！　あたしだけを見てくれない鍊なんて、いらない！　あ

たしだけ、あたしだけを見てよー！」

「台詞だけ見ればすげえ愛されてるみたいな感じだけど、その両手に

持った日本刀は何?!　しかも、どう見ても刃無しノーエッジじゃねえんだけど!?

……あ、やめてお願いそんな振りかぶらないで死ぬからマジで死ぬ

から死ぎやあああああああああああああああ——」

* * *

「——あああああああああああああああ……あ?」

と、俺は呆けた声を出した。

アリアに斬り殺されそうになっていたはずの俺の目に飛び込んできたのは、見慣れた自室の天井……ではなく、若干違和感を感じる天井。

一瞬どういふことかわからなかったが、徐々に意識が覚醒してくる。そういや、昨日俺キンジの家に泊まったんだっけか……。

しよぼしよぼする目を擦りながら、俺は上半身を持ち上げる。それから視線を巡らせると、隣の2段ベッドの上段でアリアがすびすび眠っているのが見えた。あいつとは昨日上の段を取り合っただったか。やっぱ、2段ベットといえは上だからな。たとえガバメントで撃たれようとも、そこだけは譲れなかった。我ながら、変なところが頑固だな、俺。

「ふあ……あ。……キンジたちは、まだ起きてねえのか……」

大きな欠伸を一つ、眠気のせいであまりはつきりしない口調で、俺は残りの住人が未だ夢の中にいることを確認する。

眠気を飛ばすために背伸びして、俺はさっきの夢を思い出す。

玄関を潜り抜けるとそこにいたのはエプロン姿のアリア。そこから甘い話が始まるのかと思いきや、気づけば日本刀を構えたアリアに襲い掛かられていた。

「……なんだったんだ、あの空恐ろしい夢は」

はああああああ、と深いため息をつきながら、俺は頭をがりがりとかく。

ヤンデレなんて考えるんじゃないか。おかげで、酷え夢見ちまつたじゃねえか。

あー、駄目だ、さっさと忘れよう。文字通りの悪夢だ、あれは。

というか、今何時なんだ？ あいつらが寝てるってことは、まあそれなりに早い時間なんだろうが。

俺は、枕元に置いてあった目覚まし時計を確認してみる。長針は10を、短針は5を指していた。

……って、まだ5時じゃねえか。随分中途半端な時間に起きちまつたなあおい。

「んー今から寝直したら、登校時間に起きねえだろうな。つっても、こんな朝からゲームする気にもなれねえしなあ……」

俺の暇つぶし手段は、たいていがゲームに集約される。ので、ここであついでないだ買ったばかりの新作RPGを進めるという手もあつたんだが、あんまり騒がしくすると起こしてはならない仔ライオンを目覚めさせてしまう可能性がある。

そんなことになったらどうなるかなんて、月が沈めば太陽が昇ることくらいに明白だった。

……しゃーない。趣味じゃないが、ちよつくら散歩でもいくかね。というわけで、俺は少し気が早いが学生服に着替える。それから、財布と携帯だけ持って家を出る。武装は……まあ、いいだろ。こんな朝っぱらから武偵高内で襲われることなんざ、まずないしな。

外に出た俺を迎えたのは、太陽ではなく薄闇を残した夜空だった。とはいえ白み始めているのを見るに、日が昇るのはあと数十分つてところだろう。

俺はとりあえずまずは下のコンビニにでも行つてみようかと歩き出した。

当たり前だが、昼と夜では温度差がある。しかも、冬は過ぎたとはいえまだ春先。シンとした空気が、俺の体を包み込む。

それを少し心地よく感じながら、俺は学園島内でもなお24時間営業のコンビニにたどり着き、自動ドアをくぐった。

「いらつしやいませー」とお決まりの挨拶が俺を出迎える。さて、じゃあどうするか、立ち読みでもしようかと首をめぐらせたところで、俺はコンビニ内には似つかわしくない光景を見た。

配置的にいえば、中央あたりの陳列棚。その上部から、なにか細長い筒のようなものが飛び出していて、ときおり揺れていた。

というか……銃だよな、あれ。

よく店員がなにも言わないもんだ。普通なら即通報ものだぞ。これも、武偵高ならではなんだろうな。

俺はその銃の持ち主が気になって、陳列棚の裏まで回りこんでみた。

そこに、いた。

女子用の防弾制服に包まれた、アリアよりもお幼く小さな体躯。ライトブルーに染まる、シヨートカット。無機質に、しかしなにか不思議な魅力を感じる黄金色の瞳。完全な無表情にもかかわらず人形めいた美しさを持つ、整った顔立ち。

そして、その背にはスリングを使って狙撃銃——ソビエト連邦が生んだ年代物のセミオートマチックライフル、通称ドラグノフが担がれていた。

武偵高広しといえど、この特徴を持つ女子を、俺は一人しか知らない。そして、少なくとも彼女は知り合い以上の存在だった。

だから俺は、何の気なしに彼女——元クラスメート・レキに声をかけた。

「よ。レキじゃねえか」

何か商品を見ていたらしく棚のほうに向いていた彼女の顔が、声に反応して振り返る。

懐かしい、顔だ。もうどれくらい会ってなかったっけな。

レキは抑揚がない、しかしはつきりした口調で、

「おはようございます、錬さん」

「おう、おはよう。お前、こんな朝早かったのか？ 知り合いに会うなんざ思わなかったから、ちよつとビックリしたぜ」

「錬さんもこの時間に起きているから、こうして私たちが会ったのではないですか？」

「……俺は、まあちよつとな」

まさか怖い夢を見て起きちゃいましたなどとはいえず、俺は口ごもる。

というか、どうしようか？ とりあえず話しかけてみたものの、話題もない上にこいつ自身淡泊だからな。盛り上がるとは思えない。

とはいえ話しかけておいてじゃあなでは、なんというか少し気まずい。

無言になった俺に、心なしかレキが首をかしげたような気がして、俺は気づけばなんとなく提案していた。

「あー……レキ。暇つぶし……つつーのもおかしいな。よかつたら、ちよつと話相手になつてくれねえか？ 早く起きちまつたんだが、やることねえんだよ」

それは半ば、反射的なものだった。言つてから俺は後悔した。あまり人付き合いをしないこいつにそんなこと言つたところで、断られるのは目に見えていた。

だから俺は、断られる前にその提案を撤回することにした。が、それよりもレキの返答の方が早かった。

「構いませんよ」

あちゃー、断らせちまつた。女子を誘つて袖にされるのは、なかなか来るなあ。

地味に精神的ダメージを受けつつ、俺は苦笑する。

「まあ、そうだよな。こんなこといきなり言つても——つて、え？」
言つてる途中で、俺はなにか違つていることに気づいた。

えーつと、今レキはなんつた？ 「構いませんよ」、だつて？

つまり……、

「いいのか？」

「はい」

再び確認を取る俺に、レキは即答する。

え……マジで？

フリーズする俺に、レキは手に持っていた買い物カゴを示しながら、

「話すのは構わないのですが、先に私の買い物を済ませてもいいでしょうか？」

「え？ あ、ああ。もちろん」

「ありがとうございます」

レキは一言礼を告げると、棚からあるだけのカロリーメイト（やたらと在庫が多かった）をカゴに入れていき、レジまで持っていくた。その後ろ姿を見ながら、俺は呟いた。

「……珍しいこともあるもんだ」

* * *

「悪いな、俺のわがままにつきあってもらって」

「いえ。私も今差し迫った要件はありませんので、問題はありません」
「そっか」

レキの買い物が終わるのを待ち、俺たちは今コンビニ近くのベンチで約束通り会話していた。まさか、乗ってくるとは思わなかったな。

まあ、こんな朝早くに女子と2人でいようもんなら変な噂が立つかもしれないが、さすがにこんな時間から出てくるやつもあんまりいねえだろ。いや、俺たちみたいな例がいるから、否定はできねえけど。

それはともかく、だ。誘ったのが俺である以上、まずは俺が会話の種類をつくらねえとな。

俺はなにか話題はあるかと少し考え、まずは久しく会ってなかったことから話し始めることにした。

「にしても、お前と会うのも久しぶりだな。春休みは俺あ、ほとんど実家に帰ってたし、俺が探偵科インケスタに転科してからは、あんまり会うこともなかったろ」

「はい。私の記憶が正しければ、72日ぶりになります」

「そうか……もう、そんなになんだなあ」

間髪を入れずに答えたレキに、少し驚きつつもしみじみと返す。

それから、俺は四苦八苦しながら、話をいくつか振ってみた。のだが、あまり反応は芳しくない。大抵が一言で返されて終わったり、なんともへんてこな受け答えをされたり。

今となっては慣れたもんだが、相変わらず、こいつはこいつで普通じゃないなど実感した。

1年前とほとんど変わらない容姿（身長・スタイル含む）に、これまた1年前からずっとかけ続けているヘッドホン。前になに聴いてんだって尋ねたら、「風の音です」と返ってきた。意味はまったくわからなかったが。

というか、なんで朝っぱらから武装してんだこいつは？ サイドアームくらいならともかく、こいつのメインウェポン（というかそれしか使わないのだが）であるドラグノフって。確かに武偵は常在戦陣グロツクとはいうけど、徹底しすぎな気がしなくもない。俺なんて、拳銃どこ

ろかナイフすら置いてきてんだぞ。

まあ……こいつが受け続けている『任務』を考えるなら、それも仕方ないと思えるところはあるんだが。

俺はふとそのことを思い出して、レキに尋ねてみる。

「そういやお前、今でもLDスコア900以上なんて、バカげた任務クエストやってんのか」

「はい」

やはり間髪いれず、レキは肯定する。

それがどういう意味なのか、本人であるこいつが知らないわけがねえのに。

「……そうかい。受けるのはお前の自由だが、ほどほどにしとけよ。お前が強えのはよく知ってつけだな、あんまり自分の力を過信して高難度の仕事ばっかやってつと、いつか死んじまうぞ」

——LDスコア。

正式名称は、『Level of difficulty score』。ま、簡単に言えば武偵任務における難易度の格付け、つまりは一種の目安だ。この数字が高けりや高いほど、当然難易度は跳ね上がる。もちろん数字だけが任務の難易度の全てを表すわけじゃないが、重要な判断基準ではある。

で、こいつが去年受けてた任務はすべてその数値が900を越えている。これは一流の武偵企業の中でも、さらに一流の連中が受けるような任務だ。

なんでそんな危険なのばかり受けてるのは知らねえけど、そこはレキの自由だ。武偵は自己責任が原則である以上、本来なら俺がとやかく言うことじゃねえ。

ただなあ……と、俺が心の中で言いよんどんでいると、

「……？」

「あん？」

レキが何かを言ってきたのだが、考え事をしていて気づかなかつた。

今なんつった？ と聞き返すために俺がレキに顔を向けると。

彼女は、感情の揺らぎがまったく見えない無機質な双眸で、俺をまっすぐに見ていた。

思わず、若干たじろぐ。さすがに失礼になるんで、態度にや出さないようにしたが。

「錬さんは、心配しているのですか?」

聞き逃した俺のために、レキはおそらくはさつきと同じであろう言葉をもう一度言った。

俺は一瞬それがなんのことを指しているのかわからなくて、だがすぐに任務のことだと理解した。

心配、か……そうだな。まあ、心配事はある。

「……ま、それなりにな」

内心をつつくいたたまれなさに、俺は少し視線を外しながら答える。

なぜならば、俺が心配しているのは、レキのことではなく（まあそれもないとは言わないが）自分の命のことなんだから。

さつきも言ったが、武偵である以上、どんな任務を選び、どんな無茶をするかは個人の自由だ。むしろ、そいつが抱える思いも知らないで同情したり勝手に引き止めることこそ、俺は侮辱だと思っている。

ただそこに、俺自身が関わってくるとなれば、また話は変わってくる。

ここで少し話は戻るが、俺はなぜこいつがあんな馬鹿げたレベルの任務を受けているのかを知ってるのか? それに対する答えは実に単純で、俺も受けたことがあるからだ。レキと組んで。

……いや、正直に言えば俺はそんなもん受けたくなかったんだがな、本当は。もちろん武偵を続ける上で任務を受けることは避けられないが、分相応という言葉がある。いくらなんでも、レキが受ける任務は俺にとつて、荷が重過ぎる話だった。

だが、これが教務科マスターズから指名されての任務だったから、当時の俺に拒否権はなかった。中学ん時の『裏任務』クエストリハイスもそうだったしな（ちなみに『裏任務』のLDスコアはだいたい500〜700のプロ武偵クラスだった。泣ける）。

で、命からがらその任務から生還することはできたんだが……それに味を占めたのか、教務科の連中、たまに俺とレキを組ませるようになりやがった。レキと組んでから死に掛けた回数、両手の指じや収まりきらない。

とまあ、ここまで話せばおわかりだろう。つまり俺が懸念しているのは、こいつがああクラスの任務を受け続ける限り、いつまた俺にお鉢が回ってくるかわからない、ということだ。転科した上にランクがEになったからか、ここ数ヶ月はそういう要請はねえけどな。

……つて、なんて情けなさだよ、俺は。今もその任務をこなし続ける女の子より、自分の心配とか。

やべ、そう思ったらなんか急に恥ずかしくなってきた。顔赤くなってる気がする。

「あー、まあ、なんだ……とにかく、お前はもうあんまり無茶すんじやねえぞ。わかったな？」

羞恥心を誤魔化すように頬をかきながら、レキにそう言う俺。

……つて、うわーレキめつちやこつち見てる。ガン見だ。無表情だから、なんかめちやくちや糾弾されてるような気になってきた。「錬さんはヘタレですね」とか、眉一つ動かさずに言われてしまいそうだしや、ホントに言われはしないだろうけど。

5秒か、10秒か、あるいはそれ以上か。

じつと見つめられ続けるこの状況に、そろそろ俺が耐え切れなくなったとき。

「……………」

と、無言のまま、レキはこくりと頷いた。

え、えーと、これはあれかな？ 俺に指図されるのは腹立つけど、とりあえず社交辞令で頷いとくか、みたいな感じだろうか。だとしたら、すげえいたたまれねえんだが。

唐突にごめんなさいと謝りたくなる衝動に駆られ、しかしそれを押さえ込む。そんな真似をすれば、今度こそなにか言われることうけあいだ。

……もう帰ろう。ずっとこの視線にさらされ続けたら、懺悔^{ざんげ}とかし

始めちまいそう怖い。

「ん……じゃ、そろそろ俺帰るわ。悪いな、こんな朝っぱらからつき合
わせちまって」

「いえ」

短い否定で、レキは俺の謝罪を受け入れる。

こういうところ、昔からかわんねえな。合同任務コンビクエストで俺がミスったときも、似たようなことがあった。俺が「悪い。助かった」と謝れば、レキはすかさず「謝るのは私の方です。私こそ、あなたに助けられました」とか俺を氣遣ってフオローしてくれる。決してこつちを悪し様に言わない、変だけど良い奴なんだよな。

さてと……ホントにそろそろ帰つか。帰って俺とキンジ……と多分、アリアの飯もつくらねえといけねえだろうし。

あいつらそろそろ起きてんだろうな、と呟きながら俺はベンチから立ち上がる。気づけばいつの間にかすっかり朝日は昇っていて、また今日も一日が始まるんだな、と柄にもなくそんなことを思った。

最後にレキに「じゃな」と一言告げて、俺は男子寮へと向かうべくその場を後にした。

が、その歩みが2、3歩刻まれたところで、

「錬さん」

と、声がかかった。

足を止めて振り返ればそこにはやはりレキがいて、しかし彼女は先ほどとは違い、すでにベンチから腰を上げ、夢げに佇んでいた。

なぜか、放つといたら消えてしまいそうだ、なんて感想を抱き、俺は返事を返す。

「ん？ どした、なんか言い忘れたことでもあんのか？」

あれだけ付き合ってもらったんだ。ここで無視して帰るという選択肢はありえない。

じつ……と、俺を静かに見据えるレキに、俺もまた目を合わせることで応える。

黄金色の彼女の瞳が、わずかに揺れた気がした。

「あなたは、心配する必要はありません。私は死なない。なぜなら――

」
その先を、彼女はなんと言おうとしたのだろうか。

突如、何の前触れもなく突風が吹いた。涼やかな朝の涼風が、前髪を激しく揺らす。髪に隠れて見え隠れするレキの姿。そして、ゴォウツと耳元で風がうねる音を俺は聞いた。

それはつまり、その風が、レキが俺にかけたであろう最後の一言をかき消したということだ。

だから俺はその先を聞くことは叶わなかった。

レキは、今度は台詞を繰り返すことはなく、クルリと踵を返して、ここから去っていった。おそらくは彼女もまた、寮に帰っていったのだろう。

だんだんと遠くなる小さな背中を見つめ、

「レキのやつ、今なんつったんだ……？」

と、俺は小さく問いを口にした。

答えが返ることはない。答えを持つ者も、そして答えを聞いたものも、この場にはいなかった。

だから俺は、一つ息を吐いて。

それから、去り行くレキに背を向けて、男子寮への帰路についたのだった。

* * *

狙撃科2年、Sランクの称号を与えられた少女・レキには、おそらくは学園内でもかなりの人数が知る、1つのあだ名が付けられていた。

——『ロボット・レキ』。

無口・無感情・無表情、と無しの三拍子が揃ったこの少女を、彼女を知る武偵高の生徒はこうあだ名している（実は密かに、超精密な狙撃の腕を指してこう呼ぶ者もいたりするのだが）。

しかし、それも無理はない、と皆が思う。なにせ、本当にロボットかと思まがうほど、彼女は機械的でそして人形めいていた。まるで、心がないかのように。精緻な美を放つ、無機質ながら人を惹きつける彼女の容姿もまた、芸術性という意味でこの評価の一因になっていた。

た。

そして、レキ自身もまた、そう呼び習わされていることは知っていたが、だからといってリアクションを起こすことはなかった。外面的な意味はもちろん、内面的な意味においても。

ふざけるな、とわめくことなどせず。そんな呼ばれ方はいやだ、と泣きもしない。

やめてほしい、と心を痛めたりせず。だからどうした、と開き直ることもしない。

まさしく、無反応。レキという少女は、そういう人間だった。

ただ、過去に一度だけ、とある男子が無しの三拍子に加えて「胸も無い」と言っていたのを偶然聞いてしまった時は、かすかに感情の揺らぎのようなものが生じたりしたのだが、それは彼女のみが知ることだった。ちなみにアリアにも似たような経験があるのだが、その男子には『風穴エクスキューション』なるものが執行された。

が、ここまで言っておいてなんだが、当然のことながら彼女は人間である。ロボットでは、決してない。

だから彼女の動力源はオイルなどではないし、生命活動を続けるためには食事（主食はカロリーメイト）が必要だった。

そんなわけで、レキは今日もまた、早朝5時から（なぜそんな朝早くかはわからないが）学園島内のコンビニまで出向いていた。

レキはこのコンビニの常連だった。当初こそ、彼女を象徴するドラグノフ狙撃銃と共に入店してきたレキに店員は驚いていたものだが、いまやすっかりお得意様として認識されていて、レキ御用達のカロリーメイトの入荷は大量に増加していた。

まあ、そんなお店の裏事情など知らないレキは、ただ目当ての商品を多く置いているからという理由で、ここに買いに来ているのだが。

そして、手持ちの残金と消費量や賞味期限などを計算しつつ購入量を決めていたとき、レキに声をかけるものが現れた。

去年のクラスメイト、有明鍊である。

1年前よりも伸びて、後ろで一房に縛った黒髪。生徒間ではもっぱら悪いと評される黒の双眸。レキにとっては、数ヶ月ぶりを見る、そ

して去年の1年間で見慣れた顔だった。

錬は、レキに「少し話さないか」と誘った。聞けば、早起きしてしまったので、時間を埋める相手が欲しかったらしい。

レキはそれを了承した。基本的に早起きのレキではあるが、だからといって特段やる必要があるわけではない。ただの習慣だ。だから、錬に付き合う理由はなくとも、付き合わない理由もまたなかった。

その二択ならば、たいてい後者が選択されるのだが、錬は数少ない例外だった。なぜなら錬とは1年の時に時たまコンビを組んでいたことがあり、他の生徒よりも親密度で言えば断然高かったからだ。そんな融通がきくくらいには、レキにも人間味があった。

結局カロリーメイトはあるだけ全部買い占めることにしたレキは、精算を済ませてから錬と2人、コンビニを出た。そして、すぐそばの街路樹脇に設置されたベンチに並んで座り、一度頼みを聞いてもらったことを錬が謝って、薄闇の中彼との会話は始まった。

口火を切ったのは、錬だ。

「にしても、お前と会うのも久しぶりだな。春休みは俺あ、ほとんど実家に帰ってたし、俺が探偵科インケスタに転科してからは、あんまり会うこともなかったろ」

「はい。私の記憶が正しければ、72日ぶりになります」

「そうか……もう、そんなになんだなあ」

錬の声には、どこか昔を懐かしむような響きが含まれていた。

その感覚はレキにもわかる。久方ぶりに言葉を交わすことで、レキもまた錬と組んでいた時のことを思い出した。

そしてそこから話題はいくつか転々とシフトして、やがて武偵高らしく任務の話に移った。

錬はレキに尋ねた。未だにハイランクの任務を受けているのか、と。

レキはそれに、淀みなく答える。

「はい」

死すらあり得る高難度任務を今でも続けている、とレキはなんの躊躇いもなく言い切った。そこからはいかなる感情も読み取れない。

自身の実力の顕示もなければ、死への恐怖さえないかのようだ。

いや、実際ないのだ。このレキという少女には、およそ感情と呼べるものが。感覚と感情は違う。

それを去年の1年間でおそらくわかつているであろう少年は、「……そうかい。受けるのはお前の自由だが、ほどほどにしとけよ。お前が強えのはよく知ってつけだな、あんまり自分の力を過信して高難度の仕事ばっかやってつと、いつか死んじまうぞ」と、そう言った。

言葉面だけ取れば、なんてことはない、それは誰にでもかけられるような言葉。ただの、助言にすぎない簡単な台詞だ。だけど、レキは知っていた。

彼の台詞の裏に、隠された感情がある。表面には現れていないだけで、それはきちんと存在しているはずだ。

だからレキは、正面を向く鍊の横顔に顔を向けて、確認の意味も込めて訊いてみた。

「私を、心配してくれているのですか?」、と。

鍊がレキのことを多少なりともわかっているように、レキもまた鍊のことを多少なりともわかっていた。

それは多分、彼と関わった者なら、みんなが気づいていることだ。この少年は、優しい。きつと、誰よりも仲間のことを想っている。

あの事件のときもそうだった、とレキは過去へと意識を寄せる。脳裏に、彼の姿を再生する。

あの時鍊は、こんな機械のような、守る価値などないと自分でも思っている人間を、文字通り命がけで救い出してみせた。

そして、傷だらけになりながらも、言っただけのけた。

『お前が何を勘違いしてんのか知らねえけどな。俺はたいしたことなんてなに一つやってねえ。当たり前のこと、当たり前前によつただけだ。お前が生き残ったのも、俺が生き残ったのも、運がよかつただけだけの話なんだよ』

それは嘘だ、とレキはきつと断じることができる。あれは、運なんて単純な物で片付けられることではない。

「だけど、きつと何度訊いても錬は言うのだろう。「あれはただの偶然だ」、と。」

「どうしてそこまで頑なに認めないのかは、レキにはわからない。強情なのか、何か理由があるのか。もしかしたら、錬と同じく元クラスメートの峰理子が言っていた『ツンデレ』というやつなのかもしれない（レキには意味がわかっていないが）。」

「だから残るのは結局、レキが錬に命を救われた、というただそれだけの事実。覆せない、そして覆したくない、たった一つの真実だけだった。」

——と、そんな風にレキが回顧していると、

「あん？」

と、錬が聞き返してきた。

何か考え事でもしていたのか、ハツとしたようにこちらに顔を向ける。

……自分と話している最中に、この少年は一体何を考えていたというのか。とレキは少しだけ気になって——

（気になる……。私は、錬さんが何を考えているか、気になっている……？）

と、初めて自問自答した。

感情がないはずなのに。心がないはずなのに。

そのはずだった。そして、それでいいはずだった。

自分では確かにそうとわかっているのに、自分は錬の思考の対象を今、知りたがった——？

（私は……一発の銃弾）

ゆえに、心は持たない。……その、はずだ。

レキは自分の状態が正確にわからなくなった。今自分は何かを思っているのか。それともただ、何かを思っている気がしているだけなのか。

レキは、その答えを求めるように、少年を見つめた。

錬は、どこか困惑しているような顔をしていた。それはなぜか、と考察してみても自分が聞き返されても何も言っていなかったからだと気

づいた。

「錬さんは、心配しているのですか？」

答えはわからないままだったが、レキは錬に再びそう訊いた。

錬は、その問いかけに一瞬悩むそぶりを見せてから、

「……ま、それなりにな」

と、そっけなく言った。

これは非常に珍しいことだということに、レキは気づいた。普段、錬はこういう風にストレートに仲間を気遣うことは言わない。行動で示すタイプなのだ。

それが今、レキにははつきり言った。心配している、と。

慣れないことをしたという自覚があるのか、錬の頬は僅かに赤く染まっている。照れているのだろうか、とレキは予想した。

「あー、まあ、なんだ……とにかく、お前はもうあんまり無茶すんじやねえぞ。わかったな？」

照れくささに耐え切れなくなったのか、錬は誤魔化すようにそう言った。

本当に、こういうところは変わらない。長いとはいえないけれど、薄いとも絶対言えない付き合いを通して、彼は終始こういう少年だった。

いつまでも、どこまでも変わらずにあり続ける少年はまるで――

(あなたは……風のような人だ)

と、レキは思った。

絶えずたゆまず、故郷に吹く風。ずっとずっとレキのそばにあった風もまた、彼のように変わることはなかった。

「……………」

久しく会ってなかったことで初めて分かった共通点を感じながら、レキは小さく首を縦に振った。それは、錬の言葉に対する首肯だった。

未だ照れが残っているのか、錬はわずかにみじろぎして、

「ん……じゃ、そろそろ俺帰るわ。悪いな、こんな朝っぱらからつき合わせちまって」

鍊が謝るも、レキは「いえ」とだけ返す。迷惑、とは間違っても思っていないからだ。

そういえば、去年もこういうことがよくあった気がする。レキに迫った危機を鍊が払い、その際に生じた鍊の隙をレキがフォローする。なのに鍊はこちらより先に礼を言うものだから、レキもすぐに礼を返すことになっていた。

そんなことを思い出していると、鍊がやおら立ち上がった。言ったとおり、もう帰宅するつもりらしい。

歩き始めた鍊の背中が、数歩遠ざかったところで、

「鍊さん」

「ん？ どした、なんか言い忘れたことでもあんのか？」

レキは、鍊を呼び止めた。

言わなければならなかったことが、そして言いたかったことが、まだ残っていた。

鍊はこちらに向き直り、次なる言葉を待っている。

だからレキは、流れるように言った。

「あなたは、心配する必要はありません。私は死なない。なぜなら――」

その時だった。

突然、彼らを強い風が襲った。朝嵐あさあらし、と呼ばれる現象だ。

乱れる前髪を物ともせず、レキは続ける。

ずっとずっと言えなくて、胸の内に閉まっていたことを、レキは初めて鍊に告げた。

「――あなたにもらった命だから」

だから、決して散らせない。彼に与えられた命なら、彼の許可なく失うことは許されない。

言外に込めた言葉は、果たして鍊に届いただろうか？

レキは、鍊がどう言うかも待たず、彼に背を向ける。そしてそのまま、迷いない足取りで、第1女子寮へと歩き始めた。

歩を進めながら、レキは考える。

結局、さつき自分は何かを思っていたのか、その答えは出なかった。

だけど、レキはそれでもいい気がした。

——今は、まだ。それでいい気がした。

少女が『答え』を知る日は、まだ先のことになるのだった。

* * *

「ただいま」

レキと別れてからキンジの家に帰った俺は、玄関を開けながら帰宅の挨拶を唱えた。

ドタドタとやかましい音を鳴らしながら、リビングから何かが駆けてくる。

そいつは上あがり框がまちで急ブレーキをかけ、ピンクのツインテールをしやなりと靡かせた。

「遅い！ どこいつてたのよ錬！」

「ちよつと、散歩にな。というかお前、遅いつたつてまだ7時にもなつてねえんだが」

怒髪天をつく……とまではいかなかったが、厳しい目で俺を詰問したのは、寝巻きから制服に着替えたアリアだった。

俺は靴を脱ぎ、廊下にかかる。さて今日の献立はどうするかと考えながらアリアが来た方向へ向かう。

その後ろからトコトコとアリアが付いてきながら、俺に抗議を始めた。

「ちよつと、聞いてよ錬。キンジったら、あたしがお腹すいたつて言ったら、『すかせバカ』とかぬかしたのよ!？」

あーそうですか。多分俺も同じこと言うと思うぞ、それ。

しかし自分から藪をつついて蛇、いや仔ライオンを怒らせるほど俺はバカじゃない。

つかこいつ朝からテンション高えなと思いつながらリビングに入ると、アリア同様すでに着替え終えたキンジがソファに座りながら、インスタントコーヒー片手に新聞を読んでいた。オヤジかお前。

「よお、キンジ。珍しく今日は早えな」

「お前の後ろについてる奴に蹴り起こされたからな。比喩なしで。というか、飯飯うるさくてかなわん。錬、エサをやってくれ」

「あたしはネコじゃない!」

誰もネコとは言っていないわけだが。好きなのか、ネコ。そんなどうでもいいことを考えながら、

「わかったから、じゃあお前から大人しくダイニング行つてろ。ああ、その前にキッチンから皿出せ」

と、朝食の準備を指示する。

こいつらが指示通り動く間、俺は一度手を洗いに行き、それからキッチンに入って調理を始めた。

トースターで食パンを焼きつつ、ベーコンエッグを作る。スタンダードなメニューではあるが、別にいいだろ。

皿に盛り付けを済ませ、卓上に料理を運んでいく。飲み物は、俺とキンジが麦茶、アリアが牛乳（ちゃんと大きくなれよという意味を込めて）だ。

そして、ずいぶん久しぶりになる2人以上の朝食が始まる。

「んっ……んぐんぐ。へー、やるじゃない錬。結構おいしいわ」

「そりやどうも。落ち着いて食えよ」

ベーコンエッグに口をつけてコメントするアリアに、俺は適当に返す。

まあ、ほめられて悪い気はしないな、うん。さすがは時雨仕込みだ。

と、キンジがテーブルの上をキョロキョロ見回し、

「おい、錬。いつものジャムはどうしたんだよ」

「俺の家に決まってるんだろ。わざわざ持ってきてねえよ」

「マジかよ。あれ、楽しみにしてたのに」

「なに、あんたたち？　いつものって、部屋違うのに朝ごはんは一緒に食べてるの?」

「いや、というかキンジを俺が養ってるって感じかな」

「その言い方はどうなんだ？　俺、ちゃんと食費は払ってるんだが」

あー……そーいうや、いつからこいつと飯食うようになったんだっけか。

確か、俺やキンジが転科したぐらいのころだったか。あのくらのころから、俺たちはこうやって2人で（たまに剛気や亮、ついでに時

雨も来るけどな）朝飯を食っている。ただし、一方的な俺の奉仕活動してわけじゃない。キンジには自分の分プラス多少俺の分の食費を払ってもらってる。いわゆる、ギブ&テイクってやつだ。

ま、ホントはキンジには白雪のやつが飯作ってくれるはずだったんだけどな。こいつ、あろうことかそれを断りやがった。もったいねえ野郎だよ、こいつは。いくら女嫌いであっても、幼馴染まで遠ざけるこたねえだろうに。

ちなみに、後日その話を強襲科アサルトの男連中に言ったら、キンジはそいつらにボコにされたという話もある。

俺はベーコンを一切れ口に放り込んでから、

「んで？ 結局、昨日のドレイ云々の話はどうなったんだ？」

「どうもこうもない。俺は絶対強襲科には戻らない」

「まだわがまま言ってるの、キンジ？ いい加減入るっていいなさい！」

「何がわがままだ！ お前が勝手に言ってるだけだろ！」

にわか騒がしさを増す食卓。水と油というか、こいつらホント口を開けば言い争ってやがるな。

というか、キンジはともかくアリアはもうちよいボリユーム落とせ。男子寮に女を連れ込んだなんて噂が立ったらどうする。

俺は一つ、息を吸い込んで、

「ケンカすんなら飯取り上げんぞテメェら！」

と、食事中にも関わらず拳銃を抜きそうなほど白熱した2人を一喝した。

途端に静まるバカ2人。やはり人間の資本は食ということか。

……はあ。母親かよ、俺は。

その後もちよいちよいアリアVSキンジが始まりそうになるのをなだめつつ、騒がしく朝は過ぎていった。

ホントこいつら、レキとは大違いだ、まったく。

* * *

「あれー？ ねーレンレン、キーくんは？」

「んー……青海にネコ探したとよ。『依頼』クエストだ」

午前の4時間を乗り越え、昼休みも明けて今は5時間目に入った。これは前にも言ったが、武偵高のカリキュラムは午前が一般教科、午後が専門科目となっている。

だから俺はその規則に従い、今は探偵科棟にいた。……ああ、入試のことが思い起こされる。

第2実習室。そこが、今から俺たちが授業を受ける教室だ。たしか、今日は指紋採取の実習とか言ってたっけ。

で、それはともかくとして、早起きした代償としてまぶたが重くなった俺が長机につつぶしていると、理子がキーくん……つまり、キンジがなぜここにいないのかと訊いてきた。俺とキンジと理子は揃って探偵科だからな。

そんなでもって、話題のキンジは今、『依頼』で校外に出てるはずだ。『依頼』つてのはその名の通り、学園が民間から受けてくる仕事のことが出来るようになる。そんで、午後の専門科目の時間を『依頼』に当ててもいいことになってるんだ。小金目的で、単位狙いで、あるいは腕試し的な意味で。受ける理由は種々様々、これもまた武偵高生の大きな学習と言えた。

……蛇足になるが、この『依頼』、普通中学生は受けることができない。それができるのは、インターン組だけだ。なのにプロ級の任務受けさせるとか、頭おかしいだろ東京武偵高中等部。

「えー、そんなの理子つまんなーい！ キーちゃんとレンレンは2人そろってこそじゃーん！」

「るっせえ。勝手にセツトにすんな」

俺の返答が気に入らなかつたらしい理子に、俺は伏せたまま文句を言う。

つーか、耳元でぎゃーぎゃー騒がねえでくれ。眠れねえだろ。俺はこれから、せめて高天原先生が来るまで、夢の世界に旅立つことに決めてんだよ。

というか、だ。

俺は組んだ腕からわずかに顔を上げ、理子に面倒そうに視線を向

け、

「そもそもな、なんで俺に言うんだ。出てつたのはキンジの方だろ」
「むむっ。確かに！ レンレンは頭いいなー。ところで、なんでキーンくん依頼受けたの？ 最近全然受けてなかったのに」

なんでお前がキンジの受注状況を知ってんだという疑問は多分触れないほうがいいんだろうな。主に俺の精神的衛生面で。こいつなら素でストーリーカーしてますとか言い出してもおかしくない。

俺は出掛けにキンジが言ってたことを思い出しつつ、

「確かアリアから逃げるため、とか言ってたっけな。まあ、その企みも無駄に終わるだろうが」

「なんで？」

「さっきここ来る前にアリアに会ったんだよ、玄関の前でな。キンジのやつを待ち伏せすんだとよ。だから、一緒に行ってんじやねえの？」

アリア本人に聞いた話だが、あいつはすでに卒業までの単位を揃えているらしい。だから依頼を受領するというプロセスを踏まずに（つまりあらゆる意味でただ働き以外の何物でもない）キンジについていても、なんら問題はないのだ。

ついでに俺も、「あんたも何か依頼受けなさいよ。そしたら、あたしも付いていくから」とか言われたことは、別にどうでもいい情報なので黙っておく。つか、どこまで付いてくる気だあいつ。マジでヤンデレか。どこまでも追いかけるわ、みたいな。

少し背筋に悪寒が走ったとき、理子が笑った。

「くふふっ。ふーん、アリアとキンジが一緒に、ねえ。くふっ、くふっ」

怖い怖い。やめろよその笑い方、マジで。

「なんであいつらが一緒だと、お前が喜んでんだよ」

「さあ、なんでかな？ なんでかなー？」

何が楽しいのかくるくる回りながら、理子は歌うように言う。

ああもう、うざい。こういうはぐらかしかたする時は、こいつ絶対え言わねえからな。

もういいや。別に、どうでもいいしな。

だからもう眠らせてくれ。じゃねえと――

「はい、みなさん。今日は先週言っていた指紋採取の実習ですよ」
ほら見ろ、高天原先生来ちまったじゃねえか。

俺は諦めたように上体を起こし、天井を仰いだ。

キンジたちが猫探しの『依頼』を受けた日から、明けて翌日の夕方。キンジが白雪からタケノコご飯をもらって食うの忘れてたっつーから、ご相伴をあずかりにキンジン家に行くと、玄関扉を開けて出迎えたのは、ちびっこいSランク武偵（現・居候）様だった。

もし俺じゃなくて他の男子が遊びに来ていたら確実に言い逃れできなのに、こいつは一切躊躇なくドアを開けていた。インターホンを鳴らしてからほとんど間もないってことは、こいつ確認すらしてねえだろ。

その態度に俺は呆れが多分に混じったため息を吐きつつ、

「……お前、居候とは思えねえほど堂々としてんな」

「あたりまえでしょ。あたしが主人なんだから」

その一言でなぜか納得できるのが、こいつのイカレ具合をよく表している。

なんてことを思いつつ、俺は（無い）胸を張るアリアを押しつつ、部屋に上がる。ちらりと玄関床に目を落とすと、そこにはアリアのちっちゃなスニーカーしか転がってなかった。

その横に俺も靴を脱ぎ、廊下をまっすぐに進んでいく。

ボスン、と居間のソファに鞆を放り投げた俺は、首を捻りつつアリアに尋ねた。

「で？ 肝心のキンジはどこだ？ 俺今日、あいつから夜飯誘われてんだが」

「あら、いいことじゃない。キンジもドレイとしての自覚が出てきたわね。こういうプライベートな時間を共有することが、チームワーク向上への一歩になるのよ」

最近分かってきた。こいつ、感情が顔に出やすいんだな。自分の思

惑通り事が運んでいると見て、口角が上がっている。

「というか、ご高説結構なことだが、そもそもお前お呼ばれしてんのか？ 勝手に上がりこんだうえに勝手に飯食っていく気じゃねえだろうな——って、そもそも勝手に泊まりこんでるような奴だからな。いまさらか。」

と、その時玄関の方から扉が開閉する音が聞こえた。ああ、キンジが帰ってきたのか。

「錬……は、まあいい。俺が呼んだんだからな。だが、アリア。お前は どうやって入った」

廊下から姿を現したキンジは、開口一番アリアに向けて言った。

アリアはソファに座り手鏡片手に前髪をいじりながら、キンジに返す。

「あたしは、武偵よ」

「なんでそれだけで通じるんだろうな、武偵高。ピツキングしましたってか。」

「諦めろ、キンジ。お前だってもうわかってんだろうが。こいつがこういうやつだって」

「理解と納得は別問題だ、って確か時雨が言ってただろ。俺はそこまですの『でぼちゃん』に屈服した気はないぞ」

「でぼちゃん？ なんだっけ、それ？」

アリアも俺と同じ疑問を持ったらしく、

「でぼちゃん？ なにそれ？」

「額のでかい女のことだ」

「あ、なーる。そーいやあつたな、そんな言葉。でも確か、それって方言じゃなかったか？」

と雑学感覚で思い出していると、

「——あたしのおでこの魅力がわからないなんて！ あんた、本格的に人間失格ね！」

突如、アリアは苛烈なまでの勢いでキンジを罵倒した。

「おいおい、そこまで言うかよ。俺言わなくてよかった。」

アリアは少しすねた様に、

「この額はあたしのチャームポイントなのよ。イタリアでは、女の子向けのヘアカタログ誌に載ったことだってあるんだから」

と話しながら、一番そのご自慢のおでこがよく見えるように、鏡で前髪を調節している。

「というか、それマジかよ。」

「へえ。すげえなそりゃ。並大抵のことじゃねえぞ」

「でしょ!？」

うお、なにこの食いつきよう。そんなに自慢なのか。

花が咲いたように一気に相好を崩したアリアの勢いに、俺は若干押される。

「というかだな、俺が言いたいのは多分お前が思ってるようなことじゃなくて——」

「ふふっ。わかってるじゃない、錬。それが正しい感性ってものよ! 聞こえてるの、バカキンジ!」

俺の意思が正しく伝わってないことを訂正しようとするも、アリアは洗面所に向かったキンジのところへ行ってしまった。

……あー、なんか今更言えねえぞ。イタリアの撮影スタッフさん、よくこの暴れまわる子獅子を大人しく撮影までこぎつけましたね。なんて、とてもじゃないが言い出せん。

ま、いつか。言わなけりゃ。なんか機嫌よくなってるし。

「あーはいはい、聞こえてるからそんなに騒ぐな。お前が貴族様らしく、身だしなみにもお気を使われていらっしやることはよくわかったから」

「?」その言い方……錬の受け売りって感じじゃなさそうね。あんたもようやくあたしのこと調べたの?」

洗面所にいた2人が、会話しながら戻ってくる。前に行くキンジの後ろをアリアがトコトコついていく姿は、さながらカルガモの親子のようだ。

「というか、キンジのやつわざわざ調べたのか……って、待てよ?」

「今こいつなんつった?」

貴族様、つて言ったよな? え? 何? まさかアリアのやつ、ガ

チで貴族だったのか？

う、うおおおおお！ 俺の予想当たってんじやねえか！ やべえ、俺本気で探偵の才能あるかも！

内心溢れる喜びに、俺はわずか身を震わせていると、

「ふう……神崎・H・アリア。母は日本人。父親はイギリス人とのハーフ」

キンジが語りだした情報に、俺は内心で納得がいった。

なるほどな、クォーターだからこんな外見に、あんな名前なのか。

「祖母がイギリス王室から『タイム』の称号を授かった、貴族一家……だろ？」

「やるじゃない。なによ、そっちの才能もちゃんとあるんじゃない。しばらく泳がせた甲斐があったわ。他には、なにかある？」

キンジは冷蔵庫から買い置きミネラルウォーターを取り出し、蓋を開けながらドサリとソファに腰を下ろす。アリアも続いて、同じように着席した。こっちは、トサリって感じだが。

俺はといえば、学校に持った水筒でお茶を飲んでたりする。

キンジはきゅぽつと音を鳴らしながら飲み口から口を離し、

「ロンドン武偵局所属、14歳からヨーロッパ各地で武偵として活動。格付けはAより上のSランク。二つ名は——『双剣双銃のアリア』」

すつげ、さすがキンジ。やるときややるな。何個か俺経由で渡した時雨からの情報が混じってるけど。

……でもこいつ、こんなに調査力高かったっけ？ ヒステリアモードならともかく、これじゃあまるで理子クラス——なーる、依頼しやがったな。理子に。

ま、使えるものはなんでも使うのが武偵だからな。俺になにかデメリットがあるわけじゃねえし、別になんも言わんが。騙されてんぞーアリア。お前、キンジが自力で調べたと思ってるんだろ。

「それから、犯罪者を一度も逃がしたことがないんだってな。それも、99回連続、おまけに1回の強襲で」

マジ？ と、俺はキンジの言葉に少し目を見開いた。

強襲武偵が用いる逮捕術は、無論強襲だ。だがたいていは数回の強

襲により、徐々に追い詰めていくやり方がセオリーとなる。たった1回で犯罪者をねじ伏せるには、当然相応の技術と実力が求められるのだ。

まあ、アリアなら普通にやりそうだけどな。

「ふうん、そこまで調べてたんだ。でも……1つ、間違ってるわよその情報。こないだ、2人逃がしたわ。生まれて初めてね」

アリアがキンジから視線を外し、プラプラと足を揺らす。

キンジが再びミネラルウォーターを飲み始めたので、代わりに俺が訊いた。

「お前からかよ？ 随分な犯罪者だなあ、そいつらは。誰だ？ 有名どころか？」

近頃で有名つつつたら、『幸せを運ぶ引き金』、『6624』、『魔剣』、『武偵殺し』……こんなもんか。ああいや、『魔剣』は噂話だし、『武偵殺し』は捕まったか。

ここ1年以内という話であれば、『裏通りの日傘』ってやつも有名だったんだが……あいつはもういねえしな。

つて、アリアは欧州で活躍してたんなら、日本の犯罪者とはかぎらねえか。んー、あっちで有名どころは、『セバスチャン』、『ベイカー街の狂人』、『AEU』とかそこらへんか？ いや、2人つつつてたな。なら、『ドツペルゲンガー』あたりか？

俺が脳内で、最近の犯罪者リストを思い浮かべていると、アリアはあっさりとその答えを口にした。

「あんたたちよ」

瞬間ブバツ！ と、キンジが噴出した。

「冷てえ!? かかったじゃねえかこのバカ！」

「お、俺は犯罪者じゃないぞ！ 何でカウントされてんだよ?!」

「無視かテメエ！」

「強^{きよう}猥^{わい}したじゃない、あたしに！ あんなケダモノみたいなマネしといて、しらばっくれるつもり?! このウジ虫どもー！」

クソ、制服が水分を吸って気持ち悪いことこの上ない。

つーか、アリアのやつ今「ども」つつつたか?! あの^{ほうじよ}幫助がどうた

らって、まだ残ってたのか！

「だからあれは不可抗力だっつってんだろ！」

「ちびデコォ！ 俺はなんも関係ねえってこの前言ったろーが！」

「うるさいうるさい！ ——とにかく！ あんたたちはあたしのドレイにするって決めたの！ ぜーったい、逃がさないわよ！」

ヒートアップしたのか、ガー！ と立ち上がりながら両手を振り上げ気炎を吐くアリア。

というかおい、話飛んだぞ。なぜまたドレイ云々が出てくんだよ。興奮しているのか顔を赤くしながら、アリアは弁を振るう。

「あたしは知ってる！ あんたたちは、優秀な武偵だわ！ 半年前のこと、爆弾事件のこと、そしてなによりこのあたしから逃げ切ったこと！ その実力をあたしに貸してっつて言ってるの！」

「いや……いやお前、それは違えよ。俺がお前の前で優秀なところを見せたことなんざなかったし、そもそも俺は平均レベルあればいい程度の力量なんだよ」

「俺もそうだ。あの時は……偶然うまく逃げられただけで、半年前の事件だって運がよかつただけなんだよ。俺はお前が思っているような力なんてない、Eランクの大したことない男だ。残念だったな。さあ、出て行け」

「ウソよ！ あんたたちの入学試験の成績はSランクだった！」

「ぐ……ッ！」

想定外の切り返しに、俺たちは言葉に詰まる。

こ、こいついつの間にかそんなこと調べてやがった。武偵の戦いは情報戦から始まるとはよく言ったもんだな、クソ。

ここで俺のSランクが学校サイドのミスだと言い張ることはできない。が、そんなこといまさら確かめられるわけがない。結局はただの言い逃れだと取られて終わる。

キンジ同様、俺も去年の3学期の期末テストを受けなかった（つか、受けられなかった）から、今はEランクまで落ち込んでいたが……記録は残る。教務科マスターズの記録なんて改竄できるはずもないので、事実はどうあれ俺が元Sランクという過去は覆らない。

「というか、ことここにいたつてもはや友達に必要な要素とはかけ離れたものを要求され始めてきたのだが。俺の推理、マジであつてんのか？」

俺はその疑問から、キンジはおそらく上手い言い訳が思い浮かばないことから、二の句を継げないでいると、アリアは鬼の首を取ったように俺たちを指差して、

「つまりあれは偶然じゃなかったつてことよ！ あたしの直感に狂いはないわ！」

「ぐっ……い、今は無理だ！ 出てけ！」

「ッ!? ば、バカキンジッ！ お前そんなこと言つたら……！」

「今は？ 今はつてことは、何か条件があるのね？ それにその反応、錬もそれがなにか知つてゐたいね。あたしに言つてみなさいよ、協力してあげるから」

「きよ、協力……つて」

アリアの申し出に、キンジがたじろぐ。

こいつ、自分が今なにを言つたのか、わかつてんのか？ いや、わかつてたら言うはずないし、キンジ的にもまずいのだろうが。

協力、はまあ理論的には可能だろう。だが、倫理的には不可能だ。なぜならそれはつまり、キンジを性的に興奮させなければならぬということに他ならないからだ。

どう答えるべきか考えあぐねる俺たちに痺れを切らしたか、アリアが声を張り上げた。

「——教えなさい、その方法！ ドレイにあげる賄い代わりに、手伝つてあげるわ！」

「お、おいアリア。お前ちよつと落ち着——」

「錬は黙つて！ キンジ、あんたが出す条件、なんでも飲む。なんだったら錬、あんたが言う事だつて、あたしは従うわ。だから、だから……」

アリアは、そこで一度切つた。

きゅ……と、胸の前に拳を持つていき、^{カメリア}赤紫色の瞳を必死さに揺らす。

そして、

「だからあたしに力を貸して……!」

本当に、心の底からというように、彼女は懇願した。

その姿は、いつものアリアからは想像もできないほど、弱弱しくて。その声は、いつものアリアほどの力はまったくなくて。

ただ、子供が泣きながら手を伸ばしてくるような、そんな儂さを感じた。

だから、だろうか。

「……………」

俺も、そしてあれだけ文句を言っていたキンジも、アリアの言葉を咄嗟に切り捨てることができなかった。

静寂が、この場に満ちる。なんとも形容できない空気の中、アリアがつけっぱなしにしていたテレビのモニターの中で、お天気キャスターが台風が近づいていると報道した。

無言の間は、多分十数秒ほどだった。

やがてキンジがぼつりと、

「……アリア。お前は、俺たちの実力が高いから、ドレイにしようって言うんだよな」

「……そうよ」

「だったら、一回だ」

「……え?」

唐突なキンジの言葉に、アリアは呆けた声を漏らす。

かくいう俺も、キンジが何を言おうとしているのかわからない。

「俺は、一回だけ、お前に付き合っただけ。お前の言うとおり、強襲科に戻って、最初に起きた事件を一件だけ、お前と組んで解決してやる。だから、お前はその一件で見極めろ。お前の目が正しかったのか。それとも俺の言うことが正しいのか。もちろん、全力でやることは誓う。これは、お前とのことは関係ない、武偵としてそこだけは守る」

「……………」

キンジの提案に、アリアは口をつぐんだ。

きつと今、アリアの頭の中では受けるべきかどうか考えているはず

だ。

「だけど、それはきつと、お前が望む結果にはならない。そういうことだろ、キンジ。」

「だから、転科じゃない。自由履修として強襲科の授業を取る。……どうする。ここでごね続けるか、それとも乗るか。お前が選べ」

「……………」

キンジの考えは、俺だからこそわかる。俺だけが持っている情報、『ヒステリアモード』。そいつを考えれば、おのずとキンジの狙いは見えてくる。

それが正しいのか。それとも間違っているのか。俺には判断できなかった。だから、俺は口を挟まなかった。

そして、アリアは答えた。

「——わかったわ。あんたの提案、乗ってあげる。このままだと平行線だってことくらい、あたしにもわかるわ」

「そうか。……鍊も、それでいいか？」

「……………」

答えは見つからないままで、俺は了承した。

と、アリアが「ただし」と付け加える。

「これだけは絶対に約束して。キンジも鍊も、全力で事件に当たって。偽物じゃない、本当の力を見せて。手抜きしたら、風穴あけるわよ」
彼女の頼みに、俺たちはそれぞれの首肯で応える。

こうして。

俺たちは、太陽が西の空へと沈む中、一つの約束を交わした。

そして。

この約束が、結果はどうあれ試される日が来るのは——そう遠い話では、なかった。

11. 『97. 1%』の学科

約束した……のは、いいんだが。

「……って、おい！　なんでお前は座りだしてんだ！」

と、キンジの怒声が居間に響き渡った。

じいんと震える鼓膜を押さえ、俺はL字の形に配置された4基のソファに目を向ける。

そのうちの一つには、腰を落とし、ガラスのテーブルの上に置いていた雑誌を手に取りめぐりはじめたアリアの姿があった。

アリアは面倒そうに視線をキンジに向け、

「なによ、うるさいわね。マナーがなってないわ、近所迷惑つてものを考えなさい」

「錬！　抜いていいよな!?　俺ベレッタ抜いていいよなあ!？」

「落ち着けよ。気持ちはずげえわかるが」

こいつにマナーがどうか言われるとか。泣きたくなるな、おい。つーか、だ。

「おい、アリア。お前、なんで帰らねえ？」

「あら。あたし、帰るなんて一言もいってないわよ」

「ふざけんな！　いいから帰れよお前！」

「やだ」

怒鳴るキンジに端的に拒否するアリア。

おいおい、どうなってんだよこれ……。

俺は痛み始めたこめかみを押さえつつ、

「まあ、確かに帰るなんざ言ってなかった。でも、キンジは帰れつつつたろ」

「いいじゃない。ここ、なんだか居心地いいのよ。この武偵高に来て3ヶ月経つけど、ここより楽でいられる場所はなかったわ。寮に帰っても、最近までは一人だったしね」

アリアはパサリと雑誌をテーブルに置いて、俺たちに向き直る。

彼女はまっすぐに俺たちを見据えながら、

「あたしだって、自分で不思議だと思うわ。いつものあたしなら、多分

こんなこと言っていない。でも、3人でご飯食べて、学校行って、帰ったら話したり遊んだりして、寝るときだつて静かな夜じゃなくて。たったの数日だけど、それがとても楽しい自分がいて。本当はこんなことしてる場合じゃないってわかっているのに、それでもあたしはここにいたいってそう思う」

「……………」

「もちろんあんたたちがどうしても嫌だつて言うなら……………その時は、あたしもちゃんと出ていくわ」

どう？ という風に見つめ続けてくるアリア。

いや、まあ……………そう言われて、悪い気はしないというのが本音ではある。俺も天真がドイツに行つてからずっと一人暮らしをしてたからか、アリア（とキンジ）との共同生活が楽しくなかったかと聞かれると、それには多分首を横に振る。

だから俺としては、こいつが居候することはやぶさかではない。

ただ、ここはキンジの家だ。決定権は俺にはない、キンジにある。キンジの心情如何によつては、一顧だにせず切り捨てることになる。

「……………どうする?」

俺は、キンジに問う。

この女ぎらいが、幼馴染にすら許さない共同生活を果たして飲むか？

結果は、次の通りだった。

「……………約束の一件が終わつたら、出てけよ」

ぶつきらぼうな口調だが、キンジは確かに諾とした。

マジで? こいつが女と住むことをよしとするなんざ、明日は雨か？

と、その時、キンジが小さく呟くのが聞こえた。ともすれば聞き逃しそうなほどの声量だが……………「なにやっつてんだ俺……………」、か?!

こいつも、自分で自分を不思議に思っているのかもしれない。あるいは、なにか思うところでもあったのか。さては、惚れたか? ……なんてな。

今まで見たことがない友人の姿に俺がくだらないことを考えていると、アリアがパチンと手を叩いて言った。

「じゃ、話もまとまったことだし、あれやりましょ！ 昨日やった生涯ゲーム！」

「はあ？ お前昨日マイナス収支まで行つたの覚えてねえのか？ リアル貴族が約束手形抱える姿には爆笑したぜ」

「だからよ！ あたしがこのまま終わるわけないでしょ、今日こそリベンジよ！」

「はい負けフラグ来ましたー。どうするキンジ。またフルボッコにしちまう未来しか見えねえんだが」

「……まあ、いいんじゃないか？ 昨日みたいに負けせば、こいつも少しは大人しくなるだろ」

「見てなさい、今度はあんたたちの財布に風穴あけてやるんだから！」
「それはない」

さつきまでのシリアスな空気はどこへやら、気づけば雰囲気は弛緩して、穏やかに騒がしく夜を迎えていった。

まるで、それがすでに日常であるかのように。

仮初のものにすぎない、ということにはわかつてる。だが、それでもこんな日常が続くのは悪くないと、俺はそんなことを思った。

* * *

次の日。

結局アリアの滞在は継続され、朝食もまた共に迎えて、俺たち3人は一般^{ノルマル}校区・B棟にある2年A組へと登校した。

3人で連れ添って教室に入った初めての日、そりやもうクラスの連中に驚かれた。となれば当然俺たちを問い詰めるために寄つて来るんだが、一度アリアが追っ払ってからは野次馬は消えた。常に危険と隣同士の武偵とはいえ、みすみす命を捨てにいくような奴はいなかった。

そして昼休み、俺たちは机を固めて弁当を広げていた。メンバーは1年のころから同じ、俺とキンジと不知火亮と武藤剛気である。ちなみに、アリアはいない。なんか、通信科^{コネット}に用があるらしい。せつかく

あいつが望んだみんなでランチタイムだったのにな。

「錬。そろそろ行くぞ」

「あ？ どこにだよ？」

4人で弁当を食い終わったとき、キンジが席を立ちながら唐突に言った。なんかあつたつけ？

なんのことかさっぱり分からなかったので、キンジに訊き返すと、
「強襲科アサルトの自由履修の申請だ。早くしないと昼休み終わっちゃうだろ」

「あー……」

そうだったな、な……。

俺は少し顔を曇らせて、キンジに返す。

「そういうあの時は流れで了承しちゃったが、そういう話だったよなあ。またあそこに戻るのか……」

まあ……嫌、というわけじゃねえんだが。いややっぱりちよつと嫌だが。あそこはできりやあんまり行きたい場所じゃねえんだよな。

「あれ？ 遠山君たち、強襲科に戻ってくるの？」

と、俺が苦い表情をしていると、亮が尋ねてきた。

あいかわらずのイケメン君。やめろ、齒を光らすな。

「うんにゃ。キンジが言ったように自由履修だ。期間限定だよ」

俺は手をプラプラ振りつつ、軽く否定する。

自由履修ってのはその名の通り、自分の所属学科以外の授業を受けられる制度だ。武偵は専門職とはいえ、手札は多い方がいい。だから、わりとみんなこの制度を利用している。かくいう俺も去年は使ってたしな。

へー、と簡単に返す亮に、今度は剛気が混ぜてくる。

「珍しいこともあるもんだ。キンジよお、お前もう強襲科には戻らなかっていつも言ってたじゃねえか」

「俺もそのつもりだったんだがな。そうもいつてられない事情ができた」

「事情、ね。それってもしかして神崎さんが関係してたりするのかな？」

「お前勘よすぎ。探偵科インケスタでもやってけんじゃねえか？」

そんな他愛もない会話を交わしてから、俺とキングは教務科マスターズまで履修申請書を取りにいった。

教務科の廊下で、持参したボールペンを使って必要事項を記入する。すると、その途中でチャイムが鳴った。

ちようどいい、このまま行くか。

俺たちは、教務科棟を出て、頭の中に地図を思い浮かべながら目的地へ向かう。

やがて見えてきたのは、異様な趣の黒塗りの体育館だった。サイズはまあ一般よりは大きい程度だが、その内情が一般なんて言葉とはかけ離れていることを俺は知っている。

ここは、強襲科の体育館だった。

——強襲科。

その学習内容は、拳銃や刀剣その他もろもろの武器を用いた、近接戦による強襲逮捕の技術を学ぶことだ。

ここに通う生徒は、単純な近接戦闘能力で言えば、全学科中最高を誇る。無論、個人の素質が大きく関わってくるが。

しかし、今ここで着目すべきはそこじゃねえ。

重要なのは、その性質上、強襲科は危険度の高さがずば抜けている、ということだ。

任務における強襲武偵の役割は前線戦力。それはつまり最も矢面に立つポジションを意味する。さらに、それ以前に訓練においても刀剣や銃の使用は許可されている上に、訓練内容も苛烈なものが多い。

その結果生まれるのが、『97. 1%』という数字だ。

これが何を表しているかといえば、聞いて驚くなかれ強襲科の卒業時生存率を表している。

つまり、平たく言えば100人に3人弱は生きてこの学科を卒業できないのだ。

明日は我が身か、という言葉の意味をリアルに体験できてしまう学科。それが、強襲科だった。……よく生きてたな、俺。

ゆえにこそ強襲科は、通称『明日なき学科』なんて呼ばれてる。

……俺が言うのもなんだが、なんで潰れねえんだ？ この学校。あれかな、校長の緑松あたりが手を回してんのかな。

「はあ……戻ってきてしまった」

「やかましいぞ、キンジ。もう諦めろ」

出入り口となる大扉の前。そこで俺とキンジは2人、後悔を抱えながら立ち尽くしていた。

「お前はいいよな、そんなに堂々としてられて」

いや、それは違うぞキンジ。俺、一周回って諦めきつただけだから。足見てくれ、ちよつと震えてる。

「ほれ行くぞ、キンジ。腹くくれ」

「そもそも、腹くくるような学科があるほうがおかしいんだがな」

「そいつあ、同感だがな——行くぞ」

俺は適当に答え、2人で扉の取っ手に手をかける。

この先に待つものを俺は知っている。知っているが、今更後戻りはできない。約束だしな、これでも。

ふう……じゃ、行こうか。

そして俺は覚悟を決め、扉を開いた。

両開きのそれは、左右にゆっくりとスライドしていく。そして、完全に開ききるより前にあふれ出てくるのは、聞き慣れた金属音や発砲音、鈍い格闘訓練の音だった。

キンジと2人、危険に満ちたBGMに出迎えられながら、その身を館内へと滑り込ませていく。

そうして初めて中の様子が目に飛び込んできた。

ああ……変わらねえな、ここは。

わずか懐かしむように細めた俺の目に映るのは、見渡す限りの戦闘風景。どいつもこいつも、斬って撃って殴って蹴って。闘い以外をしてるやつのが珍しい。ま、他の連中は2階のトレーニングルームにいるんだろうが。

懐かしい。本当に懐かしい。俺はこんなところで、よくもまあ1年間も生き残れたもんだぜ。

しかし、こいつらも変わってねえな。戦闘中に笑ってるやつがちらほら見える。単純に戦えることが楽しいのか、技量の上昇を実感してんのかはわかんねえけどな。

「相変わらずだな、こっちは……」

「全くだ」

隣で片手を腰に当て、ため息をつくキンジに同意してやる。

ともすれば、俺たちの声は互いに戦闘音にかき消されそうになる。つまりはそれほど人数が今ここで戦っている最中だということであり、それがまさに強襲科がどんな場所であるかを如実に語っていた。

ま、それはともかくまずは誰か強襲科担当の先生に申請書を提出するか、と俺がキンジに提案しかけた時、

「——キンジ？ 錬？」

と、強襲科生の1人が、俺たちに気づいた。

途端——館内が静まり返った。まさにピタツといわんばかりに、戦闘音の一切が消えうせる。かと思いきや、代わりに俺とキンジの名がささやかれ始めた。

なにお前から超怖え！ 体育館一杯の人間が自分の名前をささやいてるってホラー以外の何物でもねえよ。

どうしよう、全力ダツシュで帰りたくなってきた。

そんな具合に、俺が真剣に回れ右を検討し始めた瞬間、

「キンジいー！ やつと帰ってきたかこの野郎！」

「錬！ お前も久しぶりじゃねえか！」

ワツ！ と、俺たち目掛けて一拳に人波が押し寄せてきた。迫る肉壁。圧倒的質量差が俺とキンジを攻め立てる。

ぐおおおお！ やめろテメエら、暑苦しい！

必至に手を使い足を使い引き離そうとする俺に構わず、連中は一斉に言葉を投げかけてきた。

「お前は絶対帰ってくると信じてたぞキンジイ！ さあここで1秒でも早く死んでくれ！」

「まだ死んでなかったか夏海^{なつみ}。お前こそ俺よりコンマ1秒でも早く死

ね」

「おーついにお前も死ぬ気になったか錬！ よし今すぐ車にはねられて死んでくれ！」

「うっせえテメエが死ね三上。^{みかみ}つーか、やたら死因がリアルすぎねえか?!」

あーもう、マジで変わらねえなこは。

どこのどいつが始めたことかしらねえが、ここじゃ挨拶は『死ぬ』が基本だ。おはようとかこんにちはとか、ここじゃ死ぬよりも使用頻度が低いんだぜ？ だからこは『死ぬ死ぬ団』とか呼ばれてたりするんだよな。入学当初、強襲科の2年（現・3年）に出合い頭に死ぬと言われた時は、心が折れるかと思った。よく耐えたぜ、俺。

当時は懐かしんで涙を飲む俺に、突如誰かが腹の辺りにどーんとぶつかってきた。

ぐふっ!? だ、誰だよおい！

視線を下げると、そこには金がかった茶髪のショートカットがあった。この髪色でこの髪型。そして平均より若干低いこの身長は……、「おいこら、みなっちゃん。いきなりずいぶんなご挨拶じゃねえか」

「おろ？ あーちゃんったらご機嫌ななめ？」

と、そんなことを言いながら顔を上げたのは、水瀬光。^{みなせひかり}くりつとした目に、いたずらっぽい口元。どこか生意気な子供のような印象を持つ、強襲科所属の女子だ。

で、ついでに言えば俺の中学時代の同級生であり、もっとなついでに言えば中等部十傑『10』^{ディエーチ}メンバーでもある。

というか、だな。こいつがいるってことは、

「もー、駄目だよ光。錬君困ってるじゃない」

「シイ。やっぱお前もいたのか」

腰に引っ付いているみなっちゃんをベリツと引き剥がしながら、俺は困り顔で声をかけてきた女子に返事を返した。

椎名静。^{しいなしず}彼女もまたみなっちゃんと同じく元同級生であり『10』のメンバーだ。

ふんわりとした薄茶のロングヘアを、髪先10cmほどでくくつ

ている珍しいヘアスタイル。線の細い輪郭をした小顔に、丸眼鏡が不思議とマッチしていた。そしてスタイルはなかなかオーケーそこで思考を止める俺。

俺の脳内など露知らず、彼女は柔らかく微笑んで、

「うん。ここで会うのは久しぶりだね、錬君。一般校区のほうではたまに会ってるけど」

「だな。そっちはあいかわらずこのいたずら娘のお守りか？」

「ふふっ。そういうわけじゃ、ないんだけどね」

あー……いいな、こういうタイプ。ホント、癒される。俺この手の女性が好みなのか？

「ぶーぶー！　なんかアタシのときと態度違うぞー。なんだよなんだよもー、水瀬光は非常に遺憾でありますっ」

「うぜー。久しぶりだけに余計うざさが際立ってやがる」

「オブラートに包む気全然ねー！　……で、あーちゃんはなんでとーやまとここに来たの？」

人差し指を口元にあて、首を傾げるみなっちゃん。

というか、話題転換のタイミングが急すぎて若干ついていけないんだが、まあそれはともかくだ。

「ちよつと、いろいろあつてな。一時的に戻ってくることになった」

「マジ？　じゃー、あれだ。あのー……なんだっけ。アル、アル……」

みなっちゃんはクルクルと人差し指を宙でまわしつつ、何かを思い出そうとしてうなる。

そこに入る、シイのフォロー。

「光が言いたいのもつかして『アルケミー』のこと？」

「あつ、それだそれ！　へー、じゃあこれで『アルケミー』復活？」

「げえ!?　そ、その名前は……！」

できれば思い出したくなかった名前に、俺の顔が曇る。

そんな俺とは裏腹に、みなっちゃんの台詞を聞いた連中が騒ぎ始めた。

「確かに！　あの伝説のコンビがまた見れるのかよ、わくわくするな」「懐かしいな、マジで最強だったよなああの時のこいつら」「下手したら

3年入れても最強だったんじゃない?」

ざわざわと、にわか騒がしくなる体育館内。

クソ、どいつもこいつも、口々にアルケミーアルケミー言い出しやがった。その名前、まだ残ってやがったのか。

——『アルケミー』。

去年、ここ強襲科で俺とキンジが組んでいたとき、俺たちコンビをそう名づけた人がいた。

名前の由来は実に安直。俺の『錬』とキンジの『金』。2つ合わせて『錬金』だよ。

そんなクソ恥ずかしい名前が学校中に知れ渡ったことを1年時に時雨から聞かされたとき、俺は自室のベッドで悶えたっけな。

勝手に盛り上がってる強襲科生を胡乱な目つきで見つつ、俺同様に生徒たちに絡まれていたキンジに話しかける。

「つたく、なにがアルケミーだっつんだ。こっばずかしいにも程があるぞ。なあ、キンジ」

ポンと肩を叩きながら、同意を求める。

しかし、

「……………」

「キンジ?」

反応が、返ってこない。おかしいな、どうしたんだ?

いぶかしみつつ、もう一度声をかける。すると今度はハツとしたような顔になって、

「——あ、な、なんだよ?」

「いや、なんだってこたねえけど……」

んだよ、こいつ。いきなり上の空になりやがって。

……あー、もしかしてこいつもこいつでこの名前にトラウマでもあんなのかな。まあ、気持ちにはわからんでもねえが。

……というかあいつらまだ話してやがる。いい加減やめろよなあ、恥ずかしい。つかみなっちゃんなんか根も葉もないこと言ってるだろ。艦隊10隻を沈めたとか、犯罪者グループの飛行機を小石で墜としたとか、俺たちは化け物かよ。

そろそろ黒歴史を連呼され続けるのもきつくなってきたので、俺はストップをかけようとして、

「あんなあ、お前ら。そろそろ止め——」

その台詞が、最後まで言い終わる前に。

「去年の12月にあったアルケミー最後の事件は、凄かったよな！」

と、1人の男子生徒が笑いながら言った。

「……………」

聞きなれない言葉に、俺は思わず閉口した。

アルケミーってのは、俺たちのこと。それは間違いない。この学校に他にそんなコンビやチームはいない。

だが、アルケミー最後の事件……だと？

なんだ、それ？ 俺は知らねえぞ、そんな事件。

そりゃ、公式的に記録を調べれば、当然最後に担当した事件というのは存在する。それがなんだったのかも、俺は覚えている。

しかし、俺が覚えている限り、俺がキンジとコンビで臨んだ事件は11月が最後だったはずだ。12月には、何一つこいつと任務を受けた覚えはない。

というか、そもそも去年の12月つつたら——

「やめろッ！」

俺が、去年の12月自分が何をしていたか思い浮かべたとき、突如館内に怒声が響き渡った。

その声は、怒ってるようにも、悲しんでいるようにも——自分を責めているようにも聞こえる声だった。

今まで聞いたこともないような……そんな、キンジの声だった。

『……………』

訪れる、完全な沈黙。さつきみたいなの、ささやき声すら消えた。しかし声は無けれども、皆の心が波立っていることはありありとわかった。

みんな、困惑してるんだ。いきなり、キンジが叫んだもんだから。

かくいう俺も、意味がわからなかった。一体、どうしたんだこいつ……………？

「お、おい、キンジ……どうしたってんだよ、お前？」

恐る恐る、腫れ物を扱うように声をかける。ちよつと怖い。今はもうないが、昔は他校で拳銃を抜いたこともあったしなあ。怒ると怖えんだ、こいつ。

しかし俺の心配は杞憂に終わる。

「……怒鳴って、悪かった」

と、キンジは短く謝罪した。

ただその表情は優れない。うつむき加減ではあるが、苦い顔をしていることは見て取れた。

それに俺が何か声をかける前に、「装備の確認してくる」と告げて、キンジは体育館奥に歩いていった。

ガラツとキンジが扉を開けて出て行ったことで、張り詰めていた空気が少し抜けた。

「な、なあ、鍊。俺何か変なこと言ったか……？」

『アルケミー最後の事件』とやらを口走った男子が、俺に尋ねてくる。俺は、「俺にもわかんねえ」と素直に言つて、

「ま、からかわれたとも思ってたんじゃねえの？ あいつ、去年のこと言われんの、あんま好きじゃねえの、お前らだって知ってたんだろ。最近、いろいろあったからな。ストレスもたまってたんだらうよ」

笑い飛ばしながらそう解説してやると、場の雰囲気は軽くなり、「あーなるほど、アリアか。確かにそれはストレス溜まるのも無理ないな」とか、「そーいやキンジ、やたら去年の実績褒めると怒るよな」とか、「照れてんのよ、どうせ」とか笑い声が聞こえるようになった。

「……………」

俺はそれを聞き流しつつ、キンジが去っていった方向へと目を向ける。

さつきは、空気が悪くなってたからあーあいつが……ホントにそうか？ たったそれだけのことでお前、そこまでキレるやつじゃねえだろ。

もしかして――

「……カルシウム不足か？」

最後に小さくそう呟いて。

俺は、キンジが歩いていった先に背を向けた。

* * *

「や、有明君。さつきぶり」

俺たちが来たことによるお祭り騒ぎもようやくやつと終息しはじめたころ、2年連続クラスメートで強襲科の不知火亮が俺に話しかけてきた。

こいつは、この1年で武偵ランクを1つ上げてAランクに昇格している、努力型の人間だ。オールラウンダーで、なんでも小器用にこなす、信頼のおける仲間であり俺やキンジの友達でもある。

付き合いは長いってのに、人波がはけたところによりやく来たのは、他人を優先するこいつらしいな。

「亮か。お前も来てたんだな」

「そりやあね。僕も一応強襲科に籍を置いているわけだし。……それにしても」

いつもは微笑をたたえている端整な亮の顔が、少し曇る。

まあ……こいつがなにを言いたいのかは、俺にもわかる。

果たしてその予想は正しかったようで、

「遠山君……どうしたんだらうね。今まで、あんなに怒ったことなかったのに」

……やっぱ、それか。

俺は軽く首を振りつつ、

「……さあな。わかんねえよ、んなこた。時任先輩ときとうじゃあるめえし、元・パートナーつっても心までは読めねえよ」

「だよね。でも、ちよつと気にならない？」

「そりや、な。そうはいつでも、馬鹿正直に詰問するわけにもいかねえだろ。詮索屋はこの世界じゃ嫌われるぜ、亮」

「肝に銘じておくよ」

苦笑しながら頷く亮に、俺も少し笑って返した。
すると亮はなにか思いついたような顔になって、

「ところで、有明君はこの後どうするんだい？ 何か訓練していく？」
話題を変えたのはこいつなりの気遣いだとわかり、俺もそれに乗っかる。

「そーだな……先に備えて、射撃訓練シューティングでもやるかね」
強襲科に戻ってきた以上、そしてここに回ってくる事件に関わる以上、どうしても拳銃チャカをぶん回すことになるだろう。練習しといて、損はねえはずだ。

ちようど、ここには射撃訓練用のレーン場もあるしな。

「うん、ポピュラーな選択だね。僕も見学していいかな？」

「見学だ？ 別にかまやしねえけど……見ててもつまんねえと思うけどな」

お世辞にも上手いとは到底言えない実力だしなあ、俺。ランクでいうなら、せいぜいDかCつてところだろうよ。

ま、別にいいけどな。見られてどうってわけでもねえし。

今後の予定を決めた俺は、亮と連れ立って射撃レーンへと向かう。が、その途中、いきなり背後から声をかけられた。

「それ、あたしも見に行くけど、当然いいわよね？」

「ん？ ——ああ、アリアか」

足を止め振り返ってみれば、そこにいたのはすでにおなじみになりつつあるツインテ娘だった。

いつからいたんだ、こいつ？

アリアはキョロキョロとあたりを見回して、

「——あれ？ ねえ、錬。キンジは？ あんたがここに来てるってことは、キンジも来てるんでしょ？」

「あー……来てるにや来てるがな。今はいない。装備品のチェックだどよ」

というか、さっきの騒ぎを見てたならわかりそうなもんだが。ということは……、

「お前、今ここに来たんか？ 遅刻じゃねえか、おい。なにしてたんだ？」

「う、うるさいわね。いろいろあったのよ、いろいろ！」

俺が尋ねると、アリアは顔を真っ赤にしてガウと吠えた。
なんだよ、いろいろって。

まあ、こいつがそういうからにはそうなんだろう。というか、そういうことにしかかねえと、またガバメントを抜かれちまう。それに、さつき俺自身詮索屋は嫌われると言ったばっかだしな。

「(トイレ行って遅れたなんて、言えるわけないじゃない……)」

「ん？　なんか言ったか、お前」

「い！　いい言っただけ！　言っただとしても、あんたには関係！　ない！」

「あーそうかい。じゃあもう聞かねえよ」

犬歯を剥いて腕をブンブン上下させるアリアを引っさげて、俺は再び歩みを再開した。

そんじやまあ、アリアの遅刻はおいといて……いつちよやってみつかね。

ポン、とホルスターにしまったグロックを一度叩いて、俺たちは射撃レーン目指して歩いていった。

* * *

人生は常に選択の連続だ。

まあ、それなりによく聞く言葉だと思う。それに、共感もまあできる。確かに人生はいつだって何かを選んで生きていく。選ばないということさえ、それは実は選んでいるのだ。

だが、当然ながら人間は完璧じゃねえ。いつもいつも正しい選択肢を採り続けることなんてできやしねえ。必ずどこかで間違いを引く。

……俺が何を言っていてえか、わかるかい？

つまり、だ。

——選択ミスったぜ、クソつたれ。

「ああん？　なんや、有明やないか。なんでお前がここにいるんや」
相変わらずドスの効いた声が、高圧的な響きをともなって俺に降ってくる。

俺はそれに冷や汗をかきつつ、目の前の教師に返答した。

「あー……」無沙汰してます、蘭豹先生。自由履修で来てるんですよ」

声が震えなかったことに自分で自分を褒めたい。

あークソ、なんてこった。俺としたことが、こいつの存在をすっかり忘れてた。

俺たちが射撃レーンに入った瞬間、そこで生徒たちを指導していた女教師・蘭豹に見つかってしまった。

奴は毎日のつまらない仕事ルーチンワークをほっぽりだし、こちらに歩み寄ってきた。

背中に背負った斬馬刀がこの上なく威圧感を放っている、19歳の女傑。今日はM500を吊つてないだけまあマシではあるが、間違はなく武偵高で会いたくない人物ベスト5に入る奴だ。安心要素としては機能しない。

ついでに言えば、こいつが俺たちと同年代だということもなんら意味を持たない。なにせこいつは、香港じゃ無敵と恐れられた武偵らしいしな。その上、親は香港マフィアのボスらしい。とことんまで一般人とはかけ離れた存在だ。

……って、こいつのプロフィールとかどうでもいんだよ。今重要なのは、いかにしてこの人間台風から逃げ出すかだ。

さもないと――

「はあん、なるほどなア。よっしゃ！ お前、久しぶりに来たんなら、模擬戦の1つもやっていけや！ そんで、2、3人ぶつ殺せ！」

蘭豹は、快活に大笑する。

ほら見ろ、すぐこんなこと言い出しやがる。教師じゃねえよ、こいつ。

マジで面倒なことになった、と俺がどうやってこいつをかわそうかなど考えていると、天井に設置されたスピーカーから、ピンポンパンポンと呼び出し音が鳴り、

『強襲科担当・蘭豹先生、マスターズ教務科までお戻りください。繰り返します。強襲科担当・蘭豹先生、教務科までお戻りください』

と、あり得ないほど最高のタイミングでピンポイントな校内放送が流れた。

しかも、この声高天原先生じゃねーか！ うおー最高だよ先生！

俺あんたが担任でよかったー！

水を差されたことに途端に不機嫌になりつつも、

「チツ、呼び出しかい、つまらん。有明えーお前また来いや、それで誰かと殺り合え」

と、むちやくちやな捨て台詞を残しつつ、蘭豹はこの場を去っていった。オーケー危機は去ったぜ。

しかし、なんなんだあいつは。マジで。ことあるごとに戦わせようとしやがって、そんなに俺に死んで欲しいのか。嫌われてんのか、俺？

まあいい。ともかくこれで厄介なやつが消えたんだ。これでようやくと——

『……………』

……………、なんだよこれ。

さてじゃあ射撃訓練でもするか、と俺が7番レーンに入った瞬間、どいつもこいつも自分の作業を止めてこっちを見てきた。

板塀で区切られているとはいえ、さすがにそれまでひっきり無しに響いていた射撃音が消えれば、どんな馬鹿でも異常に気づく。というか、背後からも視線を感じるんだが。

「おい、なんで見てんだお前ら」

後ろに目をやりつつ俺が声を上げると、全員サツと目をそらしやがった。2年……だけじゃねえな、1年まで見てやがる。さすがに忙しいのか、3年はいなかったが。

亮とアリアはまだいい。あいつらは事前に言ってきたし、2人くらいなら許容範囲だ。

だが、ここまで注目されると……、

「……………止めた」

俺は抜きかけていたグロックをヒップホルスターに仕舞いなおした。

こうも見られながらやれっかよ。集中できねえ。いや、集中しようがしまいが、どのみち大した結果が出るわけじゃねえし、アドシアードやってるわけじゃねえんだから、関係ねえっちゃねえんだけどな。

誰だってジロジロ見られながら何かをするのは好きじゃないはずだ。が、そうは問屋が卸さなかつたらしい。

「なんで止めるのよ？　ここまで来たんだから、やればいいじゃない」
アリアだ。

彼女は不思議そうに小首をかしげて、俺に練習を勧める。

俺は腰に手を当てつつ、

「あんな。俺は、こういうギャラリイがいんのが嫌えなんだよ。それに……そもそも、俺の射撃なんざ、見る価値もねえんだぞ」

だつつーのに、どうして揃いも揃って物見遊山に走るんだ。アルケミーの名前は思った以上に尾を引いてるってことか？

自分の知名度が予想よりも高かったことに呆れていると、

「価値がないかはあたしが決める。それに、簡単なことじゃない。いつもみたいにやればいいのよ。あんたの腕は知ってるけど、錆びてないか見てあげるわ」

「いつもみたいによつたら、シヨボイ結果に終わるだけだぜ？」

「ごちやごちや言わない！　いい、鍊？　これは『命令』よ、つべこべ言わずにさっさとやる！　あたしの知ってるあんたの実力を見せな

さいー」

「……………」

……オイ。

ちよつと、調子に乗りすぎじゃねえか？

これがこいつの性格だつてのは、まあいい。遠慮がなくなってきたのも親愛の裏返しとして受け取ってやっていい。そこまでなら、まだ友達の範囲内で俺は笑って済ましてやったよ。

だがな、そこに重ねちやいけねえモンを、お前は重ねたぞ。

知ってる、だつて？　お前が、俺の、何を知ってるつつんだよ、オイ。ありもしねえもんを見せろつて？　それが、命令だから？

通らねえよ、アリア。それは、通らねえ。言つてなかつた俺が悪いのかもしれないがな、そいつは俺の地雷なんだ。どいつもこいつも、勝手にわかつた風に、俺を誉めそやす。わかつてないのは俺一人。こいつは一体なんの冗談だ？

……つて、なにをイラついてんだか。

「……上等だ。そこまで言うなら、やってやるよ」

少し熱した頭を冷ましながら、俺は再びグロックを抜く。今度は、完全に。

もういい。ここで拘泥してても、これまでの経験上、アリアは絶対引かない。ならさっさと終わらせてしまった方が、よっぽどいい。

切り替える。熱くなるな。いつもみたいに、ふざけて終わらせろ。

「悪いが、期待はしねえでくれよ」

「期待はしないわ。でも、なんとなくわかるの。あんたならきつと、あたしのドレイにふさわしい力を見せてくれる」

……またドレイか。

友達づくりの次は、武偵としての実力も要求してくんのか。勘弁して欲しいぜ。

「……はあ。しゃあねえな、わーったよ。見せてやる——俺の、実力ちからを」

ため息をつきながら、俺はガリガリと頭をかく。

しかしなあ、普通にやってみせたところで、こいつなんか勘違いしてるからな。結局「本気出さない」とか言われる気がすんだよな。

どうしたもんか……あ、そうだ。

「どうしたの？ 早くやりなさいよ」

「焦んなよ」

急かすアリアを宥めつつ、グロックをコツキングして初弾を薬室チエンバに送る。射撃モードは一発ずつ。

さあて——行くぜ。

「……………」

一息呼吸を入れる。

そして俺は、なんでもないことのように、25 m先にそびえるマンターゲットに向けてすばやくかつ無造作に拳銃を構えて、

間髪をいれず、目をつぶって引き金を引いた。

乾いた発砲音が連続して6つ響く。それはつまり、銃口から6発の弾丸が飛び出していったことを意味していた。

着弾点は……まあ、わからん。なにせ、見てないのだから。

俺は、そのまま結果を確かめることはせず、グロツクをホルスターに戻す。それから、ズボンのポケットに両手を突っ込み、レーンを離れた。

「錬、あんた……」

少し離れた場所に立っていたアリアが、呆然とした表情で俺を見ている。

そりやそうだろう。アリアからは見えないうように目をつぶって撃つたんだ、おそらくとんでもなくひどい結果になってるはずだ。それを見てアリアが俺に呆れるのも無理はない。

「納得したかよ。お前が見たかったもんは、この程度の代物だ。話にならねえよな」

適当に言つて、俺は肩をすくめる。まあ、こんだけやりや、少なくとも演技には見えねえだろ。

周囲がざわついている。多分、あまりの下手さに騒然となってるんだろうな。「なにあいつ下手すぎるだろ」とか言つてんですね、分かります。

俺は、未だこちらを見つめるアリア（固まるほど愕然としているらしい。どんなとこに当たったのか少し気になるな）の横を素通りし、射撃レーンを出ようとして、出口に一人の女生徒が立っていることに気づいた。

首下まで伸びた金髪ポニーテールの女子。背は……160以上はある。勝気な印象を受ける、なんというか強襲科らしい女子だ。

見かけねえ顔だな、1年か？

というか、そこに立たれると、俺が出れねえんだが。

俺はどこかぼうつとした彼女に声をかける。

「悪い、そこ退いてくれるか？」

「え、あ、は、ハイっ！」

俺が言うと、彼女はハツとしたように反応して道を開けた。

なんだ、やけに従順だな。まあ、武偵高は完全に年功序列だからな。基本、後輩は先輩にはよく従うんだが。

それとも、こいつが特別こういう奴なのか？

ともあれ、俺は遮るものがなくなった出口を通り、射撃レーンを後にした。

レーンから体育館へと戻る道すがら、俺はさっきの場面を思い返していた。

アリアはなぜか、俺を実力者だと認識している。だから素の俺を見せ付けたところで、それでは彼女は納得しないだろう。

ならば、どうするか？

中途半端だから、いけねえんだ。だったら、完膚なきまでにザコだということのを思い知らせてやればいい。

そのために俺は、目をつぶって撃つたのだ。そうすりゃ、いやでも弾は的外れな方向に飛んでいく。目を開いたままで外そうとしてもよかつたんだが、そうした結果狙いから逸れて逆に的に当たる、なんてことになりかねない。

で、その顛末は見ての通り。見事俺は、アリアの勘違いを正しつつ、彼女をかわすことができたってわけだ。

まあ……、

「これでもう、例の一件がどうかの話もなくなっただろうけどな」
キンジが提案した方法を試すまでもなく、これでアリアは俺の実力を見極めただろう。あいつが俺をパーティに誘う理由も、これで無くなった。

そう、無くなったんだ。

「……………」

……おい、自分でやったことだろうが。なんでこんな気持ちになつてんだよ。

どこか釈然としない思いを抱えながら、俺は体育館への道を歩き続けていった。

* * *

強襲科には、専門棟がない。

いや、より正確に言えば、強襲科に与えられた校舎がない。

その代わり、強襲科には訓練用に建築された黒い体育館がある。強

襲科生は基本的に戦闘訓練のみを行うため、こういう形を取っているのだ。

そして、その体育館の裏に回ると、ここでは射撃訓練用のレーン場が生徒を迎え入れる。レーン数は16。25m先のマンターゲットが設置され、命中箇所によって得点も計測できるようになっていた。

その、第7レーン。そこには今、一人の男子生徒がいた。

名を、有明錬。かつて伝説のコンビ『アルケミー』の片翼を担っていた少年だ。

有名人が注目を浴びるのはいつの世だって同じで、それは有名税のようなものだ。所詮は一学園内の範囲とはいえ、いやだからこそレーン場にいた生徒たちは、錬に好奇の視線を向けていた。

一度目は、残念ながらその行動を本人に咎められた。が、今こうして再び錬はレーンについていた。

そして。

皆が見守るなか、第7レーンに、6発の銃声が轟いた。

撃つたのは、もちろん錬だった。彼は、まるで適当にやったかのような無造作極まりない撃ち方で、6度引き金を絞った。

普通なら、そんな撃ち方をすれば放たれた銃弾は、目も当てられない方向へ飛ぶだろう。事実、戦闘中に苦し紛れで撃った弾丸が相手を射抜かないことを、ここにいる面々は熟知していた。

だからこそ、多くの者が落胆した。錬は適当に撃つことで、実力を隠す心積もりだと思ったからだ。

そして、それは錬を焚きつけた張本人である神崎・H・アリアもまた同じだった。

否、同じではない。彼女は錬の実力を確信していただけに、無為にそれを隠そうとした錬に、表情を憤怒に染めた。

しかし。

それはすぐに、別の感情に塗り替えられることになる。

すなわち、驚愕という感情に。

(全弾命中……！)

右肩、左肩、そして拳銃。それぞれに2発ずつ、白い板に黒く描か

れた人影が穿たれていた。不殺ころきずを信条とする武偵がもつともよく狙う部位と、武装解除狙いの発砲、ということだろう。

上手い、と言えば上手い。さきほど普通なら命中しないと云ったが、逆に言えば普通でなければ当たるといふことだ。そしてアリアをはじめとしたSランクはもちろん、Aランクのメンバーは普通というレベルには収まらない。再現は、十分可能な領域だろう。

しかし、間断無しの連射、銃を構えて（とすら言えぬほどの自然体だったが）から撃つまでの時間、狙いさえ定めぬ速射。これらの条件が加わってくると、いかにAランクといえども厳しくなってくるだろう。

だが、これだけでは終わらない。今の射撃最大の難点を挙げるとするならば、それはもちろん――

（今、鍊のやつ、目をつぶって撃ってた……）

そう。アリアの角度からは見えづらかったが、髪の間隙から見えた鍊の両目は確かに閉じられていたのだ。あたかも、これぐらいのことで視覚に頼る必要はないとも言おうように。

それは、Aランクでは決して届かない、元とはいえまさしくSランクの絶技だった。

「鍊、あんた……」

用は済んだとばかりに、自らの技を誇るでもなくあつさりとレーンから離れた鍊に、アリアは思わず声をかけていた。

自分でも、何を言おうとしたのかはわからない。だが、予想通りの、否、予想以上の腕前を見せ付けられたアリアはそうせずにはいられなかった。

しかし、

「納得したかよ。お前が見たかったもんは、この程度の代物だ。話にならねえよな」

（――え？）

誰が見ても一流だと言える銃技をして、鍊はそう自評した。

なんでもないように肩をすくめる彼の表情は優れない。アリアにはそれが、まるで悲嘆に暮れているように見えた。

まだだ、と。こんなものじゃ全然足りない、と。何か、余人には決して与り知れぬ高みを相手に、自嘲しているかのようだった。

(話にならないって……鍊は一体、何を見据えてそう言ってるの……?)

と、そこまで考えて、アリアはある可能性に気づく。

もしかしたら彼も自分と同じように、打倒しなければならぬ敵や、越えなければならぬ目標があるのかも知れない、と。アリアにとってそうであるように、彼もまたさらなる力を欲しているのでは、と。

それは単なる仮説だった。が、アリアには何故かなんとなくそんな気がした。

自分の横を通り、この場を後にしようとする鍊に振り返れば、彼の背中には言い知れぬ何かがあるように見えた。

「おい、見たか今の。目隠し撃ちであんな精度、ありえんのかよ?」「あの人が、伝説って呼ばれてた有明先輩なの? 私、単なる噂かと思ってた」「Sランクは違うな、やつぱ」

口々に小声で鍊を誉めそやす声が、そこかしこから上がる。元から鍊を知っていた者、伝聞でしか知らなかった者、全員が賞賛していた。

ただしそこには、遠い者に対する畏怖だけでなく、確かな親しみも込められているように思えた。自分に対するそれとは違って、だ。

そのことにわずか感傷を抱いたアリアに、アリア同様見学していた不知火亮が声をかけた。

「神崎さん、有明君と遠山君をパーティーに入れるつもりって本当?」「……そうよ。あたしにはもう時間がない。あたしは、あいつらをパートナーにする」

普段、アリアと不知火はあまり話すことはない。が、同じクラスでしかも話題は鍊やキンジだ。自然と会話は繋がった。

アリアの返答を認めた不知火は柔和な笑みを浮かべながら、

「神崎さんと『アルケミー』のパーティーかあ。すごいことになりそうだね」

『『アルケミー』? なにそれ?』

聞き慣れない単語に、アリアは首をかしげた。

『アルケミー』が活動していたのは、去年の6月から12月までのおよそ半年だ。自然、その話を知る者の大半が2年生や3年生になってくる。1年生で知っているのは先輩から聞かされた者くらいだろう。

もつとも、この伝説のコンビが解散して久しい今、2年ではあるが転入生であるアリアが知らないのも無理はなかった。

当然のことながら既知である不知火はアリアに語る。

「遠山君と有明君は、去年強襲科でコンビを組んでね。『アルケミー』っていうのは、その時のコンビ名だよ。ポピュラーな話だけど、彼らの任務達成率は100%を記録していて、当時最強のコンビだって言われてた。今でも多分、大勢の人が解散を惜しんでるんじゃないかな」

不知火の声には、その時のことを懐かしむような響きが含まれていた。そのことに、鍊やキンジとの付き合いが薄いアリアは、どこか胸に棘が刺さるような感情を持った。自分だって鍊たちのことは知っているし、なにより彼らは自分のパートナーだ（現段階では確定していないが）と言いつ張ることはできるが、やはりまだ他人の領域は出ない。その事実が、アリアに「結局お前はまだひとりぼっちのまままだ」と嘯うそいているような気がして、アリアは幼い顔を曇らせる。

しかしそれはそれとして、アリアは胸中である疑問を抱いた。

（それほどの実力者たちが、今は2人とも揃ってEランク？ 一体なにがあったのかしら？）

調べるか、それとも2人に聞くか。アリアはとりあえず判断を保留しながら、それよりもまずは2人をチームメイトにする方が先決だと思気込んだ。

なぜならアリアにはもう、時間がないのだから。

* * *

体育館まで帰って来た俺の視界に映ったのは、いつになく暗い友達の姿だった。さっきのことが関係しているのは明白だったが、それには触れずに俺は話しかけた。

「よう、キンジ。装備確認は終わったんかよ？」

「……まあな」

く、暗え……。

気のないキンジの返事を聞きながら、俺はどうしたもんかと眉根を寄せた。

うーん、さつきはああ言ったものの、やっぱり話を聞くべきなんだろうか。

……いや、やめとこう。本当に悩んでるなら、きつといつか話してくるだろ。その程度には、こいつとはつるんできたつもりだ。

そう結論づけた俺はなるべく軽い口調で、

「そっか。……んじゃ、そろそろ帰っか」

「ん……そう、だな」

……しゃあねえなあ。

「オラ、なに沈んでんだよ、お前。らしくねえ……つてこたねえけどな、もつと元気だせよ」

ボスツと加減してキンジの頭をはたく。死ぬ死ぬ団じゃ、激励がわりに銃弾が飛んでくるんだ。それ考えりや、ずいぶんマシだろ。

つーか、なんで俺がフォローに回ってんだかな。俺、あんまりそういう役回りは得意じゃねえんだが。

まあ、こんな奴でも友達だ。こんぐらいはしてやるさ。ちゃんとニボシ食えよ、と言うかどうかは迷ったが。

「……はあ。お前に言われちゃお終いだな」

「つせえよ」

ため息一つ、やっと元に戻ってきたキンジを伴って、俺は強襲科の体育館を後にした。

外はもう、茜色の世界へと変貌していた。日が沈み、夜が訪れるまでのどちらでもない時間。一日の終わりを感じさせる、そんな時間だ。

影法師を引き連れて、俺たちは帰路につく。

と、その途中で俺はふと思いついた。

「なあ、キンジ。帰りにゲーセン行かねえか？ 今朝、理子がクレーンゲームのメダル引換券くれたんだよ。ただ期日が今日までつーか

ら、あいつはいかねえんだと」

「ゲーセンか。そういや、最近行つてなかったな」

提案してみると、キンジも乗り気になったようで、俺たちは2人で近場のゲームセンターに行くことに決めた。学生寮エリアには、富に店が軒を連ねていて、その内の一つにゲーセンがあるのだ。一つしかねえつてのが痛い、まあ満足できなきやモノレールで島外に出ればいいだけの話だ。

そんなわけで、俺たちは目的地目指して歩いていると、

「キンジ、鍊」

「ん？」

相手はだいたいわかっていたので足を止めずに声に振り返ると、そこにいたのは、まあなんとというか予想通りアリアだった。

あー……なんか、さっきのことがあるから、気まずいな。というかこいつ、怒ったりしてないのか？

俺のそんな心配とは裏腹に、アリアはなんでもないように俺たちの間にスルリと入ってきた。彼女は腕を後ろ手に組みつつ、ひよこひよこことツインテールの髪先を遊ばせながら、

「あんたたち、人気者なんだね。みんなに、囲まれてたそうじゃない」「？ お前あん時いなかったろ、誰に聞いた？」

「あかり……後輩よ。体育館の2階から見てたんだって」

俺の質問にアリアは答えつつ、

「鍊。さつきは、見せてくれてありがと。あんた、凄い腕前なのね」

口元に笑みを貼り付けながら、アリアは言った。

こりやあ……やつぱ、キレてんのかなあ。しかし、皮肉を言うようなやつだとは思わなかった。直情的なだけだと思ってたんだが……読み違えたか？

なににせよ、だ。アリアの内心はともかく、こいつは変わらず俺たちに接してくるつもりらしい。ならここで俺が無視すんのも、そりやあガキつてもんだよな。

俺は頓着することなく「そりやどーも」と返し、アリアは今度はキンジに顔を向けた。

「キンジも、一目置かれてるんでしょ？ あんた、付き合い悪いしちよつとネクラっぽいのに」

「余計なお世話だ。俺はあんな奴らに好かれたくない」

「それでも、凄いや。あんたたちは、みんなに好かれてて」

アリアはひよいと顔を下向けて、

「あたしなんか、強襲科あそこじゃ誰も近寄ってこないから。実力差がありすぎて、誰も合わせられないのよ。……まあ、あたしはアリアだからそれでもいいんだけど」

……？ あたしはアリア？

うん、知ってるけど。なんでいきなり自己紹介？

「アリア……オペラの独唱曲のことか」

あ、そつちね。すげえババな勘違いしちゃった。

「よく知ってるじゃない、キンジのくせに。……そうよ、あたしはどこかの武偵高でもいつもひとりぼっちだった。ロンドンでも……ローマでもそうだった」

いつかの日を思い出しているのか、顔を翳らせるアリアの台詞の中に、俺は気になる箇所を見つけた。

「ローマ？ お前、ローマ武偵高にもいたのか？」

「そうよ。……あ、もしかして半年前のこと思い出してる？ あんたたちと会ったのも、ローマだったものね」

「ああ……」

こいつが、ローマ武偵校にいた。それも多分、半年前に。

つてことは……ああ、クソ、そういうことか。あの時こいつと会ったのは、ダブルブッキングだったってわけかい。アガンベン家の連中が考えることは、どれも一緒だな。

しかし……ローマ武偵校、か。あの人、元気にしてっかな。

思い出すのは、大酒飲みの修道女。多分、あつちで俺たちが一番世話になった人だろう。いろんな意味で。

いやまあ、世話になったっていや、もう一人外せない奴がいるんだが……あのキザなチビ男はできりやあんまり思い出したくない。もちろん、大事な友人ではあるんだが。

そんな風に俺が過去を懐かしんでいると、キンジがぶすつとした顔で、

「……それで？ お前はここで俺たちをドレイにして、トリオにでもなるつもりか？」

と、らしくもなくジョークを飛ばした。

えー、なにそれつまんねえよキンジ。

お前なあ、そんな冗談で笑うやつがいるとでも——

「——ぷっ、くくっ。あんたも面白いこと言えるんじゃない」

笑ったあ!? あれなに、じゃあ俺の感性がおかしいの?!

隣で口元を押さえるアリアに、今度は俺が焦る。

や、やばい、これじゃ俺がギャグセンスのないやつだと思われる。

急げ、乗るんだ俺！ 緊急回避だ！

「くっく、確かにな。お前もたまにやあ、おもしれえこと言うじゃねえか」

「どこがだ、全然面白くないだろ。お前らのツボはわからん」

やっぱつまんねえのかよ！

合わせて損したよ、オイ。

失態に肩を震わせる俺に、アリアがこちらを窺い見て、

「ねえ、錬。キンジ、強襲科に戻ってからちよつと活き活きしだしたと思わない？ 昨日まではもつと、自分に嘘ついてるみたいで苦しそうだった。今のほうが魅力的よ」

「あー……ま、そうかもな」

「……そんなこと、ない」

フン、とーつ鼻を鳴らしながら、キンジはアリアに先に帰れと指示する。ま、ゲーセン寄ってくからな。

が、帰国子女ゆえにゲーセンを知らなかったアリアは興味を持ち、なぜかついてくることになった。

はたから見れば子守のようにも見える並び方で、俺たち3人は騒ぎながら、遅くならないように足を速めるのだった。

* * *

ピロピロピロピロ、と軽妙なBGMに合わせて、クレーンが動く。

一度右方向にスライドしていき、次いで操縦者の指示を受けて今度は奥へと移動していった。

タンツ、と勢いよくボタンから手を離す音が響いて、静止したクレーンがそろそろと爪を開きながら下降していく。

やがて目標物に接触したクレーンは、ゆっくりと爪を閉じていき、獲物を掴んだ。

「いけ、いけ」

操縦者の小さな声がこだまする。その意に従うように、クレーンは上昇を始めた。

上がる、上がる。

そして、ついにクレーンが限界まで上昇——する直前に、目標物が拘束をすり抜け落下した。

「ぎ——っ！」

騒々しいゲームセンター内でお耳に響く奇声が、操縦者ことアリアの口から飛び出していった。

バンツ！ と筐体のガラスに両手を叩きつけるアリア（マナー違反だぞ）を見つつ、俺はキンジに尋ねた。

「おい、キンジ。これで何回目だ？」

「7回目。コイン10枚の引き換えだったのに、あと3枚しかないからな」

手の中でコインを弄びながら、キンジが答える。

さて、今俺たちは宣言どおりゲーセンにいるわけだが、引換券をメダルに変換してそうそう、アリアがUFOキャッチャーにひどく興味を示した。というか、正しくは中に入ってるネコだかなんだかよくわからぬいぐるみに心を奪われたらしい。よかったなぬいぐるみ君。うちの一部男子がお熱を上げるアリアのハートをお前は射止めたらしいぜ。

が、それはアリアの話であって、正直俺たちはこんな興味ねえんだが、もしコインを別用途に使った場合、後で責められるであろうことは想像に難くない。

ので、やり方を教えて好きにさせているわけだが……、

「今度こそ本気の本気！ 本気本気本気ほーんきいー！」

クレーンを操作する。ぬいぐるみを掴む。

で、落ちる。

「みやきや——っ！」

はい8回目。下手くそだな、こいつ。

「しようがねーな。どけ」

みかねたキンジがアリアをどかし、コインを1枚入れる。優しいねえ、おい。取ってやるよってか。

俺は残りのコイン1枚を預かりつつお手並み拝見する中、キンジがあやつるクレーンは、1匹のぬいぐるみを掴み持ち上げた……と思つたら、しっぽに引っかけたもう1匹くっついてら。

「キンジ見て！ 2匹釣れてる！ 放したらただじゃおかないわよ！」

「もう俺にどうこうできねーよ」

かじりつくようにクレーンの行方を見守るキンジとアリア。

俺も含めて6つの目が凝視する中、クレーンは着実にゴールを目指し。

そして——ポト、とぬいぐるみが穴に入った。

「やったー！」「っしやー！」

パチンツ、と乾いた音が鳴った。

おいおい、ハイタッチしてるよ。どんだけ嬉しかったんだよ、おい。

かと思いきや、2人はバツが悪そうに慌てて離れた。なにやってんだ。

「ば、バカキンジにしては上出来ね」

と言いつつ、アリアは下の取り出し口からぬいぐるみ2匹を掴み出す。

かわいいとか言いながらぬいぐるみ——ちらつと見えたタグによればレオポンという名前らしい——を抱くアリアは、意外と普通の女子高生（というよりはいいところ中学生だが）に見えた。

そんなことを思っていると、アリアがやおら「あっ」と呟いて、

「うー……」

呻きながら、2匹のレオポンと2人のドレイ(俺とキンジのことだ)を見比べている。

それから迷うようなしぐさを見せて、

「こ、これはあんたたちにあげるわ。約束通り強襲科に戻ってきたご褒美よ」

ぐい、と俺たちに差し出してきた。

……い、いらねー。

「いらん。お前が2匹もらえばいいだろう」

「だ、ダメよ、そんなの。これはあんたが取ったものでしょ。貴族は人の手柄を独り占めなんてしないものよ!」

だったら未練たらたら目の目でレオポンを見るなよ。

「いらん」「あげる」と変な言い合いを続ける2人を見ながら、俺はため息をついた。

はあ。しゃあねえなあ、つたく。

俺は残った最後のメダルをUFOキャッチャーに投入。

で、すぐさまクレーンを動かして——もう1匹、レオポンとやらを確保した。

「ほれ」

ひよい、とアリアに投げ渡すと、アリアは慌てながらもきちんとキャッチする。

それから驚いたように両目を見開いて、

「え……こ、これどうしたのよ錬?!」

「今取った」

「ああ、そーいやお前、昔からクレーンゲーム得意だったよな」

キンジが思い出すように言ったのを聞きつつ、俺も中学時代のことを思い出す。

といつても、東京武偵校中等部のことじゃなく、それより前に通っていた一般^{パンチュー}中学のことだが。

これはまあ、なんつーか……名残、みたいなもんかな。武偵になるより前の、まだ普通の男子中学生だった頃の有明錬、その名残だ。

ま、いまとなつちやただの思い出だけだな。

「い、いいの？」

過去の残滓に思いを寄せていると、アリアが伺うように言った。こりやまた珍しい。遠慮しないかと思っただが、しおらしいところもあんだな。

「いいものにも、どのみちメダルは使うつもりだったんだしな。それに、俺とキンジは3匹もいらねえ」

そもそも1匹すらいらねえんだけど、それを言ったらまた面倒なことになるのでやめておく。

アリアは2、3回頷いて、

「そ、そうね……うん、そうね！」

心底嬉しそうに、笑顔を咲かせた。

何が「そうね」なのかは知らんが……まあ、とりあえず丸く収まつたらしい。

結局、1人1匹ずつ分配されたレオポンとやらの正体はぬいぐるみではなくストラップだったらしく、俺たちはその場で携帯電話にくっつけたりしたのだった。

それは、どこからどう見ても、ただの高校生たちにしか見えないほど、平和な光景だったろう。

実際、なんやかんやとあったものの、初っ端の爆弾事件を除けば、まあおおむね平穏だったと言っただけいいだろう。

——ここまでは、な。

だが、ここからは一気に急転直下の事態を迎えることになる。

来るのだ、ついに。

キンジが提案し、アリアが呑んで、俺が賛成した——

約束の、最初の一件が。

12. 一つの事実、数多の意味

「——あ。言い忘れてたけど、あたし今日寮の方に帰るわ」
と、アリアが思い出したように言った。

クレインゲームのあともいろいろ遊びまわり。ゲーセンの喧騒を後にして、じゃあ家に帰るかという段になって、アリアは冒頭の台詞を述べた。

「つーか、どうでもいいがこいつ、ゲーセンにどハマリしてたな。まさかガンシューティングのゲームで筐体2つ使ってプレイしだすとは思わなかった。『双剣双銃』の面目躍如ってところか。」

空に藍色が顔を出し始め、星が瞬く天蓋の下、俺は足を止めずに、
「寮……ってのは、女子寮のほうか？」

「そうよ。ちよつと、あたしの後輩——戦妹が気になってね」

「ふーん」

なんだ、こいつ戦妹がいたのか。どんな奴なんだろうな。

俺はアリアを挟んで右隣にいるキンジに顔を向け、

「じゃあ、俺も今日は自分ちに帰るわ。あんまり空けて汚れてたら、天眞の奴にぶつ殺されちまう」

「それは構わんが……式ってそんな奴だったか？ 俺の記憶どおりなら、かなり礼儀正しかった気がするんだが」

「……お前らにはな」

嫌なことを思い出してしまい、俺は苦々しく顔を歪める。

と、アリアがたたたたと俺たちの間から駆け出して、数歩進んだかと思うとくるりと振り返り、

「じゃ、あたし行くわ。——また明日ねー」

それだけ言い残して、またアリアは走り去っていった。

薄暮の中に溶けていく小さな背中を見送って、

「また明日……か」

と小さく呟きながらキンジに顔を向けると、こいつもまたこちらに顔を向けていた。

目が合って、軽く肩をすくめる。

いつの間にか……なんつーか、あいつがいるのが当たり前になりつつある。それはいいことなのか、それとも悪いことなのか。それはわからないが、エリアは確実に俺たちの生活に少しずつ入り込んでいく。

といっても……今日の件で、友達としてはともかく、武偵としての俺は見限られちゃったかもしれないねえけどな……。

そんなことを思っていると、あー……恥ずかしながら、尿意が襲ってきた。

俺はきよろきよるとあたりを見回し、すでにお馴染みになりつつある、いつものコンビニに目をつけた。

「キンジ。俺ちよつとこのコンビニ寄ってくるわ」

「ん、ああ。それはいいんだが……問題、ないのか？」

は？ なんのことだ？

いきなりの確認に心当たりを探すも、見つからない。まさか、尿意は問題ないのかという意味だろうか。

まあ、いい。よくわからんが、とりあえずここは、後輩に教わった言葉で答えておこう。

「大丈夫だ、問題ない」

「そうか……わかった」

よし、これでいい。

頷くキンジを後にして、俺はコンビニへと足を向ける。

で、コンビニでトイレを借り、少し店内を物色してみたあと、俺は店外に出た。

そんな俺を、こんな会話が出迎えた。

「ぱ……ぱんちゅーがー」

「なっ、なんなんだお前はー」

「……………」

……いや、お前がなんなんだよ、キンジ。

えーと、どういう状況だこれは？

俺の視界に映るのは、両手で目を覆うキンジと、スカートを手で押さえた武偵高の女子である。

状況と台詞から察するに、多分キンジが彼女のスカートの奥に隠された花園を目撃してしまった(この時点でホルスターに手が伸びた俺を誰が責められよう)といったところか。

……お前はなんで、こんな短時間でそんなラッキースケベ的展開に発展させることができるんだ。

半眼で俺がキンジを眺める中、奴は唐突に叫びながら走り去っていった。

「しっ、師匠！ お気を確かに！ 傷は浅うござる！」

呻きながらその場から逃げ出すキンジ(お前俺のこと忘れてんだろ)の後を追うように、近くの街路樹の枝から、一人の女子が飛び降り、着地するやいなやキンジを追っかけていった。

武偵高の制服が隠れるほどに長いマフラーに、白いリボンで括られた同じく長い黒のポニーテール。でもって、あのへんてこな忍者言葉は……キンジの戦妹の1年・風魔陽菜^{ふうまひな}か。なんでここにいんだあいつ。

相も変わらず、ホントこの学校はよくわからんことばかり起こるな。

まあ、それはそれとして、

「——で、だ。お前、キンジの知り合いか？」

「ッ!」

離脱していくキンジたちを呆然と見送っていた女の子に声をかけると、彼女はおどろいたように振り返った。

そして、

「あ、あー！ 有明錬！ ……先輩！」

と叫びながら(なんだそのとってつけたような「先輩」は)、俺を指差した……つもりなんだろうが、なんかそれまで持ってたらしい拳銃がそのままこっち向いてるんですけど。

あまりにも唐突に銃口を向けられた俺は、咄嗟のことにリアクションを取ることができなかった。

ななな、なにこれ。なんで俺いきなり照準^{ねら}われてんの？

頭の中が混乱するのを感じつつ、

「……なんで俺の名前を知ってんのかしらねえけどな、まずはそいつを下ろせ」

と、なるべく彼女を刺激しないように冷静かつ静かな声で指示する。

ホントは、「止めてお願い撃たないで」と懇願したいところだったが、それはさすがに先輩としてのプライドが勝った。

「え？……あつー」

俺の言葉でようやく自分が構えていたことに気づいたのか、彼女は拳銃——このまえ俺たちを狙ったUZIの小型版・ミニUZI、よりさらに小さいマイクロUZIを慌ててレッグホルスターに収めた。

あー、ビビツた。

「もっぺん聞け。お前誰だ、キンジの知り合いか？ それと、なんで俺の名前まで知ってたんだ？」

危機が去ったことにそっと胸を撫で下ろした俺は、改めて質問しながら彼女の姿を観察する。

身長はかなり小柄だ、パツと見中学生にしか見えねえ。大きめのリボンで茶髪をツインテールにしている……背と相まってどこことなく、アリアを彷彿とさせる。

彼女は、瞳に陰を混ぜ、俺を睨んでいた。

いきなりそんな真似される覚えはねえんだがな……誰だ、こいつは。

おそらくは後輩だろうが、と当たりをつける俺に、女の子はキツと目じりをきつくして、

「……あたしは、1年・間宮あかりまみやです。有明先輩は、あたしのことを知らないだろうけど、あたしは先輩たちを知ってます」

「へえ」

威嚇してますよと言わんばかりの険悪な口調に、俺は気の抜けた返事を返す。銃さえなきや、ただの女子だしな。ビビることねえよ。

しかし……1年の間宮、ねえ。やっぱりしらねえ。

だがまあ、とりあえず向こうはこつちを知ってるらしい。ま、良くか悪くか俺たちの名前は結構広まってるらしいからな、おかしなこと

じやねえがだからつつつて、一体なにしに来たんだか。

なかなか目的が見えてこないことに内心で首をかしげた瞬間、その答えは簡単に返ってきた。

他ならぬ、間宮の台詞で。

「先輩たちは、アリア先輩につく悪い虫です！」

はい!?

「……あ?」

とんでもない台詞に、俺は耳を疑って間抜けな声を出してしまっ
た。

今なんつった、こいつ? 悪い虫? 俺とキンジが?

まさか、俺たちがアリアに言い寄ってるとでも思ったのか?

……大丈夫か、この子。思わず、ジト目になっちまったぞ。

すると彼女はなぜか一瞬身を竦ませて、怯えたような目線を俺に寄
越した。え? 今そんな目向けられる場面あったか?

「ツ! こ、答えてください! 有明先輩は、一体アリア先輩の何なん
ですか!」

何かを振り払うように、声を荒げる間宮。

いや……まずお前がアリアのなんだよ。

まさかとは思うが……ストーカー、とかじゃねえよな。

まあ、ありえないセンじゃない。あいつは、見てくれはとんでもな
い美少女だからな。そこだけ見れば、男はおろか……なんつったつけ
? あ、そうそうレズだ。そういうタイプのストーカーが現れても不
思議じゃない。

だがだとすると、ここであんまりぺらぺら喋るのはよくねえんだよ
な。ストーカー相手に対象の情報を与えるのは危険だと、探偵科で
習った。^{インクスタ}

「俺とアリアの関係性、ね」

さてどう答えたもんかと俺はわずか言いよどむ。

このままはぐらかしても、この手の奴は引かないだろう。なら適当
に情報を与えるのが手っ取り早い。

が、そうになると、言い回しに気をつけなきゃな。彼女を刺激するこ

となく、最低限の情報で俺たちの関係性を伝えなけりやならねえ。
となると……、

「そうだな、あいつにとって俺は……得がたい存在ってところだろうよ」

このあたりが落としどころだろ。

得がたい存在⇨友達。孤独らしいアリアにとっちゃ、友達はきつと得がたいものだろうからな。

ナイスだ、俺。うまくぼかせたぞ。

これなら彼女を無駄に刺激することなく、お帰りいただくことができらるだろう。

——と、思ったんだが。

「なつ、なつ、なつ、なんでですかそれ——ツ！」

なぜか間宮は即座に踵を返してどこかへ走り去っていった。

……あれ？ な、なんで？

突然すぎる間宮の奇行に、反応が追いつかない。何キツカケである行動に走ったのか、さっぱり検討もつかなかった。

——つつても、

「まあ……武偵高の生徒だしな。あんなこともあるか」

遠ざかっていく間宮の背中を見ながら、俺は呟いた。

その台詞は俺が武偵高に大分染まったことを如実に表していたのだが、生憎俺はそれに気づくことはなかった。

* * *

1年A組所属、強襲科Eランク武偵・間宮あかりは、神崎・H・アリアの戦妹である。

——『戦徒制度』。

これは、先輩が後輩とコンビを組み、1年間指導し指導される、ツーマンセル二人組特訓制度の名称だ。契約を結べば、互いの部屋の鍵を交換したり、任務をコンビで受けるようになったりと、まさにパートナーとも呼べる存在になる。パートナー制度ということなら『繋友』チェインというシステムもあるのだが、後進を育てるという意味合いにおいては戦徒の方が重宝されていた。

ちなみに、男子は戦兄弟^{アマミコ}、女子は戦姉妹^{アマミカ}と呼び習わすのが通例なのだ、たいていは『アマカ』でにくりにされている。生徒間ではもっぱらややこしいと不評を買っているのだが、これも様式美というか慣例というか、とにかく昔からの決まりなのだった。

あかりはつい先日、アリアから出された課題をクリアし、晴れてアリアの戦妹となった。もともとあかりはアリアを尊敬（なかば崇拜の域だが）していたこともあり、アリアも目をかけていることもあって、互いが互いに別ベクトルでの親愛を持つことで、この2人のコンビは上手く回っていた。少なくとも、あかりはそう思っていたのだ。

——今日、この日まで。

本日の、午後のことである。武偵高のカリキュラムでは午後は専門学科の授業に入ることになっている。となればあかりを始めとした強襲科生は、強襲科の専門施設である黒い体育館に集まって各々訓練を行うことになる。そして授業終了時刻になるまで、それぞれが己の技を磨くのだ。それが、毎日の習慣だった。

が、今日はそこにイレギュラーな因子が飛び込むことになった。去年のエースコンビ『アルケミー』の帰還。それは、もはや叶うことはないだろうと目されていた椿事であった。

あかりもまた、それには驚いた。先輩たちから『アルケミー』の話は聞いてはいたが、すでに解散したコンビだと教わっていたからだ。体育館の2階、トレーニングスペースから、あかりは眼下を見下ろす。そこには、1階で訓練していた2年生たちが築く人だかりが出来ていた。

その中心にいるのは、2人の男子生徒。一見普通そうにも見えるこの2人の少年こそが伝説のコンビ『アルケミー』の両翼であった。

しかし、あかりはあの人だかりを構成する先輩たちのように騒ぐことをしなかった。なぜならあかりにとっては、あまり彼らに興味はなかったからである。いくら伝説だと言われたところで、あかりには所詮伝聞でしかない。せいぜいが、有名人が来てるんだ程度の認識だった。

だからこそ、この話はここで終わるはずだった。伝説のコンビが強

襲科に来た。それをあかりは眺めた。それだけの話で、あとには続かないはずだった。

だが。

訓練が終わり体育館を出て、入り口にアリアが立っているのを見て捉えて——その次の瞬間、そうも言っていられなくなった。

なんと、自分が尊敬するアリアが、今まで見たこともないような楽しげな様子で『アルケミー』の2人——名前は知っている、有明鍊と遠山キンジだ——と話し、あまつさえそのままゲームセンターまで同行し、笑いながら遊戯に興じていたのである。

(な、なんなの、あの人たち……！)

それを見たあかりの形相は、鬼もかくやといった具合だった。

繰り返しになるが、あかりは崇拜レベルでアリアを尊敬し、また懐いている。そんな憧憬の念を向ける先輩が、どこの馬の骨(いやまあ只者ではないとは知っていたが)とも知れない男共といちやいちゃ(あかり視点)しているとすればこれはもう気に食わないどころの騒ぎではなかった。

嫉妬、と一言で断じてしまえる感情のもと、なにがどう転んでそうなったのか、あかりは鍊とキンジを調べることにした。平たく言えば、尾行を慣行し始めたのだ。

途中、同学年の風魔陽菜に邪魔されたり、そのせいで鍊とキンジを見失ったりしてしまっただが、なんとかキンジを見つけることに成功した。

そしてあかりは、キンジに尋ねた。キンジとアリアはいかような関係なのか、とストレートに。

キンジはそれに「俺はアリアに追われて迷惑してるんだ」とにべもなく答え、続けて言った。

「これで満足か？ そしたらもう俺……いや、俺たちを尾けるな。今の俺たちはEランクだが、探偵科だ。1年の尾行ぐらいさすがにわかる。鍊が大丈夫だというからには、お前に危険はないんだろうが……次はシメるぞ。俺は鍊みたいに、武偵高の仲間だからってだけでなんでも許すほど、甘くない」

さすがは先輩というべきか、威圧感のある立ち振る舞いに怯えながらも、あかりはキンジの言葉の中に聞き逃せない違和感を発見する。

(Eランク……？ 伝説なんて呼ばれてた人たちが？)

確かに、ランクが上下すること自体はよくある。だが、Sランクは伊達ではない。間違ってもEまで落ちることなど、普通ならありえない。

これはおかしいとキンジに尋ねるもはぐらかされ、風魔が再び現れ……いろいろあつて、風に舞ったスカートの中身をキンジに見られてしまった。

慌ててスカートを押さえるあかりに対し、キンジは唐突にひどく狼狽しながら風魔ともどもほうほうの体で逃げ出していった。

あかりはその光景に呆気にとられた。そして、これは怒るべき場面なのだろうか、と少しずれたことを考えたとき、

「——で、だ。お前、キンジの知り合いか？」

「ッ!？」

突如、背中にかげられた声に、あかりは慌てて振り返る。

そこにいたのは、もう一人の『アルケミー』——有明鍊であった。

今の今までいなかったはずの人間の登場に、あかりは動揺を隠せない。

(い、いつの間に……もしかして、ずっと様子を伺ってたの？)

武偵用語で、アンブッシュ伏兵という言葉がある。

これはその名の通り、隠れながら隙をうかがう役割のことなのだ
が、それと一緒だ。おそらく鍊は、もしもあかりがキンジたちに危害を加えようとした場合に備えて隠れ潜んでいたのだろう。

そこまで考えたところであかりは目の前の男が誰なのかを再認識し、指差しつきで声を上げた。

「あ、あー！ 有明鍊！ ……先輩！」

アリアをたぶらかす仇敵とあつてか、思わず呼び捨てにしてしまい
急いで先輩をつける。

しかしそれがまずかったのか、若干鍊の顔が曇った。

と、鍊はあかりの手元を指差して、

「……なんで俺の名前を知ってんのかしらねえけどな、まずはそいつを下ろせ」

(そいつ?)

一瞬意味がわからなかったあかりだったが、いつの間にか自分が錬にマイクロナズIを向けていたことに気づく。さきほどキンジたちと話していたときに抜いていたのだが、仕舞い忘れていたのだ。

指摘に従い、焦りつつもホルスターに収めながら、あかりは気づいた。

(ていうか、この人全く動じてなかった……。この距離で銃口を向けられてたのに、迎撃もしないなんて)

舐めているのか、自信があるのか。いや、初対面だからと舐めてくれるほど易しい相手ではない。そんなことはわかっていた。現に、つい先ほど友人である火野ライカも言っていた。

——「あの人はたぶん、本物の強さを持つてる」、と。

「もっぺん聞け。お前誰だ、キンジの知り合いか? それと、なんで俺の名前まで知ってたんだ?」

これが格の違いかと慄然とするあかりに、錬は再度問いかける。

ひるむな、と自分を鼓舞しながらあかりは答えた。

「……あたしは、1年・間宮あかりです。有明先輩は、あたしのことを知らないだろうけど、あたしは先輩たちを知ってます」

「へえ」

「それが?」と語尾に付きそうなほど、軽い口調だった。まるで、「俺たちの何を知ってるって?」と問いかけられているような錯覚を、あかりは覚えた。

適当なその態度に、あかりは僅か苛立ちをにじませる。

その感情を素直に、言葉に乗せて言い放った。

「先輩たちは、アリア先輩につく悪い虫です!」

言っただけ。あかりが、思っているとおりのことを。

だが、彼女はすぐに後悔することになる。

「……あ?」

(ひうつ!?)

瞬間、低く轟く声とともに、鍊が瞳を細めた——否、睨んだのだ。
ズ……ツ、と、圧力すら伴う眼光があたりを射抜く。こんな視線、強襲科ですら向けられたことがない。殺気を出さずにこれほどの威圧をかけられるのか、とあたりは背筋に冷や汗を流した。

しかし、それでも気丈にあかりはもう一度訊く。

「ツ！ こ、答えてください！ 有明先輩は、一体アリア先輩の何なんですか！」

声が震えていたのは、我ながら情けないと思いつつもしかたないとも思う。言うなれば今、自分というネズミが鍊というライオンに相対しているようなものなのだ。総身を貫く怖気を、あかりは抑えられない。

そして——ふつと圧力が消えた。

同時に、強張っていたあかりの四肢からも力が抜ける。意図せず座り込んでしまいそうなところを、あかりは堪えた。

あかりが見れば、鍊は何かを考え込むようなくさを取っていた。どうやら、あかりの詰問にどう答えるかを思案しているらしい。

が、それは数秒のことで、鍊は言った。

実にあっさり、なんでもないことのように。

「俺とアリアの関係性、ね。そうだな、あいつにとって俺は……得がたい存在ってところだろうよ」

得がたい存在。鍊はそう言った。

はて、それは一体なんだろう、とあかりは思考する。

知り合い？ まさか、そんなのが得がたいわけがない。

では友達？ いや、だったらこんな回りくどい言い方はしないだろう。

それならば恋人とかだろうか？ ああなるほど、確かにそれは得が

たい——

(……え?)

自分で考えて自分で思い至ったことに、あかりは呆然となった。

コイビト？ コイビトってなんだっけ……あ、愛している者同士を指す、あの恋人か。

はなぜか呼び鈴が鳴らない。ま、どうせ寝坊だろ。

簡単に朝食を済ませ、帯銃し、忘れ物がないかを一度確認してから俺は家を出た。

マンションの通路に出た俺は、外に見える曇天からしとすと雨が降りしきっているのを目撃し、顔をしかめた。

雨、か……。傘は……。まあ、バス停はマンションのすぐ前だしな。いらねえだろ。

そう結論づけた俺は視線を隣の部屋の扉へと転じる。キンジを誘うか少し迷ったが、まあいいか。あいつも遅刻するほどねぼすけじゃねえしな。

エレベーターを降りて、エントランスから自動ドアをくぐって外に出る。瞬間、幾多の雨粒が頬を打った。

うえー……。思ったより降ってんなあ。

バスが来るまでまだもうちよいあるし、傘を持ってこなかったのは失敗だったかと悔やんだ時、俺はバス停に見覚えのある背中を2つほど見つけた。おまけに、傘を差している。

俺は少し駆け足でその人影に近づき、

「よ、亮、剛気。悪いんだが、どっちか傘に入れてくんねえか？」
ポンと2人の肩を叩いた。

その内の1人、不知火亮はいつもの微笑で振り返って、

「おはよう、有明君。僕のでよかったら、遠慮なく使ってよ」
「悪いな」

一言謝りを入れ、俺は亮の傘の下に入れてもらう。

なんとか濡れずに済みそうだと安堵する俺に、もう片方である武藤剛気が尋ねる。

「よお、錬。キンジはどうしたんだ？」

「さあ？ 寝坊だろ、どうせ」

「マジか。でも次のバスが、授業に間に合う最終便だけ？」

え、マジ？

普段はバスじゃなくてチャリだったから知らなかった。悪い、キンジ。つか、寝坊したお前の責任だけど。

そうこうしている内に、バス停前に一台の学園バスが停車する。腕時計を見れば、7時58分だった。なるほど、これが最終か。覚えておこう。

俺が脳内のメモ帳に記載して、さて込み具合はどんなもんかなと傘から少し顔を出して車窓に目を向けると、どういうわけか幾人もの女子がガラスの向こうからこちらを凝視していた。

ど、どうしたんだ、これ？

このバスは巡回コース上、先に女子寮を回ることになる。ので、女子がいること自体はなんらおかしいことじゃない。だが、それはこの異様な光景の説明になってない。

理解不能の事態に俺が困惑するなか、プシューとバスの乗り降り口が開いた。

途端、

「きゃー！ 見て見て、有明君と不知火君が相合傘してるわ！」「鋭い目つきの有明君に、柔和な笑みの不知火君……描ける、これは描ける！」「あれ、でももし隣の武藤と有明が相合傘してたらどうしたの？」「あんな馬鹿ね、それはそれで楽しみ方が……」

と、洪水のように黄色い声があふれ出してきた。

……の、乗りたくねえー！

何を言ってるのかはわからない。だが分からないからこそなにかおぞましい印象を受けてしまい、俺はたじろぐ。

が、まさか乗らないわけにもいかないの、躊躇しながらも俺は傘から出てタラップを上がった。

その後ろを、バス停にいた男子たちがぞろぞろと続く。

なんとも言えない視線を感じながら、それは極力無視していると、やがてバスは発進を始めた。

バス特有の揺れの中、亮が話しかけてくる。

「昨日は有明君たちが帰った後も、みんな君たちの話題で持ちきりだったよ。さすがの人気だね」

これ幸いとばかりに、俺は会話に乗る。とりあえずなんでもいいから気を紛らわすようななにかが欲しい。

「あいつらが？　ドーせ、みなっちゃ……水瀬あたりが騒がしかったんだろ」

「自由履修だっけか？　お前ら、そのうち強襲科に戻る気かよ？」

「いや、そういうわけじゃねえんだが……ま、ちよつとした約束があったな」

剛気の質問に返しながら、俺は考える。

結局、約束の件はどうなんだろうな？　例の『最初の一件』が起こったとして、俺は果たして呼ばれるのか。

まあ……それも、その時がくれれば分かるか。

と、そのことについてはひとまず保留した俺の耳に、ピリリリツという電子音が飛び込んできた。

職業柄無意識に視線を向けた先で、通路側の座席に座っていた女子が鞆をござこそと漁りながら、

「ごめんなさいっ。あたし、マナーモードにしたはずなのに……」

と謝罪しつつ、ピンク色の携帯電話を取り出した。

おいおい、こういう公共の場じゃケータイはきつちりマナーにしとけよなあ。

そんなことを思いつつ、まあ入れ忘れくらい誰にでもあるかと思いつつ、俺が再び剛気たちとの会話に戻ろうとした時だった。

『この　バスには　爆弾　が　仕掛けて　ありやがります』

なんとというか非常に聞き覚えのあるというかぶっちゃけこの前の爆弾事件で耳にした合成音声が車内の空気を振るわせた。

発信したのは、さっきの女子が持っていたピンクのケータイ。

「……………」

えーと……か、変わった着メロですね。

* * *

なぜかいつもの時間に部屋を訪ねても鍊が出てこなかったせいで朝食を食べ損ねたキンジは、腹の虫を鳴かせつつ、7時58分発の学園バスに乗るため、男子寮前のバス停へと足を進めていた。

とはいえ、特段焦っていたわけではない。家を出たときに確認した腕時計の文字盤では、まだバスの到着まで余裕があることを告げてく

れていた。

だからキンジは走るなどせず、悠々と男子寮を出た。空は生憎の雨模様。だが、バスの時間を考えればさほど憂慮することも無い。キンジはそんなことを思いつつ、バス停に目を向けた。

その視線の先で、丁度今、バスが白煙を上げながらゆっくりと滑り出し始めていた。

(……………ん?)

疑問を感じたのは、わずか1、2秒。

刹那、キンジは叫び声を上げた。

「——ちよつ、なんでもう出発してんだ!」

おかしい、自分は確かに早めに出発したはずなのに。

理不尽さを感じつつキンジが慌てて追いかけるも、時すでに遅く無情にもバスは走り去っていった。

タッチの差、というにはいささか遅く、思わず伸ばしたキンジの手は空しく空を切る。

「はあ……………はあ……………」

遠ざかっていくバスを見ながら、キンジは荒くなった息を整えた。

顎をしたたる水滴をぬぐって、キンジはしかたなくエントランスに引き返した。

学園島は基本的に一般の交通がないとはいえ、毎日全く変わらぬ時間にバスが到着するわけではない。ないが、それにしても早すぎだとキンジはごちる。

とはいえここで憤ったところでバスが引き返してくるわけでもない。納得いかない気持ちを抱えながら、キンジは一度自室に戻り、傘を手に取り、そこから徒歩で一般校区まで向かうことにした。

(自転車を爆破されたのが、こんなところで響いてくるとは……………)

悪いことは重なるものだが、片方は明確な犯人がいるだけに歯噛みするしかない。自然、足取りも重くキンジは雨音をBGMに歩いていった。

そしてその徒歩通学も20分ほどした頃、いつそ1限目は丸々フケるかと思え始めたキンジの携帯電話に着信が入った。

ポケットから携帯電話を取り出し、折りたたみ式のそれを開く。液晶画面に映った名前は——『アリア』。

「……………」

一瞬出るかどうか悩むが、出なかった場合それが故意かどうかを問わず風穴が開くことになるので、キンジは諦めて通話ボタンを押した。

『キンジ、あんた今どこにいるの！』

開口一番あいさつも無しのアリアのアニメ声が、キンジの鼓膜を震わせる。

キンジは、それに呆れながらも返す。

「どこって、強襲科のそばだが……何の用だ？」

ちらりと目線を右隣に向ければ、そこには確かに黒い体育館の姿があった。

というか、そもそもアリアは今頃授業中のはずだが、なぜこうして電話を寄越しているのか。

首を捻るキンジに、アリアは端的に指示した。

『そう。丁度いいわ、なら強襲科でC装備に着替えて今すぐ女子寮の屋上に来なさい』

アリアの口から出た、『C装備』。

それは、武偵が強襲を行う際に着込む武装とされている。ツイストナックレラーTNK製の防弾ベスト、強化プラスチック製のヘルメット、フィングアレスグローブなどなど、その内容は非常に物々しい。

キンジは、なぜそんな物が必要なのかと疑問に思いながら（同時に嫌な予感がしながら）も、とりあえず思い当たった考えを口にする。「なんだ、自由履修は午後からだぞ」

『違うわ』

アリアはキンジの希望的観測を短く否定し——
告げた。

『——事件よ』

どうやら、俺はまた巻き込まれちゃったらしい、と気づいたのはす

ぐだった。

しかも、チャリジャックからレベルアップして、今度はバスジャック。泣いていいかな、俺。

だがさすがにこれだけの乗客がいる中で泣き出したら、変人以外の何者でもないの、俺はおとなしくみんなと一緒に車内に爆弾がないかを搜索する。

と、その時、俺のズボンのポケットが震えた。そこに入ってるのは、俺の携帯電話だ。

……まさかまた、『お前が〇〇したら 爆発 しやがります』みたいなこと言われねえだろうな……。

ビクビクしながらケータイを取り出し、通話ボタンを押すと、聞こえてきたのはアリアの怒声だった。

『錬、今あんたがいる場所を教えなさい!』

キーン、と耳が痛む。う、うるせえ……。

というか、んだよやぶからぼうに。自由履修の件か? こっちや、それどころじゃねえのに。

不満げに思いながらも、俺は素直に答える。

「バス中だ。それも、バスジャック中だな」

吐き捨てるように言う俺に、アリアは、

『こ、行動が早いのはいいことだけど、先走りすぎよ!』

と、なぜか怒鳴ってきた。

うん、なんで怒られたんだろうね俺。

あまりの理不尽さに怒ることすらできない俺に、アリアはさらに続ける。

『まあ、いいわ。それよりも、そっちの状況を教えて』

状況、か……。

周囲を見回し、現状を改めて認識してから、俺はアリアに返す。

「……とりあえず、車内に犯人はいねえ。手口から、この前俺たちのチャリをヤツた奴と、同じ相手だろうな。今は、指示に従わせて乗客が車内の爆弾を探してんだが、今んとこ見つかつちやいねえ」

ちなみに指示を出したのは俺じゃなく、剛気だ。あいつはこうい

時、何気にリーダーを張れる。俺なんかよりよっぽどすげえ奴だ。『わかった。これから、あたしとキンジがそっちに行く。火砲支援にレキも配置してる。だから、錬は無茶しないこと。いいわね?』

確認するように問うアリアに、俺は眉根を寄せる。

無茶するなにも、ハナから俺がどうこうしてどうにかなる状況でもねえんだが。爆弾の場所もわからない、犯人もいないってんじや、こつちとしては手詰まりだ。

とはいえそれを正直に話してもしかたないので、とりあえず俺はアリアに肯定を返そうとして——突如、車内に鋭い大声が響き渡った。

「——みんな、伏せろッ!」

「——ッ?!」

亮の叫び声に続いて、バスの窓ガラスが一斉に碎け散った。連続する発砲音がガラスの破砕音をかき消していく。

クソ、銃撃か!

慌てて伏せようとするも、それよりも一瞬早く、ビシッ! と一発の銃弾が俺のケータイにぶち当たり、俺の手からケータイを弾き飛ばした。ああ!?! 先月買い換えたばかりだぞ、オイ!?!

幸か不幸かなんとか被害はそれだけに留まり、俺は急いで横壁に身を隠す。ガラスはともかく、この車体は防弾性だ。こうしていれば、追撃があつても防げる。

「チッ、やっぱこの前の犯人か……!」

屈む前に見えたが、バスの側面にはオープンカーが並走していた……ありや、ルノー・スポール・スパイダーか。おまけに助手席から顔出してたのは、またもやUZI。合成音声と合わせて、これで確定的だった。

と、憎憎しげな声を漏らした時、うめき声が聞こえてきた。

「だ、大丈夫か、君」

「痛ッ……! あんにやろう、防弾制服つつつても当たるとイテェんだぞ……!」

会話に視線を向ければ、そこでは剛気が運転席に背を預けて座り、腕を押さえながら苦悶の表情をしていた。

あいつ、運転手を守ったのか。彼だけは伏せることが出来ないから……！

「おい！ 無事か、剛気！」

「なんとかかな……」

クソ、お構いなしじゃねえかよ。

いや……だが、悪いことばかりじゃねえ。もうじき、援軍^{アリア}たちが来る。そうなれば、この最悪な状況も動く。

つつても、それまで何もしないわけじゃねえ。出来ることはある。これでも、遺憾だが『アルケミー』なんて呼ばれてもてはやされてたんだ。少しぐらい、何かやっとかねえとな。

俺は、おもむろに防弾制服を脱ぎ、シャツ姿になる。これは言うまでもなく危険な行為だが、さっきも言ったが車体には銃弾が通らない。射線に出ない限りは大丈夫のはずだ。

それでもやはり若干の恐怖は感じつつ、俺はブレザーを剛気に投げ渡し、

「剛気！ それ、運転手に着せてろ！ 上から羽織らせるだけでもいい！」

「な……!? それじゃ、お前が危ねえだろ!?!」

「心配すんな。俺は、問題ねえ」

さすがに、この状態じゃ、大人しくせざるを得ない。

情けないのは百も承知だが、このまま亀のように伏せ続けるしかない。

「クソ、無茶しやがって！ ああ、わかったよ！ お前を信用してやる！」

剛気はやたら熱い台詞を吐きながら、俺の指示通り運転手に防弾制服を羽織らせる。よし、これで少しは役に立てた。

後は心苦しいが、アリアたちに任せよう。アリア、キンジ、レキ。元も含めりや、Sランク3人だ。きつと、何とかしてくれるはずだ。

頬を伝った冷や汗をぬぐって、俺は絶対に体を射線にさらさないように気をつけようと決意した。

* * *

「剛氣！ それ、運転手に着せてろ！ 上から羽織らせるだけでもいい！」

突然の声に武藤剛氣が反応して顔を向けると、何かが自分に向かって飛来してきていた。

反射的に手を伸ばし、武藤はそれを掴む。咄嗟には何かわからなかったが、よく見ればそれは防弾制服の上着だった。

武藤はこれが飛んできた方向を見る。そこにいたのは、シャツ姿になってしゃがむ有明鍊であった。

防弾制服の持ち主は彼だろう。そしてその指示は、一側面から見れば領ける部分はある。運転席から離れられない上にこのジャックされたバスの手綱を握っているとなれば、運転手を守ることの重要性は確かに高かった。

しかし、

「な……!?! それじゃ、お前が危ねえだろ!?!」

武藤は友の身を案じ、抗議する。

有明鍊は、元Sランク武偵にして、伝説のコンビの1人である。そして彼自身何度かその実力を目撃している。そして同時に、大切な友人でもあった。信頼できない、などとは口が裂けても言えはしない。

だが、いかに凄腕の武偵であろうが、結局のところは人間なのだ。秒間10発以上もの速度で攻勢をしかける弾幕を相手にシャツ1枚など、紙で銃弾を防げと言われているようなものだ。正気の沙汰とは思えなかった。

が、にもかかわらず、鍊は言つてのけた。

「心配すんな。俺は、問題ねえ」

はつきりと。一切の淀みなく。

その表情には、一片の迷いも恐れもない。あんな顔、弾丸が自分に当たることはない、とでも思っていないなければならないだろう。

(マジかよ、オイ……なんつー度胸と自信だよ……!)

常軌を逸した鍊の態度に、武藤は驚きを禁じえない。

これが、Sランク。

これが、『アルケミー』。

遙か高みの存在に、武藤の総身が震える。

伝説の名が伊達ではないことを武藤は肌で感じ取り、声を荒げて言った。

「クソ、無茶しやがって！ ああ、わかったよ！ お前を信用してやる！」

武藤はこの台詞に、鍊への激励も込めた。

これほどの武偵が、この状況で黙っているわけがない。それに、さつき鍊が電話していたことも気になる。

おそらく、今は雌伏の時なのだろう。鍊は、反撃に転じるべきタイミングを待っているのだ。

そして一度事態が動くその時こそ、『アルケミー』・有明鍊は己が力を振るうのだろう、と武藤は確信を持って予想した。

* * *

アリアは今、いつかのように女子寮の屋上にいた。

雨に打たれて濡れる前髪を払いのけ、視線は険を帯びている。

その服装は普段の防弾制服とは違い、キンジに指示したのと同じC装備で固められていた。小柄なアリアがそんな格好をすればひどく違和感を感じるが、それを指摘する人間はここにはいなかったし、現状を考えればまさにこれこそ最適な格好だった。

彼女の数メートル後ろ、階段の廂ひさしの下には、狙撃科Sランク・レキが体育座りで待機している。彼女の背には、いつものようにドラグノフ狙撃銃が背負われている。が、それを抜きにしてレキもまた『事件』コンセントレーションに向けて集 中を高めていた。

アリアたちがここにいるのは、他でもない。今より10分ほど前、アリアは『武偵殺し』が犯行に使う際に発する電波をキャッチした。そしてその出所を調べてみると、なんと武偵高のバスがジャックされたことがわかったのだ。

アリアはすぐさま強襲準備を整え、事件解決のために人員や足の確保を始めた。その過程でレキを加え、キンジには先ほど連絡し、そして今3人目のメンバーに電話をかけていた。

携帯電話のマイクに向け、アリアは大声で訊く。

「鍊、今あんたがいる場所を教えなさい！」

通話の相手は、アリアの言葉通り鍊だった。アリアが直接コンタクトできるSランク（とアリアの中では決まっている）、最後の一人だ。早く全員を集めて事件に臨もう、と意気込むアリアに、鍊は通話口の向こうで答えた。

『バス中だ。それも、バスジャック中のな』

（えっ!? もう乗り込んでるの!?!）

鍊の言葉に、アリアは驚愕に目を見開く。

事件発生から、まだ20分も経っていない。にもかかわらず、すでに現場に急行しているというのか。

アリアは少し詰まりながら、

「こ、行動が早いのはいいことだけど、先走りすぎよ！」

先を越されたことにか、自分に何の指示も仰がなかったことにか、定かではなかったがアリアは少し不機嫌になりつつも、人のことを言えない叱咤を鍊に飛ばした。もしかしたら、パートナーと決めていた鍊に一人で動かれたことがアリアの心を突いたのかもしれない。

しかしすぐに、そんな場合ではないと思いなおし、

「まあ、いいわ。それよりも、そっちの状況を教えて」

鍊に改めて、車内の様子を尋ねる。

怒ったことに無然としているのか、鍊は一瞬黙る。確かに、今の場面で怒鳴りつける必要はなかった。悔やむアリアに、鍊は淡々と告げる。

『……とりあえず、車内に犯人はいねえ。手口から、この前俺たちのチャリをヤツた奴と、同じ相手だろうな。今は、指示に従わせて乗客が車内の爆弾を探してんだが、今んとこ見つかったちやいねえ』

（犯人はいない……でしようね、『武偵殺し』の犯行は遠隔操作なもの）

これまでで得た情報を頭に浮かべながら、アリアはこちらの状況と独断専行を抑制する注意を鍊に投げかける。

と、突如、アリアの耳朵を数多の銃声とガラスが碎ける音が叩いた。アリアは柳眉をひそめる。どうやら、動きがあったらしい。

そして、アリアの携帯電話は通話切れになった。まさか、鍊に限つ

て大事には至っていないだろうが、携帯電話は弾き飛ばされるかなにかされたらしい。

その時、ギイと背後で屋上のドアが開く音が聞こえた。

待ち人の到着に、アリアは振り返りつつ言った。

「集まったわね。これから、この3人で追跡するわよ。火力不足はあたしが補う。急ぐわよ、錬はもう現場に着いてる」

「追跡って何をだ。何が起きた？」

「バスジャックよ。武偵高の通学バスがジャックされた。キンジのマンションの前に7時

58分に停留したやつよ」

C装備で現れたキンジに、アリアは状況説明フリーファイニングを行う。

キンジはジャックされたバスに心当たりがあるのか驚愕に表情を変えながら、アリアに尋ねた。

「犯人は、車内にいるのか」

「いいえ。先行してる錬の話じゃ、車内にはいないそうよ。それから、錬が指示して爆弾を探してるみたいだけど、今のところ車内には見つかってない。多分、外装に貼り付けてるんでしょうね——キンジ。これは『武偵殺し』。あんたたちの自転車をやった奴と同一犯の仕業だわ」

アリアはそこで一息入れ、

「最初はバイク。次がカージャック。その次があんたたちの自転車で、今回がバス。『武偵殺し』は乗り物に減速すると爆発する爆弾を仕掛ける。そして、それを遠隔操作して犯行に及ぶんだけど……その時に発する電波を、あたしはキャッチしたの」

アリアの説明に、キンジの脳内である情報が浮かび上がる。

それと照らし合わせれば、アリアの言には矛盾があった。

『武偵殺し』は、逮捕されたんじゃないのか？」

キンジの言葉は、正しい。確かについて最近、ニュースでそう報道されていた。すなわち、武偵殺しはすでに留置所の中にいるのだと。――表向きでは、だが。

しかし、アリアは知っている。それが真実ではないことを、誰より

も。

だから彼女は反論する。

「それは、偽物。真犯人じゃないわ。だけど、この背景を説明してる暇はないし、あんたは知る必要はない。このパーティーのリーダーはあたしよ。とにかく、ミツシヨンはバス車内の全員を救助すること！それだけ頭に入れなさい！」

あまりといえばあまりな、アリアの簡潔すぎる説明にかみつくキンジにアリアが怒鳴ったとき、雨音さえもかき消す音とともに、上空から車輻科シのシングルローター・ヘリが降りてきた。

キンジがそれを見てやっと折れると、アリアが笑いながら言った。これこそまさに、自分が望んだ状況だというように。

「キンジ。さつきも言ったけど、錬はもうバス内にいる。つまり、これが約束の、最初の事件になるのよ」

「大事件だな。とことんツイてないよ」

アリアの笑みに、心底嫌そうにキンジが答えて。

そして、いよいよ。

神崎・H・アリア。

遠山キンジ。

レキ。

有明錬。

Sランク武偵4人が挑む——ミツシヨンが、幕を開けた。

* * *

おいおいおい、どうなつちまうんだよこれ……！

バスは暴走状態のまま走り続け、例のボーカロイドの命令に従い、ついに台場に入った。マズイぞ、これは。どんだん都心に近づいてつてやがる。

ただ、さつきとは状況が違っている。俺たちを銃撃していったルノー、あれがどういうわけか退いたんだ。まるで、何かが来るのを待ってるみてえに。

とはいえ、現状はいかんともしがたい。車内に爆弾が無かった以上、当然車外にあるんだろうが……それを解体しにいったとしても、

その最中にルノーがまた来たら、狙い撃ちだ。

それがみんなもわかってるからこそ、誰も動けずにいた。

——が、

「みんな、無事か！」

そんなこう着状態を動かすように、窓から一人の男が入ってきた。強襲科でよく見たC装備に身を包んでるのは……キンジじゃねえか！

キンジは周囲を見回しながら、

「錬！ いるか、錬！」

どういうわけか俺を呼んでいる。

俺はもう一度ルノーがいないか確認して、キンジの下へ駆け寄った。

「おう、ここだ」

「ツ!? お前、武装は……っていうか、防弾制服はどうした?！」

「武装なんざしてる暇あつかよ。制服は運転手にやった」

暇がないっていうか、そもそもできなかったんだけどな。

「お前な……いくら仲間が被害に遭ってるからって、急ぎすぎだ。せめて、最低限の装備くらいしておけよ」

「しかたなかったんだよ」

なんせ、俺に出来ることといやこのくらいしかなかったからな。……しかし、急ぎすぎってのはどういうこった？ まるで俺が後から駆けつけたみたいない言い方だな、おい。

つと、それよりだ。

「アリアはどうした？」

「今、車外に爆弾がないか探してる。俺はひとまず錬と合流しろと言われて——ああ、こっちは錬と合流した。見る限り、重傷者もいない。そっちはどうだ？」

途中で俺ではなく、インカムを通してアリアに語り始める。

そして、それが数十秒続いて……キンジが顔を青くした。

……嫌な予感しか、しないんすけど。

俺はその予感を振り切りながら、

「どうしたんだよ、キンジ?」

「……アリアが、車体の下に爆弾を見つけたらしい。種類は俺たちの
ときと同じ、C4。炸薬は、3500立方センチはあるそうだ」

……んだよ、そのふざけた容積は。

思わず、開いた口がふさがらない。イカレてやがる。

どうやら、この爆弾をしかけた奴はかなり素人らしいな。バスを爆破するレベルの炸薬量を計算できなかったのか、間違って戦車を爆破するレベルになってやがる。今回は、犯人のバカさ加減が俺たちにとって裏目に出たというわけか。

さすがに俺も血の気が引き始めた。

と、その時、突然バスの後方から衝撃が突き抜けた。座席の背もたれに手をかけ、体を支える。

何かが、追突したのか……?

急いでバックウインドウに目をやると、映ったのは短機関銃つきのオープンカー——ルノーが、帰ってきてやがる!

「大丈夫か、アリア! ——クソツ、さっきの追突でやられたか」

「——ツ!? バカ、伏せろツ!」

のん気にインカムに意識を寄せるキンジの頭を抑え、2人で即座に屈む。

瞬間。

再び側面についたルノーによる掃射が、頭上を駆け抜けた。

うおおおおおおおっ!? あ、危なかったあ!?

「ぐあっ!」

耳が悲鳴を捉え、視線を動かすと、バスの運転手が顔を苦痛に歪めていた。撃たれたのか!

それでも運転をやめないのはさすがだ。あの人も必死なんだろう。すげえ根性だ。

「クソ……! 武藤、このヘルメット運転手に被せてろ!」

「わ、わかった!」

と、キンジが立ち上がり剛気に自分のヘルメットを投げ渡したかと思うと、また窓から身を乗り出し始めた。

なにやっつてんだよ、オイ!

突然のキンジの奇行に、俺は制止をかける。

「おい、どこ行く気だお前!」

「屋根の上ってアリアの様子を見てくる! お前は来るな!」

「あつ、おい!?!」

引き止めるも、キンジは聞かずにホントに屋根まで登りやがった。バカかあいつ!? さっきの見てなかったのか。屋根になんか登ったら、格好の的じゃねえか!

『アリア! お前、ヘルメットはどうした!』

『あんたこそ、してないじゃない! 危険だわ! なんで無防備に出てきたのよ?!』

窓の外から、屋根の上で合流したのだろう、アリアとキンジのケンカが聞こえてくる。

バスは今、レインボーブリッジを走っている。もうこれ以上行くと都心で爆発するってのに、なにやっつてんだあいつら!

「——クソツタレ!」

俺は罵倒を一つ飛ばし、後方にも側面にもルノーがいらないことを確認してから、キンジと同じように窓に手をかける。

正直なところを言えば本当は嫌だが……心底怖えが……今頼りにできるのは、あいつらしかいねえんだ。そのあいつらがまとまってなけりゃ、事件解決なんざできるわけがねえ。

だから俺は、あいつらのケンカを仲裁するために、屋根に上る。

豪雨で煙る視界の中、視線を巡らせると——いた。アリアとキンジが丁度運転席の真上あたりで、言い合っている。

俺は、屋根の上に立ち上がり、2人に向かって歩きながら、

「おい、テメエら! 何やっつてんだ——」

——ケンカしてる場合か!

そう、続けるつもりだったのだが。

雨で濡れた足場、そして走行中ゆえの強風。

なんというか、そうだな。ここまで条件が揃ってれば——まあ、滑るよな。

「——うおっ!?!」

意識しない動きに、俺の喉をこじ開けて声が漏れる。

昔、学校の大掃除でワックスがけした廊下のように、バスの屋根は見事に俺の足を滑らせた。

俺は前のめりに倒れ始め、しかし倒れてなるものかと1歩2歩3歩と足を出す。が、抵抗むなしく、俺に背を向けたアリアめがけて——倒れこんだ。

「ッ！ キンジ、後ろっ！ 伏せなさいよ！ なにやって——きやつ!?!」

なにやら向かい合うキンジに説教していたアリアを、ドンツと後ろから押ししてしまい、さらにそのせいでアリアはキンジを押し倒すことになり、ついでとばかりに俺もその上に重なりそうになった——その刹那。

タンツ、と短い音が聞こえて、俺の右肩に火のような激しい熱が生まれた。

「……?」

なんだこれ——と、思ったのは一瞬。

直後。

俺の脳髓に激しい痛みを報せる電気信号が走った。

「——ガ」

思わず、叫び声を上げる——より早く、さらにもう一度短く音がしてバヂツツ！ と右側頭部を衝撃が掠めていった。

脳が、揺れる。ドロリとした粘性の何かがこめかみを伝う。

その正体に触れることができないまま、突如俺の体を浮遊感が包んだ。

朦朧とし始めた頭が、起こった現象を理解する。

落ちたんだ。バスの上から、バスの前方へ。

落下する視界に、ルノーの姿が映る。こいつ、後ろでも横でもなく、前に陣取ってやがったのか。

明滅する意識の中、俺の身体はルノーの運転席だか助手席だかに落ちた。その時、なにかが折れるような音が聞こえたんだが……よく、

わかんねえ。

ああ、クソ……痛え。

痛みには、それなりに慣れてたつもりだったんだが……どうやら、それでもなかつたらしい。

右肩を蝕む焼けるような痛みを感じながら、どんどん俺の意識は塗りつぶされていく。

視界がブラックアウトしていき、完全に意識の糸が切れる、その寸前。

——遠くで、誰かの声が聞こえた気がした。

* * *

武偵高の仲間が狙われたからか、武装さえする時間がないほど即座にバスに乗り込んでいた鍊と合流したキンジは、突如背後から追突してきたルノーの衝撃でやられたアリアを心配し、バスの屋根へと上った。

バスの速度はすでに法定速度を越えている。激しい風圧と、それに追従するように叩きつける雨が、キンジを襲う。

そんな中、無事だったらしいアリアがワイヤーを伝ってキンジ同様に上がってきた。

キンジはアリアの姿を認め、しかしそこに足りないものがあることに気づく。

「アリア！ お前、ヘルメットはどうした！」

車体下に潜っていた時にはつけていたはずのヘルメットを、アリアが装着していないことを指摘すると「あんたこそ、してないじゃない！ 危険だわ！ なんで無防備に出てきたのよ?!」と逆に激怒された。

「なんでそんな初歩的な判断もできないのよ！ すぐに車内に隠れなさい！」

なおもアリアの言は止まらず、キンジは言われるがままになっていた。アリアの言っていることは間違っていない。キンジの取った行動は、危険だと咎められてもしかたのないものだった。

——と、その時。

キンジの目が、屋根に上ってきた鍊の姿を捉えた。

（あいつ、なんであんな格好で出てきて……!?!）

「——!——」

激しい雨が屋根を叩く音でよく聞こえなかったが、鍊は何かを叫びながら、こつちに向かってきている。

と思いきや、いきなり加速して走りこんできた。

（なんだ。あいつ、一体なにを）

鍊の行動の意図が読めず、キンジはただ鍊の動きを見ていて、

「ツ！ キンジ、後ろっ！ 伏せなさいよ！ なにやって——」

眼前で突如アリアが自分に何かを伝えた——瞬間、鍊がアリアの背を突き飛ばした。

「——きゃっつ!?!」

アリアの短い悲鳴とともに、小さな体がキンジに覆いかぶさってくる。不安定な足場ということもあって、キンジはあっさり自分よりずっと小さな女の子に押し倒されてしまった。

そして、次の瞬間。

キンジの耳が、2発の銃声を捉えた。

（発砲……!?! どこからだ?!）

キンジは仰向けの状態でアリアを腹の上に乗せながら、顔だけ動かしてバスの前方を見た。

そこに——いた。ルノー・スポール・スパイダーが。

いつ回り込みやがった、とキンジが驚愕する最中、ルノーの運転席にとりつけられたUZIが射線を修正するように、銃口を動かす。

それは、例えるならば死神の鎌。キンジの命を刈ろうとする、冥府からの使者だった。

（マズイー・もう一度来る!）

この体勢からじゃ避けられない、とキンジは戦慄する。

この期におよんで、よもや装填されているのは非殺傷弾ゴムスタンであるなどと思うことはできない。籠められているのは、間違いなく無慈悲な鉛の弾丸だろう。

あれがひとたび吐き出されれば、遠山キンジの、そして神崎・H・

アリアの人生は間違いなく終わる。

もはやここまでか、とキンジの脳裏に諦めがよぎった刹那、ルノー目掛けて落ちていく、鍊の姿が視界に映った。

咄嗟だった。キンジは状況が理解できぬまま、鍊に呼びかける。しかし、

「——れ」

ん、とさえ言い切れぬ時間を経て、鍊はルノーの助手席へと落下した。その際、鍊の右手が運転席についたUZIをもぎ取るのが見えた。こんな事態は想定しなかったのか、設置は甘かったらしい。

——いや、そんなことはどうでもいい。

「鍊！ おい、鍊！ クソ、おいアリアだけ！」

「ん……なによ、今の——って、え!?!」

アリアにも状況が飲み込めたのか、両目をいっぱいに見開いてルノーに横たわる鍊を見ている。どうやら、鍊は気絶しているらしい。キンジはすぐさまアリアを身体の上から退けて、未だ前方を走るルノーの運転席に飛び降りた。

運転席に着地したキンジはハンドルを切ってルノーをバスの進行上から退かし、ブレーキを踏み速度を落とした。UZIがない以上、すでにこれはただの車だ。遠隔操作していたらしいが、どうも手動でも運転操作は出来るらしい。

レインボーブリッジの真ん中で停車したキンジは、すぐに隣の鍊の容態を調べる。

(被弾してる……!)

まず見えるのが、肩に1発鍊は銃弾を受けていた。防弾制服を着用していなかった分、銃弾は鍊の生身を貫いていた。

だがもつとまずいのが、鍊のこめかみから血が流れていることだ。発砲音は2回だった、1発は肩に、そしてもう1発は側頭部を掠めていったのだろう。もしあと数センチずれていたらと想像して、キンジは心臓を凍らせた。

鍊が気絶しているのも、おそらくこちらが原因だろう。目を開いているところを見るに、脳震盪を起こしているのかもしれない。

ここまできて、キンジはようやくなぜ錬が屋根に上がってきたのか、そして何を叫んでいたのかを理解した。

おそらく、錬は車内から見たのだろう。ルノーが、バスの前面に躍り出たのを。だから彼は自分たちのところまでやってきて、避けるあるいは屈めと警告するために叫んだのだ。

だが、そのメツセージをキンジたちは読み取れなかった。だから錬は、代わりに力づくでキンジたちを凶弾から救ったのだ。自分を、盾にして。

その上で、錬は追撃を防ぐため、自らルノーに飛び込みUZIを無力化したのだ。

「バカ野郎……お前、いつも、なんでそこまで……!」

あの時のように、という言葉は隠して。

ルノーの座席を赤く染める錬に、キンジは聞こえぬ問いを投げかけた――

* * *

アリアは、屋根の上にぺたんと座り込みながら呆然としていた。

ただひたすらに、黒い雲から流れる雨に打たれながら、彼女は遠ざかっていくルノーを眺めている。

原因は言うまでも無い、錬の負傷である。

(錬が、怪我した……)

それは、特別おかしなことではない。錬は、人間だ。ケガの一つもする。

だが今回は……その原因は、外部にあった。

(あたしとキンジを助けようとして、怪我した)

そう。自分たちが、迫るルノーに気づくのが遅れたから、錬は2人を助けに入ったのだ。

もちろん、錬にも落ち度はあるだろう。そもそも、防弾制服すら着ずに銃口の前に立つなど、武偵としては落第物の行動だ。

だが、それを差し引いても……『仲間』が自分のために傷つくということを初めて経験したアリアは、自分の心に暗い影が落ちるのを自覚した。

今までだって、即席とはいえパーティーを組むことはあった。その中でメンバーが負傷することも、もちろんあった。

だがアリアにとって、先ほどのように誰かが自分を庇って負傷するなど、一度もなかったのだ。半年前のあの日でさえ。

眩きが、アリアの小さな唇から零れる。

「あたしは……」

その後に、何を続けようとしたのか。それは、本人さえ分からなかった。

——と。

雨を切り裂くローター音が聞こえ始め、見ればアリアの要請したへりが、バスと並走して飛んでいた。

そのハッチは開かれ、そこには狙撃科の麒麟児・レキが、ひざ立ちで狙撃銃を構える姿があった。

「レキ……」

アリアが眩くなか、インカムからレキの声が流れる。

『——私は一発の銃弾』

それは、誰かに向けたものではない。あえて言うなら、自分に向けたものだ。

声は、続く。

『銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない——』

それは、レキが狙撃の際に諳んじる『詩』だった。自己暗示の一種なのか、それとも何かの願掛けか。それは誰にもわからない。彼女は誰にも語ろうとはしない。

ただ一つ、誰もがわかっていることは。

レキが放った弾丸が外れることは、ないということだ。

『——ただ、目的に向かって飛ぶだけ』

ドラグノフの銃口からマズルフラッシュが3つ迸り、次いで3発の銃声がアリアの下に届く。

数瞬後、バスの下から着弾の衝撃が響いた。視線を向けるアリアの双眸に、車体の下から先ほどアリアも確認した爆弾が転がり出たのが映った。

『——私は一発の銃弾——』

最後に、もう1発銃声がして。

爆弾は、レインボーブリッジの下に広がる海へと撃ち落とされた。

——直後、

腹の底に響くような轟音と共に、巨大な水柱があがった。

まるで、天を衝くかのようなその光景に、しばしアリアの目が奪われる。

そして、その間にもバスは徐々に速度を落とし——やがて、停まった。

アリアはそれを確認し、無言で濡れた路面へ飛び降りる。

「——大丈夫か?!」

いち早くバス内から出てきた武藤が、地面に降り立ったアリアに訊いた。

うつむき、目線をピンクの髪で隠したまま、アリアは答えた。

「——あたしは、大丈夫」

それは小さく、消え入りそうな声で。

まるで……自分に、言い聞かせているかのようにだった。

* * *

こうして。

Sランク武偵を4人動員したバスジャック事件は幕を閉じた。

負傷者は1名。名前は、有明錬。

報告書の上では、ただそれだけのこと。

しかしそれは、受け取る者によって意味が変わる……大きな、事実だった——

13. それぞれの雨

——笑えない。

峰理子の現在の感情を一言で表すならば、まさにその言葉が適当であつた。

笑えない。まったくもって笑えない。

学園島からそう離れてはいない、東京都内のホテル——その、一室に理子はいた。

あぐらをかいて座り込む彼女の眼前には、大小さまざまなモニターが並んでいる。たとえばそれはとある男子寮の様子だったり、学園島の各所だったり、録画していた深夜アニメだったりと様々な映像を垂れ流しにしている。

その中でも最も巨大なモニターに映るのは、リプレイ再生されている、有明鍊という少年が撃たれるシーンだ。

それは、つい先刻の出来事だった。学園島内を運行する学園バスが、爆弾を仕掛けられ、UZI付きのオープンカーによってジャックを受けた。乗員を救出するため、そしてこの事件を解決しようと、4人の武偵（正しくはバス内の乗員も武偵のため彼らもだが）が挑み、事件は終着を見た。そしてその事件の顛末として、1人の武偵が負傷した。

その武偵こそが有明鍊であり、負傷した場面が理子の視界に映るモニター内の光景だった。

そして。

鍊に傷を負わせたUZI付きのオープンカーを遠隔操作し、ひいては爆弾を設置してバスジャックを引き起こした犯人——『武偵殺し』こそが、この峰理子という少女なのだった。

「……これは、ちよつとまづいかな」

普段の彼女を知るものならば思わず違和感を感じるほど、基本ハイテンションの理子は硬い口調で表情を曇らせる。

ただしその服装は下着の上にネグリジエを着ただけという、非常にラフなものだったので、ミスマッチの感は否めなかったが。

観客がいなのが惜しまれるほど洗練された肢体を悩ましげに揺らして。

理子はふうと一つため息をつき、スツと立ち上がった。

カーペットの柔らかな感触をファー付きのスリッパ越しに感じながら、彼女は雨戸が開け放たれたベランダへと向かう。

スリッパのままベランダに出ると、黒々とした雨雲が理子を出迎え、降りしきる雨の音が、理子を落ち着かせた。

彼女はベランダの手すりにしなやかな両腕を乗せて、内へ内へと思考を沈ませる。

(予想外も予想外、だねえ。まあレンレンならあの場面で出張ってこないなんて選択肢はないと思ってたけど、まさかあんな形で出てくるなんて。狙いはアリアかキーくんだったのに、綺麗に庇われちゃった)

有明鍊が被弾した理由を挙げるなら、それは神崎・H・アリアと遠山キンジを庇ったからだと言えられる。走行中のバスの屋根上上がった兩名を狙うUZIに気づいた鍊が、2人の代わりに凶弾を受けた形だ。

それは理子にとって、想像の埒外にあった。まさか防弾制服無しで、つまりは一步間違えば死ぬこともあり得る状態であんな行動に出るとはさすがに思わなかった。

でも、と理子は逆説を使い、

(これはどつちと取るべきかな。運が良かったのか、悪かったのか……。どつちにしろチャリジャックの時点で、アリアがレンレンに目をつけちゃったし、レンレンが関わってしまったのは、もうどうしようもない。……てゆーか、それ以前にレンレンもキーくんもアリアと顔見知りだったなんて知らなかったなあ。2人とも、理子の知らないところで他の女と会ってるなんて、ぶんぶんガオー！ だぞ?)

思考は軽い調子で進むが、しかしてその内情はとても芳しいとはいえない。

もし、この想定外の事態で運が良かったと評すことができる箇所があるとすれば、それはやはり鍊に手傷を与えたことだろう。肩、それ

も利き腕を傷つけたとなれば、確実にパフォーマンスは落ちる。無論それでも強敵には違いないが、本当の戦いが始まる前に、ある程度は有利に立てるはずだ。

一方で、運が悪かったとするならば、それもまた鍊を傷つけてしまったという点につきる。おそらくは、これで彼はこちらを——『武偵殺し』を完全に敵と認識したはずだ。きつと、相対したならば一切の手心も加えまい。

それはまずい、と理子は思う。危険なほどに、まずい。

(とはいえ、もちろんここで退くなんて選択は取らない。突き進む。最後の最後、理子が理子として笑うために、あたしはアリアを斃す) 決意も新たに、理子はするどく眇めた眼光を銀糸のような雨の向こうに飛ばす。

この雨は、試練を表している、と理子は思う。見晴るかす晴天を迎えるための、これは『壁』なのだ。

そして自分は雨を超えて、晴れを手に入れる。

確定要素も、不確定要素も全てを呑み込んで、それでも目的は果たすと、理子は強く誓う。

進む道にあるのは、衝突。

峰理子と、神崎・H・アリアとそのパートナー2人。

——『リュパン』と『オルメス』の決戦は、すぐそこに迫っていた。

そこは一面、『白』だった。

白い壁、白いカーテン、そして白いベッド。

白ばかりで構成されたこの部屋は、病室だった。

武偵病院・203号室。

学園島内には、数多くの専門棟がある。そして、救護科棟アンビュラスに隣接するこの武偵病院は、もっぱら負傷した生徒たちを収容するために機能していた。

ということとはつまり、その病室にしつらえたベットのうえでぼんやりと天井を眺めている俺も、『負傷した生徒』ということになるわけだ。ちなみに、同室の人間はいない。アリアが手配してくれたとかで、

生まれて初めて俺は病院の個室というやつを味わっている。贅沢だな、おい。

「……なんてな」

我ながらくだらないことを考えながら、俺は自分がここにいる理由を思い出す。

——昨日のことだ。俺も乗り合わせた学園バスが、ジャックされたのは。

俺は右肩に巻かれた包帯に意識をやりながら、加えて頭部にぐるりと巻かれた包帯に左手を添える。

かさり、と病院着がする音を聞きながら、俺は記憶に没入する。いまいち覚えてねえんだが、俺はどうもバスの屋根で、ルノーにっいていたUZIが放った弾丸に被弾したらしい。右肩を1発貫かれて、側頭部に1発掠めたそうさ。

肩を焼いた痛みにか、側頭部を撃たれたからか、俺はその場で気絶。意識を失ったことでバスの上から転げ落ちてしまい、しかし運よくルノーの運転席に落っこちた。

——というようなあらましを、俺は目を覚ましたときに救護科のやどころ矢常呂イリン先生から聞かされた。

ただ、その時彼女がふつと漏らした言葉が、俺の脳裏に違和感としてこびりついていた。

『よかったわ。2度目がこんなに軽症で』
だったか。

意味がよくわからなかった俺は当然先生に聞き返したんだが、はぐらかされてしまった。

2度目……どういう、意味なんだ？ 俺が怪我をしたのが2度目？ いや、そんなわけがねえ。自慢じゃねえが、それなりに怪我はしてきた。

となると……彼女に担当してもらったのが2度目、とか？ いや、それもねえな。俺が矢常呂先生に診てもらったのは、これが初めてだ。

というか、軽症って。割と重症じゃねえかと思うんだが。それとも

矢常呂先生からしたら、こんなもん傷の内に入らねえんだろうか？

まあ、それは今は置いてこう。問題なのは、俺がこの怪我が原因で入院する羽目になったってことだ。

ちなみに、全治は1週間らしい。……ありえねえだろ、それ。風穴開けられたんだぜ、俺の肩。一体俺の身体に何をされたのか、本気で怖くなるな。

あ、そうそう、後お見舞いも何人か来てくれた。あいつら、優しいな。いろいろ持つてきてくれたよ。

例えば時雨が持つてきた果物セットはおいしく戴いたし、レキのカサブランカ白百合は看護師さんに頼んで花瓶に入れてもらってる。理子が持つてきたギヤルゲーは……まあ、ね。うん。いいと思う。

しかし……だ。

俺はベットの上でごろんと寝返りをうち(間違つて撃たれた肩を下敷きにしてしまい悶絶した)。

「……考えなきやいけねえことができちまったな」

と、小さく呟いた。

今回のバスジャック……いや、チャリジャックも一連の事件とすれば、この2つの事件について俺は、ある1つの推論を打ち立てていた。インケスタ探偵科らしくな。

それは——と、俺が脳内でもう一度考え直そうとしたとき、コンコンと病室の扉がノックされた。

その音に思考を中断させられた俺は、誰だと思いつつ、上半身を起こして、

「どうぞ」

と、入室を許可する。看護師さんかもしれないと考えて、一応丁寧な語は使っておいた。

視線の先で、キィと扉が開く。

はたして姿を現したのは……制服姿のエリアとキンジだった。

俺は左手を軽く上げ、

「よう。見舞いに来てくれたのか？」

「あ、ああ」

「……………」

なんだおい、歯切れ悪いなキンジ。アリアに至つちや無言だしよ。2人はつかつかとベットの傍まで近寄ってくる。

キンジは「あー」と、会話の起点を探して、

「怪我は、大丈夫なのか?」

と、当たり前障りのないことを訊いてきた。

それに俺は頷いて、

「まあ、な。全治1週間だよ。矢常呂先生が担当してくれたらしくてさ」

「ッ!? そ、そうか」

矢常呂先生の名が出た瞬間、キンジが顔色を変えた。

? そんな驚くところか、今の?

いぶかしげにキンジを見ると、彼は慌てたように話を変える。

「来るのが遅れて悪かった。本当は、昨日来たかったんだけどな。理子を中心に探偵科と鑑識科——犯罪現場や証拠品の科学的捜査を学ぶ学科——に調査依頼を頼んだり、マスターズ教務科に報告書を提出してたりいろいろあつたんだ」

「そっか。で? 何が判明わかった?」

「いや……犯人が泊まったホテル部屋の調査とか、俺たちのチャリジャックの件も調べてもらったりしたんだが、犯人に繋がるようなものは一切出なかったらしい」

キンジの言葉に、俺は眉根を寄せて驚きを表現する。

おいおい……なんつー周到さだよ、例の犯人は。いくら高校生だったって、うちの探偵学部インケスタは決して無能じゃない。ましてやAランクの理子が主導だ。それが何もわからなかったとなると……マジですげえぞ、それ。

一体、どこのどいつが犯人なんだ?

「まあ、それならそれでしゃあねえだろ。そんだけ、相手が上手うわてなんだろうよ」

「ああ。アリアも、そう言っていた」

頷くキンジに、俺は視線を移す。

アリア、か。

「そういやこいつ、なんでずつと黙ってたんだ？ おまけにうつむきっぱなしで、らしくねえことこの上ない。」

「もしかして、なんか怒ってたのかな。……怖えな、それ。さすがに怪我人相手には無いと思いたいが、いつぞや言ってた風穴カーニバルとやらが開かれるんじゃないやねえだろうな。」

「とりあえず、話しかけてみるか。」

「俺は、怒っていた場合のことを考え、なるべく優しい声音になるように口を開く。」

「おい、アリア——」

「が、その言葉が、言い終わるより早く。」

「アリアが一息に言った。」

「錬。これで、約束の一件は終わりよ。あんたはもう探偵科に戻っていい。さよなら」

「——は？」

「思考が、止まった。」

「あまりにも唐突な宣告に、心が付いていけない。」

「出鼻をくじかれ、俺が何も言えずにいると、アリアはくるりと身体の向きを反転させて、そのままドアに向かって歩き始めた。」

「あ、おい、アリア！」

「キンジが呼び止めるも、無視。一切止まることなくアリアは部屋を出て行った。」

「ボタン、と扉が閉まる音が、室内に響く。俺はなぜかそれを、乾いていると感じた。」

「シカトされる形になったキンジは「悪い、また来る」と言い残し、アリアを追いかけて病室を後にした。」

「……………」

「無言。静寂が、空間に満ちる。」

「嵐のように去っていった2人を見送り、俺は一人病室に取り残された。」

「今起こったことを端的に言い表すことは容易だ。」

——俺が、アリアに別れを告げられた。

ただ、それだけの単純な話だ。

「……まあ、そりやそうだよな」

ぼつりと、呟く。

多分アリアは……怒っていたのだろう、俺に。あきれ返っていた、と言つてもいいかもしれない。

せっかく友達になるために押しかけたり、なるべく一緒にいるために強襲科アサルトに戻らせたりしたのに、俺がやったことと言えば、フザケタ射撃を見せたり、バスジャックで足を引っぱり一人で勝手に負傷したりしたことだけだ。

そりやあ、さぞや頭に來ただろう。結局バスジャック事件も、あいつらはきつちりと片付けていた。俺は、足手まといにしかねなかつた。

おそらく、見舞いに來たのもさつきツキの台詞を言うためだろう。本当は、來たくもなかったのかもしれない。

つまりアリアは。

アリアは俺に——失望したんだ。

「……………」

おいおい、何を黙りこくってんだよ、有明鍊。

わかりきつてたことじゃねえか、そうなることくらい。

所詮俺は、アリアやキンジとは比べるべくもない、雑魚武偵。そもそもが、期待をかけられるようなこと自体、あつていい話じゃねえんだ。

お前はいつだったか、アリアに内心でキレたよな。いや、正確には、俺のことを勝手に勝手にもてはやす連中にか。

だがなんで、そこに過剰に反応する？ 期待をかけられるつてのは喜ぶ場面だけ、本当は。それに応えてやろうつてのが、正しい感情だ。じゃあ、なんでお前はそれを嫌がったよ？

答えは簡単、知つてるからだ。有明鍊という人間じゃあどうやっても期待に応えられないって知つてるからだ。そんな実力なんてないことを、誰より知つてるからだ。誰かを救えるようなそんなヒーロー

みたいな真似はできないって——身をもつて知ってるからだ。

一度失敗してるもんな、お前は。

今回だってそうだ。

アリアとキンジなら、ケンカしてようが放っておいても事件を解決できただろうよ。それをお前は、余計なことをしようとしてしゃばつて、挙句このザマだ。

だから、アリアに見放された。いや、強襲科の件もあつたな。あんな無様な真似をしたんじゃ、そりやこうなるわな。

それとも、なにか？　アリアなら、なあなあで済ませてくれるとも思つたか。

——ひとつ訊くぜ、有明錬。

お前。

そんなことで『約束』を守れんのかよ？

「うるせえ！」

ゴツツ！　と。鈍い音と共に、額に痛みが走った。

理由は、わかつてる。俺が左拳で、自分の額を殴ったからだ。

「わかつてんだよ、んなことは……」

ボスツ、と後ろに倒れこみ、頭を枕に沈ませる。

殴った額が、ジンジンと痛みを発する。

「わかつてんだ……」

もう一度呟いて、俺は瞳を閉じた。

これは、必然の結果だ。たとえばバスジャックの件が上手くいって、アリアと組むことになったとしても、いずれはボロが出る。

だったら、そうなる前にこうなつたのは、間違つてねえはずなんだ。

これで、いい。これで、いいんだ。

「……………よし」

言い聞かせるように口にして、俺は思考を切り替える。

今は、それよりも考えなきゃいけないことがある。

俺は、アリアのことを一旦頭の端に寄せて、あいつらが来るまで考えていたことをもう一度考え始める。

それは、一言で言ってしまうば——

——例の犯人の狙いは、俺だということだ。

というのも、これには根拠がある。

チャリジャック。そして、バスジャック。その2つ共に、俺は巻き込まれている。

もちろんこれだけなら、根拠には弱い。なんせ、チャリジャックはキンジも、バスジャックは俺以外の大勢が巻き込まれたんだから。

だが、これに説明をつける言葉がある。

それは——ミスディレクション。

これは手品の手法でもあるんだが、ようは別の物に注意を集めて本命から目をそらさせる、という手のことだ。

あの犯人はおそらく、無差別に襲っているように見せ掛け、実は俺を標的にしているのだろう。

思い出して欲しい。キンジのチャリに並走していたUZI付きのセグウェイを。もしもキンジだけを狙っていたのなら、俺まで脅迫する必要はなかったはずだ。

きつと、奴は予想していたんだろう。キンジがああいう状況になれば、同じルートを通る俺に助けを求めると。

そして、さらに俺の考えを補強するのが、狙われたバスが7時58分発のものだった、ということだ。

なぜ何本もあるバスのうち、あれにだけ仕掛けられた？

学園バスは寮から一般校区までの道を何度も往復するから、爆弾はあらかじめ付けられていたと見るべきだ。が、どうして最終便になってジャックを始めた？

答えは一つ、犯人は知っていたんだ。俺が、あの便に乗ることを。推測になるが、多分俺の部屋に監視カメラか盗聴器でも仕掛けられていたんだろう。アリアがキンジの家に入り込んでいたように、こっそりと侵入して。

状況証拠だけしかないが、ここまでくれば可能性はかなり高いと見ていいだろう。

犯人は……この俺を、狙っている。

「問題は、なんで俺が標的にされたのかってことだが……まあ、ありえ

ねえ話じゃねえ。俺はこの2年間で多くの事件に関わってきた。それ関連で、という可能性もある」

俺は考えをまとめるため、あえて口に出して思考を進める。

しかし……どちらの事件も、一歩間違えりや、俺以外の人間も死んだ。こいつは、目的のために手段を選ばねえ、もつとも厄介なタイプの犯人だぞ。

「俺のせいで、みんなが危険に遭った……ってことか」

アリアのことに加えて、その事実が俺の心に影を落とす。

どうすりゃいいんだ、この状況……。

教えてくれる奴がいるなら今すぐすがりつきたい気持ちを抱えて、俺は答えを求めるように窓の外に視線を転じた。

憎たらしいくらい、澄んだ青空が広がっていた。

* * *

「おい。アリア。……おい！」

エレベーターを使わずに階段を駆け下り、武偵病院を飛び出したキンジは、一直線に去ろうとしているアリアに声をかけた。

それを聞きとめたアリアが、ピタリと足を止める。

キンジは小走りでアリアに駆け寄り、そして追いついた。

先ほどの一幕に慥然としながら、キンジはアリアの肩を掴んで詰問した。

「どうしたんだよ、お前。見舞いについてくって言い出したのは、お前のほうだろ。なのに、あんな——」

「うるさい」

キンジの台詞を遮り、アリアは一言で断じる。

あまりな対応にキンジは一瞬呆気にとられた。そんなキンジを置いて、アリアは肩にかかる手を振りほどいて、再び歩みを再開する。

キンジは慌ててそれを追いかけて、

「ちよっ、待てよアリア！」

「うるさいって言ってるでしょ！ ついてこないで！」

「ッ！ なんなんだよお前！ もういい、勝手にしろ！」

意味がわからず、理由さえ説明されず、ただただ怒鳴りつけられた

キンジは、さすがに頭に血を上らせた。

そもそもにおいて、今日はキンジ一人で鍊の見舞いに行くはずだったのだ。鍊にも言ったもろもろの諸事を済ませ、武偵病院へ向かおうとした段になって、アリアは「あたしも行く」と言い出し、そして実際こうしてキンジについて来ていた。

キンジは、アリアの言動を受けて、少し彼女を見直した。長い付き合いではないが、キンジもアリアのことは少し分かったつもりだった。プライドの高い、直情的な少女。概ねキンジの評価はそんなところだったのだが、そこに『根は悪い奴じゃない』という項目が加わった。

しかし、実際に見舞いに行つて、病室で鍊に放った言葉はどうだ。自分を——そこにはキンジも含まれるが——庇つた鍊に向かつて、「さよなら」と一方的にそう告げただけだった。

その態度があまりにもあまりなものだったから、キンジはわざわざアリアを追いかけたのだ。せっかく心証を改めたというのに、それは間違いだったのかとどこか哀しげな気持ちになりながら。

だが、結局キンジにアリアが言い放った言葉もまた、辛辣なものだった。柄にも無く出した老婆心をべもなく否定されてまだアリアを気にかけてやるほど、キンジの気性は穏やかな性質ではなかった。

(もう知らん。なんなんだ、あいつは)

武偵病院の敷地から出たアリアは、歩道を左へと進んでいった。

だからキンジは、義憤に駆られながら同じ歩道を右へと進む。

こちらに背を向けて歩いていくアリアに、自分も背を向けながらキンジは歩く。

(鍊に……助けてもらった仲間に、あんなこと言いやがつて。それともアリアにとつては、所詮鍊は『駒』でしかなかったのかよ！)

* * *

もちろん、そんなことはなかった。

アリアにとつて、キンジも鍊も大切な仲間だ。未だパートナーになれてはいないけど、アリアは必ず2人をパートナーにしてみせると、

意気込んでいた。

——昨日までは。

バスジャック事件において、キンジは自分に実力を見せてくれなかった。いや、より正確にアリアの心情を表すなら、『隠された』の方が正しい。なぜなら彼女は、半年前に一度、そして再会したあの日にもう一度、キンジの戦闘力を目撃しているからだ。

実力を隠蔽された、という事実はアリアの心を深く傷つけた。約束を、したのに。全力で事件に当たると、武偵としてそこだけは守ると、そう言っていたのに。裏切られた、と彼女が感じたのもむべなるかなといったところだろう。

そして、逆の意味でアリアを落ち込ませている要因は、言うまでもなく錬の負傷だ。自分を庇って怪我をさせたことに、大なり小なりアリアは負い目を感じていた。

きっと、錬は憤慨しているだろう。足を引っ張ったのは、明らかにこちらなのだから。

だから、アリアは少しだけいつもより自分に素直になった。キンジと一緒に錬のお見舞いに行き、本当はその場で錬に謝るつもりだった。せめて「ごめん」、とただ一言だけでも。

それでもやっぱり罪悪感はぬぐえなくて、アリアはうつむきながら入室した。

だが、

「よう。見舞いに来てくれたのか？」

病室に入っの、第一声。

錬は、なんでもないかのようにそう言った。そこに、こちらを非難するような色は一切無かった。あるのはせいぜい、見舞いに対する喜色だけだ。

(なんで……?) 錬は、あたしたちのせいで怪我したのに……)

予想とは全く違った錬の態度にアリアが何も言えない中、キンジと錬は会話を進める。

全治1週間、というのは少し安心した。思ったよりも、重傷ではなかったからだ。

そんなことを思っていると、キンジが言った。

「ああ。アリアも、そう言っていた」

アリアの名が、出た。

そして、それに呼応するように、鍊がこちらに顔を向ける気配を感じた。

ドクンツ、と心臓が跳ねる。今度こそ、鍊はアリアを負の感情が籠った目で見えてくるだろう。

蔑み、哀れみ、憎悪。種類がなんだろうが、それは関係ない。ただ、パートナーになれる、そしてなつて欲しいと思っている少年にそんな目で見られるのかと思うと、アリアに恐怖が生まれた。

アリアは俯いた顔を少し上げて、顔にかかった前髪の隙間から、そつと彼の表情を窺い見た。

そして、

(なんで……なんで、そんな顔が出来るのよ……！)

怖くなった。

どこまでも。どこまでも。彼の顔は、穏やかで優しかった。

全く持ってアリアに非はない、と。それどころか、誰にも非なんてないんだ、と。そう言われているような気がして。自分の罪悪感が、全て見透かされているような気がして。

だからこそ、アリアは怖くなった。どうしてここまで他人を赦せるゆるのか、他人を想えるのか、アリアには分からなかった。

だからアリアは、

「おい、アリア——」

何かを言いかけた鍊を遮り、

「鍊。これで、約束の一件は終わりよ。あんたはもう探偵科に戻っていい。さよなら」

それだけを言って、引き止めるキンジにも構わず病室を後にした。武偵病院を出てからも、アリアは自分がイラついていることを自覚した。だから追いかけてきたキンジにもきつく当たり、アリアは当ても無く学園島を歩くことになった。

ツカツカと足早に歩を進めながら、アリアは思う。

(おかしいわよ、あいつ。あれじゃまるで、自分より他人が大事みたいじゃない！)

思えば、鍊は初めからそうだった。

チャリジャックのときも、バスジャックのときも。半年前にこそそういう場面は訪れなかったものの、いつも、自分の身を犠牲にして仲間を優先するような行動を取っていた。鍊たちに『ドレイ宣言』する前に聞き込みしたところ、どうも昔からそういう節があったらしい。その理由を、アリアは知らない。何かあるのかも知れないが、そこまで踏み込むまでには至れない。

自分だってまだ、あの2人に言っていないことがあるのだから。

そう――

「ママ……」

アリアの小さな呟きは、溢れ返る喧騒の中に溶けていった――

* * *

鍊の見舞いに言った翌日、日曜日。

キンジは、チャイムの音で目が覚めた。

枕元に転がっている目覚まし時計によれば、現在時刻は朝8時。自分でも遅い起床だとは思うが、昨日までいろいろいと大変だったのだ。疲れが出てしまったとしても不思議はない。

キンジはベッドから降り、寝巻きのまま玄関へ向かう。

「朝っぱらから、一体誰だ……?」

今日は休日。来るとするなら、武藤や不知火たちだろう。暇を持って余した彼らが遊びに来たという可能性がある。ちなみに次点で白雪が挙げられるが、彼女は今S研――超能力捜査研究科^Sの合宿^Rに行っていて、東京にはいない。まさか、さすがに弁当を届けるためだけに帰って来るはずもあるまいし。……いや、白雪ならあり得ない話ではないか。

では一体誰が? と疑問に思いつつ、キンジは廊下を抜け、ガチャリと玄関のドアを開ける。

そこに立っていたのは――アリアだった。

ああそっぴやこいつを忘れてた、と思いつ出すキンジは、次いで目を

白黒させた。

なぜなら、

「あ、アリア……？ お前、どうしたんだその格好？」

そう。アリアの服装は、いつもの制服でも先日見たC装備でもなかった。

どういうわけか、アリアは私服姿で立っていた。薄いピンクの柄が入った白地のワンピースは目が覚めるほど似合っていて、その小さな足はファー付きのミュールが覆っている。

彼女の背格好も合わさって、どことなく妖精然とした雰囲気を感じていた。

そんな姿のアリアを見たキンジは、昨日ケンカ別れしたことも忘れて、思わず魅入ってしまった。

が、アリアはそんなキンジには構わず、

「キンジ。今日はあんたに、付いてきて欲しい場所があるの。本当は鍊にも来て欲しかったけど、あいつは今入院してるから」

「それは構わないが……どこだ。強襲科か？」

キンジのその問いに、「違うわよ」と断ってから、

「——新宿警察署よ」

と、アリアは答えた。

* * *

新宿警察署。

日本一の歓楽街である歌舞伎町や一日に70万以上の人間が行き交う新宿駅を管轄に置き、警察庁警察署の中でも郡を抜いて警察官の数が多くことで知られる、大規模警察署だ。

その入り口前に立ち、キンジは10階以上は優にあるその建物を見上げた。

キンジがこの警察署に来たのは、初めてのことだった。しかしこれは、武偵が警察とあまり上手く連携を取れていないという現実には起因しない。尋問科ダギキュラや鑑識科の生徒ならば実地学習として見学に訪れることもあるだろうが、所属経験が強襲科と探偵科しかないキンジにとってここは、縁遠い場所だった。

まるで自分が犯罪者になってしまったみたいだ、と益体も無いことを考えるキンジの意識を、隣に立つアリアが引き戻す。

「ちよつと、なにぼーつとしてるのよ」

「——ん？ ああ、悪い」

そつげなくはある返事だったが、そこに険悪な感情は見取れない。昨日のことは、すでにお互い（というかキンジが）水に流していた。衝動的なケンカだった分、冷めるのも早かった。

だからキンジは特に遠慮することもなく、アリアに訊ねる。

「で？ こんなところに何の用だ？」

「……入れば、わかるわ」

言外に、この場で告げる気は無いと伝えるアリア。近くに西新宿駅が敷設されていることもあってか、辺りの人通りは多い。誰かに聞かれたくない類の話か、とキンジは当たりをつける。

キンジは「そうかい」と軽く返し、アリアもそれを無言で受け取った。

いつまでもここにつつ立っていてもしかたないので、2人はそのまま署内へと入った。アリアは既に何度も来ているのか迷い無い足取りで受付を目指し、署員と二、三何かを話して、キンジに「こつちよ」と移動を促した。

やがて2人が辿りついたのは、普段眼にすることの無い部屋だった。いや、テレビや漫画などで見たことのある者は多いだろう。その部屋は、真ん中でカウンターとアクリル板で区切られていた。その無機質な境は、まるでこちらとあちらを完全に隔てた空間であるかのよう、一切の隙間がない。

留置人面会室。ここは、そう呼ばれていた。

（アリアの奴、犯罪者に用があるのか？）

カウンターの前に置かれた2つの椅子にアリアと共に座りながら、キンジは居心地の悪さにみじろぎする。

こんなところに何を？ と訝るキンジをよそに、やがてアクリル板の向こうから、警官2人に連れられた1人の女性がやってくる。

（——あれ。この人、どこか……）

向こう側のカウンター席に着席したその女性を見て、キンジは既視感を覚えた。正確には、隣にいる少女の姿が、女性とダブったのだ。ゆるやかにウェーブした色素の薄い黒の長髪。柔らかな物腰。どこどなくアリアに似た瞳（なのに優しく見えるのはなぜだろう）。美人、と十分以上に評すことのできる女性だった。

キンジは、気づく。この人は、アリアの拳銃・ガバメントのグリップに彫られた女性に似ていることに。

女性は、自身を神崎かなえ——アリアの、母だと名乗った。

彼女に内包される母性そのものの柔らかな雰囲気、キンジは少々落ち着きをなくす。

そんなキンジの様子に目つきを険しくしながら、アリアはかなえに「ここにいる遠山キンジは『武偵殺し』の被害者なの」と説明した。

続けて、

「本当はもう1人、有明錬ってやつがいるんだけど、事情があつて今はこれないの。だけど、聞いてママ。『武偵殺し』は最近動きが活発になつてる。あたしはヤツを捕まえて、ママの懲役864年を742年にまで減らしてみせるわ」

（は、864年……!?!）

なんだそれは、とキンジは胸中で驚愕する。そんなもの、終身刑と変わらないではないか。

そして次に、キンジは気づいた。神崎かなえという名は、去年の暮れにニュースで報道されていた。『武偵殺し』の逮捕、という文句と共に。

ピースがつながる。アリアが『武偵殺し』は誤認逮捕されたと言っていた意味が、これでやっとわかった。逮捕された『武偵殺し』とはつまり、アリアの母親のことだったのだ。

（いや、待て。それよりも、もっとやばいことがあるぞ……）

キンジの思考は、そこからさらに進む。『武偵殺し』が冤罪だと証明できれば、864年から742年まで刑期が減るということは、逆に言えばそれ以上は減らないということである。

つまり。

かなえには、まだいくつか『武偵殺し』級の冤罪がかけられているということにならないか——？

その推理に思い至ったキンジは、意識せず顔を青くした。

だが、当の本人は、「あら？」と依然柔らかい表情を崩さずに、

「遠山キンジさんに、有明錬さん？　どこかで似たような名前を聞いたような……ああ、そうそう。確か、半年前だったわね。アリア、もしかしてこの方たちは、あなたが言っていた遠原金三とおはらきんぞうさんと、有間錬夜ありまれんやさん？」

かなえの台詞に、キンジは目をみはった。

それは確かに、半年前キンジたちが使った偽名だった。だが、それを知っているのは、キンジと錬、アリアを除けばアガンベン家の連中くらいだ。母といえど、本来ならかなえが知るはずが無い。

となると、アリアがかなえに喋ったということになる。おい、任務の守秘義務はどうしたとキンジはアリアにジト目を向け、アリアは「うっ」とイタズラがバレた子供のように目を逸らした。

そんな2人の様子を微笑ましく眺めながら、かなえはさらに、「あの時、あなた嬉しそうに話してくれたわよね。面白い奴らに会ったって……最後には、『ドレイくらいにはしてもいいかもね』なんて、頬を緩めてたわ」

懐かしむかなえの瞳には、優しげな光が揺れている。キンジはそこに、彼女のアリアに対する愛情を見た気がした。

だがアリアとしてはたまったものではない。プライドの高いこの少女が、本人を前にして恥ずかしい発言を披露されたとなれば、その羞恥心たるや推して知るべし。

ぼぼぼつとアリアは頬を一気に赤く染め、

「ま、ママ！　い、いいい言っただけじゃないわよそんなこと！　あたしは変なバカたちに会ったっていっただけで……こ、このバカキンジ！」

「うぐっ!?　な、なんで俺が……」

照れ隠しのアリアの一撃が、キンジのみぞおちに突き刺さる。

苦悶の声を上げるキンジにアリアはフンと鼻を鳴らして、切り替えるように真面目な顔を作った。

「ママ。あたしは、絶対ママを助けてみせる。ママをスケープゴートにした『イ・ウー』の連中を、全員ここにぶち込んでやるわ」

「アリア……気持ち嬉しいけど、『イ・ウー』に挑むのはまだ早いわ——『パートナー』は、見つかったの？」

かなえもまた、穏やかだった表情を困ったように曇らせて訊いた。

——『パートナー』。

それこそまさに、アリアが捜し求める存在だった。

アリアも血を引く『H』家は、代々優秀なパートナーを得てきていた。アリアの曾祖父も、祖母も、それぞれロンドンで自分の能力を何倍も引き出してくれるパートナーを見つけていた。

が、アリアにはまだパートナーが見つかっていない。アリアに、ついてこれる者がいないからだ。

しかし、アリアが敵視し、かなえに数多の罪を着せた『イ・ウー』という犯罪組織は強大だ。アリア一人では、とても太刀打ちできないだろう。

だからこそアリアは、ずっとパートナーを捜していたのだ。その結果としてキンジと錬に『可能性』を見出し、その末にあんなことになってしまったのだが。

「人生は、ゆつくりと歩みなさい。早く走る子は、転ぶものよ」

焦るアリアに、かなえは母親らしいたしなめるような言葉をアリアにかける。

それから、自分の最高裁は担当弁護士が引き伸ばしていることを引き合いに出し——すでに二審まで有罪判決が決まっている——アリアを説得する。

「わたしは大丈夫だから、あなたはまず落ち着いてパートナーを見つけないさい。今はまだなんとかなっているととしても、この先一人では対応しきれなくなる時がくる」

その、言葉に。

アリアの脳内に、病室で見た錬の表情が蘇った。

白色に染められた部屋の中、錬は笑っていた。それが逆に、アリアが自己を呵責する原因になろうとは、おそらく思わずに。

アリアは、端正な顔をゆがめて、

「違うの、ママ。あたしは一昨日、危険な目に遭った。だけど、あたしを庇って傷ついた人がいた。——だからもう、あたしはパートナーなんていらない。ママを助けることができたって、その過程で誰かを犠牲にしたら、ママは喜ばないから……」

「アリア……」

かなえには、母には、アリアの気持ちが変わった。わかって、しまった。

本当は、つらくないはずがない。アリアはまだたったの16歳だ。今頃どこかの一般高校で青春時代を過ごしていても、なにもおかしくない、そんな女の子なのだ。

だが、現実がアリアにそれを許さない。アリアに、戦うことを強いる。

それでも、一人で戦うことがどれほど大変なことなのかは、言うまでも無い。アリアだって、パートナーを欲しているはずだ。

だからと言って、アリアはそれを目的達成のための踏み台にできる人間ではなかった。かなえは、そんな風にアリアを育ててはいない。

母親として、かなえにはそんなアリアの姿がひどく痛ましく映った。小さく、弱い。武偵高の生徒から見れば鬼人のごとき強さを持つアリアも、母の視点で見れば幼子にしか見えなかった。

もちろん、アリアの芯には折れない心があることを、かなえは知っている。それでも今この時は、かなえは母としてアリアに声をかけるべきだと感じた。

だからこそ、彼女は知らず身を乗り出して、

「神崎、時間だ」

しかし、無慈悲な宣告を受ける。

かなえを連れてきた警官2人が、彼女を脇から羽交い絞めにして、立ち上がらせる。

連れて、行かれる。

最愛の母が、自分の前から。

「ッ！ やめろッ！ ママに乱暴するな！」

アリアは、アクリル板に拳を打ちつけながら叫ぶ。だが、当然それは聞き入れられず、また妨害もできない。少女の細腕では、この壁を取り払うことなどできはしない。

遠ざかる最愛の母親の姿に、アリアの心を悔しさがいっぱいに満たす。

「アリア！ パートナーを作りなさい！ あなたを支えてくれる、パートナーを……！」

最後に、かなえはそれだけをアリアに伝え、奥の扉の先へと連行されていった。

ガチャン、と。

扉が閉まる音が、重々しく響いた。

* * *

キンジとアリアは、新宿警察署を出てから、学園島に戻るために新宿駅へと歩いていった。

雑踏に紛れ、前を行くアリアに、キンジは形容しがたい感情を抱えながらついていく。

空は曇天。今にも雨が降り出しそうだ。

——2人の間に会話は無い。

(アリアに、あんな事情があつたなんて……知らなかった)

キンジは一人、思考の海へと沈む。

少し、後悔していた。ヒステリアモードのキンジに期待するアリアに、通常モードの自分を見せて失望させよう、などと画策したことを。

あの、アリアに一件だけ事件に付き合うと提案した日。キンジは、そのつもりで持ちかけていた。キンジは知らなかったが、それは鍊も見抜いている。

アリアが切実にパートナーを求めていたこと、そしてその理由を知り、キンジは応えられないと知った上で期待させた自分に、僅か嫌気が差した。こんなことならば始めからなんとしても突き放しておくべきだったと、忸怩たる思いが湧き出てくる。

だが。

だとしても、だ。だからといってアリアのパートナーになり——武

偵という道が続ける気はキンジにはない。兄を奪った武偵なんて、キンジはこれ以上続ける気が起きなかった。

二律背反。力になってやりたい、とは思う。それぐらいの正義感
は、キンジにもある。だが一方で、それは絶対にできないとも思っ
ていた。

どつちつかずの感情に、キンジは後者を取ることでも無理やり答えを
出した。

と、アリアが歩きながら言った。

「……キンジ。あんたも、約束どおりもう探偵科に戻っていいわ。あ
たとあんたたちの契約は満了したの」

「……わかった。お前がそういうんなら、俺はそれでいい」

投げやりともとれるキンジの発言にアリアは「そう」とだけ返し、ま
た黙る。

かと思いきや、すぐにまた口を開いた。

「ねえ、キンジ。やっぱり、鍊の怪我はあたしたちのせいなのよね」

「……それは、そうだろうな」

正直に、キンジは答える。

実際その通りだった。鍊が庇ってくれなければ、最悪キンジかア
アのどちらか……あるいは両方が、この世から去っていたかもしれな
い。

アリアは「お前のせいだ」という意味も含む台詞に、無言で返した。

キンジはそれを見て……思わず、言ってしまった。

「——だが、全部が全部そうじゃないんじゃないか?」

「え……?」

思わずと言った風にアリアは立ち止まり、キンジに振り返る。

彼女の顔には、ありありと驚きが浮かんでいた。まるで、一切考え
ていなかった可能性を突きつけられたかのように。

キンジは、続けた。

「鍊にだって落ち度はあるだろ。俺たちに相談無しの独断先行、ろく
な武装もしてなかったこと、防弾制服無しで銃口の前に立ったこと。
どれも、武偵としてのセオリーを無視してる。これは、明らかに鍊の

過失だ」

「……………」

「だから……だから、アリアにだけ責任があるわけじゃない」

キンジはそう言って、話を閉じた。

最後まで聞き終えたアリアは、

「そう、かもね……」

とだけ言って、再び前を向いて歩き始めた。

アリアが今なにを思っているのか、キンジには分からない。どんな表情をしているのかさえ、確認できない。だから何と声をかければいいのかも分からず、キンジはただアリアに付き従うしかなかった。

が、

「キンジ」

「なんだよ」

「……一人にさせて」

当のアリアにそう頼まれ、キンジはそれを断ることができなかった。断ってまでアリアに付いていくような理由が、キンジにはなかったのだ。

一人去りゆくアリアの背中を見つめ。

その小さな姿が新宿の雑踏の中に消えるまで、キンジはその場に立ち尽くしていた――

* * *

アリアを見送ったキンジは、路地裏を歩いていた。

何か明確な目的があったわけではない。ただ、今はあまり人ごみの中にいたい気分ではなかった。もしかaramれたりすれば、意味も無くなり散らしていたかもしれない。

しかしてその理由は何かと問われれば、そちらははっきりとしていた。

キンジは、先ほどとは比較にならないほど後悔していた。

アリアに語ったことを、口にすべきではなかったと。

遠山キンジは、自身の台詞を脳内で反芻する。

(鍊にだって落ち度がある……アリアだけの責任じゃない……)

そう。キンジは確かにそう言った。

まるで、いつか見た野良ネコのように寂しげなアリアの背中に耐え切れず、キンジはそう言ってしまった。

確かにそれは、一側面を見れば正論だろう。セオリーとはすなわち、先人たちが築き上げた間違えなかったための方法だ。無論全てが全て正攻法でどうにかなるわけではないし、時には従来の手段以外を取るべき場面も出てくるだろう。

だが、少なくともそれは、あのバスジャックの場面ではなかった。セオリーを無視した有明錬の行動を武偵の教科書に照らし合わせれば、浴びるべきは賞賛ではなく非難だ。

だから。

きつと、誰もがキンジに言ってくれるだろう。

——「お前はなにも間違っていない」と。

「ふざっけんなッ！」

薄暗い路地裏に、キンジの慟哭と、鈍い音が響く。

キンジが、ビル壁を殴りつけた音だった。

ジンジンと痛みを発する右手にキンジが顔をしかめ、心中で悔恨する。

（錬に、落ち度なんてない。あいつなら、本当はもつと上手く立ち回れていたはずだ。それを俺が……俺の浅はかな判断が、あいつにあんな行動を取らせちゃった）

アリアにも言われたことだ。錬が撃たれる直前、キンジは無防備が過ぎていた。

その結果として、錬がキンジを庇わなければならぬ状況が生まれた。

だとすれば。

このどこが、遠山キンジは間違っていないなどと言えるのだろうか？

「結局、全部俺のせいじゃねえか……」

アリアだけのせいじゃない、どこの話ではない。

つまるところこれは、遠山キンジのミスが親友を傷つけたという、

ただそれだけの話だった。

キンジは思う。

もしかしたら、アリアに言った言葉は全て、自分に向けたものかもしれない、と。鍊にも落ち度があると思いたかったのは、誰かだけのせいではないと信じたかったのは、自分の方なのかもしれない、と。ならば、

「最低だ。俺は……」

一歩間違えれば、鍊は死んでいた。これではまるで、あの時の繰り返しではないか。

そう、キンジが嘆いたとき。

——ポツリ、と水滴がキンジの頬を打った。

雨だ。雨が、降ってきた。

始めは数滴。しだいに強くなり、すぐに大雨に変わった。

千条の雨粒が、キンジを濡らす。それはまるで、キンジを責める天からの槍のようだった。

——心が、折れかける。

キンジは、右手をゆるゆると持ち上げ、拳銃を握ることしかできなかった掌に視線を落とした。

その姿を、人はなんと称すだろう。少なくとも、勝者には見えないその姿を、人はなんと——

そして。

そして、キンジは、ついに俯き——

グッ！ と思いつきり、右手を握り締めた。

「このままで、終われるか……！」

心を、持ち直す。

再燃させる。奮い立たせる。

キンジは、双眸を睜めて、顔を上げる。

このままじゃ、終われない。親友を傷つけて、知り合いの女の子一人助けられなくて、舐められっぱなしのまま終われない。

IFの話になるが、もし鍊が傷つくことなく、アリアとも初対面だったなら、キンジはこんな思考に至らなかつたかもしれない。

だが、そんなことは関係ない。今この時、この瞬間、遠山キンジは確かにキレていた。

『武偵殺し』……お前には、もう何発ももらった。きっちり、返してやるよ）

武偵は、一発もらったなら一発返す。

キンジは、近い将来武偵をやめる。だが、今はまだキンジは武偵だ。ならば、この借りは返さなければならぬ。

顎を伝う雨を、キンジはぬぐう。

降りしきる冷たい雨の中、しかしキンジの体は、静かに熱を帯びていった。

* * *

アリアはキンジとは裏腹に、変わらず雑踏の中を歩き続けた。その表情は、暗い。

そしてキンジ同様、心は内側に向かっていた。

（キンジはああ言ってたけど……それでもやっぱり、鍊をパートナーにするわけにはいかない）

アリアは胸中で、本心を抑えてそう結論づける。

それは、鍊を案じればこそその決断だった。

アリアが挑もうとしている『イ・ウー』は生半可な組織ではない。世界に名だたる多くの犯罪者が所属している、恐るべき集団だ。たとえばSランクのアリアでも、容易に太刀打ちは出来ないだろう。

当然、そんな相手に矛を向ければ、相応の危険が返ってくる。それはおそらく、命に関わる形で。

そしてアリアの命が脅かされた時、彼女の傍に鍊がいたならば。（また、鍊はあたしの身代わりになろうとするかもしれない）

アリアの脳裏に、鍊が撃たれた姿が浮かぶ。あれと同じことが、また起こったとしたら。

そうなれば、今度は肩の傷では済まない可能性がある。

今度こそ、失うかもしれないのだ——命を。

（そんなの、絶対ダメッ！）

最悪の想像に、アリアは叫びそうになる。

ダメだ。それだけはダメだ。そんなこと、アリアも、そしてかなえも許容できることではない。

だからこそアリアは、鍊を突き放したのだ。

「さよなら」と。別れを告げる言葉と共に。

本当は、せめてキンジだけでも、という気持ちはあった。しかし、それもバスジャックのことを思い出せば、心に躊躇いが生まれる。

だから、これでもう本当に終わりだ。

アリアは、2人のパートナー候補を一気に失った。

アリアとキンジと鍊。いつかアリアが思い描いた未来予想図が現実になることは、これで完全に無くなった。

しかしアリアは、これでいい、と思う。あたしはこれからも一人で戦い抜く、と自分に言い聞かせる。

だけど。

「……ヤ」

今の今まで引き結んでいた唇から、小さく零れる。

そしてそれをきっかけにしたように、言葉があふれ出た。

「そんなの、イヤ。ホントは、あいつらにパートナーになって欲しい。

一緒に、戦って欲しい」

それは、アリアの本心だった。鍊にも、キンジにも、そしてかなえにさえ明かさなかったアリアの願いだった。

足が、止まる。

突然立ち止まったアリアを、通行人が迷惑そうに避けていく。

「一人はもうイヤだよ、ママ……！」

アリアが、そう言っ

て。――雨が、降り始めた。

曇天の空と、アリアの瞳から。

「……う……わあ……うあああああああああああああ！」

突然の泣き声に、周囲の人間が好奇の目を向ける。

だけどそんなことも構わずに、アリアはただ泣く。

とめどなく溢れる涙が、感情と一緒に頬を伝う。

「ママあ……ママああああああ……！」

世界でたった1人だけになってしまった、アリアの味方の名を呼びながら、彼女は泣き声を上げる。

傍らには誰もおらず、アリアは滂沱の涙を流し続けた。

雨は誰の上にも平等に降る。泣き暮れる少女だけを避けることも慰めることもしない。

自身を濡らす感覚に。

この雨がもしも、この悲しみも洗い流してくれたらとアリアは願った。

* * *

「……………ん」

と、一つ呻いて、俺は病室のベッドの上で目を覚ました。

逆説的に、今まで寝ていたことに俺は気づいた。どうも、知らねえ内に眠ってたらしい。

体が休息を求めているのか、それともただ考えることを放棄したかったのか。それは、わからなかった。

ふと、窓の外を見てみる。俺が意識を失う前は晴れだったんだが、いつの間にやら雨が降っていた。

窓を開けていたせいで、病室が静かなせいで、やけに雨の音がでかく聞こえる。

俺はその雨を眺めながら、ぽつりと言った。

「やっぱ、これしかねえかな……………」

降り続ける雨が、俺の行く末を表しているような気がした。

雨は、止まない。

——まだ、止まない。

14. 世界で最も過激な天空へ

病院では携帯電話は原則禁止、という規則（というかマナー）があるが、とはいえ完全にどこでも使用できないというわけじゃない。ちゃんと使用許可が出ている場所は、院内にも存在する。

それは武偵病院であろうとも、例外ではない。

俺は今、武偵病院のロビーの壁に寄りかかって、携帯電話を耳に当てていた。ちなみに、俺が持っていた携帯はバスジャックの際にぶつ壊されたので、情報科インフォオルマ経由で新しく契約した携帯を使っている。

外では未だに、雨が降っているんだろう。窓の外で傘を差した武偵高生たちが行き交っているのが見えるからな。

そんなことを考えていると、耳元で発信音が3回スリーコール鳴って、

『Hello, This is……って、この番号は、レンかい？』

と、少し高い声が耳を打った。

俺は、懐かしい声にわずか目を細め、

「よ。久しぶりだな」

『……ああ、そうだな。実に3ヶ月ぶりだよ、こうして君と言葉を交わすのは』

……あれ？

なんか、声に硬さ……つか、怒気みたいなものを感じるんだが。

「……お前、なんか怒ってねえ？」

『まさか。どうしてボクが怒る必要がある？ キミもキンジも一切連絡してこなかったくらいで怒るほど、僕は英国貴族としての心を忘れたつもりはないよ』

「……………」

怒ってんじやねえか。

「なんだよお前、少し連絡しなかったくらいで。拗ねてんのか？」

『な——っ!? ば、バカを言うな！ ボクが寂しかったなんていつ言った！』

俺も言っつてねえよ、そんなこと。

というか、話が進まねえんだが。俺はこいつに頼みたいことがある

から電話したつてのに。

俺は少し辟易としながら、

「ああ、そうだな。俺が悪かった。——それより、だ。お前に一つ、頼みがあんだよ」

『そもそもボクが寂しがる理由が無いだろうなぜならボクとキミたちの関係はただの元クラスメートだからしてそこから考えればたかが3ヶ月程度連絡がなかったからといってどうということは何？』

頼み？』

「急な話で申し訳ねえんだがな。無理なら断ってくれていい。——実はな……」

俺は、電話の主にとある頼みごとを告げる。

まあ、正直無理だろうなどは思うんだが。さすがにいきなりすぎるし。

俺が話し終わると、受話器の向こうから深い嘆息が聞こえた。

あー……ま、そんな反応になるよな。

俺は見えていないと知りつつも、唇を苦笑の形にゆがめ、

「悪い。やっぱ、いきなりこんなこと言われても困るよな」

『困ると言うか……君はボクを便利屋かなにかだと思っていないか？』

一体キミはボクをなんだと思ってるんだ』

「そりゃ……友達、だろ。向こうじゃいろいろあつたけどな、感謝もしてるし……まあ、なんだ。いい奴だとも思ってるんよ」

『……………』

俺の返答をどう受け取ったのか、無言で返される。

……ちよつと、調子が良すぎるな。言ったことに嘘はねえが、連絡するのを忘れてたのも事実。それが、いきなり電話しといて内容がこれじゃあ、愛想をつかされるのがオチだろ。

——と、思っていたんだが。

『……OKだ。わかった、その頼み引き受けよう』

「え……いいの？」

『ああ。ボクを見くびるな。そのくらい、造作もない。ついでにチケットの手配もボクがしておこう』

「すまねえ。迷惑かける」

『気にするな。ボクたちは、と、友達なんだろう？　友達が困っているなら、助けるさ』

「……サンキュー」

詳細は追って連絡する、という言葉締めに通話は切れた。

俺は携帯電話を病院服のポケットに仕舞い込みながら、ゴンと壁に頭を預けた。

さて……これで、もうホントに後戻りはできねえな。

この選択が正しいのか、それとも間違ってるのか。それは、わからねえ。

だが、選んだ以上はもうその道を進むしかない。たとえ先に、なにがあつたとしても。

「まあ……きつと、これは逃げなんだろうけど、な」

* * *

ボタン、と背後で扉が閉まる音がした。

その音を聞き流しながら、遠山キンジは靴を脱ぎ、自室の廊下に入った。

すると、前髪をつたつてポタポタと水滴が床板に落ちた。キンジはそれに顔をしかめる。

それから彼は、ひとまずシャワーを浴びることにした。なにせ今の今まで雨に打たれていたのだ。体はすっかり冷え切っているし、どのみちこんなびしょ濡れのままりビングに入るわけにはいかないだろう。

キンジは脱衣所で濡れた制服を洗濯機に放り込み、浴室に入る。

暖かいシャワーで体を癒し、風呂場から上がったキンジは腰にタオルを巻いて、着替えを取りに行った。

ラフなスウェット姿になったキンジはリビングのソファに深く座り込み、そこでやつと一息を入れた。

室内は仄暗い。時刻的にはまだ正午にもなっていないが、なにせ外は雨だ。窓の外に広がる雨雲が日光をさえぎり、照明をつけていないこの部屋は決して明るいとは言えなかった。

そんな中で。

キンジはポツリと呟いた。

「……やっぱり、わかんねえ」

その言葉に対するのは、『武偵殺し』のことだった。

キンジは自宅に帰ってくるまで、そしてシャワーを浴びている最中も、ずっとそのことについて考えを巡らせていた。

あの薄暗い路地裏で、キンジは借りを返すと決意した。だがそのためには、奴と見えなければならぬ。

いまだ姿さえ見せない奴に会うために、キンジは『武偵殺し』の目的を推測しようとした。そうすることで、奴の次なる狙いを看破しようとしたのである。

だが、ことここに至って、キンジにはその答えが見つからなかった。

キンジが知る『武偵殺し』関連の事件は少ない。去年ニュースで取り上げられていたいくつかの事件を除けば、自身も経験したチャリジャックとバスジャックの事件しか知らなかった。

これらの事件に共通する項は、その名が示すとおり被害者が全員武偵だということだ。だが、『武偵殺し』とは名ばかりに死者は一名も出ていない。ここに、労と実が釣り合わないという奇妙な矛盾が顔を出す。

これが武偵を憎んでの犯行ならば、被害が無さ過ぎる。さりとしてそれはそれ以外かとなると、思い当たるものがない。だから、目的が見えてこない。

無論、世にはびこる多くの爆弾魔たち同様、ただの愉快犯だという可能性はある。だが、キンジはそれを頭の片隅に置きながらも、除外していた。もしそうだった場合、キンジがここで頭を捻っていても、出来ることは奴の行動を待つことだけだからだ。それならば、違う可能性を考えて先手を打つ方法を模索する方がよほど建設的だ。

(だからといってじゃあ奴の狙いがなんなのかってなるんだがな……。結局そこを推理できなきゃ、後手に回ることになる。それは、最善とは言えない)

キンジは背もたれに後ろ頭を乗せて、思考に没頭する。

何か、一つ。せめて何か一つあれば……。
と、その時。

(——待てよ。そういえば、俺はまだピースを持ってたぞ)

キンジの頭の中に、ある人物が浮かぶ。

神崎かなえ。

つい先ほど会ったアリアの母にして、『武偵殺し』の冤罪を着せられた人物。

そう、冤罪だ。彼女は、『武偵殺し』ではない。ただ間違えられただけだ。

だが。

(よくよく考えたら、これはおかしくないか？ そもそもどうしてかなえさんは冤罪を着せられた？ あの人は武偵じゃない、一般人だ。娘こそ武偵だが、彼女には『武偵殺し』に目を付けられる理由がない)

では偶然か？ と考えて、その可能性は低いと思い直す。かなえがかけられた『武偵殺し』としての刑期は122年。一人も死者が出ない以上、もしも一件だけ偶然冤罪をかけられたとなれば、罪が重すぎる。となれば、すべての事件において武偵殺しの冤罪をかけられている、ということになるだろう。その全てが偶然による仕業とは到底思えなかった。

——進んだ。

推理が、進んだ。

キンジはさらに先へと思考を走らせる。

(じゃあ、『武偵殺し』の狙いはかなえさんか？ これまでに起こした事件はすべてフェイクで、かなえさんに罪を着せることが狙いだっただけ……？ いや、回りくどすぎる。そんなことまでするくらいなら、直接狙った方が遥かに早い)

くしやり、とキンジは前髪をかく。

煮詰まった。結局、これ以上は進めないのか。やはり、ヒステリアモードでなければ、自分には何も出来ないのか。

暗澹たる気持ちに、キンジがなったその時。

友人である鈴木時雨の言葉が、ふと脳裏に蘇った。

『いいかい、キンジ。君が探偵科インケスタに転科した手向けに、一つ私が知る推理法を教えよう。もし、原因から推理していつて煮詰まった時が来たら、結果から考えてみるといい。発想を逆転させるんだ。どうしてそうなったのだろう？ ではなく、そうなったことで何が起きたのだろう？ ってね』

その、アドバイスを思い出して。

キンジは、それを実行に移した。

(結果……結果、か。この場合で言えば、『武偵殺し』がかなえさんに罪を着せたことで、なにが起こったか、だよな)

たとえば、本物の『武偵殺し』が罪を逃れた、というのはどうだろう？ いや、それならば、確かに筋は通るがかなえである必要性がない。

では、かなえが世間に犯罪者として認識されてしまった、というのは？ いや、これも多分違う。さつきも似たようなことを考えたが、あれほどのことをしでかすならば直接かなえに危害を加えるだろう。だとしたら……、

「——アリア」

と、キンジはハツとしたように呟いた。

(そうだ、アリアだ。かなえさんが捕まったことで、アリアは『武偵殺し』の逮捕に乗り出した。まるで、かなえさんをエサに誘い出されたみたいに)

それならば、かなえが冤罪を着せられた理由もつく。

挑発。そして、宣戦布告。これが、『武偵殺し』のアリアに対するメッセージだとしたら？

答えは、出る。

(『武偵殺し』の本当の目的は、武偵でもかなえさんでもない。神崎・H・アリアか……！)

その考えに行き当たった瞬間、キンジは立ち上がって、急いで自室に引っ込み、机の上に放り投げていた携帯電話を手に取った。

アドレス帳を呼び出し、あ行を探す。そしてすぐに、『アリア』とい

う名前が見つかる。

迷わずその名前を選択して、キンジはアリアに電話をかけた。

耳元で鳴る呼び出し音に、キンジは焦れる。

(早く、早く出ろアリア……！)

キンジの推理は、完全とは言えない。所詮は状況から推測した、証拠もなにもない憶測だ。偶然の可能性だって、まだ生き残っている。だが、アリアが狙われているかもしれない。ただその一点のみが、キンジに焦燥感を与えていた。

10秒……20秒……アリアは、出ない。

それでも諦めずにキンジは待ち続けて。

そして、根負けしたかのように、通話が繋がった。

『——なに？』

その声は、常のアリアらしからぬ抑揚の無い声だった。

それに若干の気後れを感じながら、キンジは口を開いた。

「アリア。お前に、話がある」

『……今ちよつと忙しいの。悪いけど、またにしてくれない？』

「大事な話なんだ。お前にとつても……俺にとつても」

『？ 大事な、話……？』

「ああ」

と、キンジは一度切つて、

「——『武偵殺し』についてだ」

キンジ同様雨に降られたアリアが女子寮に戻つてまずしたことは、暖かいお湯で満たされた湯船で冷え切った体を温めることだった。それから彼女はバスローブを纏い、寝室のシングルベッド(わざわざイギリスの実家から運び込んだ物だ)に幼さを残した体軀を横たえた。

ベッドサイドボードのスタンドライトから放たれる柔らかな光が、アリアの物憂げな表情を照らし出す。

ほう、と儂い吐息を一つ零し、アリアは呟いた。

「……やっぱり、イギリスに帰ろう」

それは、前々から決めていたことではあった。

アリアが東京の地を踏んでから、すでに4ヶ月という月日が経過していた。この期間にアリアが至上命題として掲げていたのは、無論パートナーを探し当てることであった。

彼女がこの時期に東京武偵高に転校してきたのは、まったくの偶然である。各国の武偵高（第Ⅰ級指定された武偵高のみだが）をパートナー探しのために渡り歩き、たまたま今回はこの東京武偵高を選んだというだけの話だ。

だから、ここでもパートナーが見つからなかった場合、アリアはイギリスに帰るつもりだった。

イギリスは、武偵の国。武偵の始祖とも呼ばれる人物がいたこの国は、世界でもっとも武偵という存在が浸透している。世界に名だたる高名な武偵を多く排出し、ロンドン武偵高は『世界最高峰の武偵高』とまで呼ばれていた。

それゆえに、アリアはイギリスに帰るのだ。一縷の望みをかけて、パートナーを探すために。たとえ故郷ゆえにすでに真っ先に探し回っていたとしても、だ。そうするしか、ないのだから。だが。

（本当に、それでいいのかな……）

彼らの存在が、アリアの心にストッパーをかけていた。

キンジと、鍊。

アリアが唯一パートナー候補にした2人。

彼らの姿を、そして彼らと過ごした日々を思い出し、アリアは後ろ髪を引かれ、

「……無理よ、もう。もう、戻れない」

しかし、彼女はそれを振り払う。

右腕で両目を覆い、ゆるゆると首を左右に振る。

決別は、もうした。自分から、遠ざけた。

ならば、ここで終わらせるしか道は無い。

「準備しなげや……」

アリアはベッドから身を起こし、やるべきことを脳内に羅列し始め

た。

イギリスに戻るとなれば、やることは多い。向こうに連絡することや、東京武偵高につける話もあるし、手続きもいくつかある。最終的には向こうについてからやることが多いだろうが、それでも日本を発つとなれば必要なことは多々あった。

もちろん、今すぐやる必要はない。誰に強制されたことでもないし、ここに留まる期間が設定されていたわけでもない。だがアリアは一刻も早くここから離れたかった。あるいは、何かを振り切るように。

が、そんなアリアの機先を制するように、リビングから音楽が流れしてきた。アリアの携帯電話に登録されている、着信メロディーである。

「電話……？」

どこか邪魔をされた気分になったアリアは、イラつきながらもリビングへと向かう。豪華な家具に出迎えられながら、彼女はイギリス製のアンティークテーブルに置いていた携帯電話を手にとった。

誰からだろう、とアリアはディスプレイに目を落とす。

その、アリアの目に。

『遠山キンジ』という文字が飛び込んだ。

「——ッ！」

思わず、息を呑んだ。

なぜ。なぜ、このタイミングなのか。

もう、会うことも話すこともせず去ろうと決めていたのに。

取るべきか、取らざるべきか。逡巡するアリアの手中で、呼び出し音は鳴り続ける。

やがて。

(……これで、最後よ)

アリアはついに、その電話を取った。

通話ボタンを押して、携帯電話を耳に押し当てる。

まずは、第一声。

「——なごう？」

それは、自分でも驚くほど硬い声だった。受話器の向こうで、緊張したように息を呑む音が聞こえた。

しかしそれも一瞬、すぐにこの数日で聞きなれた声が鼓膜を震わせた。

『アリア。お前に、話がある』

「……今ちよつと忙しいの。悪いけど、またにしてくれない？」

キンジの言葉を、アリアはとりつくしまもなく跳ね除けた。

実際、嘘ではない。前述したように、アリアにはやらなければならぬ処理が多くあった。

が、これも前述したように会話一つできないほど火急のことではない。それでもアリアがこう言った裏には、様々な感情があった。

それでもキンジは諦めずに、

『大事な話なんだ。お前にとつても……俺にとつても』

「？　大事な、話……？」

『ああ』

さすがに、少し気になった。ここまで言うこととは、一体なんだろうか、と。

だが次のキンジの一言には、納得せざるをえなかった。

『——「武偵殺し」についてだ』

「……………」

思わず、黙り込むアリア。

まさか、今更キンジの口からその名前が出るとは思わなかった。

今更……そう、今更、だ。

あれだけ自分を拒んで。約束を破って実力を隠し。「契約は満了した」というアリアの言葉にあっさり頷いて。

その上で、今更キンジは『武偵殺し』の名を出した。

それが。

それがなぜか、アリアの心を灼いた。

『いいか、アリア。お前と新宿で別れた後な、俺なりにいろいろ考えてみたんだ。そしたら——』

そんなアリアの感情を知らず続けるキンジの言葉を、

「うるさい」

と、アリアは一言で切って捨てた。

『……は？』という呆然としたキンジの声に構わず、アリアは一息で告げる。

「よく聞きなさい、キンジ。あたしは言ったはずよ。『契約は満了した』って。それにあんたは『わかった』って答えた。伝わってなかったのなら、はつきり今言うわ。——いい、キンジ？ あの瞬間、鍊を含めてあたしたちの関係は終わったの」

『な……ち、ちよつと待てよお前！ あれだけ振り回しといて、そんな勝手が通るか！ いいか、よく聞けアリア、「武偵殺し」の狙いは——』
ブツツ、と。唐突に通話が切れた。

否、アリアが切ったのだ。

アリアは静かに携帯電話を耳元から離し、

「今更、未練が残るようなこと、言うんじゃないわよ……」

と、小さく小さく呟いた。

すべては、今更のことだ。

だからアリアが止まることにはならなかった。

* * *

——月曜日。

俺がバスジャックに遭ってから、3日が経った。

今はだいたい、午後の専門科目も終わった頃か。そろそろ日も沈むな。

俺は自分の部屋で制服姿で荷造りしながら、そんなことを考えた。

「よっし、こんなもんかね」

あらかたの荷物をポストンバックに纏め終わった俺は、一つため息を吐いて一息入れる。

——さて。

なんで今俺が自室にいるのか、疑問に思う人もいると思う。

答えは簡単。俺が「取ってきたいモンがあるから、一回家に帰らせてください」と矢常呂先生に頼み込んで、特別に許可をもらったからだ。

矢常呂先生は「なるべくすぐ帰ってくるのよ」と言ってたんだが……、

「悪いけど、そいつは無理な相談なんだよな」

なんせ、病院に戻るどころか……俺はこれから、東京からもいなくなるんだからな。

「よし——行くか」

俺は荷物を左肩にかるい、玄関に向かう。

扉を開け、外に出る……前に、一度だけ振り返った。

「……………」

何も言うことはなく、俺は数ヶ月を過ごした自室を眺めて、そして、俺は住み慣れた我が家を後にした。

* * *

東京が強風に見舞われた週明け、キンジはいつものように家を出て、今度は何事も無くバスで一般校区まで登校していた。

結局。

あの後も何度かけなおしても、再びアリアが電話に出ることはなかった。

女子寮まで出向いて（アリアが寮に帰っていればの話だが）直接話に行くという手もないでもなかったが、それは断念した。キンジにとっては女子寮など鬼門以外の何物でもないし、しかも彼はアリアの部屋番号を知らない。となれば必然、寮生の誰かに聞く必要が出てくるわけだが、アリアとキンジたちの間にいろいろな噂が出回っている現状では、そんなことをすればどうなるかなど想像もしたくない。

だからキンジはもどかしさや焦燥感を抱えながらも、明日まで待つことにした。幸いというべきか、彼らは学生でしかもクラスメートだ。学校が始まれば嫌でも顔をつきあわせることになる。

そもそも自分の推理自体こじつけの感が強い上に、仮に真実だったとしてもたかが一夜で事態が推移するはずもないという一切根拠のない楽観から、彼は『明日学校で話す』という手を取ってしまった。

それがどれだけ危機感のないことだったのかも知らずに。だからキンジは以降なにもせず今日という日を迎えて。

「はい、それじゃあ今日も一日がんばっていきましょうね」
と高天原ゆとりが教室に入ってきて初めて、そのことに気づいた。
(アリアのやつ……休みやがったな)

右隣の席が空白のままHRが始まったことで、キンジはアリアの欠席を知った。

無理も無い……のかもしれない。あんなことがあって、おまけに昨日の電話では喧嘩別れのような形になったのだから。アリアがすでに卒業分の単位を揃えていたことも、拍車をかけたのだろう。

ちなみに、左隣の席——理子も、来ていない。バスジャックの発生以降、彼女は探偵科インケスタや鑑識科レピビアと共に調査を続けていることを、キンジは知っていた。

(しかたない。放課後、もう一度電話して……それでも出なけりや、諦めて女子寮の方に行ってみるか)

キンジは高天原教諭の連絡事項の通達を聞き流しつつ、机の上で頬杖をついて、そう結論付けた。

その、結論を。

キンジは今日中に後悔することになる。

『Attention please. Departuring passengers——』

俺は、空港内に響くアナウンスを聞きながら、ずり下がった荷物をかるい直した。

国際線ターミナル……より正確にはコンコースと呼ばれるらしいが、とにかくそこは人ごみでごったがえしていた。観光シーズンじゃねえとはいえ、結構いるもんだなあ。

時刻はだいたい7時前。透明なガラスの先に見える発着場では、夜の闇を裂くように飛行機の明かりが煌々と灯っている。ボーディングブリッジが伸びている機体も見えるな。

ついに、着ちまったなあ……羽田空港。

「去年はさんざんだったからなあ。今回は静かに行きてえな」

パスポートと所持金アサルト(強襲科時代に稼いだ分だ)を確認しつつ、俺

は呟く。

これで東京ともお別れ、か。父さんたちにや、まあいずれ連絡するしかねえよな。

しかし、住み慣れた町を離れるというのは、どうしようもなく郷愁の念が沸くな……。

だが、もうこうするしかねえんだ。俺の命と、みんなの命を守るためには。

——俺は、東京を出る。

俺には、例の犯人を捕まえる力量がない。だからといって何の策も講じないままだと、また同じようなことが起きる。

そして、例え教務科に泣きついたとしても、やつらは助けてなんてくれない。武偵高じや、たとえこんな事態になったとしても、2年からは教師は手を出さないようになってる。監督責任はどこいったんだろうな。

このまま手をこまねいたまま退院したとしても、犯人はきつとまた俺を襲ってくるだろう。今度は、バスジャックどころじゃ済まなくなる可能性もある。俺も、そして俺以外の人間も死ぬかもしれない。

だが、俺が東京を離ればどうだ？

俺が病院を出たことを知っているのは、矢常呂先生くらいだ。さらに言えば、ここにいることは誰も知らない。

ならば、この地を発ってしまえば、さすがに犯人も追ってはこねえんじやねえか？ いや、追ってきたとしても、少なくとも武偵高の連中からは遠ざけられる。

そう思った俺は、今こうしてここにいると言うわけだ。

臆病者と呼びたきや呼べ。これは、逃げだ。立ち向かわずに、逃げてるだけだ。

「さて、と……。確か、ここでチケットを受け取るはずだったっけな」

俺はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、メールボックスを開く。

お目当てのメールを見つけた俺は、そこに書かれた文面を読む。

そこには、こうあった。

『例の件だが、7時ごろに羽田空港の国際線ターミナルに向かってくれ。そこでボクの知り合いからチケットを受け取れるようにしておく。郵送の手間が省けるからね。待ち合わせ場所はターミナル3Fの「BLUE SKY PREMIUM」というショップだ。……ああ、それと、ロンドンでの滞在場所の話だが、本当にボクの家でいいよか?』

とのことだった。最後らへんなんか打ちミスしてるが、なにかあったんだろうか?

それはともかく、だ。このメールについて説明しとかなきゃな。東京を出るにあたり、俺はどこに行くべきかをまず考えた。で、思いついたのが武偵の本場、ロンドンだ。今回の件で自分の実力の無さを認識したからな、どうせなんだしこれを機に本腰を入れて武偵を学ぶのもいいかもしれないと思いついた。武偵憲章9条にも『世界に雄飛せよ』ってあるしな……ちよつと違うか。

で、実は去年ローマで知り合った友達の実家がロンドンにあつて、そいつ自身もいまはロンドンにいるらしい。だから俺はそいつに頼んで、そいつん家に泊めてもらえるようにしたんだ。

つーことで、まずは指定された待ち合わせ場所に行こうとしたところで、急に尿意をもよおしてしまった。

出鼻をくじかれたようで少し嫌だが、まあこればかりはしかたない。

俺は周囲を見回してトイレを見つけ出し、さて行こうかとしたところで肩に下げたポストンバッグの存在を思い出す。

「んー……まあ、荷物はそこらへんの椅子にでもちつと置いとくか」
貴重品は自分で持つてるし、どうせ大したモンは入ってないしな。

中まで持つてつてもいいが……めんどいから、いいや。

というわけで俺はトイレで用を足し、外に出て、荷物を取りにいくとして――

「鍊ッー」

「(ビクッ)!!?」

背後から、いきなり声をかけられた。

び、ビビッた……。心臓止まるかと思った。

「つか、誰だよ？　と思ひ振り返ると……。そこにはやたら息も切れ切れといった様子のキンジがいた。

「なんだキンジか……。ええ、キンジ?!　なんで?!　なんでここに
いんの?!」

俺と同じく制服姿のキンジは顎をしたたる汗をぐいつ、とぬぐって
から、

「お前、なんでここにいるんだよ!」

「ああ?　そりゃ、俺の台詞だ。お前こそ、なんでこんなところに
だよ?」

うん、マジでなんで?

俺が本当にわからなかったのでそう聞くと、キンジは一瞬口ごもり
ながらも、

「俺は……。お前と一緒に。俺も、お前がやろうとしてることをやるっ
て決めたんだ」

え、ええ?　俺と一緒にって……。ろ、ロンドン行きのことか?

いや、お前関係ねえだろ。狙われてんのは、俺なんだが。

さっぱり意味がわからない中、キンジは俺に言った。

「それより、お前こそいいのか。そんな身体で。この先はもう、後戻り
できないぞ。後悔、するかもしれない」

「……………」

キンジの問いかけに、俺は口をつぐむ。

後戻りできない……。か。

そうだな。俺がやろうとしてるのは、敵前逃亡だ。ここで逃げ出せ
ば、もう武偵高には後戻りできないだろう。あの鬼教師どもが、そん
な真似許すとは到底思えねえ。

だけど、

「ああ。俺はもう、とっくに決めてんだよ。後悔なんざ、しねえ」

その議論はとっくに通り過ぎたぜ。後悔するかどうかなんて、もう
何度も考えたさ。

俺の決意の固さを読み取ったらしいキンジは、一つ息を吐いて、「……分かった。お前は、そうだよな。なら、もう何も言わない。ところで、錬。お前、どの便かわかっているのか？」

ん？
どの便かわかっている？ どういうこった？

「いや。ロンドン行き飛行機ってことしか知らねえ」

よくわからなかったが、とりあえずそう答えておく。

というか、便名は現段階では本当にわかんねえしな。なにせ、俺はこれから待ち合わせ場所に行つて、そこでチケットをもらうんだから。

するとキンジは頷いて、

「そうか。じゃあ、俺に付いてきてくれ」

と、そんなことを言ってきた。

その発言を俺は一瞬訝るも、すぐに気づいた。

こいつ、もしかして……あいつ——例のローマで知り合った友達——から連絡を貰ったのか？

なるほど、あり得る話だ。あいつなら、俺のロンドン行きを聞いて、キンジに一報を送っても不思議じゃない。まいったな、口止めしとくんだった。

というか、だ。てことは、こいつは例のチケット受け渡し場所への案内人か、あるいは見送りに来てくれたってことか。

いい奴だなこいつ。さすがは元コンビだ。……それにしちやさっきの「一緒なんだ」発言の意味はわかんねえんだけど。

——と、その時、俺は去年少し流行った噂（まあきつかけを作ったのは俺の発言なんだが）を思い出した。

こ、こいつもしや……アツチ系じゃねえよな？

無いとは思うが、こいつが俺に惚れていて、だから一緒について行く……とか、そういう意味、だったりして……？

は、ははは！ まさかな！ そんなことあるわけ——

「こつちだ。急ぐぞ、時間がない！」

ちよっ……!?!

叫ぶと同時に、俺の手を握り引つ張り始めたキンジに、俺は一瞬で全身が総毛立つのを感じた。

ひ、ひいいいいいい!! え、なにマジでこいつそうなの!? ちょちよちよ、勘弁してくれ! ノーマル! 俺、ノーマルだから!

つか、荷物おきっぱなんですけど! 持つ物も持たずに飛行機に駆け込むって、どこの駆け落ちカップル?!

逆だった場合、いったいどんなホモ系の仕打ちが待っているかわからなかった俺は、戦々恐々としながらもなす術もなく引きずられていった。

……アツ!

* * *

(アリア……アリア!)

遠山キンジは、己が持てる全力で疾走していた。

息が苦しい。足が重い。吐き出す息と吸い込む酸素が安定しない。

体に溜まった乳酸が、足枷のようにキンジを止めようとする。しかし彼が、両足の駆動を止めることは決してない。

その目指す先は、羽田空港第2ターミナル。アリアが乗る飛行機が離陸する場所だ。

『タイムリミット』の7時まで、あとわずか。

『可能性事件』っていうのがあるんだよ」

夕陽が照らす、午後6時。

会場にある高級カラオケボックスのような趣をもつ、クラブ『エステーラ』。一般客のみならず、武偵高の生徒もよく立ち寄る、人気店だ。

その一室、アール・ヌーボー調に整えられた個室で、キンジは探偵科インクェスタの同級生・峰理子にそんなことを言われた。

今日の、専門科目が終わった頃。昼休みに一度、アリアに電話しても彼女が応答しなかったことで、帰りのHRが終わり次第女子寮まで直接会いに行こうと決めていたキンジに、1通のメールが届く。

差出人は、峰理子。内容は、「大事な話があるから」とエステーラに

来るよう指示するものだった。

(大事な話……『武偵殺し』関連か?)

と当たりをつけつつ、キンジは放課後、学園島から延びるモノレールに乗って台場まで足を運んだ。

基本的に理子の話を真に受けるとろくなことにならないのだが、前述したとおり理子はバスジャック事件からこっち、一連の事件について捜査を進めている。このタイミングでということならば、いつものようなふざけたものではなく、調査結果の報告である公算が高かった。彼女も武偵である以上、そういう時には意外と真面目にしている。

とはいえ、キンジの中での優先度は無論、アリアの方が上だった。にもかかわらず女子寮行きではなくこちらを選んだのは、もしかしたら確たる証拠が掴めるかもしれないと期待したからである。

仮に今の状態でアリアに会い、自分の推理を話したとしても、彼女がそれを信じる確証はない。ほとんどがただの推論に近いキンジの考えをそのまま伝えたとしても、むしろさらに関係性が悪化する恐れがあった。

結果としてキンジはアリアの方を後回しにして、理子曰くの『大事な話』とやらを聞かされたのだが……、

(『可能性事件』……?)

それなりに高そうな赤い長イスに腰掛けながら、キンジは内心で理子の言葉を反芻した。

と同時に、疑問に思う。それは一体何だ? と。

それが聞こえたわけではないだろうが(聞こえる人間も武偵高にはいる)、キンジの真隣に座る理子は、「くふ」といたずらっ子のように微笑んで、

「キーくんが経験したバスジャックとチャリジャック。そして、それ以前に起きたバイクジャックとカージャック。この4つが一般に知られてる『武偵殺し』の犯行だけだね、実は隠蔽工作でわからなくなってるだけで、本当は『武偵殺し』の仕業だったかもしれないという事件があるんだよ」

「そんなものがあるのか」

キンジは、素直に感嘆を声にする。こんな情報、警視庁のデータベースにしかないだろう。さすがは、『情報怪盗』と揶揄される探偵科のAランクといったところか。

その様子に理子は、妖しく笑みを深めながら、

「でねでね、これがその事件の資料だよ。きつとキンジも驚くと思う」
常にはしない、理子独自のあだ名ではない名前呼び。それにキンジがひっかかりを覚えるより早く理子は、持参していたポシエットから四つ折りのコピー用紙を取り出し——キンジに向けて、それを開いた。

（——ッ!?!）

そこに書かれた一文に、キンジの表情は蒼白になった。

『2008年12月24日 浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一武偵
(19)』

ただ、それだけの一文が、記載された1つの名が、キンジの全てを揺らした。

いくつかの光景が瞬時にフラッシュバックし、体の芯が揺らいだような気さえした。それほどまでに、その名はキンジにとって大きな意味を持っていた。

（兄さん……!）

——遠山金一。

キンジの実兄で、武偵でもある青年。

それも、ヒステリアモードを自在に発現させる方法を編み出し、弱き者をほとんど無償で助ける、キンジにとっても、そして助けられた者にとっても、ヒーローのような存在だった。

だが、彼はもうこの世にいない。数ヶ月前、彼はこの世から姿を消した。

浦賀沖海難事故。

クルージング船・アンベリール号が沈没し、1人の乗客が犠牲になつた悲惨な事故だ。

そしてその1人こそが金一だった。彼は遠山家の信念『義』に従い、

最後まで乗員・乗客を避難させ、その結果逃げ遅れ……結局、死体も上がらず死亡扱いになった。

しかし、金一という代償を払い、事件そのものは解決した——はずだった。

が、乗客からの訴訟を恐れたクルージング会社は、そして一部の乗客やマスコミ、果ては世論さえも金一を責めた。

曰く、「乗り合わせていたにもかかわらず、未然に事故を防げなかった無能な武偵」と。

世間は、遠山金一を悼まなかった。

もともと武偵という存在はいいイメージを持たれてはいなかった。武偵制度の発足自体は十年以上前の話なのだが、犯罪解決に一般人を登用するというこの制度が脚光を浴びることは、滅多にない。

だが、それにつけても、金一に、そして遺族のキンジにかけられた罵詈雑言は、並大抵のものではなかった。

兄の葬式で遺影を持つ自分に群がる記者たちを、キンジは今でもトラウマとして覚えている。あの時、金一と面識があつたことで参列していた鍊に引っぱり出されなければ、どうなっていたか自分でもわからない。

だが、それでもキンジの心には深い傷が残った。12月の始めに起こつたある事件とそれに伴う出来事も相まって、さらに兄まで失つたことで、キンジは酷く武偵という存在を憎み始めた。

そして、キンジは決めたのだ。武偵という道を、自ら閉ざすことを。だから、『アルケミー』も解散した。提案したキンジに、鍊はただ一言「そうか」とだけ返したことを、今でも覚えている。

（『武偵殺し』。お前は、なぜ兄さんを、なぜ俺を、狙つた……！）

兄の事故が実は事件——シージャックだったことを知り、キンジは犯人である『武偵殺し』に激しい憎悪を抱いた。

心が、燃える。黒い炎で、チリチリと。

仲間を、親友を、兄を、なぜ奴は傷つけた——？

と、そんなキンジに、突如理子がしなだれかかった。唐突な彼女の行動に狼狽するキンジに構わず、彼女は柔らかな凹凸を押し付け、甘

い吐息混じりにキンジの耳元でささやく。

「キンジ。このお部屋でのことは、だあーれにもバレないよ？ 白雪はS研の合宿だし、アリアはもうイギリスに帰っちゃうからね。今夜7時のチャーター便で行くって話だったけど……んー、もう羽田だよ、きつと。だから……理子といいことしょ？ くふふっ」

(な、に……!? アリアが、イギリスに帰る!?)

知らされた事実には、キンジは驚愕する。一夜で事態が推移するはずがない、どころの話ではない。すでに、逼迫した状況へと変わっていた。

脳髓から後悔があふれ出す一方で、中枢神経が峰理子という『女』を認識し始めた。

理子の言葉が。

理子の匂いが。

理子の柔肌が。

キンジの理性を突き崩しにかかる。

(ま、マズイ！ ヒステリアモード、に……ッ！)

トクンと流れていた血流が、ドクンツと一際大きくうねる。

そして——なった。

キンジをSランク武偵たらしめていた、そして遠山家の切り札でもある——ヒステリアモードに！

そして。

加速度的に冴えていくヒステリアモードの頭脳が、推理を紡ぎだす。過去と現在、そして未来の事象を一繋ぎにより合わせていく。

バイクジャック、カージャック、シージャック——そして金一の死。

チャリジャック、バスジャック、そして次に来る『事件』と『結果』。

そして遠山キンジはついに、決定的な『確信』を手に入れる。

(クソ……アリアがヤバイ！)

全てを一本の線で繋げたキンジは、自らに密着した理子を、ヒステリアモード特有のキザったらしい言動で退かす。

「あんっ」と小さく声を上げた理子をソファに座らせ、キンジはクラブ『エステーラ』を後にした。

店を出たキンジは、すぐさま走り始めた。理子が教えてくれた羽田空港まで、一直線に。

(急がなければ……アリアが殺される!)

彼をつき動かすのは、どうしようもない悔恨の念だった。

どうして、昨日の夜すぐに女子寮に向かわなかったのか。どうして、アリアの欠席をもっと深く受け止めなかったのか。どうして、理子の方を優先してしまったのか。

忸怩たる思いが、キンジを責め立てる。もしも手遅れになったら、と想像してしまう。

けれども。

この失敗を雪ぐためには、どうすればいいか、キンジはわかっていない。

だからキンジは、それを実行する。

——走れ。

ひたすらに——走れ!

——キンジが部屋を飛び出した後。

キィ、と音を立てて閉まった扉に目を向け——理子は小さく微笑んだ。

* * *

そして。

役者は、集う。

神崎・H・アリア。遠山キンジ。有明錬。——そしてもう一人。

彼らは、世界で最も過激な天空へと。

——集う。

15. そして2人の4世は銃口を向け合う

空港に駆け込んだキンジは、通常モードに戻った（ヒステリアモードはだいたい数十分しか持たない）身体を、息を整えることで休ませる。

が、それも長くは続けない。キンジはすぐに、理子から聞いた情報を元に、アリアが乗っているであろう便——ANA600便・ボーイング737—350、ロンドン・ヒースロー空港行き——を調べ上げた。

そして、すぐさま搭乗口まで向かおうとしたところで——

（え……!?　なんで、あいつがここにいるんだ?!）

視界の内に、キンジは元・パートナーの——有明錬の姿を捉えた。今は病院にいるはずの親友に、キンジは駆け寄って、その背中に声をかけた。

「錬ッー」

呼びかけに反応し、錬はこちらに振り返った。

その顔は、どこか驚いているように見える。驚きたいのは、こちらだというのに。

「お前、なんでここにいるんだよー」

まだ怪我也治りきっていないだろうに、どうしてこんなところまで来ているのか。

……いや、しかしキンジには分かっていた。錬が、ここに来ている理由を。

彼も、来たのだ——アリアを救いに。

「ああ？　そりゃ、俺の台詞だ。お前こそ、なんでこんなところにいるだよ？」

錬の問いかけはきつと、言葉通りの意味ではない。彼がわからないのは多分、「何しに来たのか」ではなく「どうして来たのか」ということだろう。

錬は、知っているのだ。キンジがアリアを嫌い、迷惑していたことを。だから、錬からしてみたら意外なことだったろう。そんなキンジ

が今、アリアのためにこんなところまで走ってきたのだから。

言われて見れば確かに、自分でもおかしいだろとは思いい、キンジはなんと答えたものか口ごもる。

だが、そんな理由、キンジにだってはつきりわかっているのではないのだ。アリアが危ない。ただそれだけが、キンジを突き動かしていた。もしくは、この展開になることを防げなかった罪悪感もあつてか。

あるいは。

別の理由によるものだったのかもしれないが。

「俺は……お前と一緒だ。俺も、お前がやろうとしてることをやるって決めたんだ」

キンジはただ、そう言うだけに留めた。

意味も無く恥ずかしくなったキンジは、誤魔化すように鍊に確認を取る。

「それより、お前こそいいのか。そんな身体で。この先はもう、後戻りできないぞ。後悔、するかもしれない」

「……………」

キンジの問いかけに、鍊は答えずただ無言でキンジを見据える。

だが、それだけでキンジには聞こえた気がした。鍊の、確固たる是の声が。

（目を見りやわかる。鍊は今、自分の行動に一切疑いを持ってない。これが今一番自分がやるべきことだって、そう思ってる目だ）

この眼は去年の1年間で、何度も見た。そして鍊がこういう目をしたとき、決して退かないこともキンジは知っていた。

だから鍊が「後悔しねえ」と言っても、キンジは「お前はそうだな」と、それが当たり前であるかのように返答した。

と、そこでキンジに疑問が生まれる。

「ところで、鍊。お前、どの便かわかつてるか？」

「いや。ロンドン行きの飛行機ってことしか知らねえ」

即答した鍊に、キンジは少し呆れながらも、次いで思い直す。

きつと鍊は、武偵病院にいた連中が見舞いに来た者たちの誰から、アリアが今日イギリスに帰るという噂を聞いたのだろう。アリア

は（自分は知らなかったが）かなり知名度があるらしい。情報規制したわけではあるまいし、どこかから噂が広まったとしてもおかしくなかった。

そしてその噂を聞きつけた鍊が、一も二もなくここまで来た、といったところだろう。

キンジはそれではと鍊を先導する旨を伝え、彼の左腕を掴む。右肩を撃たれていたことを、咄嗟に思い出したからだ。

「こつちだ。急ぐぞ、時間がない！」

急かすように言つて、キンジは走り出した。

搭乗口に向かうその途中、キンジはそういえばと思いつく。

（兄さんの葬式の時は、俺がこうやって鍊に腕を引かれたっけな……）引つ張り、引つ張られ。思えば、自分たちはいつもそんな関係だったような気がする。

今はもう、ずいぶん変わってしまったけれど。

せめて今だけでも、あの頃に戻れたらと、キンジは僅か願つた――

* * *

えー、みなさん聞いてください。

なんか……うちのキンジがトチ狂ったんですけど。

今俺たちがいるのは――なんだっけ。名前は忘れたけど、なんか『空飛ぶリゾート』とか呼ばれてるセレブ御用達の豪華旅客機の機内だ。ちなみに、この飛行機は2階構造で、今は1階にいる。

キンジに腕を引つ張られ（さすがに途中で離してくれたが。実に怖かった）、ハッチが閉じられる寸前で飛び込んだはいんだが、なんかキンジの奴いきなり近くに居たフライトアテンダントに離陸を中止するように命令しました。

……ど、どういうことだろう？ 結局待ち合わせ場所には行かなかったし、そもそもフライトを止めろつて。俺がロンドンに行けなくなるんですが。

とかなんとか思ってる内に、飛行機が動き始め、キンジに言われ機長のところへ行つたアテンダントが帰ってきて、今更離陸は止められないと言つてきた。まあ、そりやそうだろう。

「ば、バツカヤロウ……！」

キンジは一度怒鳴ってから、「どうする」と自問自答を始める。

だ、大丈夫か？ こいつ。つーか、こいつホントになんで相乗りしてんの？ お前も来るのか、ロンドン。

なんかだんだん雲行きが怪しくなってきた気がしてきた。主に、今すぐここから逃げた方がいいような、そんな感じだ。まあ、今更それは無理なんだが。

とりあえずまずは錯乱している友達をなだめることから始めよう。

「落ち着け、バカ。もつとよく考えろ」

そう。今お前が、はたからみてどれだけヤバイ感じか考えてみる。

いきなり飛行機に乗り込んで「離陸を中止しろ！」とか意味わかんねえだろ、それ。たとえ武偵とはいえ、下手すりや捕まるぞ。武偵3倍法が怖くないのか。

俺が諫めると、キンジは神妙な面持ちで頷いて、

「……そうだな。お前の言うとおりだ。後手に回った以上、作戦を変えなきゃな」

うん、だからね？

俺が言ってるのはそういうことじゃなくて……って、作戦ってなんだよ？

「この機内に、神崎・H・アリアってやつがいるはずだ。そいつの部屋に案内してくれ」

「は、はい……」

だんだん俺にはさっぱり把握できなくなってきた状況で、キンジはアテンダントにそう頼んだ。

って、アリア？ え、なにあいつも乗ってるの？ なんで——まさか。

『うるさい！ あたしだけを見てくれない錬なんて、いらない！ あたしだけ、あたしだけを見てよ！』

や、ヤン崎・D・アリア、か……!?

やややややべえ。ヤンデレを舐めていた。まさか、こんなところまで追ってきたのか……!?

……ん？ でも、待てよ？ 確かあいつは、俺に失望したんじゃないか？

「はてこれは一体どういうことだろうと内心で首を捻っていると、
「こ、こちらが神崎様のお部屋になります」

……いつの間にか、アリアの部屋（らしい）に着いていた。

あれー!? 俺、無意識の間についてっちゃまったのか?!

「よし、行くぞ鍊」

「ちよ——」

——つと待つてと言う暇すらなく、キンジは扉を開けてしまう。

はたして、赤紫色の瞳を驚きに見開き俺たちを迎えたのは、

「な……あ、あんたたちなんでここに?!」

俺たちもよく知る、『双剣双銃のアリア』様だった。

* * *

……な、なんでこうなったんだろうな。

今、俺とキンジとアリアの3人は2階にあるアリアの客室でそれぞれ座席についている。プライベートの個室に4つの座席。金持ちが乗る飛行機つてのはすげえな。

そして、俺はなんでこんな飛行機に乗ってんだ？ あいつの話じゃ、俺エコノミーのはずなんだけどな。「ビジネスクラスにするかい?」とか提案されたけど、断ったから。

……ああ、そうか、キンジが俺を引っ張ってきたからここにいるのか。んで、ついさつきアリアとごちやごちや言い合って、結局離陸だからって3人仲良く……はないが、着席したんだっけな。

……まあ、いつか。もう。状況はさっぱり飲み込めねえが、とりあえずロンドンには着くつぽいし。

この切り替えの早さは、どう考えてもこの2年で鍛えられたモンだな、と感謝すべきかどうか悩みどころな点について考えていると、
「……鍊。あんた、怪我は大丈夫なの?」

と、アリアがそっぽを向きながら訊いてきた。

なんか、こいつ機嫌悪いんだよな、さつきから。まあ、多分俺のせいだろう。俺なんかの顔、見たくもなかっただろうしな。

少し落ち込みながら、俺は返す。

「まあな。別に、たいしたこっちゃねえよ」

「そ、そうっ」

適当な返答に、アリアは依然顔を向けずに言った。なんか、微妙にほつとしてみたいな声色だったが。

あ、別に俺が言ったこと、嘘じゃねえよ？ 思いつきり押さえたりしなきゃ、痛みを感じないんだよな、なぜか。どんな治療されたのか、なかなか怖いところだ。

ま、その代わり満足に動かせねえんだが。

『——お客様に、お詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が30分ほど遅れることが予測されます——』

おっと、機内放送だ。

台風か。そういやニュースでやってたな。

と、そんなことをのん気に考えた瞬間、

ガガアアッ！ と。稲光と共に、雷音が轟いた。

「ひうつ!？」

「怖いのか」

「こ、怖いわけないっ!」

雷に反応してビクつくアリアを、キンジがからかう。殺されてもしらんど、俺は。

しかし、こいつ雷が苦手なのか。意外だな。

そういや、ルームメイトの天真も雷……っつか、雨がキライだったっけ。まあ、今は大丈夫になったとか言ってたが。今頃、あいつどうしてんのかな？

と、再び雷が落ちた。

瞬間、アリアは席から飛び上がり、ベツトに潜り込む。

「アリアー。替えのパンツ持ってるか？」

よし。向こうに着いたら、キンジをセクハラの容疑で通報しよう。よかったな、イギリスの新聞に載れるかもだぜ。

「き、キンジ！ 錬！ あああんたたち、こっここつち来てもいいわよ！」

毛布から頭だけだして、アリアは「こつち来い」と命令（解読するところなる）した。

……しゃあねえな。

キンジと2人、座席から降りてアリアを挟むようにベツトに座る。これは、決して心配になったからとか、そんなんじゃない。ただ、俺は命令無視で撃たれるのが怖かったただけだ。断じてな。

アリアは、俺たちが腰を下ろすと同時、服の袖を掴んできた。

おいおい、マジでそんなに怖かったのかよ。

思わぬアリアの弱気に調子が狂う俺を尻目に、キンジは気を紛らわせろとテレビを点ける。モニターの中では、キンジの先祖とか言っていた遠山の金さん——遠山金四郎の時代劇が流れていた。

……ま、だからどうってわけでもねえんだが。

やることもないんで、ぼーつとそれを見ていると、

突如、銃声が響いた。

……………銃声ですと?!

「ッ！ 錬！ ここでアリアを護れ！」

「ッ?! おいキンジ！」

俺が呼び止めるも、キンジは銃を抜きながら部屋を出て行った。

アリアを護れ？ どういうこつた？ そもそも、今の銃声はなんだ？

混乱の真っ只中にいる俺を、アリアが叱責する。

「錬！ 状況がよくわかんないけど、行くわよ！ あんたに護られるほど、あたしは弱く——」

「……………おい、どうしたよっ！」

「な、なんでもない。今度は、護ってもらわなくても、いい！」

よーわからんやつちゃな。何言ってるんだらうね。

しかし…………どうやらまた、やつかいごとみたいだ。運悪く、偶然ハイジャックに巻き込まれたってところか？

しゃあない…………乗りがかった船、つつーか乗ってる飛行機だ。キンジたちもいるし、少し頑張るかね。

俺は念のために（俺の間の悪さを考えれば、こういう事態はあり得

なくなかったしな)携帯していたグロック18Cを抜きながら、アリアと共に通路に出る。

そこでは乗員や乗客が混乱状態でがやがや騒いでいて……その中にキンジの姿があった。

キンジの視線を追うと……なんだ、あれ。さつき案内してくれたアテンダントが、なんかおっさん2人(見た目パイロットだけど、違うよな? 誰か違うと言ってくれ)を引きずっていた。

そして、キンジが制止の声とともにアテンダントに銃を向けたとき——彼女が、言った。

「Attention Please. でやがります」

——そ、の口調は……!」

俺がこの数日間でもっとも耳に残った語尾を聞いた刹那、アテンダントが何かを投げた。

——が、知ったことか。

「テメエ!」

俺は、アテンダント目掛けて走りだす。

こいつだ……こいつが、俺を狙いやがった犯人だ!

こつちからは絶対見つけ出せないと思っただが、まさかこんなところまで俺を追ってきやがるとはな。

だが、これは千載一遇のチャンスだ。あいつは見たところ武装していない。これなら、俺でも勝てる……!」

アテンダントが投げた缶のようなものが地面に転がるのを尻目に、俺はさらに突っ込んでいく。

走る俺の耳に、何かが吹き出るような音が聞こえる。と同時に、通路内に煙が広がっていった。

そうか、さつき投げたのは発煙弾か!

馬鹿が! なんのつもりかしらねえが、んなもん意味ねえんだよ!

「おおおおおっらッ!」

俺は、アテンダントに向かって強襲科仕込みの飛び蹴りを仕掛ける。銃だと、防弾製の服じゃない場合、9条——武偵活動中の殺害禁止——破りになる可能性があるからな。

アテンダントは両腕をクロスさせて俺の一撃を防ぎ、しかし衝撃は殺せずに後退を余儀なくされた。

顔を苦痛に歪め、それでもなおアテンダントは憎々しく笑う。

「さっすがあ……。ガス缶と勘違いして動揺させるつもりだったんだけど、一瞬で偽物だつて見抜くなんてね……」

「フン。くだんねえ真似してんじゃねえよ」

ガス缶だあ？ なんもんがなんの役に……。え、がががガス缶!? 発煙弾じゃなくて?!

ちよつと待つて! それつてあれだろ?! 有毒物質たつぷりのとんでもねえガスを撒き散らす極悪武器だろ?!

やべえええええええええ! 俺、死んだ……、

「……………」

……つて、あん? 今コイツ、偽物つったか?

ふ、ふざけんな! なんだよ脅かせやがって!

この野郎、マジでブン殴つて——

「——じゃ、今度はこつちだよ」

俺が左拳を握り締めると同時、アテンダントが再び何かを放り投げた。

それは、あつさりと床に接触し——直後、強烈な閃光と轟音を撒き散らした。

「ぐッ……………」

ヤロ……スタングレネードか?!

視覚と聴覚の回復を待ちながら、俺は考える。

攻めてこない……つてこた、攻撃用の使い方じゃねえな。

スタングレネードには、いくつか使い方がある。例えば、攻撃用なら対象を失明させたり耳鳴りを起こさせて混乱した隙に攻撃する。

今あいつが使った用途は、逃走用だ。閃光で姿を、轟音で足音を消したんだ。

「錬! 無事か!」

「ま、なんとかな……」

バカな俺とは違ってちゃんとガス缶であることを見抜いたキンジ

とアリアは、隠れていた部屋から出てきて、俺の無事を確認する。

俺は五感がだんだん回復してきたことを確かめつつ、2人に返す。先走ってごめんなさい。

「クソ、ダミーのガスか。やられた……！」

「そう気い落とすな、キンジ」

俺なんて、ガス缶って思いつきすらしなかったんだぜ？

「……悪い、切り替える。——それよりも、あいつだ。あの喋り方……

『武偵殺し』だ」

「そうね。間違いないわ」

「だな」

キンジ、アリアに続き、流れて俺も答える。

クソ、『武偵殺し』の野郎、なんだって……『武偵殺し』?! え、マ

ジで?! あいつそうなの?!

……って、なんか今日の俺驚いてばっかじゃね？

ま、まあいいや。しかし、なんだってそんな大物が俺を狙ってんだ

? 別に高名な武偵ってわけでもねえのに。

だってのに、これで3回目だぞ。

「つたく、しつかけ野郎だな、おい。まだ狙ってきやがるとはな」

「同感だな。……まあ、それも今回限りだろ。今回はなんとって、直接

対決なんだからな」

ん? そりゃ、どういうことだ?

と、聞き返したかったんだが、

「どういう意味よ、キンジ！」

アリアに台詞を取られてしまった。

えー……ひでえ。

とかなんとか思っていたら、

「あ、あの、何があったんですか……?」

と、近くにあった部屋の扉が小さく開き、中から乗客であろう女性が尋ねてきた。

俺はちらりとキンジたちの方を見やる。話に夢中になっているのと、女性の声が小さかったこともあり、こつちには気づいていない。

はあ……しやあねえな。

とりあえず俺は自分が武偵であることを伝え、騒がないようにして部屋に籠っていて下さいと半ば強引に説得した。まあ、多分バレてるだろうけどな、ハイジャックって。騒ぎださない聡明な人でよかったです。

で、俺がキンジたちの下へ戻ると、会話は終わっていたらしいので、

「話は、終わったか？」

俺は念のため、確認してみる。

するとキンジはやたらと覚悟を決めた顔で頷き、

「そう焦るな、錬。まずはあいつの居場所を探らなきゃ、始まらない」

あれ？　なんか急かしてるみたいに捉えちゃった？

と、

ポポーンポポーン　ポポーン　ポポーンポポーン……

ベルト着用サインと共に注意音が、長短の音を発しだした。

ふーむ……。

「なるほどな」

——さっぱりわかんねえ。

自分でもなにか「なるほどな」なのかわかんねえよ。

「……誘ってやがる」

「上等よ。風穴あけてやるわ」

え、お前らわかったの？　すげえな。

後でこっそりキンジに教えてもらおうと思いつつ、俺は移動を始めた2人についていった。

* * *

「どういう意味よ、キンジ！」

神崎・H・アリアの詰問に、遠山キンジは一つ頷いた。

そして数瞬脳内で話すことをまとめてから、順序立てて説明を始める。

「アリア、よく聞け。『武偵殺し』はバイクジャック、カージャックで事件を始めて——さつき分かったんだが、シージャックである武偵を仕留めた。そしてそれは多分、直接対決だった」

前半は、理子から聞いた話。後半は、ここにたどり着くまでに、キングが新たに推理したことである。

アリアはそれに小首を傾げて、

「なんでそんなことわかるの？」

「お前、シージャックのこと知らなかっただろ。それは、遠隔操作の電波がその時だけ出てなかったからじゃないか？」

「ッ！　じゃあ——！」

「ああ。遠隔操作しなかったってのはつまり、その必要が無かったからだ。なぜならその時、やつは現場にいて、自分で起爆できたんだ」
「そもそも、ずつとおかしいと思っていた。」

あの兄が……遠山金一が、逃げ遅れて死亡なんて結末を迎えるはずがないと、キングはずつと思っていた。当時こそいろいろあつて考えなかったが、今ならわかる。

遠山金一は、シージャックにおいて、『武偵殺し』と戦った。そこで、敗北した。あるいは、戦っていたから逃げ遅れた。

きつと、真実はそういうことなのだろう。

(あの兄さんが、負けるとは思えないが……)

思うところはあつたが、それは過去の話だ。今はもつと、語るべきことがある。

「それで、その現場にいた武偵と直接対決したつてわけね……。でも、じゃあ、今回もそうだつていう根拠は？」

「ヤツの犯行はバイク・自動車・船と大きくなっていった。が、その次に来たのは自転車だ。その次がバス」

「！　それつて……！」

「ああ。リセットされたんだろうぜ」

「いいか、とキングは繋げて、

「かなえさんへ罪を着せたのは、たぶん宣戦布告だ。お前は今、あいつの犯行法則に従う3件目で、直接対決を仕掛けられてるんだ。この、ハイジャックでな」

「……………」

告げられた真実に、アリアは口をつぐむ。

無理もない、とキンジは思う。要するにこれは、かなえをエサに使われたということなのだから。

だから、心苦しく思うのはしかたない、とキンジはそう思う。だが。

「——いい、度胸じゃない」

神崎・H・アリアはそこで終わらない。

悔しい。申し訳ない。悲しい。そういう感情は、ある。確かにあるが、それをアリアは活力への燃料へと変えた。

強く輝く赤紫色の瞳に、キンジはアリアの芯の強さを見た。

が、唐突にその瞳に、揺らぎが混じった。

「……ねえ、キンジ。もしかして、昨日キンジが電話してきたのって……」

「あ……そ、それはもういい。今は、『武偵殺し』を逮捕することに集中しろ」

「……わかった」

頷いたアリアは、一つ決意する。

『武偵殺し』を捕まえる、理由が増えた。ママのためだけじゃない。あたしのためだけじゃない。——2人に、「ありがとう」って、「ごめん」って、言えるように）

だから、

「——『武偵殺し』を逮捕するわよ、キンジ」

「——おう」

* * *

さつきこの飛行機は2階建てだと説明したが、その1階には実はバーがあったりする。

で、どうやらキンジたちが目指したのはそこらしく、俺たちがバーに踏み入ると……室内を仄かに照らすシャンデリアの下、一人の女——さつきのアテナントがカウンターに座っていた。

そしてなぜか、武偵高の制服、それも理子みたいなやつらフリルのついたやつを着ていた。

……き、きつついなあ。なまじ『出来る女』みたいな感じなのに、こ

のコスプレはちよつと痛々しいぞ。

俺は若干引き気味に、キンジたち同様彼女に拳銃を向ける。

「今回も、キレイに引つかかってくれやがりましたねえ」

あの例の喋り方でそう言つて、彼女は立ち上がり、こちらに振り返る。

そして、顎の下あたりに右手を持つていき——

ベリ……ベリベリ……と、『顔』を剥いでいく。

おいおい……変装マスケかよ。

てこたあ……、

「——理子?!」

「Bon soir. キンジ」

——こういう展開も、あるつてことか。

マスクの下から溢れ出た、ハニーブロンドのツーサイドアップテール。それを持つ少女を、俺は知っている。

峰理子。それが彼女の名前だ。

理子みたいっつーか、理子の服だったわけか。

クソツタレ。よりにもよつて、こいつが俺を狙つた犯人かよ……。

きつい、な。仲間が敵だったつてのは。

……でも。

なんでだろうな。なんか、思つたよりも怒れねえや。

もちろん、一連の被害に対する恨みはあるが……どうにも、それが一瞬で薄れていった。

犯人があいつなら……結局、誰かが死んだりするような展開には、ならねえような気がするんだよ。根拠はねえんだけど。

と、理子はカウンスターの上に置いてあつたカクテルグラスを手に取り、ふちにちよんと一回口をつけ、

「アタマとカラダで戦う才能つてき、けつこー遺伝するんだよね。武偵高にも、お前たちみたいなの——あつと、鍊は除くよ? いくら調べ

ても、全く大した血筋じゃなかったんだもん。でもね、キンジとアリアみたいに遺伝系の天才は結構いる。だけど……お前の一族は特別だよ、『オルメス』」

「な……っ!?!」

理子の言葉に、アリアは目を見開いた。

……オルメス? なんだそりや?

「あんた、一体何者……?」

アリアが、両目を眇めつつ、理子に尋ねる。

彼女はそれを面白そうに見返して、

「理子・峰・リュパン4世——それが理子の本当の名前」

な、に……?」

理子の名乗りにも、俺は思わず声を出していた。

「リュパン……って、あれか? フランスの大怪盗『アルセーヌ・リュパン』のことか」

「そーだよ。でもね、それはそれなんだよ、錬。あたしは、リュパン4世である前に、理子だ。4世なんて名前じゃない。……なのにね、みんなこう呼ぶんだ。4世、4世、4世さまあー、ってね。みんなみんなみーんな、そう呼ぶんだよ」

「そ、その何が悪いのよ……4世の何が悪いってのよ?」

俺と理子の会話にアリアが割り込んできた——瞬間、

理子がキレた。

「——悪いに決まってるだろ! あたしは数字か?! DNAか?! あたしは理子だツ! 数字じゃないツ!」

こ、怖えー! マジギレじゃねえかよ、おい!?

あまりの迫力にも何も言えなくなる中、理子の激昂は続く。

「曾お爺さまを越えなければ、あたしはあたしじゃない、『リュパンの曾孫』として扱われる。だからイ・ウーに入って、この力を得た。この力で、あたしはもぎ取るんだ——あたしをツ!」

「待てよ、理子。いろいろわからんことが多いが……『武偵殺し』は、本当にお前の仕業なのか?」

「……キンジイ、疑り深いのは武偵としてはいいことだけど、この状況見ればわかるよねえ? あれは、本命のアリア——オルメス4世を斃たおすためのプロローグだよ」

……あれ? 今、さらつとアリアが本命つつつた?

「……………じゃ、俺は？」

「曾お爺さま同士の100年前の戦いは、引き分け。だったらあたしがオルメス4世を斃せば、つまりあたしは曾お爺さまを越えたことになる。そのために初代オルメスと同じように、アリアのパートナーとして、キンジがくつつくようにしたんだよ？　キンジの自転車に爆弾を仕掛けたり、キンジの時計をイジってバスジャックに向かわせたり、ね」

「な、なんだそりゃ？　そりゃ、違えだろ。100年前のリユパンと理子は違うように、100年前のオルメスとかいう奴も、アリアとは違う。だから今のリユパンが今のオルメスを斃したところで、理子が曾お爺さまとやらを超えたことにはならないはずだ。」

「……………と思うんだが、言っても無駄だろうなあ。経験上、こういう奴に理詰めでも感情が上回るもんだから。」

「……………というか、な。じゃあ俺、マジで関係ねえじゃん。てつきりずっと俺が本命だと思ってたのに、どうすりゃいいんだ。俺、高飛びまでする気だったんだけど。なにこの醜態。」

「何もかも、お前の計画通りってことかよ……………」

「んーん、そうでもないよ？　アリアとキンジがこうもなかなかくつつかないとは思わなかったしねえ。……………でも、なによりの誤算は——お前だよ、鍊」

「予想外の事実には俺が心中でうなだれる中、理子に水を向けられた。」

「俺がどうしたって？」

「……………どういうことだ、そりゃ？」

「お前を巻きこむ気はなかったってこと。ホントは初めのチャリジャックにしたってキンジだけを狙うつもりだったのに、なんか勝手に巻き込まれだしちゃうし。放ってたら絶対邪魔されるだろうから、一緒に脅しかけたんだけど……………結果的に、そのせいで鍊までアリアに目をつけられるようになったのは、本当に計算外だった。今だから教えてあげるけど、あたしはお前だけは絶対に敵に回したくなかった」

「……………へえ。なんでだ？」

「……………レンレン、『08AS—356』事件を覚えてる？」

理子の口調が戻った。過去の話だから……か？

『08AS—356』事件つつつたら、あれか。まだ理子が強襲科だったころ、俺と組んでやったミッションか。

08は2008年を、ASはアサルトを、356は356番目の事件を表す符丁^{コード}だ。つまり、去年356番目の強襲科生限定のミッションってこった。

俺とこいつが強襲科同士として組んだのは、後にも先にもそれだけだったから、覚えてる。

「覚えてんが……それが、なんだってんだよ」

「理子ね、あの事件のときまで、レンレンは底抜けに仲間に優しい、でもそれだけだっと思ってたの。……でも、違った。理子は、あの時わかつちやった。仲間にはどこまでも優しいってことは、裏を返せば敵にはどこまでも敵しいってことなんだって。だから、理子はレンレンを敵に回したくなかったの」

……え、ええ？ あれって、そんな事件だっけ？

なんか思い違いしてんじやねえか、こいつ？

「でも、もうしかたないよね。こうなっちゃった以上、理子とレンレンはもう——敵同士、なんだよ」

理子は一度顔を伏せ、次にキンジに顔を向けた。

「そして、キンジも敵。だけど、キンジならわかるよね？ 理子とキンジは、アリアを介した敵じやない。もっと明確で、もっと強力な『理由』があるよねえ？」

「ッ！ 兄さんか……！」

「ピンポーン、だーいせいーいかーい！ お兄さんをやったのはあかし。そしてね、キンジ。今あなたのお兄さんは……理子の恋人なの」

「いいかげんにしろッ！」

理子の言葉に、キンジはベレッタを怒りに震わせる。

っのバカ！ どう考えても挑発だろ！

「キンジ！ 理子はあんたを挑発してるわ！ 落ち着きなさい！」

アリアの叱咤もどこ吹く風、キンジは完全に頭に血が上ってる。

——と、その時飛行機が揺れて、

銃声が一発。キンジの銃が、破壊された。

撃つたのは理子。あいつの手には、いつの間にかワルサーP99が握られていた。

できりや、敵方としちゃ、その銃はもう見たくなかったな。
イグザミネーション
入学試験を思い出す。

「ノンノン、ダメだよキンジ。今のキンジじゃ、戦闘の役には立たない。もっと頭を使って、アリアにヒントを与えるような活躍をしなきゃ」

からかうように理子が言って。

瞬間、アリアが飛び出した。

得物は二丁拳銃。アルカカタか！

確かに、アリアのガバメント二丁と理子のワルサー一丁なら、装弾数は互角になるから、悪い選択じゃない——が、

「アリア。二丁拳銃が自分だけだと思っちゃダメだよ？」

理子がもう一丁、スカートから拳銃——ワルサーを引き抜く。これで、装弾数は理子が勝った。

だが、もう止まらない。アリアはさらに距離を詰め——超近距離での撃ち合いが始まる。

踊る。踊る。アリアのツインテールが、理子のツースイドアップテールが、円舞曲のように揺れ動く。

互いを狙う射線を、互いが上手くかわしながら、壁に床に、銃弾を撃ちこんでいく。ゼロ距離での近接拳銃戦。余人が介入できない、まさに死闘。

俺とキンジは手が出せない。今手を出せば、アリアにまで被害が及ぶ可能性がある。

だから、今は——そう、今は無理だ。

「——はっ！」

その時、ガバメントが弾切れを起こし、しかしアリアが理子の両腕を抱え込んだ。

——ここだ！

「あんたたち！」

つつても、理子が素直にそれをさせてくれるか……？

「……………」

……しようがねえ。ここは、心苦しいがキンジに足止めしてもらいつつ、俺がアリアを手当てしよう。実力的にもそれが妥当なはずだ。さっそく提案しようとする俺に、キンジが先手を打つように言った。

「……悪い、鍊。任せていいか？」

お？ なんだ、こいつも同じこと考えてたのか。

俺は、それなら話が早いと力強く答える。

「バカ、当たり前だろうが。現状、それが最善の方法だろ。……お前こそ、しくるなよ？」

足止め役、しつかりやりとおしてくれよ？ しくじられたら、こっちの手当てする時間がなくなるからな。

キンジは一度首を縦に振り、

「わかってる。ちゃんと上手くやるさ。すぐに、片をつける」

おいおい……この強気な台詞、足止めだけじゃなく、倒す気かよこいつ。

あれか。これが俗に言う「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」というやつか。見直したぜ、おい。

よし、こうなりや俺も責任もって手当てしねえとな。

俺は、キンジに向かって頷いてみせる。

さあ、準備は整った。早く、アリアをこっちへ！

「すまん！ 頼んだぞ、鍊！」

キンジは全てを託したとでもいうように、俺に告げて、アリアを抱えて、バーから走り去っていった。

「……………」

……走って行ったね、キンジ君。

……アリアちゃんも、連れていっちゃったね。

……理子ちゃんと、2人きりにさせられちゃったね。

「あつれー？ やっぱ鍊が残るのかー。まあ、そうだよねえー、じゃあこっちも——本気で行くぞ」

すごい気合入った理子の声に顔を向けなおせば、すごい気合入った理子の顔があった。

それを見て、俺は思った。

——あ、俺が理子こっち？

16. あるいは運命のような再戦

「アリア——帰ってこい！」

願いを込めた一声と共に、キンジはアリアの心臓に注射針を突き刺した。

——『R a z z o』。

それが、今アリアの心臓に流れ込む復活薬の名前だった。

——錬に足止めを頼んだあの後。キンジは側頭動脈を切られたアリアを連れて、彼女の部屋までとってかえしていた。そして、ベットに横たえて間もなく止まったアリアの鼓動を蘇らせるため、キンジは武偵手帳から取り出したラッツォを打ち込んだのだ。

その効果は絶大だったようで、アリアはやがて意識を取り戻した。その時、ラッツォを打つために服を脱がしたことにキレられたり、ラッツォが持つ興奮作用でアリアは单身理子の下へ突撃しようとしていたり、いろいろあったのだがここでは詳しく語らないでおく。アリアの尊厳的に。

とまれ、未だ興奮状態が続き、キンジに喚き始めたアリアをどう宥めるべきか、キンジは焦っていた。

両手は暴れるアリアの二丁拳銃を押さえるために塞がっていて、使えない。口で言っても、きつと黙らない。遠山家の隠し技で強制的に黙らせるという手もあるが……それでは意味がないし、そもそも女の子相手に使うような技じゃない。

となると——

(ああ……絶対、あのモードになっちまうだろうな)

たった一つ、思いつく。アリアを静かにさせる方法を。

こんな方法しか思いつかない通常モードの頭を呪いながら、今も理子をくい止めてくれている親友を想いながら、

兄を破滅させたあのモードを頭に浮かべながら、

——キンジは、アリアにキスをした。

* * *

あーあ……なんだって俺は、いつもこんな損な役回りばっかなんだ

よ……。

そんなことを思いつつ、俺はホルスターからグロックを抜いた。

「錬と戦^やるのは、これで2度目だね」

「……だなあ。あん時あ、こんなことになるなんざ、思っちなかったよ」

余裕のつもりか軽口を叩く理子に、俺も返す。こんなところまで、入試ん時と一緒にやねえか。

もつとも……結果はまた違うだろうけどな。

ゴリゴリと銃床で頭をかく俺に、理子は「くふふつ」と笑んで、「それはあたしも同じだよ。さつきも言ったけど、あたしはお前までこのステージに引っ張り出すつもりはなかった」

「だったら、見逃して欲しかったもんだな。こうして武偵と犯罪者として向き合っちまった以上は、戦るしかねえだろ」

本当は、めちやくちや嫌なんだが。こいつ、なんで強襲^{アサルト}科辞めたのかわからんくらい強いし。ただ、見逃してくれそうな雰囲気じゃねえんだよなあ。

げんなりする俺に、理子は一度目をつぶり、

「そうだね。あたしとお前は、もう敵同士なんだから。……それよりも、肩の怪我はどうなった？」

「矢常呂先生の腕は知ってたんだろ？ ま、満足に動かすのは無理だけどな」

つか、やったのお前だろ。なんでんなこと訊くんだ？

心配してる……つてわけじゃ、ねえよな。

「そう。じゃあ——遠慮は、いらないよね？」

ニイと口元を歪めながら、理子は言った。ほらみろ。

……はあ。しゃあねえな、もう。これは、どうあっても止まらない。戦るしか、ない。

——つと。

「戦るのは構わねえが……その前に、一個聞かせろ。お前、なんでこんな手段を取った？ こんな、不意打ちみてえな、よ」

自転車をジャックしてみたり、バスをジャックしてみたり。あげく

の果てにや、飛行機までジャックして、一般人も武偵も関係なく巻き込んで。

お前なら、真正面から戦ったって、勝てるかもしれねえのに。ましてや、お前が超偵——超能力ステルスと呼ばれる『不思議な力』を扱えるってんなら……正直、正々堂々戦ってたとしても、Sランクのエリアでもやばかったかもしんねえ。

それとも、なにか他に理由があるのか……？

「はあ？ 不意打ちってなーに？ 錬って、今までの武偵人生で誰にも不意打ちされなかったの？ うつらやましいー！」

「それとこれとは話が別だろ。お前の狙いから言えば、もつと正々堂々とすりゃいいじゃねえか」

俺は、茶化すような理子の台詞を、あつさりとぶった切る。

そう。理子のやり方は、おかしい。

よくは分からんが、先祖を超えたいっていうんなら。それを本当に証明したけりや、掛け値なしの真剣勝負じゃなきや、意味ねえだろ。

という意味で、俺は実に正論を言っちゃったんだが、

「ッ！ お前に何がわかる！ あたしにはもう、そんな余裕ないんだよッ！」

「ッ!？」

ええ?! そ、そこまでキレんの!？」

今までとは打って変わっていきなり激怒した理子。そんなになるほど、その『証明』とやらは切羽詰まってるのか？

いやいや、待て待て。いくら切羽詰まっても、こんな手を使っつていいはずがねえ。

理子は、実は犯罪者だったとはいえ、今まで武偵——つまり、仲間だったんだ。

なんかか思いとどまるように説得しないと。

「……俺は、お前が何をそんなに焦ってるのかはしんねえけどな。これだけは言える。お前は——間違ってるんだよ」

「ッ！」

「こんなやり方、いいわけねえだろ。お前だって本当はわかってんだ

ろ？　こんなやり方に意味がねえことくらい」

「……そんなこと、お前に言われなくてもわかってる。でも、しょうがないじゃん?!　あたしにはもうこの道しか残されてないんだからッ！」

理子は、ここにはいない誰かに訴えるように叫んだ。

俺には、あいつが何を抱えていて、どんな事情があるのかはわからない。

それでも、俺にはなんだかあいつが無理をしているように見えた。これは俺の願望かもしれないけれど、本心から望んでいるわけではないように見えた。

だったら俺は、分かったような振りをしてでもあいつを止めたいと、そう思う。

峰理子が犯罪者で、有明鍊が武偵だからじゃなく。

峰理子が、有明鍊の友達だから。

それに、

「いいや、まだお前は戻れるはずだぜ。思い出せよ。お前はまだ、誰一人殺してねえだろ。じゃあ——お前は、まだ戻れる」

そう。理子は……『武偵殺し』は、俺が知る限り、誰一人として殺めていない。

これは、中学時代に特別講演に来た元軍人の人の受け売りだが。

「人が人に戻れなくなるのは、誰かを殺した時だ」。そう、言っていた。その意味で言えば、理子はまだやり直しがきくはずなんだ。

……いや、まあ。俺がそんな偉そうなこと言っても、説得力がねえんだけどな。殺すとか、怖すぎてやれつつわかれてもできねえし。

理子は俺の言葉に何を思ったか、その端整な顔立ちを歪めて、

「……結果論だ、そんなのは」

「そうだな、結果論だ。……でも、事実だろ?」

「……………」

ありや、黙りこんじまった。

……しゃあねえな。

「わかったよ。お前がどうしても戻れないって主張するなら、もう俺

はこれ以上は何も言わない。その代わり——止めるぞ。口で言つて止まらねえつて言うんなら、そんぐらい譲れないものがあるつてんなら、俺は力づくでもお前を止める。こんなふざけた真似は止めさせる」

「……やってみなよ。お前が立ちほだかつたつて、あたしがやることは変わらない。やれるもんならやってみろ」

「ああ……やるさ」

それがきつと、友達つてもんだろ。なあ、理子？

——直後、

シャンデリアにライトアップされたバーに、発砲音が響き渡った。

* * *

峰理子が有明鍊との会話に応じたのは、当然ながら単なる気まぐれなどが理由ではない。

ただ、わかつていただけだ。目の前にいる男——有明鍊が時間稼ぎに残った以上、自分ではどうあがいても短時間で倒しきることはできない、と。

そして、同時に余裕もあった。先ほどの戦闘でわかったことだが、現状理子の実力はアリアのそれを上回っている。これが尋常の勝負ならばまた分からなかったが、今はその見立ては正鵠を射ていた。

以上の理由から、理子は急いで勝負を仕掛ける必要はないと判断した。むしろ、逸つても返り討ちに遭うだけだろう。いくらなんでも、『オルメス』がそこまで甘い存在でないことはわかっている。ましてや、そばにはあの遠山キンジもいるのだから。

それに、敵との会話も、それはそれで有利に働かせることもできる。例えば、

「そうだね。あたしとお前は、もう敵同士なんだから。……それよりも、肩の怪我はどうなった？」

「矢常呂先生の腕は知ってんだろ？ ま、満足に動かすのは無理だけどな」

このように、敵状を調べることがもできる。無論、嘘ブラフという可能性もあるが（とはいっても今回は偽証ではないだろう。いくら優秀な腕を

持つ矢常呂といえどこの短期間で完治させられるとは思えない。

「そう。じゃあ——遠慮は、いらないよね？」

理子は獯猛に笑い、会話を打ち切りにかかる。もとより、相手の実力はよく知っている。これ以上の情報は期待できないだろう。

が、足止めとしては当然の選択ではあるが、錬はさらに会話を続けようと試みた。

「戦るのは構わねえが……その前に、一個聞かせろ。お前、なんでこんな手段を取った？　こんな、不意打ちみてえな、よ」

——不意打ち。

錬は、理子の行動をしてこう評した。

理子はそれを侮辱だとは思わない。錬が言っていることは、間違っていないのだから。

（誰よりも知ってるよ、そんなこと。知っててやってるんだ、あたしは）

理子だって、なにも本心からこんな卑怯な手を取りたいわけじゃない。というよりも。

というよりも。

戦わずに済むのなら、誰も傷つけなくていいのなら……むしろ、理子はその選択肢を選ぶだろう。

だが、状況が、理子を縛る『条件』が、理子を望まぬ方向へ進ませる。

「はあ？　不意打ちってなーに？　錬って、今までの武偵人生で誰にも不意打ちされなかったの？　うつらやましいー！」

「それとこれとは話が別だろ。お前の狙いから言えば、もつと正々堂々とすりゃいいじゃねえか」

「ッ！　お前に何がわかる！　あたしにはもう、そんな余裕ないんだよッ！」

内心を隠して、おどけたように言う理子に、錬はあっさりと言い返した。

それに理子は激しく反応する。たとえば、錬には関係ないのだとしても、まるで自分のことをわかっているかのように言われて、それが理

子の逆鱗に触れた。

烈火のごとき怒り。

しかしそれを受けてなお、有明鍊は反論する。

「……俺は、お前が何をそんなに焦ってんのかはしんねえけどな。これだけは言える。お前は——間違ってるんだよ。こんなやり方、いいわけねえだろ。お前だって本当はわかってんだろ？　こんなやり方に意味がねえことくらい」

「……そんなこと、お前に言われなくてもわかってる。でも、しょうがないじゃない?!　あたしにはもうこの道しか残されてないんだからッ！」

慟哭が、雷鳴をBGMにバーに響き渡る。

胸に浮かぶのは、一つのシルエツト。おそらくは、自分がこの世界でもっとも憎み、そしてもっとも恐れる怪物の姿。

『奴』は言った。ホームズ4世を斃^{たお}せば、自分を解放すると。

——本当は。

そんな手で『奴』の支配を抜け出すのではなく、自身の手で自由を掴みたい。武偵法も、教師の教えも、人間としての倫理さえ捨て去って、この手で『奴』を殺してやりたい。

——それが、叶うのならば。

でも、理子には力がないのだ。圧倒的に。絶対的に。『奴』を倒すほどの力が。

(だから、あたしは進む。仲間に罵られようと。泥にまみれようと。この最低最悪の道を、突き進んでやる)

理子は右手を固く握り、より一層覚悟を決める。

そんな理子に、しかし鍊は強く語りかけた。

「いいや、まだお前は戻れるはずだぜ。思い出せよ。お前はまだ、誰一人殺してねえだろ。じゃあ——お前は、まだ戻れる」

その指摘は、真実だった。

理子は、『武偵殺し』として、誰かを殺したことなどない。しかし、一歩間違えば、確実に誰かが死んでいた。

だからそれは、

「……結果論だ、そんなのは」

否定する理子の声は、小さかった。

それがなぜかは、わからない。もしかしたら、こんな自分に未だにそう言ってもらえたことが、嬉しかったのかもしれない。

あるいは。

お前はまだ戻れる、という錬の言葉を——どこか遠く感じたからかもしれない。

「そうだな、結果論だ。……でも、事実だろ？」

気のせいか、錬の声には哀しさがあつたような気がした。

まるで、自分とは違ってまだやり直せるのにどうしてそうしないのか、と問われているようだった。

だからか、無言になる理子に、

「わかったよ。お前がどうしても戻れないって主張するなら、もう俺はこれ以上は何も言わない。その代わり——止めるぞ。口で言って止まらねえって言うんなら、そんぐらい譲れないものがあるってんなら、俺は力づくでもお前を止める。こんなふざけた真似は止めさせる」

その、言葉に。

いろいろな感情を振り切って、理子もまた強く返す。

「……やってみなよ。お前が立ちはだかつたって、あたしがやることは変わらない。やれるもんならやってみる」

「ああ……やるさ」

そして、

理子・峰・リュパン4世は、引き金を引いた。

* * *

——ファーストアタックは理子が先だった。

先手必勝とばかりに、ワルサーから銃弾を吐き出す。俺は、理子が拳銃を振り上げると同時に横っ飛びしたため、俺がさつきまでいた足元が爆ぜるだけで済んだ。

お返しとばかりに、俺もすぐにグロックを構えて発砲する。

「ッー」

射線を読まれたか、あるいは俺と同様の方法か。理子はたやすく俺の一発を避けると、そのままこちらへと肉薄してくる。

「アリア同様、アルⅡカタ戦に持ち込む気か！」

「チッ！」

そうはさせじと牽制にもう一発打ち込むも、再びハズレ。あつさりとクロスレンジへと接近を許してしまった。

クソ！俺はアルⅡカタ得意じゃねえんだぞ！

「——シッ」

内心で文句を言いつつも、俺はゼロ距離で銃弾を叩き込むためにグロックを握る左手を前に突き出す——も、それは同じく突き出された理子の拳銃を握った右手に弾かれる。

それだけならまだよかった。しかし、理子には——

「ぐ……ッ」

もう一丁ワルサーがある。それを持った左手が伸びると同時、容赦なく俺の腹目掛けて発砲しやがった。

金属バットで殴られたような衝撃と痛みが俺の腹部を襲う。

「……ふざけてるの、錬？ それとも、それって何かの作戦？」

「……ふざけてるの、錬？ それとも、それって何かの作戦？」

「……ふざけてるの、錬？」

「……ふざけてるの、錬？ それとも、それって何かの作戦？」

「……ふざけてるの、錬？」

「……ふざけてるの、錬？ それとも、それって何かの作戦？」

「……ふざけてるの、錬？ それとも、それって何かの作戦？」

「……ふざけてるの、錬？ それとも、それって何かの作戦？」

ねえけどよ。

「お前、言ったよね？ あたしを力づくで止めるって。だったら——
どうして、本気ださなの？」

「……本気だ。これでも今は、な」

今はもなにもない。そもそも昔からこんなもんなんだが、俺にも多少はプライドでもあったのか、そんな格好つけた言い方になってしまった。

それが気に食わなかったのか、理子は俺をギラリと睨み、

「いくら右腕が上手く使えないっていつても、それにしたつてあんな簡単にお前が喰らうわけがない。……もしかして鍊はまだ——」

その先を何と続けようとしたのか、俺には分からなかった。

理子は何かを振り払うように2、3度頭を振り——ジャキリ、と二丁拳銃を構えた。

さらに、

——フワリ、と。

再び、理子のツーサイドアップテールが意思を持っているかのように浮き上がる。その両端、左右の毛先には、小ぶりだがしっかりとナイフが握りこまれている。

「もし、鍊がそういうつもりだったとしても、だからってあたしは矛を収めない。だから、なれよ……本気になれよ有明鍊！」

理子が吼えた、直後。

2丁のワルサーが火を吹いた。

2発の銃声が轟くも、着弾点は俺の背後の壁だった。

ここは今までの経験が生きた。興奮状態にある犯人が銃を所持している場合、自分を鼓舞する意味も込めて、叫びながら発砲することがある。だからこそ俺は、反射的に動くことができた。

「ああああああッ！」

裂帛の叫び声を上げながら、理子はもう一度俺に迫ってくる。と同時に、理子の右テールが揺らめいたのを俺は見た。

来る——と思った瞬間に、理子が上段から右テールに構えたナイフを振り下ろす。

「お、お——ッ！」

俺はそれを辛くも身を斜めにすることで避ける。速度が速くなかったのが幸いした。これならエリアの時みたいないない限り、一度くらいならかわせる。

そう——一度は。

「はあッ！」

俺の回避を見て取った理子はすぐさま今度は左テールを仕向けた——が、そう来るだろうとは思っていた。

間に合えよ……！

俺は右テールの一撃を避けると同時に、すばやくダガーナイフを一本取り出していた。動きが制限された右手だから不安だが、四の五の言つてられねえ。

今までの武偵人生の中でもトップクラスに入る集中力で、俺は自身のダガーナイフを左テールのナイフに合わせた。

鋭い音。そして右手につたわる衝撃。

と同時に無理に動かしたせいか右肩が痛み、ダガーを取り落としてしまった。

「チッ！」

しかたなく俺は再び威嚇の意味も込めて、グロックを向けるも——理子は即座にバック転で距離を開け、着地と同時にワルサーの照準を向けてきた。

ヤベエ!?

「クソッ！」

俺は全力でその場を離脱し、遮蔽物を探す。どつか、どつか壁はねえのか……！

——あつた！ カウンターだ！

ここに来たときに理子が座っていたバーカウンター、その本来はバーテンダーがいるべきスペースに身を躍らせる。

よし、これでなんとか防げる——と思った、刹那。

「ん……？」

一瞬の後、何かガラスの割れるような音が響き、次いでなにかの液

体が俺の頭にかかり、シャワーのようにすぐさま俺の顔を伝い始めた。

その時。荒くなった息を整えるために口を開いていたせいで、その液体が俺の口内へ侵入した。水じゃない。この独特の味、そしてこの匂いは――

「……………酒?」

あ、そっか。理子の弾丸が酒瓶をぶち割って、その中身が俺にかかったっていうことか……………やべえ。

事実を認識した瞬間、

――クラリ、と。頭がふらついた。

「う、お……………ッ!」

マズイ……………マズイ、マズイ、マズイ。酒は、俺は酒だけは本当に駄目なんだ。匂いだけだったとしても、すぐさま当てられてしまう。それだけならまだしも……………やばい、眠気が……………。

――クソ。こんなことでオネンネしてたまるか。そんな場合じゃねえだろ、今は……………!

俺は意識を持ち直し、低姿勢で床を這い、本来のカウンター入り口から外に出て、ゆらりと立ち上がる。

ぼやけた視界に、理子の姿が映った。さっき同様、またもなぜか追撃はしなかったらしい……………いや、なにかがあるかもしれないと勘ぐってくれたのか。運がいい。

「……………?」

理子が何かを言っている……………が、上手く聞き取れない。ああ、もう。なんだってこんなに酒に弱いんだ俺は。

こうなりや、いつそ一発くらいもらった方がいいかもしれない。そっちの方が目が覚めそうだ。

――と、どう考えても悪手な考えを採用するくらい、今の俺の頭は酩酊していた。

「……………」

ふらつく足元に気をつけ、俺は歩を進める。

どうせ何もしなくても撃ってくるだろうが、一応挑発くらいはしと

くか。弾丸じやなくナイフでこられたらやばいし。

「撃ちたきや撃てよ」

短く、それだけ。

それだけ言つて、俺は歩き続ける……つとと、危ね。思わずこげかけた。

ぐらつく身体を立て直し、俺は進み続ける。一步、二歩、三歩、四歩。その間にも、何度か体勢がくずれたが、それでも倒れることなく進行を止めない。

というか、なんだ？ さつきからヒュンヒュン耳鳴りが聞こえる。うるせえなあ……。

うるさいといえば、理子も何かを叫んでいる。やっぱり霏がかかった頭ではうまく認識できないんだが。

そんな中を、俺はさらに進み、結局一度も理子が発砲しなかったことで——理子の、真正面まで来てしまった。

………んん？ なんで？ なんで撃たねえの、こいつ？

と、疑問に思つた時だった。

ぐらつ……と、俺の身体が倒れた。

——前に。

あ、これ倒れる……とどこか他人事のように思い、

「——え……う？」

しかし、俺が地面に倒れ伏すことはなかった。その前に、俺の身体はつつ立つたままの理子にもたれかかっていた。

ハニーブロンドのふんわりとした髪から、いい匂いがする。こんなときに何考えてんだ、俺。

あー……やばい、マジで眠てえ。

そもそも俺、なんで理子と戦つてたんだっけ……。そうだ。こいつを止めたかったから俺は戦つてたんだろ……。

白濁していく思考の中、俺は理子に言った。

「もう、止まれよ理子……」

戦おうにも、意識がもう途切れかけている。言葉で制止をかけるし

かない。

それでもまだ止まらないというのなら、せめて――

「俺の）目を覚ましてくれ、理子……」

そうしたら、ちゃんと戦うから。

――そして。そのままの状態がしばらく続いた。それが数秒だったのかあるいは数十秒ほどだったのかはよくわかんねえが。

「――」

理子何かを呟いた、瞬間。

ズドンツ、と。

胸の辺りを、衝撃が貫いた。

―― 一瞬で、覚醒する。これは俺の望んだ結果だ。一発くらいもらえば目を覚ますかも、と思ったとおり、理子は俺を撃つたんだ。

だが。

俺は即座にそれを後悔する。

なぜなら――

「ぐ……!?!」

覚醒通り越して、今度は純粹に気絶するほどの痛みが襲ったからだ。防弾制服だろうと、この距離なら普通に骨くらいいくこともある。

「理、子……!」

どう考えても、俺がバカだったんだが、それでも反射的に理子に文句をつけながら……俺の意識は千切れ始める。

どさりと、体が倒れた感覚がした。

それから数秒して、頬になにかの感触を感じ、

――助けて、と。

誰かが言った、気がした。

* * *

バーカウンターから転がり出てきた鍊を見やりながら、理子は自分がイラついていることを自覚していた。

その理由は明白。だから理子は、緩慢な動作で立ち上がった鍊に向けて言った。

「いつまで経つても防戦一方。もういい加減、その甘い考えを捨てなよ。」

——甘い考え。

理子は、有明錬という男をよく知っている。知っているからこそ、錬が本気を出さず、また威嚇程度の攻撃しかしない理由を悟っていた。

つまるところこの男は——ここまでされて、まだ理子を『仲間』と見定めているのだ。

錬の性格、あるいは性質を理子は熟知している。すなわち、彼は仲間を決して傷つけないということ。

これが甘い考えでなくて、なんだと言うのだ。自分はすでに……否、ずっと前から、犯罪者だった。いまさら仲間だなんて、到底呼べない。呼べるはずが無い。

だというのに。

それでも錬は、攻撃のそぶりさえ見せず、親しい友人の下へ歩み寄るように、一步を踏み出した。

そして、言う。こともなげに。

「撃ちたきや撃てよ」

(——ッ！)

あつさりと告げたその一言が、理子に引き金を引かせた。

上等だ。そこまで言うのなら、どうしても自分に手を出さないというのなら、無様に撃たれて転がっている……！

全てを断ち切るような理子の思いを乗せた弾丸は——

——スツ、と。

冗談みたいに呆気なくかわされた。

(な、ん……!?!?)

まさに紙一重といった、ごくわずかな動きで避けられた。先ほどまでの大仰な動きとは正反対だ。

変わった。

何かが、明確に。

——まさか。

(最後に、鍊と話したかっただけなのかな……)

負けが前提の戦い。だからこそ、自分はそこに別の意味を見出そうとしたのではないか。

今となつては、もうそれはわからない。わかっているのは、ここで終わりということ。多分、せめてもの手向けとして優しく意識を奪われて、それでこの事件は幕を引く——はずだった。

「——え……う？」

突如、理子は存在感を示す重みと、そして確かな温かみを感じた。その正体は——自分を抱きすくめる、鍊のものだった。

(え……えっ?! な、なんで——)

訳もわからず、理子は混乱する。突然のことに、羞恥からわずかに頬が紅潮した。

そんな理子に、鍊は優しく言葉をかける。

「もう、止まれよ理子……」

ぴくり、と身体が反応した。

同時に、気づく。

これはきつと、鍊の最大限の譲歩だ。自首を促し、ぎりぎりで踏みとどまれるように、理子を説得しているのだ。

「目を覚ましてくれ、理子……」

止まれ。目を覚ませ。

たった、これだけだ。だがだからこそ、その言葉には何よりも真摯な思いがこもっていた。

——ぐらつく。

今まで理子を支えていたものが。自分が解放されるため、という免罪符が。強固に塗り固めたはずの決意に輝が開くのを理子は自覚した。

もしかしたら。

ここが、ターニングポイントなのかもしれない。ここで頷いて、大人しく捕まって、その上で、それでも、鍊に助けを求めれば……彼は自分を救い出してくれるかもしれない。

その先には、光に満ちた人生が待っているのかもしれない。彼に感

謝し、光の中を生きていけるかもしれない。友達と楽しく話したり、学校生活を謳歌したり、ひよつとしたら恋をすることもあるかもしれない。

いつか夢見た、そんな幻想。普通の、ただの女の子としての峰理子を手に入れられるかもしれない。

——だが。

「——ごめんね」

ただ一言で、理子は全てを諦めた。

ここで泥の道を歩くことを諦めて鍊にすぎる——ことを、諦めた。

次の瞬間——理子は、右手に握っていたワルサーを床に落とし、続けてその右手を制服の胸元につっこんだ。

やがて取り出されたのは、3丁目の銃。超小型拳銃・デリンジャー。胸の谷間に隠し持っていた、母の形見の拳銃だった。

そして。

直後、理子はデリンジャーを鍊の胸に押し当て、引き金を引いた。

ダンッ！ と、反動が体に伝わる。

「ぐ……!?!」

うめき声。さしもの鍊も、さすがにこの距離から喰らってただでは済まない。

鍊は最後に理子の名を呼び——そして、ドサリと倒れこんだ。

「……………」

静寂が訪れる。互いの銃声も自分の怒声も、そして鍊の声も消えうせた。

理子は数秒間、床に伏す鍊を見つめる。

そして理子は、しゃがみこんで鍊の頬に掌で触れた。

——もしも。

もしも、許されるなら。

「助けてって……言ってもよかったのかな？」

聞こえていないと知りつつも。聞こえていないと知っているから。

ほんの少しだけ、理子は本音を口にした。

それから理子はワルサーを回収しつつ立ち上がり、クルリと踵を返

した。

これで終わりではないのだ。自分はもう、止まらないと決めた。今度は、アリアを倒さなければならない。

(……………ごめん)

胸中で、もう一度謝罪して。

理子は、燦然と輝くハニーブロンドをなびかせ、バーを後にした。その瞳からこぼれた雫を知るものは、本人以外には誰もいなかった

「——イテツ!？」

突如、後頭部に鈍い痛みが走り、俺は目を覚ました。

ぐ、あ……………た、たんこぶでできたんじやねえか？　これ。

えーと……………なにが、どうなってるんだ？

頭がガンガンするが……………なんとか思い出してみる。俺は確か、理子に撃たれてその場にぶっ倒れたはずだ。それがなんでこんな壁際にいるんだ？

と、

グラ……………ア、と足元がふらついた。

頭痛のせいかと思っただが、違う。これは、床……………というか、飛行機自体が傾いたんだ。

「う、お……………!?　せ、旋回してるのか?!」

というより——急降下か!

そうか、この揺れのせいで俺は壁まで転がってつたのか。で、頭を壁にぶつけたと。

……………なんか、情けねえなあ。

しかし、こんなことになってもアナウンス一つねえってことは……………、

「……………どうやら、まだ終わってねえみてえだな」

まあ、そんなことは着陸してない時点でわかってたんだが。

「とりあえず……………理子を探るか」

これでも一応、キンジから任された身だ。それに、理子本人にも止

めると約束した。

たとえもう遅かったとしても、それが走らない理由にはならない。

「待ってるよ——理子」

俺は、痛む身体を無視して、キンジたちが向かった方向へ走り出した。

* * *

——峰理子と、遠山キンジとアリアの勝負は、キンジたちの勝利で終わるはずだった。

アリアとのキスでヒステリアモードと化したキンジが待ち受ける部屋へ、鍊を下した理子は入っていった。

それを見たキンジは、少なからず驚いた。理子がいるということ、つまり『あいつ』が倒されたということに他ならないからだ。もつとも、彼がまだ理子を仲間と見ているのなら（といつつもキンジはほぼ確信していた）、むしろこれは自然な展開なのかもしれない。

やがて始まった戦闘は、キンジの策によりアリアをダブルブラフの伏兵アンブッシュとすることで、理子を敗北一歩手前へと追い込むことで終わりを告げた。

しかし、そこで不幸——否、理子が遠隔操作のリモコンで飛行機の運転を乗っ取るという荒業を使用され、まんまと逃走を許してしまった。

急降下を始めるANA600便。最悪の事態を防ぐため、キンジはアリアをコックピットへと移動させ、自身は理子の追撃を始める。

目ではなく音——足音を聞き分けてキンジが飛び込んだのは、誰のともしらぬ客室だった。

その、横壁。円状に爆薬が仕掛けられたそこに、理子は背を預けて立っていた。

ベレッタを油断なく構えるキンジに、理子は語りかける。

「ねえキンジ。この世の天国——イ・ウーに来ない？ 1人くらいならタンDEMできるし、連れて行ってあげられるから。あのね、イ・ウーには——お兄さんも、いるよっ。」

「これ以上、俺を怒らせないでくれ。衝動的に9条を破ってしまいそ

うになる」

武偵法9条——武偵活動中の殺害を禁じる法律。それを持ち出すほど、キンジは冷静ではいられなかった。

そんなキンジに理子はおどけたように、こう言った。

「うーん、じゃあしかたないか。アリアにも伝えてて。あたしたちはいつでも、2人を歓迎するよ?」

「2人……鍊のやつは仲間ハズレかい?」

キンジにしてみれば、それは半ばただ相手に合わせただけの軽口だった。

だがそれを聞いた瞬間、理子の顔が曇った。

「鍊は……あいつは、いいんだ。ううん、違う。あいつはこれ以上、巻き込みたくない」

「理子……?」

いぶかしげにキンジは理子の名を呼ぶ。

すると、理子はまた口元に笑みを貼り付け、

「——じゃ、そういうことで。バイバイ、キンジ」

(ツ! マズイ——!)

慌てて、キンジが駆け出そうとする。しかし、時はすでに遅い。

理子は、右手に持った起爆スイッチを押し込む——

「ちよつと待てコラアアアあああああああああ!」

——よりも早く。

この場にそぐわない、乱暴な台詞が響き渡った。

* * *

適当に走り回ったすえに、俺は一室、扉が開いている部屋を見つけた。

慎重に近づき、こっそりと中を覗くと——いた。キンジと理子だ。

『鍊は……あいつは、いいんだ。ううん、違う。あいつはこれ以上、巻き込みたくない』

『理子……?』

ん? なんだ、あいつなんで俺の名前出してんだ……?

それよりも、あいつが寄りかかっている壁の周りにある粘土みたいなのはなんだ？

——いや、待て。たしか、1年の風魔が見せてくれた^{レザド}諜報科——犯罪組織に対する諜報・工作・破壊活動を学ぶ学科——の教科書に、あんなのが載ってたぞ。

あれは確か、破壊工作に使われる——爆弾だ。

そこまで思い至ったとき、俺の耳が、理子の台詞を捉えた。

『——じゃ、そういうことで。バイバイ、キンジ』

バイバイ。理子はそう言った。

つまりあいつは、この場から消え去る……いや、俺たちの前からすらも消え去る——？

そう、思ったとき。

止めるとか言つといて結局こんなことになった自分の無様さとか、とりあえずそういうのは脇において。

——俺の脳裏を、ある記憶が駆け巡り、

気づけば、俺は飛び出していた。

「ちよつと待てコリアアアあああああああああ！」

「ツッ!」

キンジと理子が驚いたような顔で、こちらを向く。

だが、そんなことはどうでもいい。問題は理子だ。

俺は理子のほうへ歩きながら、

「理子。テメエ、そのままそこから逃げるつもりかよ」

理子は一瞬、顔を何にかゆがめて、

「……そうだよ。あつはは、残念だったねえ、レンレン！ 力づくでも止めてやるー、とか言ってたのに、結局こうなっちゃったね」

「ああ、そうだな。……だけどな、理子。それでも俺は、お前がそのまま俺の前から消えることは許さねえ」

そう。俺には、まだ理子に用がある。

より正確に言えば——

「お前にはまだ、返してもらってねえもんがあるだろ」

「返してもらってないもの？」

隣でキンジが疑問の声を漏らす、悪いが今は無視する。

俺が、理子に貸しているもの。

去年の1年間で積もりに積もったもの。

それは――

――12万4600円、である。

つまりは、借金だ。俺はそれだけのお金を理子に貸している。

去年、俺はそれなりの実入りがあった。なんの間違いかSランクに格付けされ、それに見合った依頼クエストをキンジとこなすうちに、気づけばなかなか貯金が溜まっていた。

そしてまた、俺はたまに理子に「1人で行ってもつまないから」とアキバまでギヤルゲー購入をつき合わされていた。だが、おつちよこちよいなのか、あるいはわざとなのか、こいつはちよくちよく財布を忘れていた。で、当時調子に乗っていた俺は、ほいほいそれを「しかたねえなあ」とか言いながら立て替えていたわけだ。

当時なら、それでもよかった。だが今はEランク。10万オーバーはでかい。できるなら……というか、確実に返してもらいたい。

そんな俺の心境を知ってか知らずか、理子は言った。

「そっか……うん、そんなのもあったね。――ごめんね、それもちよつと返せそうにないや」

いや、おいふざげけん?! ごめんて、なにそれ軽すぎだろ!

と俺が抗議するよりも早く、

「――本当に、ごめん。じゃあね、鍊」

「ツ！ じゃあねじゃねえんだよバカ野郎！」

瞬間、俺は駆け出す。借金の返済と、止めると言った約束を守るために。

だが。

直後、壁に張り付いた爆弾が一斉に起爆し、丸く吹き飛んだ。

そこに生まれた穴から――理子は空中へと踊りだした。俺は咄嗟に、遠ざかる理子に手を伸ばした。

――それが、いけなかった。

高高度を飛ぶ飛行機に穴が開くとどうなるか。答えは簡単、気圧差

の問題で、飛行機内の空気が外へと押し出されることになる。

それはつまり、空気だけでなく、同時に飛行機内のものも吹き飛ばされることになるということ……、

「——え？」

気づけば。

俺は。

一瞬で。

——天空に、投げ出されていた。

17. カメリアの瞳をした少女は

「理子。テメエ、そのままそこから逃げるつもりかよ」

その鍊の問いかけは、理子の胸に強く刺さった。

だからこそ、理子はおどける。いつものように。本心は隠して。

「……そうだよ。あつはは、残念だったねえ、レンレン！ 力づくでも止めてやるー、とか言ってたのに、結局こうなっちゃったね」

「ああ、そうだな。……だけどな、理子。それでも俺は、お前がそのまま俺の前から消えることは許さねえ」

その、言葉に。

あはは、と理子はもう一度内心で笑う。

随分勝手な言い草だ、と思う。

思うが同時に、随分優しい言葉だ、とも思う。

だって理子は振り払ったのだ。最後に鍊が差し出してくれた手を、そこにどんな感情があつたのかは別として、確かに拒絶したのだ。

だけど、こうして有明鍊はここに来た。

もう一度。

(それがどんなに嬉しいことか、きつと鍊にはわからないだろうね)

こればかりは自分にしかわからないことだ。

きつと。

これが「感謝する」、ということなのだろう。

『奴』に人生の全てを無茶苦茶にされたあの日以来、理子は初めて人に感謝した。

口元に小さく、本当に小さく微笑を浮かべる理子に、鍊はさらに続ける。

「お前にはまだ、返してもらってねえもんがあるだろ」

(え——?)

返してもらってないもの。つまり、自分が鍊に借りたもの。

そんなものあつただろうかと理子が疑念を抱いたところで——

(あ……)

理子は、思い出した。

『別に、そんな礼言われることなんざしてねえけどな……じゃあ、そうだ。これは、あれだ。一つ、貸しつてことにしとくわ。いつか返してくれりゃ、それでいい』

脳内に、いままで忘れていた台詞が再生される。再生されるということは、自分は心のどこかで覚えていたのだろう。

それは、もう半年以上も前のことだ。かつて自分が強襲科アサルトにいたころに、一度だけ錬と組んだ事件があった。

その時、紆余曲折があったすえに、確かに自分は一つ貸りていた。錬に言われた通り、あれはまだ返していない。

(律儀だなあ、錬は……。あんな約束、覚えてたんだ……)

あんな約束、ほとんどその場のノリで決めたようなものだ。実際、2人とも本気でそこまでの貸し借りがあるとは思っていないはずだ。

なのに錬は、今更そんな話を持ち出した。もちろん言葉通りの意味ではなく、おそらくはただの口実にすぎないのだろう。

だから理子も、それほどの緊張感も持たず、軽く言う。

「そつか……うん、そんなのもあったね。——ごめんね、それもちよつと返せそうにないや」

その口調は、どこか優しく。

『武偵殺し』ではなく、峰理子として。

——そこまでが、落とし所だった。これ以上長引かせれば、自分に未練が生まれてしまうかもしれない。

理子は、別れの挨拶を口にする。

「——本当に、ごめん。じゃあね、錬」

「ッ！　じゃあねじゃねえんだよバカ野郎！」

すかさず錬が反応するも、それ以上は聞かず理子は右手に握っていた起爆スイッチを押す。

瞬間。

ドンツツツ！　という爆音とともに、背後の壁が吹き飛んだ。

理子はそのまま排出される空気とともに、機外へと飛び出した。

雷雨の暗夜に抱かれながら、理子は名残を惜しむように、飛行機へと目を向けた——

——その視界に、理子同様飛び降りた錬の姿が映った。
(え——ええええええええええっ!? なにやってんの錬?!)

当然、理子の胸中を占めるのは驚愕である。

見える限りだと、パラシュートを背負っている感じはない。そもそもあらかじめ用意でもしておかなければ、あの短時間でパラシュートを確保できるはずがないのだが。

ということはつまり——本気で、その身一つで錬は飛び出してきたということだ。

なぜ。どうして。意図は。作戦は。着陸方法は。

一瞬で思考が巡る。錬の狙いを見抜こうとする。

しかし、どれだけ考えても、錬が生きて着水できるとは思えない。下は海水だから、と舐めてはいけない。この高度、そしてこの落下速度ならば、人は海面に叩きつけられて死ぬ。あっけなく。

だから、理子は。

キンジたちとの戦闘中に切られてしまったテールの変わりに、自分の両手で髪をしばり、即席のテールを作り出した。

「んん……っ」

さらに、イメージ。求めるは翼。上昇できなくてもいい。下降速度を落とせば十分だ。

果たして、理子のイメージどおり、擬似テールは翼のようにはばたいた。一度、二度、三度。金に輝く両翼がうなるたび、その下向きのベクトルはどんどん減衰していく。

その間にも、理子はさらに羽ばたく方向を直下から斜め下に変えることで、錬に近づいていく。

飛び降りた時間差から離れていた2人の距離は、こうしてぐんぐん近づいていき、そして——

「掴まって、錬！」

伸ばされた錬の左手を掴み、ぐつと引き寄せる。そのまま理子は肩車の要領で錬の肩に乗った。

次いで、理子は背中中のリボンに手をかけ、一気に——引いた。

直後、理子の着ていた制服が変形を遂げ、パラグライダーへと姿を

変えた。あらかじめ脱出方法として改造しておいたのが功を奏した。こんな使い方になるとは想定していなかったが。

加えて、代償として下着姿になってしまったうえに、上下の下着一枚ずつというとんでもない格好で肩車してしまったっているわけだが、そこは思考の隅に追いやる。表情にこそ出さないが、さすがに少々恥ずかしい。

と、そこまで考えたところで、やっと理子は思いついた。

(そっか……。錬は始めから、あたしがこうやって1人は一緒に飛べることを知ってたんだ)

錬がいつから理子とキンジの会話を聞いていたのかは、定かではない。だが、あの会話の最中に確かに理子は言っていた。1人くらいはタンDEMできる——と。

そこから推測して飛び降りたのだろうが、それにしたって賭けの要素が多すぎる。タンDEMという言葉が指すものが不明瞭だし、そもそも理子が助けようとしなければ話にならない。

つまり。

つまり錬は——

「……あたしのこと、試したでしょ?」

見えていないとは知りつつも、理子はジト目で錬を見下ろした。

つまるところ、本当に峰理子は有明錬の敵に回ったのか。その命すらも見捨てられるほど、完膚なきまでに敵対してしまったのか。それを錬は試したということにはならないだろうか?

そんな理子の問いかけに、錬は適当に答えた。

「あん? なんのこった、そりゃ」

その言葉に、理子は苦笑する。

「さすがにそりゃそうだよね……」と、聞こえないほど小さく呟く。けれど。

錬はもう一言、最後に付け加えた。

「ただまあ——お前なら助けてくれるって信じてたけどな」

「……そ」

なんとなくだが。

理子にはこの一言こそが、真実を表しているような気がした。

* * *

あ、あぶねー……死ぬかと思った……。

理子に助けてもらわなけりや、いまごろあの真っ黒い海に叩きつけられてお陀仏になるところだった。冗談ぬきでやばかったぞ、今は。

しかし、「試した」ってのはなんのことだろうか。とりあえず、いい感じの台詞だけは言っと思ったが。

というか、俺が落ちてるとき、なんかミサイルとすれ違つたんだがあれは夢だと信じたい。背後で爆発音が聞こえたのもきつと夢だ。

そんなことをぐるぐる考えている間にも、俺たちの高度はみるみる下がっていく。

「やっぱ、このまま水中コースか」

「文句いわない。なんなら今すぐ落としてもいいよ?」

「悪かった」

そして大雨に濡れつつ幾ばくかの時間が過ぎ——俺たちは緩やかに海面へ着水した。

……って、海荒れすぎだろ死ぬぞおい!?

さすが台風、空模様もそうだが波模様も半端じゃない。言ってる場合じゃねえけど。

俺は荒れ狂う波間から必至に顔を出しながら、運動神経の差かこちらは割と余裕のある理子に、

「ぶはっ! おい、理子これからどうすんだ! このままじゃ、2人も波に吞まれて死ぬぞ!」

「あー大丈夫大丈夫。もうすぐ迎えが………あああああああああああああああああ!?!」

「ッ!?!」

な、なんだこいつ。いきなり叫びやがって。

理子の突然の奇行に、俺がいぶかしんでいると、

「そうだよ……ここに来ちやうんだ」

どこか呆然としたような理子の眩きが、耳朵を打った。

来る……って、なんの話だ？

「おい、理子どうした？ 何の話だ？」

「だから来るんだってば！」

「だから、何が!？」

要領を得ない理子の説明に俺も怒鳴り返していると。

不意に。

ありえないことに、俺の足が何かに触れた。

「——は？」

海中だぞ。足場なんてあるはずが——

そう、思った瞬間。

——海が持ち上がった。

ズズズズズズズズ——ツ！ と、とんでもない振動音とともに、俺の身体が一気に上昇する。海ごと。

な、なんだ?! なにが起こってる?! 俺は今、なんの上に立ってる?!

だが、その疑問はすぐに氷解することになる。

上昇を続けた何かはやがて止まり、持ち上げられた海水がどんどん下へと落ちていく。本来なら俺も同じ運命を辿るはずなんだが、理子が俺の手を右手で掴んだ上で、左手とあの自在に動く髪の毛を何かから突き出た手すりに巻きつけている。

やがて。海水の排出が終わり、俺はようやくその上に自力で立つことができた……んだが。それでもわからない。ホントにこりやなんだ。とりあえずわかるのは、これが人工物であること。そして、ハンパじゃなくでかいことだ。俺が立っている位置が最端じゃないんだが、どうも長さが300mくらいあるぞ、これ。

これ以上考えても多分わからねえな。理子に聞いてみよう。

「おい理子……こりやなんだ。これがさつき来るとかいってたやつか」

「……これは、ポストーク号。原子力潜水艦で……そして、あたしたち

『イ・ウー』の本拠地だよ」

イ・ウー？ なんだ、そいつは？

それよりも、原子力潜水艦って。救命艇にしちや大型すぎるだろ。
——などのん気に考えていた俺は、本当に馬鹿だった。

「——やあ、理子君。おかえり」
ドクン——ツ！ と、心臓が震えた。

背後から聞こえたその『声』を聞いた瞬間、一瞬で理解した。
別に今から戦えなんざ言われてないが、それでもわかる。この声の主と戦えば、俺は確実に負ける。

ビビッたんだ。脳も、体も、心も、本能も。この声を、聞いただけで。

「プ、^{プロフェッショナル}『教授』……」

理子の、震えた声。その向かう先は、やはり俺の背後。

ボストーク号とやらの上で、俺は激しい雨風にさらされながら、生唾を飲み込んだ。

そして——意を決して振り返った。

「……………」

視線の先——10メートルくらい先には、おそらくは、1人の男がいた。こうも暗いせいで詳細な顔やらなんやらはわかんねえが……この得体のしれないプレツシャーだけは規格外だ。勝てるどころか、戦っているビジョンさえ浮かんでこなかった。

雨か、それとも冷や汗か。俺が右頬をしたたる雫をぬぐったとき、男が口を開いた。

「今しがた理子君が言ってしまったが……あらためて自己紹介しよう。僕は、『教授』。もつとも、わかると思うが、ただの呼び名だよ。有明錬君？」

「……なんで俺の名前を知ってやがる」

これはかなりマズイ状況だ。よくわからんやつに、こちらの情報だけ握られている。

すでに俺の心臓は、ズキズキと痛むほど早鐘を打っている。つねに首元に死神の鎌を添えられているような、そんな気分だぜ。

「うん、そう言うのは推理していたよ。まあ、さすがにこれは推理と呼べるほどのものではないがね。——おっと、なぜ僕が君の名を知って

いるか、だったね。よし、答え合わせの時間だ。正解は簡単、君には少々因縁……というほどのものではないが、まあ僕らとは縁があるからだよ」

「僕ら……イ・ウーか」

それが具体的になにを表すのかはわからんが、ここまでの話だとおそらく何かの組織名。そして理子が加入しているとなると……犯罪組織、か。

いや待て、それよりもだ。俺に、こいつらとの縁がある、だど？

「俺には、覚えがねえぞ」

「それはそうだろう。君たちは知らなかったのだから。僕ら、イ・ウーという存在を」

「俺たち……？ 俺たちってどういうことだ。俺以外にも、あんたらと関わりがあるやつがいるのか？」

「もちろん。君と遠山キンジ君にはしてやられたよ……あの、去年の12月に」

キンジ……と、去年の12月？

「どういうことだ。なんでここでキンジが出てくる？ 説明しやがれ！」

「威勢はいいが、それは見苦しいだけだよ錬君。もっと優雅に余裕を持って生を謳歌したまえ——さて。ではそろそろ行こうか、理子君。いつまでもここにいても仕様がなしね」

「はい……」

男の声に続いて、理子が返事した。

そして、傍らにいた理子は男の下に歩き始める。

なっ……なにやってんだよ、お前！

慌てて俺は理子を引きとめようとして——

突如、突風が俺の身体を叩き、後方へと吹き飛ばした。

「がッ!？」

なん、なんだいまのは?! 自然現象じゃない。まさか、こいつも超能力者か?!

強打した背中の痛みに耐えながら、俺はなんとかよろよろと立ち上

がる。だいぶ距離が開いたその先では、男の隣に理子が寄り添っていた。

男は言う。

「では、今宵はここまでにしよう。なに、いずれまた会える。僕はそう推理しているよ」

「ッ！ ふっぎけんなああああああああああああああああ！」

立ち上がり、一気に駆け出す。だが、俺がやつにたどり着く前と理子の影が消えた。ハツチかなにかに降りたんだろう。

そして、

ズズズズズズズッ！ と音が聞こえ始めた。

先ほどとほぼ同種の音でありながら、結果は間逆。つまり、ボストークが再び潜水を始めだした。

や、やばい！ このまま荒れた海に放り出されたら、やっぱ溺れ死ぬぞ!?

と、そのとき、

「——おっと、そうだ。特別だ、君に贈ろう」

とかなんとかまたあの男の声がどこからか聞こえ（風の超能力を持つてるならそれをスピーカー代わりにしたのかもしれない）、次の瞬間、輪投げのように、俺の身体を何かのわっかが通過した。

……ていうか、これ、

「浮き輪じゃねえか！ いや、助かるけども！ なんでレジャー用だバカ野郎、もっと本格的な救命道具よこせよ！」

つつこみに返る言葉もなく。

——結局、俺はキンジが手配したであろう衛生科^{メデイカ}——武偵活動の現場に於ける医療・救助活動を学ぶ学科——の生徒を乗せた車輛^{クルマ}科のモーターボート集団が来るまで、浮き輪でプカプカ転覆しないように浮き続けたのだった。

* * *

——かくして。

嵐のような……というかまんま嵐の日も終わり、俺は再び武偵病院に搬送された。

矢常呂先生にはそりやもう怒られた怒られた。勝手に病院抜け出した挙句、新しい傷まで作って帰ってきたんだから。

結局、説教は翌日の朝から始まって昼過ぎまでおよび、それが終わって解放されると俺はごろんとベッドに横になった。それから、いろいろあつたおかげで訪れた眠気に身をゆだねながら、俺は今回の事件の顛末を思い浮かべていた。

俺と同じく武偵病院に来たキンジ（昼頃には帰っていった）から話を聞くに、どうやら飛行機はミサイルに爆撃されて（夢じゃなかった）損傷するも、キンジのアイデアで無事に着陸したらしい。しかも、その着陸場所がレインボーブリッジを挟んで学園島の反対にある空き地島——地形面積はどちらも同じだ——だっつーんだから、ホントに無茶するもんだぜ、キンジ。どうせヒステリアモードだったんだろが。

代わりに、今度は俺も理子のことを聞かれたが……まあ適当にはぐらかしておいた。隠し事になっちまうが、キンジにはあの男の話をしたくなかったからだ。少なくとも、俺がいろいろと調べ終わるまでは。

——俺と、キンジと、去年の12月。

この関連には覚えがある。俺とキンジを一まとめにして『アルケミー』にすると、『アルケミー』と去年の12月というキーワードが残る。そして、いつだったかキンジはこれに激しく反応していた。

こりやあ、今度にも調べておかねえとなあ……。

……とここで。

結局、キンジが空港にいた理由とエリアが飛行機に乗った理由がわかんなかったな。

ま、多分あれだろ。あいつら、あらかじめ理子がああの飛行機に乗り込むことがわかってたんだらうな。

……あれ？ それだと今度は理子がああの飛行機にいた理由が無くなる気が……。

んー……わかんねえや。ま、とにかくなんか理由があるんだらう。とりあえず、そんなことより俺は早く体力を回復させねえと。疲労

う事実には怯えつつ、俺は、

「……は、ハロー？」

『……………』

む、無言怖え！ なにか言ってよ！

「お、おーい？ 聞こえてる？」

『人に頼みごとをしたあげくすっぱかした愚か者の声なら聞こえてい
るが』

「あ、はい、ほんとスイマセンデシタ」

俺は、見えてるわけではないのだがその場で深く頭を下げた。

えーと、だな……まあ、お気づきかもしれないが、電話の相手は、ロ
ンドン行きの手配をしてくれた友人だ。

受話器から聞こえてくるその声は、とんでもなく底冷えしている。
そりやそうだよ。俺、ロンドン行きのチケット用意してもらった上に
滞在所まで用意してもらったのに、いまだに日本にいるんだから。
これは、キレないほうがおかしい。

こつちが悪いのは百も承知だが、それでも一応言い訳はしておく。
「い、いやな？ それが、言っても信じてもらえねえかもしれねえが、
こつちもいろいろあったんだよ。あ、違うよ？ これ、誤魔化そうと
かしてないよ？ そうじゃなくてだな、なんというか不幸というか、
のつぴきならない状況に——」

『……はあ。別に、もう構わないよ。ハイジャック、だったんだろう
？』

「——え？ お前、なんで知って……」

『さすがに意味もなくキミが約束を破るとは思わなかったからね。羽
田空港でなにか起きてないか調べてみたら、一発でわかったよ。キン
ジも、そうだったんだろう？』

「あ、ああ。でも、すげえなお前。ロンドンにいるのに、もう調べがつ
いてたのか」

『そつちでもニュースになっっているだろう。そのレベルの情報なら、
今は地球の反対側からでも知れる時代だ。……それに、犯人が——』
ん？ なんだ、今なんか小声で言ったか？

聞き返そうと思ったんだが、それよりも早く、

『いや、なんでもない。それよりも、レン。ローマの時も言ったが、君は……まあ、これはキンジにも言えるかもしれないが、やはり危なっかしい』

「あん？　なんだよ、いきなり」

あまりに唐突すぎる話題転換に、俺は疑念を露にする。

しかし、なかなか返事が返ってこない……いや。なんか、小声でブツブツ言ってるぞ。「あまりに早すぎるが」とか、「いやこれは会いたいからじゃなくて」とか……なんの話だ？

さすがにそろそろ不気味になってきたので、呼びかけようとした次の瞬間、

『……よし。決めたぞ、ボクは』

「は？　何が？」

『い、いや。なんでもない。それより、ボクもやることがある。そろそろ切らせてもらおうぞ』

「あ、そうなのか？　マジで悪かったな、ロンドン行きのこと。ホントに、申し訳ねえことしちまった」

『構わない、と言っただろう？　事情はちゃんと把握してる。それに、文句なら今度直接言わせてもらおうさ。——じゃあ、これで』

「ああ、またな」

……よし。通話終了つと。

はあああ、生きた心地がしなかった。しかし、心広いな、あいつ。今度、なにかお礼でも送ろうかな。外国宛ってどんくらい金かかんדרうか。

俺は一度、大きく背伸びする。

さて、と。それじゃあ………うん？

あれ。なんだ、なんか違和感がある。あいつ、さつきなんか変なこと言っただけじゃなかったっけ？

…………忘れた。ま、いっか。どうせ気のせいだろ。

それより、これからどうすっかなあ。病室戻ったって、結局また暇になるだけだしなあ。

「……………」

よし。

抜け出そう、病院。

ま、ちよつとくらいならバレねえだろ。多分。

というわけで、俺は一旦1階のトイレに向かい、窓から抜け出て武偵病院を脱出した。

「さて、抜け出したはいいが……どうすつかねえ」

アンビュラス 救護科の専門棟を横目に見ながら、俺は夜の学園島を歩く。

うーむ。衝動的に出てきたもんだから、存外やることねえな。

このまま家に帰り、ゲーム機でも持つてとんぼ返りする、という手もある。が、それは最終目標にしておこう。すぐにそれを済ませたら、また帰らなければならなくなる。

せつかく出てきたんだからそれは嫌だなあ、となんとなく空を見上げて――

「おお……」

思わず、そんな感嘆がこぼれた。

昨日の台風が過ぎ去った影響か、視界に広がる夜天には、瞬く星たちが数多光り輝き自らを主張していた。めずらしいな、東京でこんなに星が見えるのは。

「天体観測、つてわけじゃねえけど……どっかに寝ところがつて、空でも見るかな……」

言ってから、それはなかなかいいアイデアだと思ひ始めた。ここ最近殺伐として、なんか落ち着いた感じが欲しかったんだよなあ……。

どっかいいところはねえかなと左右を見渡して……俺は、第1女子寮を発見した。

「あー……あつこの屋上、なかなか眺めがよさそうだな」

つつても、さすがに男の俺が入るわけにもいかねえしなあ。

……あ、そうだ。誰かに見つかったら、時雨に会いに来たことにもしよう。

俺は、本人にばれたら「ほう、なるほど。つまり君は私を出汁に使っ

たと、そういう見解でいいんだな？」とか詰め寄られそうな言い訳を考えながら、エレベーターが故障中だったんで、非常階段を使って屋上まで上った。

幸い、屋上には誰もいなかった。って、そもそも屋上なんてめったにこねえもんかもしんねえけどな。

俺は階段扉を出て、その側面に回りはしごをつかって上に上る。ここが、この女子寮で一番高いからな。

登りきった俺は、そのままごろんと横になる。見上げるまでもなく、俺の視界はちりばめられた宝石みたいな星々に埋め尽くされた。

星空の天蓋。いいね、なかなか見ない光景だ。

なんつーか……あれだ。癒されるな、これ。心が洗われる様だ。地上に比べて、空のなんと穏やかなことか。……いや、よく考えたら俺はさつきまでお空でドンパチしてたんだったか。

そんなことを思いながら、俺は空を眺め続けるのだった。

* * *

遠山キンジは自室で一人、迷っていた。

右手に握られるのは一枚の書類。かねてからマスターズ教務科に提出する予定だった、転出申請書だ。

これを出せば、キンジは晴れて4月から一般校に通うことができ。それが夢だった。望みだった。だけど。

今キンジの頭と心を席卷するのは、まだほんの少しのつきあいしかない——過去を入れても、一月と共にいない——ピンクツイントールの少女の姿だった。

(アリア……)

実を言うと、さつきまでアリアはこの部屋にいた。そして、2人でいろんな話をした。

東京を覆う満天の星空のこと。アリアの母・かなえの公判が武偵殺しの件で伸びたこと。一連の事件のもう1人の立役者にしてアリアにとってはキンジともども初めての『仲間』である錬のこと。キンジとの約束に従いパートナーは解消すること。東京での4ヶ月のこと。

そして——アリアがロンドンへ帰ること。

アリアは言ったのだ。キンジと錬のおかげで、この世界に1人も味方がいないわけではないと知った、と。だから自分は大丈夫だ、と。だが。

キンジの部屋を出たアリアは、玄関の前で泣いていた。扉一枚隔てた向こう、ドアスコープの中で、アリアは肩を震わせ、「もうあんたたち以外にパートナーなんて見つかりっこない」と涙を流していた。それを。

だからどうした、と見なかつたことにはできる。

そもそもアリアが来てから自分の生活は狂いっぱなしで、転校する予定の平和な一般校とはまるで間逆だ。

だから、これでいい。このままアリアはロンドンに帰り、自分は残りの1年を過ごし無事にここを去っていく。

それでいいはずだ。

そう。それで——

「——いいわけ、ねえだろ」

キンジは小さく、けれども力強く、自分に言い聞かせるように呟いた。

ああ、わかっている。これは同情だ。1人震える子猫のようなアリアを、ほっとけなれないと思ってしまう。助けたいと、そう思ってしまった。

だったら、違うだろう遠山キンジ。お前が今やるべきことは、こんなところでつつ立っていることじゃないだろう。

自分が今、本当にやるべきことは——

「——アリア……ッ！」

キンジは、勢いよく自室を飛び出した。

目指す先は、第1女子寮。その屋上、ヘリポートだ。そこに、アリアをロンドンに連れて行ってしまおうロンドン武偵局のヘリがあるはずだ。

(行かせない！ お前を独奏曲^{アリア}のままで行かせない！)

早く、速く。

正直なんでここにいるのかわからなかったが……そんなん、どうでもいい!

お前ら助けしてくれるのか! ホントありがとう!

心の中で、最大限の感謝をしつつ。

俺は、ちよつと怒鳴られたくらいでキレル沸点低い黒スーツ集団から逃げるため、2人の友達の下へと飛び降りるのだった――

* * *

キンジがヘリポートにたどりつくとおそらくはロンドン武偵局の役人とともにアリアが乗るヘリは、すでに離陸を始めていた。

プロペラが大気を攪拌し、巻き起こる風が周囲の音を掻き消していく。

しかしキンジは、それでも諦めずに叫び続けた。呼び続けた。アリアの名を。

「アリア! アリア! アリアあああああああ!」

喉が張り裂けるほど、強く。風の音すら、切り裂くように。

そして。

キンジの本気の叫びに応えないほど、世界は、そしてアリアは厳しくない。

「バカキンジ! 遅い!」

アリアが、ヘリのドアを開け放ち、キンジに負けないほど大きく返す。

さつきまで泣いていたくせに、とキンジは内心思いながらも、しかしそれ以上に強い気持ちでアリアを待ち受ける。

次の瞬間、アリアは勢いよく、ワイヤーを使ってヘリから飛び降りた――のだが、若干上手く行かなかったのはまあご愛嬌だろうか。

その時、ヘリから黒スーツの男が叫んだ。

「Aria! What, are you doing!」

その声は、英語が堪能ではないキンジにもわかるほど焦りと困惑を含んでいた。

ロンドン武偵局としては、主力だったアリアの力はまさにながんでも確保しておきたい。だから、アリアの勝手な行動を止めようと

とも何度も衝突した。

自分は、ガキだ。だから誰かを傷つけるし、誰かに傷つけられる。全てをうまくこなすなんて、できやしない。

だが同時に、せめて今だけはガキでよかったとも思う。大人ぶった連中よりも、自分に素直になれるガキだったから、こうして今ここに来れている。利害以外の感情に突き動かされて、守ってやりたいやつを取り戻せた。

この、孤独な子猫を。ずっとひとりぼっちの独奏曲^{アリ}を。

(だけど、もう1人じゃない)

自分が、アリアを1人にしない。たとえアリアが1人で歌い続けるのだとしても、自分は一緒に歌えなくても、せめてBGMくらいにはなつてやる。

それはきつと。あそこで俺たちを見下ろしている元相棒だって、同じ気持ちのはずだ。だからここにいるはずだ。

去年、あの相棒と決めた。自分たちはもう、組むことは無いと。

だが、もしもまたもう一度戻れるのなら。今こそそのチャンスだというのなら。

自分勝手かもしれないけど、せめてここを去るまでは、あの頃に戻りたい。

そんなことを、キンジは思った。

だから、そう。まずはいつかのように、ガキはガキらしく――

「逃げるぞ錬！・早く来い！」

――怒った大人から、逃げることから始めよう。

* * *

それは、半年前の会話。

ロンドンの一角にある、大きなお屋敷で交わされた、母と娘の会話だ。

「ねえ、聞いてママ！ あかね、あたし、ローマですごい奴らにあったの！」

「へえ。あなたがそこまで言うのなら、それはすごい方たちだったのね」

「うん！ しかも、ママと同じ日本人。あたし、ビツクリしたわ。世界にはちやんと、あたしについてこれる人がいたんだって」

「あら？ じゃあ、その人たちがあなたの『パートナー』になるのかしら？ それとも……ボーイフレンド、かしら？」

「ふえ!? ぼ、ぼぼボーイフレンドとかじゃないわ！ そ、そりや確かにどっちも男だったけど、で、でもそんなじゃないからっ！

……だけど、そうね。いつかまたどこかで会ったら、ドレイくらいにはしてやってもいいかもね」

「あらあらこの子ったら。素直じゃないんだから」

「な!? そ、そんなんじゃないってばあ〜！」

穏やかに笑う母に、慌てたように娘が言い返す。

彼女の言葉が現実になるのは、もう少し先の話だ。

そして。

その時こそ、きつと――

――緋弾のプロローグが始まる。

第一章 緋弾のプロローグ END

流れ弾（アウト） 1〜3

流れ弾^{アウト}1（「8・神崎・H・アリアによる唯我独尊な命令」より）

西原瞳^{にしはらひとみ}は、2年A組所属の女子生徒である。シャギーを入れた薄茶色のボブカットが特徴的な少女だ。

そして同時に、瞳は気弱な少女である。この東京武偵高に進学したのも、もともとは友達に誘われたからという理由からだ。所属学科も^{アンビュラス}救護科と、とことんまで荒事には向かない性格だった。

そして。

そんな彼女は今、喧騒の真っ只中にいた。

「キーくんは彼女の前で、ベルトを取るようななんらかの行為をした！　そして彼女の部屋にベルトを忘れていった！　つまり2人は——熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよ——！」

まだなじみのない教室に、どこか面白がっているような声が響く。新学期のHR。担任となった高天原ゆとりによって、神崎・H・アリアという少女が紹介された。彼女は去年の3学期に転校してきたらしく、まだ面識のある者も少ないだろう、という高天原の配慮だった。

そして、その彼女が今回の喧騒の中心人物である。

なんと彼女は紹介早々、瞳と同じくA組所属の遠山キンジの下に向かい、彼にベルトを投げ渡したのだ。

それを見た峰理子が、本気かどうかよくわからない推理——キンジとアリアが恋仲である——をぶち上げ、それに触発されたクラスメートたちが騒ぎ出した。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつのまに!?　影の薄い奴だと思ってたのにッ」「女子どころか他人……いや錬以外に興味が無さそうなくせに、裏でそんなことを!」「せつかくレン×キンだと思ってたのに！　フケツッ!」

ちなみに錬とは、今自分の左隣の席にいる男子生徒・有明錬のことだ。黒い髪に、同じく黒い瞳。そこまでは純正日本人として構わないのだが、ただ彼の目つきはすこぶる悪く、瞳は内心そんな錬の目に

ちよつとした恐怖心を抱いていたりした。

が、まあそれはそれとして。今の瞳はそれよりも、アリアの様子に怯えていた。

(こ、怖い……あの子、震えてる。きつと怒ってるんだ……)

その予想は実に正しく、実際アリアは怒っていた。自分が忌避する分野——恋愛でからかわれたことに。

そしてここは武偵高。アリアは、あっさりホルスターから二丁拳銃を抜き出した。

「ッ!？」

その銃口がこちらを向いていたことに、瞳は小さく悲鳴を上げた。

が、当然それはアリアには聞こえず、彼女はためらいなく引き金を引く——直前、鍊が立ち上がった。

刹那、教室内に2発の銃声が轟く。

その内の1発は鍊に当たったらしく……彼は小さく呻きながらも、平然と腰を下ろした。

瞳は、ぽかんと口を半開きにして、鍊を見た。

(もしかして……守ってくれたの……?)

彼の行為を、瞳はそう解釈した。そうでもなければ、今の行動に説明がつかない。

だが……こんなたまたま席が隣になっただけの相手を、銃弾から身体で守ったりするものだろうか？

と、そこまで考えたところで、瞳は「そういうえば」と思い出した。

確か以前、強襲科アサルトの友達が話してくれたことがある。

『うちの科にね、去年有明鍊っていうすごいやつがいたんだ。もちろん腕がすごいっていうのもあるけど、ポイントはそのじゃなくて。あいつ、いつだつて仲間が危ない目にあつたら、それを庇ってあげるんだよね。俺はそんなつもりじゃねー、とか言いながらさ』

その台詞を脳内で再生して、そして瞳は眼前の少年こそがその有明鍊であったことを思い出す。

(ホントだ……)

声には出さず、ただ心中で認める。

友達の言うとおりであった。有明鍊という少年は、本当に打算なしで誰かをかばえるような人間だった。

——だから、というわけではないけれど。かばってくれた、というだけでもないけれど。

瞳はなんとなく、隣の席の男の子を見つづけた。

彼は、本当になにごともなかったように平然として……その姿が、なんだか瞳にはとても大きく見えた。

その瞬間、

(誰かを、守る……)

瞳は、何かが始まった気がした。

今までただ流されるままに武偵を続けてきた彼女は、しかしここで明確に何かを思い描き始めた。

後方で誰かを治すだけでなく、こんな風に前に出て誰かを守れたら。

その思いが小さな火種になり、その後瞳は自由履修という制度を利用し、強襲科の訓練に参加するようになる。

これが、いずれ『ヴァルキユリア医戦乙女』と呼ばれる武偵となる西原瞳が、新たな一步を踏み出した日であった。

アウト流れ弾2 (「11. 『97. 1%』の学科」より)

ひの火野ライカ。

金に輝くポニーテールと長身、そして男勝りな性格(とばかりも言えないのだが)が特徴的な、アサルト強襲科所属の1年生だ。

彼女は今、強襲科の黒い体育館の2階——トレーニングルーム——から、1階で行われている騒ぎを見ていた。

眼下では、先輩たちが群れを成して2人の男子生徒の下に集まっているところだった。

それをなんととはなしに見ていたライカに、隣に立つ友人・まみや間宮あかりが尋ねる。

「あれが、『アルケミー』って呼ばれてた先輩たち？ あたしがイメー
ジしてた感じと違う……」

「だよな。だけどあれでも、先輩たちによれば伝説の「コンビらしいぜ」今、1階が大騒ぎになっているのには理由がある。

かつて強襲科で勇名を誇った2年生、遠山キンジと有明錬。すでに転科しているはずの彼らが、どういうわけかこうして強襲科に帰ってきているからだ。

だが、そんな伝説2人の遠めに見える姿は、あかりの言う通りあまり強者という感じはしない。

しかし、

「上勝ち狙った1年もいたらしいけど、返り討ちにされたってさ。実際、アタシから見ても、なんか勝てなさそうな気がするんだよなあ……（遠山先輩には、だけど）」

「え？」

小声で言った最後はあかりには聞こえなかったらしく、聞き返される。ライカは肩をすくめながら、「なんでもない」と返した。

* * *

なにやら1階でごたごたがあつたらしく、キンジと錬は別行動をとり始めた。

そして、錬が射撃レーンに向かったのを見て、ライカは行動を決めた。

（やっぱ、狙ってみるか——上勝ち！）

あかりに別れを告げ、ライカは錬の後を追って射撃レーンに向かう。

その途中、ライカは思い返していた。

（今まで、何回か有明先輩は見たことがある。だけど、いつ見ても……勝てないって気はしなかった）

カン、と言つてしまえばそれまでだが、ライカはある程度力量差を讀める。第六感的ななかで自然と、相手がどれほど自分より強いかが、あるいはどれだけ弱いかが見えてくる。

だから、なんとなくわかるのだ。自分が勝てない相手が。

だが、錬からはなぜかその気配がしない。感じる気配は極小、強者特有の『絶対的な威圧感』が存在しない。あたかも、そこらの凡夫の

ように。

ゆえにこそ、ライカは挑む気になったのだ。伝説と呼ばれた男に。あわよくば、倒してしまおうと思って。

——そんな考えがいかに愚かかも知らないで。

ライカが射撃レーンの入り口に差し掛かったとき、室内に6発の銃声が轟いた。

「……は？」

同時、目撃した光景にライカは呆然とした声を漏らした。

射撃レーンに入ったライカが見たのは、丁度鍊が撃つシーンだった。

しかも、構えてから撃つまでの間断がほぼゼロの早撃ちを^{ファスト}6連発。それも、全弾がマンターゲット（おまけに、最も狙うべき三点）に命中していた。

確かに、並みの力量ではない。ではないが……、

（い、いや！ アタシだってあれぐらい頑張ればなんとか——）

「おい、見たか今の。目隠し^{ブライインド}撃ちであんな精度、ありえんのかよ？」

（は、はあ?! 目隠し?!）

なんとか自分を鼓舞しようとしたライカの耳に届いた言葉に、思わず愕然とした。

自分は、今の技を目隠しで出来るか……いや、否だ。それなりに優秀だと自負しているが、さすがにそんな曲技めいた射撃はできない。

それが出来るのは、本物の——

「悪い、そこ退いてくれるか？」

突如かけられた声に、ライカははつとする。

気づけば、目の前には件の先輩、有明鍊がいた。どうやら自分が入り口に立っているため、鍊が退出する邪魔になっていたらしい。

それに気づいたライカは、反射的に返事した。

「え、あ、は、ハイっ！」

横にずれ、鍊に進路を明け渡す。

その隣をすり抜けて去っていく鍊の背を見ながら、ライカは思った。

(違う……今の有明先輩、全然雰囲気がちがった。今度は間違いなくわかる。アタシは勝てない。アタシは……勘違いしてたんだ)

ツウ……と、こめかみを冷や汗が流れる。

——発想が、逆なのだ。

勝てない気がしない？ 違う、勝てるように見せているだけなのだ。

能ある鷹は爪を隠す、ということわざを引き出すまでもなく、実際武偵高の3年は抜き身の実力を見せない。真の強者は、本当に力を出すときのみ、力を見せる。

そして有明錬の隠匿は、さらにその上を行く。

実力を隠す、というのはその行為自体が逆に違和感を引き起こす。対して錬は、あまりにも自然に「有明錬は弱者だ」と相手に思い込ませていたのだ。

(あれが、『アルケミー』の一人、有明錬……)

今まで何度か見た。ライカは心の中でそう言った。

だが、それは間違いだ。

ライカはこの日この時、初めて有明錬という男に出会ったのだった

流れ弾^{アウト}3 (「12. 一つの事実、数多の意味」より)

間宮あかりは、走っていた。

中学生らしい小柄な体軀を動かし、大き目のリボンで二つくりにした髪を揺らしながら。

ひたすらに、ひたすらに。自分でも若干どこを走っているのか、わからなくなるほど。

つまりはそれぐらいあかりは混乱していて、そしてその原因はついにさつき出会った有明錬という少年の発言にあった。

明言したわけではないけれど、彼はこう言った。

——「自分とアリアは恋人だ」と。

(なにそれなにそれなにそれなにそれ——！)

胸中で叫びつつ、あかりは走り続け……結局電信柱にぶつかってし

まうまで、その疾走（迷走？）は止まらなかった。

* * *

「アリア先輩！」

尊敬する先輩である自分の戦姉あねの名を大声で呼びながら、あかりは第1女子寮の一室に入っていた。

ここは神崎・H・アリアの、そして今は自分も泊まっているVIPルームだ。室内の調度品のほとんどはアリアが祖国であるイギリスから運び込んだ高級品である。

それはそれとして、室内の革張りのソファアームに座り『もまん』と呼ばれるあん饅を頬張っていたアリアは、いきなりの大声に思わず驚いた。

「あ、あかり？ 帰るなり、なによいきなり？ というか、どこ行つたのよあんだ。様子を見に来てもないなかったから心配したのよ」

「ありっ、ありり、ありやりや先輩！」

「誰よそれ……」

どうやら、あかりはよっぽど慌てているらしい。

なにがあつたのかと訝るアリアにあかりは、わたわたと両手を上下させながら、

「さ、さささつき、有明先輩が言つてたんですけど！」

「錬？ 錬がどうしたつていうのよ？」

自分がパートナー候補として目をつけている少年の名に、アリアは眉根を寄せた。

というかそもそも、あかりには錬のことを話した覚えはない。もしや知り合いだったりしたのだろうか、とアリアは当たりをつける。

そんなアリアの様子に気づくことも無く、あかりは相変わらず慌てたままで、

「う、ウソですよね?! アリア先輩が有明先輩と——」

一体なにが飛び出してくるのかとわずか身構えながら、アリアは乾いた喉を潤すためにティーカップから紅茶を一飲みして、

「恋人同士だなんて！」

直後、盛大に嘖き出した。

イギリス製のアンティークテーブルが水びだしになる。そんな貴族らしからぬ所作を取ってしまったことにも気を回せず、アリアは絶叫した。

「はあああああああああ!」

顔を真っ赤にして、アリアは後輩が言った言葉を脳内で反芻する。

恋人。自分と、錬が。

……さっぱり、意味がわからない。

(ど、どういうことよ!? こここ恋人?! あたしと錬が?!)

思考回路は空回り、ついには言語機能にまで障害が現れ始める。

「What?!」

Why?!

When did I become him and a sweet heart

?!

「あ、アリア先輩! 何言ってるかわかりません! 肯定してるんで

すか?! ホントにそうなんですか?!」

「It's not confessed, either!」

「アリア先輩——っ!」

英語でわめくアリア、意味が分からずさらに混乱するあかり。

混乱の度はどんどん深まっていき。

結局、錬があかりをからかっただけだろう、という結論に落ち着くまで、アリアの部屋からは大騒ぎが漏れ聞こえ続けた。

第二章 銀氷の架け橋

18. 月光の下で

「…………お、おい。こりや、さすがに無理すぎたんじゃねえか…………？」
「だ、だな…………」

「こつ…………この、バカキンジ！ あんた、バカキンジモードなのね！」
第1女子寮に隣接する、菜園部なんかが利用している温室。

その中で俺たちは、色とりどりの花々に囲まれながら、重なって横たわっていた。

見上げれば、ビニール製の天井には大きな穴がぼっかり開いていて、そこから夜空に浮かぶ月が覗いている。

あの、わけのわからん黒服集団から逃げ出したのはいいんだが、その方法をキンジの馬鹿に任したのは失敗だったかな…………。

「普通、温室の屋根をクッション代わりにしようなんて思いつくもんかよ…………痛ってて…………」

「しかたないだろ。今の俺じゃ、これが限度だ」

節々が痛む体をむりやり起こして、俺はキンジに文句を言う。

まさか、女子寮の屋上から飛び降りる日がくるとは思いもよらなかったぜ。

まあ、確かにヒステリアモードじゃないお前にスマートな脱出方法が考え付くとも思えねえが。つか、アリアのやつ、今『バカキンジモード』つつったか？ ばれかけてんじゃねえか、ヒステリアモード。

で、そのアリアと言えば、落下の際に打ち付けたのか尻をさすりながら立ち上がり、

「ま、バカキンジに期待するだけ、損つてもんでしょ。それより…………キンジ。あんた、何かあたしに隠してない？」

「な、なにがだ？」

「あんたには、何か急激に強くなるスイッチがある。誤魔化してもダメよ、あたしはもう確信してるから。肝心の、スイッチが入る条件まではわかんないけどな」

「うぐっ……！」

ほらみろ、バレてら。

てか、肩大丈夫かな。あんな落ち方したんだから、また痛めてつかもなあ。

と、俺が軽く右肩に触りながら安否を確かめっていると、

「——で、鍊。あんたもよ」

「あん？」

俺が、なんだって？

「キンジに聞いたわ。あんた、理子を見逃したんでしょ？」

「うぐっ……！」

アリアのつつこみに、今度は俺が唸る番だった。

そうなんだよな。なりゆきとは言え、理子の担当任されたの、俺だったんだよなー。

だからだと冷や汗を流し始める俺に、アリアはビシッ！ とちっこい人差し指を突きつけて、

「あんたの問題は、その甘さよ。いくら理子が武偵高の仲間だったからってねえ、逃がしていい理由にはならないわ！」

は、はい？

いや、別にそういうのじゃなくて、普通に負けたんですが。

なにか誤解されているようなので、俺は、

「い、いや、それは違って——」

「だから！ あたし、決めたのよ。あんたたちがしつかり戦えるように調教すれば、完璧なパートナーになれるって」

話聞こうよ、アリアさん。

というか……ち、調教？

これは、お前が外国人だから言い間違えただけなんだよな？ 本当は訓練って言いたかったんだよな？

なぜかそこはかたなく、アリアは本気で言っているような気がしつ
つ、

「まあ……とにかく、だ。そろそろここ出ようぜ。いつまでもこんなとこいたってしょうがねえだろ」

と、俺は露骨に話題を逸らす。

実際問題、このままここにいたらあの黒服連中が追いかけてくる可能性もあるしな。

そんな俺の提案に、

「……それもそうね。いいわ、じゃあ帰りましょ」

と、アリアは一つ頷いて乗ってきた。

で、そうと決まれば即行動が神崎・H・アリアという女だ。

「ほら、ぐずぐずしないでさっさと行くわよ!」と、まるで自分が提案したかのように先導する彼女に、俺はため息をつく。

……まあ、なんとというか。

「すっかり元通りになったなあ……」

「だな」

隣で苦笑するキンジに、俺も同じく苦笑で返し。

月明かりの下で鮮烈な笑顔を浮かべる、赤紫色の瞳をした女の子を

追いかけて始めたのだった――

* * *

夜中ゆえに人通りのない学園島を、俺たち3人は歩く。

目指す先は、第3男子寮。キンジたちは単純に帰宅（言ってもアリアの方は居候なんだが）のため、俺は当初の予定通り自室に暇つぶしの道具を取りに行くためだ。

そして、その道中。ふと、思い出したようにキンジが言った。

「そういや、アリア。ずっと気になってたんだが……理子が言ったた『オルメス』ってなんのことだ?」

オルメス? なんだっけそれ……ああ、いや。そういや理子のやつそんなこと言ってたな。

確か、アリアのことをオルメス4世だとか、オルメスを斃さなきやならない……とか。

結局、あん時はそれどころじゃなくて、聞けなかったしな。

ちようどいいや。ついでに俺も聞いとこう。

「ああ、俺も気にな――」

「はあ?! あんた、まだ分かってなかったの!? 信じらんない! ギ

俺が、尊敬する人……だ。
だから。

子孫とはいえ、あのホームズを目の前にした俺の心境は、本来なら
歓喜とかになるはずなんだろうけど……。

「ホー、ムズ……!?!」

「そう！ で、あんたたちはあたしのパートナ^{ホームズ}ーに決定したの！ も
う逃がさないからね！ 逃げようとしたら——風穴あけるわよ！」

右手で拳銃の形をつくり、俺たちに突きつけてくる
ホームズ^アの子孫^ア。

いくらなんでも……ありえねえだろそれ！

予想を数十段くらい飛び越えた真実に、俺はくらりとなる。

そんな中、アリアは、

「まったく、キンジはホントに戦闘以外からつきしんだから。錬を
見習いなさいよ、こっちはママのことまで調べてたのよ？」

「え……そ、そうなのか、錬？」

「ああ……」

「ほら見なさい！」

「ま、マジか……」

……あれ？ 今、無意識でなんか言わなかったか、俺？

ま、まあいい。とにかく、だ。

アリアは、シャーロック・ホームズの子孫、か。……うん、もう納
得しとこう。あんまり深く考えすぎると、ホームズのイメージが崩れ
そうだ。

——という感じで、俺がなんとか精神の均衡を立て直した、その時
だった。

「錬さん」

と、背後から小さな、しかし聞き慣れた声がかげられた。

誰だ？ と思い振り返る。

そこにいたのは……狙撃科^{スナイプ}の少女・レキだった。

「え……レキ？ お前、なんでここににいるんだ？」

こんな時間にこんなところにいるのもそうだが、俺になにか用でも

あんのか？

そういつた意味を籠めた問いかけに、彼女は真つ白な細い喉を震わせて、

「あなたを、連れ戻しに来ました」

「は……？」

あまりに意味がわからない彼女の言葉に、俺は思わずそんな呆けた声を出した。

ど、どういうことですか？

さっぱりレキが何を言いたいのか理解できない俺が、彼女に問い返すよりも早く、

「——どういうことよ、それ！」

自称・ドレイ有明錬のご主人様ことアリアが、烈火のごとく声を上げた。

おい、なんでお前が出てくる。ややこしくなるから引っ込んでろ。しかも、

「アリアさんには、関係ないことです」

よせばいいのに、レキも律儀に返事する。

ああ、ダメだぞレキ。そういう言い方は、この仔ライオンにとっては火に油を注ぐことにしかならねえんだ。

案の定、レキの物言いにカチンと来たのか、アリアは顔を赤く染める。……と同時に、両手が太ももに伸びた。やばい、ガバメント抜く気だこいつ!?

「よ、よせアリア!？」

慌ててキンジが止めに入るが、そんな言葉で止まるようなやつじゃない。

あわや戦闘勃発かと思われたその時——

「これは、私の任務ですのぞ」

と、相も変わらず抑揚のない調子でレキが言った。

それに、アリアはびたりと動きを止める。

「に……任務？」

「はい。これは、私が依頼された任務です。ですので、アリアさんには

関係ありません、と言いました」

「な、なんの任務よ!？」

「それは——」

くるり、とアリアに向けていた顔を俺に向けてくるレキ。

そして、

「病室を勝手に抜け出した錬さんを、武偵病院に連れ戻せ——と、
矢常呂先生やところから頼まれました。拒否された場合、実力行使も許可されて
います」

ガチャリ、といつものことながら背中に背負ったドラグノフ狙撃銃
を鳴らすレキ。

……というか。

や、やべええええええ！ それ、矢常呂先生無茶苦茶キレてんじや
ねえか!?

しかも、

「は、はあ!?! 錬、あんた勝手に抜け出てきたの!?! なにやってんの
よバカ!」

「あーあ。俺は知らんぞ、錬。矢常呂先生が、『白衣の悪魔』って呼ば
れてるの、知らないわけじゃないだろ」

掌を返したようにアリアは俺を責め始め、キンジは他人事のように
恐ろしいことを言ってくる。

ああ……これは今度は説教じゃすまねえかもなあ……。
……しゃあねえ。

「わーったよ。大人しく戻るから、ドラに手をかけるのやめろ、レキ
「はい」

がしがしと頭をかいて、俺は寮に戻ることを諦める。あーあ、また
暇な生活に逆戻りかよ、クソ。

「つーことで、俺は病院に戻るわ。……ああ、それとキンジ、悪いんだ
けど、明日俺の病室にPSP持ってきてくんね?」

「ああ、それくらいなら任せろ。学校の帰りでもいいか?」

「おう——ほれ」

ひよいつと、キンジに自室のカギを投げ渡す。ゲーム機の置き場所

をあいっは知ってるはずだからな。これで明日までの辛抱だ。

「ちゃんと体休めるのよー」

「あいよー」

背後にかけられた声にひらひらと手を返ししながら、俺は来た道に戻るように歩き始めた。

しっかし、どうすつかなー。謝ったら許してくれるかな、失常呂先生。

「……………(トコトコ)」

まあでもしやあねえよな。迷惑かけたのは事実なんだ。ちゃんと謝罪はしねえとな。

「……………(トコトコ)」

てか、腹減つたなあ。晩飯前に空港に行ったから、昼飯から今までなんにも食ってねえや。時間外だけど、なんかもらえたりしねえかな。

「……………(トコトコ)」

……………つーか、

「おい、レキ。なんでついてきてんだ、お前」

RPGのパーティのように後ろを延々ついてきていたレキに、俺は首を回して怪訝な目つきを向ける。

怖いよ。夜道をずっと追いかけられるって、なんかの心霊体験みてえじゃねえか。しかも無言&気配薄いとか、まんま幽霊じゃん。

俺が立ち止まったからか、レキもピタリと静止して、

「私の任務は、あなたを武偵病院まで連れ戻すことです。現状、任務は完遂していません。ですので、私はまだあなたから離れることはできないのです」

「いや、逃げたりしねえけど」

「口約束は、確実性が低く保障がありません。錬さんが嘘をつくとは思っていませんし、信頼もしていますが、任務に個人的感情を持ち込むことは正しいことではありませんので」

「……………固ってえなあ、お前。まあ、いいけどさ」

レキの口ぶりからして、ここで俺が拘泥してもこいつは折れねえん

だろうな。

なので俺はその部分は諦めて、

「それでいいから、せめて後ろにつくのはやめろ。ついてくるなら、横に來い」

「……背後からの奇襲を、警戒されているのですか？」

「違う。何サーティーンだよ、俺は」

こいつ、たまに変なこと言うよな。さすがは不思議少女部門1位の美少女（武藤剛気調べ）こと、レキだ。

「そうじゃなくてだな、なんつーか、こう……無言で後ろについてこられると、居心地わりいだよ。囚人と看守じゃねえんだから、せめて並んで歩こうぜ」

「……わかりました。では——」

俺の言葉に一瞬考えるそぶりを見せたレキは、首肯してから俺の隣まで歩いてくる。

よしよし、これで少しはマシに——って、

「ば、バカ、近すぎだ！ もうちよい離れろ！」

誰も腕が触れるほど真隣に來いなんて言ってねえよ！

「……う・よくわかりませんが……わかりました」

心の底から「なにが悪かったのかわかりません」といった感じで小首をかしげ、レキはすすすつと横にスライド移動した。

ロボット・レキ、悔りがたしだな……。

レキのあだ名を思い出しつつ俺が歩みを再開すると、レキもそれに追従する。

……ちらりと、視線を横に向ける。

そこにあるのは、青白い月明かりに照らされたライトブルーの髪をした少女の顔だ。1年前から変わらない無表情、けれどもその造形は美貌と呼ぶには十分足りている。夜目がきいてきたからか、その造りがよくわかってしまい、なんとはなしに俺は少し気恥ずかしくなった。

考えてみれば……すげえ美少女、なんだよな。こいつも。なぜかこの学校には美人が多いせいで、忘れそうになるが。

そんな女の子と、夜道を2人きりで歩いている……や、やばい。なんか急にこのシチュエーションが恥ずかしくなってきたぞ、おい。

俺は若干上昇してきた頬の熱を誤魔化すように、前を向いたままでレキに話を振った。

「そういや、あー……昨日ハイジャックが終わった後、キンジも武偵病院に来ててな。今日の昼くらいまで、同室だったんだよ。で、その時にいろいろ話したんだが……バスジャックの時の爆弾、お前が処理してくれたんだって？ サンキューな」

「いえ。任務でしたので」

「……あ、そう」

「はい」

「……………」

「……………」

……か、会話終わったよ、おい。

ぐああああ、なんかもつとあつただろうよ俺！ これじゃあ、最初から無言だったより気まずいだろ！

話題の選択ミスに、俺は内心で悶える。

……が、その時、

「——『武偵殺し』は、いかがでしたか？」

「え……う？」

ふいに、レキがそんなことを聞いてきた。

お、おお。珍しいこともあるもんだ。まさか、俺に気をつかってくれてるのか？

やればできるじゃねえか、レキ！ 俺ちよつと感動しちゃったよ。せつかくレキが振ってくれた話題なんだ、さつそく乗ろう。

「ああ、『武偵殺し』なあ。やばかったぜ、あいつは。通常の戦闘能力もさることながら、なんと実は超能力者^{スデルス}——」

——だったんだぜ、と言いかけて。

そこで俺は、気づいた。

俺が今しゃべっていることが、任務の秘匿責任を違反しているから——ではない。

そもそもの話。

レキ、お前……なんで、

ハイジャックの犯人が『武偵殺し』だって知ってたんだ？

足が、止まる。それに気づいたレキが、立ち止まってこちらを振り返る。

夜の薄闇に、彼女の金の両目が妖しく輝いた。

ごくり、と俺の喉が鳴る。

ハイジャック自体は、もちろん知る者は多い。それこそ知ろうと思えば、俺の友達のようにロンドンからでも知ることができる。

だが。

その犯人の情報までは公開されていない。

いや、俺はハイジャックから即病院の流れになったから、もしかしたらキンジたちが話したという可能性はある。守秘義務を知っているあいつらが喧伝する可能性は、かなり低いだろうが、ゼロじゃない。なのに……なんだ、この嫌な予感？

あの事件の犯人が『武偵殺し』だと知っているのは、俺が知る限り、俺とキンジとアリア、そして本人である理子——そして、もう1つ。まさか、と最悪の想像が脳裏をよぎる。

——レキ。

お前。

お前は——

「お前……『イ・ウー』とかいう連中じゃねえよな？」

気づけば、俺はそんなことを訊いていた。

びゆう、と一陣の風が吹く。なぜか、頬を一滴の冷や汗が流れていた。

……って、何を訊いてんだ俺は。馬鹿馬鹿しい、そんなわけがねえだろうに。

ああ、クソ。やっぱ疲れてんだな、俺。こんなくだらねえこと考えちまうとは。

「いや、悪いなレキ、なんでもねえ。忘れてくれ」

そう、言おうとして。

しかしそれより早く、レキは言った。

「全ては、いずれわかります」

——と。

ぎちり、と。一瞬確かに、俺の思考は動きを止めた。

しかしすぐさま脳がレキの言葉を理解し始める。

「な、にを……」

「今はまだ、私は何も話せません。あなたやキンジさんはまだ、こちら側の世界に踏み込んだばかりです。ですから、今私に話せることはない」

「ち、ちよつと待ておい！ お前なんの話を——」

「——鍊さん」

慌てて問いかけようとした俺の声を、レキはさえぎる。

これもまた珍しいことだ、なんてどうでもいいことを頭のどこかが考える中、

「——強くなってください」

「え……？」

「あなたも、キンジさんも、そしてアリアさんも……今は、強くなるべきです。そして、来るべき時までにあなたたちが生き残っていれば……その時、あなたは知っていることでしょう」

「知っているって……何をだよ？」

「全てを」

ただの一言。それだけで、レキは簡潔に答えた。

それはつまり、それ以上を語る気は無い、ということだ。

——本当は。

もつといういろ、無理やりにも聞きだすべきだったのかもしれない。あんな目にあつた以上、情報は手に入れておいた方がいい。

だつてのに、俺は動くことすらできなかつた。

その金の瞳にか。あまりに意味のわからない話にか。あるいはそれ以外の何かか。

月光の下で立ち尽くす少女に、俺は何一つ聞く事ができず。

ただひたすらに……時だけが過ぎていった——

スナイプ

狙撃科の少女レキが救護科主任・矢常呂イリンに出会ったのは、偶

アンビュラス

然の感が強かった。

東京のみならず日本を震撼させたハイジャック事件が終結を見たのは、ほんの昨夜のことだ。日本国内で起きた飛行機を対象にしたハイジャック（本来ハイジャックは飛行機だけに限定したものでない）事件は、歴史を紐解いてもこれで4件目となる。まさしく日本の犯罪史に残る大事件であった。

その事件を解決したのは、3人の武偵——東京武偵高校の生徒である。

神崎・H・アリア、遠山キンジ、そして有明錬の3名だ。もともと、事件解決後に行ったマスコミの取材現場に錬はいなかったし、キンジたちもわざわざ錬のことは口にしなかった（それどころではなかったという事情もある）、公にはアリアとキンジが解決したことになる。とまれ。

事実としてやはり錬はハイジャック事件解決の功労者の1人であり、そして今彼は事件中にさらに負ったいくつかの傷を治療するため（もともと入院中の身であったことも相まって）、武偵病院に搬送されていた。

そのことを知ったレキは、翌日の夜にお見舞いに行き、錬の病室をひよいと覗いた所で、「あんのクソガキがア……！」と憤怒の表情で端正な顔立ちを歪める矢常呂に出会った。

と、そこで矢常呂はレキの存在に気づき、一瞬で般若のような顔を消すと、

「あら？　あなた、狙撃科のレキさんよね。どうかしたのかしら？」

その変わりようにさしものレキもワンテンポ遅れて返す。

「……いえ。錬さんがまた怪我をして戻ってきたと聞いたので、お見舞いに来ました」

「あらそうなの。でも、せっかく来てもらったのに、ごめんなさい。あのクソガキ——有明君、どこかに行っちゃったらしくて、ね」

「……………」

ね、の部分で大人の微笑みを浮かべる矢常呂だが、1分前の彼女を目撃しているレキとしては、なんともコメントしづらい。まあ、それがなくてもおそろく何も言わなかっただろうが。

鍊がいけないのならここにいてもしかたがない、と当然の帰結に至ったレキは、そのまま挨拶だけして帰ろうとした。

が、それより早く、

「——あ、そうだ。もし帰りに有明君を見つけたら、悪いけど連れてきてくれるかしら？ 誰か救護科の生徒を適当に探しにいかせてもいいんだけど、さすがに元Sランクの有明君相手に実行使は無理でしょうから。その点、同じくSランクで去年何度かコンビを組んでたあなたならって思うんだけど……どうかしら？」

「……。それは、依頼ということでしょうか？」

「うーん、依頼というか……まあ、そういうことにしときましょう。頼める？」

「わかりました」

一瞬もためらわず、レキは頷いた。教師という自分より上位の立場から下された命令なら、是非もない。レキの思考回路は、おおむねそんな感じだった。

以上の経緯を経て、レキは有明鍊の捜索に繰り出したわけである。そして、その任務は存外早く終わった。とりあえず武偵病院の屋上からドラグノフのスコープで探した結果、第1女子寮の屋上になぜかキンジやアリアとともに鍊はいた。

そんなわけできつそく向かったレキが女子寮についたころ、彼女の眼は遠ざかる鍊たちの姿を発見した。どうやらいつのまにか屋上から降りた上に、女子寮から離れていついていたらしい。

再び追いかけるレキ。そして彼女は鍊に追いつき、ひと悶着あった末に、ようやく鍊を武偵病院に向かわせることに成功した。自分という監視付きで、だが。

その道中。

有明鍊は言った。

「お前……『イ・ウー』とかいう連中じゃねえよな？」

それは、レキにとって予想内の質問だった。

なぜなら、レキはその直前、錬にとある名——『武偵殺し』という名を出したからだ。

今回のハイジャック事件は『武偵殺し』が引き起こしたという事実を知っているのは、錬たちや当の『武偵殺し』を除けば、とある組織しかない。

そう。『武偵殺し』が所属する世界最高峰の犯罪組織——『イ・ウー』しか。

だから錬が、その事実を知るレキはイ・ウーのメンバーなのでは？と疑うことは当然の結果ではあったし、レキ自身もまた話を持っていきやすかったのでそれをあえて否定はしなかった。

代わりに、何かを言おうとした錬に先んじて、レキは告げた。

「全ては、いずれわかります」と。

当たり前だが、そんな一言だけで納得する者はいない。再度問いかけようとする錬に、しかしレキは頑なに、「今は何も言うことはない」と突っぱねた。

そして、

「錬さん——強くなってください」

「え……う？」

「あなたも、キンジさんも、そしてアリアさんも……今は、強くなるべきです。そして、来るべき時までにあなたたちが生き残っていれば……その時、あなたは知っていることでしょう」

レキは錬に、そう言った。

口調はあくまで平坦に、金の瞳を闇夜に輝かせて。

——来るべき時。

錬、キンジ、そしてアリア。彼らがイ・ウーとかかわり続けるかぎり、いやそうでなくても起こるであろう——ある戦争が勃発した時。その時までには彼らが生き延びていたならば、きつと全てを知ることになる。

イ・ウーという犯罪組織。

神崎かなえが拘置されている理由。

レキという少女が持つ秘密。

世界を変える『鉱石』と、それを巡る『戦争』。

そして——『緋弾』。

その、全てを。

(知れば、錬さんたちはもう引き返せない。否が応でも、巻き込まれていく)

その未来はきつと遠くないと、レキは知っている。

その苛烈さを考えれば、あるいはここで全てを話して無理やりにも引き返させた方がいいのかもしれない。

しかしそれでも、レキは言った。強くなれ、と。強くなって生き延びて、そして知れ、と。

なぜなら、

(風が、そう言っているから)

なぜ風がそんな指示を出すのかは分からない。

だがわからなくとも、レキは従うのだ。

それこそが、彼女の存在理由だから。

——胸の奥の奥で感じる、小さな痛みは無視して。

* * *

結局。

あの後我に返った俺がいくら話の詳細を聞いても、レキが説明することはなかった。

そのかわり、「これだけは聞かせろ。お前は、イ・ウーのメンバーなのか?」という俺の質問に対してだけは、否定してくれた。

まあ……とりあえず、それだけ聞けりや十分だ。敵じゃないのなら、今のところ問題はない。レキが何かを知っているのは確かだが、どうせ聞いても答えてくれないだろう。もちろん、いつかは聞き出す必要は出てくるだろうが。

だが……今は、それよりも圧倒的な問題が浮上していた。

「は、はふう。ず、ずびばべんでした。も、もうじまべん……」

「まったく、そう言うくらいなら、最初からしないでもらいたいわね」

武偵病院・203号室。

俺が入院していたその病室で、俺は今顔面の面積を2倍ほどに拡張していた。詳しい説明は省くが、ベッド脇の椅子に座った『白衣の悪魔』にやられたとだけ言っておこう。

ちなみに後日、「医者が患者をボコボコにしているのかよ」と抗議したところ、「治すからいいのよ」と返ってきた。怖すぎです、失常呂先生。

そんなわけで、俺は今、ベッドに横たわって体力の回復に（強制的に）努めていた。

そんな俺に失常呂先生はため息をつき、

「本当に、あなたは心配ばかりかけるわ。昨日だって抜け出したと思ったらハイジャックを解決して帰ってくるなんて、思ってもなかったわよ。だから今回も心配したっていうのに、ゲームを取りに行つただけなんて……少しは主治医である私の身にもなりなさい」

「うっ……そこは、マジで悪かったです」

「もういいわ。とにかく今は、ゆっくり休みなさい。——それじゃあ、お大事にね」

病人に対する常套句を最後に、失常呂先生は病室から出て行った。

その後姿を見ながら、俺は「今度はもう脱走なんて企てないようにしよう」と誓った。その理由が、医者に殺されないうのとはなるともな話だったが。

あー……もう、寝るか。そろそろ。さつき無理に屋上からダイブしたり、いろいろあつたから体がきつい。

と、その前に、もっぺん携帯だけ確認しとくか。

そう思い立った俺が携帯電話を確認すると……キンジからメールが来ていた。

俺はメールボックスからその新着メールを呼び出し、開いてみると、

『件名：(なし) 本文：たすけ』

とだけ書いてあった。

なんだ、こりゃ？ わけのわからんメール送ってくんよなあ、あ

いつ。

俺は携帯をパチンツと畳み、ベッドの横に置かれた棚の上に置く。それからあくびを一つして、俺は窓の外に視線を転じた。

そこには、黒々とした夜空が広がり、ぼんやりと月が光っていた。月……か。

連鎖的に想起されるのは、ついさっきまで話していたレキの姿だ。月明かりの下、まるで猫のような金の目で俺を射抜いていた彼女の姿を、俺は思い出す。

あいつは言った。俺はいずれ、全てを知る——と。

そのために、強くなれ、とも。レキ。

お前は一体何を知っていて……俺は、何を知ることになるんだ。

どうせ聞いたって教えてくれねえんだろうよ、お前は。一度そうと決めたなら、そうあり続ける。そういうやつだったよな、お前。

だったら——

「上等だ。お前の言うとおおり、知ってやるよ。『全て』ってやつを」
遙か遠くに浮かぶ月を睨みながら。

俺はそう、呟いた。

* * *

東京武偵高の第1女子寮には、使われていない部屋がある。

無論、それ自体はなんらおかしいことではない。むしろ、全部屋がぴっちり埋まることの方が稀だ。これには、武偵高設立当初、想定していたよりも遙かに進学志望する学生が少なかったという悲劇的な裏話があるのだが、それはともかく。

第1女子寮にはそういった、いわゆる『空き部屋』がいくつか存在していた。

しかし。

その『空き部屋』のはずである一室。ネームプレートがないその部屋には今、一人の少女がいた。

古めかしい、しかし磨き上げられ銀色に光る西洋式の甲冑に身を包んだ、白人の少女だった。2本の三つ編みを頭頂部で結び、サファイ

アの色をした氷のような切れ長の瞳は、空気を切り裂くようにまっすぐ前を向いている。

その姿を、見るものが見れば、こう表現したかもしれない。

『聖女』のようだ——と。

そして。

歴史上に、『聖女』と呼ばれた人間がかつていた。

その内の一人。かつて百年戦争と呼ばれた戦いでオルレアン解放に尽力し、フランスの救世主と崇められた女性。

『オルレアンの乙女』——ジャンヌ・ダルク。

彼女の子孫こそ……ジャンヌ・ダルク30世こそが、この銀氷の少女なのだった。

もちろん。

それは、本来ならあり得ない話だ。なぜならジャンヌ・ダルクの血筋は、10代まで続き、しかしそこで途絶えたからだ。10代目ジャンヌ・ダルクは、オルレアンの包囲網を突破した後にパテーの戦いに勝利し、その後コンピエーニュの戦いで負傷、捕虜として捕らえられ、1431年に火刑に処された。

だが。

それは、影武者だった。本物のジャンヌ・ダルク10世は、偽物を仕立て上げるといふ謀略により、生き延びていたのだ。

『策謀の一族』。それが、ジャンヌ・ダルクという血族だった。

聖女という表の顔の裏に、魔女という隠された顔を持っていた彼女たちは、以降闇に隠れ潜んで生きてきた。そうして、誇りと、名と、知略を脈々と継いでいったのだ。

そして今。

その末裔たる少女、ジャンヌ・ダルク30世はとある組織に籍を置いていた。

その、組織の名は——

と、そこで静謐な空間を保っていた室内に、ノイズが走った。

発信元は、ジャンヌが腰を下ろしている床の近くにある、通信機だ。スピーカーから、場違いなほど明るい声が流れる。

『あ、あー……もしもーしつ。ジャンヌ、聞こえるー?』

「ああ。感度良好だよ、理子」

ジャンヌもまた、怜悯さを含んだ声で答える。

『うーオツケーだよお! んじゃ、定時連絡始めよつか!』

「……ん? 待て、まだ夾竹桃との通信が繋がっていない」

ジャンヌは、この定時連絡に参加するはずの最後の一人が通信を繋げていないことに気づく。

夾竹桃。仲間内でも、否、世界でも屈指の毒使いである。

ジャンヌの台詞に、通信先の相手——峰理子は『あー……』と口を濁してから、

『それがねえ、夾ちゃん、捕まっちゃったんだよね……』

「なに……? あの、『魔宮の蠍』がか? 標的の間宮あかりは、確か

Eランク武偵だろう?」

『そーなんだけとお、あかりんは間宮の一族だけあって、夾ちゃんでも勝てなかったんだよねー。ま、お仲間ちゃんがいたのもあるんだろうけど』

「そうか……それで、あいつはいまどうしている?」

『んー……なんか尋問科で漫画描いてるらしいよ』

「何をやっているんだあいつは……」

呆れたように、ジャンヌはうな垂れた。

——『GGG作戦』

現在、ジャンヌ、理子、そして夾竹桃が、彼女たちの所属する組織の命を受けて行っている作戦である。

各々がそれぞれの標的である少女を拉致または殺害する。ゆえに、『3人の少女』というわけだ。

先ほど話に出たとおり、夾竹桃のターゲットは、間宮あかり。神崎・H・アリアの戦妹であるこの少女との対決が行われたのは、昨夜の話だ。そしてその結果、夾竹桃は敗北し、現在は尋問科専門棟に拘置されている。

そして、同じく昨夜。ハイジャック事件を起こした峰理子のターゲットは、いうまでもなくアリアだった。その詳細はここでは省略す

るが、結果として理子は今、組織の本拠地たる潜水艦の中から通信を行っている。

そして。

『夾ちゃんは、負け。理子は甘めに見積もって引き分け。残るはジャンヌだけなわけだけど——いけそう?』

「当然だ。このままGGG作戦を白星無しで終わらせるのは、収まりが悪い。きっちり任務は果たそう。神崎・H・アリアも、遠山キンジも、そして有明鍊も、私の障害にはなりえない」

『……………へえ』

瞬間、理子の口調がわずかに硬質を帯びた。

『言うねえ、ジャンヌ。じゃ、そんな自信満々な「銀 ダイヤモンドダスト 氷の魔女」に

一つだけ忠告してあげるね。——あいつらを、舐めるな』

『……………』

ビリツ——と。

どこか、雰囲気張り詰めた。

それに気づかないジャンヌではない。確実に理子の機嫌を損ねたことは、わかる。なにせ、当の理子が仕留め切れなかった対象こそが、その3人なのだから。

だが。

それでも、ジャンヌは訂正しない。ジャンヌ・ダルクという一族の誇りにかけて、必ずや任務を果たすと言外に告げる。

しかし、そんなジャンヌにも懸念はあった。

「わかっている、油断などしないさ。ホームズのほうはともかく、遠山と有明はパウロを破っているのだからな」

『ん……………これはまた、懐かしい名前が出てきたねえ』

理子も、ジャンヌの言葉にわずか過去を想う。

不思議な沈黙が互いを包んで——その時。

「……………む。悪いが、理子。通信はここまでにさせてもらう」

『ん? どおーしたの?』

「——ターゲットが、帰ってきた」

ジャンヌの双眸に映るのは、一台のモニターだ。

それは、とある男子寮の一室を映している。そこはどうかやら、リビングのようだった。

画面の向こうにいるのは、3人。1人は、遠山キンジ。1人は、神崎・H・アリア。

そして――

「星伽白雪が、帰ってきた」

ジャンヌの瞳が、巫女服を着た少女の姿を捕らえる。

氷のように白い顔に、笑みを浮かべて。

世界的犯罪組織『イ・ウー』構成員・『魔剣』デュランダルジャンヌの『計画』は、薄暗い部屋の中で始まりを告げた。

19. 今はまだ平穏であろう日々

翌日。そろそろ日も落ちようかという時間帯。

再び入院生活に戻った俺の病室には今、一人の客が来ていた。

といつても、俺が来てくれるように頼んだんだがな。

俺はベッドから上半身を起こし、その客から受け取ったPSPで某狩猟ゲームをやりながら、ベッド脇の椅子に座る客——遠山キンジに相槌を打った。

「ふうん。白雪がお前を避ける、ねえ。そりゃあお前、そんなことがありや避けもすんだろうよ……よつと」

「せめて真面目に相談に乗る姿勢くらい、見せてもいいんじゃないか？」

ジト目でこちらを睨むキンジ。

つつたつてなあ……そりゃ、俺が口出しできる問題でもねえだろうに。

俺はキンジの抗議に従い、とりあえずPSPをスリープモードにしてから、困ったように頭をがりがりとかいた。

——キンジがこの病室に来たのは、ほんの5分ほど前のことだ。

昨日俺が頼んだ通り、学校が終わってからキンジは一度寮に帰り、俺の部屋からPSPを持って見舞いに来てくれた。ちなみにこれは蛇足になるが、なぜ学校に持っていったからここに来なかったかという、教師に見つかった場合一般高とは比較にならない罰を受けることになるからだ。

で、そいつを受け取ったあと、俺はふと思いついたんだ。昨日寝る前に見た、『たすけ』とかいうわけのわからんメールのことを。

そのことを尋ねてみた俺に、キンジは昨日俺やレキと別れたあと、何があったのかを語った。

『武偵殺し』の一件が解決してないから」という、いまいち正当性のない屁理屈で再び同居することになった（というかした）エリアと共に自宅に帰ったキンジは、そこでメールを受信したらしい。

受信履歴を見れば、なんと数十件のメールや電話が入っていた

のだとか。しかも……その全部が、白雪から。

そして次の瞬間吹き飛ぶ玄関扉。そこから現れたのは、巫女服姿で日本刀を構える星伽さんちの白雪さん。彼女は最近まで恐山に合宿に行つてたんだが、昨日の夜に帰ってきたらしい。で、どこから聞いたのかアリアとキンジ（厳密には俺も）が同居していたことを知り、キンジに惚れている白雪は噂の真偽を確かめるためキンジ宅に突撃。

そこでアリアを見つけてさあ大変。アリアがキンジと恋仲になつてしまったと勘違いした白雪が暴れだし、有無を言わさず戦闘が開始されたのだとか。ちなみに、キンジはその最中に例の『たすけ』メールを送ってきたらしい。「助けて」と打ちたかったのか、あれは。全文打ててないところに、激戦ぶりが伺えるな。

ここで注目すべきは、白雪とアリアが戦つたという点だ。アリアは強襲科^{アサルト}のSランク。普通なら戦闘にすらならないはずなんだが……まあ、つまりは白雪も普通じゃないってことだ。

なんでも白雪の実家である星伽神社の巫女は、『武装巫女』というらしい。神社つてのは確かにご神体を守るものなんだが、この連中はなぜかそれを武装して守ってるんだと。

だが、たかが武装した程度でアリアが倒せないわけがない。そこにはもう一つ秘密があつて、白雪は『鬼道術』とかいう『超能力』^{ステルス}を操る『超偵』なんだ。

ハイジャックで理子がツーサイドアップテールを操つたような、そういう『不可思議な力』。それを持つてんだよ。白雪も。

俺はまあ、知り合いに『超能力者』^{ステルス}がいるから信じられるんだが、普通は信じられねえよなあ、そんなの。

で、その第1次キンジの部屋大戦が終了したところ、キンジは白雪の説得に入った。曰く、「アリアと俺……それに錬は、武偵として一時的に組んでるだけだ。恋仲とか、そんなんじゃない」だとか。さり気な俺を巻き込むなよお前。

その話を聞いて安心した白雪は、その流れでキンジに訊いた。

「じゃあキスとかそういうことはしてないんだよね？」——と。
で。

した、らしい。アリアと、キンジは。あのハイジャック中に。

そこまで聞いたとき、もし俺の手元に拳銃があればこいつを撃つていただろうことは想像に難くない。俺が理子と戦ってる間、テメエはなにやってんだよ。

それはともかく、そのせいで再び白雪が暴走を始めようとしたとき、アリアは言い放った。

「子供はできてなかったから大丈夫よ!」——と。

どうやら父親から「キスすると子供ができる」と聞いたらしく、それがゆえの台詞だったんだが、それを聞いた白雪は抜け殻のように崩れ落ちた。

で、キンジがアリアと言い争っている間に、白雪はどこかへ消えていた——というのが、昨夜のあらましだ。

そんで、今日。白雪はキンジに遭遇するたびに、こいつを避けたとか。よっぽどショックだったんだろうな。

なお、アリアはと言えば、自主学習で性教育を学び始めたらしい。至極どうでもいいが。

これで、お分かりいただけただろう。最初に、俺が口出しできる問題じゃないって言った理由が。

「そりゃあ、お前……やっぱ、謝るしかねんじゃねえの?」

「なんだ。俺はなにもしないぞ、むしろ被害者だ」

「いや、ある意味ではお前が一番加害者なんだが……あー、まあ、とにかく謝つとけ。白雪なら、それで一発だろ。すぐまたもとの世話焼き女房に戻るだろうよ」

「なんだよ世話焼き女房って。というか、別に俺は白雪が避けてることを嫌がってるわけじゃ……」

ああもう、めんどくせえなこいつ。じゃあ、なんで相談なんてしてきたんだよ。

俺は多少いらつきながら、キンジに言う。

「じゃあ放っておきやいいだろ。自分でもどうしてーかわかんねえんなら、そうしとけ。そのうち元通りになるから」

そもそもあの白雪が、いつまでもキンジから離れるわけがねえ。ど

んな形にせよ、そのうちまた構いだすだろ。

だから――

「それよりお前はアリアのメシの心配したほうがいいんじゃないの？
昨日はともかく、今日からまたお前んちで食うんだろ。用意しねえ
と風穴あけられんぞ」

「あつ!? そ、そうだった……悪い、またな鍊!」

がたがたと慌しく立ち上がり、椅子の横に置いていた鞆を引つ掴む
と、キンジは病室を去っていった。

急に静かになった室内で、俺は腕枕を組んで横になった。

窓から差し込んでくる夕日の茜を、俺は目を瞑ることで遮る。

なんというか、まあ……、

「相変わらずモチモチのようで、羨ましいよキンジ君」

そんな皮肉を口にして、俺は眠りについた。

* * *

「――うん。じゃあ、これで退院ね。わかってると思うけど、まだ右肩
はあまり動かさないこと」

「はい。ありがとうございます」

ハイジャック事件を終えて、数日経ったある日。

俺は、武偵病院の診察室で、向かい合わせに座る矢常呂先生から退
院許可をもらった。

もちろんまだ右肩には違和感があるし、完治まではもうちょいかか
るんだが、とりあえず自宅に帰ることは許されたわけだ。

しかし、思いのほか長かったな。武偵高じゃ、こんぐらいの怪我で
ももつと早々に学校に行かされるもんなんだが……はて？

ま、その分授業をサボれたんだ。ここはラッキーと思っておこう。

矢常呂先生に挨拶してから、俺は武偵病院を出る。時刻は丁度、4
時限目の真っ最中ってところか。ということはまだ学校は終わって
ないってことなので、一度家に帰ってから俺は登校しなければなら
ない。

俺は第3男子寮までの道のりを歩きながら、一つ伸びをして息を吐
く。

「あー……なんか、入院中にもいろいろあったせいで、あんまり休んだって気はしねえなあ」

結局白雪といまだに話せていないキンジの話の聞いたり、「子供はキスじゃできないって知ってたか？」と言ってアリアをからかったり（直後にアリアは乱射魔と化した）、他にもちよくちよくいろんな奴が見舞いに来てくれたり。

嬉しいは嬉しいんだが……結局学校にいるときみたい騒がしい毎日だったな。

そんなことを思いつつ俺は男子寮にたどり着き、自室で武装と授業道具の準備をしてから、再度家を出た。

俺が一般校^{ノルマレ}区^{マレ}についたころには、もう昼休みに入っていたらしく、そこかしこから授業から解放された生徒たちの声が聞こえてくる。

んー……なんか、中途半端な時間に来ちまったなあ。

どうするか……とわずか悩んだ瞬間、腹の虫が鳴った。

「決めた。学食行くか」

決断は一瞬だった。人間の3大欲求の一つである食欲には逆らえなかった。さすがに弁当を作る暇も無かったしな。

そんなわけで、俺はさっそく学食に向かった。

学食の入り口をくぐると、様々な料理の匂いや、友達同士の会話に花を咲かせる声なんかが、俺を出迎えた。

意外とスペースが広いこの食堂は、多くの人で賑わっていた。ここはメニューが豊富だったり、味がそこそこよかったり、学生向けだけあってかなり安かったりと、生徒たちに大人気なんだよな。

って、人のことを気にしてる場合でもねえな。

俺は券売機でカツカレーの食券を買い、それと引き換えに学食のおばちゃんにカツカレーを配膳してもらおうと、室内をきよろきよろと見回した。

どこか空いてる席はつと……お？ あれ、キンジたちじゃねえか？ おまけに亮や剛気もいる。

丁度いい、あそのこのテーブルに混ぜてもらおう。

俺はテーブル同士の狭い隙間を縫って歩きながら、お目当てのテー

ブル席までたどり着くと、

「よっ。悪い、俺も入れてくんねえか？」

と、キンジたちに声をかけた。

まず最初に反応したのは、キンジだ。

「錬、来てたのか。てことは、退院したのか」

「まあな」と返しながら、俺は空いていた椅子に座る。

——と、その瞬間、

「あ、錬！ あんた、昨日はよくもからかってくれたわね！」

「うおっ!？」

突如怒鳴られたことに、俺は思わず声を出した。

誰だ、と思い視線を巡らせると——いた。キンジの隣の席で、アリアがもまん片手に座っていた。小さいから、遠くから見たらキンジの影に隠れてたのか。

……というか。

アリア、お前……ついに、学校で友達と一緒に飯を食うことに成功したんだな。しかも、亮や剛気まで一緒に。

お前、そもそもドレイうんぬんとか言ってたのは、友達作ってこういうことするためだったんだもんな。

おお……なんだ、なんかちよつとジンと来たぞ。

アリアの悲願が叶った光景に、俺はわずか目頭が熱くなる。

思わず「よかったな」という慈愛の目で、アリアを見つめてしまった。

「な、なによ？ あんた、なんでそんなにこつち見るの？」

「いや……アリアがここにいてよかったなって思ってたな」

「はにゃっ!？」

ほんつと音を立てて、アリアが赤面した。

あ、まずいな、アリアは友達を欲しがってたことは内緒にしてたのに。心の中で祝福してやるべきだった。

「れ、錬。お前さん、大胆なヤツだな……」

「？ なにがだ？」

「遠山君はもうちよつとそつち方面の機微を学んだ方がいいよ」

キンジたちが何かを話しているが、なんの話だろうか。

——あ、そうだ。

「そういやお前ら、俺がここに来るまでなんか話してたろ？ 何の話だったんだ？」

「あ、あれ？ このタイミングでこっちに振るの？ ……えつとね、さつきは丁度アドシールドについて話してたところなんだ」

「ああ……そういや、もうそんな時期か」

不知火の言葉に、俺は頷く。

——『アドシールド』とは。

別名『武偵高のオリンピック』と呼ばれる、年に一度の国際競技会だ。世界のいくつかの場所で近隣の国同士が集まって行う武偵高のインターハイみたいなもんだ。東京武偵高もその開催場所のひとつに選ばれていて、参加国は日本や中国を始めとした数ヶ国だったか。

その性質上、参加するのは強襲科や狙撃科スナイプという戦闘系の連中。これがインターハイなら、PTAが徒党を組んでやってくるレベルの競技が行われるわけだ。

「で？ このメンバーで参加者はいんのか？」

「アリアは拳銃射撃競技代表に選ばれたそうだがな、辞退したらしい」「もったいないよね。さつきも話したけど、アドシールドの入賞メダルはたいいの推薦状に勝るっていうのにね。あ、ちなみに僕はその神崎さんの辞退で補欠に入ったよ。出場するかは決めてないけど」

「まあ、なんにせよ、車輛科ロジックのオレにや関係ねえわな。——あ、そうだ。そっぴや錬は、確か去年出場でたよな？」

やきそばを頬張っていた剛気が、思い出したように尋ねてくる。

ああ……出たよ、確かに。思い出さくない記憶だぜ。

と、顔を赤くしたままでもなにやらぶつぶつ言っていたアリアが我に返り、

「え？ あんた、出場したことあるの？ なんの競技？」

「あー……『総合技能競技』だ」

「はあ？ それ確か、3年限定の競技でしょ？ なんであんたが出てんのよ」

「いろいろあったんだよ……」

アリアの質問を、俺は言葉を濁して回答を避ける。

できりや、あんまりこの話はしたくない。話題を変えよう。

「それはともかく……じゃあ、お前らイベント手伝いヘルプの方か。なにやんだ？」

「そつちもまだ決めてないな。アリア、選手じゃないならお前も手伝いだろ。どうするんだ」

「あたしは開会式の『チア』をやるわ」

「チアってーと……アル⇨カタか」

ぼんやりと呟いてから、俺は納得する。

アル⇨カタといえば、記憶に新しいのはアリアと理子が繰り広げた近接拳銃戦だが、今回はちよつと意味合いが違う。

元々アル⇨カタつてのはイタリア語の『武器』と日本語の『型』カタをくっ付けた造語だ。で、今回の場合はナイフや拳銃による演舞をチアリーディング風にしたパレードのことを指している。

「手伝いが決まってるなら、キンジと鍊もやりなさいよ。男子はチアのバックで演奏する係りがあるんでしょ？」

「音楽か……まあ、いいか。それで」

「お、じゃあオレたちでやろうぜ、それ。バンドならモテそうだしな」
「懐かしいね、このメンバーでなにかするの。学校行事つてことなら、1年の頃の『4対4戦』カルテット以来じゃないかな」

なにやら一気に話が進んでいくのを見ながら、俺もそれでいいか考えてみる。

が、そもそも他に何かやろうとは思わないので、流れに乗って俺も賛成しようとしたところで――

「――つと、悪い。ちよい電話来た」

みんなに断りを入れてから、俺はポケットの中で震える携帯を取り出す。

誰かと思って見てみれば……マスターズ教務科から？

なんの用だろうかと思いつつ、通話ボタンを押して耳に当てる。

「はい。2年の有明です」

『おう、有明エ。うちや、蘭豹らんびょうや』

げ。強襲科担当の蘭豹か。いい予感がしねえぜ。

一気に顔をしかめて、俺は蘭豹に返す。

「はあ。えーと、何の用事でしようか」

『その前に一個訊くけどな、お前アドシアードの手伝いきまっとなのか』

「? いえ、まだですけど……」

『そおかそおか。ならお前、ジャンクシヨン地下倉庫の火薬運搬係りやれや』

「……………は?」

い、今なんて言ったこいつ? 冗談だろ?

『地下倉庫』ってのは、名称こそなんでもないが、その実は火薬庫のことで。学園島の地下7階にある、弾薬保管庫。そこが、『地下倉庫』だ。強襲科や教務科と並び『3大危険地帯』と称される、まさに危険中の危険地域。

で、蘭豹が言った火薬運搬係りってのは、その名の通りアドシアードに使用される火薬を逐一運んでくる仕事なんだが……これが、誰もやりたがらない。

当然だ。なにせ、『地下倉庫』には大威力かつ数多の火薬が割とずさんに保管されているから、もし万が一火花でも起こそうもんなら、下手したらこの学園島を吹っ飛ばすことになるんだからな。

当たり前だが、俺だってそんな役目はやりたくない。

「お断りします」

『無理やな。普通は強襲科から選出するんやが、なぜか満場一致で前に決まったんや。——じゃ、頼んだぞ』

「ちよ……………っ!?!」

咄嗟に静止をかけるも、無残に通話は切れた。

ツーツーと、無慈悲な音ばかりが響く。

ああ……………なぜ、こんなことに……。押し付けやがったな、あの強襲科バカども。

どうせ抗議に行っても聞き入れられないのは火を見るより明らかなので、俺はもう諦めて受け入れることにした。なんとという負け犬。

と、

「——お、終わったか錬。今オレたちでパート決めてただけだよお、お前どこがいい？」

「いや……悪いが、俺は不参加だ。教務科から、イベント手伝い決められちまってな」

「え、マジかよ？ それじゃ、スリーピースバンドになるじゃねえか」「いや別にいいだろ、そこは」

よくわからない部分に不満げになる剛気は置いて。

俺は、4人に向き直って言った。

「もしお前らを花火にしちまったら、そんな時はごめんな」「は？」

もちろん、一斉に首をかしげられた。

* * *

その日の夜。

久しぶりの学校を終えた俺は、キンジの家で夕飯を作っていた。

……おかしいな。てつきり俺はもう自室で暮らしていいと思ってたんだが。

リビングで夕食までの繋ぎにもまんまんを食っているアリア（太るぞ）が言うところの、『武偵殺し』の一件はまだ解決してないから「理論により、俺はまたこの部屋に泊まることになったらしい。当然Sランク2人相手に逆らったりできませんでしたが何か？」

まあ、それはいいとして……見事にボロツボロだな、この部屋は。『超能力』持ちの白雪とSランクのアリアが戦えばこうもなるか。そこら中に切り傷や弾痕がついてるし、ソファなんて綿が飛び出まくってる。

しかしよくよく考えれば部屋が半壊するなんてわりと日常茶飯事だったので、ある種見慣れた光景ではあるな、これ。

「ほら、出来たぞー。アリア、もまんしまつとけよ」

とりあえず夕飯を作り終えた俺は、キッチンからダイニングに向かいつつ、盛り付けを終えた皿を3つ、ダイニングテーブルまで運ぶ。ちなみに、今日のメニューはえび入りカルボナーラだ。

入れ替わりに、キンジが人数分の水を注ぎにソファを立つ。これはアリアが来るまでの習慣だな。

で、そのアリアはと言えばももまんの残りを袋に入れ、自室（というか占領した部屋）に持っていき、帰ってくるやいなや即座にテーブルについた。手伝えよ、お前。食器運ぶとかさ。

準備が整ったところで、「いただきます」と唱和する。

そして、夕食が始まった。

「んぐ、んぐ……そういえば、錬。あんたは明日の朝、予定ある？」

「食いながらしゃべんな。なんだ、なんかあんのか？」

「今日のお昼に、あんた電話してたでしょ？ その時に明日の朝からキンジの調教を始めることにしたのよ。例の、『急に強くなるスイッチ』を見つげるためにね。あんたも参加する？」

「ちよつと待てアリア。俺の時は強制だった気がするんだが、あれは俺の勘違いか？ 錬だけ不公平だぞ」

ビシツとフォークをアリアにつきつけ、キンジは抗議する。おい、行儀悪いぞ。

アリアはくるくるとパスタを巻き取りながら、

「あのねえ、錬が直すべきなのは『仲間に対する無節操な甘さ』でしょ？ 朝練でどうにかなるものじゃないわ。それに、一応戦闘自体はいつでもちゃんとできてるしね」

「納得いかねえ……」

不満げに漏らすキンジを横目に、俺はこっそり安堵の息をつく。

よかった。アリアの朝練とか、下手したら強襲料よりきついかもしれねえからな。そんなの受けたら死んじゃうよ、俺。

「でも、意外だな。アリアのことだから、俺はてつきり錬も強制的に参加させるかと思っただが。完璧な『パートナー』が欲しいんじゃないかったのか？」

「ああ……そういわれりゃ、そうだな。確かにその流れじゃ、俺も無理やり引っ張りこむのがいつものお前だろ」

キンジの言葉に、俺も思い直してそう言った。おかしいな、こいつ、いつもはもつと強引なのに。

そんな俺たちの疑問を受けたアリアは、

「しないわよ、そんなこと。練もそうだけど、キンジだってへんてこなスイツチさえなかつたら、無理やり訓練させたりしないわ。……だって——」

アリアは。

その続きを、花が咲くように笑いながら言った。

「信じてるもの。いっだって、どんなときだって、肝心なときはちゃんとおんたたちはあたしのところに来てくれるって。ハイジャックのときや、あの屋上でるときや、半年前みたいに……あたしを助けてくれる——『パートナー』だって」

「……………」

アリアが言い終わっても、俺たちは何も言えなかった。

これはなんとというか……驚いた、な。

正直、今こいつが挙げたどれも、自分からアリアのところに行った覚えはないんだが、それはともかく……まさか、こいつの口からこんな台詞が飛び出るなんて。予想外すぎる。

だがそれはこいつ自身もそうだったようで、

「……あつ、や、ちち違うっ！ や、やっぱ今のなし！ ああああんたたちはドレイよドレイ！ ゼーったい、ドレーイー！」

急に自分で自分の台詞が恥ずかしくなったのか、アリアはうがー！と立ち上がり、顔を真っ赤にしながらかとんちきなことを言い出した。

だがそのリアクションが逆にさっきの台詞のリアル度を上げてくれたもんだから、俺たちはなんだか妙に気恥ずかしくなり、

「あー……なんだ、なんっーか……なあ？」

「あ、ああ……」

と、こちらもちちらで変な会話をしてしまった。

どうにも微妙な雰囲気になりかけた……その時。

あたかも今日の昼休みのときにように、タイミングよく……かはわからんが、とにかく俺の携帯が鳴った。

これ幸いとテーブルの上に置いていたそれを引っ掴み、

「お、俺ちよつと電話してくるわ！」

「あ、おい練！」

この場はキンジに任せて、リビングを経由して廊下まで逃走した。ボタンとリビングに通じる扉を閉めると、俺は主張し続ける電話に出た。

「もしもし？」

『あつ、有明くん！ あややなのだ！』

と、通話口から天真爛漫な声が響く。

どうやら電話相手は、「あやや」こと平賀文ひらがあやだったようだ。

こんな時間になんの用だ？

「ああ、あややか。どした？ なんかつたのか？」

『あつたのだ。実は、新しい実験シリーズが出来たから、有明くんに渡したいと思つて電話したのだ』

「ま、マジか……」

あややが口にした『実験シリーズ』という単語を聞いた俺は少し顔をしかめる。

まあ……これも契約だ。正直嫌だが、しかたない。

というか……、

「それ、今からじゃねえと駄目なのか？」

『んー、できれば今日中がいいですのだ。明日からはいろいろと依頼が詰まつてて、会えそうにないですのだ』

そうか……そういうことなら、今日行つとくか。

「わかった。じゃあ、今から行くわ。場所はいつものところでいいんだよな？」

『いいですのだ。じゃ、待ってるのだ』

通話を切つて、俺はダイニングにとつて返す。

キンジとエリアに少し出かけてくる旨を告げ、俺は玄関を出て、あの場所を目指した。

* * *

2年・平賀文。

彼女は、装備科アムド所属のAランク武偵だ。といつても実力的にはSラ

ンクなんだが、違法改造を平気で請け負ったりぼったくりな報酬を要求したりするもんだから、教務科から1年の途中でSランクからAランクに下げられた。

で、そんな彼女は、普段装備科棟にある自分の作業室に籠っている。装備科棟は地上1階・地下3階という構造をしていて、彼女の作業室は地下1階にある。

そんなわけでセキュリティが嚴重な地上1階から地下に降り、銃器が溢れるほど収められたラックが並ぶ廊下を進み、『ひらがあや』というネームプレートが入ったB201作業室の扉をノックした。

すると中から、元気な声で「開いてますのだ！」と返ってきた。ので遠慮なく中に入っていくと、大きささまざまな銃やら刀剣やら工具やらで溢れかえった部屋が出迎えてくれた。

相変わらずすげーな、ここ。

俺はそれらを避けつつ、部屋の奥へと進んでいく。

やがて見えてきた作業机でなにやら機械をいじっているらしい小さな背中を見つけ、

「おい、あやや。来たぞ」

と、呼びかけてみると、くるりとあやや——平賀文が振り返った。ショートカットの髪を耳の横でくくった、ぱつと見、小学生のような女の子だ。武偵高の制服を着てなきや、つまみ出されてるところだぜ。

「あ、有明くん！ 待ってましたのだー！」

いつものようにニコニコと笑いながら、あややは手を上げた。と、俺はその手に何かを持っていることに気づく。

もともとの部屋が薄暗いので、一瞬それがなにかわからなかった俺が目をごらすと、

それは人間の手首だと言う事が判明した。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ!？」

「うひゃあ!?! ど、どーしたのだ有明くん!?! びつくりするのだっ」「お前がどうしたんだよそれえ! なんっ、なんだよその手首は?!」

俺が思いつきり仰け反りながら尋ねると、あややは「あ。これはねー」と言いつつ、一度後ろを向き、すぐにこちらに向き直ったかと思うと、

「じゃーんなのだ！」

とか言いながら、今度は両手に一個ずつ手首を掲げていた。

「なんで増えてんだよおおおおお！」

俺は絶叫しながら、つつこみを入れる。

こいつ、マッドサイエンティストのケがあるんじゃないかと疑ってはいたが、まさか人体実験にまで手を出したのか!?

「ん〜？ 有明くんは一体、なんで驚いてるのだ？」

「なんでっってお前、だっつてそれ人の手首だろ!?! むしろそんなもん持っつて平然としてるお前が怖えよ！」

「手首……？ あ、そういうことですか」

びびりまくる俺に、あややはあくまで冷静にしたり顔になってたりする。

すわ俺も実験されるのか……と背筋に震えが走った瞬間、

「これ、手首じゃないですか」

「……………へ？」

手首じゃ、ない？

いやでも……、

「それ、どうみても手首だろ……？」

「いや、違うのですのだ。これは、さっき言っつた『実験シリーズ』の新作なのだ。名前を……『スタンングローブ』！」

ドヤア、とばかりに両手に持った手首——いやさ『スタンングローブ』とやらをつきつけてくるあやや。

俺はそれを恐る恐る受け取ってみると……確かに、手首じゃない。中が空洞になってる。グローブつてことは、ここから手を入れるんだろう。多分。

ああ……そうだよ。『実験シリーズ』は、いつも俺の予想を上回るつて、いい加減学べよ俺。

とりあえずあややが殺人犯になっていたわけじゃないことに安堵

し、大きいため息をついた。

——俺がこの『実験シリーズ』と呼ばれる、平賀文印の創作武器実験台になったのは去年の話だ。

といっても、大した話じゃない。ある日あややが作った、『実験シリーズ』第212号『オートマトン』と呼ばれる自働迎撃人形とやらに襲われたのが始まりだ。

なんの偶然か、俺はその『オートマトン』を返り討ちにしてしまい、それが元であややは俺を実験台にスカウトした。なんでも、俺ならもし何か問題が起きても上手く対処してくれるだろうから、らしい。

当然そんな目にあつた俺は当初断つたんだが、もし引き受けてくれるなら装備に関する諸々に大きく融通を利かせてくれると言われ、最終的にはオーケーした。その頃からあややの腕は有名だったからな。

以降、俺はたびたびこの『実験シリーズ』が作成されるたびに、その実験台をかってでていたというわけだ。

ちなみに、俺が彼女を「あやや」と呼んでいるのも、そこに起因したりする。曰く、「有明くんは友達だから、そう呼んで欲しいのですのだ！」らしい。

閑話休題。

——で、だ。あややの話を聞く限りじや、この人の手首型グローブは『実験シリーズ』の新作らしいが……、

「それで？ 今回のこれは、どういう武器なんだ？」

「よくぞ聞いてくれましたのだ。ふっふっふ。それではさっそく、ブレゼン作品説明といくのだ！」

あややは俺から『スタンングローブ』を返してもらい、片腕だけ手に持ちながら、

「まずこのグローブのすごいところは、その強度ですのだ。ツイストナノケブラー

TNK製のグローブの上に、甲や間接の動きを阻害しない部分に防御力を上げるための金属版を貼り付けて、さらにその上から、人体の質感を出すために特殊な素材でコーティングしているのだ。これでタイミングを合わせれば、見た目素手で銃弾を弾いちやうみたいなきこともできますのだ」

わざわざ人体に見せかける意味はわからないし、そもそも俺は銃弾に拳を合わせる技術もないんだが、とりあえず黙って続きを聞く。

「そして！ この『スタンングローブ』最大の目玉が、グローブ内に内臓されたスタンガン機能、通称『ステルスボルト』ですのど！ 手首部リスト分にあるスイッチを入れて、拳を相手にぶつけければ、そこから電流が流れる仕組みですのど。電圧は30万Vボルトくらいだけど、Aアンペアをちよつと高めに設定してるから、多分なかなかの威力は出せるはずですよ」

にこにこ子供っぽい笑顔でエグイこと言ってるな、こいつ。

「どうやらこれで粗方の説明は終わったらしいので、俺はいくつか質問してみよう。」

「特殊な素材つてのがなんなのかよくわかんねえが、そんなもんで覆ってたら電撃が阻害されるんじゃないか？」

「ですのど。だから、拳の部分だけ機械部を露出させて、そこを限りなく近い肌色で着色してますのど」

「一応訊くけど、電気で死んだりしねえよな？」

「Aをいくつに設定したかいまいちよく覚えてないけど、多分大丈夫ですよ」

「というかそもそも、なんで人の手首そっくりにしてんだよ？」

「そっちの方が敵の油断を誘えると思ったのど。あと、おもしろそうだったからなのど」

逐一答えてくれるあややに、俺はなるほどと頷く。

「うん。平常運転だな、こいつ。相変わらずの変人技術者っぷりだよ。」

微妙にこめかみが痛むのを我慢しつつ、

「で、だ。俺は今からその『スタンングローブ』の実験に付き合えばいいのどか？」

「ううん、今日はもう遅いから、とりあえず受け取るだけ受け取っておいて欲しいのど。それで、アドシールドが終わるころまでに感想を聞かせてくれればそれでいいのど」

「あいよ。つまり、それまでに実験しとけてことか。しかしアドシ

アード後までって……そんなに忙しいのか？」

「んと、京菱きやうびしグループってところから大口の依頼が入ってるのだ。多分、しばらくはそっちにかかりきりになるのだ。まあ、アードシアードは装備科はあんまり関係ないから好都合なのだー」

「ふーん。ま、わかった。じゃあ、こいつだけでもらってくわ」

俺はあややから一対の『スタンググローブ』を受け取り、制服のポケットにねじ込む。クソ、一応機械だけあって入れづらいな。

「じゃあ、有明くん。また今度ですのさー」

ひらひらと手を振って見送るあややに軽く手を振って返し、俺は男子寮へと帰っていった。

ちなみに。

道すがらポケットから『スタンググローブ』を落としてしまい、それをたまたま近くを歩いていた女子に拾われて一騒動があったりしたのだが、それは完全に蛇足である。

……今度あややにはデザインについてきつく言っておこう。

* * *

「あたしたち、明日からこの家で白雪の護衛することになったから」

「……はい？」

あややに『スタンググローブ』を渡された翌日の放課後。

専門科目の授業が終わってすぐに、蘭豹から『地下倉庫』の下見（ようするに火薬の種類と保管場所を覚えて来いということらしい）を命令された俺は、広大な地下空間に迷いそうになりながらも、なんとか事前に受け取ったりリストと保管場所を照らし終えてから、帰宅の途についた（といっても行き先はキンジの部屋だが）。

で、それを出迎えたアリアが開口一番言ったのは、そんな台詞だった。

俺はソファに腰を下ろしながら、意味がわからないので疑問で返した。

と、同じくソファに座っていたキンジが補足を入れてくる。

「今日の放課後な。お前がすぐに探偵科棟を出てから少しして俺も出たら、アリアが待ち構えててな。で、お前のことを話して2人で帰っ

てたら、教務科前の掲示板に、白雪を呼び出す紙が張ってたんだ」
「ふむふむ。で？」

「それで、アリアが「白雪の弱みを握るチャンスだ」とか言い出して、教務科に潜入することになったんだ」

「バカだろお前ら」

あの化け物教師ぞろいの教務科に潜入とか。バカなの？ 死ぬの
(リアルに)？

「うるせえ。で、結局本当に潜入することになって……白雪と綴つづりが話
してるところを見つけた」

綴……綴梅子うめこ先生か。尋問科担当の。

確かあの先生は白雪がいるB組の担任だったはずだから、まあ話し
てたのはおかしなことじゃないな。

「それで、話を聞いてたら……白雪が、『魔剣』デユランダに狙われるかもしれな
いって流れになったんだ。といっても、可能性にすぎないが」

『魔剣』……って、あの？ 『超偵』ばかりを狙う誘拐犯……だったか
「ああ」

へー、『魔剣』って実在したんだな。教務科が言うくらいなら。

あれは確か、都市伝説とか言われてたはずだったんだが……まさ
か、マジモンだったとは。

「そこまではわかったけどよ、そこからなんで白雪の護衛つてのが出
てくる？」

「なんでも、アドシアード期間中は外部から大勢人が入るから、その間
だけでも教務科は白雪に護衛をつけたがってたらしい。よほど大事
にされてるんだろうな。……で、その話を聞いたアリアが白雪の護衛
を勝手に買って出て、あー……白雪はなぜか俺の部屋に泊まることを
条件に了承したんだ」

なぜかってお前……わかりきってるだろ、そこは。

まあ……とにかく、事情はわかった。なるほどな、だからアリアは
さつきから床でせつせと盗聴対策の機械を組み立ててんのか。
通信科コネットからでも借りてきたんだろ。

……っていうか、

「念のために訊くけどよ、それもしかして俺も入ってるのか？ 護衛メンバーに」

「逆に訊くが、入ってないと思うか？」
「……だよな」

俺は再び、工作中的のアリアに目を向ける。

ああ……こうして俺の自由はどんどん奪われていくんだな。

……まあ、もう諦めたけどさ。

* * *

白雪の護衛をするってのは、いい。

そのメンバーに俺がいつの間にか入ってたってのも、まあいいだろう。

だけどさ……気い早すぎでしょう。

「キンジ、あんたはあっち！ 廊下のダンスに危険物がないかチェックするときなさい！ 鍊はこっち手伝って！ 手が届かないのよ！」

「危険物あったってな……ダンスにあるのかそんなもん」

「あ、キンちゃん。これってどこに置けばいいのかな？」

俺はアリアの指示に従って警報機を彼女の手が届かない棚の上に置きつつ、アリアの行動の早さに呆れたようにため息をついた。

アリアたちが白雪の護衛を受けた次の日……まあ、つまり今日なんだが、その今日の放課後、白雪はさっそくキンジの部屋に引越してきた。

なお、家財道具の運搬は、剛気が軽トラで運ぶことで解決した。かわいそうな奴だな、あいつ。何も知らされてなかったとはいえ、好きな女が恋敵の家に引越すための手伝いをさせられるとは。

というか、何も依頼の翌日から引越す必要もねえだろうに。アドシアドまではまだ10日以上あるんだぞ。まあ、必ずしもアドシアド期間中になにかあると決まったわけじゃねえから、間違っではないのかもしれない。

それはともかく俺たちが今何をやっているのかと言えば、それはこの部屋の要塞化兼掃除だ。要塞化はボディーガードとしては基本だし、先日起きたらしいアリアVS白雪のせいで戦場跡みたいになっ

たからな、ここ。さすがにそろそろ修復作業を始めようということになった。

この作業で辣腕を振るったのは、言うまでもなく白雪一極だ。もともと彼女は大和撫子の鏡みたいなやつで、料理に掃除に洗濯と、家事においては一級品の腕前を誇る。

そんなわけで、惨状だったキンジの部屋は、ものの3時間で元の姿を取り戻しつつあった。……いや、その様子を俺も見ていたわけだが、もはやマジックの領域だろ。この手際は。

「えーと……ああ、こうか」

バルコニーに出て、ガラス戸の上部に赤外線探知機を取り付ける。めんどくさいな、これ。

それが終わって、俺が再びリビングに戻ってくると、

「……あれ？ あいつらどこ行った？」

そこには誰もおらず、開け放たれた扉の向こうに見える廊下にも、誰もいない。あっちはキンジが行ったはずなだけだな。

俺が首を捻っていると、キッチンからひよこつと白雪が顔を出し、「あ、錬君。キンちゃんなら、ちよつと外に出てくるっていつてお出かけしたよ」

「はあ？ 何やってんだあいつ、サボりか。アリアは？」

「んと……ごめんなさい、アリアの方はわからない。気づいたら、いなくなってたの」

「えー……」

なにそれ。なんで依頼を受けたあいつらがサボりに行ってて、巻き込まれた俺だけせつせと働いてんだよ。

そこはかとなく理不尽を感じていると……スン、と鼻腔をくすぐる匂いを感じた。

「なんだ、料理作ってるのか」

「うん。キンちゃんが帰るまでに作っておこうと思って」

言って、白雪は顔を引っ込める。調理に戻ったらしい。

んーそういうことなら……俺も手伝うか。どうせもうやることないし、さすがにボディガードの対象相手に4人分も夕飯を作らせる

のは忍びない。

そんなわけで俺は一度手を洗いに行ってから、キッチンに入っ
ていった。

で、手伝いを申し出ると案の定白雪は恐縮したように遠慮したんだ
が、上記の理由を持ち出して納得させた。

彼女の予定によると、今夜は中華料理でいくらしい。中華か……そ
れほど得意なわけじゃないが、まあ一通りは作れる。

そんなこんなでそれから、2人で分担しつつ調理を進めている
と、ふと白雪が言った。

「ごめんね、錬君。巻き込んだじゃって……」

「んー？ 何が？」

「私の、ボディガードの話。キンちゃんから聞いたら、錬君はアリア
に無理やり参加させられたって聞いたから」

「ああ……そのことか。あ、白雪、冷蔵庫から豆板醤とうばんじやん取ってくれ」

「あ、うん」

白雪から豆板醤を受け取り、

「いやまあ、それは別にいいんだけどな。もともと俺はここに泊まっ
てたわけだから、結果的に参加することにはなってただろうよ。アリ
ア曰く、俺は『ドレイ』らしいんでな」

「でも……それでも、やっぱり申し訳ないよ……」

「そんな難しく考えんなよ。『魔剣』の件だって、絶対お前が狙われ
るって話じゃねえんだろ？ じゃあ……そうだな、友達の家泊まり
に来た、くらいの感覚でいいんじゃないか？」

まあ、実際は男子寮に泊まりに来てる時点でそんな軽い話じゃない
んだが。

「それはそうかもしれないけど、でも……」

どうにも煮え切らない白雪の返答に、俺は少し嘆息した。

変わんねえなあ、こいつも。元々の性格か例の星伽神社での生活の
せいかはわかんねえが、こいつはどうにも人に遠慮する……もつと言
えば、自分を殺すところがある。

それは必ずしも悪いことじゃないし、むしろ謙虚さという面では美

徳なのかもしれないが、さすがにこうも申し訳なさそうにされちゃ、こつちがいたたまれない。

……そうだな。そこまで負い目を感じるってんなら……、

「あー……じゃ、白雪。今回の件の報酬ってわけじゃねえが、一つお前にお願いでいいか？」

「？ 私にできることなら、構わないけど……なにかな？」

俺がそんなことを言い出したのが不思議だったのか、白雪は小首を傾げつつ、こちらを見てくる。

そんな彼女に、俺はさらりと言った。

「アリアの、友達になつてやってくれ」

「……………ええええええええ!!」

瞬間、白雪は絶叫しながら菜ばしを取り落とした。新しいのだけさねえとな。

「ど、どういうことそれ!? な、なんで私がアリアなんかと……っ」

……………ふむ。

アリアなんか、と来たか。珍しいじゃねえか、お前がそんなストリートに誰かを嫌うの。それに、こいつが誰かとケンカするなんて話もアリアとのやつが初めてだし……案外、認めてるところがあんのかね。

「ほい、新しい菜ばし。……いや、どうもこうもまんまの意味だよ。あいつ、あんまり女子と……っーか、誰かと話してるところ見ねえだろ。だからお前が友達になつてやればって思っただけだよ」

「う、うー……錬君の頼みでも、それはさすがに聞けないよ。こういうこと言うの嫌だけど……私、アリアがキライなの」

「本当に？ マジの意味なら、撤回するぜ」

「……………敵わないなあ、錬君には」

少し、白雪の声のトーンが落ちた。

「……正直なところを言えば、キライっていうのはちよつと違うと思う。あの娘は弾丸みたいにまつすぐで、私に一步も引かなかった。だから、そこはすごいと思うし、好感が持てるの」

「じゃあ、気に入らないのは……まあ、キンジのことなんだろうな」

「あはは……時雨ちゃんと同じで、やっぱりばれちゃってたんだね。私の、キンちゃんへの気持ち」

「そりゃあ、まあな。あんだけあからさまで気づかねえのは、キンジやあのお子様Sランクくらいだろうよ」

「……怖いんだ、私。アリアに、キンちゃんが取られちゃいそう。アリアがキンちゃんに会ったのはまだちよつと前のはずなのに、もうあんなにキンちゃんの近くににいるから」

「……アリアがどうだろうと、それでお前の立ち位置が変わるわけじゃねえだろ。お前はキンジの幼馴染で、ずっと近くにいたんだろ。それをなんとも思わねえほど、あいつは馬鹿でも恩知らずでもねえさ」

「幼馴染……私の、立ち位置」

「だろ？ それでもお前は、友達になれないくらい、徹底的にアリアを遠ざけてえのか？」

「それは……わからないけど」

わからない、か。

じゃあ、まだ芽はあるかもな。

俺はとりあえずの脈を感じたので、そろそろ話題を打ち切ることにした。

「——ま、いつかでいいよ。報酬は後払いだ。いつか友達になれると思ったら、そんなときなりやいいさ。誰の為にも、な」

「誰の為にも……うん」

白雪が頷いたのを気配で感じ、俺は一息ついた。

まあ……それなりの成果つてところか。

アリアと白雪が友達になれば怪獣大決戦もなくなり、ついでに言えばアリアが目をつける人材ともだちを増やせるかと思っただが……そう、上手くはいかねえか。さすがに。

「——さて、と。そろそろ出来上がりだな。仕上げは俺がやつとくから、あいつらに電話しといてくれねえか？ テーブルの上にある俺の携帯、使っていいから」

「うん、わかった」

白雪から菜ばしを受け取り、俺はあらかじめ用意されていた皿に盛り付けを始める。

と、その直前、キッチンを出かけていた白雪がこちらに振り向いて、「錬君」

「あん？ どした？」

「ありがとう」

小さく口元に笑みを咲かせて、電話しに行った。

ありがとう……か。

それが何に対して言ったのかはわかんねえが……なんだろうな。なんか、騙したみたいで少し罪悪感がする。

……ていうか、

「作りすぎじゃねえかこれ……？」

いつのまにかキッチンには、完成した料理で溢れ返っていた。

* * *

あのあと帰ってきたキンジたちと満漢全席クラスの夕飯を食べ終わり、キンジとアリアがリビングでチャンネル争いしているのを、ダイニングのテーブルでお茶を飲みつつ眺めていると、

「あの、キンちゃん、占いとか興味ないかな……？」

白雪がなにやら絵札みたいなカードの束を持ってきた。

「占い……？ なんだ、それ」

「あ、これはね、『巫女占札』みこせんふだって言って、星伽に伝わる占いの。キンちゃん、将来のこととか気にしてたでしょ？」

「ふむ……じゃあ、暇つぶしに一つ頼むか」

「なにそれ、あたしも興味あるわ」

チャンネル争いを休戦にしたキンジたちもまた、テーブルにつく。

先に占ってもらったのはキンジで、内容は『将来について』で、肝心の占い結果は……、

「ッ！ え、えと……総運、幸運です。よかったね、キンちゃん」

「なんだそりや……？」

伝えられた結果に、キンジは眉をひそめる。

というか、今のはさすがに怪しいだろ。あきらかに結果を隠した感

じだ。本当はなんて結果だったのやら。

その次はアリアが立候補したが、アリアを嫌ってる（らしい）白雪は占いを適当に済ませた。で、それがきっかけで2人は口げんかに発展した。「この前は切り札を隠してた」とか言い合いながら。

で、それはキンジに諷められたんだが、アリアはへそを曲げて自室に引っ込んでいった。

なにやっつてんだこいつらは……と、呆れていると、

「あ、錬君も占おうか？」

と、白雪が提案してきた。

白雪の……『超能力者』の占い、ですか。

……よし。

「いや……俺はやめとくわ」

「なんでだ？ せつかくだから占ってもらえばいいだろ。なあ、白雪」

「う、うん。一応どんなジャンルでも大丈夫だよ」

キンジと白雪が、2人して勧めてくる。

俺はそれに、「わかってねえなあ」とでも言うように肩をすくめ、「バーカ。未来つてのは、決まってねえからおもしろえんだろ。だからこそ俺たちは努力するし、一生懸命になる。結果がわかった人生なんざ、つまんねえだろ」

と、できるだけいい感じの台詞を返す。

が……無論、ただの口先だけである。

キンジのやつは信じてねえかもしれないが、身近に『超能力者』がいた俺は、白雪の鬼道術は本物だと知っている。てことはそんな彼女が占った場合、その結果はほぼ100パーセントで当たるんだろう。そんな占い、怖すぎる。いい未来だった場合ならともかく、さっきのキンジみたいに口ごもったりされたら、きつと泣く。というか、勝手にマイナスな想像ばかりして一人で不安になること請け合いだ。

だがそれを素直に話すのはあまりに情けなさすぎるので、ああ言っただけだが……ど、どうだ？ 通るか、この言い訳。

「ん……まあ、そういう考え方もあるか」

「すごいね、錬君。私いつも占ってたから、そんな風に考えたことな

かったよ」

よし！ なんとか誤魔化せた！

いやまあだからといってそんなちよつと見直したみたいな眼差しを向けられると、それはそれでくるものがあるんだが。

——と、そうだ。

「そろそろ俺、自分の家戻るわ」

「は？ なんでだ、いきなり」

「なんでもなにも、白雪が泊まるってんなら、俺もここに泊まるわけにやいかねえだろ」

「ど、どうしてそうなるんだよ?!」

「どうしてってお前……」

お前はともかく、俺まで一つ屋根の下なんて、さすがにそれはマズイだろ。思春期の男子と女子的に。

アリア？ あれはほぼ子供と見ていいので問題ない。

「あ、あの、錬君？ 気をつかってくれるのは嬉しいんだけど、私なら大丈夫だから……」

「ほらみろ、白雪もこう言ってる。だからお前も泊まってけ。というか、ボディガードなんだから泊まる義務があるはずだ」

必死だなキンジ。まあ俺が帰ったらお前がアリアと白雪を一手に引き受けることになるから、気持ちにはわからなくねえが。

「白雪……ホントにいいの？ 嫌なら嫌って言っているんだぞ。何もしねえとは誓うが、俺も一応男なんだからさ」

というかもしれないししょうもんなら、各方面からぶち殺されるだろうけどな。

「ううん、大丈夫。他の人なら、ちよつと困るけど……キンちゃんの親友なら、私も信用できるから」

「う……っ」

柔らかな微笑でそう言う白雪に、俺たちは揃って呻いた。

やめろよ、親友とか。女子はともかく、男子は結構恥ずかしがったりするんだぞ。そういうのは。

まあ、なにはともあれ。

こうして俺は、白雪のボディガード中も、この部屋に泊まることになったのだった。

さてさて……どうなることやら、だな。

* * *

丑三つ時。

現代においては、おおよそ午前2時を回ったほどの時間。

生活する者の大半が学生であるこの学園島においてこの時間帯は、すでに多くの者が夢の中へと旅立っていた。

それはこの第3男子寮の一室、遠山キンジの居室でも同じで、現在のこの部屋にいる人間はとっくに寝入っていた。

ただ一人。

星伽白雪を除いては。

「……………」

白雪はいまだ覚醒状態で、自らに割り振られたベッドから上半身を持ち上げていた。

いや、その表現は正確ではない。正しくは、つい今しがた目が覚めたのだ。とある夢を見たことで。

白雪は体の上にかけていた布団をはがし、音を立てないようにゆっくりとベッドから抜け出た。

そして彼女は、寝室からリビングへと向かう。

月明かりに照らされて、水玉模様のパジャマにつつまれたスタイルのいい肢体がぼんやりと浮かび上がる。月光に緩和された薄闇の中でもなお艶を持つ長い黒髪が、しやらりと揺れた。

その手にあるのは、就寝前に使用したカードの束——『巫女占札』である。

白雪は、ソファに腰を下ろして、ガラステーブルの上に巫女占札の束を置いた。

そうして、窓からこぼれる淡い光源をたよりに、山札の上から一枚一枚丁寧に裏向きでテーブルの台上へと並べていく。

「……………」

ぺらり、ぺらりと、札が置かれる音だけが、静寂をかすかに揺らす。

並べ終わったそれらを眺めて——白雪はすうつと息を吸った。

聞こえないほど短く息を吐くと、彼女は細くしなやかな指で、札を一枚ずつ決められた順番でめくっていく。

すると、変化が起きた。

札がめくられていくごとに、白雪の表情は険しくなっていた。

そして、最後の一枚をめくり終わり、

「どういふこと……？」

と、白雪は初めて喉を鳴らした。

それから、彼女は視線を寢室に転じさせる。より正確には、自分が寝ていたのは反対側の二段ベッド、その上段に。

そこに身を横たえているのは、有明鍊だ。

そして。

白雪が今しがた占っていた相手もまた、有明鍊だった。

「この結果……やっぱりさっきの夢は、『託』だったの？」

テーブルの上に表向きに並んだ巫女占札を見下ろして、白雪は呟いた。

——星伽の占いには、2種類の形式が存在している。

一つは、『占^{セン}』。これは、たとえばさきほどの巫女占札のように、自らの意思で何かを占う場合を指す。

もう一つは、『託^{タク}』。これはいわゆる神託のようなもので、ある時突然予感が訪れるというものだ。まだ『占』が使えない十代前半の巫女が使う、未熟な術だと言われている。

だが。

神託である以上、いくつになろうと、そして技術が向上しようとして、『託』を受けることがなくなるわけではない。

熟練の巫女だとしても、時に『託』が降りることがあるのだ。

たとえば——『夢』という形で。

そして白雪もまた、先ほど『託』と思わしき夢を見たことで、目を覚ましたのだ。

しかしその内容があまりに荒唐無稽で、だから白雪は本当にそれが

『託』だったのかどうかを確かめるため、今こうして『占』で真偽を確認し、占いの確度を上げようと試みていたのだ。

——結果的に言えば。

やはり白雪が見たものは、『託』だった。

「錬君、だったよね……あの人は」

白雪は、頭の中に先ほどの夢の光景を再生する。

そこにいたのは、一人の少年。そしてその周りに円形に立つ、自分やキンジ、アリアも含めた数人の男女。

まるで、犯人を取り囲んでいるかのような状況。

その中心に立つ少年は、間違いなく有明錬の姿をしていた。

そしてその少年は、自らを囲む者たちに、ある言葉を告げたのだ。

「でも……錬君が、あんなこと言うわけない」

思い出した内容に、白雪はかぶりを振る。

そも、『託』の未来はいつどこで起こることなのかわからない。さらに言えば、当たらないことさえままある。とはいえ占いの絶対性を信じている星伽の大人たちの間では、どこか平行世界の未来を受信しているのではないか、という推測が立っていたりするのだが。それなら厳密には外れとならないし、『占』で占っても「その平行世界においては正しい」という結果が出て、結局正確な真偽はわからないからだから。

白雪は、自分の占いをそういった類だと判断した。

あるいは。

そういった類だと思いたかった。

ただでさえ、先刻キンジを占った折、本人に告げることは叶わなかったが、キンジはいなくなるという結果が出たのだ。今いる場所からいなくなる。それも数年以内に、だ。

そこにきて、この『託』だ。白雪が自信を持つ己の占いを否定するのもむべなるかなといったところだった。

「……………」

白雪は、もう一度だけ巫女占札を見つめた。

やがて彼女はそれを片付け、再びベットへと潜り込むのだった。

* * *

——星伽白雪の夢の中で、有明鍊と思しき少年は言った。

『俺は……』

うつろな瞳で。常には無い退廃的な雰囲気纏い。

誰に、ともなく。

『——俺は、武偵を潰す』

ただ一言だけ、そう言った。

20. 主人公たちの知らない攻防

白雪がキンジ宅に引越してきてから、およそ1週間の時が流れた。

その間なにかあったかといえ、これが驚くほど何もなかった。懸念されていた『魔剣』^{デユランダ}の襲撃なんてその前兆すらなく、あるとすればすでにお馴染みになりつつある白雪とアリアのいがみ合いくらいのもんだ。

……というか、だな。現状、護衛メンバーに俺が入っている意味がわからないんだが。

放課後、男子寮への道を歩きながら、アリアが取り決めた白雪護衛スケジュールを脳裏に思い浮かべる。

まず、朝4人で登校する。これはいい。

午前の授業中はアリアが白雪の教室で護衛。なるほど。

昼休みにまたみんなで合流して、放課後はキンジが護衛。ふむふむ。

……で。

俺の、出番は？ どこにもないんですが。

という俺の疑問には、ご主人様ことアリア様が答えてくださった。曰く、

『あんたは万が一のときのための予備戦力よ。切り札、と考えてもいいわ。もしも「魔剣」が近くまで迫ってる場合、あんたまで見えるように護衛したら、敵にあんたがボディガードに参加してるってバレちゃうでしょ？ だから、あんたはあくまでただ同じ部屋に住んでるだけってスタンスに留めておくべきなのよ』
だそうだ。

まあ……筋は通ってる。間違ったことは言っていないだろう。

とはいえ、こちらとしては拍子抜けだ。なんだろうね。巻き込まれたーとか思ってたはずなのに、やることないと言われたら、それはそれでなんか微妙な感じだ。

ま、それはそれとして、そんなわけで最近の俺は仕事もなく、割と

暇だった。蘭豹から押し付けられた火薬運搬係りも、結局動くのはアドシアド期間中だしな。

ちなみに今、白雪はキンジを護衛に伴って、生徒会で行われている『アドシアド準備委員会』に出席している。割と忘れがちになるが、白雪は生徒会長だからな。……そういや、時雨も副会長だっけな。アドシアドの準備で忙しいとかぼやいてたっけ。

そんでアリアの方は、さつきメールが来てた。なんでも謀報科レザドのほうに顔出してるらしい。おおかた、『魔剣』の情報集めだろう。

「で……俺はどうすっかなあ」

こうなつてくると、本格的に俺はやることがない。

キンジの部屋で夕飯を作るという手は使えない。昨日作ったカレーがまだ余っているので、今日はそれを食べる予定なんだ。

俺は歩を進めながらどうするかを考えて……そして、一つ思いついた。

「護衛中に不謹慎だが……ゲームするか」

前にも言ったかと思うが、俺の暇つぶし手段はたいいゲームだ。まだクリアしてないRロールプレイングゲーム P Gがあつたからな、今日はそれをしようかと思う。

さすがに護衛中にそれはどうかと思つたが、今のところなにも起こんねえし、俺より遥かに有能な武偵が2人もついてんだ。まあ、大丈夫だろ。

そうと決まれば善は急げということで、俺は少し早足になりながら帰宅する。

そして、目的地にたどり着いての第一声。

「なんか、随分久しぶりな気がするな……こっちは」

という台詞を俺が言った場所は、最近入り浸っていたキンジの部屋ではなく、その隣にある俺の部屋だ。P S 3が俺の部屋にしかないもんで、こっちに来たわけだ。

考えてみれば、新学期からこっち、数えるほどしかここにはいなかった。懐かしさを感じるのも、ある意味じゃ当然なのかもな。

そんなことを思いながら、俺は自室からP S 3一式とソフトをリビ

ングに運び込み、32インチの薄型テレビに配線を繋いでいく。

「おつと……こいつを忘れちゃダメだろ」

その途中ふと思いつき出し、俺はテレビ脇に置かれたヘッドホンの端子も差し込んだ。ゲームをやるときは、俺はなるべくそれに集中できるようにこーやってヘッドホンで雑音をカットする。ま、本当はあんまりよくねえんだろうが。

「AAをやるのいつぶりだったか？ 最近いろいろあったからな、せっかく買ったのにほとんどできてねえや」

パッケージからソフトを出してPS3にセットしつつ、俺はぼやく。

AAというのは、『アームド・アドベンチャー』の略だ。武器を擬人化、あるいはモンスター化した世界を冒険する、RPGものである。伝説の武器がエリアボスだったりするんだ。エクスカリバーとかロングノスとかな。

さつてと、じゃあ——久しぶりに、がつつり進めるとしますか！

勢い込んで、俺はメニューから「続きから」を選択した。

ジャンヌ・ダルク30世。

世界的犯罪組織『イ・ウー』の構成員・『魔剣』。

自身強大な実力を有し、それ以上に策を弄すことにかけてはまさしく一流という、まさに生粋の犯罪者であるこの少女は今、

武偵高のセーラー服姿で、潜伏先の脱衣所の鏡相手にポーズを取っていた。

手を首の後ろに持っていつてみたり、角度を作って立ってみたり、しなをつくって妖艶さを醸してみたり。ファッションショーよろしく、ジャンヌは様々なポーズを取っていく。

「ふ、ふふふ……理子は武偵高は美人ぞろいと言っていたが、私も負けていない……いや、これは勝^{まじ}つてると言ってもいいのではないか？ 素足がこんなに出ているのはいただけないが……ふふっ、なんと愛らしい」

この脱衣所は、窓からは見えない。ゆえに電気をつけて、夜中であ

るこの時間帯でも、潜伏中にもかかわらず一人フアツションショーを開催することができていた。

可愛らしい制服を着た自分を見て悦に入るジャンヌの口元が、鏡の中で抑えきれない喜びに弧を描く。

実はこのジャンヌという少女、『イ・ウー』の仲間内の誰も知らない（もしかしたら組織の頭首は知っているかもしれないが）趣味がある。

少女趣味。長身で、どちらかといえば可愛いよりも綺麗という形容が似合うジャンヌが、自分には可愛さに憧れたゆえの趣味だった。

今まではただ心の内に秘めていただけだったのだが、今回の作戦において星伽白雪に変装する必要が生じ、理子から武偵高の制服を調達してもらったことで、そのうっぶんが爆発した。

もちろん、始めは違ったのだ。制服に合わせ、理子が作成した特殊マスクと、同じく理子に習った特殊メイクを併用し、その姿で神崎・H・アリアにトラップを仕掛ける。そうすることで、彼女たちの不和を引き起こす狙いだった。

だが、思いのほか武偵高の制服が可愛いことに気づいたジャンヌは、ある日変装無しで制服を着込み、今日のように鏡の前に立ってみた。

そこに映る愛らしい自らの姿（誤解ではなくジャンヌにはナルシストのケがある）を目撃した彼女は、以降たびたびこうしているのだった。

（『イ・ウー』に戻れば、こんな格好は出来ないからな。今のうちに堪能しておかねば……）

出来るなら他の洋服——たとえば理子のようなロリータファッションなど——にも手を出してみたいところではあるが、さすがにそれは自重した。ちなみに、白雪がよく着用している巫女服もあるにはあるのだが、ジャンヌ的には食指が動かなかったらしい。

そんなわけでせめてこの制服だけでも思い切り堪能しておこう、とジャンヌはさらに先の領域へと手を伸ばす。

「そう言えば、理子が言っていたな。「下着姿にリボン是最強」、だった

か。……いやいや、さすがにそれは……いやだがこんなときくらいしか……というかそれはもう制服関係くないか？」

なんだか策士の一族とはとても思えないような方向に悩み始めるジャンヌに、幸か不幸かストップがかけられた。

『ただいまー』

「(ビツクウ)!!」

突如廊下から聞こえてきた声に、ジャンヌはもう完全に策士とは呼べない慌てぶりを見せた。

しかしすぐにここが空き部屋であることを思い出し、では今の声は……？ と首を捻ったところで、ジャンヌは第3男子寮に監視カメラおよび盗聴器を仕掛けていたことを思い出した。

万が一誰かがこの部屋に入ってきた可能性を考慮して、そろそろと脱衣所の扉を開けたジャンヌは、そうつと隙間からリビングに置かれたモニターに目を向けた。

そこでは丁度、いくつかに分割された画面の一つに、家主である遠山キンジと標的ターゲットである星伽白雪(今日はS研の授業があったのか、巫女服姿だった)が廊下を歩いている映像が流れていた。

ジャンヌはほっと一息ついてリビングに向かい、モニターの前に座って画面の中のキンジに指を突きつけた。

「まったく、私を驚かせるとはどういうことだ遠山。覚悟はできているのだろうか？」

覚悟もなにもキンジにとっては冤罪以外の何物でもない。

が、それはともかくとしてジャンヌは盗聴器から並行して流れてくる音声に耳を澄ませた。

『キンちゃん、鍊君が帰ってないみたいだけど……』

『だな。さつき電話したんだが、出なかった。どこか行ってるんじゃないのか?』

(なるほど。有明は今この部屋にはいないのか。護衛の任務を放り出すとは思えないが……さて)

聞こえた会話に、ジャンヌは眉を寄せる。

実のところ、アリアが対策した鍊を隠し玉にする作戦だが、当然

ジャンヌにはバレていた。護衛拠点であるキンジ宅を監視していれば、そんなことはすぐにわかった。

(ふむ……ならば、好都合だ。そろそろなにか仕掛けたいと思っただところだしな)

ここでジャンヌはようやく常のクールな表情と思考に戻り、かねてから考えていた、白雪とアリア——あるいはキンジとアリアを引き離す作戦を実行に移すことにした。具体的な策はまだないが、なにかするとしたら、鍊がない今が最適なタイミングだった。

監視を続けること、3時間弱。それまでは特になにごともなくさすがにジャンヌも飽き始めたころ、キンジと白雪に動きがあった。

『白雪。俺は、少し風呂入ってくる』

『あ、うん。じゃあ、私はお部屋で鬼道術の練習してるね』

言葉通り、キンジは脱衣所の方へと向かい、白雪は自らに割り振られた部屋へと入っていった。

そして、15分ほどが経過して、脱衣所の監視カメラ映像の中でバスルームの明かりが消える。

と同時に、玄関に設置された監視カメラ映像に、帰宅してきたアリア(手にはももまんの袋を抱えている)が映った。

(好機——ッ！)

即座にジャンヌは一瞬で頭を巡らせ、素っ裸で脱衣所に出てくるであろうキンジを見ないためにモニターから目を逸らしつつ、非通知で白雪に電話をかけた。

基本的に携帯電話をすぐ傍に置く(キンジからの連絡に即時対応するためだ)白雪が電話に出た瞬間、ジャンヌは得意の変声術でキンジの声を模倣し、白雪に言った。

「すぐ来てくれ白雪！ 来い！ バスルームにいる！」

返事は聞かずに、ジャンヌは通話を切る。

直後、すでに下着をはいたキンジがいる脱衣所のカーテンが開き、

『——キンちゃん!? どうしたの!?!』

『は、はっ!?!』

唐突にやってきた白雪に狼狽しつつ、キンジは白雪から「電話でキ

ンジに呼び出された」という話を聞く。

当然風呂場からそんなマネができるわけがないので抗議する中、白雪はキンジが半裸になっていることに遅まきながら気づき、

『——ぐっ、ぐめんなさいっ！ ぐぐぐぐめんなさいぐめんなさいぐめんなさい！』

廊下に向かつて跳躍し、土下座しながら着地するという荒業を見せつけ、ものすごい勢いで謝罪しはじめた。

しかしこれでは終わらない。とりあえず落ち着かせようとするキンジに対し、超絶白雪理論が働いた結果、

『おあいこー！ キンちゃんも私のお着替えを見れば、公平になるんだもんー！』

『——はっ!?!』

「いやその理論はおかしいだろう」

けしかけたジャンヌすらつつこむほどの暴論により、白雪はその場で巫女服を脱ぎ始める。

そんなことをされてはヒステリアモードになってしまふ！ とキンジは慌てて白雪の脱衣を阻止しにかかる。

しかし白雪も強情なもので、諦めずにさらに衣服をはだけさせていく。

『キンちゃんやめて、放して！』

『おとなしくしろ！』

——言い方が悪かった。

状況は、さらに悪かった。

真実を知る者ならどちらが被害者（？）かはわかっただろうが、

『ただいまー』

今しがた帰ってきたばかりのエリアにそれを察しろと言うのは酷な話だった。

——その後の展開はお察しの通りである。

当然のようにキンジが白雪に襲い掛かっていると勘違いしたエリアは、激昂の末にキンジを追い詰めて夜の東京湾にダイブさせたのだ。

この珍騒動の陰なる犯人であるジャンヌは、いまだ部屋で暴れるリアと白雪を眺め、

「ま、まさかこんな上手いくとは……」

自分が仕掛けた事態に、少しだけ驚いていた。

* * *

……ええ、まあ、なんといいですか。

しばらくぶりにプレイすると、一気にうっぷんが解放されるな、ゲームつてのは。

これはしかたないと思う。なんだかんだで、ゲームは人間が熱中できるようにと作られた物だ。それをあんた、ずっとおあずけ喰らってたら、そりゃ爆発的に再燃しますって。

5時間とか平気でやつちやいますって。

「……………」

……いや、言いたいことはわかるよ。護衛任務中になにやってんだよお前って感じだよ、今の俺。

俺もそこところはちゃんとわきまえてて、キンジたちが帰ってくるまでには終わろうとは思ってたんだが……もう確実みんな帰ってるよ、これ。とつぷり暮れてるもん、窓の外。

……うん。サボり発覚からの風穴コンボが目に見えるようだ。

で、でも大丈夫だから！ 今丁度ボス戦だから！ これ終わらせたら速攻そっち行きますんでホント！

というわけで俺は現実から目を逸らし、代わりにテレビの画面を見る。

そこでは、この面のボスである『デュランダル』という怪物が両手を広げて俺のパーティーを迎え撃っていた。

奇遇にも、こいつは白雪を狙っているかもしれない例の犯人と同じ名前だ。代償行為ではあるが、これは叩き潰してやらねえとな。

……ん？ 『デュランダル』がなにやらチャージをし始めたぞ。

ははーん、

「お見通しだぜ、『デュランダル』。テメエが今なにしているか、全部な」

後に待つであろう現実を忘れて高揚してきた俺は、思わずそんなことを口に出す。どうせ誰が聞いてるわけじゃない。

バカめ、『デュランダル』。そのチャージからの攻撃は、剛気から聞いてんだよ。そいつは光線系の技だろ？ アイテム『リフレクト』で跳ね返してやる。

「デメエにや見えねえだろうがな、俺にはお前をぶっ潰す手段がある」俺は相手からは見えていないだろうアイテムストレージから『リフレクト』を使用する。こいつは使用した次のターン、相手からの光線系の技を全て跳ね返すというアイテムだ。

そしてターンは、相手に移る。さあ『デュランダル』、さっさと撃つてきやがれ——いや、その前にボスの脇を固めるザコキャラ（なぜか人間の敵だった。『デュランダル』に操られているという設定らしい）が攻撃するのか。

……おっ、ラッキー。偶然にもこいつも光線系の技使う気だ。

丁度いいぜ、これを『デュランダル』の前のデモンストレーションとしよう。

「——こんな風にな」

俺は先ほどの台詞に続ける形で、唇を歪めながら言った。

そしてボタンを押し、『リフレクト』発動』というコメントを進めてエフェクトを起こそうとしたところで——すぐ近くをゴキブリがダッシュするのを目撃した。

——うおっ!?

思わず立ち上がってしまい、その拍子にブツッ！ とヘッドホンの端子が外れて、さらに同時にボタンを押し込んでしまった。

瞬間、

「ぐわあああああああああああああ!?!」

という男の声優を起用したやたらリアルな断末魔が、テレビから響いた。ゲームのBGMすらかき消すほどの音量って、このゲーム会社は力の入れ所間違ってるだろ。

とはいえいつまでもこんな声を垂れ流しにしてたらどこかから苦情なり通報なりがありそうなので、俺は瞬時に端子を繋ぎなおす。

あ、焦った。まさか、ゴキブリが出るとは。やっぱ長い間家を空けるもんじゃねえな。

ちよつとしたハプニングがあったが、その後は何事もなく『デュラन्दル』も無事に撃破。セーブしてから、俺はゲームを終了した。ヘッドホンを外し、一息つく。

——と、その時、タイミングを見計らったように携帯電話が鳴った。慌ててポケットから取り出しディスプレイを見ると……相手は、アリアだった。

当然、俺は迷った。出るべきか、出ざるべきか。

だが護衛をサボったあげくに電話を無視したりすれば、きつと口に出すのも憚られるようなお仕置きが待っているに違いないので、俺は諦めて通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。

「もし——」

『鍊！ あんた、今どこにいるのツ！』

2秒で後悔したね。

アリアの声は明らかに怒気を孕んでいる。こりや、下手なことは言えねえぞ。

かといって素直にゲームしてましたとは絶対言えないし……よし。ここは賭けに出よう。

「今は、俺の家だ。長らく空けてたから、少し様子を見にな。さつきまでは情報科インフォルマで過去の『魔剣』の資料を漁ってた。なにか傾向でもあるのか探してたんだ」

俺、犯人の才能があるんじゃないやねえだろうか。まさか、こんな息をするようにそれっぽい嘘をつくなんて。

いや、だが信じられないことにアリアはシャーロック・ホームズの子孫だ。もしかしたらバレるかもしれない。

という俺の懸念は杞憂だったようで、

『そう！ そういうのが正しい武偵よ！ なのに、キンジのやつ……ッ！』

ん？ 俺に怒ってるわけじゃないのか？

というかキンジ。お前また何かやったのか。

「なんだ。なんかあったのか？」

『なにかあったどころの話じゃないわ！ さっきあたしが帰ったらね、下着姿のキンジが廊下で白雪のふ、ふふ服を脱がそうとしてたのよ!？ 白雪のバカは「合意の上だ」なんて言ってたけど、たどえそうだとしてボディガードとしてそれは禁則事項^{タブ}だわ!』

まあ、確かに依頼者^{クライアント}とボディガードは深い関係になつてはならないと言われているしな。というかキンジもげろ。

「で？ そのキンジは今どこに？」

『あたしが東京湾に追い落としてやったわ!』

「……そ、そうか」

（ここ、3階なんだけどな。

』とにかく、あんたもこつちに帰つて来なさい！ キンジが登つて来たら、一緒にあいつを説教するわよ——って、こら白雪！ なにするのやめなさい!』

『アリアこそ、キンちゃんにお仕置きなんて許さないよ！ あれは合意だったのおー!』

ガツチャンガツチャンと、破壊音らしき何かスピーカーから聞こえてくる。

ああ……また、部屋が壊れてんのか。せつかく直したのに。

まあ……、

「とりあえず、俺のほうはなんとか誤魔化せたのかね」

自業自得っぽいキンジの心配はハナからせずに、俺はがりがりと頭をかく。

それから俺は、おそらく戦争状態であろうキンジの部屋へ向かうため、玄関の方へ歩いていった。

* * *

アリアと白雪が戦っているのを尻目に、ジヤン又はモニターの前から立ち去り、今度は別口のスピーカーのほうへと向かった。

目的は、有明鍊の部屋にしかけた盗聴器を起動させるためである。

『GGG^{トリプルジー}作戦』の本来の予定では、ジヤン又は鍊の部屋にも監視カメラおよび盗聴器を仕掛けるつもりだった。

しかし肝心の鍊は入院中でまったく部屋に戻ってこない上に、退院してからもキンジの部屋に居候するらしく、結局ジャンヌは念のために盗聴器だけ設置しておくに留めていたのだ。

そのことをつい先ほど思い出したジャンヌは、もしかしたら鍊はそちらの部屋にいるのかもしれないと思いつき、遅ればせながらその盗聴器のスイッチを入れた。

ザザ……ツ、とノイズが一瞬走る。

しかし、その後には何も続かない。ただ、無音だった。

これは無駄足だったか、とジャンヌが嘆息したその瞬間、

『お見通しだぜ、「魔^{デュランダル}剣」。テメエが今なにしているか、全部な』

と、スピーカーから声が響いた。

「……………は？」

ジャンヌは、思わず呆けた声を出す。

スピーカーから、有明鍊の声が聞こえた。それ自体はなんの問題もない。

だが、その内容。あたかもジャンヌがこの瞬間、鍊に盗聴を仕掛けられていることがバレているようなその台詞に、ジャンヌは背筋を凍らせた。

最悪の想像が、脳内を駆け巡る。

(ま、さかコイツ……私と同じことを——ツ!?)

神崎・H・アリアは、部屋に無数の監視カメラを設置することで、『魔剣』の動向を監視しようとした。

だがジャンヌはその裏をかき、逆に白雪たちを監視していたのだ。しかし、もしも。

有明鍊は、さらにその裏をかき、ジャンヌを監視していたとしたら——？

脳裏に、以前理子が言っていた言葉が蘇る。

——あいつらを、舐めるな。

(いつだ？　いつ私の居場所がバレた？　いや、そもそも私の居場所が知られているなら、なぜ攻めてこない?)

想定の遙か埒外の事態に、ジャンヌの頭脳は空転する。策を練る者

は、往々にして想定外の事態に弱い。偉大な策士の一族を継いでいるとはいえ、まだ十代のジャンヌにはそういう精神的な脆さがあった。しかし、とはいえ時間を置けば彼女は冷静になれただろう。冷静になって、なにかしらの答えや対抗策を弾き出したはずだ。だが。

有明鍊はそれを許さない。

『デメエにや見えねえだろうがな、俺にはお前をぶっ潰す手段がある』
追撃のように、スピーカーの向こうで鍊はそう言った。

見えない。それはつまり、監視カメラの未設置を意味しているのだろう。

完全にこちらの手の内が暴かれていることに戦慄するジャンヌは、後半の台詞に眉を寄せた。

そんなジャンヌの様子を知ってか知らずか、鍊は続けて言う。

『——こんな風にな』

一拍置いて。

次の瞬間、

凄まじいまでの怨嗟の絶叫が、スピーカーを割らんばかりに轟いた。

「——ッ!？」

小さく、喉がひきつけを起こす。

反射的に、ジャンヌは盗聴器のスイッチを切った。

先ほどの絶叫が嘘のように、シンと静まり返る室内……否、ジャンヌが発する荒い呼吸が空気を揺らしていた。

「なん、だったんだ……今のは」

具体的に、スピーカーの向こうで何が起きたのかはわからない。聞こえてきた悲鳴も、誰の物なのかわからない。

しかしそれが逆に、ジャンヌの恐怖感を煽っていた。

なぜか喉がやたらと渇く。えもいわれぬ焦燥感が、ジャンヌを包み始める。

「とにかく、ここにはもういられない。私の居場所が知られている以上、ここにはマズイ」

ジャンヌは冷や汗をぬぐうこともせず、すぐさま撤退準備を始める。幸い、第3男子寮とこの第1女子寮は距離がある。逃走時間は十分に稼げるはずだった。

それぞれの機器からデータを消しながら、ジャンヌは臍ほそを噛む。

(気づけなかった……！ この私が、一切！)

屈辱。ジャンヌの胸中を占めるのはその感情だ。

策に嵌めたつもりが、いつのまにか嵌められていた。

狩人と獲物、その立場が気づけば逆転していた。

未だジャンヌに攻撃の手が伸びていないことが、まるで見逃されているかのようだった。

今はまだ、見逃してやる。だが、直接俺の仲間に出せば——喰らうぞ。

そう、言われているようだった。

「クソ……ッ！」

自分に惨めさを、有明鍊に悔しさを感じながら。

ジャンヌ・ダルク30世は、『使われていない部屋』から脱出していった。

* * *

「I, d like to thank the person
…」

亮のエッジの効いた歌声に合わせ、剛気のドラムが、キンジのエレキギターが、そして亮本人が演奏するもう一つのギターが、強襲科の体育館に響き渡る。

彼らのバンドから少し離れたところでは、アルIIカタのチアを練習するチアリーダー集団がポンポンを揺らして練習していた。その中にはアリアの姿もあって、胸元に銃弾型の穴が開いた衣装で小さな体を躍動させていた。

初めて見たが……上手い、な。バンドもチアも。なにより楽しそうだ、みんな。キンジはチアの女子たちに嫌そうな顔をしてるが。

しかしキンジのやつ……もう風邪治ったのか。治りはええな。

キンジは昨日、学校を風邪で休んでいる。どうやら一昨日の夜東京

湾に落とされたのが原因らしい。まあ、時期的にはともかく半裸で海に落ちたんじや、それもしかたねえかもな。

……まあ、それはともかく、

「本当なら、俺もあっち側だったんだけどな……」

体育館の端で、キンジたちの見学という名目で護衛メンバーに加わっていた俺は、そんなことをポツリと呟く。

あいつらは自分の役割を楽しんでるつてのに、俺は蘭豹に押し付けられた火薬運搬係り。万が一引火でもさせようものなら、学園島は吹っ飛び、俺は一気に大量殺人犯だ。

「やるせねえぜ……」

若干気落ちしてきたテンションの俺に構わず、練習は進む。

キンジたちが演奏する曲——『フー・ショット・ザ・フラッシュユ——』が終わりに近づき、チアたちは一斉にポンポンを頭上に投げた。

本来はここであのポンポンを2丁拳銃で撃ち、バラバラにする演出が入るんだが、さすがに今日はそこまではしないようだ。

で、最後の一音がかき鳴らされ、白雪の合図とともに本日の練習は幕を閉じた。

「おーう、錬！……どうだったよ、オレたちの演奏は？」

ステイックを仕舞いながら、剛気は大声でそう訊いてくる。

俺は彼らの方へ近づきながら、

「上手かったと思うぜ。まあ、素人意見だけだな」

「有明君も、参加すればよかったのに」

スポーツドリンクで喉を潤す亮に俺は肩をすくめて、

「そういうわけにもいかねえんだ。言ったら、本番じゃ雑用が入ってんだよ」

「あはは、それはご愁傷様というしかないなあ。……あれ？ 遠山君、どこ行くの？」

つられて視線を向ければ、いつのまにかギターを下ろしたキンジがどこかへ行くところだった。

「ちよつと屋上に行ってくる。ここは、女子が多くてかなわん」

「おいおいキンジい、そこがいいんじやねえかよ」

「お前と一緒にするな、武藤」

半眼で剛気を見やってから、キンジは階段の方へ歩いていこうとする。

俺はそれを慌てて引きとめ、キンジの耳元に口をやり、小声で、

「おい、いいのかよ。白雪置いて離れても。ボディーガードだろ、お前」

「(アリアがいるし、いざとなればお前もいるだろ。なら、大丈夫だ)」

同じく小声で返すキンジに、俺は眉を寄せる。

言ってることは間違っちゃねえのかもしれないが……ボディーガードとしてどうなんだ、その態度は。というか頼むから俺を戦力として期待しないでください。

ここは一度なにか言っておくべきだろうかと俺が逡巡していると、
「(とかだかな、俺はそもそもこのボディーガードの必要性自体疑ってるんだ。『魔剣』なんて、ただの都市伝説だろ。だってのに、アリアのやつは居もしない『魔剣』を捕まえようと躍起になってる。辟易してるんだよ、俺は。——そういうわけだ。じゃあな)」

「あ、おい！」

一気にまくし立てて去っていくキンジに、俺は制止をかける。が、彼が止まることはなく、さっさと階段を上っていった。

まったく、あいつは。せめて任務くらいはちゃんとやれよな。

そんなことを思いながらキンジが去っていった方向を見ると……トコトコと小走りで、チアリーダー姿のアリアが階段へと向かっていくのが見えた。どうやら、キンジを追いかけていったらしい。もしかしたら、護衛をほつぱりだしたことを糾弾しにいったのかもな。病み上がりなんだから風穴は勘弁してやれよ、と心中で考えてから、俺は剛気たちとの会話に戻る。

そして、数分後。

突如、ドガガガガガッ！ と連続した発砲音が上——屋上から響いてきた。

あ……あの、馬鹿^{アリア}！ やっぱやりやがったな!?

「悪い！ ちよつと様子見てくるわ！」

剛気たちにそう告げて、俺は慌てて階段に向かってダツシユする。さすがに、今の病み上がり状態のキンジに対して発砲はやりすぎだ。これでボディーガード要員が減ることになれば、目も当てられない。幸い、屋上には階段を一階分上ればつく。あまり時間はかからないだろう。

だが、踊り場あたりまで来たところで、再び轟音が——今度は、発砲音と着弾音が混ざったような音が聞こえてきた。撃ちすぎだろ、おい。

そして、俺は残りの半分も上りきり——丁度その瞬間、眼前にあつた屋上へと続く扉が、バガアン！ と蝶番が吹っ飛ぶのではないかと思うほどの勢いで開いた。

そこから飛び出してきた小柄な少女は、やはりというかチアリーダー姿のARIAだった。

一目で、発憤していることが見て取れるほど、彼女は荒々しい怒気を身に纏っていた。

しかしそれだけではなくなにか悲しいことでもあったのか、その大きな両目には今にも零れそうなほど涙が溜まっている。

その姿を見た俺は、思わずたたらを踏んでしまった。出会いがしらだったからというのももちろんあるが、さすがに病人への発砲は看過できないと告げるつもりが、まさかこんな表情を見せ付けられるなんて、思ってたなかった。

そんな俺に、ARIAもまた気づいたようで、

「錬……あんた、いつからそこにいたの？」

溢れる寸前だった涙をぐしぐしと腕で拭いながら、ARIAは俺に尋ねる。

俺はどこか居心地の悪さを感じながら、

「あー……今来たばかりだ」

「そう……もしかして、さっきの聞こえてたの？」

いまだ冷めやらぬ怒りがあるのか、まなじり 眦がきつくなっているARIAの眼光から目を逸らしつつ（決してビビったわけではない。ビビったわけではないのだ）、

「まあ、あんだけでかけりや、な」

と、答える。

さっきのというのは、おそらく銃声のことだろう。1発2発なら武偵高の常として聞き逃したかもしれないが、さすがに直上であれだけ連射されれば、いくらなんでも馬鹿でかい音になるからな。

と、俺はそんなつもりで返答したわけなんだが、ちらりと視線を戻した先でなぜかアリアは表情を曇らせ、

「そう、聞いてたの……。じゃあ、あんたも思ってるの？ あたしのことを、キンジとおんなじように……。思ってるの?」

そう問いかけた、アリアは。

どこか、がけつぷちに追い込まれているかのような、思いつめた表情をしていた。

まるで、俺の返答しだいで全てが終わってしまうと、そんなことを考えていそうな雰囲気だった。

……。どうしよう?」

正直に申し上げよう。さっぱり、なんの話かわからない。

だが、この場面で「なんのことだ?」なんて聞き返せるわけがない。さすがにそんな回答が許される状況じゃないことくらい、わかる。

考える、俺。この状況から、答えを導きだせ。

キンジが屋上へいった。アリアはそれを追いかけた。(おそらく)アリアが銃を撃った。アリアは今、泣きそうになっている。その原因は多分、キンジがアリアを傷つけるような言動をした……。ってことだろう。状況的に見て。

では、キンジは何をした?

……。ダメだ、そんなのわかるわけ――

『「魔剣」なんて、ただの都市伝説だろ。だってのに、アリアのやつはいもしない「魔剣」を捕まえようと躍起になってる。辟易してるんだよ、俺は』

瞬間。

俺のシナプスが、繋がった。

これだ……。これだよ。おそらく、キンジがアリアに言ったのはこれ

だ。

屋上へ行ったキンジを追いかけたアリアはきつと、キンジを叱ったはずだ。護衛を放り出すとは何事か、と。

だがキンジは、このボディガードに必要性を感じていない。なぜなら、『魔剣』などいないと思っっているから。

対して、アリアは真逆。『魔剣』は絶対いるものとして、その逮捕に尽力している（なぜかはわからんが）。

意見が分かれた末に待つのは、衝突だ。そして普段からよくケンカになるあいつらのことだ、言い合いに発展したのは間違いないだろう。

そこで、おそらくキンジは言ったのだ。『魔剣』なんていない」と、アリアの努力を、全て無駄だという形で切って捨てたんだろう。

だから、アリアは今ここにいる。泣きそうな顔で、ここにいる。なんせ、パートナーと呼んだ相手から、全否定されたのだから。ならば。

俺がこの場面で言う台詞は、これしかないだろう。

「いや、俺はキンジとは別意見だな」

「え……う？」

きよとん、と。そんな擬音が似合いそうな顔で、アリアは小さく零した。

俺はそんな彼女の顔を見返し、

「俺は、お前が間違えてるとは、思っつてねえよ。そりや、絶対にとは言えねえけどな、まあそのぐらいは信用してんだ、俺は」

俺自身が会ったわけじゃないから確証はないが、おそらく『魔剣』はいる。なんせ、教務科が直々に白雪に護衛をつけようとしたんだ。あいつらは、滅多なことでもなけりや、自主的には絶対生徒を守ろうとしない。つまり、生徒を守らないはずの教師が動いた。これが逆説的に、白雪が本当にやばい状況にしていることを指している。

……言っつてなんだが、なんて嫌な信頼関係だ。助けてくれないことを信用している教師なんて、世界広しといえど武偵高くらいじゃねえのか？

まあ、それはおいといて、だ。

俺は怒った仔ライオンを刺激しないように笑みを浮かべつつ、「だから、大丈夫だ。俺は、ちゃんとわかっているから。それに、キンジだってお前を拒絶したいわけじゃねえはずだぜ？」

だから怒らないでね、と心中で続けつつ、俺はキンジへのフォローも入れておく。なにせあいつが否定したのは『魔剣』であってアリアじゃないんだ。さすがにアリア本人を否定なんぞしてたら、フォローできそうにないが。

で、俺の渾身のフォローを受けたアリアは、

「……………」

と、無言で顔をうつむけた。ピンク色の前髪が、彼女の表情を隠す。

……あ、あれ？ なにこれ？ なんか、想定してたりアクションと違うんですけど。

もしや爆発の前兆かー!? と俺が危惧を抱いた瞬間、

「……………」

アリアが、なにかをぽつりと呟いた。

？ 今、なんて言った？

それを俺が聞き返そうとして、

アリアは、だつと駆け出して階段をものすごい勢いで下っていつてしまった。

階下へと消え行く小さな背中を、俺は呆然と見送った。

……お、おう？

アリアの行動の意味を考えるも、さつきとは違い、今度は俺のシナプスさんは活躍してくれなかった。

ので、

「……………ミスったのかな？」

と、俺は一人首をかしげた。

有明鍊の推理は、大枠では当たっていた。

確かに、彼の予想通り、角逐かくちくはあった。屋上へ向かったキンジを追ったアリアはまず、護衛をサボタージュするキンジの脳天に蹴りを

叩き落とし、それを皮切りにしだいに2人の間は険悪な空気へと成り代わっていった。

最初に爆発したのは、意外というべきかやはりというべきか、キンジの方であった。

家を破壊されたあげくに勝手に要塞化を施され、ただでさえ女性を忌避するキンジに構わず白雪を同居させたり（これはまあ護衛の観点上必ずしも間違っているとは言えないが）、あげくの果てに現在強制的な早朝訓練にて、あの有名な達人技『真剣白刃取り』エッジ・キャッチングをマスターしろと迫り、それに付随してところかまわず襲撃を仕掛けられる始末。これでいまだに我慢できるやつがいたら、そいつはとつとと聖人にもなつてろとキンジは本気で思う。

前述した脳天への蹴りは制裁兼白刃取りの訓練だったこともあり、キンジはまずそこからアリアを弾劾した。真剣白刃取りなど、一朝一夕でできるはずがないと反論したのである。

しかし、

「ダメよ！ この前あんたにも言ったでしょ！ 『魔剣』は剣の名手、その剣は鋼をも斬るって話よ。そんなの防ぐためには、白刃取りしかないでしょ！ それに、前に強襲科アサルトで、錬の同級生が言ってたわ！ 錬は中学生のころに白刃取りを成功させてるって！」

「だからどうした！ 俺は、あいつじゃない！ 俺とあいつを、同列に見るな！」

「でも、あんたは錬とパートナーだったんでしょ!? だったら、あんたにも同等の力があるはずだわ、できないわけがない！」

「こ、の……ッ！」

「ちがあかない。キンジは端的にそう思った。」

あるいは、ヒステリアモードのキンジだったならば、まだ現実味のある話だった。だが、今のキンジにそんな超高等技能を要求されたところで、スペックが追いつかない。

しかし、アリアはそれを理解しない。いや、できない。もちろんヒステリアモードのことを知らないというのもあるが、それ以前の話だ。

アリア自身は、白刃取りができる。そして、鍊も可能らしい。ならば、その2人のパートナーであるキンジもできるはずだとアリアは思い込んでいる。当然のように。

それは、天才の理論だ。自分が出来る。だから相手もできるだろう。むしろ、なぜできないのかがわからない。そういう領域の住人なのだ、この少女は。

そこが、キンジにはついていけない。ヒステリアモードという力を持つているとはいえ、大部分において凡人と呼べるキンジには、アリアを理解できない。

それに、

「そもそも、『魔剣』なんていねえんだよ！ 結局、いままで白雪にはなにもなかっただろ！ お前は、かなえさんを助けたいばかりに願っちゃまったんだよ！ 『魔剣』が実在してほしいってな！」

「ツー」

キンジの言葉に、アリアは唇を引き結んだ。

神崎かなえ。今は新宿警察署に拘留されている、アリアの母親だ。彼女はイ・ウーに懲役864年の濡れ衣を着せられている。アリアが祖国であるイギリスを離れて日本まできたのは、この濡れ衣を全て無実だと証明するためだ。

そしてその罪を着せた者のなかに、『魔剣』の名があつた。

だからアリアは、白雪の護衛を引き受けた。彼女を付け狙う『魔剣』を、迎えうち逮捕するために。

だが、とキンジは思う。

都市伝説である『魔剣』が実在する証拠はどこにもない。ましてや、白雪が狙われている可能性など、輪をかけて少ないだろう。それは至極まっとうな意見ではあつた。

だが、とアリアもまた思う。

『魔剣』は、いるはずなのだ。でなければ、かなえに着せられた罪が説明できない。いや、そんな論理以前に、アリアのカンが告げていた。

『魔剣』は、いるわ！ あたしのカンでは、もうすぐそこまで来てる！」

「カン!? ふぎけんなよ、アリア! 武偵は、そんなもん頼りにしねえ!
! 武偵はいつだって、推理と証拠で語ってきたんだよ!」

「でも、いるの! 絶対に!」

「お前の中ではな! 自覚してないようだから俺が言ってやる。天才様のお前にはわかんねえかもしれないが、世界は凡人が動かしてんだ!
! いいか——」

——その、続きを。あるいはキンジは言うべきではなかったのかも
しれない。

アリアの歪みを指摘するその最後の言葉を、キンジは胸の裡に飲み
込むべきだった。

しかし彼は、言った。

「お前は、ズレてんだよ!」

直後。

アリアの顔が蒼白に染まった。

反射的に、キンジは気づいた。今自分が放った言葉が、アリアの胸
を抉る刃に変貌したことを。

遠山キンジは、今、神崎・H・アリアという少女そのものを否定し
たのだということ。

だけど、咄嗟に謝れない。冷静ではない頭が、それを拒否する。

そしてアリアは2、3歩後ずさり、刹那表情を変えた。

衝撃から、憤怒へと。

「そう……あんたも、そう言うんだ。みんなと一緒で、あたしをわかっ
てくれないんだ。先走りの、独り決めの、弾丸娘——ホームズ家の欠
陥品だって、あんたも思うのね!」

ドウツ! という気迫をキンジは受けた。

彼女の声から、彼女の目から、彼女の雰囲気から、キンジは悟る。自
分は今、アリアを心底怒らせた、と。

アリアの言は続く。

「あたしにはわかる! すぐ近くまで、敵は来てる! でも、それをう
まく言葉にできない! 論理立てて、推理として、シャーロック曾お
爺さまみたいに証明できないのよ! だから誰も信じてくれないし、

あたしはいつだって独奏曲で……だけど、それでも直感でわかるのよ！
！　なのにあんたは、なんでわかってくれないの!?!」

「……もう一度言うぞ、アリア。それは武偵じゃない。俺たちが語るには、推理と証拠がいるんだ。それを用意できないってんなら——俺は、お前を信じられない」

「——ッ！　あんたは、あんたたちだけは信じてくれるって思ってたのに……!」

アリアは、ギリリと齒の根を思い切りかみ合わせると、唐突に左右のレッグホルスターから二丁のガバメントを取り出し、

「こ、の……バカキンジィ——ッ!」

叫んで、両手の引き金をめちやくちやに引いた。

乾いた音が連続で響き、亜音速の弾丸が幾筋もキンジの体を掠める。

(ちよ……っ!?)

しかし、それだけでは終わらない。助走をつけたアリアは、キンジの顔面に飛び乗り、さらに跳躍。キンジが地面にもんどりうつのを尻目に、屋上に設置されていた貯水タンクに再装填した弾丸をこれまた連続で叩き込んだ。

そしてアリアは、着地すると同時に、すぐさま階段へと通じる扉に駆け寄り、勢いそのままにドアノブを捻った。

強烈な音を響かせながら開いた扉の向こうへ体をすべりこませ——そこでアリアは、一人の少年に会った。

そこにいたのは、先ほどまで体育館にいたはずの黒髪の少年、有明錬だった。

驚いたような表情をしている彼に、アリアは問いかける。

「錬……あんた、いつからそこにいたの?」

知らず溜まっていた涙を腕で拭うアリアに、錬はどこか気まずそうに落ち着かないしぐさで、

「あー……今来たばかりだ」

と、答えた。

その回答に、アリアは少々ほつとする。錬の言葉が本当なら、さっ

きの言い合いは聞こえてなかっただろうから。

だが、この妙に気忙しない態度が気にかかる。本当になにも聞いてなかったなら、こんな様子を見せる必要があるだろうか？

だからアリアは、

「そう……もしかして、さっきの聞こえてたの？」

と、探りを入れた。

錬はますます居心地が悪そうに視線を斜向けつつ、

「まあ、あんだけでかけりや、な」

(なによ……やつぱり、さつき来たなんて嘘じゃない)

確かに、アリアの怒鳴り声はさぞや大きかっただろう。だが、いくらなんでも階下に届くレベルではなかったはずだ。ということはつまり、錬はそのときからここにいたことになる。

(嘘が、下手なんだから……)

聞かれていたことが確定し、アリアはその玉容に陰りをつくる。

次いで、

「そう、聞いてたの……。じゃあ、あんたも思ってるの？ あたしのことを、キンジとおなじように……思ってるの？」

その時のアリアの心情を一言で表すなら、『諦観』というのが的確かもしれない。

あるいは、自棄になっていると言ってもいい。訊かなければ、これ以上傷つくことはないのに、それでもアリアは訊いた。その先でキンジ同様否定されれば、確実に自分という殻に閉じこもってしまうだろうことを、どこかで感じながら。

しかし。

有明錬は、そんな結バッドエンド末は認めない。

「いや、俺はキンジとは別意見だな」

あつさりど。なんでもないように。

有明錬はそう言った。

「え……？」

アリアは咄嗟にはその言葉を理解できなくて、そんな呆けた声を出した。

しだいに、スポンジが水を吸収するようにじんわりと理解が追いついていく。

その間にも、鍊の言葉は続く。

「俺は、お前が間違えてるとは、思ってたねえよ。そりや、絶対にとは言えねえけどな、まあそのぐらいは信用してんだ、俺は」

信用。信じている。鍊は、そう言った。

——俺は、お前を信じられない。

最前、キンジに告げられた台詞が想起される。

信じていると、信じられない。正反対の言葉。

遠山キンジが、神崎・H・アリアを否定したとすれば。

有明鍊は、神崎・H・アリアを肯定した。

「だから、大丈夫だ。俺は、ちゃんとわかってるから。それに、キンジだってお前を拒絶したいわけじゃねえはずだぜ？」

鍊は、笑いながらアリアを諭した。

アリアは、そんな鍊の顔を見上げる。今のアリアには、どこか鍊が大人びて見えた。

彼女はたまに、鍊がとても年上であるかのように錯覚することがある。普段はむしろ子供っぽいところがある彼が、どういうわけか時折包み込むような雄大さを見せるときがあるのだ。

まるで、敬愛する父親のように。あるいは、彼女に実兄はいないが、子供の頃に夢想した兄のように。

(うわ、わ……っ)

そんなことを思った瞬間、急に気恥ずかしくなったアリアは、慌てて顔を下に向けた。今鍊に顔を見られるのは、どうにも許容できそうになかった。

気づけば、数刻前までの憤りが、消散していた。代わりに、いろんな感情が渾然一体となってアリアの心中を占めていた。

たとえば、羞恥心だったり。たとえば、随喜だったり。たとえば――

「……ありがとう」

アリアは、感謝の気持ちを籠めて小さく呟いた。

それがまたくすぐったくて、アリアは錬の反応も待たずに、急いで階段を駆け下りていった。

体育館へ下りて、そのまま外へと駆け出していった少女の口元には、しっかりと弧が描かれていた。

* * *

——ちなみに。

(……で、出るに出不れねえ)

扉越しに錬たちの会話を聞いていたキンジは、複雑な思いを胸に、ああむけになって屋上の地面へと身を横たえていた。

貯水タンクに弾痕で書かれた、『バ カ キ ン ジ』と読める穴から溢れ出る水の音は、キンジには最悪のBGMに聞こえたそうだ。

21. おそらくは世界一不適當なプロポーズ

みなさんは、手錠というものをご存知だろうか？

そう、あのわつかが2つくつついたみたいなの8の字型の拘束具のことだ。主な使用用途は、警察や武偵が犯人を拘束するためだな。

で、その手錠なんだが、

どういうわけか、今俺の両手にながちりと嵌められていた。

「……………」

意味が、わからないって？ 安心しろ、俺だって意味がわからない。

くすんだ光を放つ鈍色の鉄輪が、「お前は逃げられないんだぞ」とこれでもかというくらいに主張している。

それを呆然と眺める俺に、ふいに声がかげられた。

いや、訂正。いままでかけ続けられていた声を、俺がようやく認識した。

「——聞いてますか、有明先輩!? あ、あああなたは、少しでも反省の色がないんですか!」

声質から明らかに怒っていることが見て取れるその人物は、少々特異な格好をしていた。

濃紺色の上着に、同色のタイトスカート。胸元にはピシリとしたネクタイ、左腕には腕章が巻かれており、桜の紋が入った髪留めで二つくりにした長髪の上には、つばが内側に折れた丸帽子がちよこんと乗っていた。

などなど長々と説明したが、ようするに一言でまとめると——婦警さんのコスプレをした少女が、そこにいた。

いや、正確に言えばそれはコスプレでもなければ、彼女が正規の婦警というわけでもない。それ以外でこんな格好をする場合が、あと一つ残っている。

——『架橋生』。

『インターンター架橋生』や『チェンジ転装生』同様、特異性が高い武偵高の中でも、さらに特殊な生徒体系のひとつだ。

日常的に他組織（主に警察関係が多い）に出入りし、実地訓練とい

う名の研修を行ったり、武偵と他組織の橋渡しとなる役目を負っていたりする生徒たち。それが、『架橋生』だ。

つまり、目の前にいるこの少女（おそらく中学生くらいか）もまた、武偵高の生徒というわけだ。インターンでアクロスなんて、滅多にいないけどな。

そしてその『架橋生』の少女は、いまだ何も答えない俺にびしつと人差し指を突きつける。

「まだだんまりですか!? いいかげん、釈明なり謝罪なりしてくださいよ！ 私にした——」

そこで一息、息継ぎをして、

「——セクハラについてッ！」

と、大声で俺を糾弾するのだった。

……本当に。

一体、どうしてこうなった？

* * *

「というわけで、あたしたちは外部から護衛を続けるわよ」

「なにが『というわけで』なのかを、まず説明してくれ」

キンジとアリアのケンカ（俺の推理が正しければだが）から、空けて翌日の土曜日。

学園島唯一のファミレス『ロキシー』の一席で、制服姿の俺とアリアは向かい合わせで座っていた。

ことの起こりは、今朝の話だ。相変わらずキンジの家に居候していた俺の下に、一通のメールが届いた。

差出人はアリアで、内容は「キンジにバレないように『ロキシー』に集合」というものだった。なぜキンジに内緒なのかはわからなかったが、俺は今回の護衛任務の筆頭からの命令に素直に従い、こうして出向いてきたのだ。

自働ドアをくぐりファミレスの中に入ると、店員が来るよりも早く、禁煙席の一角からキンジ曰くのアニメ声——アリアが俺を呼んできた。

ので、俺はそちらに向かいアリアの正面に腰を下ろし——開口一

番、アリアは冒頭の台詞を告げたのだった。

「んもう、察しが悪いわね。おに……錬は、昨日の屋上での会話、聞いてたんでしょ？」
『魔劍』^{デュランダル}がもう、すぐそこまで迫ってるはずだ、って」

俺の質問に、アリアはそう答えた。

その途中、何かを言いかけて顔を赤くしてたんだが、何が言いたかったんだろう。

というか、ぶっちゃけそんな話ひとつも聞いてないんだが、素直にそう言えばまたややこしいことになりそうな気配がしたので、俺はひとつ頷いて肯定する。いいのかな、これで。

アリアはそれに頷き返し、

「でもね、キンジには言ってなかったけど、その話には続きがあるの」「続き？　ただ近くに來てるだけじゃねえってことか？」

「そう。『魔劍』はね、仕掛けてこないのよ。かなり接近してきてるはずなのに。あたしやレキが張り付いてるから、かもしれないけどね」
眉を寄せて渋面をつくるアリアの言葉に、俺は気になる点を見つけた。

それは多分アリアが言いたいことの肝じゃないだろうが、その名前には少し思うところがあったので、思い切って質問してみる。

「レキ？　レキが、どうしたんだ？」

「え……？」

アリアは一瞬、なにを今更言ってるんだ？　みたいな顔になり、しかしすぐに納得がいったように手を打ち、

「ああ、そういえば錬には言ってなかったわね。実はね、レキに白雪を遠隔から守るように頼んでおいたのよ。といっても、レキは狙撃競技^{スナイピング}の日本代表でアドシアードに出るそうだから、腕の時間貸し^{パートタイム}としてだけ。それが、どうかした？」

「いや……なんでもねえ」

—— 『全ては、いずれわかります』

ふと脳裏によぎったレキの言葉を思い出し、しかしそれを頭を振って追い出した。

アリアは俺の様子に不思議そうな表情を見せたが、すぐに気を取り直し、

「話を続けるわよ。いい？ あたしやレキがくつついてるうちは、『魔剣』はきつと襲ってこない。護衛としてはそれでいいのかもしれないけど、それは逆にいえば、逮捕することもできないって意味だわ。だからあたしは、一度白雪のそばから離れることを考えたのよ」

ああ……なるほどな、これで合点がいった。最初の台詞はそういう意味だったのか。

だが……外部ってのは、どういう意味だ？

「お前の考えはわかったが……で？ 具体的には、どうすんだ？」

「別に、大したことはしないわよ。むしろ大仰に動けば動くだけ、あたしがボディガードを放り出したっていうのが嘘だブラフってバレちゃう。とりあえず、遠方からの監視に留めておくつもりよ」

「遠方？」

「そ。あたし今、レキの部屋に置いてもらったのよ。あの子の部屋、第2女子寮の最上階だから、監視にはうってつけだわ」

アリアの説明に、俺はなるほどなと頷く。

確かに、第3男子寮と第2女子寮の距離は近く、位置関係からしてもスコープで覗くことはできるだろう。アリアはつまり、そうやって今度は遠距離から護衛にあたるってわけか。

「それは構わねえが……俺は、どうする？ そのままキンジの部屋にいりゃいいのか？」

「？ なに言ってるの？」

きよとん、と首をひねるアリア。

ああ。今のは、失言だった。

まあ、そりやそうだよな。徹底主義のアリアのことだ、隙を見せるなら、とことんまでやるだろう。となれば、俺も引き剥がしといたほうが、さらに隙が出たように見えるはずだ。総合戦力的には、たぶんあんまり変わらないだろうけど。

じゃあ、俺は自分の部屋に帰ってところかな。あるいは、他の連中の部屋に泊めてもらうかだろう。

あー、でも、理由はどうするかな。アリアはケンカしたという建前がある以上、キンジの部屋を出て行ってもおかしくないが、俺がいきなりそんなことを言い出しても、たぶんキンジは反論するだろう。だって、そうなりやキンジは白雪と2人きりで生活することになるんだし。

——と、そこまで考えたとき、アリアが言った。

「あんたも一緒にレキの部屋に泊まるに決まってるでしょ」

一瞬、耳がイカれたんじゃないかと、俺は本気で心配した。

しかしそれも数秒、俺はすぐにその台詞が指す意味を呑みこんで、

「はあああああああああああああああ!?!」

と、立ち上がって絶叫した。

瞬間、ファミレス中の視線が俺に集まり、俺は慌てて席に座りなおし、

「いやいやいや!?! なんてそうなんだよ!?!」

「バカね、その方が都合がいいからよ。大方、自分の部屋に戻ればいいやとか考えてたんでしようけど、それじゃ温いわ。やるからには、徹底的に距離を取らないと。で、そういうことならあんたも行動を共にしておけば、いざというときすぐに動けるでしょ?」

アリアは小さく口元に笑みを浮かべながら、自らの策を誇る。

まあ……理屈的には、間違ったことを言ってるわけじゃないんだが……、

「いや……にしたって、さすがにマズイだろう。お前が俺やキンジの家に泊まるならともかく、俺がレキの部屋に泊まるってのは」

「なんでよ? 同居人がキンジからレキに変わるだけよ。たいした違いじゃないじゃない」

「変わるよ! めちゃくちゃ変わるよ、それ!」

とうかたとえレキがそれを許可して、俺が受け入れたとしても、女子寮に男が宿泊なんてしてみる。他の女子にバレたらどうなるか……。

噂になるくらいなら、まだいい方だ。もし不法侵入として通報されでもしたら、武偵3倍法で何年懲役を喰らうかわからない。いや、そ

れでもまだマシだろう。武偵高の教師連中に連絡されたら……うん、死ぬな。

というわけで——毅然とした態度で、きっぱり断るんだ、俺よ！

「断るー！」

「なにか言った？」

「いえ、なにも」

1秒で抜き放たれたガバメントを見て、俺は0.1秒で意見を翻した。

もうやだよこのパターン！

* * *

「そういうわけでな、アリアの面倒は俺が見てやつから、お前は白雪のほうを頼む」

『そうか、レキの部屋に……そんなことだろうとは思ったが。わかった、じゃあ白雪のほうは俺が見てる。アリアは、頼んだぞ』

「ああ、任せとけ。——じゃあな」

別れの挨拶を口にして、俺は通話ボタンを切った。

隣のアリアが、少しふてくされたような顔をしながら、

「……キンジはなんて？」

「ん。白雪はこっちで見とくから、お前のほうは俺に任せたってよ」

「そう」

ふいっと横を向いて、アリアはそう答える。

まあ……多分、昨日のことが原因だろうな。不機嫌そうにしてるのは。

今俺たちがいるのは、ファミレスを出てすぐにあるベンチだ。そこに、2人並んで座っている。

アリアに説得（物理）されたあの後、俺はここに来てキンジに電話をかけた。内容はもちろん、俺もレキの部屋に泊まることについて。理由は、怒っているアリアをなだめるためという、なんとも適当な理由だ。それでもキンジが了承したのは、やはりケンカした手前気まずかったからだろうか。

ま、それはそれとして、だ。

俺はベンチから立ち上がりつつ、

「それで？ まだ昼前だが、今からレキン家行くのか？」

「ううん。行くのは、まだ後よ。今日は……ちようどいいから、あんたに会わせたい人がいるの」

「会わせたい人……？」

同じく立ち上がって背伸びをするアリアに、俺は疑問を露にする。

まあ、別に会わせたい人ってのに会うのは構わねえんだが……、

「いいのかよ？ それじゃあ、マジで白雪につくのがキンジだけになるぞ」

「大丈夫よ。レキが見張っててくれる。今日は、『総合技能競技』の練習で狙撃科のレーンも使うからってことで、レキは完全にオフの日なの。で、レキがついてる以上、きつと『魔剣』は動かないわ。……これはあたしのカンだけど……錬は、信じてくれるのよね？」

少し不安そうにしているアリアに、俺は頷くことで肯定する。

アリアのカンはともかく、まあ確かに俺が『魔剣』なら、あのSランクの狙撃手に狙われながら動くことなんてしないだろう。

アリアは曇った顔を晴らして、

「うん……うん。じゃあ、行きましょっ！」

たたたつ、と駆け出していった。

「え、ちよ……待てよ、おい！」

「はやく来なさいっ！」

いきなりのことに思わず焦って追いかける俺を、アリアは手を振りながら呼ぶのだった。

……ところで。

俺に会わせたい人ってのは、誰なんだろうな？

* * *

「初めまして。アリアの母の、神崎かなえです」

「あーっと……ども。有明錬です」

ふんわりと微笑む目の前の女性に、俺は後ろ頭をかきつつ自己紹介した。

ここは、新宿警察署の中にある、留置人面会室だ。アリアに連れら

れてやってきたこの場所で、俺は『俺に会わせたい人』とやらと面会していた。

アクリル板に隔てられた向こう側にいる、ゆるやかにウェーブした色素の薄い黒髪をした女性。全体的にほんわかした雰囲気醸す彼女は、しかしどこかアリアに似ていた。

そしてそれは、当然のことなんだろう。なんせ、この女性ひとは——神埼かなえさんは、アリアの母だというのだから。

俺の隣に座るアリアが、かなえさんに微笑みながら、

「久しぶり、ママ。今日は、前にキンジをつれてきた時に話した、もう一人をつれてきたわ」

「ええ、ちゃんと覚えてるわ。鍊さん、でいいかしら？」

「あ、はい……」

キンジをつれて来た時ってなに？　と思いつつも、かなえさんの質問に答える。

そんな俺に、アリアは、

「鍊はもう、ママのことは調べたって言ってたわよね？　でも、直接会うのは初めてでしょ？　この人が、あたしのママよ」

「そうか……」

俺は、なんとかそれだけをアリアに返す。

……さて。

もしかしたらお分かりの方もいるかもしれないが……今俺、テンパってます。

いきなり警察署につれてかれるわ、なぜかアリアの母親が捕まってるわ（犯罪者なんですか？　とか訊けるわけがない）、向こうは俺を知ってるわ、なぜか俺も向こうを知ってることになってるわ。

……もうね。意味不明のオンパレードだよ、これ。

しかし、それら全ての疑問をここでぶちまけるわけにはいかない。なぜなら、面会室に入る前に、アリアに言われたからだ。面会時間は3分しかない——と。

余計なことが言えるわけねえだろ、それ。そんな短い親子の対面を、事情がよくわからないという理由で潰せるか？　俺には無理だ。

ので、俺はなるべく余計なことを言わないようにしておく。

そんな俺にかまわず（かまってもらっても困るが）、かなえさんがふと何かに気づいたように、

「——あら？　アリア、あなたなにかあったのかしら？　前に来たときよりも、落ち着いて見えるわ」

「ん……そうね、とつても大きなことがあったわ。時間がないから詳しくは話せないし、ママが捕まってるのにこんなこと言うべきじゃないのかもしれないけど……少し、心に余裕ができたの。——聞いて、ママ。あたし、パートナーが出来たよ。1人は今ケンカしちやってるけど……それでも、あたしが生まれて初めて信頼できるパートナーよ。あたしは、あたしたち3人なら、きつと『あいつら』に勝てるって思う。ママを必ず救い出せるって、そう思ってるの」

「アリア……」

ヒマワリか、あるいは日輪のように明るく輝くアリアの笑顔に、かなえさんは目じりに涙を浮かべる。

すばらしい、光景だ。まさしく、母と娘の感動的な場面なのだろう。

……言ってることの内容は、9割がたわかってないが。

というか、俺はホントになんどここにいるんだろう。空気すぎる。いる意味あるのだろうか？

と、俺が居心地の悪さを感じたその時、

「——錬さん。あなたやキンジさんには、ご迷惑をおかけしていると思います。わたしの娘のために……いいえ、わたしがこんな状態にいるばかりに、あなたたちを危険に晒してしまっている。……それでも、罪深さを承知で、お願いします。どうか、アリアのパートナーとして、この子をそばで支えてあげてくださいませんか？」

かなえさんが、俺に瞳を揺らしながら尋ねてきた。

俺の隣で、アリアも何うようにこちらを見ている。2人とも、真剣な表情だ。

……おおう、来たよ。いつもの、いまいちよく状況が読めないときに来る、いまいち内容が掴めない、だけどのつぴきならぬ質問。

ど、どうする？　とりあえず何か言うべきなんだろうが……適当に

答えていい空気じゃねえぞ、これ。

おそらく——ここで俺がとれる選択肢は2つ。

1つは、素直に白状すること。「ぶっちゃけなにをおっしゃっているのかよくわかりません（キリッ）」と、俺が状況を把握できていないことをバラすという選択だ。もちろん、言葉は変えるが。

もう1つは、流れに身を任せること。空気を読んで、この場で最も適しているであろう返答をするという選択だ。

悩む暇はない。面会時間は、もう半分もないだろう。すぐに答えないと。

ぐおおお！ どっちだ？ どっちを選べばいい？

素直になって恥をかくか。それとも、いつものようにそれっぽい答えを返して誤魔化すか。

悩んで悩んで悩んで……やがて、俺は一つの答えを示した。

——サムズアップ付きで。

「任せてください、お母さん。娘さんは、俺が（友達として）ずっと支えていきますよ」

……言っちゃまった。

よかったのか、俺。本当に、その選択で、台詞でよかったのか。なにか、俺はとんでもない地雷を全力で踏み抜いたような予感がひしひしとするんだが。てか、お母さんてなんだよ。相変わらず焦ると変なことを口走るな、俺は。

……いや、まあ大丈夫だろ。なにもおかしなことはないはずだ。かなえさんは、娘を支えてくれと言った。そして俺は支えると答えた。それだけだ。

おそらくあの台詞は、幼いころからアリアを見てきた母親が、娘のぼっちっぷりを心配して言っただけなんだろう。なら、俺の返答は間違っていない……はずだ。

ですよね、かなえさん？ と俺が意識を思考からかなえさんに移すと、

「ぶすっ……はい、よろしくお願いします……っ」

な、泣いてらっしゃるー!?

ななななんで!? 俺、そんなに大層なこと言った!?

へ、ヘルプミーアリア! と今度はアリアに助けを求めて顔を向けると、

「あ、あわわわ……っ」

こちらは顔を赤く染めて処理落ちなさっていた。

って、お前もかよ! なんてあんたら親子は予想外のリアクションばっか取るの!?

混迷の度を深めていく留置人面会室。涙を流すかなえさん、赤面のアリア、混乱の俺、という非常にわけのわからない状況が出来上がってしまった。

そしてその混沌を収めたのは、

「……あー、神崎。時間だ」

室内にいた、かなえさんを部屋につれてきた制服警官だった。

だが、彼の声にも、どこか困ったような響きがある。困ってるのはこっちだけ、おまわりさん。

「……っはい。わかりました」

かなえさんは素直に従い、椅子から立ち上がる。それに合わせて、やっと現実に戻ってきたアリアも席を立ち、

「ママ、あたし頑張るから! キンジと鍊と3人で、頑張るから!」

警官に連れられて去っていくかなえさんに、そう叫んだ。

かなえさんは一度だけ振り返り、

「——待ってるわ」

一言だけ答えて、そのまま奥の扉へと消えていった。

シン——と、空間を静寂が満ちた。アリアは、かなえさんがくぐっていた扉を、じっと見つめ続けていた。

……で。

俺は結局、正解を選べたのだろうか?

* * *

神崎かなえにとっての有明鍊の第一印象は、『普通の男の子』だった。

眼前に座る鍊に自己紹介をしてから、かなえはもう一度鍊をよく観

察する。中肉中背の体型、雑に切りそろえられた黒髪、ぎらりと覗く鋭い目つき。少々いかめしい見かけといえないこともなかったが、かなえは見た目で人を判断する人間ではない。どちらかといえば、相手の本質を見ようとする女性だった。

そんな彼女をして、鍊は普通の少年に見えた。以前会ったキンジとは、これは異なる評価である。キンジも全体像でみればあるいは普通だったのかもしれないが、ホームズ家という特殊な家で過ごしたかなえにはわかる。キンジはそれの実、普遍的な人間の、一步外にいるはずだ。

翻って鍊には、そういうところが見受けられない。無論武偵である以上ある程度の修羅場はくぐっているのだろうが、かといって一般の高校にいたとしても違和感はないだろう。かなえは鍊を内心でそう評して、そしてそれゆえに疑問を持った。

(この子が、アリアが選んだもう一人……)

それは疑いの感情に近い。もちろん娘のことを信じていないわけでは断じてないが、それでも本当にアリアがこの少年をパートナー足ると認めたことに、わずか疑念を抱いた。

しかしそれをおくびにも出さず、かなえは鍊についての思考を一度脇にやり、アリアとの会話に入った。

「久しぶり、ママ。今日は、前にキンジをつれてきた時に話した、もう一人をつれてきたわ」

「ええ、ちゃんと覚えてるわ。鍊さん、でいいかしら？」

答えながらかなえは、鍊への言葉へと繋げた。彼がどういう人間であるかはともかく、わざわざこんな自分の下へ来てくれた人を邪険に扱うなど、礼に失した行動をかなえは取らない。

そんなかなえの問いかけに鍊はあいまいに返事する。

その態度がさらに頼りなさを演出してしまっていて、かなえはますます鍊についてわからなくなってきた。

「鍊はもう、ママのことは調べたって言ってたわよね？　でも、直接会

うのは初めてでしょ？　この人が、あたしのママよ」

「そうか……」

アリアとの会話にも、どこかぼんやりとした調子で鍊は返す。まるで、心ここにあらずというように。

(緊張、しているのかしら?)

かなえは、鍊の様子から彼の心理状態を予測する。

さすがにその理由まではわからないが、どうにもそんな感じがする。一体、なにが彼をこうも緊張させているのだろうか。

と、そこでかなえは、ふとアリアの変化に気づいた。

笑っているのだ、アリアが。小さくではあるけれど、確かに。うぬぼれでなければ、おそらくは自分との再会を喜んでくれている。

それは、以前には無かったことだ。前回アリアがここを訪れたときには、彼女はひどく思いつめたような表情をしていた。パートナーが見つからず、かなえを『イ・ウー』の連中から取り戻すと、そればかりに急いでいた。

だが、今日は違う。どこか穏やかな雰囲気、彼女は纏っていた。それがかなえには気になって、

「——あら? アリア、あなたなにかあったのかしら? 前に来たときよりも、落ち着いて見えるわ」

と、アリアに訊いてみた。

アリアはかなえが捕まってから一度も見せなかったような笑顔を作り、

「ん……そうね、とつても大きなことがあったわ。時間がないから詳しくは話せないし、ママが捕まってるのにこんなこと言うべきじゃないのかもしれないけど……少し、心に余裕ができたの。——聞いて、ママ。あたし、パートナーが出来たよ。1人は今ケンカしちやつてるけど……それでも、あたしが生まれて初めて信頼できるパートナーよ。あたしは、あたしたち3人なら、きつと『あいつら』に勝てるっと思う。ママを必ず救い出せるって、そう思ってるの」

「アリア……」

アリアの台詞に、かなえは自らの瞳に涙が溜まるのを自覚した。無論それは、アリアが自分を救うと言ってくれたことに対してではない。

——パートナーが出来たよ。

アリアは、そう言った。キンジと共に訪れたあの日、パートナーなんていないと聞いていた彼女が、だ。

昔から人付き合いが苦手で、親族にすら馬鹿にされ続けたアリアが、ようやく心から信じられる誰かを見つけた。そんな娘の成長に、そしてそれを成してくれた者たちに、かなえの涙腺は自然と緩んだ。助けると言われるより、そっちのほうの方が遥かに嬉しかった。

同時かなえは、鍊に目を向け、心中で己を恥じた。

なにが本質を見る、だ。なにが頼りない、だ。

アリアは確かに3人と口にしたのだ。それは、眼前にいる少年もまたキンジ同様にアリアの支えになっていることの、なによりの証左ではないか。

かなえは、申し訳なさと、それに勝る感謝の気持ちで、鍊に対し言葉を紡いだ。

「——鍊さん。あなたやキンジさんには、ご迷惑をおかけしていると思います。わたしの娘のために……いいえ、わたしがこんな状態にいるばかりに、あなたたちを危険に晒してしまっている。……それでも、罪深さを承知で、お願いします。どうか、アリアのパートナーとして、この子をそばで支えてあげてくれないか？」

自分を助けることなど、できなくとも構わない。ただアリアのそばにいてあげて欲しい。

かなえの望みは、まさにそれだけだった。

しかし、鍊は眉根を寄せて、返答に迷うような仕草を見せた。

(当然だわ……)

単純に答えられる質問ではないことは、かなえ自身わかっていた。

なにせ、アリアの隣に立つというのは、あの強大な犯罪組織『イ・ウー』に関わるということに直結する。本当は、絶対に頼むべきことではない。誰かを巻き込んでいいことでは、もつとない。

しかしかなえは、それでも願った。いままで孤独だったアリアが報われてほしいと、危険を承知で頼んだのだ。

そして。

不安に揺れるかなえとアリアが見守る中、
ついに、鍊は答えを出した。

「任せてください、お義母かあさん。娘さんは、俺がずっと支えていきますよ」

(え……………ッ!?)

ぴきり、とかなえの頬が引きつった。

(はにゃ……………ッ!?)

同時、アリアの脳が沸騰した。

両者ともに、今のプロポーズまがいの……………というかまんまプロポーズに、脳内の回路を破壊されたような気分気分に陥った。

そしてアリアはそのままオーバーフローへと突入してしまったのだが、そこは大人大人のかなえ、なんとか意識を持ち直す。

彼女の視線の先では、鍊が親指を力強く立てていた。

その光景がさきほどの言葉が聞き間違えでなかったことを証明していて、かなえは改めて鍊の台詞を認識した。

しかしすぐに、

(い、いえ、なにかの間違いよね？ だってそんな、こんな場面でいきなりプロポーズなんてするわけが——)

と、そこまで考えて、かなえはふと思いついた。

もし、もしも、さつきまで鍊が緊張していたのが、これが原因だったとしたら？

始めから、なんらかの形で母親かなえに挨拶(娘さんを幸せにしますの意味で)するつもりだったのだとしたら？

それならば理屈は通るが……………それにしても、いくらなんでも、とかなえは困惑する。

困惑して、どうリアクションを取るべきか悩み、そういえば娘はどう反応しているのだろうかと目を向けた。

その先では、顔を真っ赤に染め、目がきよどきよどと動きまくっている娘の姿があった。

我が娘ながら、なんて顔をしているのか……………と冷や汗を流すかなえは、そこであることに気がついた。

アリアの口角が、微妙に上がっている。というか、端的に言っていてやけている。おそらく無意識だろうが。

——その時、かなえの脳裏に閃きが走る。

そうか、と得心がいった。

おそらく、アリアと錬は——いわゆる、相思相愛というやつだったのだ。

でなければ、言っではなんだが、恋愛ことが苦手なアリアが暴れださないわけがない。

となればこれは、合意の上と見るべきだろう。彼らは、2人で決めて（あるいは錬が男を見せて）、こうして挨拶に来たのだ。

ほろり、とかなえの目じりから透明な液体が零れ落ち始めた。

あの、アリアが。幼稚園児のころに男子を10人まとめて泣かせ、小学生のころに（奇跡的に）告白してきた男子を照れ隠しで締め上げ、中学生のころにバレンタインデーの告白ラッシュにかんしゃくを起こして学校中を暴れまわった、あのアリアが。

ボーイフレンドを作って、挨拶にまで来るようになるなんて。

（アリア……大人になって……！）

先ほどとは別方向、あるいは延長線上の成長を見て、気づけばかなえは口を開いていた。

「ぐすつ……はい、（娘を）よろしくお願いします……っ」

この瞬間、かなえの脳内から『イ・ウー』なんぞのことはすっ飛んでしまっていたことは、言うまでもない。

結局、在室していた制服警官が面会時刻の終了を告げるまで、かなえは泣き続けていた。

ちなみに。

未来にて、「錬さんとの拳式はいつにするの？」とアリアに尋ねたことでまた一騒動あったりするのだが、それはまだまだ先のお話である。

* * *

「んんん、っはあ。なんか、少ししか経ってねえのに、どっと疲れたなあ」

面会終了後、警察署内の受付ロビーで凝り固まった背を伸ばしてほぐし、俺は息をついた。

傍らに、アリアの姿はない。なんでも、偶然かなえさんの弁護を担当している弁護士さんが来ていたとかで、少し話してくるそうだ。だもんで、俺一人だけここでアリアを待っているというわけである。

ちなみに、結局詳しい事情は聞けてない。単純に、面会室を出てすぐに弁護士さん——綺麗な女性弁護士だった——に会ったからというのもあるが、どうもアリアは俺の顔を見るたびに真っ赤になって、使い物にならなかったんだ。意味不明。

そんなこんなで一人寂しくアリアの帰りを待っていると——ピリリ、とポケットの携帯電話が鳴った。

なんだ、メールか。誰からだ？

携帯を取り出して着信欄から新着メールを開くと……げっ、なんだよまた迷惑メールかよ。最近多いな。今度、情報科インフォオルマの連中に相談してみるか。

しかしまあ、これ系のメールは手を変え品を変え、よくやるよなあ。今度はどんなのだ？ と思い、俺は何気なくメールのトップに書かれていた一文を読み上げてみた。

『婦警コスの佐倉ちゃん、萌えー！ 最高にエロイ姿に、僕の胸はドキドキ☆』……？』

……なんだこりゃ。品性どころか知性すらなさそうな文章だ。

まったく、こんなんに釣られてアクセスしちまう連中は、本当に馬鹿だよなーとか思っていると、

「せ、せ、セクハラですツツツツツ！」

という大音声が、前方で響き渡った。

せ、セクハラ？ おいおい、どこのどいつだよ。ここは警察だぜ？

ある意味度胸あるなーとか思いつつ、とりあえず武偵としては見て見ぬふりはできねえな、とディスプレイから顔を上げ——るより早く、

ガチャリと、俺の腕に手錠がつけられた。

……………手錠？

……え!? ちょ、なんだよこれ!

慌てて外そうとするも、当然外れるはずもなく、むなしくガチャガチャと音を鳴らすばかりだ。

というか、これつけたの誰だよ! と俺は犯人を捜すために視線を上げると——そこに、いた。

婦警さんの格好をした中学生くらいの子が、一人。

「み、みみ見損ないましたよ有明先輩! 私は、あなたを2年前からずっと尊敬してたのに……こんなのって無いです!」

今にもホルスターに吊った拳銃——S & WのM60——を抜き放ちそうな怒りの形相でこちらを睨む彼女に、見覚えは全く無い。

背格好からして中学生か高校上がりたてくらいだろうが……誰だ、この子は? おそらく『架橋生』ではないか、とは当たりをつけたが。

つか、こんなのって無いですはこっちの台詞だよ馬鹿野郎。これは一体、何のマネだ? 俺が一体何をしたってんだ?

そんなことを悶々と考えている間にも彼女はいろいろと怒鳴っていたらしく、結果的に俺はそれを無視している形になってしまい、

「——聞いてますか、有明先輩!? あ、あああなたは、少しでも反省の色がないんですか!」

いや、反省の色以前に、なにがなんだかよくわかってないんですが。「まだだんまりですか!?! いいかげん、釈明なり謝罪なりしてくださいよ! 私にした——セクハラについてツ!」

「せ……セクハラ?」
つて、なんのことだよ?

ようやく声を出せた俺に、眼前の『架橋生』——いや、首から下げ

てる名札によれば、乾桜いぬいばらというらしい——はさらに柳眉を逆立て、「とぼける気ですか!?! あ、あんなことを言っておきながら……ツ!」

「ま、待て待て待て! 何の話だ!?! 俺が何を言っただって!?!」
「それは——ハッ!? 今度はそういう魂胆ですか! エロスの塊のよ

うな男ですね、あなたはッ!」
! 会話になってねええええええええええええ! 話通じてないよ、こいつ

どうしたらいいんだこれ、と俺が頭を抱える——ことは手錠のせいでできないんだが、とにかく抱えたくなくなったその時だった。

「——鍊？ なにしてるの、あんた？」

廊下の奥から、アリアが戻ってきた。

それに気を取られたのか、乾が一瞬、アリアの方を向く。

——ナイス、アリア！

俺は、即座にその場で反転、一気に駆け出して逃走を開始した。三十六計逃げるにしかずというのは名言だな、ホント。

自働ドアが、ぎりぎり通れるくらいの隙間が開くと、俺はそこに体をすべりこませ、外へと脱出していった。……って、うおおお!? 手錠、超目立つ！ 通行人がめっちゃこっち見てるよ！

奇異の視線を逃れつつ、走ること5分。後ろから誰も追ってこないことを確かめてから、俺は大きく息を吐いた。

「——ぷはあっ！ な、なんだったんだあいつは……」

人目を避けるために入っていた裏路地の壁に、背を預ける。

ホントに、なんだったんだ、あの乾とかいうやつは。セクハラって、なんの話だよ？

っーか……どうすんだ、手錠^{これ}。

俺が両手を拘束する鉄の錠の扱いに悩んで……丁度その時、アリアから発信がかかった。

幸い携帯は手に持ちっぱなしだったので、すぐに電話に出れた。

「はい、もしもし？」

『鍊ッ！ あんた今、どこにいるの!? なんか、警察署にいた「中等部」^{インターン}の子が、あんたがセクハラしたとか騒いでただけど!?』

う、うおー。お怒りになってるぞ、こりゃ。

俺はとりあえず裏路地から出て、周囲を見渡して現在位置を確認しつつ、

「知らねえよ、そんなこと言われても。俺だってなにがなんだか、全然わかってねえんだ」

『知らないって……じゃあ、なんであの子はあるなこと言ったのよ?!』

「俺がききてえよ……。とりあえず、今の場所だけ教えるぞ」

俺は、今いる位置をアリアに伝えた。

すぐに行くから待つてなさい！ と怒鳴って切られた携帯をポケットにしまい、言われた通り待つていると……。早い、もうきやがった。2、3分しか経ってねえぞ、まだ。

で、当然のごとくアリアは烈火のごとく質問（例のセクハラ云々について）してきたので、俺はその全てに正直に答えると、一応は鎮火してくれた。

「——じゃあ、なに？ あんた、本当になにもやってないの？」

「ああ。というかそもそも、知り合いですらねえ」

「ふうん……。？ じゃあ、なんであの子はあんなに怒ってたのかしら？ それに、有明先輩って、あんたのこと知ってる風だったわよ」

「そう言われてもな……」

開錠バンブキーで手錠を開けようとしてくれているアリアに、俺は生返事で返す。

まあ、向こうが俺を知ってるのは、あり得ない話じゃない。以前、間宮とかいう後輩が知っていたように、俺の名前はそれなりに知名度があるらしいからな。迷惑なことな。

——と、かちりという音がして、ふいに俺の手首から圧迫感が消えた。

「はい、解除できたわよ」

「おー、さんきゅ。さすがにこれで街中は歩けねえからな」

こきこきと窮屈だった手首を鳴らしながら、俺はアリアに礼を言った。いや、このままだったらマジで通報されそうな勢いだったぜ。

さて、と。これで晴れて自由の身になれたことだし、

「で？ なんか変なごたごたは起きちまったけど、かなえさんに会うって目的は果たせたんだ。これからどうする？ 予定通り、レキの家に行くのか？」

という質問を俺がアリアにすると、アリアはなぜかうぐ、と口ごもり、

「そ……。それなんだけど、ああああんた、さっきのは本気で言ったの

？」

「本気？ なんのこった？」

「だっ、だから！ 娘さんのことは僕がずっと支えますって言ってたでしょ!？」

がうつ、と頬を紅潮させながらアリアは言う。

あー、あれね。そういや、そんな台詞だったっけ。俺がかなえさんに言ったの。

まあ、本気か嘘かで言えば、

「嘘じゃねえよ。それくらいの約束は守るぞ、さすがに」

俺にだって、人情くらいある。さすがに親にまで頼まれるレベルのぼっちを見捨てるのは、良心が痛みますよ、ええ。

という意味の俺の答えに、アリアは口をわぐわぐと動かし、

「(き、キンジはキスするし、鍊はプロポーズしてくるし……もう、わけわかんないよう……)」

「なんか言ったか？」

「な、なんでもない！」

怒ったようにアリアは怒鳴って、ドスドスと大またで歩き出していく。

俺はその後を慌ててついていきながら、

「お、おいおい！ 結局どこ行くんだよ！」

「レキの部屋よ！ 文句ある!？」

「いや、ねえけど……」

妙な機嫌の悪さですごんでくるアリアに、俺はたじろいだ。

結局レキの部屋につくまでとりつく島のなかったアリアの後ろを歩きつつ、俺は嘆息する。

まったくもって本当に……なんかマズイことしたのかな、俺？

* * *

乾桜にとつて最も尊敬する先輩を1人挙げよと言われれば、しかしこれには2つの名を挙げざるを得ない。

その2人は、共に桜の2つ年上の先輩である。東京武偵高等部に特待中学生として通う中学3年生の桜の2つ上、つまり現高等部2年

生の先輩たちだ。

そして同時に、その2人は中学時代の先輩でもあった。桜が籍を置く東京武偵高中等部の、卒業生なのだ、彼らは。

当時1年生だった桜が中等部の学び舎で彼らと共に過ごした期間は、わずか1年しかない。それでも中学進学と同時に武偵への道を進み始めた桜にとって、その2人の姿は鮮烈に焼き付いたという。

では、その2人とは誰か？

1人は、鈴木時雨。中等部において前代未聞の3年連続生徒会長を務めた、生ける伝説だ。桜は、求心力において、あるいは統率力において彼女を上回る人間などいないのではないかと、半ば以上に信じている。

そして、もう1人は有明錬。桜たち当時の新入生と同時期に3年に編入し、彗星のごとく瞬く間に、実力においてトップに立った少年だ。2年前の文化祭で行われた『撃ち上げ』^{カーニバル}というイベントにおいて、彼が当時学園最強だった時雨を下したことは、未だ鮮明に記憶している。

ここでなぜ桜が鈴木時雨と有明錬を尊敬するに至ったかを説明するには、まず乾桜という少女について語らなければならない。

乾桜。通称、『何でも持つてる桜さん』。

成績は非常に優秀、運動神経に秀で、父親は麻布警察署の署長という生まれに加え、さらに生来の生真面目かつ勤勉な性格に起因するたゆまぬ鍛錬により、戦闘訓練は無敗、無遅刻無欠席という完璧な経歴も持つている。

そんな完全無欠な桜は、だからこそ『自分が持っていないモノ』を持つ人間に敬意を表する傾向がある。

しかしもちろん桜より強い者もいれば、賢い者もいるし、家柄がいり者もいる。それらすべてを併せ持ち、なおかつ桜を上回る者もいるだろう。

それでも桜が時雨と錬を敬うのは、それは彼らが持つ『モノ』が、飛び抜けていたからだ。たとえどれだけ努力しても、手に入らないと思うほどに。

全てを呑みこむような、鈴木時雨の求心力。全てを吹き飛ばすような、有明錬の戦闘力。それこそが、乾桜を惹きつけてやまないモノだった。

そして。

『架橋生』として赴いた研修先で、桜はその内の1人に出会った。

(あ、有明先輩……？　なんでこんなところに？)

桜が、彼——有明錬を目撃したのは、新宿警察署の受付ロビーだった。本来強襲科アサルト()の生徒が警察関係の施設にいるのは珍しいことなのだが(桜も強襲科生ではあるが架橋生は例外である)、なぜか錬はそこにいた。

(わ、わわっ……どうしよう？　は、話しかけてみようかな？)

不意の邂逅に、桜は内心で慌て始めた。

実を言えば、桜が錬(時雨もだが)と直接相對したことはない。あの種、有名人と偶然会ってしまったような(東京武偵高という括りで見ればあなたがち間違いでもない)状況である。

(——うん。話しかけてみよう。こんな機会、滅多にないし)

逡巡は数秒。すぐに桜は、行動を決めた。

中学時代は、よく錬の周りに学園十傑ティエーチと呼ばれる『10』メンバーがいたので話しかけづらかったし、高校に上がったからは(正確には特待生扱いだが)架橋生として方々に飛び回っているのです、確かに話しかける機会ほとんどない。

そうと決まれば、と桜は錬の正面から歩み寄り、

「こんにちは、有明先輩。私、中等部からの後輩で、乾桜って言います」と、心中の緊張をおくびにも出さずに声をかけ——ようとしたその寸前、

「婦警コスの桜ちゃん、萌えー！　最高にエロイ姿に、僕の胸はドキドキ☆」

という、ちよつと地球の言語なのか疑いたくなる台詞が、目の前の人物から発せられた。

(……………にや？)

思わず心の中で猫語が出てしまうほどに、桜は意味がわからなかつ

た。

ちなみに、なぜ猫語なのかは、彼女が密かに「警察戦隊ピーポニヤン」なる戦隊番組の大ファンだからという背景があるのだが、それはともかくとして。

思考回路のショートは数秒間続き、しかし復旧しだい先ほどの台詞と誰が言ったのかを理解して、

「せ、せ、セクハラですツツツツツ！」

気づけば桜はそう叫び、次いで衝動的に『尊敬する先輩』改め『セクハラ男』有明錬に手錠をかけていた。

錬は、なにが起こったのかわからないという顔で、手錠を見つめる。

その姿が、さらに桜の火に油を注ぐ。

（いきなりあんなことを言っておいて、そんなとぼけたような顔を……！ 私は、こんな人をずっと尊敬してたの!?!）

冷静に考えれば錬が自分の名を知っているとは思えなかったし、彼の一人称は確か「俺」だったはずだし、錬が目を向けていたのは自分ではなく今も手に持つ携帯電話だったので、何かおかしいと気づいてもよかつたはずだ。だが、憧れからの落差が激しすぎて、桜は正常な状態ではなかった。どころか、携帯で盗撮していたのでは？ と疑う始末である。

「み、みみ見損ないましたよ有明先輩！ 私は、あなたを2年前からずっと尊敬してたのに……こんなのって無いです！」

桜は怒りに顔を赤く染め上げ、キツと錬を睨みつける。

無論そんな桜の事情など錬が知るはずもないので、逆恨みの感が強いのだが、いわばアイドル像を壊されたようなものなので、そのショックは大きかった。

その後も桜は錬を責め立て、その最後に先ほどのセクハラについて申し開きを要求すると、

「せ……セクハラ？」

と、何の話だ？ とでも言いたげな表情で、錬が鸚鵡返しに問い返してきた。

「とぼける気ですか!?! あ、あんなことを言っておきながら……ツ！」

「ま、待て待て待て！ 何の話だ!? 俺が何を言ったって!」
「それは——ハッ!」

桜は、鍊が言った台詞を復唱しようとして、そこで鍊の狙いに気づいた。

(ま、まさか私にあの台詞を言わせて、さらに辱めようとしているのでは!? なんとたる策士ですか、有明先輩……!)

遙かに斜め上方向の推理をしていることからわかるように、桜は現在混乱の極みにあると言っていていいだろう。

「今度はそういう魂胆ですか！ エロスの塊のような男ですね、あなたはッ！」

さらに糾弾する桜。ますます困惑に顔を染める鍊。

そろそろ周りの視線も厳しくなったその時、

「——鍊? なにしてるの、あんた?」

(え……?)

背後から鍊を呼ぶ声がして、桜は一瞬振り返った。

そこにいたピンクのツインテールの少女には、見覚えがある。確かに強襲科の先輩である神崎・H・アリアだ。

そんな人までなぜここに? と疑問に思うのも数秒、桜はすぐに鍊のことを思い出し、再び正面を向いて、

しかしそこに鍊の姿はなく、ガラス製の扉の向こうに、走り去る鍊の背中があった。

「に……逃げたっ!」

桜は慌ててそれを追いかけてようと足に力を籠める。

しかしその力が解放されるより早く、むんずと首根っこを掴まれた。

「ぎゅぷっ!」

気道が絞まり変な声を上げた桜が肩越しに振り返ると、桜の研修を担当してくれる予定のリアル婦警さんがいた。

——その後の話を簡単にすると、結局桜は鍊を追いかけることは叶わなかった。なんとか事情を説明しようとするも、時間が押しているからという理由で却下された。

ずると首根っこを捕まえられたまま廊下を引きずられていく桜は、決意する。

「絶対……絶対、謝らせてみせますよ、有明先輩！」
「うるさい」

直後、婦警さんに拳骨を落とされた。

* * *

——時間は、少々遡る。

留置人面接室から、かなえが退出した直後のことだ。

制服警官に付き添われながら留置室に向かうかなえは、ふと思い出したように小声で言った。

「そういえば……」

その先を、聞いた者はいない。

かなえ本人以外は、ただの一人も。

——かなえは、言った。

「鍊さんにわたしは……どこかで会ったことがあるような——？」

2.2. 夜空に咲く火の花よ

その部屋を一言で表すなら、まさに『無』という言葉が的確だった。第2女子寮最上階。表札のない扉をくぐったその先に待っていたのは、部屋と呼ぶにも抵抗がありそうな『空間』だった。何も無い。完全に。

趣味的なものから、テレビやパソコン、果ては寝具や家具すらない。カーペットや畳もないせいでむき出しになっているコンクリートを見たときは、廃墟か牢屋かと思ったほどだ。

そんな、およそ人が生活するには不自由かつ不自然すぎるこの部屋には今、3人の人間がいた。

1人は、当然俺。もう1人は、神崎・H・アリア。

そして最後の1人は、この家主である少女——レキだった。愛銃であるドラグノフを抱えて、いつもどおり制服姿の彼女は床に体育座りして壁によりかかっていた。

レキと同じく壁に背を預けて立つ俺の足元では、アリアがあぐらをかきながら双眼鏡で窓の外を見ていた。こうやって、昨日からキンジの部屋を監視していたらしい。

——さて。

現在の時刻は、午後1時くらい。ちょうど、かなえさんと会ってから1時間ほど経過している。

あれから、俺とアリアは当初の予定どおり、学園島に戻ってからレキの部屋に向かった。アリアは堂々と入っていったんだが、さすがに俺はビクビク物だったよ。見つかったらどうなるか、わかったもんじゃねえ。

そして出迎えてくれたのは、いつもどおり無表情のレキ。あの月夜の晩以来久しぶりに会った彼女の許可をもらい（アリアは貰う前入室していったが）、俺はかまち框を跨いだ。

——で、この現状なわけなんだが……、

『……………』

……し、静か過ぎるよこの空気。

いやまあ、レキはわかる。こいつはいつも寡黙だから、口を開かなくても違和感はない。逆にいきなりぺらぺらと喋りだしたら、そっちの方が怖い。

しかし、アリアさん。お前が黙るのはいただけねえぜ。いつもの騒々しさはどうした。

あるいはそれだけ今回の件——『魔剣』デュランダル——に対する思い入れがあるのかもしれない。なんでそこまで入れ込むのかはわかんねえけど。

しかし……。

俺はちらりと横目で、レキを窺う。

なんというか、俺も俺でそんなに黙り込むタイプじゃねえんだが、こいつがいるせいかどうかどうも口が重い。

さつき言ったが、俺がこいつと会うのは例の会話……「強くなつてください」といわれたあの夜以来のことだ。

レキはきつと、なにかを知っている。俺が知らない、何かを。それこそ、理子や『教授』プロフェッショナルたち——『イ・ウー』についても、だ。

そりゃあ……今までどおりにや接することができねえよ。どうしても、それがちらつく。

かといつてじゃあ、全部を聞き出すことは無理だ。どうせ言わないだろうし、なにより今はアリアがいる。あいつの前で、理子が関わる話はしたくない。なんせアリアは、あのハイジャックで彼女に煮え湯を飲まされているのだから。

……とはいえ、だ。このままつてのもさすがに気まずい。

よし。ここは思い切つて、会話してみよう。

というわけで、俺は顔をレキの方へと向け、

「あー……レキ、その、なんだ。えーつと……いい天気だな」

「そうですね」

「……………」

「……………」

死にたい。

つていうか、なんなんだ俺は!?! 俺つてこんなにコミュ力なかつ

たっけ!? 「話題の起点としてはトップクラスの知名度だけど実際使う機会あんまないよね」と言われる台詞を吐くほど、俺は口下手だったっけー!?

し、しかしだ、まだ終わっちゃいけない。とりあえず話すことには成功したんだ。こっから上手く持つてけば、まだ逆転は可能!

いくぞ!

「そーいや、知ってるかレキ? 空が青いのは、地球の大気が青と緑の波長を散乱させてるからなんだぜ?」

「そうなんですか」

「……………」

「……………」

いつそ殺してくれ。

いや、わからなくはないよ? 天気の話から繋がってるのは、確

かにわからなくねえけど、しかしそんなウンチクを披露してどうするんだ、俺の脳よ。

やばいな。俺って、こんなに引きずるタイプだっけ?

もしかしたら、ずっとこんな感じになっちまうのか? と俺が辟易としたその時、

「——あ、の、色ボケ武偵ッ!」

「うおっ!」

突如わけのわからないことを叫んだアリアが、怒気もあらわにしなから勢い良く立ち上がった。

双眼鏡を砕けよとばかりに握り締めるその姿は、さながら羅刹か悪鬼のような威圧感を放っている。

な、なんだなんだ? なにがあつたんだ?

アリアが怒りを向ける原因を調べるため、俺は監視用にと彼女に渡されていたもう一つの双眼鏡を使い、アリアが見ている方向を眺めた。

双眼鏡の2つのレンズに映ったのは……キンジと白雪だ。それも、なんだあれは? 嫌がるキンジに白雪が無理やり箸で搦んだ料理を食べさせようと——俗に言う「はい、あーん」ってやつか——してい

る。

それを見た瞬間、俺の心は一瞬で沸騰した。

「あ、の野郎……ッ！」

ふ、ふざけるなよクソ野郎！ 仮にも男の夢の一つである「はい、あーん」を拒否つてやがるだど!? 俺なんか、一度もしてもらったことがないというのに！

遠山キンジ、必滅すべし！ ていうかお前、護衛だろうが。依頼人となにやっつてんだちゃんと警護しろよゴラア！

嫉妬に肩を震わせ、齒の根をギリギリとかみ合わせる俺ははたから見ればさぞ気持ち悪いことこの上なかつたろうが、その時の俺はそれほど怒っていたわけだ。

しかしなんとか、俺は気持ちを落ち着かせる。ここで俺が妬ましさに打ち震えたところで、まさかキンジの部屋まで乗り込むわけにはいかないからな。それじゃあ、この『外部からのボディガード』の意味が無くなってしまう。

アリアの作戦を、一個人である俺の感情で台無しにするわけにはいかないよな、と双眼鏡から目を離し、ちらりとアリアに目を向けると、「バカキンジイ……ッ！ 今すぐそっち行くから待つてなさいよ！」

あれー!? 作戦立案者さんが突撃カチコミしかけようとしてらっしやるー!?

俺は慌てて、部屋を出て行くこうとするアリアの腕を掴み、

「ち、ちよつと待てバカ！ ここでお前が行ったら、この作戦の意味がねえだろうが!? ただ家に行くだけならまだしも、これじゃ監視してたことまでバレんだろ！」

「は、な、せう！ あたしはね、別にキンジと白雪がい、いいイチヤイチャしてようがどうだっていい！ それはホントにホントよ！ けどね、なにが許せないって、白雪のことは任せろって言っておいて、あんな腑抜けたマネしてることよ！」

「だから落ち着けて！ 気持ちはわからなくもねえが、そうは言ってもお前、これでまた『魔剣』にこっちの行動が察知されたら、また振り出しだぞ！」

俺の指摘にアリアは「うぐっ」と声を詰まらせ、それでも納得はしてくれただのか、

「……あー、もうっ。わかったわよ、あんたの言うとおりだわ。もう行こうとしないから、そろそろ腕放してよ」

「わかっていただけたようだなによりだ」

アリアの腕から手をどけつつ、俺は嘆息する。

なんというか、悪い意味で変わらねえなあ、こいつは。かなえさんと会った後くらいは大人しかったんだが（というか挙動不審っぽかったが）、気づけばまたいつもの短気っぷりを発揮してやがる。

しかしまあ、なんだ。ともあれ、一応怒りは鎮まつたらしい。これでアリアも、今後は冷静な対応を取ってくれるだろう。

安堵した俺は、一人静かに「やれやれ」と呟くのがだった。

——10分後。

「もう無理ッ！ 今度こそ風穴あけに行つてやるわ！」

「はええよ！ お前10分前の自分の台詞思い出してしろ！ ……つて、こらこらなんでガバメント抜いてんだよバカ！」

「は、な、せ〜！」

「この展開さつきもやったよなあ!? 学習能力ゼロか！ おいレキお前もこいつ止めるの手伝ってくれ！」

「……………（もくもく）」

「マイペ————スッ！ 食つてる場合かー！ なに一人でカロリーメイトもしましややつてんだよお前は!？」

そんな会話があつたことは、俺たち3人の秘密である。

* * *

——監視生活、3日目。

と、こういう書き方をするとなんだかアレな感じだが、とにもかくにも、俺がレキの部屋に転がり込んでから、今日で3日目だ。

意外なことにといか幸いなことにといか、ことここに至ってもまだ、女子寮への潜伏がバレてはいなかった。現在ゴールデンウィーク中ということもあり、基本的に一日中部屋にこもつてりゃいいしな。それに、寮から出るときも非常階段を使うという手があつたし。

それでも、奇跡に近いんだが。

ちなみに、着替えとかもろもろの生活用品については、さわやかイケメンこと不知火亮さんに俺の部屋から取ってきてもらった。ありがたえぜ、ホントに。

さらに変化があつたとすれば、それは俺とレキの関係性だ。といっても大した話じゃなく、単純に俺が普通にレキと話せるようになったってだけのことなんだが。さすがに3日も同居生活を続けていれば、どうしても話す機会は増える。結果、ほとんど以前と変わらない状態になつた。無論、あの夜のことは頭の片隅にあるが。

——で。

その3日目の今日、5月5日。時刻は夜6時を半ば回ったところか。俺は、レキの部屋でキンジからゴールデンウィーク中の護衛について報告を受けていた。

「ふーん。じゃ、とりあえず今ところはなんもねえんだな」

『ああ。一応、問題はない』

床の上に置いたスピーカーカーモードの携帯電話から聞こえるキンジの言葉に、俺は眉を少し寄せる。

お前のほうは問題なかったのかもしれないが、こっちはお前らの行動にいちいちアリアがキレて大変だったんだぞ。ちくしょう。

「了解。他にはなにかあんのか?」

『いや、とりあえず報告はこんなところだな。——と、悪い。すまんが、そろそろ切るぞ。予定があるんだ』

「予定?」

『白雪と、7時から花火を見に行く約束をしてるからな。ちよつと今出かけてるから、それまでに家に帰らなきゃならないんだ』

「花火い?」

そんなの今日やってたか? と首をひねり、直後思い出す。

そういや、荷物の受け渡しの時亮が言ってたな。東京ウォルトランドで花火大会があるのかなんとか。「神崎さんを誘って見たら?」とか言われたっけ。

で、その花火を白雪と見ようってか。しかしまあ、よく白雪をウオ

ルトランドなんて人が多い場所に誘えたもんだな。

「ウォルトランドであるやつか？ あいつ、そういう大勢が集まる場所、苦手じゃなかったか？」

『ああ。だから、ウォルトランドには入らない。葛西臨海公園まで出て、そこで見ることにした』

なるほど。確かに、それならランドの方よりかは人は少ないだろう。

だが……、

「でも、いいのかよ？ 仮にもボディガードだろ、お前。クライアントを外に連れまわすのは感心しねえな」

『じゃあずつと部屋に籠って陰々滅々と過ごさせてか？ 一日くらい平気だろ。今までだって何も無かつたんだから。……それに、上手くいえないが……白雪には、もつと外の世界を知ってほしいんだ。あいつは、無理をして自分を抑えこんでる。たまには、それを解放させてやりたいんだよ、俺は』

「……………」

まあ、正直キンジの思いもわからなくはない。

これでも、俺だって白雪とはもう1年の付き合いになる。あいつのそういうところは、俺だって知ってる。だから、そういう機会を持つことが悪いことだとは思わねえし、むしろ勧めるくらいだ。

だが……時期が悪い。今白雪は、『魔剣』に狙われている。そんな状況で、それははたしていいことなのか？

……いや、それは俺が決めることじゃねえか。

俺は、視線を対面に座るエリアに向け、マバタキ信号^{ウインキンゲ}を使って指示を仰ぐ。

——ドウスル？

パチパチとまぶたを閉じたり開けたりしながら、エリアに伝える。エリアもまた同様にして、

——モンドアイ ナシ ゾツコウ

と、送り返してきた。

ゾツコウ……続行ってことは、好きにやらせろってことか。意外な

返答だが……オーケー、了解だリーダー。

「おい、キンジ。話はわかった。しつかり守れよボディガード。今白雪が頼りにできるのは、お前だけなんだから」

『……わかってるよ。じゃあな』

その言葉を最後に、ブツリと通話が切れた。

さて……と。

「——で？ キンジたちの外出を許したのはなんでだ？」

『誘ルき出アし』。簡単に言えば、撒き餌ね」

携帯電話をポケットに仕舞いながら尋ねる俺に、アリアは簡潔に答えた。

なるほど。ようするに、キンジたちを囮にするってわけか。確かに、警備が厳重な学園島内から出たとあれば、『魔剣』からすればこれ以上ない好機。そこを叩きに来る可能性は高い。

しかし、だ。

「素直に来るかね？」

「どうかしら？ 普通に考えれば、武偵がわんさかいる学園島から出たなら、是が非でも仕掛けにくるはずだけど……あたしのカンでは、多分来ないわ。元も含めてSランク3人がついてるわけだし、『魔剣』はそこまで短絡的じゃない気がする」

スツと目を細め、おとがいに指をかけたつつ考えを口にするアリア。

……だが、その口元が若干ほころんでいるのを俺は見逃さない。

そして、それが証拠になる。アリアの言が、ただの建前だということこの、証拠に。

アリアの性格上、自分のカンには絶対の自信を持っているはずだ。なのに、そのカンからすれば無駄な囮作戦を行おうとしている。

となれば……目的は、別にあるということになる。

で、この状況でアリアが食いつきそうなことといえば……、

「お前、さては監視にかこつけて花火を見に行く気だな？」

「………な、なんのことかしら？ ふー。ふー」

いや、目がめっちゃ泳いでるから。自由形金メダル取れそうなレベルだから。あと吹けない口笛は結構恥ずかしいからやめたほうがい

いぞ。ソースは中学時代の俺。

俺は一度嘆息して、

「……まあ、別にいいんじゃないかねえの？ お前だつてずっと籠りっぱなしでストレス溜まってんだろうしな。護衛も欠かさねえってんなら、それも有りだろうよ」

いやまあ、実際のところはやっぱり良いことじゃないのかもしれないねえけど。それでも、こいつの息抜きになるんなら、俺は許容する。

なんせ、日々キンジと白雪のイチャラブ（俺ら視点）を見せ付けられて、日に日にアリアの機嫌が悪くなっているのだ。膨らみ続けるガス風船を爆発するまで放置するバカはいないように、俺もここらでアリアという風船のガス抜きをしたいと思いますと思つてたところだ。

それに。

なんせ、アリアは天下のSランク武偵。その実力は折り紙付きで、俺自身その力を目の当たりにしている。加えて、白雪には限定付きとはいえSランク級のキンジが付いてるし、なにより護衛される白雪自身がAランクの超偵だ。『魔剣』とやらがどれほどの実力を持つているかは知らねえが、この3人を相手に勝利できるとは到底思えなかつた。

なので俺は口ではいろいろ言いつつも、それほど心配はしておらず、だからこそアリアにああ言つたのだ。

はたしてその判断は正しかったようで、アリアは一瞬で顔中に喜色を表すと、

「そうよね！ たまには息抜きだつて必要だわ。うんうん、あんたもよくわかつてるじゃない！」

ものすごい勢いで掌を返してきた。大層喜ばれているようでなによりである。俺の心の安寧的に。

これでキンジは白雪に外の世界を見せてやることができるし、白雪も引きこもりぎみの生活を少しでも変えられるし、アリアは花火を見に行くことができるしで、いいこと尽くめになるはずだった。

——しかし。

どうやら世界はそんなに甘くなかつたらしい。

突如、空疎な室内に似合わぬ軽快なメロデーが流れた。電子音であるそれを、俺は何度か耳にしたことがある。たしか、アリアの携帯電話の着信音だったはずだ。

俺の記憶は間違つてなかったようで、アリアはスカートのポケットから「ごそごそ」と携帯を取り出し、

「――連城^{れんじょう}? なんだったのよ、こんな時間に」

液晶画面に映った発信元であろう人物の名を眩き、通話に入る。

「一体どうしたのよ、いきなり……え? 今日これからって、どうしてよ? ……ママの裁判について? ち、ちよつと待つて、それってどうしても今日じゃないといけないの? ……そういうわけじゃないけど、でも………わかった。それじゃあ、あんたの事務所に行けばいいのね? ……うん……うん……じゃあ、今から行くから。……ええ、また後で」

ピツ、とアリアは終話ボタンを押した。

……あー、まあ、なんだ。詳しい通話の内容はわかんねえが、要点は掴めてる。

つまり、

「行けなくなった………んだろ? 花火大会に」

「……うん。ママの担当弁護士がさ、今日中に話しておきたいことがあるから来てくれって。だからあたしは、白雪たちの方にはいけそうにないわね」

明らかに気落ちした声で、アリアはそう言った。

しかしまあ………なんとも間の悪い話だ。さすがにこればかりはすっぱかすわけにもいかないだろう。

「じゃあ、どうする? 今からキンジたちに連絡してやめさせるか?」

「武偵的にはそっちが正解だけど………いいわ、そのまま行かせて」

「いいの?」

「だって、かわいそうじゃない。多分、白雪は今日のことすごく楽しみにしてるはずよ。キンジとずっといちやいちやしてたのは正直ムカつくけど………その気持ちは、あたしだって少しわかるもの」

「………そっか」

俺は……正直、まだアリアのことを誤解してたのかもしれない。

普段は、凶暴というか攻撃的で澆刺な部分が目立つが、その実この女の子は、優しさをちゃんと秘めてる。自分が嫌われている相手のことを想えるってのは、すごいことだよ、本当に。

「じゃあ……護衛は、俺があいつらについていけばいいのか」

「そういうことになるわね。……ああ、レキも一緒に行けそうなら頼んどいて。契約時間外だけど、その分報酬は上乘せするって言えば、来てくれるかもしれないから」

「わかった。じゃあ、そういうことでこっちは進めるよ。お前も、弁護士さんとの話、しっかり行って来いよ」

「ん……じゃあ、よろしくね」

そう告げたアリアは、荷物もそこそこにレキの部屋を後にした。

さて……俺の方も動くか。

俺は一人きりになった室内で、携帯電話を操作し、電話帳から『レキ』を呼び出す。スリーコールの後、返答があった。

『はい』

「レキか。有明だ、今いいか？ それと、どこにいる？」

『狙撃科スナイプの専門棟です。さきほどまで、アドシールドについての打ち合わせがありましたので』

「そうか……悪いんだが、レキ。時間外だが、護衛任務の同行頼めるか？ 白雪たちが葛西臨海公園まで、花火を見にでかけるそうなんだ。もちろん、ボスアリッパから追加報酬は出る」

『それは構いませんが……そもそも白雪さんたちが出かけないようにすることは、できませんか？』

「何？」

思いもよらないレキの提案に、俺は問い返した。

いや、言っていること自体はもつともなことなんだが、レキが積極的に意見を出すのはめずらしい。疑問に思うのも、無理はねえと思う。

レキは、そんな俺の疑問に答えるように言った。

『外出は、おすすめでできません。ここ数日、風に邪なものが混じってい

る。危険が迫っている可能性があります』

風……か。

レキが、よく言っているやつだな。それが何を指しているのか（あるいは本当にただの風なのか）わかんねえが、どうもレキはそれを信奉というかなんというか……とにかく、絶対視している節がある。

だからまあ、無駄に機嫌を損ねるよりは（まあ無いだろうが）レキの意見を尊重してやってもいいんだが……、

「……お前がなんらかの危惧を持つてんのはわかったけどな、俺はできればあいつらの外出を認めてやりてえんだ。それに、Sランクが2人もついているなら、そうそう『魔剣』も襲ってこねえんじやねえかと思う。これは、アリアも同じ判断をしてる」

『……わかりました。依頼主の意向ならば、従います』

「悪いな、助かる」

俺はほつと一息つきながら、レキに礼を伝える。

なにせ、レキが来れなきやキンジと俺しかつかないことになる。まあ、それでもSランク級のキンジがいるならなんとかなりそうなものだが、あいつの強さは限定的だからな。念を入れておきたい。

「あいつら7時に待ち合わせしてるそうだから……そうだな、じゃあその5分前にモノレール駅で落ち合えるか？」

『はい。では、後ほど』

「ああ、よろしくな」

レキとの通話を終え、俺は外出の準備を整え始める。

といつても、たいしたことはない。せいぜいが、何かがあつた時のために、武装の確認をするくらいだ。まあ、これも杞憂になることを祈ってるが。あとは、ハンカチとかかな。意外に思われるかもしれないが、俺はここらへんちゃんとしてたりする。

俺は時間までの数十分をスマホをいじることで潰し、それからレキとの待ち合わせ場所に向かった。

* * *

夜の浮島北駅——学園島のモノレール駅には、俺が想像していた閑散とした光景はなかった。制服、私服、浴衣、さまざまな服装をした

学生たちの姿が散見でき、ゴールデンウィーク中にもかかわらず学園島に残っている生徒が多いことを教えてくれる。キンジたちみたいなのを考える連中は意外と多かつたらしい。

俺はその光景を壁に寄りかかりながらぼうつと眺めていた。ちなみに、俺は上着だけ脱いだ制服姿だ。武偵高の制服は目立つからな。しかし……いいなあ、みんな。楽しそうに連れ立っている彼らを見ていると、俺はなんでこんなことしてるんだろという気分になってくる。監視任務って聞こえはいいけど、実質ただのデバガメだからね？

特にきついのは浴衣の彼女をつれたカップルだ。いや、別に羨ましくないよ？ しかし、いかがなものかと思うぜ、浴衣つてのは。剛気曰く、和服は世界一脱がせやすい衣服らしいからな。そんなもんを高校生が着てデートつてのはいかんと思うんですよ。あと、男くたばれ。

などと俺が卑屈になりつつも実際浴衣を脱がすのはどれほど簡単なんだろうかとシミュレーションを始めた時——
「おまたせしました」

と、か細く、しかし芯を感じさせる凜とした声がかかった。

その声に聞き覚えがあった俺は、視線をそちらに向け、

「おう、レキか。わざわざすま——」

——ねえな、と言おうとして。

直後、言葉を失った。そして、同時に思った。

いいじゃない、浴衣。がんがん広めようぜ、と。

——そこにいたのは、まさに美人としか形容しようのない女の子だった。

薄緑の生地に牡丹と百合の花が散りばめられた浴衣には、同じく薄い青の腰布が主張しすぎずいいアクセントになっている。純粹な日本人にはあり得ないライトブルーの美髪は、しかし純和風の浴衣に不思議なほどマッチしていた。足元を見ると、鮮やかな色合いの鼻緒が、雪のように白い小さな足を引き立てている。彼女のトレードマークとも言えるヘッドホンと、肩に引っかけたドラグノフ狙撃銃を収め

ているだろうバッグは異彩を放つてはいたが、しかしそれを抜きにしても文句なしの和服美人——そんな様相のレキが、静かに佇んでいた。

綺麗、だ。素直にそう思う。

普段……というか、初めて見るレキの洒落た姿に俺が放心していると、彼女は首をわずかに傾げ、

「鍊さん？　どうかしましたか？」

「え、あ……いや、なんでもねえ」

慌てて返す俺。見とれてたとか言えるか。

少しドギマギしながら、俺はレキに尋ねる。

「その……どうしたんだ、その浴衣。お前、そういうの持ってたのか」
「いえ、これは狙撃科スナイプの同級生から借りた物です。狙撃科棟から移動する時にどこに行くのかと聞かれたので、鍊さんと待ち合わせしていることを教えたら、なにか勘違いされたようで……気づいたら着替えさせられていました」

「へ、へえ……」

気の抜けた返事をして、俺は視線を逸らす。今度、レキにその同級生が誰か聞いておこう。そして万雷の拍手と共に感謝しよう。

などと名も知らない恩人へと思いを馳せていると、レキが——俺の勘違いでなければ、若干、本当に若干表情を陰らせ、

「……ご迷惑、でしたか？」

「え、は？　な、なんで？」

「護衛任務のための外出なのに、このようなそぐわない恰好をしてしまったので。迷惑でしたら、すぐに着替えて——」

「い、いやいいい！　そのままでもいいから——」

その場で反転し、去っていかうとするレキを慌てて引き止める。

「そんなことしないでいいから、ほら行くぞ。キンジたちが来るのを改札で待ち伏せしよう。7時にあいつん家で待ち合わせてるそうだから、そのうち来るだろ」

「ですが……」

「ああもう、いいから行くぞー！」

なおも洩るレキに焦れた俺は、彼女の手を引き、強引に歩き出す。女子の手を握るとか最強に恥ずかしいが、ここで拘泥しててもしょうがない。キンジたちに見つかっても厄介だしな。

それに……だ。

本音を言えば、俺はレキにこのままの恰好でいてほしかった。もちろん、任務に臨む服装じゃないってのはわかっているが、しかしそれでも欲望が勝るくらいには、レキの浴衣姿は魅力的だった。これを無しにするってのは、ちよつと勿体ないってレベルじゃない。

くあ……っ、恥ずいこと考えてんなあ、俺。

羞恥心に頬が染まるのを自覚しながら、俺は夜の駅構内を歩く。

——心なしか、繋いだレキの手が、じんわりと熱を帯びていたような気がした。

* * *

——実際のところ、レキには選択することができた。

有明鍊には「気づいたら着替えさせられていました」などと言ったが、それを為した同級生の少女は思い込みの激しい部分があるとは言え、嫌がることまで強行するような人物ではない。本当にレキが拒否すれば、その要求は当然のように通っただろう。

ではなぜ、それをせずに浴衣姿のままで鍊との待ち合わせ場所まで赴いたかと言えば、その答えはレキ自身判然としていなかった。

これは明確な異常^{エラー}である。なぜなら、レキには感情が無いからだ。少なくとも、レキは自身のことをそう定義づけている。

けれど。

同級生の少女に、狙撃科専門棟で着付けをしてもらっているとき、レキはこんなことを考えていた。

(私の浴衣姿を見て……鍊さんは、どう思ってくれますでしょうか)

普段行っている、感情なき思考ではなく。

期待と不安がほんのかすかに入り混じった、感情ありきの思考で。レキという完全にして不完全な少女は、そう思った。

——そして、時は流れ、レキは浮島北駅で待っていた鍊と対面することになる。

……結論から言えば、結果は芳しくなかった。

鍊は一度も、レキの艶姿を褒めることはなかった。どころか、終始せわしなく視線を逸らし、こちらを見ることすらほとんどなかった。もちろん、それは鍊が照れていたからにすぎないし、普通ならそんな態度で好印象であることがわかるだろうけれど、生憎とそういった経験値はゼロに等しいレキにとっては、悪印象に受け取られたと判断するしかなかった。

(……当然、ですね。任務中にこんな恰好をして、私は一体なにを……)

だからレキは、少女から武偵に戻ることに決めた。

くるりと踵を返し、駅構内にある売店へと足を向ける。幸いなことに、ここは学園島モノレール駅。外部での任務で制服を損傷した生徒のために、学生服の販売も行われている。さほど、手間は取らないだろう。

そう考え、この場を一度後にしようとするレキだったが……しかし、鍊に制止をかけられた。

「そんなことしなくていいから、ほら行くぞ。キンジたちが来るのを改札で待ち伏せしよう。7時にあいつん家で待ち合わせてるそうだから、そのうち来るだろ」

「ですが……」

「ああもう、いいから行くぞー！」

強引に手を取られ、レキは鍊に連れられてゆく。

右手が触れ合った瞬間に零れた「あ……」という小さな吐息に、きつと鍊は気づいていないだろう。

二人、手を引かれながら歩く。

喧騒が遠い。潮騒のようにぼんやりと、レキの耳朶をくすぐる。

視界には、鍊の背中。一般的な男子高校生より、いささか鍛えられたその広い背中が、つかず離れず前に行く。

ただ、それだけのこと。だけど。

レキにとってただそれだけの事実が——彼女の体温を、ほんの少し

上げた。

* * *

7時を10分ほど回ったころ、予想通りキンジと白雪（彼女もまた浴衣を着込んでいた）は改札へとやってきた。

それを物陰から確認した俺たちは、気づかれないように距離を開けつつ、彼らの後に続き、モノレールに乗り込んだ。

そのモノレールで台場へ向かい、ゆりかもめで有明（俺じゃないぞ）へ。そこからりんかい線で新木場、ラストは京葉線。ようやくのこと、葛西臨海公園まで辿りついた。

しかし……尾行しといてなんだが、全然気づかれねえな。無論、探偵科仕込みの尾行術のおかげもあるだろうが、キンジも探偵科インケスタだろ。気づけよ。とはいえ、本当に気づかれては意味がないんだが。

かろうじて背中が視認できるような彼我の距離を保ち、光源がぼつぼつと立ち並ぶ電灯しかない薄暗闇にまぎれ、護衛対象たちを追う。レキがいてよかったな。自称視力5.0（まあ本当だろうが）の狙撃姫がいれば、まず見失うことはないだろう。

夜の臨海公園は――

なんというか、普段とは少し違う雰囲気があった。俺自身、そんなに来たことがあるわけじゃないが、夜にってのは初めてだ。

遠くから、花火の音が聞こえてくる。キンジの読み通り、どうやらこの公園からでも花火を見れそうだ。

あたりに一番多いのは、やはりというかカップルだった。俺は経験ないが……こういった雰囲気、彼らには好まれるのだろうか。

……ふと、隣を見てみる。

そこには、レキがいる。それも、他意はないだろうし自分の意思ですらないが、めかしこんだ姿で。

ひよつとしたら……俺たちも、周りから見ると――

「？　どうかしましたか？」

「あ、いや、なんでもねえー！」

視線に気付いてこちらに顔を向けたレキに、俺は慌てて誤魔化す。

なに考えてんだ、俺……。

邪な考えをかぶりを振って追い出しつつ、さらに尾行を続けること数分。

キンジたちは人工なぎさへと到達し……続く俺たちは、それをなぎさ後ろの林から見守ることにした。

ここからじゃキンジと白雪の会話は聞こえないが、表情を見る限り、悪い雰囲気じゃない。きつと、いい気分転換になったんだろうさ。どっちにとっても、な。

それに……まだ帰りがあるとはいえ、『魔剣』の襲撃もなかった。まあ、これだけ人気があれば、無理からぬことかもしれないが。

これなら……うん。

「なあ、レキ。せっかくだから、俺たちも少し、花火を楽しまねえか？」と、俺はレキに顔を向けつつ提案してみた。

『魔剣』が襲ってくる気配がないからとか、口に出したようにせっかくだからとか、まあ理由はあるが……なにより俺も、キンジじゃねえがレキにもっと広い世界を知ってもらいたいと思った。

いつか話したかもしれないねえが——俺は去年、レキと何度かコンビを組んで任務を行っていたことがある。つまりはその分、こいつと過ごす時間はあったわけだが……なんというか、狭いんだ。こいつは。

見識、世界、認識、いろんなものが狭い。他者との関わりを、世界との交わりを、極端に薄くしている。

そんな彼女の在り方は、時々見てる方が不安にさえなるんだ。

だから俺は……こういう機会に、少しでも『外』に目を向けてやれたらと、そう思う。

そんな俺の考えなど露知らないだろうレキは、こちらを向き、「花火を、楽しむ……花火ならば、白雪さんたちを見る都合上、視界に入っていますか」

「そういうこつちやねえよ。ちよつと白雪たちから視線を外してさ。ゆっくりと、花火だけ見ようぜってこつた」

「ですが……そうすると、護衛任務に支障が出るのでは？」

「この距離だ。何かあったらすぐ動けるし、それにこれだけの衆人環視の中じゃ、『魔剣』もでてこれねえよ」

俺はレキの懸念を打ち破るように、あえて断定の形で答える。

実際のところ、襲撃の可能性はゼロじゃないし、俺がすぐ動けたからなんだって話ではあるんだが。まあ、そこはキンジの腕とアリアのカンを信じよう。

俺の言葉にレキは数秒思案し、結論が出たのか小さくうなずいて、「わかりました。あなたがそう言うのなら、私は従います」

と、答えた。

従うって、そんな上司相手みたいな態度は必要ねえんだが……レキがそれでいいならいいか。

さて、そうと決まれば、

「じゃあ、座ろうぜ。歩きっぱなしで疲れたろ」

と、促し、視線を前に戻す。

さて、言った手前、俺も座って、たまにはゆつくり花火鑑賞とでもいくかな。……そのまえに汗でもぬぐっとくか。まだ5月とはいえ、今日は少し蒸し暑い。知らぬ間に額に汗が滲んでいた。

ポケットから、出がけに入れていたハンカチを取り出して——つと、いけね。取りこぼした。

取り出す段階で開かれつつあったハンカチは、落下しながら完全に広がっていく。それは、ひらひらつとわずかに滞空し、やがて着地した。

——レキの足元に。

「すみません。ありがとうございます」

一言断りを入れたレキが、俺のハンカチへと腰を下ろす。

……えーつと。

い、いや！ まあいいんだけどね！ そもそも借り物の浴衣で座れとか言った俺が、配慮が足りなかったねっ！

若干もやつとした感情を抱えつつ、俺も隣に腰を下ろす。

そして眼前の景色に意識を向けると——もう、ハンカチのこととか、どうでもよくなった。

彼方、ウォルトランドの上空で、色とりどりの大輪が夜空を染め上げる。間断なく打ちあがる火の花は、まるで夜を吹き飛ばそうとする

かのように、鮮やかに光を放っていた。

破裂音は遠い。海を挟んだ先で上がっているからだろう。花火自体の派手さとは違い、その音は不釣り合いにぼやけている。

しかし——こういうのも、悪くはなかった。

普段目に、そして耳にするような間近の花火じゃない。しかしそれゆえに、どこか幻想的な物として、幾数発の花火があった。

気づけば。

俺は、あるいはレキよりもこの光景に感じ入り……知らぬ間に、口ずさんでいた。

『夜空に咲く火の花よ、どうか僕らを照らしておくれ』——

過去の記憶に閉じ込められていたメロデーが、脳裏から奔流と
なつて流れ出す。

ひよつとしたら……あの人も、こんな景色を見たことがあったの
だろうか。

そんな感傷に浸っていると、

「その歌は……御剣アイナの歌ですか？」

「ん？ ……ああ、そうか、レキも知ってたんだっけな」

「はい。去年の船上仮面舞踏会^{マス・カレード・シー}で、その一小節だけ」

「そっか。花火を見てるとき、自然に思い出したんだよ」

ぼんやりと返事をして、俺はまた黙る。

そのまま二人、無言のまま、打ちあがる花火を見続けていた。

数十秒か、あるいは数分か……時間の感覚が曖昧になり始めたこ
ろ、レキがぼつりと呟いた。

「——好き、なのですか？」

「え……？」

主語抜きの急な問いかけに、俺はわずか呆ける。

しかし、すぐに思い当った。たぶん、花火のことだろう。話の流れ的にアイナさんのことかとも思ったが、こいつがそういう色恋関連の
ことを訊くとは思えねえしな。

だから俺は、素直に答えた。

「——ああ、好きだよ。……なんかさ、あの暗闇を吹き飛ばすような明

るさが、すげえ好みなんだよな」

なぜだろうか。やっぱ、あれかな。俺の行く先つて基本いつもお先真つ暗だったから、そういうのに憧れんのかな。

俺の回答にレキは「そうですか」と答えて、それきりまた口をつぐんだ。

なんとなく、俺も黙ったままで花火を見ていると——突然少し強い潮風が吹き付け、直後、レキが小さく呻いた。

俺は慌ててレキを心配し始める。

「おい、どうした？ 大丈夫か？」

「大丈夫です、少し目に砂が入ったようで……」

「砂……」

俺がなぎさの方へ目を向けると、親子連れの小さな子供が、砂を蹴りあげて遊んでいた。なるほど、あれが風に乗って飛んできたのか。

……って、レキのやつ、指で少し目元をこすっている。

俺はとっさにレキの腕をつかみ、それを止めさせた。こういう時はこすらず、洗い流さないと悪いんだ。

ついでに、顔を寄せ、レキの瞳を覗き込む。

猫のような金の両目は……よかった、充血はしてない。狙撃手は目スナイパーが命だからな。

「どっかで洗い流してこい。いいか、こするなよ。護衛は、俺がやつとくから」

「……すみません、では少しだけ外します」

そう言ったレキは立ち上がり、早足でこの場を後にする。

それを見送った俺は、ふと気づいた。

そーいやすつかり花火に夢中になってたけど……白雪たちはどうなったんだ？

や、やべえ。割とマジで忘れてた。

腰を上げ、慌てて白雪たちが立っていた方向を探すも、彼女らの姿はない。ま、まさかもう帰った……？

や、やべえええええええ！ こんなのアリアにバレたらぶつ殺される!?! 風穴カーニバルされちゃう!?!

どうしよう、どうしようと混乱した俺は意味もなく左右に首をめぐらせ、

近くの木陰からこちらをのぞき見る星伽白雪と目が合った。

……んー。

あれ？　なんで白雪がここに？

意味不明の状況に思考回路はショート寸前。別に今すぐ白雪に会いたかったわけじゃないし、泣きたくなるような月明ムーンライトかりでもない。などと考えていると、

「み、見てないよっ!？」

「(びくっ)!!」

急に大声を出し、高速でぶんぶん手を振る白雪。び、びびった。

ていうか、え？　何の話？

「白雪お前、何言ってる——」

「み、見てないもんっ!　錬君とレキさんが、で、でデートしてたところなんてっ。あ、あまつさえ……きやーっ!」

「はあ!？」

ちよっ、ホントに何言ってるんだお前!?

とはいえ、なにが起こっているかは大体わかった。なぜ白雪がここにいるかはわかんねえが、こいつ俺とレキがここにいるのをデートだと勘違いしてやがる。

そりやまあ、こいつには今日の護衛任務は伝えてなかったからわからないのも無理ねえが……これは、由々しき事態だぞ。

なぜならこのままでは——伝わってしまう。この誤った情報が、白雪の親友であり、俺の悪友兼元相棒であり、校内トップクラスの厄介な人物……鈴木時雨に!

駄目だ。それだけは駄目だ。以前、中等部でも似たようなことがあつて時雨にあることないこと吹聴された結果、俺はクラスのアイドルを弄んだクソ野郎として追い掛け回される羽目になった。まあ、誤解は解けたが。

ぬおおおお!　その二の舞になんてさせるかよ!

俺は即座に行動を決め、強襲科仕込みの縮地交じりの接近歩法で白

雪に詰め寄る。

そして、がちりと両手で肩を拘束^{ホールド}。

「し、白雪！ このことはあのおしゃべりには言うな！ いいな?!」

「え？ え？」

「い・い・な?!」

「う、うんっ！ 言わないよっ?! 言いませんっ！」

「よし！ 行っていいぞ！ 回れ右して、GO！」

「はいっ」

俺が手を放した瞬間、白雪はくるりと踵を返し、お前本当に浴衣なの？ と言いたくなる速度で去って行った。

辺りに、静寂が戻る。

と同時に、俺の緊張も解けた。

「はあああ……厄介なことになっちまったなあ」

変な疲れを感じながら、俺はため息をつく。

面倒なことにならなきゃいいんだが、な。

——その後戻ってきたレキと共に、俺は場所を変えてキンジたちの護衛を続行した。

結局、アリアのカン通り、その日『魔剣』が襲ってくることはなかった。けれど。

俺たちが気づいていなかっただけで。

『魔剣』の脅威は、すぐそこまで迫っていた——

* * *

遠くで咲き乱れる火の花の繚乱に、やはりレキはこれといった感慨を持つことはなかった。

映像としては処理している。花火とはどういうものかという知識も有している。その知識が、今こうして経験に結び付いたことも理解している。

けれど、そこで止まる。『花火が綺麗』ではなく『花火が上がっている』としか認識できない。

ただし。

それは『花火』というフアクターのみを切り取った場合の話だ。ちらりと、小さく隣をうかがう。

適当に切りそろえられた黒髪が夜風に揺れ、普段から厳しい目つきは、いつもより和らいでいるように見える。

そんな有明鍊が、すぐそばにいる。

その事実を考えると、なぜか花火が少しだけ輝いて見えた。

レキは今、護衛任務の最中である。が、同時にこうして鍊と並んで座りながら、花火を眺めている。

今日の鍊は少しいつもと違う、とレキは考察している。任務中にこうして任務外の行動に誘ってきたこともそうだし、レキのために座敷がわりにハンカチを貸すという紳士的な行動もそうだ。平素の鍊とは、なにやら差異がある気がする。

しかし、

(それは私も同じですね……)

違うと言えば、今夜のレキ自身もまたいつも通りとは言えなかった。

先の待ち合わせのときもそうだったが、今もこうして任務よりも鍊の提案に賛同している。

いったいなぜ？

そんな自問が湧き上がるが、しかし自答はできなかった。

そんな中、やおら鍊が口ずさみ始めた。

『夜空に咲く火の花よ、どうか僕らを照らしておくれ』——

それは歌だった。

一小節しかなかったけれど、メロディーを持ったそれは、確かに歌だ。そして、レキはその歌を知っていた。

——船上マスカレード・ダンス仮面舞踏会。

今からおよそ1年前、E&S社が運営する豪華客船アフロディーテ号で行われた仮面舞踏会。国際武偵連盟I A D Aの重鎮も参加していたその開催中に、とある事件が起きた。

その事件の解決に奔走したのが、当時コンビで任務を受けていた鍊とレキ——通称『ミュージアル』であり。

その事件で鍵を握っていた人物『御剣アイナ』が歌っていたのが、先ほど錬が口ずさんだフレーズだったのだ。

確認のために錬に尋ねるとやはりその通りだったらしく、彼は肯定し、

「花火を見ているとき、自然に思い出したんだよ」

と、遠い目をして言った。

哀しそうな声で、そう言った。

——その時。

ふいにレキは、思考というプロセスを一切通さずに、意識せず口を開いていた。

「——好き、なのですか？」

「え……う？」

錬が驚いたようにこちらに振り返った時、ようやくレキは自分が何を聞いたのか気づいた。

気づいて、そして困惑した。

御剣アイナのことが好きなのか、などと……どうして自分は聞いているのだろうか？

最近多くなってきた自問に答えが出るより、錬の言葉の方が早かった。

「——ああ、好きだよ。……なんかさ、あの暗闇を吹き飛ばすような明るさが、すげえ好みなんだよな」

——瞬間。

ちくり、と。いつか感じたような小さな痛みが、胸の奥の奥を刺した。

けれどもその痛みはすぐに消える。波が引いていくように、さあつと薄らいでゆく。

痛みが完全に消えたころ、そこにはレキはいなかった。

長らく息をひそめていた『ウルスの蕾姫』が、帰ってきていた。

『ウルスの蕾姫』は、前を向く。

そして、真に感情無き声で呟く。

「そうですか」と。

——火の花はもう、輝いてはいなかった。

* * *

星伽白雪は、ついに来るべき時が来たのだと思った。

5月5日。場所は、葛西臨海公園人工なぎさ。

打ち付ける波の音と、風情ある花火の音が入り混じる砂浜で、白雪は携帯電話のディスプレイをじっと見つめている。

撫子の花雪輪をあしらった清楚な白い浴衣。夜闇の中であっても艶やかに照る黒の長髪。これ以上はないほど浴衣がマッチした日本美人である白雪の姿は、人目を十二分に集めるほどに艶美にして美麗だったが、その表情には険が表れていた。

原因は、手元の携帯電話に着信した、1通のメールだった。

題名は無題。

差出人は——『魔剣』。

「やっぱり……私は、狙われてたんだね……」

困ったように、白雪は呟く。

そんな予感^{マスターズ}は、あつた。教務科には「私なんかよりももつと大物が狙われるはず」と言ったが、嫌な気配はしていたのだ。星伽巫女としての、カンのようなものがそう囁いていた。

それが今、こうして顕在化しただけのことにはすぎない。

「キンちゃん……」

不安そうな声で小さくキンジの名を零し、彼に羽織らせてもらった上着を握りしめる。

今この場に、キンジはいない。気分転換にとここに連れてきてくれたのはキンジだが、数分前に「トイレを探してくる」と言つて、少しの間外している。

頼りになる幼馴染がそばにいないことに胸を締め付けられつつも、これは自分の問題だと思い直し、白雪はメールの開封を決意する。

「どこかに、移動しないと」

この場にとどまってメールを読むのはまずい。重要なメールだ。きつと、意識はそこに集中するだろう。万が一戻ってきたキンジに気付けなければ、読まれてしまう可能性がある。そうなれば、内容如何

によつては、キンジが危険を冒すことになるかもしれない。

それは、駄目だ。そればかりは、許容できない。

だから白雪は人工なぎさを離れた。次いで、どこに行くのがいいかと考え……人工なぎさ後ろの林に目をつけた。

(あそこなら、大丈夫だよね)

見るからに、気がなさそうだ。あそこなら、キンジが来ることもないだろう。

一步一步、白雪は林へと向かっていく。視線は下がり気味で、視界には足元が映る。気も、重い。当然だ、なにせこれから読もうとしているのは、かの連続超偵誘拐魔『魔剣』からのメッセージなのだから。本音を言えば、読みたくなどない。けれど、読まなくてはならない。読まずにいたせいで、白雪の周りにいる大切な人たちに危害が及ぶようなことは、あつてはならない。

白雪は覚悟を決める。

このメールに書かれていることがどんな内容であれ、決して彼らは傷つけさせないと。

足取りに力が戻る。林の中へ分け入る。

そして白雪は決然と顔を上げ、

「好きだよ」と。

レキに告白している有明錬を目撃した。

ずぎざぎあつっ！ と、瞬間的に白雪は近くの木の陰に隠れた。

そして、一気に混乱の絶頂^{トップギア}。まったく予想していなかった事態に、

白雪の処理落ちが始まる。

(ええ……ええっ!! ななな、なに!! どういうことなの!! だって、錬君はアリアに……ええ?!)

率直に言つて、意味がわからなかった。

それは、なぜ錬たちがここにいるのかではなく……単純に、錬がレキに告白していることそのものが、だ。

なぜなら、白雪は知っているのだ。

神崎・H・アリアが、数日前に錬からプロポーズを受けていたことを。

情報源は、他ならぬアリアだ。実を言うと、アリアと白雪は、アリアがキングの部屋を去った後に、話し合いの場を設けていたことがある。

それは、アリアの苦渋の決断だった。鍊からのプロポーズをどうすればいいのか誰かに相談したかったアリアだが、なにせ彼女は友達ホツチが少ない。少ないというか、彼女が友達と思っているのはレキしかいない。が、友達ゆえにレキがそういった相談に向いていないことを知っていたアリアは、苦虫をかみつぶす思いをしながら白雪に相談してみたのだ。

そういった経緯で白雪は、鍊のプロポーズ騒動を知っていた。

ちなみに、相談の結果「現状維持」になったことを、蛇足として述べておく。蛇足の蛇足として親友しぐれの恋が破れたことに白雪が涙したことも、併せて記しておこう。

と、いうわけで。

以上のことから考えると……、

(ふ……二股?!…二股なの、鍊君?!)

と、いうことになる。

あわわわ、と頬に両手をあてながら、白雪はどうしよう、どうしようという意味もなく首を振る。

そして、唐突に思い至った。

いやいや待て待て、星伽白雪。まだ、二股——というか、告白だと決まったわけではない。もしかしたら、自分の勘違いかもしれない。えーと、ほら……花火のことが好きとか、きつとそういうことだ。そうに違いない!

ふうつと、白雪は息を吐く。まったく、何が告白だ馬鹿馬鹿しい。今たった一場面を見ただけで友人を疑うなど、大和撫子としてあるまじき行為だ。品性が疑われる。

というか、そんな場合ではないのだ、こっちは。白雪には今、重要な用事がある。

とりあえず、場所を変えよう。鍊たちがどういふ事情でここにいるのかは知らないが、彼らにメールを見られても、問題度は同じである。

そう決めた白雪はひそやかにここから立ち去ろうと、忍び足で歩き出す。が、その一歩目で好奇心に負け、ちらりともう一度だけ鍊たちに目を向けると、

鍊が、レキに思いつきり顔を近づけていた。

(きつ、きしゅつ、キスしてるう——ッ!?)

どしゅうつつ！ と、光の速さで白雪は木の陰へ舞い戻った。

ぜはーっ、ぜはーっ、と興奮から荒い息が漏れる。大きく深呼吸し、白雪は先ほどの考えを修正する。

はい、アウト。これ、もうダメ。完全に二股確定です。

友人の思わぬ本性と現場を見てしまった白雪は、愕然としながら息を整える。

もう、無理だった。あそこまでいってしまったのは、もう弁護はできない。

まず、認めよう。有明鍊は、アリアとレキに対して二股をかけている。そして今、その片割れと逢瀬を果たしている。

となれば、これから白雪がすることは当然、

(こ、これはもう——見るしかないよね！ 後学！ 後学のために！) というこたらしかった。空気を読んで立ち去る？ なにそれおいしいの？

白雪的超思考が今回も斜め方向に全力疾走したことで、白雪は覗きを敢行することに決めたらしい。

……のだが。

(あ、あれ？ レキさん、いなくなってる……?)

再度木陰から顔を出すと、そこにレキはおらず、鍊しか居なかった。なにやら残念な気持ちが湧き上がってくる中、件の鍊はやおら立ち上がり、慌ただしく周囲を見渡し始め——白雪とバチツと目があつた。

あ、やばいと思ったのは一瞬だった。

けれど口は思考より一歩先を行っていた。

「み、見てないよっ!?!」

首振りと手振り付きで、白雪は豪快に嘘をついた。

大事なシーンは余すところなく見ているわけだが、それを錬に素直に言うわけにはいかない。

しかしこんな嘘、だまされるわけがないだろう。現に、錬もなにか言おうとしている。

白雪はそれに被せるように、

「み、見てないもんっ！ 錬君とレキさんが、で、でデートしてたところなんてっ。あ、あまつさえ……キスなんて……きゅーっ！」

「はあ?！」

キス、の部分は恥ずかしさから小声になりつつ、白雪は嘘を継続。が、世の中そんなに甘くない。普段嘘をつきなれていない白雪のそれはあっさり看破され、距離を詰めた錬に肩を掴まれる。

そして、ひどく慌てた様子で彼は言う。

「し、白雪！ このことはあのおしゃべりには言うな！ いいな?！」

「え?… え?…」

錬の懇願に、白雪は一瞬誰のことかわからなかったが、すぐに察する。

きつと、アリアのことだ。錬は、アリアがプロポーズの件を話したことを知っているのだ。だから、ここで口封じする腹なのだろう。

(ど、どうしよう。これ、黙っておいた方がいいのかな……?)

白雪は悩む。確かにアリアのことは気にいらないが、それとこれとは別の話の気がする。なにより、女子的にここは見逃してはいけないのでは……??

とも思っただけだが、

「い・い・な?！」

「う、うんっ! 言わないよっ?! 言いませんっ!」

錬の剣幕に押され、つい頷いてしまった。

「よし! 行っていいぞ! 回れ右して、GO!」

「はいっ」

白雪の返事に満足したのだろう。錬は白雪を解放した。

白雪は白雪で錬の指示に従い、無意識に鬼道術ステルスを発動させながらも、その場から高速で逃げ出していく。

人工なぎさまで戻ると、そこにはすでにキンジが帰ってきていた。いないと思ったら猛ダツシユでやってきた白雪に面くらいつつ、キンジは白雪に訊ねる。

「し、白雪？ どうしたんだよ、そんな走って——」

「う、ううん！ なんでもない！ なんでもないのっ」

「そ、そうか……？」

困ったように髪をかきながら納得するキンジを前に、白雪は自戒する。

（ううっ……白雪は悪い子です。キンちゃんに嘘をついただけじゃない、アリアにも言えそうにないよお……。でも、錬君の勢いがすごすぎて……）

あんな錬は久しく見てなかった、と白雪はのちに述懐する。

結局。

この後も、どこか硬い態度の白雪にキンジが首をひねりつつ、花火鑑賞は終わりを告げた。

ちなみに。

数時間後、キンジの部屋で「あ、メール忘れてた」と軽い調子で、『魔剣』からの脅迫状は開封されることになった。

さらに後日、白雪からその話を聞いた『魔剣』ことジャンヌ・ダルク30世は肩を落とすことになるのだが……それはまだ先の話である。

ある者は全力を尽くし、覇道を進む。

ある者は知力を尽くし、外道を這う。

ある者は栄光の座を欲し、ある者は策略の成就を願う。

表の勝者、裏の勝者。

2つの勝者が、1つの舞台で決まる。

互いに、反対側を知らぬままに。

栄冠と策謀のアドシールド——開幕。

23. 雷氷のシャル・ウィー・ダンス

5月7日。

抜けるような晴天の下、ついに国際武偵競技会——アドシアードが幕を開けた。

アドシアードの歴史は浅い。それは当然のことで、そもそも武偵自体の歴史が浅く、加えて武偵校の歴史もまた輪をかけて浅いからだ。しかし、ということとは、成長の余地がまだまだ残されているということだ。実際、今年は出場者エントリーの数や来賓、報道陣プレスの数は、去年のアドシアードに比べて、かなり増えているらしい。「これで経済効果うはうはやあ！」とか蘭豹のバカが言ってたので、本当に歴代的にかなりの盛り上がりを見せているのだろう。

しかし、である。

そんなこと俺には関係が無かった。

「ふう……ふう……い、い、こええええ……ッ！」

情けない声を上げつつ、俺はえつちらおつちらと一抱えはある木箱を運んでいた。

え？　これがなにか知りたいて？

え？　そしてここがどこか知りたいて？

それはね——

「なんで俺が地下倉庫ジャンクシヨンで火薬運びなんか……！」

恨み言のように零す俺の声が、照明があるとはいえ薄暗く辛気臭い地下倉庫に響き渡る。地下というからには（しかも地下7階だ）、上を見上げたって薄汚れた天井しか見えず、抜けるような青空なんて見えやしない。そんなの、ここに来る前に一度見上げたつきりだ。

とまあ——こういうことになっている。

もしかしたらすでに忘れられてるかもしれねえが……俺はアドシアードが開催される前、強襲科担当教諭・蘭豹から、ある仕事を任命された。

それが、アドシアード開催中の火薬運搬係である。

確かに危険ではあるけど、別にそれだけじゃね？　と思ったその

君。考えが甘すぎると言わざるをえない。

なぜなら、ここは武偵高。火薬と一口に言っても、その量は半端じゃねえ。具体的に言えば、誘爆すればこの学園島が吹っ飛ぶくらいにはある。そうしたら俺は、おそらく日本の犯罪史上でも十指にランクインできるほどの大量殺人者になるだろう。

……うん、冷静に考えなくても頭おかしいだろマスターズ教務科。なんでそんなものの運搬を生徒一人に任せてんの？ バカなの？ 死……にはしなさそうだなあいつら。

ともあれ、そんなわけで俺は今、学園島地下7階、火薬庫——通称『地下倉庫』に来ていた。

「あー、クソ。腰いてえ。何回運べばいいんだよこれ」
俺はすでに何十度目かになる運搬作業をこなしながら、愚痴をこぼす。

さつき俺は、現在地を地下倉庫と言ったが、さらに詳細に語れば、ここは大倉庫と呼ばれている。数多くの火薬や弾薬が、図書館のように軒をつらねた火薬棚の中や、そのまま床に重ね置きされたりしている。で、俺の仕事は地上から連絡を受けた時、要請があった種類の火薬を地上まで運搬するという内容だ。エレベーターがあつて良かったとはいえ、この大倉庫からエレベーターまでには結構距離がある。往復だけでも数が増えれば相当つらい。

そんな仕事を、俺は朝9時からもう3時間もぶっ続けでやっている。おい交代要員出せよ。それか休憩させろ。

そもそも、俺には一応白雪の護衛という任務があるんだが。まあ、演技とはいえずでに離れた身だし、今日までかなり日があつたのに何も起こらなかつたところを見るに、結局ただの取り越し苦労だった可能性もいなめねえが。どのみち、教務科直々の係りである以上、拒否はできねえのがつらいところだけだな。

そんな風に辟易としながらも火薬箱を届けていると、ポケットに入れた携帯電話が鳴り始めた。

「またかよクソ……」

顔を苦々しさにゆがめつつ、俺は一度箱を地面に置く。それから携

携帯電話を取り出し、火薬棚の側面に背中を預けつつ通話ボタンを押す。

「はい、有明です」

『おう有明エ、次はN-16b一箱持つてこいや。3分以内やぞ』
「いやつ、ちよ……っ！ 待つてくださいまだ綴先生とチャン先生から頼まれた分があるんですが！」

『あん？ そおか、なら……多めに見て5分以内でいいぞ』

ぶち殺すぞ豹野郎……ッ！

「なんでかなり譲歩したみたいになってるんですか?! というか、休憩もしくは交代はいつになるんです?」

『ああん？ そんなんおらんわ。今日は一日中お前のシフトや。明日は火野が一日やって、それ以降ローテーションで最後まで回すんやぞ』

なん……だと……。

蘭豹の言葉に愕然となる。なんて馬鹿なシフト組んでやがるんだ、あいつらは。

まあ、事前の打ち合わせで担当が2人しかないとわかったときはおかしいとは思ってたんだが……まさかこんなことになるとは。

俺は、自分自身もそうだが、おなじく運搬係り（こちらはくじ引きらしいが）になった後輩の火野ライカという1年女子にも哀悼をささげる。かわいそうに、女子がこんな力仕事を一日中なんて。代わってはやれねえけど。

そういや、なんか火野の態度、よそよそしいっていうか、ちよつと避けられてる感があつて落ちこんだっけなあ……。

などと回顧していると、

『じゃ、そういうことで急げよ。じゃアな』

「……えっ、まっ——」

——てください、とまで言い終わることなく通話は無情にも切れていた。

クソ、なんでうちの教師はこんなんばつかなんだ。せめて、いたわりの言葉一つくらいくれよ。唯一もらったの、高天原^天先生の「一人に^使」

任せちやつてごめんね」ってやつただけだぞ。あとは南郷先生の「至急だ。遅れるな」とか綴先生の「遅れたら尋問なあー……」とか、チャン先生の「ウフ。チャント運搬デキタラ後デ、ゴ褒美アゲチャウー」とかばっかだぞ。……………いや待て最後なんか怖い。

ともあれそんな不平を漏らしてもしかたないのでとりあえず運搬を再開し、さつきまでの火薬を運び終える。そのあとまた大倉庫まで戻ってきて、あらかじめ配布された陳列リストを参照に、頼まれた火薬を探す作業に入る。

そんなことをもう3回ばかり繰り返し、注文が途切れたことに気付いてふと時計を見た時——俺は閃いた。

「もう1時前……上はそろそろ昼食の時間帯に入ったところか。てことは、しばらく補充はねえよな……よし」

俺は、疲れた体に鞭を打ち、もうひと踏ん張りど動き出す。

その途中に取り出したのはもう一枚のリスト——種目別使用火薬類のリストだ。これを見て、できるだけ多くの種類の火薬をあらかじめ運んで、エレベーター前にストックしよう。そうすりゃ、ストックが切れるまで往復する必要がなくなる。

無論、そのためにはこれから運びまくらなきゃならねえが、これまでの経験でだいたいどの火薬が必要になるか、どこにあるのかはわかってきている。先生たちに急かさされたり無駄に後々お仕置きを食らうより、今頑張った方がいい。

昼休憩が終わるまで、残りおよそ一時間半。武装の点検や整備などのために多く時間が取られてるのが幸いした。

ここで頑張つて、昼休憩以降は一往復もしねえぞ……！
そんな決意を固めつつ、俺はさらなる労働へ向けて動きだすのだった。

* * *

ぴしやり、と。湿り気を帯びた足音が、ほの暗い倉庫内に響き渡った。

東京武偵高校そのものと言ってもいい人工浮島——学園島。その地下7階は、通称『地下倉庫』と呼ばれる火薬庫になっている。

そしてその地下倉庫に今、一人の少女が屹立していた。

二房の三つ編みをつむじで結い上げた、透き通るほどの銀の長髪。欧州系の整った顔立ちに宝石のようにはまった、氷青色の瞳。天井から注ぐ照明光を照り返す、髪と同じく白銀の半ハーフプレートアーマー甲冑。それら全てを引き締めるように、莊嚴と彼女の腰を飾る大剣——銘を、『デュランダール』。

数日前まで第1女子寮に潜伏していた、世界的犯罪組織『イ・ウー』正規メンバー、ジャンヌ・ダルク30世が、静かに地下倉庫に降り立った。

「ふう……排水溝を行けとは、理子もずいぶんな経路を考えたものだな」

濡れた髪を軽く振りながら、ジャンヌは呟く。

地下倉庫は言うまでもなく、重要施設である。つまりはそれだけ侵入が困難なはずなのだが、ジャンヌは見事侵入せしめていた。

その裏には東京武偵高に在籍していた同期メンバー・峰理子の協力があった。彼女は内部の人間しか気づけない地下倉庫への侵入経路——学園島に28ある排水溝の一つ、第9排水溝を伝っていくという荒業を、ジャンヌに伝授していた。

その代償として、ジャンヌは濡れ鼠になってしまったのだが……、「服が張り付いて気持ち悪いな……乾かすか」

と、長手袋の端を引っ張りつつ零す。すると、次の瞬間明確な変化があった。

シユオオオオ、と自然乾燥ではありあえない速度で、ジャンヌの体や服に溜まった水気が引いて行ったのだ。

これが、ジャンヌが持つ超能力——氷を操る異能の一端だ。

この世には、超能力者と呼ばれる者たちが確かに存在する。ジャンヌ……というよりも、ジャンヌ・ダルクの血筋もまた、そういった力を秘めていた。

10代目ジャンヌ・ダルクが火刑に処されそうになったからこそ——忌むべき炎に対抗すべく、氷の異能を練り上げていた。

そして、その未裔すえたる少女が氷のステルスを行使できるのは当然で

あり……、水を操れるということは、その源たる水を操れるということだ。

無論、超能力における自然現象は現実の物理法則にまるごと従っているわけではないので、厳密に言えば水の超能力と水の超能力は別物だ。しかし、大質量の水ならばともかく、こうした微細な水量ならば、ジャンヌにも如何様にもできた。

これでよし、とジャンヌは満足したように頷き、ココというイ・ウー非正規メンバーに防水加工してもらった携帯電話を取り出し、メールボックスを開く。

悪の秘密結社の一員たる少女が古めかしい鎧姿で、携帯電話をこちやこちやと操作しているのは相当に違和感があったが、イ・ウーメンバーは大体みんなこんな感じである。

それはともかくとして、やがてジャンヌが開いたメールには、こう書かれていた。

『From: 星伽白雪』

Sub: (なし)

私は、何も抵抗せずにあなたに従います。だから、武偵高のみんなには手を出さないで。特に、遠山キンジには絶対に何もしないでください。お願いします』

タイケット 標的である星伽白雪から送られたその文面を見て、ジャンヌはつまらなそうに鼻を鳴らす。

「馬鹿馬鹿しい。人を超越した私たち^{ステルス}超能力者の一員でありながら、剣も取らずに服従を選ぶとは。あまつさえ、敵である私に懇願する……そうなるように仕向けたとはいえ、人物的には全くつまらんよ、白雪」

ジャンヌには、我慢がならない。白雪が、大粒の原石——高レベルの超能力者であろうことがわかってはいるがゆえに、なぜそうも俗人に拘るのかと、憤りを持っていた。

しかし、これは任務だ。そのような私情を挟まず、星伽白雪の誘拐という目的は果さねばならない。

だからジャンヌは、白雪をこの人気無い地下倉庫へと呼び出すため

に、新たなメールを作成する。誰も連れずに、一人でここまでこいと。

送信が終わると、ジャンヌは一息つき、やることをあえて口に出して整理する。

「白雪の到着に合わせて、侵入経路を制限するために、エレベーターの稼働を停止させる。連絡手段の断絶と照明の消灯は……そろそろ時間だな。あとは……変装、か」

連絡手段を絶つための屋内基地局^{I_MC_S}と万が一を考えて消しておきたい照明については、以前下調べしたときに時限式で壊れるように細工は済ませてある。こんなもの教師が調べれば一発でバレると理子に抗議したのだが、そこはさすがに情報怪盗とも揶揄される理子。教師陣が怠慢で定期メンテを怠っていること、メンテナンスの時期も調べ上げ、問題のない決行日を選んでいた。

次に考えるべきは、侵入経路兼逃走経路となるエレベーターを、白雪の到着後に停止させることだろう。とはいえ、こちらもやることはスイッチ一つ押すだけがいい。例にもれず、遠隔で操作する仕掛けは済ませてある。ここの物陰で白雪を確認しだい、停止させればいいだろう。

というわけでジャンヌが目下やるべきことは――

「はあ……また、『ミコフク』を着なければならぬのか。これはあまり好みではない……ゴスロリ、着たいな」

万が一の策として、白雪に変装することであった。

薄暗闇の中、いそいそと隠しておいた巫女服に着替える（といっても上から着込むだけだが）ジャンヌの姿は、ある種倒錯的でもあったが……それ以上に、間抜けな図だった。

* * *

遠山キンジは後悔した。

いや、現在進行形で後悔していた。なぜもつと考えなかったのか、なぜ全く気付かなかったのか、なぜ一切信じなかったのか。そんな後悔ばかりが、キンジの胸中でぐるぐるとぐるを巻いている。

しかしいくら忸怩たる思いを募らせても、現実が変わらない。

——『ケースD7』。

現在、学園島内で発令されているこの特殊事態は、キンジの心臓を凍らせた。

ケースDとは、アドシールド期間中の武偵高内で事件が発生した際の符丁。その7番目のコードであるD7は、『ただし事件であるかは不明確で、連絡は一部の者のみに行く。なお保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎ立ててはならない。武偵高もアドシールドも予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』という意味を持った、秘匿任務サイレントミッションの警報だ。

キンジはこの事態を、友人の武藤剛気によって伝えられていた。午後4時を回ったところから、受付の担当区域で居眠りをしていたキンジは武藤にたたき起こされ、D7の発生を知った。

そして、D7の核心もまた、武藤は告げていた。

すなわち、令文にある保護対象者とは誰か。そして、何が起こったのか。

——星伽白雪の失踪。

それが、D7の正体だった。

* * *

神崎・H・アリアもまた、ケースD7の発令を受け取っていた。

狙撃科専門棟7階。今回のアドシールド狙撃競技スナイピングの会場にもなっているこの階の窓際で、アリアは携帯電話のディスプレイを睨みつけていた。

そして、確信する。ようやく、『魔剣』デユランダルが動き出したことを。

やはり、アリアのCANは正しかった。すこしずつ、だが確実に迫ってきていた『魔剣』が、ようやく魔手を伸ばしてきたのだ。

(問題は、白雪がどこにいるのかってことよね……最後に見たのは、地下へ行く為の唯一の階段入口を降りてくところだった。最初は仕事かと思っただけ……こうなった以上、白雪が地下に呼び出されたのは間違いない。けど、どこに?)

窓枠に置かれた、装備科アムド謹製の高性能双眼鏡をコツコツと指で叩きながら、アリアは思索する。狙撃科棟だけあって、ここは一番高さが

あり、なおかつ学園島全域を見渡せるように建造されている。アリアは、ここから白雪の長距離監視を行っていたのだ。

白雪の居場所は、おそらく、地下2階よりもさらに下層だろう。一般開放されているというわけではないが、地下2階までは階段を下ることでの進入できる。が、それよりさらに下階となると、立ち入り禁止エリアとなる。呼び出されたとすれば、そちらの公算が高い。

しかし、ではどの階に？ 学園島の地下は7階までの多層構造だ。その2階以降を風潰しにしてもいいが、時間がかかる。なにか、特定の為の情報が欲しかった。

——と、その時だった。

「おい、レキ!? どこいくんだ?!」「まだ競技中よ!？」

ふいに室内が騒然となったことに気付き、アリアは視線を上げる。

そこには、ライトブルーのショートカットをした小柄な少女、レキが静かに立っていた。肩には、彼女の相棒であるドラグノフ狙撃銃がぶら下がっている。

ぎくり、とアリアの動きが止まった。

「ちよつとレキ、あんた……まだ競技中でしょ?! レーンから離れたら失格に——」

「ケースD7を確認しました。こちらの方が重要度が高いと思われま
す」

なんでもないようにレキがさりと言ったが、とんでもない。今、レキは日本代表としてアドシアードワールドレコードに出場している。それも、監視の合間に様子を見た限りでは、世界記録の更新も夢ではない成果を上げていた。このままいけば、相当の記録とともに将来も約束されただろうに……レキは、こちらを選んだ。

「あんた……」とアリアが呟く中、レキはアリアの横に立ち、窓の外に目を向ける。

そして、スツ——と、ある方向を指さし、

「アリアさん。第9排水溝のあたり、水流に違和を感じます」

「第9……? ——ツ! 『地下倉庫』ね!」

優れた武偵は、地理の把握も怠らない。

レキの言葉から、アリアは第9排水溝がどこにつながっているかを即座に割り出す。この事態に、レキが感じた違和感。にわかには信じがたいが、『魔剣』は排水溝を伝って『地下倉庫』に文字通り潜入したのだ。

そして、それはつまり白雪もそこにいる、ということになる。

状況は、最悪に近かった。学園島内でももつとも地下深く、それもアリアを始めとした武偵の主武器である拳銃の使用が厳禁とされる、火薬庫というシチュエーション。仮に救出セーブに向かったとして、アリアの戦力が落ちることは間違いなかった。いや、そもそもの話、すでに白雪の誘拐は決行されている可能性すらあった。

だが、同時に。

その窮地をひっくり返す、もう一つの事実も、明らかになった。

光明が、見えた。

「行ってください、アリアさん。キンジさんへの連絡およびサポートは私が行います。白雪さんの方も、万が一の事態には発展していません。なぜなら——」

「そうね。私も少しだけ安心できたわ。だって——」

アリアの唇が弧を描く。レキの脳裏に姿がよぎる。

そう。

なぜならば、今このとき、『地下倉庫』には、

「——鍊（さん）がいる」

二人、確信の籠った声が重なる。

各々が、パートナーと元バディの姿を思い浮かべていた。かくて、役者は出そろった。

決戦の舞台は、学園島地下7階、火薬庫。

——通称『地下倉庫』に絞られた。

* * *

そして、星伽白雪は終わりへと進み始めた。

学園島地下2階。そのエレベーター横のテンキーに稼働用のパスワードを打ち込み、白雪は静かにエレベーターの到着を待つ。

彼女の服装は、普段の制服姿ではなかった。いや、正確には先ほど

まではアドシールド実行委員会として制服を纏っていたのだが、今は違う。

緋袴に白衣。俗に言う、巫女服を着て、白雪はこの場に臨んでいた。腰には白雪の愛刀・『色金殺女』イロカナアヤメを帯刀している。

この姿は、彼女の意思ではない。ある者に、指示された結果である。この服装をして、学園島地下7階『地下倉庫』へ来いという呼び出しを受けていた。

指示した者の通り名は、『魔剣』。

連続超偵誘拐犯であり……白雪に対し、脅迫をかけていた人物の名だった。

「これでもう……キンちゃんたちともお別れかな」

白雪は、ぽつりと諦めたように零す。

『魔剣』の狙いが、一体なんなのかは知らない。数多の高名な超能力者たちを攫うことに、どのような意味を見出しているのか、そんなことは白雪の与り知ることではない。

けれど、その先に光なんてないことだけは、彼女にはわかっていた。またこの日常へ帰ってくるなど、きつと無理だろう。

それでも。

このまま白雪が従わない場合、学園島を爆破すると脅しを受けた。今こうして『地下倉庫』まで潜入されていることを考えれば、それは十分に可能だろう。

ならば、白雪は従わなければならない。キンジを……そして、みんなを、傷つけさせはしない。

(みんな、か……)

自然に浮かんだ言葉に、白雪は少しだけ表情を明るくした。

この状況で、唯一救いがあるとすれば、きつとそう思えたことだろう。昔の白雪なら……星伽神社という世界しか知らなかった白雪ならば、心から案じるのは、キンジの身だったはずだ。だが、今はキンジ以外の、大切な友人たちや武偵高のみんなを護りたいと、そう強く思えている。

きつと、それは宝だ。『かごのとり』でしかなかった白雪が手に入れ

た、なにより掛け替えのない財産だ。その存在が、涙が出るほどに嬉しかった。

そして星伽白雪は、やがて到着したエレベーターを使い、地下7階まで降りる。扉が開いた先には、なぜか火薬類が詰まった箱が山のよう

に積まれていた。白雪にはそれがどこか、不恰な門に見えた。

門の先は、闇か、地獄か。いずれにしても、希望は無い。前に伸びた路をまっすぐに抜け、白雪は進む。その歩みが、大倉庫と呼ばれる火薬保管庫に差し掛かった時、氷のように冷え切った女の声が、白雪を出迎えた。

「ようこそ、白雪。私はお前を歓迎しよう」

——世界的犯罪組織『イ・ウー』 正規構成員・『魔剣』。

白雪は一人、彼女の前に立つのだった。

* * *

「——ふがっ」

と、間拔けな声と共に、俺の意識は覚醒した。

覚醒したはずなんだが……なんだか、周囲が妙に暗い。かろうじて非常灯の灯りで薄ぼんやりと景色が見える。

というか、えーと……そもそも、どこだっけ、ここ？

……ああ、思い出した。『地下倉庫』だ。教務科から命じられた仕事をするために、俺はここにいたんだった。

「ふあ……あ……っ」

口元に手をやりながら、大きな欠伸を一つ。

軽く伸びをして、背中をバキバキと鳴らす。どうやら俺は、いつのまにか座ったまま寝ていたらしい。足は痺れてるし、体は凝り固まっている。無理な態勢のまま眠ってたのが祟ったんだろう。

しかし……なんで寝てたんだ、俺？

と、まだ若干寝ぼけている頭を左に振ってみると、山積みになされた木箱が俺を出迎えた。

それを見た瞬間、俺はこれまでの経緯を思い出す。

そうだ、確か俺は昼休憩の間中、エレベーターの扉の左右に火薬箱を運び込んでいったんだ。で、昼休憩が終わってまた注文がいくつか

あつたんだが……なんと、午前中に運び込んだ分で大体必要量が揃っていたことが発覚。結局俺が大量に積んだ火薬箱は少しはけただけでお役御免になり、むしろまた火薬棚に戻す必要が出てきたんだが……すっかりやる気を削がれた上に今までの疲れが出た俺は、少し休もうと火薬箱の山の横に回って座り込んだ。つてとこまでは覚えてるから……多分、そこでそのまま寝ちまつたんだらうな。

「くあ、体痛え……つか、今何時だよ？」

がりがりと頭をかきつつ、俺は携帯電話を取り出し、時刻を確認する。

すると、現在は5時を半ば回ったところだった。ということは、俺は3時間くらい寝たことになるのか……。

クソ、こんなことならとつと上に帰って、ベッドで寝るんだつたぜ。

まあ、いい。とにかく、一旦先生にこれからどうすればいいのか聞いてみよう。まだ待機する必要があるのか、それとも戻っていいのか。それがわからなきや、どうしようもない。

……、
というわけで、俺は蘭豹先生に電話をかけてみようとしたんだが

「……？ 繋がらねえぞ……？」

期待した結果が返ってこなかったことに首をひねり、携帯電話の画面を見てみると、圏外になっていた。

変だな、さっきまでは普通に繋がってたんだが……。

仕方がない。二度手間になる可能性はあるが、一度エレベーターで上に戻ろう。電波の回復を待つより、その方が早い。

行動を決めた俺は、立ち上がって火薬箱の山を迂回し、エレベーターの前に移動する。そして、開閉ボタンを押したんだが……反応がない。かごが上に行ってるのかとも思ったが、扉上部の階数表示のパネルには、B7の表示が灯っている。つまり、この階のはずなんだが、なんで開かねえんだ……？

なにか、おかしい。普通じゃない事態が起きている気がする。
と、その時だった。

ボンツ、と。

全くの唐突に、そこかしこの地面から水が溢れ出した。

「な、に……ッ!？」

どういうことだ、と混乱する俺は、直後に気づく。この水——それも、匂いからして海水だろう——は、地面からじゃない。近くを走る排水溝から逆流してゐるんだ。

だが、単純にごぼごぼと溢れているわけじゃねえ。間欠泉のように、小さな水柱ができるほどの量を吐き出している。

やべえ……やべえぞこれ!? ここはもう、とつくに海面より下なんだ。このままいけば、10分足らずでここは完全に水没するだろう。現に、この短い時間にすでに足首まで水が溜まっている。

「クソッ！」

エレベーターの開閉ボタンを慌てて連打するも、やはり開くことはない。なんでこんな事になってるのかわかんねえが、このままでは溺れ死ぬことになる。

エレベーターでの脱出を諦めた俺は、なんとか打開策がないか必死に探す。

落ち着け、落ち着け。なにか、なにか方法があるはずだ。どこか別の出口が……、

「——そうだ、ハッチだ! 確か、大倉庫の方に、上階への天井扉があつたはずだ!」

学園島地下の禁止エリアに行くには、通常エレベーターを使う。が、何らかの原因でそれが使えない場合のために、階層ぶち抜きのある扉があるんだ。

俺はそれを思い出すと、すぐに踵を返して、大倉庫の方へ向かう。ハッチには三重のセキュリティがかかっているが、それを考慮しても十分間に合うはずだ。

……と、予想していた俺だったが、大倉庫の奥隅で、思いもよらない光景を目撃した。

「キンジ!? 白雪!？」

巫女装束の白雪が、柱に鎖で雁字搦めにされている。そして、腰の

あたりの鎖についたゴツい角柱型の錠——ロックが三重になった『ドラム錠』に組み付いているキンジがいた。

ああもう、次から次になんでこんなわけわかんねえ状況になってんだよ!?

「錬?! お前、いままでどこに……まさか、本当に『魔剣』に……いや、それより手伝ってくれ! この錠を鍵開けしないと、白雪が死ぬ!」
「ッ!? お、おう!」

事情はさっぱり飲めなかったが、危機的状況ということだけはわかった。

俺はキンジに了承の返事をして、キンジ同様ドラム錠に挑む。武偵手帳から開錠キーを取り出し、鍵穴に差し込む。

「錬君、ごめんなさい……こんなことに、巻き込んだじゃって……」

「謝罪はいいから、黙って待ってろ! こんなもん、すぐに開けてやつから!」

荒っぽい口調になりつつも、俺は白雪に返す。クソ、本当になんだってこんなことになってんだ。

だが、そんなことぐだぐだ言ってる場合じゃねえ。すでに水位は膝を超えた。時間が、ない。しかし、見捨てられるはずはもつとない。

とはいえ、俺の鍵開けスキルはそう高くない。キンジも同様だ。おまけに、鍵の仕掛けが複雑すぎる。これを時間内に3つなんてとてもじゃねえが……。

諦めが胸をよぎる中、それでも作業を進める。そして、ついに胸元まで水が達した時、キンジが叫んだ。

「——1つ目、開いたぞ!」

「悪い、こっちはまだだ! 2つ目頼む!」

「3番目のキーは大抵最難関だからな……とにかく急ぐぞ、時間がない!」

「ああ!」

威勢よく応えつつも、俺の冷静な部分はもう、気づいていた。

——もう、無理だ。俺の分が間に合ったとして、キンジの方は終わらない。

ちくしょう……！ 知るかよ、そんなこと！

「クソッ！」

大きく息を吸い、水中に潜る。すでに水流は濁流へと変化していた。もしかしたら、生きている排水溝に流入しているのかもしれない。俺は流されないように態勢を整えつつ、開錠を続ける。

そして——開いた。俺が担当していた、ロックが。
やった……！

内心で喝采を上げる。とにもかくにも、これで2つ目が開いたと。

だが、次の瞬間——

ガン……ッ！ と、右側頭部に鈍痛が走った。

「ぐあば……ッ!?」

ごぼツツツ！ と、口から息が吐き出る。視界が、急激に流れ始める。

そして、何が起こったのか遅れて気づいた。激流に流されてきた火薬箱が、俺の頭に強打したんだ。

その衝撃で、俺は白雪たちの位置から遠く流された。体の上下が回転する。嵐の海を舞う木の葉のように、翻弄される。息が苦しい。絶対に窒息死だけはしたくないと思わせるほどの、酸素への渴望が沸き起こる。

こんなところで、死んでたまるか……！

火事場……いや、水事場の馬鹿力で、俺はなんとか泳ぎ、元の位置への帰還を目指す。時間の感覚はない。ひよっとしたら、1分近くは泳いでいたかもしれない。

そして、俺は元の位置……と、思われる場所まで泳ぎ切った。曖昧な表現なのは、そこに白雪たちがいなかったからで……しかし代わりには、鎖がふよふよと漂っていたからだ。

あいつら、脱出できたのか！

安心したのも束の間……ついに、俺の意識も怪しくなってきた。

やべえ、急がねえと。あいつらが脱出して、俺だけ溺死なんて間抜けはねえよな……！

俺は急いでハッチがある天井へと進路を変える。見ると、天井扉は

すでに開いていた。

あと、ちよつと……ッ！

俺は、最後の力を振り絞り絞り扉の向こうへ手を伸ばして――

* * *

『魔剣』！ あんた一体、鍊をどうしたのッ！

非常灯の灯りしかない薄暗い『地下倉庫』に、アリアの詰問が響いた。

この『地下倉庫』には、今4人の人間がいた。神崎・H・アリア、遠山キンジ、星伽白雪、そして『魔剣』の4人である。

現在の状況は、少し複雑だ。消えた白雪を追ったキンジがここにたどり着いた時、白雪は『魔剣』と会話していた。そこにキンジは乱入、戦闘へと発展したが、キンジは『魔剣』が操る氷のステルスに敗北する。あわや殺されかけたところに、キンジに先んじて状況を窺っていたアリアが割り込み、キンジは命を拾った。

そして、この場にもう一人いるべき登場人物、有明鍊の姿がないことに疑問を持ったアリアが、『魔剣』へと厳しい問いを投げかけたのだ。

「有明……？ フフツ、さあな。お家芸の推理で当ててみたらどうだ、ホームズ4世？」

暗がりの中、白雪を羽交い絞めにする『魔剣』――ジャンヌは、アリアに飄々と返す。

しかし、その内心では彼女もまた、アリアと同じ疑問を持っていた。(有明鍊……なぜ出てこない？ すっかり遠山たちから遠ざかっていったと思っていたアリア同様、やつもここに現れるはずだが……)

白雪陣営には、一流の武偵が多い。その中でも、切り札足る少年の行方だけが杳ようとして知れない。

この不気味さは、そう。ジャンヌの監視が見破られた上で逃がされた、あの時に似ていた。

一方、アリアとキンジは、『魔剣』の言葉に、別の想像をしていた。すなわち、鍊が『魔剣』にすでに敗北したのでは？ という想像だ。ありえない……とは思いつつも、敵の実力は未知数。確か鍊はここ

で火薬運搬の作業をしていたはずだから、その不意を突かれたのなら、あり得ない話ではない。

だが、アリアはどうしても鍊がただで撃墜されたとは思えなかった。だから再び、明言を避けた『魔剣』を問い詰めたのだが……そのころには、『魔剣』は既に逃げおおせていた。

その後、アリアとキンジは和解しつつ白雪を発見。鎖で拘束された彼女を救出しようとするも、突然の水攻めに、アリアが上階へ離脱。キンジが白雪の許に残った。

開錠を続けるキンジたち。このタイミングで、有明鍊がやってきた。結局、その時に鍊の事情は訊けなかったが、とにかく二人がかりでの救出が始まる。

しかし、首元まで浸水しつつも2つ目のロックを解除したところで、鍊が消え——おそろく流されたのだろう——自分を諦めて逃げろと白雪が脱出を促し……キンジはついに、覚悟を決めた。

贖罪の、ヒステリアモード。

水中で空気と共に白雪に口づけたキンジは、兄の死以来初めて己の意思で使ったヒステリアモードの助けを借りて、最後の鍵を開錠。白雪と共に上階へ逃げ延びる。

その際、ハッチを開けると水流が強くなるように設定されていたのか、勢いを増した奔流に白雪が流されていき——キンジは白雪にアドバイスを残し、鍊の帰還を待つ。

しかし、なかなか戻ってこない鍊の身を案じ、再び下階に戻ることをキンジが決めかけた時、水面から一本の腕が伸びた。

キンジはヒステリアモード任せの力技で腕の主を引っ張り上げ、入れ替わりに、ハッチを閉じ、これ以上の水の流入を防ぐ。

キンジと腕の主は、やっとの安息に、二人大きく息をついた。とりわけ、腕の主が大きく。

「ッは……ッは……！ はああああああっ！ えほっ、ごほっ……し、死ぬかと思った……！」

「生きてるようになによりだよ……！」

鍊の言葉に、キンジもまた安堵する。本当に、ギリギリだった。冗

談抜きで死にかけた。

息を整えようと大きく深呼吸している錬が、きよろきよるとあたりを見回し、訊ねてくる。

「し、白雪は……？」

「ここに上がってくるとき、水に流された。アリアもこの階にいるはずだ。おそらくは、『魔剣』もな」

『魔剣』……ああ、なるほど。よくわかった。てことは、まず狙われている白雪をさがさねえとな」

「ああ」

錬の言葉にキンジもうなずく。その意見には、ヒステリアモード抜きにしても大いに賛成だ。

だが、その前に聞いておきたいことがある。

「錬、お前いままでどうしてたんだ？ 大倉庫にはいなかったようだが」

「ん？ ああ、まあちよつとな……それより、二手に別れて、とつと白雪を探すぞ。固まって探すより、早く見つけられる可能性がある。今は、白雪を一人にさせねえのが先決だ」

言葉を濁した錬に疑問を覚えつつも、錬の言は正しかった。キンジは「そうだな」と返し、二手に別れての搜索を開始するのだった。

——後に、キンジはジャンヌに教えられたことがある。

それは、『地下倉庫』で唯一生かしていた排水溝が、大量の木箱で塞がれていたということだった。万が一ハッチが使えなかった時のためにジャンヌが残っていたそうだが、この工作によって、もしもジャンヌが排水溝からの脱出を選択していた場合、おそらくその時点で逃げ場を無くして詰みだっただろう。

その犯人はわかっていない。しかし、キンジは思う。

もしかしたら……あの時錬が言っていた「ちよつとな」という台詞はひよつとして——

* * *

学園島地下6階『情報機器室』。

大型コンピュータが立ち並ぶこの部屋で、俺は慎重に進みつつ、白

雪を搜索していた。

キンジの言葉によって、俺はおおまかな状況を把握していた。つまるところ、これは全て『魔剣』の仕業らしい。俺たちが警戒していた襲撃が、今日この日に起こったのだ。

もちろん、詳細はわかっていない。なんで全員『地下倉庫』にいたのかとか、そんなことはわかんねえ。

——だが。

俺があんな目にあったのは、『魔剣』のせいだということだけはわかった。それで十分だ。

『魔剣』め、絶対許さん……！

俺の怒りの炎は、あんな水攻めでは消えないほどに、燃え盛っていた。

ああ、しかし、頭が痛え。さっきの木箱のせいかな？

俺は痛む側頭部を抑え、小さく唸る。

……つと、そうだ。

「戦闘になるかもしれないからね。これ、つけとくか」

俺は、念のためにと制服の内側に潜ませておいた、人の手首型グローブ『スタンングローブ』を取り出し……若干、そのリアルな見た目に引きつつも装着した。使えるのかは疑問だが、まあないよりはマシだろ。

万が一の暴発からの誘爆を恐れて、拳銃を持ってきていなかったのが痛い。こんなことなら、持ってきとくんだった。武装が平賀印の新兵器だけは、なんとも心もとない。あとはせいぜい、閃光弾フラッシュとかそんなのしかない。

しかし……白雪はどこにいったんだ。いくら流されたとはいえ、水の流入自体は止まってるんだ。そんなに遠くへは行つてねえと思うんだが……。

と、そんなことを考えつつ、柱の様にでかい大型コンピュータの陰から出ると……いた。白雪が、うずくまるように座り込んでいた。

ので、俺は軽い調子で声をかける。

「よお。こんなところにいたのか、ずいぶん探したぜ」

瞬間、白雪がビクリと肩を震わせ、こちらに振り返った。

心なしか、その顔が強張っているように見えるが、はてどうしたんだらう？

「あ……れ、錬君。その、水に流されちゃって……」

「そうか……まあ、見つかつて良かった。早いところ、キンジたちに合流しようぜ」

「うん……」

未だ覇気のない白雪に疑問は尽きないが、まずはキンジ達と落ち合うべきだろう。

俺は白雪を先導するために、軽く歩き出す。すると、後ろから同じように足を踏み出す音が聞こえた。よしよし。

さて、あいつらはどこかな。二手に別れた時、キンジは確か向こうの方に行ってたよな。

キンジがいる方向に当たりをつけつつ、俺は歩を進める。

しかし……無言だな、白雪。本当に大丈夫か？ 『魔剣』の思惑で死にかけてのが、よっぽど堪えたんだろうか。

よし、ここはひとつ空気を替えるために、雑談でもしよう。

俺、ちようど一つ気になってたんだよ。なんでアドシールド中は制服用の実行委員会である白雪が、巫女装束を着ているんだろうか。

そんな素朴な疑問を、俺は素直に口に出してみる。

「そーいやさあ、お前、その恰好はなんのつもりなんだ？ ……『魔剣』——」

——にでも指示されたのか？ と訊こうとして、止める。あほらしい、そんなわけねえだろ。んなことして、なんの得があんだよ。いや、俺的には保養になっていいんですけどね。特に濡れた服が肌に密着しているとところとか、あと——

「ツ貴様……！」

「えっ？」

白雪らしからぬ言葉づかいに振り向けば、彼女は驚くべき跳躍力でバックステップし、俺から距離を取っていた。

ああ!?! 待ってうそうそ、その恰好超エロいとか考えてないです！

だからそんな引かなくていいんだぞ!?

「ふぎけた真似を……ッ。さては、最初から分かっているが黙っていたな!？」

なんだかわからぬままに、俺は白雪になじられている。というか、お前キャラちがくね？

というか、えー？ 知ってるって一体なにを……はっ!? ま、まさか『あれ』のことか? 『あれ』に気づいていたことに、気づかれたのか!?

俺は、気まぎれに視線を逸らしながら、

「そりや、まあそんなにはつきりしてたら……誰でも気づくだろうよ」と、開き直りに近い言い訳を試みる。

だって……だって、仕方ねえだろ! 俺、健全な男だぞ! そりや、目ざとく気づくし、目もいつちまうよ!

胸元が濡れて透けてたら、ちら見ぐらいしちまうよ!

……うん、どう考えても変態だね、俺。

ただ惜しむらくは、透けて見えたのが、どうにも下着っぽくないというか、硬質な感じだったことだが……まあ、それはこの際どうでもいい。とにかく、ここは名誉挽回のためにかいわねえと。

が、俺が弁解するよりも、白雪の台詞の方が早かった。

「ふ、ふふ……っ。やはり、貴様は殺さねば気が済まない。白雪を確保できればもうどうでもいいと思っていだが……止めだ。ここまで私を虚仮にした以上、もはや生きては帰さんぞ」

? ……?

なにいつてんのこいつ?

完全に脳内ハテナ状態の俺に構わず、白雪は巫女服の裾からなにやら細長い缶を取り出し——地面に叩き付けた。

ブシューウウウッ! と、缶から白煙が噴き出し始める。煙幕弾スモークかこれ!?

煙に反応して、スプリンクラーが作動する。雨のように降り注ぐ水に、俺は顔をしかめる。

「ッんだよ、一体!？」

白雪の行動に驚きつつも、俺は後退しながら煙の範囲から逃れる。見たところ、そう広範囲に広がるような代物じゃねえ。ありや多分、全体を煙に巻くってよりは、自分の姿を隠すためのものだ。

しかし、なんだって白雪はこんな真似を……。

と、その時だった。

「——鍊！ あんた、そこにいたのね！」

背後から飛んできたアニメ声には、聞き覚えがありすぎた。

振り返ると、案の定両手に拳銃を構えたアリアがこちらに走ってきていた。その後ろには、キンジと白雪もいる。

「……………え、白雪も？」

「なによ、あんた。やっぱり無事だったんじゃない。今までどこにいたのよ？」

「いや、まあ、ええと……ええ？」

アリアが何か訊いていたようだが、はつきり言ってそっちに意識がいつてない。俺の目は、白雪に注がれていた。

ここにも、白雪。さつきまで居たのも白雪。てことは、当然どつちかが偽物で、ひよつとして俺がさつきまで話してた白雪のキャラがおかしかったのは……。

ぎぎぎ、と俺は再び顔の位置を反転させる。

濃い白煙の向こう、かすかに浮かび上がったシルエットから、俺の知らない女の声が上がった。

「結局のところ、全員が揃ってしまったか……まあ、いい。所詮は、原石が1人にただの武偵が3人。流儀には悖^{もと}るが、まとめて屠^とつてやるでしょう」

やはり、さっきの白雪は偽物で、こいつは……、

『魔剣』……ッ！』

俺の隣に立つキンジが、鋭い声を浴びせる。

こいつが、『魔剣』か……！』

「その名で呼んでくれるな、遠山。私は、人につけられた名は好まない。なぜならば、私は自らの名に誇りを持っているのだからな」

「あんたの本名なんて、どうでもいいッ！ 私が捕まえたいたのは、『魔

剣』としてのあんたよ！ ママに着せた107年分の罪、きつちり償ってもらわよ！」

「ふふ、勇ましいいなホームズ4世。容姿の愛らしさと相まって、まるで伝え聞く始祖——初代ジャンヌ・ダルクのようだ」

「始祖……？ 初代ジャンヌ・ダルク……？ じゃあ、まさかあなたは——」

白雪がはつとしたように目を見開く。

俺自身、多分同じことを考えてる。こいつ、ひよつとして……、

「ジャンヌ・ダルクの子孫……か？」

「正解だ、有明。私は、ジャンヌ・ダルク30世。貴様らが知る歴史では既に没した影の一族だよ。——今こそ、見せよう。貴様らが呼ぶ『魔剣』ではなく、聖女ジャンヌ・ダルクとしての私を……な」

こつ、こつ、と。

煙の中から、影が進み出てくる。それに伴い——急激に室内が冷え込んでいった。スプリングラーの水しぶきが凍り始め、ダイヤモンドダストへと変化していく。

この、現象。『不可思議な力』。こいつ……『超能力者』か！

予想外のスキルに驚愕する中、ついにその姿があらわになる。

銀甲冑を着込んだ、銀髪の女。おそらくは、煙の中で白雪の変装を解いたんだろう。

『魔剣』改めジャンヌは、腰に携えた大剣を抜き放ちながら、言った。
「Bonjour. さあ、踊ろうか武偵ども」

* * *

ジャンヌ・ダルクは、白雪の変装姿のまま、スーパーコンピュータの陰に弱ったように蹲っていた。

無論、演技である。キンジやアリアが、本物の白雪と出会う前にこちらに接近すれば、そのまま欺いて奇襲。すでに合流されていたならば、また別の策は用意している。

とはいえ。

このタイミングで、こんな展開が来ることまでは読めなかったが。

「——よお。こんなところにいたのか、ずいぶん探したぜ」

ぬるり、と。

背後から迫った声に、ジャンヌは肩を震わせた。

知っている。ジャンヌは、この声を知っている。数日前、監視していたジャンヌを逆に監視していた、有明錬の声だ。

恐る恐る振り返ると、そこにはやはり錬がいた。

全身が濡れているところを見るに、やはり彼も『地下倉庫』にいたのだろう。

一瞬、ジャンヌは、この男ならば私の正体を見抜いているのでは？と勘ぐった。探していたのは白雪ではなくジャンヌ——『魔剣』のことでは、と。が、今は理子仕込みの変装をしているのだ。さすがに穿ちすぎだろうと高まる心拍数を抑えつつ、ジャンヌは返答する。

「あ……れ、錬君。その、水に流されちゃって……」

「そうか……まあ、見つかって良かった。早いところ、キンジたちに合流しようぜ」

「うん……」

無難な答えを返すジャンヌに、錬は軽い調子で話す。

その姿に、ジャンヌは安堵する。

(急な登場には焦ったが……やはり、バレてはいない。この男は、完全に私を白雪と思い込んでいる)

キンジたちと合流するために歩き出す錬に、ジャンヌも後を追って同道する。

暗がりの中男女が二人というのはなかなか背徳的なシチュエーションだが、しかしその片割れたる少女は、すでに心のギアを切り替えていた。

(——これは好機だ。今ならば、無警戒の有明錬を背後から急襲できる。パウロや理子を退けた有明を、労せず討てる——！)

にやり、と口元に微笑が浮かぶ。

そして、ジャンヌは巫女服の裾に手を入れた。生憎とデュランダルは抜けないが、隠し持った刀剣がある。これで、首を貫けば即死は免れないはずだ。

一步、二歩、三歩。歩数とともに、ジャンヌは徐々に距離を詰める。

そして。

ついに、殺傷圏内キリングレンジに鍊を収めた、その時。

雑談のような気軽さで、鍊が言った。

「そーいやさあ、お前、その恰好はなんのつもりなんだ？ ……『魔

劍』

ズオ……ツ、と。

氷の魔女であるジャンヌが、背中に氷柱を突き刺されたような寒気に襲われた。

一瞬で、気づく。やはり、やはりこの男は……ツ！

「ツ貴様……！」

ジャンヌはすばやく跳躍し、一気に後ろへと距離を取る。

冷や汗が、頬を伝った。

（気づかれていたツ！ 知られていたツ！ この男、知っていて……！）

憤りが、ジャンヌを包む。

まただ。また、舐められた。居場所を特定されながら見逃されていたあの時のように、またもやジャンヌをあざ笑っていたのだ。

「ふざけた真似を……ツ。さては、最初から分かっていたながら黙っていたな!？」

「そりや、まあそんなにはつきりしてたら……誰でも気づくだろうよ」

哀れすぎて見ていられない、とでもいうように鍊が目を逸らす。

その反応を、見て。

ついにジャンヌのどこかで、糸が切れるような音がした。

* * *

敵は――

強いだろう。間違いなく。超能力者がどれだけ厄介なのかは、前の理子戦で身に染みている。

それを知る俺たち『武偵殺し』の関係者や、自身超能力者である白雪が身を固くする中、ジャンヌはなぜか俺を射抜くような視線で見据え、

「有明。戦闘の前に一つ聞かせろ。貴様、なぜ私の変装を見抜けた？

自慢ではないが、それなりのものと自負していたのだがな」
「あん？」

眉をひそめてジャンヌの言葉に内心で首を捻る。俺、変装見抜いたりしたっけ？

しかし、まあいい。ここは乗っておこう。あたかも見抜いていたように振る舞うことで、やつに対して精神的優位に立てるかもしれないねえ。

それに、後々思い出してみりゃ、こいつと白雪には決定的な違いがあった。今考えれば、なんで気づかなかったのかと思うほどに。

「わかるさ。お前と白雪じゃ、持つてる胸モンの格がちげえ」

うん、やつぱさそうだ。こうして見比べりゃ、白雪とジャンヌじゃ、失礼ながらまるでサイズ感が違う。見慣れてたはずなのに、気づかなかったぜ。

俺の言葉に、ジャンヌは目をギランツと眇め、

「ほう……無能力者の分際で、ステルスの良し悪しがわかる、と？ なおかつ、私のステルススを矮小と侮辱するとは……打ち首の上に氷漬けにされたらしい」

えっ!? 俺そんなこと言ったつもりはねえんだけど!?

「ぐちやぐちやうっさい! もう、とつととこいつ逮捕して終わらせるわよあんたたち!」

なぜかジャンヌの逆鱗に触れてしまったらしいことに狼狽していると、アリアが飛び出した。キンジも銃を構え、狙いをつけている。

ガウンツ、ガウンツ、と二丁拳銃が咆哮を上げる。ベレッタがマズルフラッシュを閃かせる。が、返ってくるのは金属音ばかり。

白雪と同じだ。こいつ、剣で銃弾を弾いてやがる……!?

「無駄だホームズ! 私を倒したければ、直接来い!」

「くっ……! 上等よ! キンジ、バックファイア支援射撃! 白雪、出なさい!」
「うんっ」

アリアは拳銃をしまい、ジャキジャキツと背中から日本刀を抜き放って突進していく。白雪もまた、抜刀と同時に飛び出した。

っていうか、ええええ!? 俺、今銃持ってねえんだけど!?

どうしよう、と困惑する俺の前で、ジャンヌはアリアたちと切り結んでいる。す、すげえ。純粋な剣術なら、あいつあの二人より強えぞ。

しかも――

「はっー!」

「う、ぐ……ッ!?!」

バックステップで距離を取ったジャンヌがどこからか取り出し投擲した小剣――たしか、ヤタガンとか言う銃剣だ――が、アリアの足元に突き刺さると同時、アリアの足を巻きこむ形で地面が凍結していった。

幸いすぐに刀を突き刺して氷は砕いたが、しかしそれでも、ジャンヌの力がどれだけ厄介かは知ることができた。

これは……やばい。無策で突っ込んで、勝てる相手じゃねえ。なにか、こいつに逆転できる切り札がなければ。

「くっ……位置取りが、上手いな。あのお嬢さんは。アリアたちをすり抜けて撃つても、鎧か頭に当たるようにしてる」

「武偵法を逆手にとつてやがるのか……」

武偵の戦いは、いつもそうだ。こちらは殺せず（無論そんな気はないが）、相手は殺しにくる。常に不利な条件。

それを潜り抜けて、勝利しなければならぬ。完全な力関係による制圧か、あるいは別の方法――たとえば武器の破壊などで。

今の俺たちに取れる手はなんだ？

――と、その時だった。大ぶりの一撃でアリアたちを牽制したジャンヌが、大剣をこちらに突きつけた。

「どうした有明。なぜ来ない？ 私が一番戦いたいのは、お前だ。私を二度も恐怖させた貴様を倒さない限り、この忌々しさは払拭できない。かかってこい!」

だから、なんでお前さつきから俺にばつかキレてんだよ。標的は白雪じゃねえのかよ。

だが……これは、ちょうどいいかもしれない。

俺は、ジャンヌの挑発にあえて乗ることにした。

「アリア、白雪。お前ら下がれ。俺をこそ望らしいからな」

「鍊ッ!? あんた何言ってるの!?!」

「そうだぞ鍊! 一人であいつと戦う必要なんて——」

「(いいから黙っていかせろよキンジ)」

「ッ!?!」

俺は制止をかけてきたキンジに、小声で話しかける。

「(俺が時間を稼ぐ。お前ら、その間になんとかあいつを制圧する策を考えてくれ)」

「(策……か。わかった。かならず、見つけ出す)」

「(頼んだ。)——アリア、白雪。いいから、お前ら戻れ。俺の獲物を、取るんじやねえよ」

ペろり、と舌なめずりしながら、俺はあくまで強気に呼びかける。

……きつと、今の俺悪魔みてえな面なんだろうなあ。なんかもう目つきの悪さが最近天元突破してきて、道行く幼女が泣くレベルだからね?」

案の定、アリアたちは一瞬びくりと身を震わせつつも、こちらまで下がってきた。

アリアが、俺に聞く。

「あんた、本当に一人で大丈夫なんでしょうね」

「まあ、見てろよ。(……あとはキンジに話聞け)」

「っ!」

ずいつ、と俺は一步踏み出す。

ああ、クソ。また、この時間稼やくまわりぎかよ、俺は。

だが、現状決め手にかけているのは間違いない。なら、このまま戦い続けて死人を出す前に、あいつを倒すすべを探さなければならぬ。なら、それを一流たちが見つけ出す間時間を稼ぐのは、やっぱり一番弱い俺なんだろうさ。

「貴様、武器はどうした? なぜ、何も持たない?」

「いらねえだろ。お前程度の相手だ。拳こぶでいい」

しかし、俺だって、ただでやられるわけじゃねえ。挑発しろ。頭に血を上らせる。少しでも生き残る可能性を、稼ぐ時間を増やせ。

「面白いことを言う。それはつまり、殺してくれという意味でいいの

「だな？」

「笑かすなよ。ハンデにやこれくらいが丁度いいって言ったんだ」

「ハッ、ハハハッ、それでこそだ有明鍊。ぜひともそのまま、私を侮辱し続けるお前でいてくれ。そんなお前なら、一切呵責なく斬れそうだ」

「馬鹿か。悪人が、斬ることを躊躇うなよ」

互いに、口を応酬させる。

ニイ、と鏡写しのように唇が裂ける。

そして、

「——行くぞッ！」

「——来いッ！」

だんっ、と駆け出す。スピードに乗る。体から、さつきまで思いつきり浸かっていた海水が、飛沫となって後ろに流れる。

真正面からの特攻。きつと、これは無謀な行動だろう。SランクとAランクの武偵二人を相手にしながら、Sランクの射撃を妨害するよきな相手に、せいぜいがCランク止まりの俺が馬鹿正直に挑んで勝てるわけがねえ。

——けどな、ジャンヌ・ダルク。

俺は一言だって、正々堂々戦うとは言ってねえぞ。

次の瞬間、俺はあるものを目の前に投げつけ、同時に右腕で目を覆った。

ピカッツツ！ と。

薄暗闇を吹き飛ばすような、閃光が生まれた。

「な、ぐ……ッ!？」

ジャンヌのうめき声が聞こえる。よし、上手く目くらましできたみたいだ。

俺は装着した『スタングローブ』の手首にあるスイッチをONにする。あややの説明によれば、これで拳打と共に電流が相手に流れるはずだ。

あわよくば、これであいつを倒す。倒れなかったとしても、行動の阻害はできる。そのあとが幾分楽になるはずだ。

「お、おおおおおおおおおおおおおッ!!」

跳躍。チーターが獲物に飛びかかるように、俺は拳を引き絞りながらジャンヌに向かって跳んだ。

そして。

放たれた俺の拳の先は――

* * *

その頃。

アドシールド武装整備部門で作業をしていた、小学生のような見た目の少女が唐突に呟いた。

「あ。そういえば、有明君に言い忘れてたことがあったのだ」

その言葉――より正確には、校内でも有名な錬の名になった装備科2年の女子が、少女――平賀文に訊ねる。

「なにになー？ あやや、また有明君を実験台に使ったりしたの？」

「むっ。実験台ではないのですのだ！ 共同歩調を取っていると欲しいのですのだ！ ……実は、有明君に、こないだ『スタングローブ』を貸したんですのだ」

「げ……『スタングローブ』って、あれでしょ？ あの人の手首そっくりのやつ」

「ですです。けど、実はあれの欠陥部分を説明するの忘れてたのだ……」

「欠陥？」

「はいですのだ。ちよつと調整を間違えちゃって、スタンガン機能を使うと電流が少し表面部分に漏電してしまうようになっちゃってるのだ」

「え、それやばくない？ 使用者が感電しちゃうんじゃない？」

「んー、そこまでの広範囲に広がったりはしないし、仮に広がるとしても、ちよつとびりつとくる程度ですのだ。まあ、塩水とかでもひつかぶってない限り、大きなダメージにはならないはずですのだー」

「なーんだ。有明君でしょ？ じゃ、びりつと程度大丈夫でしょー」

「ですよねーなのだー」

あははー、と能天気な笑いが整備室に木霊する。

平賀文。

彼女は、間違いなく優秀だ。技術力、発想力、どれをとってもSランク級の腕前だろう。

しかし。

彼女の作品には、だいたいなにかしらの欠陥が付随してくるのは、あまりにも有名な話だった。

* * *

——俺の拳は、ジャンヌの大剣、その腹にぶち当たった。

それ自体はいい。見えない中で俺の一撃を防いだのは驚嘆すべきことだが、とにかく当たりはした。こいつは俺の拳の正体は知らない。このまま『スタングロブ』が生み出す電流が、剣を伝いジャンヌ自身へと届くはずだ。

でもね。

「——ふぎやツ!」

「——あうっ!」

突如、俺の全身に痺れと痛みが走り、体がびくんと跳ね上がる。

視界の端、腕の辺りで稲妻が迸るのが見えた。

な、なんで……なんで俺にまで電流が……ツ!

ぐるん、と視界が暗転する。この感覚は、何度か経験がある。俺は今、気絶しかけてるんだ。

あわや、このまま意識喪失かと思ったその時——柔らかい何かに額が激突した感覚があった。

それをきつかけに、俺の意識が再浮上する。視界が、戻る……って、おいおい顔面から倒れかけてんじやねえか!?

慌てて片膝を立て、俺はなんとかその場に蹲る程度で済んだ。

しかし、やばい。まだ体が若干痺れてる。すぐに立ち上がれねえ。

この隙に攻撃されたら——と思った刹那、ギイン! という甲高い音を聞いた。

発生源に目を向けると、ジャンヌが大剣を横に構えた状態で立っていた。なぜか、距離は離れている。

ああ、ちくしょう。なにが起こったんだ、この短い間に。

俺は、徐々に痺れが収まってきた体を持ちあげ、ジャンヌの前に立つ。

ジャンヌは、荒く息を吐きながらこちらを睨みつけていた。

「今のは……いや、そんなはずはない。お前にそんな力があるなんて、理子から報告は受けていないッ！」

憎々しい声で、ジャンヌはなにかを否定するように叫ぶ。

それよりも……理子だと？　こいつ、理子を知ってるってことは……『イ・ウー』って連中の一員なのか？

いや、いまそんなこと考えてる暇はない。今は、戦闘中だ。意識を逸らすな。

俺は、ちらりと『スタングローブ』に目を向ける。すると、右手の甲の部分の表面が露出して、黒い金属部が見えている。まさか、さっきの一撃で特殊な素材とやらが融解したのか？

なんにせよ、俺の武器はこれしかない。壊れていたとしても、こいつで戦うしかねえんだ。とにかく、奇襲が失敗した以上、時間をかせがねえと。

「お前が何を言ってるのかはともかく、まだ勝負はついてねえぞ。悪いが、もう少しだけ付き合ってもらおうぜ」

「……答える、有明。貴様、今の雷は一体なんだ？」

「あん？　……ただの手品だよ」

素直に言うわけねえだろ。こっちの唯一の切り札だぞ。

とはいえ、さっきの謎の感電で俺の運動能力は下がっている。手の内がバレてないからといって、そう長くはもたねえだろう。

——これで最後だ。

大して時間伸ばせなくて悪い。あと任せたぞ、お前ら。

「あああああッ！」

裂帛の気合いを乗せ、俺は駆け出す。『スタングローブ』のスイッチは切っておく。また漏電したら困るからな。

「ッらあー！」

「ッ！」

まずはとび蹴り。これは右腕の小手で防がれる。

続いて、着地からの右拳。当たり前のようにかわされた。

だが、まだだ。まだ体力は残って……ッ!?

突如、足の力が抜け、俺はその場にくずおれる。おい、嘘だろこんなときにさっきの痺れが残って——ッ!?

圧倒的な、隙。剣を持った敵の眼前に、首を差し出す行為。

そんな隙を、一流の剣士であるジャンヌが逃すはずがない。

「死ね——ッ!」

ごおうツと、風切り音と共に、大剣が振り下ろされる。

そのコースは、俺の頭部。断頭の軌跡を綺麗になぞっていた。

死が、迫る。

——だが、その時。

唐突に木箱が激突した右側頭部が痛み。

俺は、反射的に右手を患部に伸ばしていた。

ガツッギイイン! と。激しい金属音と共に、俺の右手に鈍い痛み

が走った。

しかし……それだけだ。生きて、いる。

防げた……のか?

「間違いない、貴様は……ッ! ここで、確実に仕留める!」

だが、そんなものは一瞬の延命にすぎない。

見上げた先で、ジャンヌはもう一度剣を引き戻し、再び振り下ろそ

うとした——が、

「——そこまでだ、お嬢さん」

俺の背後から伸びた腕……さらに言うなら、その人差し指と中指の

二本が、がっちりと刀身を挟んでいた。

俺は、声からそれが誰の仕業か判断する。

はは……さっすが、ヒーロー。かっこいいじゃねえかよ。

安心して笑う俺の前で、ジャンヌは背後から取り出したヤタガンを

放とうとするが——無駄だ。俺は、キンジにこう言ったんだ。

お前を制圧する策を考えてくれて。

それを聞いたキンジが動いたってことは……お前もう、10割負けてるよ。

「遅いッ！」

こちらもいつのまにか接近していたアリアが、日本刀でヤタガンを跳ね上げる。

さあ……ダンスの時間は、終わりだ。

だろ？ ——白雪。

「——緋^ヒ星^{ホトギ}伽^ガ神^{ガミ}——！」

アリア同様、側面から迫っていた白雪が、ジャンヌの大剣に対し、下から掬い上げるような居合切りを放つ。

その刃には、極大の炎が纏われており——これが、白雪の超能力か——まるで、火柱のように立ち上り、ジャンヌの大剣を断ち切った。

一瞬。本当に一瞬、奇妙な静寂の中で、ジャンヌが呆然と半ばで切られた大剣を見やり。

そして。

「——逮捕よ、『魔剣』！」

終劇のベルとなる、アリアの声が響き渡った。

* * *

ジャンヌは、間違いなく一流の戦士だ。

それは、氷のステルスを操る超能力者だからではない。もっと根底のところ、家宝『聖剣デュランダル』とともに研鑽してきた剣術こそが、ジャンヌの神髄だった。

つまり、ジャンヌは一流の超能力者——国際分類でG^{グレード}7——であると共に、一流の剣士でもあった。

故に。

たとえ、閃光に目をやられようとも（もつともとつきに目はつぶったので被害は小さいが）、長年練り上げてきた剣士としての嗅覚が、有明鍊の攻撃をほぼ正確にトレースした。

ズン……ツ、と横に構えたデュランダルに、衝撃が伝わる。それはすなわち、鍊の攻撃を防いだことの証左だった。

（姑息なマネで、私を倒せると思うな……！）

己が鍛え上げた実力に、ジャンヌは笑みを浮かべた。こちらに向かってくる鍊の手に武器はなかった。そして、この威力。本当に、拳

一つで挑んできたのだろう。

ならば逆に、鍊の腕が折れているかもな、とジャンヌはほくそ笑んで、

直後、剣から伝わる電流に身体を打たれた。

「——あうっ!？」

ズバチィッ! というさえずりのような電気音を耳が捉える中、ジャンヌは薄く目を開ける。

視界はまだ完全に回復してはいなかったが、有明鍊の体を、幾筋か稲妻が駆け抜けるのが見えた。

(ま、さか——ッ)

瞬間的にある発想が閃くも、ジャンヌはそれを無視。即座にデュランドルで切りかかることで、反撃を行う。
だが。

くんっ、と鍊の体が沈み込み。

その頭部が、ジャンヌの腹部を打ち付けた。

「く、あ……ッ!」

息が、口から排出される。予想外の攻撃に、混乱が生じる。

ジャンヌが身につけているのは、防御力の中にもすばやさを重視した半甲冑だ。軽装化のため、腹回りに装甲はない。そこを、回避とともに攻撃されたのだ。

頭突き、という原始的な攻撃方法で。

しかし、それでもなお追撃しようとしたジャンヌだったが——飛来した弾丸を弾き、後退する羽目になった。

刺すようなジャンヌの視線の先、遠山キングが銃口を向けていた。

(遠山ア……!)

アタックチャンスは潰された。すでに鍊は片膝立ちで、しっかりとジャンヌを見据えていた。

即座の反撃が不可能であることを知ったジャンヌは、呼気を荒くしつつ、さきほど浮かんだ発想を思い出す。

「今のは……いや、そんなはずはない。お前にそんな力があるなんて、理子から報告は受けていないッ!」

ジャンヌの声には、明確な否定の色があった。

しかし内心では、その否定をこそ否定する声が上がっていた。すなわち。

有明錬は超能力者ではないか？ という考えである。

ありえない、とは思う。しかし、

（逆に、超能力無しであんな真似ができるのか？ 今こうして見ても、有明の腕はただの素手だ。にも拘わらず、拳から電撃を放つなど、果たして可能なのか？ ……だが、だとするとなぜ理子との戦いで使わなかった？ まさか——この短期間で目覚めたステルスでは……）

浮かんでは消える思考の連続に、ジャンヌは翻弄される。策士にとって、もつとも精神的に揺らぐ物。それは、こういった想像の埒外にある事態だった。

しかし、現実にはジャンヌの思索を待つてはくれない。

今回は、錬の言葉という形で、ジャンヌの思考は断ち切られた。

「お前が何を言ってるのかはともかく、まだ勝負はついてねえぞ。悪いが、もう少しだけ付き合ってもらおうぜ」

もう少しだけ付き合ってもらおう、と錬は言った。

それはこちらの台詞だ。ジャンヌはまだ錬を打倒できておらず、加えて錬にステルスの疑いが浮上した。ジャンヌの方こそ、このままでは終われない。

「……答えろ、有明。貴様、今の雷は一体なんだ？」

「あん？ ……ただの手法だよ」

ジャンヌの問いかけに対する錬の返答が、如何様な真実を指しているのかはわからない。

だが、答えは判らぬままに、事態は再び動き始めた。

「あああああッー」

錬が、ジャンヌめがけて突進してくる。いや、それだけでは終わらない。彼は十分な助走をつけて跳躍し、ジャンヌにとび蹴りを見舞った。

これをデュランダルの刀身で防いだジャンヌに、今度は拳打が飛んだ。しかし、これもジャンヌはなんなくいなす。

次の瞬間、突如鍊ががくりと膝を折った。

一瞬、ジャンヌの脳裏に間隙が生じる。これは、どういうことだ？
隙をさらして、こちらを罠にはめる気だろうか。

ならば、様子見？ それとも、警戒して後退か？

だが、ジャンヌが取った選択肢は違った。

「死ね——ッ！」

迷わず、デュランダルを袈裟懸けに振り下ろす。鍊の頭を輪切りにするコースへ刃を乗せる。

罠だとしても、それごと斬り捨てる——ッ！

決死の思いを乗せた斬撃は——しかし、有明鍊に防がれた。

右手の甲という、一切の防御が無いはずの部位で。

ギヤリリイッ！ と、刃が鍊の右手の甲を滑る。

感触が、おかしい。これは人体と接触した手ごたえではない。では、一体なぜ——？

想定外すぎる現象にジャンヌは目を見開き……しかし、その目こそが、捉えていた。

鍊の右手の甲。デュランダルを弾いたその部分が、黒く変色していた。

最初、ジャンヌにはその正体がわからなかった。だが、数瞬後彼女の頭脳は解答を弾き出した。

(黒い——鉄——雷のステルス——電気——磁力——……砂鉄、か！)

答えはもう、これしかなかった。

ジャンヌが氷の超能力——その応用として水分を操り服の水気を飛ばしたように。

鍊は雷の超能力——その応用として磁力を操り砂鉄を固めて即興の手甲にしたのだ。

つまり。

つまり、有明鍊は。

「間違いない、貴様は……ッ！ ここで、確実に仕留める！」

もはや、疑いの余地は消えた。

有明鍊の超能力を確信したジャンヌは、再び斬撃を放つため、デュ

ランダルを再度振りかぶる。

（こいつは、危険すぎる。このまま放置すれば、必ずイ・ウーにとって難解な敵になる！ ならば今ここで、私が討つ——ッ！）

そして。

ジャンヌは錬の命を奪うために、デュランダルを握る手へと力を込めた——

* * *

——その、1分ほど前。

錬から策を探してくれと頼まれたキンジは、戻ってきたアリアと白雪に錬の言葉を手短かに伝えた。

そして、これからの方針を纏める。

「とにかく、なんとかしてジャンヌを戦闘不能にしなければならぬ。力技で制圧するか、武器を破壊するか。このあたりに、焦点は絞られる。何か、いい案はないかい？」

ヒステリアモード特有の甘い声で、キンジは二人に訊ねる。

しかし、その問いかけに即座の方策が返ってくるとは、キンジも思っていないかった。

第一に、力技で制圧。これは現状無理だ。長時間かければその限りではないかもしれないが、その分逃走や負傷の可能性は増す。ジリ貧ではない戦法は、ただの悪手である。

第二に、武器破壊。これも無理だろう。なんせジャンヌが持つ大剣は音速で迫る銃弾を弾き、アリアと白雪の刀と幾合も打ち合ってなお刃こぼれ一つ見受けられない。元来大剣は耐久力に定評があることを考えれば、この案も現実的ではないだろう。

ではそれ以外で何か——と要求したところで、早々いい考えは出ないとキンジは想定していた。

しかし、この予想は裏切られることになる。

「私が——私が、ジャンヌの剣を斬るよ、キンちゃん」

「白雪……？」

常にはない凜とした力強さを持った、白雪の声。

キンジが視線を向けた先、白雪は覚悟を決めたような顔で、じつと

キンジを見ていた。

「星伽に禁じられた技を使えば、きっとジャンヌの剣を斬ることだってできると思う。……でも、きっとそれを見たら、キンちゃんも……アリアや錬君だって、私のことを怖くなると思う。ありえないって、きつと遠ざけちゃう。それは、怖いことだけど……でも、私はやるよ。ちゃんと、頑張るよ」

白雪の言葉の意味は、キンジやアリアにはわからない。けれど。

どこか諦めたような悲壮な白雪の表情を見た二人は、顔を見合わせ、そして断言した。

「絶対、そんなことはありえない」

はっ——と、白雪の目が見開く。目じりに、涙がにじむ。

白雪はそれを指でぬぐい、

「ありがとう」

そう言っ——しゅるり、といつ何時も髪を留めていた白いリボン
を掴み解いた。

瞬間。

何かが、明確に変わる。ピリピリと、肌を焼け付かせるようなプレッシャーが、白雪から放出される。

白雪は、腰に下げた刀の柄を握る。すると、鯉口からちろちろと、火の粉が零れ始めた。

「私もまた、アリアやジャンヌのように、脈々とある血筋を受け継いできたの。2000年もの間——『緋巫女』という、名前と共に。私は——炎のステルスを持つてる。この力で、きつとジャンヌの剣を斬って見せるよ」

強い確信を持った白雪の表情。

それを、突如閃光が横から照らす。おそらく、錬の仕業だろう。

——さあ。

これで、手札は用意した。あとは、いつ切るか、だ。

その答えを示したのは、今度はアリアだった。

「突撃のタイミングは、あたしに任せて。あたしはいつも、なんとなく

戦局が切り替わる瞬間がわかる。そのタイミングが多分、一番仕掛けるべきところだわ。……半分はカンだけど、あんたたちは信じてくれる？」

不安げに、アリアの瞳が揺れる。

けれども、キンジの答えは決まっていた。この状況は、元を正せばキンジがアリアの坎を信じきれなかったことが原因だ。なら、二度も同じ愚を犯すわけにはいかない。

「大丈夫だよ、アリア。俺が君を信じないなんてことは、これから一生無い。信じるよ」

「い、一生!? ばっ、バカ! 何恥ずかしいこと言ってるのよバカキンジ! ……ま、まあ少しは嬉しいけど」

「むー……」

照れ隠しにアリアが怒り、白雪は膨れっ面になる。少しだけ、空気が和んだ。

そして。

三者三様に、覚悟が決まる。

——時が、来る。

「今よっ! キンジ先頭、白雪は2秒後にあたしと!」

戦局を見守っているアリアが、声を上げた。

視線の先、鍊が、どういうカラクリか、素手でジャンヌの大剣を弾いていた。

この時点で、キンジは飛び出す。左手には、銃を握っている。

ジャンヌの、再びの攻撃。凶刃が、もう一度振り上げられる。

それを、止める必要がある。鍊は態勢を崩している。攻撃を防いだ右手は、衝撃に流れている。

そして鍊の背後にたどり着いたキンジは、ほんの一瞬思考する。

(ジャンヌの剣を止めるには、あの技しかない。だが、左手の銃は離せない。——だったら……ッ!)

次の瞬間。

槍のごとくまっすぐに、キンジの右手がジャンヌの大剣目がけて突き出された。

だが、そこで終わらない。なんと、振り下ろしが始まり、完全に速度に乗りかけていたジャンヌの大剣——その刀身を、人差し指と中指の二本で挟み、止めたのだ。

「——そこまでだ、お嬢さん」

『エッジ・キャッチング・ピーク
スラスト
二指真剣白羽取り・貫指』

今瞬間的にキンジが考えた片手での真剣白羽取り——その、応用版。

相手の攻撃が完成する前に止める、先行防御技だった。

（とつさに頭の中でだけ作った技のお披露目が、いきなり発展版とは……俺も、いろいろ人間やめかけてるな……）

そんなことをキンジは考えつつ、チエックメイトというように拳銃を突きつける。

しかし武偵法の存在を知っているジャンヌは、構わずに背後に隠していた最後のヤタガンを取り出すも、

「遅いッ！」

それは、キンジに続いていたアリアが、日本刀で跳ね上げて弾き飛ばす。

そして。

最後の一手が、放たれる。

「——緋緋星伽神——！」

星伽候ほとぎそうてんりゆう天流奥義・緋緋星伽神。

超能力の全てを鞘の中で凝縮、一気に解き放ちながらの居合抜き。

いかなるものをも焼き斬る、白雪の奥の手だった。

刀身に纏った炎が、掬い上げるような斬閃と共に、天井へと極大の火柱となって駆け上る。

炎が消えた後に残ったのは——半ばで両断された、ジャンヌの大剣だった。

——ガチャリ、と。金属質な音が、一瞬の静寂の後、鳴った。

アリアが、ジャンヌの腕に手錠を掛けた音だった。

「——逮捕よ、『魔剣』！」

それは、明確な勝利宣言だった。

——かくして。

世間を騒がせ、白雪の誘拐を目論んだ連続超偵誘拐犯『魔剣』——
ジャンヌ・ダルク30世は逮捕され。

武偵としての栄光の座をかけて行われるアドシアードの裏側で、
ひっそりと事件は終着を見たのだった。

2.4. その水平線の先へ

空港というのは、いつだって人で溢れている。無論、シーズンや時間帯などによってその人数は増減するものだが、それにしても全くの無人となることはない。今や、国を跨ぐという行為の敷居はずいぶんと下がった。国内の移動のみならず、海外へと渡航する人々も増え、空港の人口はその分密になっていった。

それはここ、ロンドン・ヒースロー空港でも同様で、むしろ最も顕著に表れているといってもいいだろう。規模にしてイギリス最大、国際線利用者数では世界一の空港である。おのずと、人の流入は多く見られた。

今も、空港内には多くの人々が行きかっている。ごった返す、というほどではないが、しかしやはり十分な利用客で賑わっていた。

そして、いつだってそういった環境は、人ごみが嫌いな人間には歓迎されないものである。

(しかたがないことだし、自国の施設が賑わうのは喜ぶべきことなのだろうけど、こういう人の多さはどうにも好きになれないな……)

ヒースロー空港・ターミナル3。

ヒースロー空港に5つあるターミナルのうちの一つ、その構内のチエックインエリアに、一人の小柄な人影があった。

160cmを下回っている体躯は、イギリス人の平均的身長から見れば、若干小さいといえる。纏った灰色のブレザーのボタンに刻まれた校章から、この人物が武偵高校の生徒だとわかる。イギリスの高校生としては、その童顔と相まって少し幼く見えた。

足元には、黒いキャリーケースが置かれている。これから旅行の予定でもあるのかもしれない。

と、首元で切りそろえられた茶色の短髪が、くいつと上げられた顔の動きに合わせて揺れた。

まるで黒曜石のように青みがかった黒瞳が見据えるのは、構内天井に設えた電光掲示板だ。

その中でも、視線が固定されているのは、とある一行。

イギリス・日本間を結ぶ便名と、発着時刻の表示だった。

「ふむ……まだ時間はある、か」

ちらりと、左腕につけた腕時計に目をやる。簡素なデザインの中にもところどころ洗練された意匠が見受けられ、落ち着いた高級感を醸している。少なくともこの人物は、身だしなみに金をかけられる程度には財力を持っていることがうかがえた。

現在時刻から飛行機の出発までは幾分余裕があると知ると、くるりと踵を返し、こつこつと近くにあつた柱に向かって歩きはじめた。やがてたどり着くと、そのまま背を柱に預けて、ほうと一つ息を吐いた。(日本……か。まさか、こんなに早く行くことになるとは、思わなかったな。『組織』の仕事もかなり強引に片づけてしまったし……やっばり、止めておくべきだったかな……?)

形の整った眉がひそめられ、本人にしかわからない後悔に襲われる。

しかし、即座にぶんぶんと首を振って、迷いを振り切るように心中で否定する。

(いやいや！ ボクは決めたんだ、彼らの許にいくと。今更、引き返したりしないぞ。ボクのと、トモダチ……を、あんなことに巻き込ませたままにしておけない)

キツ、と眦が吊り上る。

それはまるで、ここにはいない誰かを強く睨みつけているようだった。

(待っていてくれ、二人とも。必ずボクが、君たちを助け出す。アリアから、引き離してみせる)

脳裏に浮かぶのは、ピンク色のツインテールをした、一人の少女の姿。

自分の、『婚約者』の姿だ。

しかし、それは数秒のことだった。次いで浮かんできたのは、二人の日本人だ。

東京にいるはずのその二人は、おそらくは本当の意味で友人と呼べるたった二人だけの存在だった。共に、同じ年の少年。最初にできた

友達が男とはなんとも皮肉な話だったが、しかしそんなことは関係がなかった。友達、というその関係性こそが、なによりも大切なものだった。

険しかった表情が、雪解けのように温和なものへと変わっていく。知らず、口元には笑みが浮かんでいた。そして。

ふと視線を向けた先、一面のガラスの向こうに見えたイギリスの空を眺めながら、ぽつりと呟いた。

「元気にしてるかな……キンジ、レン」

* * *

「おとなしくしなさいっ、『魔剣』！」デュランダル

「しているだろう。あと、その名で呼ぶなど言っただはずだ、ホームズ4世」

「じゃあ、あんたこそその呼び方やめなさいよ！」

両手だけでは飽き足らず両足にまで手錠（足錠？）をかけようとしているアリアと、さすがに足は嫌なのかひよいひよいと手錠をかわし続ける『魔剣』——いや、ジャンヌの姿を見ながら、俺は大きく息を吐いた。

ああ……やっと、終わった。

護衛任務に始まり、白雪の誘拐に続き、『魔剣』の逮捕へと連なった一連の事件が今、ようやく終わりを告げた。

俺はその事実を再認識しつつ、一人胸をなでおろす。

なんとか今回も……生きて、終わりを迎えることができたな。

毎回毎回、どうして俺ってやつは、こうも死にそうな目にあってるんだらうか。前回の『武偵殺し』事件では、UZI付きセグウェイに追い回されたり、撃たれて爆走中のバスから転落したり、同級生に飛行機の中で殺されそうになったり、その飛行機から落っこちたりした。で、今回の事件では水死しかけたり、首跳ね飛ばされそうになったり……いやまあ、武偵である以上危険とは隣り合わせとはいえ、こうも死にかけてると、自分がどこまで運が悪いのかよくわかるな、うん。

「運が悪いと言えば……こいつもか」

俺は、ちらりと両手にはめた『スタンググローブ』に目を向ける。

まさか、漏電なんて不具合があったとはなあ。いや、マジで危なかった。あれで完全に気を失ってたら、俺あそこで終わってただろうな。今度あややにはきつく言っておこう。

とりあえず、こいつはもう仕舞っておくか。あっても邪魔なだけだし。

『スタンググローブ』を手から外し、上着の内側に仕舞いながら、俺はキンジと白雪の様子を確認する。

「キンちゃん……私の炎、怖くなかった？」

「怖いもんか。とつても強くて、綺麗な炎だったよ。あの日の花火より、ずつとね」

「キンちゃん……う、うあ……」

うわーん、と泣きじゃくる白雪を、キンジは優しく慰めていた。

一体どういう状況かよくわかんねえが……まあ、あつちは大丈夫かな。

——さて。

どうも、すっかり一件落着の雰囲気になっちゃいるが……もう一つ、やるべきことがある。

さつきまでの、ジャンヌとの戦闘。その途中で出来た、新しい用事が。

その用事を済ませるためにも、俺はまず、みんなの意識を集めるように少し大きな声を出した。

「あー……悪い、ちよつといいか？」

俺の声に、みんなの視線が集まる。

その中で、真っ先に口を開いたのはアリアだった。

「なによ、錬。あたし、ジャンヌに手錠かけないといけないんだけど？」

「必要ない。敗北したのは私だ。それを受け入れるくらいの矜持は持っている。だが、足はやめろ。格好悪い」

「犯罪者が、なに恰好がどうか言ってるのよ!？」

おい……なんで、またすぐ漫才に戻ってんだお前らは。

ピキリと額に青筋を浮かべつつも、俺は怒りを抑え本題に入る。

「いいから、とりあえず聞けって。……悪いんだけどな、アリア、キンジ、白雪。お前ら、先に上に戻ってくれねえか？」

と、俺が言った瞬間、あからさまに困惑したような顔で、キンジ達は俺を見た。

ま、そりやそうだ。俺だって、どこの世界に確保した犯罪者を置いてその場を去る武偵がいるんだって思う。

けど、これは必要なことなんだ。俺にとつては。

ジャンヌを上まで連行したならば、その先で教師達に引き渡す流れになるだろう。だが、それだとそこでジャンヌと会話するチャンスが失われることになる。下手すれば、もう二度と。

そうなる前に俺は一度、ジャンヌと話さなければならぬ。そして、聞き出さなきゃならねえんだ。

——ある女の居場所を。

「どういうことだ、鍊。俺たちに、ジャンヌを見逃せって言ってるのか？」

「そうじゃねえよ。先に、って言ったろ。ジャンヌは俺が後から上に連れてく。だから、お前ら上で待っててくれ」

「どうして？　悪いけど、あたしにとつてジャンヌは重要な犯人なの。あんたのことを信用してないわけじゃないし、はめたのは対超能力者用の手錠だから、大丈夫だとは思うけど……それでも、万全を期すなら全員で護送した方がいいわ」

「そ、そうだよ鍊君。ジャンヌは、私たち4人がかりでやつと逮捕できた相手なんだよ？　万が一のことがあったら……」

当たり前だが、武偵組はそろって難色を示している。話題に上っているジャンヌはと言えば、こちらも訝しげに俺を見ていた。

俺のわがままに付き合わせるの、悪いとは思う。だが、ここは退けねえんだ。

だから、俺は、

「——頼む。少しだけでいいから、俺を信じてくれ」

そう言つて、頭を下げた。

結局のところ、俺はこいつらに命令できる立場なんかじゃない。どいつもこいつも、俺より優れた武偵だ。そんな奴らを従わせることは、俺には出来ない。

だから、頭を下げる。頼み込む。友達というその関係だけを担保に、俺は自分の意見を通そうとする。

それはきつと、正しい行いではないだろう。こいつらの優しさに付け込んで我を通そうとする、間違つた行動だ。

けれど、それでもこうするだけの理由が、俺にはあつた。

ああ……けど、怖えなあ。アリアあたりは、またキレそうだ。せつかく戦闘が終わつたつてのに、今度は双剣^カ双銃^ドとのバトルですかね？ などと、俺は冷や汗かきつつそのままでいたんだが……、

「……………はあゝゝゝ。いいわ、わかつたわよ。そこまで言うなら、ジャンヌのことはあんたに任せてあげる」

「え……………いいのか？」

予想外の返事に、俺は顔を上げつつ再度問いかける。

そんな俺に、アリアはぷいっと顔を逸らしながら、

「なによう？ やっぱりあたしたちが連れてつた方がよかつた？」

「あ、いや、そういうわけじゃねえんだが……その、もつと反対されるかと思つたから」

「言つたでしょ？ あんたのこと信用してないわけじゃないって。ただ、あたしは武偵としてさつきはああ言つたけど……パートナーのあんたにそこまでされたら、信用しないわけにもいかないでしょ。……ま、まあ、その、あんたもあたしのこと信じてくれたんだし」

かあ……っ、と照れくさそうに頬を染めながら、アリアはぶつきら棒にそう言つた。

ああ……やっぱこいつ、根はいいやつなんだよなあ。

俺はアリアの素直ではない、しかし優しい言葉に、口元を緩めた。

それからキンジたちの方を見ると、彼らは仕方ないともいうように苦笑していた。

「まあ、いいんじゃないか？ どうもこのお嬢さんは、自分の戦いに誇

りを持つてるようだからな。逃げ出すような無様はしないだろ」

「私は、錬君にはお世話になった側の人間だし……キンちゃんと言うなら、きつと大丈夫、かな？」

「お前ら……さんきゅな」

俺はもう一度頭を下げて、感謝を伝える。

そしてアリアたちは、俺とジャンヌを残し、地上へと上がっていった。ちなみに、ジャンヌから遠隔操作のリモコンを受け取り、エレベーターは復活させている。おそらく、エレベーターでの最上階である地下2階で待っていてくれるのだろう。

……さて、と。

俺は、手錠をはめられ地面に座り込んでいるジャンヌに向き直った。

「さて、ジャンヌ・ダルク30世。悪いが、ちよつとだけ付き合ってもらうぜ」

「構わない。Strong is all. 4人がかりとはいえ、お前は私に勝利した強者だ。ならば、強者の言に従うことこそ、敗者の矜持。それが、我々『イ・ウー』のルールだ」

ピクリ、と。

ジャンヌの台詞の中に出てきたある単語に、俺の眉が動いた。

やっぱりな。ジャンヌの口からあいつの名前が出てきた時から、そうじゃねえかとは思ったが……こいつ、『イ・ウー』とかいう連中のメンバーか。

——それでいい。

ジャンヌの所属が明らかになったことで、俺がこいつを残した意味も確定した。

「そうかい、じゃあ答えてもらおうか、ジャンヌ。お前——峰理子を、知ってるか？」

——峰理子。

俺のクラスメートであり、そして同時に犯罪者でもあった、俺の友達の名だ。

約1か月前に起きた、ハイジャック事件——それに連なる、『武偵殺

し』事件。その、犯人でもある。

その理子の名を、こいつは呼んだ。名前の響きだけなら、リコなんてよくある名だが、そこに『イ・ウー』という組織が絡んでくるなら話は別だ。

なぜなら理子が所属している犯罪組織こそが、その『イ・ウー』なのだから。

ジャンヌは、つまらなそうに鼻を鳴らして、

「愚問だぞ有明。お前も理子が『イ・ウー』に所属していることは知っているだろう？ 私と理子は同期だ。無論、知っているとも」

「……そうか。なら——」

——さあ、ここからだ。

ここからが、俺がジャンヌと話す時間を作った、その核心だ。

俺は、しつかりとジャンヌの瞳を見据え——

「——俺を、お前らの本拠地に連れていけ」

そう、言つてのけた。

* * *

「……なん、だと？」

と、俺の言葉を聞いたジャンヌは、眉をひそめつつ問い返した。

しかし、それは俺の言葉が聞こえなかったからじゃないだろう。むしろ、聞こえたからこそそう言つたはずだ。

「……もう一度、言ってみろ」

「俺を、お前ら『イ・ウー』とやらのアジトに連れてけつつあったんだよ。いや、もつと正確に言えば、理子が居る場所に、だ。あいつは最後に見た時、ポストーク号とかいう潜水艦に入つていった。そして、それを本拠地だとも言った。てことは……いるんだろ？ 理子は、あの潜水艦に」

「……理子の居場所を知つてどうする？ 『武偵殺し』の件の復讐でもする気か？」

もともと鋭いジャンヌの目つきが陰しさを増す。俺が、こいつの仲間を害そうとしているとでも思つてるんだらうな。

だが、違う。俺の目的は、そこじゃねえ。

だから俺は、素直に否定し——そして、本当の目的を口にした。

「——いいや、助けにいくんだ」

「……………は？」

ほかん、と。

その瞬間、ジャンヌはそのままが一番呆けた顔つきになった。

ああ、その反応は全く持つて正しい。俺自身、自分で自分が言った言葉がどれだけアホなことかはわかっているつもりだ。

でも、駄目だ。俺は、こうしなければならぬ。

なぜなら、俺は聞いてしまったからだ。あの、ハイジャック事件の時。理子に撃たれて気絶するその間際、「助けて」という理子の言葉を。

聞き間違いかもしれない。朦朧とした意識が生み出した幻聴かもしれない。

——それでも。「助けて」と言われたら、俺はそれを無視できない。昔、約束したんだ。『助けを求めた子を助けてあげて』とそう言われ、俺は『任せろ』とそう言った。

だから俺は、助けに行くんだ。理子を苦しめている、何かから。

……………ずっと、考えていた。理子が俺の周りから消えたあの嵐の日から、頭の片隅で、あいつを助ける機会が来ることを。

その機会が、今だ。これを、逃すわけにはいかねえ。

「……………お前は、知っているのか？ 理子を取り巻く事情を」

「知らねえよ、そんなもん」

「では、なぜ助けに行くなどと言うのだ。理子は、犯罪者だぞ」

「それも知らねえな。あいつは、犯罪者の前に俺の友達だ。友達に、助けてと言われた。だから、助けるんだ」

俺は、未だ険の残るジャンヌに、まっすぐに言い放つ。

ジャンヌはそれでもしばらく俺を睨んでいたんだが……………やがて、大きくため息をついた。

「……………はあ。どうにも、本気らしい。理子が言っていた意味がわかったよ。『有明鍊は、誰よりも仲間に優しい』……………か。お前はまだ、理子を仲間と思っているのだな」

「当たり前前だろ。あいつは、友達だ。犯罪者でも、それは変わらねえよ」

「そうか……お前は、友という理由だけで動けるのだな。……少し、理子が羨ましいな。私にも、そういう友がいればと、少し考えてしまう」
わずかに目を伏せ、困ったようにジャンヌは微笑した。

こいつ……、

「ジャンヌ、お前ひよつとして……ぼっちなのか？」

「ぼっち言うなっ!? 私にだって友くらい……いい、いやそういえばどうなのだろう？ 私は理子や桃子を友と思っていたが、あいつらからそう言われたことはあっただろうか。あいつらの中で私はただの仕事仲間なんじゃあ……？ あれ、もしかして、私友達いない？」

なにやら途中からぶつぶつ言いだしたジャンヌ。なにこいつ怖い。

やばい、なにやら地雷を踏みぬいた感じがする。

「あー……悪い。なんか、ゴメン」

「そこで謝るな！ 余計みじめになるだろう！ ……というか、いいのだから別に。私たちダルクの一族は影の一族。友など、そもそも作りようがない。なにせ、世間とのかかわりを断っていたのだからな」

ふっ、とジャンヌの表情に影が差す。

俺を殺しかけたこいつに同情するわけじゃねえが……いろいろあるんだろうな、こいつにも。

「だからこそ、理子に嫉妬してしまうのだ。自分のために命を懸けてくれるような友……そんな存在が欲しくないと言えば、嘘になる」

「……………」

遠い目をして語るジャンヌ。

そんな、寂しげな彼女の様子が、まるでいつかのアリアのように見えて……気づけば、つい口走っていた。

「あー……その、まあなんだ。お前が俺の友達だったら……そんで、お前が助けてくれて言ったなら、そんな時は多分俺はお前に手を貸すと思う。だから……今度会ったら、そんな時は友達になろうぜ」

がりがりと頭をかきながら、俺はジャンヌにそう言った。

……なに言ってたんだかなあ、俺。アリアの姿がダブったからか、つ

い悲しませたくなくて、言っちゃまった。俺、最近あいつにどんどん甘くなってる気がする。

まあ、どうせこれが終わったらもうジャンヌに会うこともねえだろう。だったら、もしこいつが出所したとき俺に復讐に来ないように、機嫌を取るのはい悪いことじゃねえはずだ。うん、そういうことだ、きつと。

しかし、そんな俺の思惑など知らないジャンヌにとってこの言葉は予想外だったようで、

「はっ……くっ、くっ。あはははははっ！ 命を狙った私に対して、友誼を結ぼうと言うのか、お前は！ ふっ、くっ……面白いやつだな、お前はっ」

なんか、爆笑されました。

こいつ……！ さっきまでの落ち込み様はなんだったんだ……！

額に青筋を立てる俺に、ジャンヌは目じりに浮かんだ涙をぬぐいながら（どんだけ笑ってたんだ）、

「なるほど。もう一つ、理子の言葉がわかったよ。『味方に甘く、敵に厳しい』。敗北した私はすでに、お前の中の敵と言うカテゴリーから外れているのだな」

いや、敵だよ？ 普通に殺されかけたのは怒ってるよ？

しかしまあ、それをぶちまけて機嫌を損ねるのはよろしくない。ここはぐっと堪えておこう。

と、ジャンヌは戦闘中にはついぞ見ることもなかった笑顔を向けながら、

「敗者はただ勝者に従うのみ。いいだろう、私が学園島に侵入する際に使った小型潜水艇の隠し場所をお前に教えよう。中に入れば、一際目立つ赤いボタンがあるはずだ。それを押せば、自動的に本拠地であるボストーク号まで自動操縦で潜航してくれる」

「なるほど、そうやってお前ここまで来たのか……っ！ か、随分簡単だな」

『「イ・ウー」に、機械オンチの古臭い人物がいてな。そいつのために、技術屋が全自動潜航機構を備え付けたのだ。随分苦労したそうだ

がな」

「すげえな、そりや……で、肝心の場所は？」

「お前らが、『看板裏』と呼ぶ場所があるだろう？ その岸に潜水させてある。——これを持って行け」

そう言つてジャンヌは手錠付きの手で鎧の隙間から何かを取り出し、俺に向かつて放り投げた。

キャッチしてみると……なんだこりや？ 小さな箱の真ん中に、ボタンが一つだけついた……リモコンか？

「そのボタンを押せば、浮上するようになってる。便利だろう」

「お前が言つた機械オンチってどんなやつだよ……簡略化しすぎだろ」

しかし、これでようやく聞きたいことは聞けた。とりあえず、こいつの話の真偽を確かめに、その場所まで行つてみるか。

今後の予定を立てる俺に、ジャンヌが固い声で忠告する。

「有明。イ・ウーは、真の意味で人外魔境だ。立場上、これ以上イ・ウーの不利になることは言えんが、おそらくお前が本気で理子を助けるつもりなら、ある怪物とぶつかることになるだろう」

「ある怪物？」

「そうだ。それこそが、理子を縛る元凶であると言つていい。理子を解放したければ、そいつを倒さなければならぬ。……だが、奴は強い。桁外れにな。私相手に4人がかりでようやく勝利できるようならば、勝ち目はない」

ジャンヌの言葉に、俺は啞然とする。

こいつ一人相手でも、あんなだけ死にかけたつてのに、そのジャンヌが桁外れとまで呼ぶ相手。一体、どんなやつなんだ……。

しかし、戦々恐々とする俺に、ジャンヌは言つた。

「勝てない……はずなのだが、な」

「え……？」

「ふふっ……なぜか、お前ならばどこかで思っている私もいるのだ。

お前ならば、理子をやつから救い出せるのではないか、とな」

「ジャンヌ……」

「せいぜい、武運を祈ろう。私は、イ・ウーのメンバーだが、理子を友と思っており……お前とも、友になるようだから。——生き残れ、有明錬。私の友を名乗るなら、それくらいしてみせろ」
と、ジャンヌは挑戦的な瞳で俺を見つめた。

……せ、戦闘が必須なのか。俺は、助けるとは言っても、攫っていく方向で考えてたんだが。

まあ、とにかくだ。

「——ああ。死ぬつもりは一切ねえよ」

そう、死ぬつもりはない。死にたくねえからな。単純だろ？

だから、俺は必ず生きて帰る。そんでまた、みんなと笑ってやる。そんな決意を胸に秘め……俺はその場を静かに去るのだった——

「……………つて、待て待て有明私を置いてどこへ行く?!」

「……………あ、忘れてた」

* * *

夾竹桃^{きょうちくとう}、という少女がいる。

喪服のように黒いセーラー服を身にまとい、同じく漆黒のストレートヘアを靡かせる。おかつぱにされた前髪の隙間から、退廃的な光を放つ黒瞳が覗く。艶のある黒髪を飾る大きな花のリボンと、小洒落た左手の手袋が可愛らしくもあつたが、全体的に暗い雰囲気備えた少女。

それが、夾竹桃という少女であり。

元『イ・ウー』メンバー『魔宮の蠍』と呼ばれる犯罪者でもあつた。彼女は今からおよそ一か月前、峰理子、ジャンヌ・ダルク両名と共に、『GGGG』^{トリプルジー}という作戦に参加していた。その目的は、各々がターゲットにしている少女の誘拐。夾竹桃でいえば、東京武偵高1年・間宮あかりの捕縛がその目的だった。

しかし、夾竹桃はあかりを筆頭にした勢力に敗北を喫し、以後東京武偵高の監視下に置かれている。

それは。

無論、今でも変わっていない。

「はあ……退屈だわ」

学園島、第7ブロック。現在開催中のアドシアードの主要競技会場からは離れ、人通りの少ないこの地区を、夾竹桃は一人歩いていた。しかしそれは、学園島からの解放を意味しているわけではない。こうしている今も、おそらくどこかしらから監視はされているだろう。すでに司法取引に応じ一応の釈放はされているが、『イ・ウー』のメンバーを野放しにする道理は無かった。

当然島から出ることも許されていない。これ以上の待遇を目指すならば、たとえば東京武偵高の生徒となり学園の貢献に従事するなどという手もあるが……少なくとも、今そうする気は夾竹桃にはなかった。現状で大きな問題はないし、なにより司法取引で漫画を描くことは許されているのだ。であれば、なんの問題もない。

しかし人間、一つのことだけでは満足できないようにできているもので……夾竹桃もまた、自らが持つ『もう一つの趣味』について手を出してしまっていた。

「どうしようかしら……これ」

そういつて夾竹桃がセーラー服のポケットから取り出したのは、1発の銃弾だ。一般的な9mm弾に見えるが……しかし、弾頭が紫色をしていた。

この銃弾の名は、『有毒弾』。

人体への着弾と同時に弾体が破裂し、内部に収められた有毒物質を体内にまき散らすという、恐るべき弾丸だ。実際、武偵の間で出回っている弾丸ではあるが、その使用には武偵法により大きく制限がかかっている。

ではなぜそんなものを夾竹桃が持っているか？ それは、彼女が持つ性質が大きく関わっている。

——『毒使い』。数多の毒を操り、自身の体内にも83種の毒を持つという、生粋の毒殺者^{ポイズンキラー}。それが、夾竹桃のスタイルだ。

そんな彼女が、ある日学園島を今日のようにぶらついていると、一人の小柄な——訂正、小柄すぎる女子生徒と遭遇した。

平賀文と名乗ったその少女は、持ち前の人懐っこさで、見知らぬ制

服を着た夾竹桃にどんどん話しかけていった。また、男よりも断然（強調）女の子の方が好きだった夾竹桃、加えて庇護欲を誘う文の容姿に、彼女はぺらぺらと自分のことを話していた。もちろん、イ・ウーのメンバーというところは除いてだが、毒使いであることは明かしていた。

そしてつい最近、同じ毒使い（と思っていた）あかりの中距離打撃破壊技により敗北したことも。それに付随して、自分の中距離における攻撃手段が、自慢の毒ではなく無粋な機械兵器のみだということもまた、夾竹桃は語った。

すべてを聞き終えた文は、「ふむふむふーむ」と何度か頷き、そしてこう言った。

「機械兵器の使用にそんなに抵抗がないなら、いつそのこと毒と融合させてみたらどうですか？」

「……？ どういうことかしら？」

『『有毒弾』って知ってますの？』

「……なるほど。聞いたことがあるわ。私自身に銃弾を作る技術がなかったから諦めたけど」

「ふっふーん、そこはこの天才あややに任せるのだ！ 弾体はあややが作るから、毒はとーちゃんが提供してほしいのだー」

「と、とーちゃん？ また変なところをあだ名にしたわね……まあ、いわ。けれどいいのかしら？ そんな犯罪まがいの銃弾を作って。簡単に言ってるけど、毒を使うのよ？」

「だから、相手の動きを止めるだけの毒なら協力するのだ。絶対に殺さず、でも必ず行動不能にする。そんな毒は、作れないのですの？」

「……言うじゃない、文。これは毒使いとしての私に対する挑戦と受け取るわよ」

かくして、夾竹桃の挑戦が始まった。

絶対に殺さず、かならず行動不能にする、そんな絶対的な王のごとき毒。夾竹桃は、そこにさらなる完璧性を求めた。人間のみならず、彼女が知る限りのあらゆる生物を、行動不能に陥らせる究極の麻痺毒を作り上げた。

そして平賀文と共同で生み出した彼女たちだけの『有毒弾』——その名を『毒の王弾』^{バズリスケ}は完成した。

……完成したのは、よかったのだが。

「……そもそも私、銃の携帯は許可されてなかったわ」

と、いうわけである。

作っている時はテンション上がって見落としていたその事実に行き当たった時、夾竹桃はこの弾丸をどう扱うべきか悩んだ。このまま自分が持っていて、宝の持ち腐れである。使われない毒など、全くもって意味がない。毒は、毒してこそ最も輝くのだ。

では、使える者——この場で言えば、武偵に譲るべきか？ 別にすでにイ・ウーから離れた夾竹桃的にはそれでもよかったのだが、では誰に？ 自分が知る武偵は少ない。文は非戦闘員だし、あかりたちはこんな弾丸は好まないだろう。まさか、教師が使うわけがあるまいし……いや、自分を尋問した綴梅子とかいう教師なら嬉々として使いうだが。

『毒の王弾』を再度ポケットにしまいつつ、そんなことをつらつらと考えていた時だった。

——ドン、と。丁度曲がり角で、夾竹桃は誰かにぶつかった。

考え事をしていたことで、思わず尻もちをつく夾竹桃。その際に無言だったのは彼女らしかかった。

そんな夾竹桃に、前方から慌てたような声がかかった。

「わ、悪い！ ちよつと考え事してて……大丈夫か？」

夾竹桃が顔を上げると、そこには一人の男子生徒がいた。

やたらと鋭い目つきをした、しかし夾竹桃視点で普通の少年。彼は、こちらに向けて手を差し伸べていたが、夾竹桃はそれを無視して自分で立ち上がる。

「別に、大したことはないわ。気にしなくていいから、早く行きなさい」

「あー……いやでも、一応俺が悪かったんだし、なんか詫びを——」

「早く行きなさい、と言ったのよ」

ぴしゃり、と言い放つ夾竹桃に、少年はたじろぐ。

その態度がまた、夾竹桃をいらつかせる。そもそも、彼女は男が嫌いなのだ。だからと言って同性愛者というわけでもないが（というか恋愛経験そのものがないが）、男は必要ないと思っている。少女たちの咲き乱れる友情や愛情に、男は邪魔なのだ。

そんなわけで、普段よりさらに一段階冷たい声の夾竹桃に気圧されたのか、少年は躊躇いがちなながらも、

「そ、そうか……じゃあ、悪いけど、俺も用事あるから行くな。ほんと、悪かった！」

つまらなそうに視線をそらす夾竹桃の視界の端で、少年は踵を返して去って行く。

—— 本来なら。

ここで、話は終わるはずだった。

しかし、そうはならなかった。視界の端……そのさらに端、少年のポケットから飛び出している物を見た瞬間、夾竹桃の両目は大きく見開かれた。

そして彼女は、慌てたように少年を呼び止めた。

「ま、待ちなさいっ！」

「あん？」

言葉通り、少年は立ち止まり、こちらに振り返ってきた。しかし、夾竹桃の目に入っているのは、少年の腰元にある物だけだ。

夾竹桃はそれをガン見しながら、震える指で指し示した。

そして、

「それはひよつとして……『聖乙女伝説』の聖ひじりの、それもプレミアムキーホルダーかしら……？」

と、唇をわななかせながら尋ねた。

問われた少年は、一瞬「え……」と放心していたが、すぐに気を取り直し、慌てて夾竹桃に駆け寄ってきた。

「お前……お前、知ってるのか!? あの作品!？」

「ええ……ええ、もちろんよ。知っているわ」

仲間内では男嫌いで通っている夾竹桃が、爛々とした目で少年を見返し、あまつさえ会話に興じている。これだけでもう『イ・ウ』メ

ンバーが見れば驚天動地だったろうが、そこには理由があった。

——『聖乙女伝説』。

今からおよそ20年以上前に連載されていた、漫画の名だ。当時は、アニメ化までされたヒット作品である。

そして同時に、夾竹桃が生まれて初めて読んだ漫画でもあった。今でこそ夾竹桃は立派なオタクと化していたが、当時興味が全くなかったころ、理子が戯れで、大安売りで手に入れたこの本を夾竹桃に進呈したという過去があった（ちなみに理子は一切楽しめなかったらしい）。

そこで夾竹桃は覚醒。少女たちの戦い、友情、それらを時に熱く、時に切なく、そして時に甘く描いたこの作品を契機として、夾竹桃はこの道に走り幅跳び並みの勢いで踏み込んだ。

そういう、夾竹桃にとって何より思い入れのある作品なのだ。憎らしいことに、連載当時、そして10年ほど前の再燃のときも、少女たちよりもサイドストーリー的な男たちの物語が評価されていたのは腹立たしいが、それを抜きにしても夾竹桃一押し逸品である。

10年ほど前の再フィーバー時に、10周年記念としてプレミアムキーホルダーが作製されたのは知っていたが、まさかこの目で見れる日が来ようとは思いもしなかった。

だが、現実としてそれはある。目の前に、主人公『聖』のプレミアムキーホルダーが、存在している。

夾竹桃は、そろそろとそのキーホルダーに手を伸ばし、

「その……よかつたら、そのキーホルダーよく見せてもらってもいいかしら？」

「ん？ ああ、いいぜ。ほら」

そういつて少年はポケットからキーケースを取り出した。例のキーホルダーはそこに付いていたらしい。

キーホルダーを受け取った夾竹桃は、それをじっと観察する。

それは、クオリティだけを見るなら、やはり年代相当の精度の出来だったが、しかし間違いないそれは聖の姿を映し取っていた。

反射的に、目の前の少年を毒しても奪いたくなるが……しかし、

それはしない。同じ作品を愛する者として、そんな無粋な真似は到底できなかった。

一通りキーホルダーを鑑賞し終えた夾竹桃は、それを少年に返しなから、

「ありがとう、いいものを見せてもらったわ。これを、どこで？」

「ああ、俺の後輩がくれたんだ。この作品のこともそいつに教えてもらったんだが、すっかりハマっちゃってさ。それを伝えたら、その後輩が持ってたこのキーホルダーをくれたんだよ」

「そう……いい後輩を持ったわね。——ところで、少し時間はあるかしら？ この作品のファンに会うのは初めてなの。よかったら、この作品の魅力について語り合いたいんだけど」

「え？ んー……そう、だな。あれの確認はそんなに急いでるわけじゃねえし……少しなら、いいぞ」

こちらの提案に乗ってきた少年に、夾竹桃は満足げに頷く。

実のところ夾竹桃がこうして自発的に誰かと会話しようとするのは珍しく、なおかつ相手は男だ。普段ならあり得ないことだが、もはや人生を変えたとも呼べる作品の、初めて出会う同好の士に、夾竹桃のテンションは見た目ではわからないが相当に上がっていた。

立ち話もなんだから、と近くのベンチに並んで座り、夾竹桃は口火を切った。

「さて、さっそくなのだけれど……あなたは、『聖乙女伝説』のどこが好みなのかしら？」

「もちろん、バトルシーンだ……と言いたいところだが、俺はそうじゃねえと思ってる。キャラ同士の交流から生まれる心の機微こそが、あの作品の神髄だ」

——こいつ、解っている。

夾竹桃は、一瞬でそう判断した。

確かにバトルシーンこそが、一番派手でわかりやすい魅力だろう。実際素晴らしい出来だし、夾竹桃はそこも気に入っている。しかしより重要なのは、そうした戦いを通して、あるいは日常的な場面で育まれていく少女たちの友情や愛情の方なのだ。男のファンは、男臭くも

バトルにしか目を向けない者が多いが……どうやらこの少年はそんな表面的な目線では見ていないようだ。

「非常に同感よ。命をかけた戦いの刹那輝く、絆、愛。それこそが、あの作品を無二の大作へと昇華させているわ」

「だな。特に、76話のあのシーン知ってるか？ 敵の攻撃から身を挺して仲間を庇った後の、あの会話。泣けるどころの騒ぎじゃねえよ……」

「ああ……あそこね……」

二人、急にしんみりとした声で語り合う。

原作76話「友との別れ」。この話において、聖の親友である玲子^{れいこ}は、敵の凶刃から聖を庇い、召されることになる。その際に交わした別れのシーンは、いつ見ても爽竹桃の涙を誘った。

今も若干瞳を湿らせながら、爽竹桃は思う。

ああ……やはり、いい。自分が好きなものを語り合えるというのは。

理子は残念ながら『聖乙女伝説』に興味を持たなかったようだが、今日こうして同士に会えた。人生は一期一会とはいうが、こういう出会いなら大歓迎である。

さて、向こうがお気に入りシーンを出したのだ。次はこちらの番だ——と意気込む爽竹桃だったが、そこに一本の電話が入る。

相手は、尋問科^{ダギョウラ}担当教師・綴梅子^{ズヅメ}だった。内容は、「お前のお仲間が捕まったから、尋問科専門棟まで来い」というものだ。

(ジャンヌ……あの子、捕まったの。これで『GGG』作戦は総崩れ、か)

内心でそんなことを考えつつ、爽竹桃はひとつため息をついて、少年に向き直る。

「ごめんなさい。こちらから呼び止めておいて悪いのだけど……ちよっと急ぎの用事ができてしまったわ。名残惜しいけど、お別れの時間よ」

「そっか……いや、こっちこそさんきゅな。少しだったけど、話せてよかったぜ。俺の周りでファンのやつ、さつき言った後輩しかいねえか

らさ」

「また会えたら、その時はゆっくり話し合いましょう。同じ（少女たちの）友情と愛情を好む者として」

そう言って、夾竹桃は立ち上がり、少年に右手を差し出す。左の毒手ではなく、まっさらな右手を。

さきほどとは逆の構図。しかし今度は、少年が同じく立ち上がって手を握り返したことで、握手の形と成った。

そしてその手が離れ、夾竹桃がこの場を離れようとしたところで――

「あ、待ってくれ。――ほら、これやるよ」

と、少年がキーケースからキーホルダーを取り外し、夾竹桃に差し出した。

「え……そんな、だって、これはあなたが後輩からもらったものでしょ？ しかも、それがどれだけ価値があると……」

「わかってるよ、んなこと。けどな、俺だってこいつは後輩から受け継いだもので、もう長いこと大事にしてたんだ。今度は、お前が大事にしてやってくれよ。たぶん、俺よりお前の方があの作品のこと好きそうだからさ……そっちの方が、いいと思うんだよ」

そう言って、少年は夾竹桃の手にキーホルダーを握らせる。

夾竹桃は、手の中に納まるキーホルダーを見つめながら思う。

ああ……これが、ファン同士の交流か。こんなにも、心温まるものなのか。

少年の申し出は、素直に嬉しい。しかし、夾竹桃にはこれに見合ったものが返せない。漫画以外のグッズを持っていない夾竹桃には、対価となるものがない浮かばない。

だが――ふと、思いついた。

「ねえ……あなた、武偵よね？」

「あ？ まあ、そうだけど……それが？」

「だったら、これを上げる。このキーホルダーには遠く及ばないけれど……私の自信作よ。いつか、これがあなたの窮地を救うことを祈っておくわ」

そして夾竹桃が少年に渡したのは、『毒の王弾』だった。

この少年なら、夾竹桃渾身の毒を託してもいい。そう思えた。

「え……なんだこの弾丸、なんか弾頭が紫色してるぞ？　おい、これなんの……あれ？」

少年が顔を上げた時、そこに夾竹桃の姿は無かった。

彼女はすでに、この場を離れていた。弾丸の説明をしなかったのは、『有毒弾』という性質を嫌って突き返される可能性があったからだ。押し売りに近いが、こうでもしなければ礼ができないと夾竹桃は考えたのだ。

ちやり、と夾竹桃は眼前でキーホルダーを揺らす。

そして、彼女を知るものならば誰もが驚くような、明るい笑顔を浮かべたのだった――

* * *

「うーん……結局なんなんだ？　この弾丸？」

俺は手のひらの上で転がっている弾丸を見ながら、そう呟いた。

ジャンヌを地下から地上に連行し、アリアたちと合流した俺は、その流れで教師たちへの報告とジャンヌの引き渡しを行った。教師連中、珍しくほっとしてたな。それだけ、白雪の価値は大きいんだろう。で、それが終わった後、俺はジャンヌから教わった情報を確かめるため、『看板裏』と呼ばれる、レインボーブリッジに向かって立てかけられた大きな看板を目指した。もちろん、アリアたちには怪しまれたが、なんとか誤魔化して抜け出した。悪いが、事情聴取はいつらに任せよう。

で、その途中なにやら全身真っ黒い印象の少女とぶつかってしまった。幸い怪我はなかったそうで、俺はその場を離れようとしたんだが……その少女が俺のズボンのポケットから飛び出していたキーホルダーを発見したことで、事情は変わった。

いやー……まさか、『聖乙女伝説』のファンが学園島にいたとはなあ。俺は、後輩の朱鷺^{とき}ってやつに勧められてアニメだけ見たことがあるんだが、すっかりハマっちゃったよ。

いや、おそらくメインであろう主人公や他の女キャラの話は割とど

うでもよかつたんだが、サブキャラとして描かれていた男キャラたちの話がすげえいいんだよ。特に、アニメ版76話で、主人公パーティー唯一の男キャラを、旅の途中で知り合った男が命がけで助けた後のシーン。これの話を少ししたんだが、あそこはホントによかった。

しかし、あの子ひよつとして普通に女キャラたちの話の方も好きだったんだろうか。やたら聖のキーホルダーに食いついてたし。あまりに熱心に見てたもんだから、ついあげちまったけどさ。俺、別に聖は好きでもなかったし。

あー、でもあれ結構価値あるんだよなあ。ネットオークションじゃ高値で取引されてるらしい。まあ、そこは残念っちゃ残念だが……ま、俺より好きな奴の手にあったほうがあのキーホルダーも幸せだろ、うん。

で、おそらくはそのお礼としてなんか変な弾丸をもらったんだが、これの説明がないままあの女の子は消えていた。

だけど、まあくれるというならもらっておこう。最近金欠ぎみだからな。弾丸の1発とはいえ、無駄にはできねえ。

「——つと。こんなことしてる場合じゃなかった」

早いとこ、ジャンヌの言う潜水艇を探しにいかねえとな。

……いや。その前に、一度火薬運搬係の控室に行こう。俺の武装、全部あそこに置いてきたからな。まあ、ねえとは思うが万が一ジャンヌの言葉が罠でやつの仲間が待ち伏せしてた場合に備えて、戦闘準備は整えておかねえと。

というわけで、俺は一度寄り道し、拳銃やその他もろもろの武装を装備しておいた。よし、これで戦闘になっても、少しは戦えるだろう。そして、再び向かった『看板裏』。ここは看板と体育館に挟まれた細い通路だ。当然そんなところに人気は無く、なるほど潜入にはもってこいかもな。

さて……とりあえず、誰かが襲ってくる様子はない。

じゃあ、チャツチャと用事を済ませようか。そろそろ日も落ちる。なるべく早いとこ終わらせよう。

というわけで、俺は近くの岸辺に立ち、海を覗き込む。

夕日を照り返し、橙色に光る波間を見ながら、俺はジャンヌから借りた例のリモコンのボタンを押してみる。

すると——鈍いエンジン音のような異音と共に、徐々に水面に黒い影が浮かび上がってきた。

いや……違う。影じゃねえ。浮かんできてる船体そのものが黒いんだ！

ザツツパアアアアツ！ と波を割りながら浮上してきたそれは、一見して潜水艇には見えなかった。全体的なフォルムとしては、三角錐に近い。ロケットとか……もしくはミサイルみてえに見える。いや、まさかミサイルはねえだろ。さすがに。

俺がその異様にたじろいでいると、上部のハッチがパカリと開いた。なるほど、ここから乗り込むのか。

「すげえもんで来たんだな、あいつ……」

よくもまあ、こんなヘンテコな潜水艇で来たもんだ。ジャンヌは。しかしこれで、あいつが言ってることは正しかったことが証明された。どうやら、本当に隠し場所を教えてくださいましたらしい。

本当なら、とりあえずの確認は終えたし、一度帰ってもいいんだが……せつかくだから中も見とくか。例の、『赤いスイッチ』とやらも確認しときてえし。

「よ……つと。思ったより広えな」

さっそく中に乗り込んで見ると、外見で想像していたより内部は広かった。これ、多分3人くらいは乗れそうだぞ。速度計とか深度計とか……計器類が周囲を埋め尽くしてはいるが、それを差し引いても多分いけそうだ。

そして、乗り込んだ時に正面を向くとちょうど見えるように、一際でかい赤い丸ボタンがあった。なるほど、ジャンヌが言ってたのこれか。

見ると、ボタンの横には「パトラ用」と書かれている張り紙が貼り付けてあった。なんで日本語で書いてんだ、これ？

だが、まあ……これで、はつきりした。この潜水艇を使えば、『イウー』の本拠地に……理子の場所に行ける。

それ自体はいいんだが……、

「しかし……どうすつか。乗れて3人か、これ……」

申し訳程度に作られた背もたれに身体を預け、俺は嘆息する。

——そもそも、だ。

なぜ俺がキンジ達を先に行かせて、たった一人でジャンヌから本拠地について聞き出したのか。その理由を、そろそろ語ろうと思う。

まず第一に、あのままジャンヌを連行してしまっていた場合、この潜水艇の情報を先に入るのは、間違いなく教師や武偵局の連中だろう。

だが、それはマズイ。そうなれば、確証はねえが、やつらはその情報を元に犯罪集団である『イ・ウー』に攻め込むはずだ。おそらくは、理子もまとめて……逮捕ないし、抵抗された場合には殺害によって『イ・ウー』を壊滅させようとするだろう。

そこが、認められない。あいつがやったのは確かに犯罪行為だから、逮捕されるのは仕方ねえかもしれねえ。だが、殺されるのは見過ごせない。『助けて』と言われた以上、俺は生きてあいつを連れ戻さなきゃならない。たとえそのあとに、牢獄が待っていても、だ。

第二に、あの場にはキンジとアリアがいたからだ。あの二人は、理子に対していい感情は持っていないだろう。二人とも殺されかけただけでなく、アリアは『オルメス』の因縁、そしてキンジは、詳しくはわかんねえがあいつの兄である金一さん絡みで何かあったらしい。そんな二人が、理子の居場所なんて知ってみろ。キンジはともかく、アリアは猪突猛進にその場に向かうだろう。無論、理子を敵と見定めた上で。そして、それは俺の意向とは決定的に食い違っている。だから俺は、一人でジャンヌと話をした。あの時の面子ではおそらく唯一、理子の味方に立ってやれる位置として。

しかしとはいえ、理子やジャンヌみてえな連中がいるであろう『イ・ウー』に一人で乗り込む気は無い。そんなことをしたって、振り返ちに遭うだけだろう。

だから俺は、時雨や『10』^{ディエーチ}メンバー、東京武偵高前生徒会役員など、あるいはキンジたちより付き合いが長く信頼している連中に声を

かけ、少数精鋭での電撃作戦を考えていたんだが……肝心の移動手段がこれじゃ、な。

仕方ない。とりあえず、あややあたりにこいつの解析を頼もう。自動で戻るってことは、なにかしらの機能で常に本拠地の位置を特定し続けているはずだ。その部分を知ることができれば、別の移動手段で本拠地に向かうことができる。

「じゃあ、まあ……とりあえず、帰るか。さすがに疲れたしな」

ふあ……っ、と口から欠伸が漏れる。波に揺られてるせいか、なんか疲れも相まって眠くなってきた。

しかし……気になるな、この赤いボタン。

俺は、ちらりと眼前の赤いボタンに目を向ける。なんとというかこう……そこはかとなく、押してみたくなる。いやもちろん実際にはしねえけど、こうもあからさまに強調されたら……なあ？

しかも、ジャンヌの言葉通りなら、全自動潜航機能だと？ 男心がくすぐられるだろ、そんなの。

……変形、とかしねえかな。

そろそろそろ、と俺の指が無意識に赤いボタンに伸びる——って、危ねえ!? なにやっつてんだ俺は!?

慌てて指を離す。危うく、ロマンに負けて押すところだった。なんせ、あのまま押してたら、俺はこの潜水艇で一人、敵の本陣に乗り込むことになってたからな。誰がそんな真似するかよ。絶対したくねえ。

——と、その時だった。

プウ……ン、と耳元で耳障りな飛行音が聞こえた。

げ、海沿いのくせに蚊が飛んでやがるよ。珍しいな。潜水艇の中に入ってきたやつがった。

というか……めっちゃくちや鬱陶しいな、こいつ。目の前をブンブン飛び回るわ、耳元を掠めるよう羽音を鳴らすわ、非常にうざい。

こうなったら、情けは無用である。殺生はよくないことだが、叩き潰そう。

というわけで、俺は優雅に飛行し続ける蚊を殲滅にかかった。

——この時俺には、無視してさつきと潜水艇から出て帰るといふ選択肢があつたのだが、俺はそれを取らなかつた。

この時の選択を俺は、ひどく後悔することになる。

「くぬっ……このっ」

パチンツ、パチンツ、と渴いた音が薄暗い船内に響き渡る。

その度に、両手で挟みこもうとする俺を嘲笑うように、蚊はするりと回避しやがる。チクシヨウ、ちよこまかと……!-

敵艦でなにやっつてんだお前とつっこまれそうな間抜けな姿を晒しながら、俺は蚊との格闘を続けていた。

そして——好機が、来た。

飛び疲れたのか、怨敵は俺の目の前に着陸したのだ。

「殺^とつた——ツ！」

今こそ最大のチャンスとばかりに俺は、蚊めがけて右手の平を振り下ろす。

バンツ、という勝利の音^{ファンファーレ}が鳴り響いた。よし……!-

俺は、確信とともに、右手を離す。

そこに、潰れた蚊が厳然と存在していた。

なにやら、俺が見た時より明らかに押し込まれた赤いボタンの表面で。

………あ、という俺の声と。

ブオン……ツ、という何かの起動音は、多分同時くらいだった。

……つて、やべえええええええええええ!

やっちまつた! やっちまつたよ! てか、ホントになにしてんだ俺!?

焦りまくる俺の横顔を、オレンジやら緑やらの計器の光が照らし出す。船体が微振動を始め、起動状態に入ったことを知らせる。

慌てて赤いボタンはもちろんいろんな機器を操作するも、一向に収まらない。

ど、どうすりゃいい!? このまま放つとけば、こいつは潜水を始め、ポストーク号まで真っ直ぐに進んでいくだろう。だが、かと言ってこの船から逃げ出せば、俺はせっかくの理子に続く道を失うことにな

る。

どっちだ。どっちを選ばいい……?!

先程までのふぎけた空気が消し飛び、究極の2択を前に、俺の意識に間隙が生まれる。

その時だった。

「あの……有明先輩、ですよ？　なにをなさってるんですか……？」
「え？」

突如かけられた声に、俺は顔を向けた。

岸に立っていたのは、一人の女子生徒だった。白雪のように艶やかな黒の長髪を後ろで分け、それぞれの髪束を先端近くで結んだ変則ツインテール。これまた白雪に似た豊満なスタイルに、大和撫子然としたおやかな雰囲気。先輩と呼ぶからには1年か特待^{イン}中^タ学生^ンなんだろうが、俺には見覚えがない。が、向こうは俺を知ってるらしい。よくあることだが。

彼女は、困惑に揺れる瞳でこちらを見ている。そりやそうだ。俺だって同じ状況なら、意味がわかんねえだろうよ。

だが、問題はそこではなくて。

彼女の登場により意識をそちらに持って行かれた俺が、選択までのタイムリミットを使い切ってしまったということこそが、なによりの問題だった。

ガチャン——と、ハッチが閉まり始めたんだ。

ちよ……っ!?

反射的に手を伸ばすも、もう遅い。無情にも、ハッチは俺の手を遮るように、完全に閉じた。

そして。

ズズズズ——ツ、といつか聞いたような音が聞こえた。

これはおそらく、潜水している音だ。潜水艇が潜航を開始したんだろう。

それを理解したとき、俺は思った。

ああ……今回はさすがに死ぬかもなあ、と。

* * *

東京武偵高探偵科^{インケスタ}1年・佐々木志乃^{ささきしの}は、いつものように神崎・H・アリアを模した人形に釘を打ち込むため、ひと気のない『看板裏』まで一人歩いていた。

何を言っているのかご理解いただけないかもしれないが、これは全くの事実であり、比喩ではない。事実、彼女の胸元には釘と金槌が収まり、彼女の右手にはデフォルメされたアリア人形（自作）が握られていた。

ではなぜこんなことになっているかと言えば、それには間宮あかりという志乃の友人を引っ張ってこなければならない。

成績の優秀さ、本人の近寄り難さ、そして武装弁護士の名家という肩書きから嫌煙されていた志乃にとって、あかりは初めての友達だった。それまでの孤独さの反動からか、ストーキングを始めとした変態行為を行うほどに志乃はあかりに心酔していた。しかし、ここ最近のあかりの心は、志乃ではなく神崎・H・アリアという強襲科^{アサルト}の先輩へと向いていた。それが悔しくて憎らしくて、あかりが志乃よりもアリアを優先するようなことがある時に、こうしてひと気のない場所までやってきて、丑の刻参りのような真似をしているのだ。

余人が近寄りがたい威圧感を撒き散らしながら、志乃は何事かをぶつぶつと呟きながらただ進む。

そしてたどり着いた『看板裏』にて、志乃はアリア人形を壁に押し付け、釘の先端をゴルフのティーのように浅く差し込んだ。

ゆうらり、と金槌を握った右手が振り上げられる。

「神崎・H・アリア……！ 私からあかりちゃんを奪った罪許すまじ！ いやまだ全然取られてませんけどねっ。まだあかりちゃんは私の方が全然好きですけどねっ。でも……天誅ウ——！」

（普段は）憂いを帯びたような瞳が、これでもかと吊り上がる。（普段は）柔らかな佇まいの体を、鬼気が包み込む。

端的に言って、相当に恐ろしい姿だった。どこかの武装巫女を彷彿とさせるほどに。

しかし、そんな彼女を止める者はここにはいない。哀れ、アリア人形は振り下ろされた鉄槌により串刺しに——とはならなかった。

「……？　なんの音？」

金槌が釘を打ち付けるその刹那、志乃の耳が異音を捉えた。低い、振動音。たとえるなら、それはエンジン音に近い。最初はバイクか何かとも思ったが……違う。振動音に紛れて、波の音が聞こえる。そしてその方角は、体育館の陰に隠れて見えないが、海側の方だ。つまり、

（船……？　でも、どうして？　学園島に船舶で来島する場合は、車輛科のドックを使うはず。こんなところに接舷するはずがない。ということとは、まさか……侵入者!?!）

ありえない、とは思う。

しかし、学園島への侵入は不可能ではないのだ。現に志乃の知る由はないが、今日この日、すでに『魔剣』と呼ばれる犯罪者が侵入している。

だが、武偵人口が9割を超えるこの島に侵入しようという人間はまじくない。メリットよりも、デメリットの方が遥かに大きいからだ。

とはいえ、前述したとおり可能性はゼロではない。この場合、武偵として志乃が取るべき行動は、侵入者がありとして動くことだ。

志乃は、そろそろと足音と気配を消しながら、しかし歩度は早く、音源へと歩いていく。

そして、体育館の角に張り付き、そつと覗き込んでみた。

そこに——あった。志乃が予想したとおり、船らしきものが。

一見して、普通の船舶とは違った。ミサイルのような流線型の黒い物体。むりやり当てはめるとしたら、おそらく潜水艇が最も近いだろう。

その『潜水艇』の上部にはハッチがあった。しかも、開いている。船体が微振動していることも併せて考えると、誰かが乗っているのは明白であり……実際、船内に人影が在った。

（誰……？）

志乃は若干陰から身を乗り出し、目をこらす。

最初にわかったのは、その人物が武偵高の制服を着ていたこと。この時点で侵入者という線は消えたが（無論変装の可能性はあるが）、し

かし武偵高の生徒がこんなところで何を？

そう疑問に思った時、志乃はその人物の顔に見覚えがあることに気付いた。

「有明、先輩……？」

そう、その人物とは、東京武偵高2年・有明錬だった。

彼のことを、志乃は知っていた。探偵科の専門授業を始めとして、あかりが「アリアについて悪い虫だ」と憤っていたのをよく覚えている（志乃的にはアリアをあかりから引き離してくれる可能性を持った人物であり、むしろ好感度は高い）。

見知った顔に安堵しつつ、しかし状況の不可解さは残る。志乃は探偵科の生徒ではあるけれども、さすがにこの状況を推理で導くことはできない。

なので、彼女は若干の警戒心を残しつつも、物陰から出て、『潜水艇』へと近づいていった。

そして、錬の顔がはつきりと視認できる距離まで歩んだところで、彼女は錬に声をかけた。

「あの……有明先輩、ですよ？ なにをなさってるんですか……？」

志乃の言葉に、錬は弾かれたように顔を上げた。

目と目が合う。

——そして、次の瞬間だった。

今まで開いていたハッチが、突如閉まり始めた。

（え……!?! まさか、この船で学園島を出るつもりなの!?!）

学園島正規の発着港は、先ほども言ったが、車輛科のドックだ。それは、例えば特秘任務シールドクエストのように極秘性の高い場合にも適用される。

つまりこれは、言い方として適切かどうかはともかくとして……密航、ということになるのだ。

想定外の事態に、志乃の思考が乱れ始めた、その時。

有明錬が志乃に向け、右手を伸ばした。

まるで。

「じゃあな」と。そう言うかのように。

「え——？」

疑問の声。それが空気に溶けるころには、ハッチは既に閉まり切っていた。

そして、『潜水艇』はゆっくりと動き出しながら、海中へと沈んでいった。志乃はそれを、ただ見ていることしかできない。

呆然としている志乃が、ようやく正気を取り戻した時。

そこには、まるで夢が覚めたかのように、穏やかな波間が広がっているだけだった――

* * *

尋問科専門棟・第4留置室。

ここは、学園島内でも特に使用頻度の低い部屋の一つだ。机と寝具、扉を挟んでトイレという、簡素にすぎる趣をしている。そして極めつけは、唯一外部へと繋がる扉――その上部にはめ込まれた、鉄の格子窓だった。

それもそのはずで、ここは学園島内で捉えた犯罪者や、なんらかの理由で学園島で拘留せざるを得ない犯罪者を留置するための部屋なのだ。使用頻度が低いのは、もちろん学園島の精神的堅牢さによるものである。

そして、現在この部屋の主となっているのは、一人の少女だった。

透き通るような、銀髪の少女。それまで身につけていた鎧の代わりに支給された東京武偵高の制服を纏った彼女の名を、ジャンヌ・ダルクと言った。

『魔剣』という通り名を持つ彼女は、学園島へと誘拐目的で潜入したが、現地の武偵に敗北し、これを失敗。教師陣へと連行され、こうして捕えられているのだった。

ジャンヌは一人、ベッドの上に横たわりながら、自分がこの部屋に入る数刻前のことを思い出す。

具体的に言うならば。

有明鍊に、イ・ウーの本拠地へと繋がる小型潜水艇の隠し場所を教えられた場面だ。

（あの時私は……どうして、有明にブラドの弱点を教えなかったのだろうか）

——あの時。

ジャンヌは鍊に、「理子を助けるならばある怪物とぶつかることになる」と言った。

そして、「お前ならば救い出せるかもしれない」ともだが。

それは、冗談でもなんでもなく不可能なのだ。

なぜなら、ジャンヌが口にしたある怪物——『イ・ウー』ナンバー2・『無限罪のブラド』とは、不死身の生物なのだから。

これは、比喻ではない。実際ブラドは人間ではなく、すでに数百年の時を生きている怪物だ。吸血鬼——そう呼ばれる、正真正銘の人外なのだ。

しかし、生物である以上、吸血鬼であろうとも完全な不死ではない。ブラドの不死にもまた、秘密があった。

『魔臓』と呼ばれる、再生器官。体内に4つあるその器官が健在である限り、ブラドはいかなる傷であろうとも、瞬時に回復することができる。

が、逆に言えば、その『魔臓』を破壊してしまえば——ただし『魔臓』は相互回復するので同時破壊の必要があるが——ブラドの不死性は喪われるのだ。

そしてそれは、まぎれもない弱点である。加えて、『魔臓』の位置はかつてのバチカンとのいざこざにより、目玉模様として体表に浮かび上がってしまったている。ジャンヌ自身、その位置を3つ目までは知っていた。

無論、それを知っていたからと言って勝てるわけではない。しかし、ここまで知っていることが、ブラドと戦う上での——勝利を目指す上での、最低条件であり絶対条件だった。

けれど。

これらの情報を、ジャンヌは一切鍊に教えてはいなかった。

(なぜだ……私はなぜ、口に出さなかった。忘れていた？ そんなはずがあるか。では、やはり有明を恨んでいた？ ……いや、それもない。あの時私は確かに、有明のサポートを考えていた)

ならば、なぜ？

自問は続く。答えは出ない。

出ないままで、時は流れ——しかし唐突に、ジャンヌは思い当った。

(……逃げて、ほしかったのか?)

それが、ジャンヌが出した答えだった。

あの時、口では確かに「勝てるかもしれない」とは言ったし、実際そういう気持ちが無かったわけではない。

けれど、それ以上に、やはり思っていたのだ。勝てるわけがない、と。

だから、弱点を教えなかった。中途半端に可能性を与えるよりも、いつそ圧倒的な実力差があった方が、逃げるという選択肢を取りやすい。

「生き残る、可能性が高い。」

……ああ、なんだ。つまるところ、こういうことか。

(私は、あいつに「友達になろう」と言われて、嬉しかったのか……) きっと、それが真実。

今まで、犯罪者であるジャンヌに対して、光の道を歩く人間からそんなことを言われたことはなかった。ジャンヌの罪を知った上で、同じ闇側の人間以外から、手を伸ばされたことなどなかった。

だから、ジャンヌはきつと思ってしまったのだ。

有明鍊と友達になるのも、いいかもしれない、と。

すつ——と、わだかまりが解けていく。疑問が、氷解する。

答えは、得た。

後は——

「生き残れ、有明。逃げてもいい、無様でも構わない。私は、お前が差しのべた手を取りたい。お前と——友達に、なりたい」

静かな呟きが、室内へと溶けた。

ジャンヌ・ダルク30世は、ようやく得た解答を胸に抱き。

静かに、瞳を閉じるのだった——

* * *

有明鍊を乗せた小型潜水艇——『オルクス』は、海中を進む。

向かう先は、人外魔境。悪意渦巻く、犯罪者たちの巣窟、ボストーク号。

この戦いにおける有明鍊の勝率は、ゼロである。
しかし。

それでも、有明鍊は進む。ダイヤモンドダスト 銀 氷の魔女が渡した架け橋を駆け抜けて、その水平線の先へ――

――まっすぐに、進む。

第二章 銀氷の架け橋 E N D

流れ弾（アウト） 4〜6

流れ弾^{アウト}4（「19. 今はまだ平穏であろう日々」より）

宗宮^{そうみや}つぐみは、夜の学園島を一人帰路についていた。

いまだきめずらしい大きな丸眼鏡と、お下げにした三つ編みが特徴の東京武偵高・1年生である。

武偵高に3名しかいない、獣医のスキルを持った救護科^{アンビュラス}の生徒という稀有な少女であり、対象が動物（人間を除く）ならば、たとえ狼などの凶暴な生物相手にも物怖じせず接することのできる豪胆な人物でもある。

しかしその心胆の強さが発揮されるのは対動物の場合のみで、普段のつぐみはむしろ気弱な性分だ。

だから、つぐみにとって今の状況は歓迎できるものではなかった。

「うう……お化けとか、でないよね……？」

自らを鼓舞するためか、意図せず独り言が口から漏れる。

あたりに人影はない。学園島は、武偵高生の島。この時間になると、すっかり人通りは減り、日中の騒々しさはなりを潜める。

夜風に吹かれてざわざわと妖しく葉を鳴らせる街路樹に、つぐみは体を震わせた。

つぐみは、夜が嫌いだ。人間の根源的な恐怖の対象である暗闇に、彼女もまた恐怖心を抱いていた。

そんな彼女が一人きりで夜道を歩いているのは、急患が入ったからだ。強襲科^{アサルト}の生徒が寮で飼っている武偵犬が、家主と同室の人間たちのいざこぎに巻き込まれ、負傷した。そのままその武偵犬は救護科棟に運び込まれ、自室でプライベートな時間を過ごしていたつぐみが呼び出されたのだ。

そして治療が終了したのが、つい先ほどの話だ。だから彼女は今、こうして女子寮へと向けて歩いていたわけである。

「——あれ？」

ふと、つぐみは足を止めて呟いた。

その原因は、前方に人影を認めたからだ。後姿から察するに、武偵

高の男子らしい。街灯に照らされて、後ろで一周りにされた黒髪が見えた。

こんな時間にめずらしいな、とつぐみは思ったが、それを言ったら自分もそうかと思ひ直す。つぐみ自身がそうであるように、なにも一切が自宅に帰っているわけではない。居残り訓練や部活など、理由はいくらでもある。

だから、つぐみはその時点では人影について気に留めることはなかった。

だが、次の瞬間、

「あつ」

前を歩く男子生徒がポケットから何かを落としたことで、つぐみは小さく声を上げた。

男子生徒は、落し物に気づいていない。そのまま歩き続けている。

(どうしよう……って、ううん。拾わなきゃダメだよね)

つぐみはわずかに逡巡して、そう決めた。気弱さからくる人見知りゆえに、見ず知らずの人間——それも男子だ——に話しかけるにはそれなりに勇気がいったが、それでもこの場面で素通りできないほどにはつぐみの心根は優しかった。

(急がなきゃ……っ)

つぐみが迷っていた間にも、男子生徒は足を進めている。このままだと返せなくなるので、つぐみは小走りで落し物の下まで駆け寄った。

落し物までたどり着くと、つぐみはすぐにしゃがんで、落し物を手に取る。が、小走りになったせいで眼鏡がずれたのと、そこが街灯と街灯の間だったことで、つぐみはそれがなんなのかよくわからなかった。なんとなく、ゴムのような、弾力性のあるものだとはわかったが、とにかくそれがなんであれ、つぐみはこれを持ち主に返すのみだ。もうひとふんばり、つぐみはちょうど街灯の下にいる落とし主までダッシュして、

「あ、あのー！これ、落としましたよ？」

そう言つて、右手に持ったそれを差し出した。

つぐみの声に反応して、男子生徒がゆっくりと振り返る。

そこでふいにつぐみは、なんだか少女マンガみたいなシチュエーションだな、とぼんやり思った。

落し物を拾って渡した相手が異性。普通は男の方が拾う側なのだろうが、それはともかく、つぐみは少し心臓が高鳴るのを自覚した。(これがもともとロマンスが始まったりなんかしちやったりして……きやーっ！)

わずか頬を紅潮させるつぐみの眼前で、ついにその男子生徒の容貌が露になった。

適度に切りそろえられた黒髪。小柄な自分より頭2つほど大きな身長。鋭い、切れ長の瞳(本来人に怯えられるほど目つきが悪いだけなのだが、つぐみの乙女フィルターが修正した)。格好いいと評すことの出来る(乙女フィルター以下略)面貌が、そこにはあった。

想像が現実になるのではー! とテンション上がったつぐみは、そこで素敵な出会いをくれた落し物キュービッドに感謝の念を籠めて視線を落とした。

そこにあつたのは、人間の手首だった。

瞬間。

宗宮つぐみは処理落ちした。

「……………」

一瞬、それがなんなのかわからなかった。

逆に言えば、一瞬が過ぎてなんなのかわかった。

そして、至極当然の帰結として、

「ツツツツツ!?!」

つぐみは、人の可聴域を超えた絶叫を迸らせ、くるりと反転して逃げ出していった。

くるくると、つぐみが投げ出した手首が夜空を舞った。

以後、つぐみが夜に落し物を拾うことは、生涯なかったらしい。

なお。

これから1ヶ月ほどの間、『怪人・平成の切り裂きジャック』の噂が学園島を席卷することになるのだが、それはまた別のお話である。

流れ弾^{アウト}5（「20．主人公たちの知らない攻防」より）

ジャンヌ・ダルク30世は逃げていた。

恐怖から。脅威から。追いついてられるように逃げていた。

その原因は、つい数分前の出来事にある。『魔剣^{デユランダ}』と呼ばれる犯罪者であるジャンヌは、とある任務を果たすために、4人の人間——遠山キンジ、神崎・H・アリア、星伽白雪、有明鍊の4人だ——を監視していた。それは先ほどまで実行されていて、何の問題もなく継続できていた。

ただ一人を除いては。

4人のうちの1人である有明鍊。彼は、信じられない一手を、ジャンヌに一切気づかせることなく密かに打っていたのだ。

『監視返し^{カウンターアイ}』。武偵用語の一つであるこの言葉は、読んで字のごとく。監視をしている人物を、さらに監視するという意味を持つ。

今回ジャンヌが行っていたのは、まさにそれだ。自分を監視しているつもりになっているキンジたちの裏をかき、ジャンヌこそがキンジたちを監視していた。

だが、それは間違いだった。4人の裏をかいたジャンヌ——そのさらに裏を、鍊はかいていたのである。

つまり。

有明鍊こそが、実はジャンヌを監視していたのだ。

『監視返し返し^{カウンター・カウンターアイ}』。まさに、想定外の出来事だった。有明鍊の監視を行おうと、ジャンヌが鍊の部屋にしかけた盗聴器を起動させると……なんと、鍊がジャンヌに対して話しかけたのだ。まるで、ジャンヌの様子を見ているかのような内容で。

だからジャンヌは今、根城にしていた第1女子寮から逃走しているのだ。居場所がバレていた以上、もうその場には留まれない。どこか、潜伏場所を変える必要があった。

世間まぎれて、ジャンヌは走る。息が荒い。髪が乱れる。策士の一族にあるまじきなりふり構わない己の姿に、ジャンヌは歯ぎしりする。

走って、走って、走って……第1女子寮からかなり距離を取ったその時、唐突にジャンヌの足がピタリと止まった。

「……………待て」

ジャンヌは、小さく呟く。

なにか、ひつかかる。十数分前の、あの忌々しい屈辱の中に、どこか違和感があった。

それは、なんだ？

ジャンヌは、一つ一つ記憶の中に残された問題点を挙げていく。

監視がバレていたこと——違う。

居場所がバレていたこと——違う。

有明錬に、逆に監視をされていたこと——ここだ。

ジャンヌの意識に、この点がひつかかる。だが、具体的にこの部分の何を問題に感じているのだ？ と、ジャンヌは自問自答する。

「私のことを監視されていたこと自体は、大きな問題ではないはずだ。いや、もちろん問題ではあるのだが、それよりも居場所がバレたことの方が重要のはずだ。なにせ、あの部屋で私が行っていたことは、大して無いぞ。白雪たちを監視したり、普通に生活していたり、あとはせいぜいファツションショーをおこなった、り……」

羅列の途中で、ジャンヌの言葉は尻すぼみになっていった。

そして、数秒の沈黙が流れ——変化が、起きた。

最初に、ジャンヌの顔はさあ……っ、と真っ青になった。

次に、反対にジャンヌの顔がかあ……っ、と真っ赤になった。

はたから見たら相当に面白い変化であったが、幸いというべきか、しかしその場には他に誰もいなかった。

だから。

策謀の一族、ジャンヌ・ダルク30世のこんな叫び声を聞いた者も、誰一人いなかった。

「殺すっ！ いや、死なせてくれっ！ あれは、あれは、私じゃないんだ——っ!!」

流れ弾^{アウト}6（「21. おそらくは世界一不適當なプロポーズ」より）

「ねえ、連城^{れんじょう}。お兄ちゃんと結婚ってできるのかしら？」

「……失礼を承知で言うぞ。母親の状況に、ついに頭がおかしくなったか？」

新宿警察署の留置人面会室。そこから少し離れた廊下で、連城黒江（くろえ） 弁護士は、こめかみを抑えながら答えた。

目の前にいる少女は、神崎・H・アリア。現在自分が弁護をしている神崎かなえの娘である。

連城は今日、たまたまかなえに話があつて新宿警察署を訪れていたのだが、そこで偶然アリアと出会った。アリアは、隣に連れていた少年に先にロビーへ向かうように言つて、連城をここまで連れ出した。

連城はてつきり、かなえの裁判絡みでなにか話があるのだと思つたのだが……開口一番の台詞が、さきほどのお兄ちゃん云々である。ストレスで脳をやられたのかと疑うのも無理はなかった。

「ホントに失礼ね、そんなわけないでしょ。まあけど……あたしも、ちよつと言葉が足りなかったわ。正確には、お兄ちゃんみたいに思つてる人からプロポーズされたんだけどどうしよう？ って意味よ」

「なにそれラノベのタイトル？ あと、さつきとまるつきり台詞が違つてるぞ。言葉が足りないとかいうレベルじゃない」

「らのべ……？」

「そこに反応しなくていい。……それで？ 私にはどうも、お前が言っている意味がよくわからないんだ。順を追つて説明してくれ」

そして連城が聞き出した事情によれば、こういうことらしい。

昨日ちよつとしたいぎごぎがあつて、その際にアリアはある少年のことを兄のように思ったそうだ。あのアリアの兄とか、どんな聖人なら務まるのだろうかと連城は思ったが、とりあえずそれは置いておく。重要なのはその翌日（つまり今日だ）、アリアがその少年にプロポーズされたということだ。

プロポーズのくだりで顔を赤くしつつ、けれど嬉しさを垣間見させるアリアを半眼で見つつ、連城は内心で大きく首を捻った。

（本当にアリアにプロポーズしたのか？ その少年は。まあたしかにこの子は飛び抜けて可愛いが、その分性格がなあ……。DMなんだから

うか?)

相当に酷いことを考えながら、プロポーズとやらを疑問視する連城。ちなみに、この酷評は連城が独身であることは関係ない。全くない。

それはともかくとして、ようやく事情は把握できた。臃げに、だが。

「それで? お前はその『プロポーズ君』に対してどうしたいんだ?

イギリスでは男女共に16歳で結婚できるのだろう。学生結婚か」

「ばっ、バカ! ママのことだってあるのに、そんなことできるわけないでしょ!」

(こいつ、普通に年上わたしにバカって言ったな)

額に青筋を立てる連城。

だが、彼女は大人の女である。いちいち子供の言うことに腹を立てるほど、脆弱な精神はしていないのだ!

「あたしは、独り身のあんたほどがつがつしてないのよ!」

「このクソガキ! 照れ隠しだとしてもそれは許さんぞツ!」

……しないのだ。

* * *

「で……結局、お前は私にどうして欲しいんだ?」

「それは……ごめん、正直あたしもよくわからないの。偶然あんたに会ったから咄嗟に連れてきちゃったけど……あたし自身、まだ混乱してて……。昨日お兄ちゃんみたいって思ったのに、今日いきなりプロポーズされたって、どうすればいいかわからないのよ……」

「あー……」

柳眉を歪めるアリアに、連城は納得したように唸る。

(恋愛によくある『ギャップ』というやつか。友人と思っていた者から告白されて、友情と愛情の差に戸惑うという例のやつだろう。さすがにこんなケースは滅多にないだろうが……さて)

連城はどうしたもんかと、困ったように目を閉じる。

彼女自身、恋愛経験は豊富ではない。しかも、こんな状況、周りにもいなかった。アドバイスを求められていることはわかるが、とはいえ明確な答えは返せそうにない。

なので、

「……とりあえず、友達にでも相談してみればいいんじゃないか？」

「え……？」

「正直に言うが、私にはお前が悩んでいることに答えを出せそうになり。それに、お前たちのように若い気持ちは、もう忘れてしまったよ。そんなに前の話ではないのにな……」

「連城……」

遠い目をして語る連城に、アリアはなんとさえいいのかわからなくなる。

そんなアリアの様子に気づいた連城は困ったように笑い、

「すまない、どうでもいいことを言ってしまったな。私にはお前の力になってやれないが……」つだけ、助言はしておこう

——その瞬間の連城の顔を、アリアはきつと忘れない。

まるで、敬愛する母であるかなえのような……尊敬すべき女性の顔をした連城の言葉を、きつと忘れない。

連城は、凜とした声で言った。

「つまらない恋はするな、アリア。お前が兄だと思ったなら、それでいい。告白されたから好きになるなんてことは、やめておけ。愛無き恋は、つまらんぞ」

「愛無き恋……」

「そうだ。どうせなら、どっぷり惚れてから好きになれ。好きになってから惚れるより、そっちの方がずっと恋愛は楽しめるぞ」

そう言つて、連城は少し茶目つ気のあるウイंकを飛ばした。

アリアはもう一度小さく、「つまらない恋はするな……」と、呟いた。そして、

「うん……わかったわ、連城。あたし、もつとよく考えてみるつ。——ありがとう！ じゃあね！」

言うだけ言つて走り去っていくアリアの背中を見ながら、連城は「忙しい子だな」と苦笑する。

自分のアドバイスで、アリアの何かを解消してやれたなら、少なくとも今日ここで出会った偶然にも意味はあったのだろう。

大人として完成されたとは未だ言えないが、そんな自分でも子供に何かを示すことはできた。

その事実にはんの少し誇らしげな気持ちになりながら、連城は神崎かなえとの面会に向かう。

願わくば。

アリアの未来に、彼女の笑顔がありますように。

* * *

……ちなみに。

遠い未来で連城は、6股の疑いをかけられた某『プロポーズ君』の弁護を担当することになるのだが……それはまだまだ先のお話である。

第三章 黄月のプルマージュ

25. 闘劇の前の小劇場

最初に言っておこう。

これは、闘劇の前にあつた『平和なシーン』を切り取ったものである。

* * *

Scenel 『New Face』

5月11日。

その日、東京武偵高2年A組は、一つの珍事に見舞われていた。

かつつ、かつつ、とチヨークが黒板を叩く小気味良い音が教室に響く。日本語にはない『曲線の美しさ』を見せつけながら、筆記体のアルファベットが並べられていく。

L.^{エル}Wat^{ワト}son^{ソン}

板面には、そう書き連ねられていた。

「はあい、みなさん。というわけで、マンチエスター武偵高から留学してきた、ワトソン君です。なかよくしてくださいねー」

ほわほわと微笑みながら、教壇に立ったA組の担任である高天原ゆとりが告げる。

瞬間、教室内を黄色い声が満たした。

かつて、神崎・H・アリアが東京武偵高に転入してきた時にも、受け入れ先の教室では野太い歓声が上がっていた。そして今それと同じことが起こっているということは、その対象もまた、アリア同様に美形であるということだ。

もつとも。

紹介された性別は違つたが。

「エル・ワトソンです。これからよろしくね」

東京武偵高の男子制服に身を包んだ転入生——ワトソンは、笑顔を浮かべながら挨拶した。

首元で切りそろえられた茶色の短髪が、窓から入り込んだ5月の風

になびく。吸い込まれそうな輝きを放つ、黒曜石のごとく青みがかった黒瞳が、室内の生徒たちを見渡す。

空気を震わす美声は、一般的な男子と比較すれば、かなり高い。160cmを少し下回る身長と相まって、あたかも幼い少女のようにも見えるが、だからこそA組の女子たちには『かわいい系』として琴線に触れたのだろう。

ワトソンの笑みに、またもや女子たちの歓声が上がる。

しかし、何事にも例外があるように、嬌声を発しなかった女子生徒がいた。

その名は、神崎・H・アリア。強襲科・Sランク武偵の、ピンク色のツインテールをした少女だった。

彼女は、自らの席に着席したままで、驚きに目を見開いていた。なぜならば。

今、教室中の興味の対象である人物に、心当たりがあったからだ。

(ワト、ソン……？ まさか、あのワトソン家の人間なの……？)

神崎・H・アリアは、かの希代の名探偵シャーロック・ホームズ卿の曾孫である。

そして、これは武偵高の教科書に載っているレベルで有名なことだが、シャーロックには一人の相棒がいた。

元軍人の医師でありながら、名探偵シャーロック・ホームズの右腕として半生を過ごしたその男の名を、J・H・ワトソンと言った。

そして。

アリアにとってワトソンという名は、偉大なる曾お爺さまの相棒という以上の意味を持っていた。

(あたしと同年……ワトソン卿の曾孫？ じゃあ、まさかお婆さまが言ってた婚約者……)

形のいいアリアの眉が、疑念に歪む。

『婚約者』。

許嫁と言い換えてもいいが、アリアにはそういう相手が存在していた。いや、正確には存在していると目されていた。昔、アリアの祖母がアリアの許可なく(名家にはよくある話だが)婚約を結んだという

話をしていた。しかし、アリアの祖母はすでに相当な高齢であり、なおかつその相手であるワトソン家の嫡男の實在が不明確だったことで、今の今までアリアの祖母の妄言とされていたのだ。

しかしここに来て、ワトソンを名乗る人物が武偵高、それもアリアのいるクラスに転入してきた。これはおそらく偶然ではなく、そして偶然でないということはやはりあの転入生はワトソン家の人間——それも、存在が疑問視されていた嫡男なのだろう。

どうして、このタイミングで出てきたのかはわからない。ワトソン家は秘密結社『リバティイ・メイソン』の一角を担っており、その秘匿性から偽名やカモフラージュの職業を行っているような、虚ろな一族なのだ。表舞台に出てくる理由が、思いつかなかった。

そして、思いつかなかったならば、アリアが取る行動は決まっている。

すなわち、勢いよく椅子から立ち上がり、いつかパートナーたちにしたように人差し指を突きつけて、「あんた、一体何が目的なのよ」と詰問する——より早く。

「エル……っ？」と。

左隣にいた少年が呟いた。

「え——？」

機先を制されたアリアが呆けた声を出して、そちらに視線をやる。その先では、遠山キンジがともすれば自分よりも驚いているのではないかという表情で、転入生を凝視していた。

エル。言うまでもなく、つい先ほど本人の口から紹介された、転入生のファーストネームであるキンジが呼んだ。

それを、パートナーであるキンジが呼んだ。
つまり、

「キンジ、あんたまさか——」

——ワトソンのこと知ってるの？ と訊こうとしたアリアだったが、それより先に今度は前方から声をかけられた。

「はじめまして。君の隣の席は、空いてるのかな？」

顔を正面に向けると、そこには英国紳士もかくやというほど爽やか

な微笑を浮かべたワトソンが屹立していた。

アリアはきろつ、と厳しい視線を向けながら、

「はじめまして。悪いけど、そこはあたしのパートナーの席よ」

「……パートナー、ね。それは知らなかった。ごめんね」

爆発するタイミングを失ったことで冷静になったアリアの返答に、ワトソンは目を細める。

そして、くるりと振り返り、再び教壇に戻っていった。「あ、あのー、まだ私なにも言っていなかったのだけど……」「すみません。綺麗な女性がいだったので、お近づきになろうとつい向かってしまいました」そんな会話をしり目に、アリアはちらりと開きっぱなしになっていたペンケースの中を覗く。

そこには、いつの間にか一枚の折りたたまれた紙が入っていた。

『放課後、遠山キンジと2人で「看板裏」まで来てほしい』

ワトソンに渡された紙には、そう書かれていた。

転入生であるワトソンが『看板裏』という、学園島内でも人気が少ない場所を知っていたことに驚きつつも、アリアは放課後、キンジを帯同して『看板裏』へと向かっていた。

2人の間に会話は無い。無論、アリアはキンジにワトソンとの関係について問い詰めたかつたし、実際この段階になるまでに訊いてはいた。が、それに対して「放課後に話す」と言っただけで、キンジは答えなかった。

そこで、さらに問い詰めることはできなかった。できたが、アリアはそれをしなかった。(男子とはいえ)もし自分よりも親しい関係だったら、という不安がよぎったということもあるし、きつと『婚約者』の事を黙っていた後ろめたさもあったのだろう。なぜ、そこに後ろめたさを感じたのかは定かではなかったが。

とにかくそういった事情から無言で歩く2人は、やがてレインボーブリッジに向かって立てかけられた看板と体育館の間——通称『看板裏』まで辿りついた。

そこに、エル・ワトソンは海を見ながら立っていた。

アリアたちに気付いたのだろう。ワトソンは潮風に靡く髪を一度払って、アリアたちに向き直った。

「やあ。わざわざ来てくれてありがとう」

「呼び出したのはあんたでしょ。それより、先に確認するけど……あんた、あのワトソン家の嫡男で合ってる？」

「そうだ。ボクは、J・H・ワトソン卿の曾孫であり……アリア。君の『婚約者』でもある」

ファイアンセ……？ と隣でキンジが小さく呟くのが聞こえた。

それに、アリアはひどく狼狽する。余計なことを、という気持ちもあつたが、いずれバレることだ。知られること自体は仕方ない。

だが、誤解はしてほしくない。同意の上ではないことだけは、なんとしてもわかって欲しかった。これもまた、その根源にある理由は判然としなかったが。

「ちつ、違うのキンジっ！ それは、あたしの意思じゃなくて、お婆さまが勝手に……キンジ？」

慌てて弁解しようとするアリアだったが、キンジの反応がおかしいことに気付く。

キンジはなにやら顔をひきつらせ、若干後ずさっていた。というか、端的に言ってドン引いていた。

そして、震える声でワトソンに話しかける。

「エ、エル、お前……そんな趣味があつたのか……？」

「ばつ、違つ、誤解しないでくれキンジ！ ちゃんと後で説明するから

——
「いや、その、大丈夫だワトソン。俺は、そういうのは個人の自由だと思うぞ」

「他人行儀！ 距離を取らないでよっ！」

アリアの心配もなんのその、はたから見れば漫才のような光景に、アリアは呆氣にとられる。

そんなアリアに気づいたのか、ワトソンは一度咳払いをして、

「話が逸れたね。ボクが君たちを呼び出した理由だけ……アリア。君に言いたいことが、2つある」

「2つ……?」

「そう。1つは、ボクは君に正式に婚約を申し込みに来たということ。そして、もう1つは——」

ワトソンはそこで一度切り、

そして、告げた。

「キンジとレンとのパートナー関係を解消してほしい、ということだ」

——その瞬間。

アリアは、すべてがどうでもよくなった。ワトソンが実在していたこと、婚約を申し込まれたこと、なにやらキンジと面識があるらしいこと、それに心が揺れていること。それらすべてが、一気に思考の彼方へと飛んだ。

代わりに残ったのは。

燃え上がるような怒りだった。

「いきなり現れたと思ったら、ふざけたこと言ってくれるじゃない……ケンカを売りたいなら、素直にそう言いなさいよ」

両腿のレッグホルスターから2丁拳銃ガバメントを抜き放ちながら、アリアはワトソンを睨みつける。怒りの度合いが大きすぎて、逆に頭は冷えている。常にはない怒り方だと言える。

つまりはそれほど、アリアにとって遠山キンジと有明錬は大きな存在になっていったということだ。

対してワトソンは、飄々としていた。柳のようにアリアの怒気を受け止めながら、しかし視線は組み合わせている。

剣呑な雰囲気がある場を満たし、あわや撃ちあいに発展するかわれられた時、沈黙を保っていた（正確には呆けていた）キンジが介入した。

「ち、ちよつと待てよエル！ お前、急に日本こっちに来たと思ったら、何言いだしてんだ!？」

「久しぶりに会っておいてこういう言い方はどうかと思うけど……少し黙っていてくれるかな、キンジ。これはボクとアリアの問題だ」

「そんなわけにいくか！ 俺たちだって立派に関係あるだろ!？」

声を荒げるキンジに、ワトソンは困ったように眉を寄せながら、

「落ち着きなよ、キンジ。これは、決して悪い話じゃないんだ。キンジとレンにとつても……そして、アリアにとつてもね」

「なんですって……？」

拳銃の銃口はワトソンに向けたままで、しかしアリアは一応話を聞く気にはなった。パートナーを解消するのがアリアたちにとつていい話など、一笑に付すべき言い分だが、それでもそこにどういった意図が込められているのかは気になった。

ワトソンは満足したように一度頷くと、

「最初に言っておくけれど、ボクはアリア、君の事情を知っている。君の母親が拘留されていることや、キンジ達をパートナーにしたことだけでなく、『イ・ウー』のことについてもね」

「また『イ・ウー』か。大人気だな、そいつらは」

「人気と言えばそうかもね。なにせ、『イ・ウー』の動向には、洋の東西、そして表裏問わず、世界中の組織が注目しているんだ」

そんな連中と戦つてたのか俺は……、とキンジは頭を抱えた。

と同時に、

(てことは……こいつも、何かしらの『組織』とやらに所属してるってことか。一般どころか武偵さえ知らないような『イ・ウー』の情報を持つてるレベルの。どうして、俺の周りにはこう、普通じゃない連中ばかり集まるんだ……?)

今まで知らなかった友人の秘密に辟易とし、ため息が零れる。

その様子を横目で確認しつつ、アリアが問いかける。

「それで？ あんたがあたしの事情を知ってることと、キンジ達とのパートナー関係を解消することが、どう関係あるっていうのよ」

「簡単な話だよ。アリア——ボクが、君のパートナーになる」

その言葉に。

アリアは、動揺をあらわにした。

「ど、どういうことよそれ？」

「そのままの意味だよ。自慢じゃないが、ボクは強いよ？ 『イ・ウー』に対する情報だって多く持っているし、連中に多くいるステルスや怪物たちへの対抗策だって持っている。なんなら、『リバティー・メイソ

ン』の力を使つてもいい。……その代わりに、君にはボクと結婚してほしい。母親を助け出すことも、約束しよう」

——それは、破格の条件と言つてよかつた。

ワトソン個人の力量はともかく、情報力や組織力はアリアにはない大きな武器だ。現状、アリアのチームは『イ・ウー』に対し、前情報があほ無しの迎撃戦しかできていない。情報があれば先手を打てる可能性があるし、組織だつて動くことができれば戦闘や包囲も楽になるだろう。そう言つた意味では、ワトソンとの契約は、まさに値千金と言えた。

しかし。

アリアは一切迷わない。拳銃をホルスターに仕舞い、悠然と腕を組んで、ワトソンの言を切つて捨てる。

「あたしのパートナーは、この世でただ2人、キンジと錬だけよ」

その一言は、なによりも雄弁だつた。

ワトソンの言葉など、一顧だにしていなかった。

アリアの台詞に、キンジの胸にジンとしたなにかが沸き起こる。それはきつと、嬉しさと照れくささが混じつた何かだつたのだろう。

そんな2人をワトソンは見つめていたが、やがてゆるやかに首を振ると、

「婚約者である君に、こういう言い方はしたくなかつたけど……はつきり言おう。君がどれだけなにを言おうと、それは君のエゴだ。キンジたちを、危険に巻き込んでいることに変わりはない」

「なつ……そ、そんなことわかつてるわよ！ けど、それでもキンジたちはあたしのそばにいてくれて——」

「それは本当に、混じりつ気のないキンジたちの意思かい？ 拒絶は全くされなかつた？ 進んで戦場にやってきた？ 同情はなかつたと言ひ切れる？」

「そ、れは……」

アリアは、言葉に詰まつた。

ワトソンに指摘されたことは、まさしくアリアたちの歪みと言える。

拒絶はされた。任務にはアリアが引つ張り出した。母親の境遇に同情された余地はある。

それらを内包しながら形成されたパートナー関係だ。アリアの心のどこかで、そのことが棘として残っていたことに、間違いはない。意気消沈するアリア。それを見かねて、キンジが口を出す。

「言いすぎだ、エル。確かに、無理やりだったところもあったが……俺は、今はまだ武偵だ。こいつからの依頼は完遂する。そもそもとつくに2人ほど戦っちゃったし……もう、とことんまでやりあうしかないだろ」

「それも、ボクが肩代わりしよう。もともと、アリアとの婚約がある以上、ボクの役目だ。これ以上君たちが傷つく必要はないよ。……いや、訂正しよう。ボクは、君たちに傷ついてほしくない」

「な、なんでそんなにお前が俺たちのことを気遣うんだよ」

そう、キンジが聞いた瞬間だった。

ワトソンの頬が赤く染まり、所在無げに髪の毛を触り始めた。

そして、ぼそぼそと小声でつぶやく。

「それは、その……君たちが、ぼ、ボクの友達だから……」

「? なんだ、はつきり言えよ」

「だっ、だから! 君たちは友達だから、危険な目にあってほしくないんだよ!」

羞恥心を誤魔化すように声を張ったワトソンに、キンジは若干圧される。

その温度差を見て好機と見たのか、アリアが沈んだ気持ちを持ち直しつつ、ワトソンに指をつきつけた。

「そ、そもそもあんた、キンジたちとどういう関係なの!? さっきから聞いてれば、あんた、あたしに婚約を申し込んでるわりに、キンジたちのことばかり気にしてるみたいじゃない!」

「どういう関係って……説明、してなかったのかい? キンジ」

「あー……どうせここで会うことになってたんだし、その時にまとめてお前が説明するもんだと思ってたからな」

「ものぐさだなあ、君は。……アリア。彼とレンはね、ボクにとっての

『真実の友』なんだ」

『真実の友』……？』

それは確か、アリアの曾祖父であるシャーロック・ホームズが、J・H・ワトソンに対して使った言葉だったはずだ。その話は当然ワトソン家にも伝わっていたのだろうが、そんな重大な言葉を当てはめたということとは、それだけ彼らの仲は深い物ということだろうか？

しかし、その疑問にはワトソンがすぐに答えた。

「といつても、シャーロック卿が言ったのとは、また別の意味だけだね。彼らは、ボクの本当を知っている。だからこそその、『真実の友』なんだ」

「あんたの、『本当』って……？」

「ごめん。それは、言えない。……それはそうとして、キンジ。今日、レンがいなかったみたいだけど、彼はどこに？」

アリアから視線を変えて、ワトソンはキンジに訊ねた。

対するキンジはがりがり頭をかきつつ、

「それが、アドシアードの初日以来、姿が見えないんだよ。実はその日、ある犯罪者が……まあ、知ってるなら言うが、『イ・ウー』のメンバーが襲撃してきたんだが、そいつを逮捕した後から、鍊がいなくなった。その犯罪者は、鍊がどこ行ったか知らないそうだし、連絡も取れないから行方が分からない。まあ、あいつがふらつといなくなるのは1年の頃も何回かあったし、いつのまにか特秘任務シールドに行っていたからな。そこまで心配はしてない」

「ふむ……ちよつと気になるけど、キンジがそう言うなら、大丈夫かな。——さて、アリア」
「なによ」

『真実の友』とやらに不機嫌になってふくれているアリアに、ワトソンは微笑みかけた。

そして、調べのように優雅な声で語りかける。

「レンがいないのは想定外だったけど……これから、この学校でボクとキンジたちを比べてみてくれ。そして、証明してみせよう。ボクが君のパートナーに、より相応しいということを」

「大した自信ね。だけどあたしは、さっきの言葉を曲げる気はないわよ」

「構わない。君が、曲がるんじゃない。ボクが、曲げるんだ」

言葉は尊大に。しかし、物腰は柔らかく。

ワトソンはアリアとキンジに対して、右手でつくったピストルを構えて——言い放った。

「ボクが、君たちの間に風穴をあけてあげよう」

* * *

Scene 2 『In Bucharrest』

ブカレスト。

かのドラキュラ伝説で有名なルーマニアの首都にして、最大の都市であるこの都の南部に、トウルゴヴィシュテという県都がある。現在でこそルーマニアの一都市ではあるが、1714年まではワラキア公国の首都として君臨していた歴史的に重要な都市だ。

そんなトウルゴヴィシュテの一角、鬱蒼と生い茂る森の中に、ひっそりと古城が建っていた。

古城とは言ったものの、歴史を感じる石壁や建築様式に反して、内部はかなり改装されている。ワラキア公国が健在だった時代からの城ではあるが、時代に即した変化を遂げているのだ。

その古城の一室、城内でもとりわけ大きく敷地を取った部屋がある。

いや、部屋というのは正確ではない。そこは、大理石の壁面と純金の浴槽が構成する空間であり……平たく言えば、大浴場であった。

適度に熱せられた湯気の向こう、湯が並々と張られた浴槽に身を沈めるのは、大浴場とは名ばかりにたった一人の少女のみだった。

天の川のごとく煌びやかに湯船にたゆたうのは、金糸を束ねて編んだかのような金の美髪。その煌びやかさに負けずに輝く、真紅の両目。ある種、人間離れた美貌を持つ彼女は、体のバランスにおいても秀でている。スラリとした肢体でありながら、凹凸は豊かなスタイル。まさに美女と呼ぶべき姿だった。

しかしその美貌を打ち消す——否、妖しく変える存在があった。

それは、彼女の背中。人間にはあり得ない、二対の蝙蝠のような翼が生えていた。

その姿を見た者は、彼女をこう表現するかもしれない。まるでドラキュラのようだ——と。

そして、真実彼女は、ドラキュラと呼ばれる種族だった。夜の王、不死者、吸血鬼、様々な呼び名を与えられた、人外の生物である。

ドラキュリア
竜悴公姫・ヒルダ。

それが、彼女を示す名だった。

「ふう……お父様、たまには帰ってきてはいただけなから……」
両手で湯を掬い、ヒルダは悩ましげに呟く。

彼女の父親であるブラドは現在、『イ・ウー』と呼ばれる組織に身を置いている。この城の城主は当然初代ドラキュラ伯爵であるブラドなのだが、前述した理由から彼は今この城にはいない。よって現在居住しているのは、ヒルダを除けば使用人代わりに暗示術メスメリズムで操った人間くらいのものだ。永の時を生きる彼女たちドラキュラにとっては、ブラドが家を空ける期間などわずかなものだが、しかしそれと退屈なのは別問題だった。

つまりはまあ、これは彼女の名誉のためにあえて控えめに表現するが、ヒルダはさみしがっていたのだった。

つまらなそうに、ヒルダは身をさらに深く沈める。結果として口元まで水が迫ってきたので、人間がやるようにぶくぶくと泡を吹かせてみたりする。

そんな風に、退屈をまぎらわしている時だった。

「ヒルダ様。小夜鳴様さよなきよりお電話です」

使用人として操っている人間が、浴室の外から声をかけてきた。

ヒルダは彼女を呼びつけ、浴室への進入を許可する。その頬には、入浴による上気以上の赤みはない。人形に裸を見られて羞恥する人間はいないので、同じ理屈だった。

ヒルダは使用人から、見た目だけは古めかしいコードレステレフォンを受け取る。年齢によらず、変なところで現代に適用している吸血鬼ちゃんだった。

聞くものを幻惑するような、妖しくも鈴のように鳴る声で、ヒルダは口火を切った。

「――Buna ziu. 小夜鳴。お前が私に電話してくるなんて、珍しいわね」

『いえいえ、一応あなたは私の娘ということにもなりますから。たまの電話くらいは、かけなければ申し訳ありませんよ』

電話の相手は、若い男の声だった。

それ自体に不快感はないのだが、発言の内容にヒルダは眉根を寄せ
る。

「ふざけないでくれるかしら。私の父は、ブラドお父様ただ一人。お前は、お父様が使う衣服と何ら変わらないということを自覚なさい」
『おや、これは手厳しい』

「それで？ 雑談のためにわざわざかけてきたわけではないでしょう。はやく本題に入りなさいな。私は今、湯浴みを楽しんでいるよ」

『おっと、淑女のバスタイムを邪魔するのはいけませんね。ではお言葉通りに……実は先日、「イ・ウー」から裏切り者が出てしまいましたね。しかも、まんまとポストーク号から逃亡されてしまったんですよ』

「裏切り？ そいつは一体どんな命知らずかしらね」

小夜鳴が口にした『イ・ウー』とは、世界的に有名な犯罪組織の名だ。そこに集うのは、一騎当千の怪物たち。裏切りとなれば、それらが最悪の悪夢として牙を剥く。正気の行動とは思えなかった。

小夜鳴も電話の向こうで『同感ですよ』と同意し、

『裏切り者の名は、カナ。本名を、遠山金一。元ですが、日本の武偵だった男です』

「そう……確かに面白いニュースではあるけど、世間話の域は出ないわね。私は別に『イ・ウー』の所属ではないし、どうでもいい話だわ」
つまらなそうに指先を光に透かしながら、ヒルダはすげなく返す。

しかしその反応は予想されていたようで、

『もちろん、ここまではならあなたには関係のない話でしょう。しかし、

ブラド伯爵からのお願いということなら、どうでしょうか?」

「……詳しく話しなさい」

『さきほど裏切り者が脱走したと話しましたが、その人物を取り逃したのはブラド伯爵なのですよ。もともとは、「イ・ウー」に潜り込んだネズミが……ああいえ、とにかく、彼は大層お怒りです。彼が、そういう風に虚仮にされるのが嫌いなのは知っているでしょう?』

「なるほど……それで、私に何をしろと?」

『数日前、遠山金一が中国の香港で目撃されましたね。藍幫ランバンと接触したこともわかっています。その後の行方は、不明ですがね。おそらく、藍幫が秘密裏に移動させたのだと思いますが』

「へえ。今は行方知らずとはいえ、よく発見できたわね」

『「イ・ウー」にも諜報担当はいるというわけですよ。……遠山金一の行動から察するに、彼は世界の有力者とコンタクトを取ろうとしているのでしよう。そして、そうならば、ほぼ間違いなく接触するであろう組織があります』

もったいぶるような言い方の小夜鳴に少しイラつきつつも、ヒルダにも話が読めてきた。

遠山金一は次なる有力者の場所へ現れる。父は、遠山金一に怒りを抱いている。そして、父からヒルダへお願い。

となれば。

『遠山金一が懇意にしていた一番の組織は、「バチカン」。つまり彼は、近いうちにローマに現れるはずですよ。……ここまで言えば、おわかりですね?』

「消せ——ということ、いいかしら?」

凄惨な笑みを浮かべながら、ヒルダは即答する。

その返答に満足がいったのか、電話口の相手は声の調子を一段階上げた。

『Fii Bucuros、すばらしい回答です。「同道者」と遠山金一を消せ。それが、ブラド伯爵からあなたへの指示ですよ、竜悴公姫』

「正解が遅いわ、小夜鳴。お前、クイズの司会者には向いてないわね。

……いいでしょう。人間を操って遊ぶのにも飽きたし、次はバチカンの間抜けな聖女どもをからかいに行きましようか。そのついでに、お父様の怒りに触れた哀れな子羊を殺してあげる」

『期待していますよ。——では』

ブツツ、と。その言葉を最後に、通話は切れた。

ヒルダは、通話中ずっと控えていた使用人に電話を投げ渡し、ゆるやかに湯船から立ち上がる。

何百年経とうと変わらず瑞々しさを保つ肌が、水を弾く。見る者を魅了するであろう肢体が、惜し気もなく晒される。

そして。

夜の王女、竜悴公姫・ヒルダは、静かに宣告した。

「さあ、痺れるような戦を始めましようか」

——バチリツ、と。

ヒルダの金髪から、紫電が迸った。

* * *

Scene 3 『Monster Lord』

『イ・ウー』と呼ばれる組織がある。

世界的な犯罪組織であり、『最強の無法者集団』との呼び声も高い。歴史に名を刻むほどの一騎当千の怪物たちが、数多籍を置くその組織には、一つの本拠地があった。

名を、『ポストーク号』。

超アクラ級原子力潜水艦。それが、この船の分類になる。といってもイメージが沸きにくいだろうが、300メートル以上の鉄の塊を想像してもらえれば手っ取り早い。側面には白文字で『伊・U』と書かれている。日本、ドイツ両国における、かつての潜水艦のコードネームだ。

そしてそのポストーク号には、いくつかの部屋があった。メンバーひとりひとりに割り当てられたその部屋には、当然格差がある。具体的に言えば、実力が高い者ほど、いわゆるいい部屋に住む権利が与えられる。

ただし。

この男だけは、例外だった。
シャーロック・ホームズ。

表の世界で知らぬ者なき、希代の名探偵だった男。100年前のヨーロッパを主な舞台として、あまたの凶悪犯や怪盗、果ては怪人や怪物を打倒してきた武偵の始祖とまで呼ばれた男だ。

オールバックにした黒髪と、高い鷹鼻。パリッとした黒スーツに包んだ体は、瘦身ながらも不思議な力強さを感じる。全体的に若々しく、しかしその老練とした雰囲気には、確かに年月がにじみ出ていた。

安楽椅子に体を預け、腕を組んでいるシャーロックは、知性溢れる瞳を虚空に向けている。その口元には緩やかな弧が描かれており、彼を穏健な人間に見せていた。

部屋のほぼ中央に位置された安楽椅子に揺られるシャーロックの視界には、左右の壁が映っている。つまりはそれだけ部屋が狭いということであり、『イ・ウー』のリーダー・『教授』プロフェッサーシャーロックの部屋としては、やや不釣り合いと言えた。かろうじて、部屋の隅にある棚上の蓄音機から流れるクラシックが、この男らしい点だろう。

——と、その時部屋のドアがノックされた。

「入りましたえ、ツアオ・ツアオ君」と、シャーロックが促す。

それに一瞬戸惑うような沈黙が返り、しかしやがてドアは開いた。シックな木造の扉の向こうから姿を現したのは、一人の少女だった。

身長は小柄で、10代前半だろうと推測できる。艶のある黒髪を玉付きのリボンでツイントールにし、清朝中国の民族衣装に身を包んだ、いささか気の強そうな少女だ。目じりには赤い化粧が施されており、目つきの険しさが増している。

ツアオ・ツアオと呼ばれたその少女は、呆れたような表情で肩を竦め、

「入る前に誰か言い当てるの、やめてほしいネ。びつくりして心臓止まるかと思ったヨ。そうになったら、慰謝料請求するヨ。大体、なんで私とわかったネ？」

無然とした様子のツアオ・ツアオに、シャーロックはいまだ穏やか

に腕を組んでいる。

そして、子供に物事を教える親のような声音で、ツアオ・ツアオに種明かしを行う。

「なに、簡単な推理だよ。この部屋に来る君の足音から、体重を推測した。今の『イ・ウー』メンバーでその体重に当てはまるのは、君だけだ。ちなみに、数値は——」

「わっ、わわっ、やめるヨ！ 乙女の秘密バラすのよくないネ！」

かあつ、と瞬間的に頬を紅潮させたツアオ・ツアオが、慌ててシャーロックの言葉を止める。

そうリアクションを取ることは推理できていてやったのだから、シャーロックもなかなか質が悪い。子供っぽい、と言い換えてもいいだろう。

というかそもそも、一口に『体重』といっても、その値は一律ではない。その日の衣類や装備品などによって変動するはずなのだ。

しかしあることかシャーロックは、足音の中にわずかに混ざった衣服や装備品が擦れる音や、かすかな物音から、『純粋な体重』以外をより分け、正確な数値を導き出したのだ。

やっていることは常人離れた絶技なのだが、それをからかうために使う時点で、シャーロックの人柄が伺える。なにせ、判別方法ならこれ以外のやり方もあったのだ。たとえば、扉の隙間から漂う微量の体臭から推測するとか。……こっちの方がまずいかもしれない。

とまれ、シャーロックは怒れる少女に、表情だけは申し訳なさそうにして、

「これはすまない。英国紳士としてあるまじき行動を取ってしまったね。それで、ポストークから下船したいという君の要求だけど……おや？ どうしたんだい、そんな苦虫を噛み潰したような顔をして」「……なんでもないネ」

まだツアオ・ツアオは一切来訪の目的を告げていなかったはずなのだ、シャーロックはびたりと当ててきた。まるで反省の色が見えない。

げっそりした顔をするツアオ・ツアオだったが、やがて諦めたのか

開き直って、

「用件がわかってるなら、話は早いネ。あの遠山キンイチが『イ・ウー』から離反した。こうなったらもう、戦争ネ。やつは兵隊を引き連れて、また戻ってくるはずヨ。私、^{ツオ}金にならない戦はしない主義ネ」

「ふむ……」

ツアオ・ツアオの言い分に、シャーロックはひとつ頷いて黙考する。

——『イ・ウー』のメンバーから裏切り者が出て、1週間が経った。

今から1週間前、カナというメンバーが、その日ボストーク号に侵入した襲撃者と共に脱走を図った。小型潜水艇『オルクス』を1艇盗み、まんまとこの犯罪者の巢窟から抜け出したのだ。

カナは、遠山金一という名の元武偵である。去年の12月にシージャック事件において『イ・ウー』に加入した人物なのだが、ここに来て彼女^{かれ}は『イ・ウー』から造反した。こうも簡単に裏切ったとなると、おそらく最初から『イ・ウー』に心を許してなどいなかったのだろう。そのうえで所属していたとなると、寝首をかくなどの狙いがあつたはずだ。

となれば、『正義の味方』である金一の今後の行動は読める。おそらく、勢力を形成し、『イ・ウー』討伐に動くだろう。現に、すでに裏の世界の一角たる組織『藍幫』への接触は確認されている。

つまり——近いうちに、戦争が起こる。

金一脱走の報をツアオ・ツアオが聞いたのは、昨日とある任務から帰ったときだ。後に起こるであろう戦争を予期した彼女は、こうしてシャーロックに下船を要求しにきたのだ。

もともとツアオ・ツアオは、『イ・ウー』正規メンバーというわけではない。先述した『藍幫』から派遣として在籍しているにすぎないのだ。いわゆる『裏組織同士のつながり』を構築するためでもあり、単純に『イ・ウー』の金払いがいいという理由もある。ツアオ・ツアオは、小型潜水艇『オルクス』の製作など、^{メカニツク}技師として出張し、その代金として莫大な金を貰う。それが、『イ・ウー』とツアオ・ツアオの関係だった。

しかし、この状態はいただけない。このままここに留まっていれば、激闘に巻き込まれてしまう。そうなれば、自衛の為戦わざるを得ないだろう。そして、それは結果として『イ・ウー』に利する行為である。他人の利益のために無償で働くというのは、どうにも我慢できなかつた。

とはいえ。

それはつまり、裏を返せば報酬次第では協力もやぶさかではないということだ。

「ならば、追加報酬を出そう。襲撃時の迎撃にあたってくれれば、相応の報酬を用意するよ」

「^{ふんっ}?、私を甘く見るよくないネ。戦は領分ちがいヨ。その私を動かさう思うなら、誠意を見せるヨロシ」

お前の提案なんか鼻で笑ってやる、と言わんばかりに尊大な態度のツアオ・ツアオ。

しかし、それは微笑み混じりのシャールロックに、あつさりと覆される。

「1勝につき1000万香港ドル。これでどうかな?」

「……………え?」

シャールロックの提示した金額に、ツアオ・ツアオはあんぐりと口を開ける。

当然と言えば、当然だ。シャールロックが言ったのは、日本円にして1億円を超える額。それを、一度勝てばその都度報酬として出すと言っているのだ。驚かない方が無理だった。

呆気にとられるツアオ・ツアオに、シャールロックは再度問いかける。「君に対する条件としてはそう悪くないと推理しているが、どうかかな?」

「ど、どうって……本当に、その条件でいいある力?」

「もちろん。僕はね、ツアオ・ツアオ君。次の戦いは、それほど価値のあるものになると思っっているんだ」

ここではないどこかに焦点を合わせているかのような目線に、ツアオ・ツアオはなんと答えればいいのかわからない。

しかし、とはいえこれは破格の条件だ。確かに、今ここにいるツアオ・ツアオは戦闘が領分ではない。だが、それならば戦闘が得意なツアオ・ツアオが戦えばいいのだ。

(技師である私は、戦闘なんてできないと思ってるか？ 歇洛克^{シャーロック}。だからこそその好条件だと思うが、それが間違いであると教育してやるネ)

心中でほくそ笑みながら、しかし表面上は悩んだ振りをしながら、ツアオ・ツアオは了承した。

これで1億ゲット！ とテンション上げるツアオ・ツアオだったが、そこに冷や水のように言葉が浴びせられる。

「ああ、そうそう。もちろん、戦いが得意な君の姉妹が条件を満たしても報酬は出すから、安心しなさい」

「え……」

ぴきり、とツアオ・ツアオの頬が引きつった。

それから数秒して、最初から自分のたくらみが見破られていたことに気付き、からかわれたようで逆切れし、しかし結局「シャーロックだから」という理由に落ち着き、微妙な顔をしながら、再度首肯した。(やっぱり、こいつ嫌いネ。諸葛と同じ感じがするヨ)

藍幫の上役の顔を思い出し、嫌な気分になりつつ、ツアオ・ツアオは退室する。

その直前、シャーロックはツアオ・ツアオを呼び止め、

「戻るついでに、セーラ君や、金銭で動く他のメンバーに声をかけておいてくれるかい？ 僕が報酬と引き換えに戦いを頼みたいと、そう言っておいてくれ」

「……あー、^{はいはい}??。もう素直に言うこと聞いとくことにするヨ。伝えとくから、安心するヨロシ」

背中に哀愁を漂わせながら去っていくツアオ・ツアオを見送りながら、「すこしからかいすぎたかな？」と茶目つ気まじりの口調でシャーロックは零した。

それから、彼はここではないどこかを見据えながら、

「さて、遠山金一君。僕は、十分な戦力を用意して待っているよ。ある

いは、生涯最後の戦として、ぜひとも華々しいものにしてくれることを期待しよう」

シャーロックの脳裏に浮かぶのは、『イ・ウー』に身を置きながらも、その瞳の内に強い正義感を宿した、遠山金一の姿だ。

彼ならばあるいは、死期の近いこの老体に、届きうるかもしれない。

——しかし、だ。

「だけど、なぜかな。僕の『条理予知』が言っているんだ。主役は君じゃない、と」

目下最大の敵は、遠山金一である。それは間違いない。子孫である神崎・H・アリアや、そのパートナーこそがそうなる予定だったのだが、少しレールを逸れている。これも、寄る年波の影響だろうか。

だが、だからこそ面白くもある。名探偵シャーロック・ホームズの推理が導き出す『主役』とは、果たして誰を指しているのか？

その存在を思い、シャーロックは期待とともに言葉を紡いだ。

「おいで、主人公。時代の遺物として、この僕が相手になろう」

* * *

Scene 4 『Lonely Girl』

理子・峰・リュパン4世は悩んでいた。

端的にすぎる言い方ではあるが、しかしこれがおそらく最適な表現だろう。現在彼女の頭を占めていることは多々あれど、大別すればそれは『懊悩』の一語に尽きる。

5月半ばの空は、薄暗い。梅雨が近づいてきたからか、気温の低下とともに曇り空が多くなつた気がする。

しかしそんな空からでも、雲を突き抜けて淡い陽光は届く。柔らかな日光が差し込む東京都内のあるホテルの一室で、理子の物憂げな表情が照らされていた。

武偵高の制服に包まれた、しなやかな、だがメリハリのある体躯をソファに深く沈め、『表』では見せないような険しい目つきで、ガラステーブルの上に置かれたノートパソコンに映る、数十枚の資料に視線を走らせる。……が、やがて大きく息を吐き出しながら、背もたれに頭を預けた。

ふわふわとした金髪のツーサイドアップテールが、金色の滝のようにソファを流れる。それをうっとおしげに払うと、理子は一人、口を開いた。

「堅牢……以外に、言いようがないよねえ、これ」

理子が今眺めていたのは、横浜にある紅鳴館こうめいかんという屋敷の各種資料だった。見取り図は言うにおよばず、一部屋ごとの細かい内装や、セキリティシステムの詳細なデータなど、その方向性は多岐に渡る。

そして、その中で最も枚数が多いのは、セキリティに関する資料であった。

その情報が理子の一番知りたことだから、という理由もある。だがそれ以上に、単純にセキリティの数が多すぎるのだ。事前に調べられただけでも、監視カメラ、アナログ・デジタルの各種キー、赤外線装置まで備えてある。一介の館には不釣り合いなほどの防犯態勢だった。

そして。

なよりの問題は、それら全てのセキリティよりも、家主の方にあった。

ドラキユラ
竜悴公・ブラド。

真正の吸血鬼であるその怪物が、紅鳴館の主だった。『魔臓』という特殊な器官に支えられた不死性、たやすく人を嬲り殺せる怪力。およそ、人間が勝てる相手ではない。

その怪物の別荘の一つである紅鳴館から、しかし理子はとある物を盗み出さなければならぬ。

大好きだった母親の形見である、十字架のネックレス。かつて理子が幼いころ、『リユパン家の家宝』とまで呼ばれたこのネックレスを母親に譲り受け、以来それは理子の宝物だった。この十字架に使われている金属が『超能力ステルス』という『不可思議な力』を理子に与えてくれるということ抜きにしても、たとえ一切の価値がなかったとしても、最愛の母からの贈り物は、理子の心の拠り所だった。

それを、

(ちくしょう……！ ブラドのヤツ、あたしの宝物を奪いやがって

……ッ！)

顔を憎しみに歪め、理子は歯の根を噛み合わせる。

——理子は、4月にとある事件を起こしていた。

連続武偵襲撃犯『武偵殺し』として、そして大怪盗アルサーヌ・リュパンの曾孫として、神崎・H・アリアとそのパートナーに、ハイジャックという手段を取って戦いを仕掛けた。

しかし、その結果は敗走。甘く言って引き分け。理子は、自身が所属する組織『イ・ウー』へと撤退せざるを得なかった。

そしてそこで、敗北の罰として組織からの除名——『退学』させられ、加えてブラドに十字架を奪われたのだ。なんのつもりか、紅鳴館に保管するという情報だけを残して。

——ブラドが、憎い。

そもそも、理子が『イ・ウー』に身を寄せたのも、アリアたちと戦う羽目になったのも、全てはやつこそが元凶なのだ。

理子が8歳の時、理子の両親は他界した。そこを境に、リュパン家は没落。嫡女であった理子も、親戚を名乗る者に養子に取られ、フランスからルーマニアへと移り住んだ。

しかしそれこそが罠であり、理子は親戚を騙ったブラドに監禁されることになるのだ。優れた血統である理子を、次なる世代への礎——つまりは、優秀な子供を産むための母体として保管するため。

幸い、そこから脱出することは母の形見のおかげで可能だったが、逃亡先である『イ・ウー』までブラドは追ってきた。自由を求めブラドに決闘を挑んだ理子だったが、あえなく敗北。しかしその成長を見たブラドは、『初代リュパンを超える存在になれば、解放する』という条件を課した。

その結果としてアリアへの襲撃があったわけだが、目論見は失敗。状況はさらに悪化し、母親の形見まで取られてしまった。

「あたしからなにもかも取り上げるのが、そんなに楽しいかよ……！」
両目から涙を流しながら、理子は呻く。

けれども悲嘆に暮れてばかりもいられない。こうなった以上、理子は紅鳴館から十字架を盗奪するつもりだ。だから今、その突破口を探

して資料を漁っていたのだ。

ぐしぐしと涙を腕でぬぐいながら、理子は資料を睨みつける。だが、何度見なおしても、一人で突破できるとは思えなかった。館全体も堅牢だが、特に十字架が隠されているであろう地下金庫は目も当てられない。

これでは、盗むのは不可能に近いだろう。

——一人であれば。

「……やっぱ、キーくんたちしかいないよねえ」

苦笑しながら、理子は小さく呟く。

一人で無理なら、人数を増やせばいい。神崎・H・アリアとそのパートナーを使い、盗み出す。それが、理子の考えた突破法だ。

かつての敵ではあるが、だからこそある意味その力量は信頼している。丁度、アリアには母親の神崎かなえの冤罪に対する証言、キンジには姉であるカナの情報、食いつきそうな報酬があった。

問題は。

その2人と接触するならば、絶対に避けては通れないとある少年だ。

今まで険しかった理子の表情が、今度は悲しそうに、あるいは困ったように苦笑の形を作った。

そして、ぽつりと、

「……それは、いやだなあ。もう、鍊は巻き込みたくなかったな」

零した理子の声に、いつもの明るさは無かった。

室内に静寂が満ちる。その間、理子の頭にあつたのは、あのハイジャック事件での有明鍊との戦いだつた。

あの時、鍊が言ってくれたいくつもの言葉。いくつもの行動。それを思い出し……しかし、理子は首を左右に振った。

「だめだよ、理子。そんなこと考えてちゃ。お母様の十字架を取り戻す。それだけ考えなくちゃ……だから、それは、考えちゃだめだよ」
自分に言い聞かせるように、理子は口に出す。

それから数秒目をつむり——開いた時には、『武偵高の理子』に戻っていた。

「よーっし、やめやめ！　こんなことばっか考えてちや、辛気臭くなつちやうもんねっ。りこりんに暗いのなんて似合わないぞー！　おー！」

朗らかに笑って、理子は両手を天に突き上げる。

それはどこか芝居めいていて、虚像のようだったが、それでも理子は明るく振る舞い始めた。まるで、何かを忘れようとするかのよう

に。
「さーって、気晴らしにテレビでも見よーっと。フリフリのおにやのこが出てくるアニメでもやってないかなー……およ？」

テーブルの上に置いていたりモコンでテレビをつけると、そこではちやうど動物園の特集をやっているところだった。

2年ほど前に開園した動物園で、ここからもそれなりに近いところにある。やたらと芸の上手い猿がいるとかで、かなり人気はある。もつとも、メインであるその猿は今、さらなる興行として、日本の近隣国を周っているそうだが。一か月ほど前にスタートして、今はフィリピンにいるらしい。前回は、中国に行っていたとか。

しかしそれでも一定の人気はあるようで、モニターの中では、多くの来園客が動物を観覧していた。その中には、親子連れの様も見える。

(そういえば小さいころ、お母様とお父様に連れていつてもらったな……)

フランスで家族と過ごしていたころの記憶が蘇り、理子の目じりに雫が浮かぶ。

それを慌ててぬぐいながら、

「そういえば、あの時、お母様言ってたなあ。『いつか、好きな人とまた来なさい』って……」

もう10年近く前の記憶だったが、なぜかその台詞だけは頭に鮮明に残っていた。

好きな人か……と、理子は胸中で呟く。

そんな人、犯罪者である自分にできるのだろうか。いや、できたとして、相手が応えることはないだろう。犯罪者である自分すら受け入

れて愛してくれるほど度量のある人間など、そうそういない。

しかしそれでも、と夢想することはある。理子だって、まだ16歳の少女にすぎないのだから。

いつかは……そう、いつかは、好きな人とブラドや『イ・ウー』のことなど忘れてのんびり動物園でも周ってみたい。

「うーん、でもあの目つきの悪さじゃ、理子が攫われるとか思っちゃう人がいるかもねー。きやはーっ、ロリロリなりこりんはホント罪作りだよー！」

おどけるように、理子は笑う。

理子は、武偵高では『ロリ巨乳』として有名だ。つまりは、はなはだ不本意ではあるが、身長が小さい。武偵高の制服姿でなければ、いとこ中学生といったところだろう。アリアがかつてキンジに小学生呼ばわりされたことを考えれば、ほぼ同身長の理子も（ないとは思うが）そう見られる可能性はある。となれば、あのやたらと目つきの悪い少年と一緒にいれば、ある種犯罪者と被害者のように取られかねない。やれやれ、まったくロリというのも時には考え物——あれ？

そこでふと、理子は大いなる疑問にぶち当たった。

自分は今、何を想像していた……？

もつと言えば。

誰と歩いているところを想像した？

その答えに、たどり着いた時。

理子の顔が、一気に真っ赤に染まったのだった。

* * *

Scene 5 『Cafe Ill Sole』

6月を間近に控えた、イタリア。

首都ローマの街中に、とあるカフェテリアがある。

カフェ『ill sole』。日本語では、『太陽』の意味を持つ店名だ。イタリア人はよく陽気で気さくだと言われるが、そんなイタリア

においてなお太陽のように明るい店主が人気の、隠れた名店である。

その『ill sole』のテラス席。日本と似て温暖な気候を考慮

して設置されたパラソルの下に、絶世の美人の姿があった。

神様が彫刻したかのように、完璧な比率で配置されたその顔は、まさしく名画すら越える。理知的な青みがかった瞳も、すらりと通った鼻梁も、桜色の唇も、すべてが人を惹きつける要素だ。半ばから三つ編みにされた栗色の長髪が、淡い草色のロングスカート・ワンピースを引き立てる。衣服の上からでもわかる女性らしさを強調するようなふくよかさは、母性の現れのようなだった。

道行く男は必ず彼女に目を向け、しかし話しかけることはしない。イタリアの国民性を持ってしても近寄りがたいほどに、ある種神がかった美しさだった。

美女のシミひとつないたおやかな手が、テーブルに乗ったコーヒーカップに伸びる。ローマに住む人間にとってコーヒーとは、もはや日常生活の一部だ。日に5杯以上エスプレッソを飲む者も珍しくない。そしてそれだけに、コーヒーを主として提供する店にとって、盛隆を左右するコーヒーには力が入れられていた。

カチャリ、とソーサーから持ち上げられたカップが鳴る。触れるかどうかというほど浅く口をつけ、一口飲む。フレイバーを使わない、エスプレッソ本来の旨みが口内に広がった。

(うん。おいしい)

満足気に微笑む美女の姿に、店内からほうとため息が漏れる。近寄れずとも、視線は向けられていた。日系の顔立ちでありながら、同国の女性よりも視線を集めているというその事実こそが、おそらくはもつとも顕著に彼女の美を証明している。

——と、その時だった。

美女が座るテーブルに近づく人影があった。なにやら両手にブランド物の紙袋や箱を抱えた、東洋人の少年である。ともすればマフィアかと思うほど悪い目つきと黒の短髪が、悪い意味でマッチしている。武偵高の制服姿でなければ、美女を狙う殺し屋ヒットマンと勘違いされたかもしれない。

少年は、美女の許までたどり着くと、ドカツと乱雑に荷物をテーブルに乗せる。衝撃に、ソーサーとパニーノ（パンで具材を挟んだイタ

リア料理の軽食)が揺れて、美女が顔をしかめた。

「こーら。そんな乱暴だと、女の子にもてないわよ?」

「誰のせいだと思ってるんですかねえ……!」

柔らかな声音の美女に、少年が青筋を立てながら返した。

少年の怒りを受け流しながら、美女がこてんと首をかしげる。

「あら、じゃあ誰のせいかしら?」

「あんたに決まってるだろうがッ! なんて言葉のわかんねえ俺に、買い物なんてさせてんだよ!? ボディランゲージとあんたが書いたメモ帳使ってコミュニケーション取るの、結構大変だったんだぞ!」
「武偵憲章9条にもあるでしょ? 世界に雄飛せよって。これも勉強だと思ってる、ね?」

「ね? じゃねええええええええ! しかもこれバッグやら服じゃん! 完全にあんたの趣味じゃん!」

なんで俺がこんなことを! と喚きながら怒る少年に、美女はころころと愉快そうに笑う。

それからふと何かを思いついたのか、悪戯っぽく目を細めて、

「私一応、あなたの命の恩人なだけだな」

「うっ……それに関しちゃ、感謝してるけどさ……」

痛いところを突かれて唸る少年は、静かになりつつ椅子を引いて美女と相席する。

すかさず注文を取りに来た店員(おそらく彼も注目していたのだろう)に身振り手振りで遠慮しつつ、少年が切り出す。

「それで? 香港の次はローマくんまで来て、次は何をするつもりなんだ?」

「あらあら、もつと遊……雑談しようと思ってたのに、それを聞いてくるのね。残念」

本当に残念そうに言う美女に、再び少年のこめかみに井桁が浮かぶ。

しかし、なんとか怒気を抑え込みつつ、

「なにを言い直したかは、あえて聞かねえけど、教えてくれよ。あんたの『睡眠』が終わったら、そのまますぐ『藍幫』の飛行機でここま

来たる。なんの説明も聞いてねえんだ」

「うーん、そうねえ、あなたの好きなゲームに例えると……パーティ集めてるところかしら？　といっても、一人集まればいい方だけどね」

「仲間集め？　香港のも、それが目的だったのか？」

「いいえ。あれは、単純に逃亡先として、近くて都合がいいから寄つただけよ。昔のお礼としてここまで送ってもらえたのは、うれしい誤算だったけれど、最初から本命はこっち」

美女は瞳を閉じながら、小さくカットしたパニーノを口にして、コーヒード飲み込む。

「食べる？」と手で勧められたので、一切れ貰いつつ、

「仲間集めもいいけど、俺は早いとこ日本に帰りたいんだ。結局あそこじゃ、俺の目的はなかった。不本意だった特攻が無駄に終わっちまった以上さつきと戻らねえと、単位落として留年になっちまう」

「それは大変。私も一度弟に会っておく必要があるし、この国での用事が終わったら、一緒に日本に帰りましょ？」

「なるべく早く帰れることを祈つとくよ……」

げんなりした様子で、少年は返事した。

それからふと、美女が持つコーヒードを注視し始めた。

視線に気づいた美女が、軽くカップを傾けつつ、

「あなたも、飲みたいのかしら？」

「うんにゃ、ただ……少し前のこと思い出してさ。コーヒードなんて大して詳しくもねえのに、部屋に上がり込んでくるなり要求した、ピンクい奴が頭に浮かんだ。困った暴君だよ、あいつは」

話の内容こそ悪しぎまだったが、その表情に険はなかった。苦笑と微笑みの中間くらい、少なくとも心の底から嫌っているということはないのだろう。

なかなか素直じゃない少年に、弟の姿が重なって、美女はもう一度微笑んだ。

やがて軽食を終えた2人（主に美女の方が飲食していたが）は、会計を終え、『il sole』を後にした。

もちろん、少年の両手には山盛りの買い物が存在している。前が見

えづらいのかふらふらと歩く少年と、少し前を歩いて、手を後ろで組みながら穏やかに笑む美女。お嬢様とお付きの使用人に見えなくもなかった。

荷物を取り落さないように気を付けながら、少年が抗議する。

「つーか、冷静に考えたら、なんで買い物？ しかも、なぜ俺が荷物持ちだし」

「だって、せつかくイタリアに来たのよ？ いいものが安く買えるなら、迷わず買わなきゃ。武偵憲章5条『行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし』、よ」

「なんつー武偵憲章の曲解だよ。しかも後半の質問に対する説明がねえ」

「そつちは、答えるまでもないでしょう？ いつの時代も、女の子の買

い物は、男の子が持ってあげるものよ。ほーら、がんばれ男の子っ」

「……これ、『睡眠』が終わったら、また恥ずかしがるんだろうなあ」

「？ なんの話？」

「いや、なんでも」

くるりと振り返ってくる美女に対し、少年は誤魔化すように答える。

「そう？」と答えた美女は、それから楽しそうに周囲を見渡した。

ローマは、世界でも屈指の観光地である。歴史的な建造物も多く、年間700万人を超える観光客が訪れる名所だ。しかしそれだけでなく、普通に街をぶらつくだけでも、日本人にとって十分に楽しめるだろう。そもそも建築様式がまるで違うので、街並みが日本のそれとはがらりと変わっている。コンクリートジャングルと揶揄される東京などとは違って、建物が密集しつつも、無機質な感じはしない。なんとというか、普通に建っている建物の一つ一つが固有のデザインを持っているのだ。

また、ローマには広場も多く、絵画の展覧や音楽を奏でる人たちもいて、十分に賑わっている。これもまた、『陽気な国民性』というものの顕れなのだろう。ただ散歩するにも、目に耳に楽しい街だった。

そんな風にローマの街を満喫しているところを邪魔するのは若干
忍びなかったが、少年は訊ねてみた。

「ところで、さっき言ってた仲間集めって、どこにいくんだけ？」

「ん？ んー……『バチカン』って言ってるの？」

「まあ、名前くらいは」

自身の頼りない知識を掘り起こしながら、少年は曖昧に頷く。

バチカンと聞いて一番に頭に浮かぶのは、やはりバチカン市国だろ
う。『世界最小の国』として有名な、イタリア国内……否、ローマ市内
に収まる『国』だ。日本の国土の、約859分の1の面積といえ、い
かに小さいかがわかるだろう。

しかし美女は、少年の反応に困ったように眉を寄せて、

「たぶん、あなたが思い浮かべてるバチカンと、私が言ってる『バチカ
ン』は、違うものだと思うわ。まあ、それはおいおい説明するとして
……私たちが向かうべきは、ローマ武偵高よ。そこに、私が会おうと
している人がいるの」

「……マジ？」

美女の説明のどこに反応したのか、少年は目を見開く。

「よりによってここかよ……」と微妙な顔をする少年。彼の事情を知
らない美女は頭にハテナを浮かべたが、すぐに気を取り直し、

「さっ、少し急ぎませうか。なるべく早く終わらせて、日本に戻りま
しょう？ 誰かさんが留年する前に」

「いや連れまわしてるのはあんたなんだけど……」

理不尽にうなだれたくなる。やらないが。

美女はそんな少年の横に並んで、

「——それじゃあ、行きませうか、鍊」

「——あいよ、カナさん」

美女の言葉に、少年が答えて。

そして2人の姿は、ローマの雑踏の中へと消えていった。

2.6. 世界を揺らす最初の一波

——俺が出航して、どのくらいの時間が経ったのだろう。失われつつある時間感覚の中で、俺はふとそう思った。

1時間にも1日にも感じる、引き伸ばされた曖昧な時間。それに憔悴している俺の顔を、緑やらオレンジやらの計器の光が照らしだしている。

体は、あまり動かせない。スペース的には、おそらく3人は入れるだろうが、凝り固まった体が、行動を拒絶する。

……状況を、整理してみよう。

5月7日。その日は、東京武偵高を舞台に、国際武偵競技会『アドシアード』の開催初日だった。しかし突如、誰も予想しえなかった『学園島内での生徒失踪』という前代未聞の事態が起こる。その犯人である『イ・ウー』とかいう犯罪組織のメンバー、ジャンヌ・ダルク30世の目的は、星伽白雪の誘拐。一度は成功しかけたこの計画だったが、後に俺を含めた武偵高の生徒数名による対処により瓦解。事件は終着を見た。

が、俺はジャンヌ逮捕後、彼女と2人になり、峰理子の居場所を問いつめた。結果として『イ・ウー』本拠地である原子力潜水艦『ボストーク号』へ向かうための手段——小型潜水艇の隠し場所を教えるもなかった。俺はこいつを利用して、少数精鋭による理子救出作戦を計画したんだが、これが、まあ、その……ちよつとしたハプニングがあった、単騎で『ボストーク号』へと潜航する羽目になってしまった。

というのが、現状である。

……いや、こんなこと思い出してる場合じゃねえんだ。本当は。

なぜなら、俺が今向かってしまっているのは、『イ・ウー』とかいう犯罪組織の本拠地。そのメンバーを俺は2人ほど知っているが、どちらも戦闘力と言う面なら、Sランク武偵に匹敵していた。つまり俺が逆立ちしても勝てねえ相手なわけだが……そんな連中や、ジャンヌの口ぶりからしてそれ以上の奴らがうようよいるってわけだ。そんな場所へ特攻をしかけているという現状は、もう片足を棺桶に突っ込ん

でいることに等しい。今まではなんとか生き残ってこれたが……これらもう、さすがに無理かもしれねえ。

小型潜水艇を操作して引き返すことはできない。この船は現在、フルオートコントロールシステム全自動潜航機構なるものに従い、ボストーク号へ向けて自動操縦中だ。つまり俺が動かしてるわけじゃないので、進路を変更することもできない。クソ、こんなことなら車輛科クルマの自由履修で習つとくんだった。

「かといって、応援も呼べねえしな……」

俺は制服のポケットに入れていた携帯電話を取り出し、液晶画面に目を向ける。

しかしそこには、黒い画面のみが映るだけだった。どうやら、ジャンヌの事件の際に海水まみれになったことでぶつ壊れたらしい。4月にもぶつ壊れたつてのに……また買い替えなきゃいけねえのかよ。「まあ……それも生きて帰れたらの話だけだな」

不安が、口をついてこぼれ出す。

……やべえな。状況の難解さに、心が弱気になっている。

細く長く息を吐き出し、自分を落ち着かせる。こんなところで時雨に習つたりラックス方法が活きてくるとは思わなかった。

そして、緊張が解けたならば。

次に頭に浮かんでくるのは、ポジティブな考えだった。

——理子を、助け出そう。

行動の起点となった感情が、再び心の中に湧き上がる。もちろん忘れていたわけじゃなかったが、しかしそれよりも恐怖の方が大きかったことは否めない。

だが、どのみちもう賽は投げられたんだ。ボストーク号から脱出するにしても、俺じやこの潜水艇は動かせない。そこで、理子の協力は必要だ。もちろん、俺が生き延びて、なおかつあいつを助けることができ……理子本人が、それを望んでいた場合は、だが。

……あ、でも、なんというかその、戦闘はなるべく回避する方向で。ジャンヌは『怪物』とやらと戦えるなことを言っていたが、多分それ普通に負けます。なので、攫つてくる感じで助けられたらいいなと思

いました。

などと、若干情けないことを考えていると――

ガコン……、という微かな音が反響した。

「なんだ……？」

疑問に、俺の眉が歪む。

が、次の瞬間、俺の体を奇妙な浮遊感が包み込んだ。エレベーターに乗った時に似ている。

まさか……浮上、してるのか？

もしそれが当たっていたとしたら……この小型潜水艇が、目的地に到着したということの意味する。

それはつまり――と、俺が解答にたどり着く、その寸前。

「――うわっ!？」

船体が激しく揺れた。と同時に、今度は水が流れるような音が聞こえる。

なんだ、どうなった!？」

突然の事態に混乱する中……天井にあつたハッチが鈍い音を立てながら開いた。

途端差し込んでくる光が船内を照らし出すと同時に、俺の目がくらむ。長時間薄暗闇にいた影響だろう。

右手で光を遮りつつ、薄眼を開けると……、

「天、井……？」

見えたのは、青空などではなく無機質な天井だった。鉄骨が縦横無尽に取り付けられ、さらにそこには照明がくつついている。体育館の天井みてえだ。

ことここにいたって、俺は完全に現状を把握した。

つまり――到着したんだ。『イ・ウー』の本拠地、ボストーク号に。

「ついに来ちまったな……」

そんなことを零しつつ、俺は武偵手帳から取り出した鏡を使い、ぐるりと辺りを確認する。

そして周囲に人影がないことを確認し、そろそろと顔を出した。

そこはどうやら、ドックのようだった。漁港のように何艇もの小型

潜水艇が水面に浮かび、停泊している。おそらく、潜水艇が入ってくる際に抽出された海水を、同時に別の場所から排水しているんだろう。乱雑に積まれたコンテナ類は、なんらかの積み荷だろうか？

俺は、もう一度辺りを見回しつつ、ハッチから抜け出て、岸に降り立った。

即座にコンテナの陰へと身を隠し、そこで大きく背伸びをする。

凝り固まった背中からバキバキと音がなる。ずっと座りっぱなしだったからな……。

「さて、と。どうすつか、これから」

俺は、戦闘行為になつた際にすぐに応戦できるように、装備の確認をしながら呟く。その際、『スタンググローブ』も装着した。できることなら二度と使いたくなかつたが、状況が状況だしな。

とりあえず、だ。基本方針は、理子の救出セーブ。これで間違いはない。

問題は、あいつがどこにいるのかってことだ。理子の居場所としてジャンヌが案内したのがここだから、まあどっかにはいるんだろうが。もしいなかつたら、ジャンヌを『スタンググローブ』百裂拳の刑に処してやる。

さて、脳内とはいえ冗談も飛ばせるくらいには気持ちは落ち着いている。精神状態は悪くない。

理子以外に見つかれば、一発で死アウト。その前に、理子を見つけ出す。

LDスコアいくつだよ、この状況。無事に生き残ったら単位くれねえかな、マスタース教務科のみなさん。

笑いたくなるほど困難な状況だが……覚悟は、決まった。

——じゃあ、行こうか。ミッションスタート任務開始、だ。

* * *

かつて、俺は理子に言われたことがある。

スニーキング隠密行動は苦手なのか、と。

まあ、当時それは間違っちゃいなかった。ある程度はそりやできるとはいえ、やはりまだまだ熟練度は低かったと言えるだろう。

だが、今は違う。探偵科インケスタに所属したことで、俺は尾行術の修練を行った。その結果として、完璧とは言えないものの、俺はスニーキン

グスキルを手に入れたのだ。これも、2年間の武偵生活の賜物である。

というわけで、物陰に隠れながら、しかし周囲の索敵は怠らずに俺はボストーク号の内部を進んでいった。まあ、まだ誰にも会ってないんだが。もしかしたら、そんなに乗員はいないのかもしれない。

船内を探索してみて思ったんだが……なんというか、内装がやたら洒落ている。剛気に見せてもらった軍用潜水艦の内部とは違って、武骨な感じが全くない。今歩いている廊下にはレッドカーペットが敷かれているし、壁面だってわざわざクリーム色の落ち着いたものになっている。天井に等間隔で設置された照明も、さすがにシャンデリアとかじゃなかったが、デザイン自体は凝っていた。

どうやら、この艦の設計者は相当こだわりを持っていらしい。あるいは、改装されたか、だ。

そんなことを考えつつ歩き進めていくわけだが……、

「マジで誰もいねえな……」

そろそろ探索を開始して10分ほど経つんだが、まだ乗員は見えない。慎重に慎重を重ねたせいで移動速度が亀なのも理由だろうかどな。

このまま歩き回って理子を発見する確率は……まあ、そう高くないだろう。

「……しかたねえ、か」

このままでは埒が明かないと考えた俺は、危険を承知で、近くの扉に近づいていった。発見される危険度は上がるが、こうなったら一部屋ずつ探すしかない。

扉に耳を当て、内部の音を探るが……何も、聞こえない。扉の厚み次第だが、それでも無音というのは安心できる要素ではある。

他に何か室内の様子を知る手がかりはないかと扉を観察してみると……あった。この鍵穴、ずいぶん昔のやつだ。今じゃ無理だが、昔の鍵穴は扉の内側を覗き込めるようになってんだ。別に意図したものじゃないだろうが。

というわけで俺は鍵穴に右目を寄せる。この瞬間に誰かが廊下を

通ったら、俺が終了のお報せになってしまおうので迅速に行う。結果は——無人、か。

だったら、せつかくだ。侵入させてもらおう。もしかしたら、理子に繋がる手がかりもあるかもしれないねえしな。

こういう積極性は、普段の俺らしくないかもしれない。だが、ちんたらしてる時間も退路もない以上、多少強引になっても動かざるをえなかった。

という理由から俺は鍵を開錠しようと思ったんだが……普通に開いてるよ、おい。物騒だなあ。

「おじやますよつと」

小声で断りを入れつつ、俺はすばやく室内に身を滑り込ませる。

そこはなんとというか……一言でいえば、『混然』といった感じの部屋だった。

全体的な広さとしては10畳ほどはあるだろうが……物が乱雑に散らばっているせいで、やたらと狭く感じる。レキとは真逆だな。

寝具やクローゼット、ドレッサー(部屋の主は女だろうか?)。そういったもん以外のスペースは、ほぼ何らかの荷物に埋もれている。しかもそれらの統一感がない。

一番多いのは機械類。エンジンっぽい内部パーツやなんらかの外装が転がっている。それだけなら技師の部屋かとも思ったんだが、その機械類に紛れるように銃器や刀剣類が転がっているの、一気にわからなくなった。戦う技師とか、漫画でありそう。他にも、香水瓶アトマイザーとかも見つけた。

あとはそうだな……全体的に赤だったり金だったり、装飾が派手だ。なんか水墨画みたいな掛け軸とか龍が壁に書かれたりしてるし。あんま詳しくはないが……なんとなく中華っぽい。

「まあ……理子とかジャンヌみたいな外国人がいるんだし、中国人もいたっておかしくねえか」

そんなことを呟きつつ室内を物色するも……駄目だな、理子につながりそうなものはない。

代わりに、

「お、この柳葉刀りゅうようとういいな。鞘さやもついてるし、補助刀剣サブエッジによさそうだ」
鈍鈍のような刀剣——日本じゃ青竜刀と呼ばれる刀を発見したので、
パクらせてもらった。紛うことなき窃盗だが、戦力はあればあるほど
いい。敵の戦力を削ぐという意味でも。

俺は一度制服のジャケットを脱ぎ、裏地に柳葉刀をくくりつけた。
武偵高の制服は背中に刀剣を隠せるように仕込があるんだ。

装備の増強を行った俺は、人の気配を探りつつ廊下に出て、安全を
確認したのち、次の部屋に忍び込む。

「なんだここ……衣装部屋か？」

そこは、一見して衣裳部屋ドレスルームのような部屋だった。

色とりどりの衣装や、数々のウィッグ、さっきの部屋より大型のド
レスサーと化粧品、果ては人の顔を模かたどった特殊マスク。以前、本当に
不本意ながら入室したことがある、特殊捜査研究科特殊捜査研究科のドレスルームに
似ている。

しかしそれだけの部屋ではないようで、ぬいぐるみとかゲーム機と
かアニメのDVDとか、美少女物フリフリの服装フリフリゲームのポスター
とかもあつたりする。

ていうかこれ……理子の部屋だろ。絶対。

だがそうだとしたら、これは困った。2個目の部屋がいきなりアタ
リだったのはいいが、部屋の主がいないんじゃないかたない。これまで
誰にも会わなかったことを考えると、もしやメンバーはどこかに集
まってるのか？

だったらここで帰りを待つほうが確かかとも考えたが……万が一
ここが理子の部屋でなかった場合、袋の鼠もいとところだ。

やはり、搜索は続行しよう。なにより、敵地でじっと待ち続けると
か、たぶん精神が保たない。

というわけで、俺は理子部屋（仮）を後にしようとして……、

「——待てよう。」

ふと思いついて、足を止めた。

そして、くるりと振り返る。

その視線の先にあるのは……数々の衣装やウィッグ、そして特殊マ

スクだ。実に変装に役立ちそうなの。

じー……。と俺はそれらの道具を見つめる。

——そして、3分後。

そこには、理子部屋（仮）から拝借した変装道具を使い、俺とは似ても似つかない超絶イケメンが爆誕していた。

「おお……すげえ」

鏡で自分の姿を見ながらそんなことを口走っているとしたのナルシストにしか見えないが、しかしマジで変わるもんだ。きつと、マスクの元になった人がとびきりの美形だったんだろうな。

最初はマスクだけ付けてみたんだが、俺の短髪に恐ろしいほど似合ってなかったなので、黒の長髪のウィッグを装着。それに加え、武偵高の制服を隠すため、同じく黒のロングコートも着用してみた。クソ暑い……。

しかしまあ……これで、変装は上手くいったはずだ。これで姿を見られても素性がバレることはないだろう。あとから身元を調べられて襲撃されたら困るし。

それはそうと、俺が変装したこの姿、どつかで見覚えがあるんだよね……。どこだっけか？

まあ、思い出せないものはしょうがない。今はそんなことに拘つてる場合じゃねえしな。

さて、それじゃあそろそろ搜索を再開しよう。

俺は最初の部屋同様、慎重に退室しながら、再度移動を開始した。なるべく足音を立てないようにしながら、そして周囲に最大限気を配りながら進んでいく。

その途中、俺は『イ・ウー』とやらについて考えてみることにした。結局なんなんだろうな。こいつらは。犯罪組織つてどこまでわかるが……逆に言えば、それ以上がわかんねえ。

しかし、俺はどうも知らない内に関わりがあったらしい。『教授』プロフェッサーとやらが言うには、だが。しかもレキまで知ってる風だったし……駄目だ、謎すぎる。

——そんな風に考えていたから、気づけなかったんだろう。

いままでと同じように次の部屋を調べようとしていた俺に、突如背後から声をかけられた。

「おいっ、そこでなにをしておるのぢや!」

その瞬間、多分俺の心臓は一瞬止まった。

やばい……見つかつた!?

口から飛び出しそうなほど心臓が高鳴る。背中から夥しいほどの冷や汗が吹き出る。

どうする。戦闘か。逃走か。初手は。きっかけは。

刹那の内に思考がめまぐるしく動く。しかし何をするにしても、ここでいきなり逃げ出せば、無防備な背後をさらすことになる。それならばいつそ対峙して、隙をうかがったほうが建設的だ。

という思考に至り、おそろおそろ振り返ると……そこには、一人の美人がいた。

肩口まで伸ばした、おかつぱの黒髪。高い鼻に、切れ長だが綺麗な瞳。大きな金の輪っかのできたイヤリング。ここまではまあ、いい。普通だ。

しかし、その服装が異常だった。全体的に布地が少ない。細い胸当てと、腰回りを覆う絹布。衣類と言えそうなのはこれだけだ。

後は装飾品のみ。首、腕、足元、いたるところに宝石を使った豪華な仕様だ。頭にもコブラを模った黄金の冠がついている。意味はわかんねえが。

その全身金ぴかの女は、俺に目を向けては逸らしながら、きよどきよどと話しかけてくる。

「そ、その、ぢやな……そ、そう! き、今日はいい天気ぢやな!」
いやここ潜水艦だけど?

と、思わず素で返しそうになり、慌てて言葉を飲み込む。あ、危ねえ……。

というか、なんか居た堪れない。俺も先日、レキにそんなこと言つてたからな。なんとなくこの女が緊張していることは読み取れた。

それと、もう一つ。こいつ、多分俺を誰かと勘違いしている。じやなきや、不審者である俺に、こんな態度を取るはずがない。

ということはまさか……この姿が、こいつの知り合い、それもこの艦に居てもおかしくない人物——すなわち、『イ・ウー』のメンバーに偶然似ていたってことか？

な、なんとというミラクル。

しかし、これは嬉しい誤算だ。この恰好をしていけば、自然な形で艦内を動きまわれる。いままでよりもずっと搜索速度が上がる。

となると……まずは、この状況を切り抜けねえとな。

眼前の女をどうにかまこうと画策する俺だったが……自然とそれを行うには、ある問題があった。

それは……、

「……？ どうした、なぜ口を開かぬのぢや？」

不審気にそう問うた女が凶らずも答えを言ってくれたが……喋れないんだ、俺は今。

俺は理子みたいに変声術を使えるわけじゃない。仮に使えたとして、今俺と勘違いされている人物の声も知らない。つまりはこのまま口を開けば、それは俺の素の声になるわけで……端的に言つて、偽物だとバレる。

さてどうするか……と思索する中、女の瞳が不安に揺れた。

「な、なんぢや。まさか、妾わらわとは話したくないということか？ こ、このまえはカナの姿で、妾に『ケイタイデンワ』の使い方を教えてくれたではないかっ！」

若干涙目になりつつ、女はそう言ってきた。

やべえ。このまま騒がれたらまずい。なにより、ずっと黙ってれば、さすがにこの人も不審に思うだろう。

どうやって切り抜けるか頭を悩ませ……俺は苦肉の策として、コートの内側の防弾制服から取り出した武偵手帳を開き、セットになっているボールペンで白紙に文章を書き込んだ。

そして、それを女に向けて見せる。

「な、なに……？ 『風邪をひいて声が出なくなった』……？」

女が、声を出して文章を読み上げる。

若干苦しい気もするが、どうだ？ これで行けるか？

場合によっては逃走もやむなしと足裏に力を入れる俺に対し、女は顔を赤くしつつ、

「な、なるほどの。それならその……妾が看病してやっても、よいのぢやぞ?」

ぷいっと顔をそらしながら、女は少しぶっきらぼうにそう言った。

その態度から俺は、この女が俺と勘違いしている人物に対し、どんな感情を抱いているのかだいたい察したんだが……さすがに、それはまずい。

俺は慌てて、もう一度手帳に文章を書き込む。

『いや、その必要はない。いまから部屋で休むところだったんだ。だから、悪いがもう行くぞ』

「そ、そうか……」

しゅん……と、女の顔が悲しそうに伏せられる。子犬みたいで少しかわいいと思ったのは内緒だ。

さて、今のうちに離脱を……、

「……うん?　なんか、お前……身長が、縮んでおらぬか?」

「——ッ」

女の指摘に、俺は体をびきりと硬直させる。

ま、まずい。もともと特定の誰かに変装しようとしたわけじゃなかったから、身長なんて気にしてなかったぞ。

というか、おい。この面の持ち主はどこまでハイスペックなんだよ。イケメンで長髪が似合っつて、しかも高身長だと?

チクシヨウ……チクシヨウツ!　世の中は、なんでこんなに不公平なんだよ!　神様ほんとふざけんな!

などと知り合いのシスターにぶち殺されそうなことを考えつつ、しかし状況はまたしても危うい。

切り抜けるには、また強引な言い訳になるが……これしか、ない。俺は、心の中で「ごめんなさい」と「ざまあみろ」を唱えながら、言い訳を書き記した手帳を広げた。

『実は俺、普段は短足を隠すために上げ底の靴を履いてたんだ』

「なん……ぢやと……?」

女が、月○天衝でも撃てそうな顔で愕然とする。
だ、大丈夫かな、これ。変装相手のキヤラ的に。

しかし一応納得はしてくれたらしく、女は鷹揚に領きつつ、
「あいわかった。お前の秘密は、妾がちゃんと石棺^{はか}まで持っていくこ
とを誓おう」

誓うなよ、そんなこと。

だが、まあ、これでなんとか誤魔化せた。いやしかし、自分でやつ
といてなんだが、ちよろいなーこいつ。こんなんで誤魔化せるのか
よ。

わずかに女の将来が心配になりつつ、俺はこの場を後にしようとする。
る。

が、それに女がついてくるかのように足を一步踏み出したので……
俺は、足を止めて、

『君にひとつ、言っておくことがある』

と手帳に書き、女に見せた。

女もまた足を止め、いぶかしげに俺を見る。

そんな彼女に、俺は続けて、『一人で部屋に戻れるから、ついてこな
くていい。看病もいらぬ』と書こうとして——しかし、それより早
くとんでもないものが俺の目に飛び込んできた。

なんと、視線の先にあるT字路を、横切ったのだ。俺とほぼ同じ顔
と恰好をした人物が。

ほ、本物……!?!

や、やばい。本物と鉢合わせたら、一発でバレる。何かがあつて今
の奴が引き返して来たら、その時点で終わりだ。

俺は焦りながらも、殴り書きで『ついてくるな トイレに行く』と
書き込み、そのページを千切る。そしてそれを強引に女の手の中に握
らせると、俺はダツシユでその場を走り去った。

「あつ、キン——」

背後で声上がるが、無視。

1分か2分か。走り続けた俺は、やがて立ち止まると、壁に背をつ
いて大きく息を吐いた。

「——っはああああ。あつぶねえ……」

危うく変装がバレて殺されるところだった。今いんのかよ、本物。まあ、ある意味では結果オーライだ。さつきの半裸女はこの格好のおかげで誤魔化せたし、それ以前に本物に会ってたら、その時点で終わりだったからな。

しかし……どうするか。このままこの変装を続けるか。それともやめるか。

前者のメリットは、ある程度の安全性。本物と出会うか、もしくは半裸女と本物が会っていて偽物があると露見していた場合、アウト。

後者のメリットは、行動力の確保。実を言うと、この格好はパフォーマンスが落ちる。分厚いコートは体を重くし、俺と本物で目の大きさや形が違うのか、視界が少し阻害されている。加えて、長髪というのは体の動きに応じて動くので、ある種の予測線になってしまう(だから武偵高ではあまり推奨されていないんだが)。

さて、ではこの2つからどっちを取るかと思案し……俺は、後者を取った。行く先行く先厄介ごとに巻き込まれる運の悪さに定評のある俺、運任せとも言える前者は選びづらかったんだ。

近くにあった適当な部屋に変装道具を放り込み、俺は再び普段の武偵高の有明錬に戻る。

それから、先ほどのように探索を再開しようとして……ふと気づいた。

「そーういや、さつき紙渡したとき、なんか妙に小さくなかったか？」

半裸女の許から離れるとき、俺はあいつに武偵手帳から紙を千切つて渡した。のだが、冷静になって思い出してみると、やけに紙片が小さかった気がする。

気になったので武偵手帳を開き、問題のページを見ると……やつぱりだ。全部千切ったつもりが、斜めに切れて半分くらい残ってる。丁度、『ついてくるな トイレに行く』と書いた内の、『トイレに行く』の部分が残っている。

……ま、いいか。伝えたい言葉の方は渡せたんだし。

問題ないよな、と手帳を仕舞おうとして……、

「あれ……？」

残ったメモの裏側に、うつすら数字が透けて見えた。

なんだこれと思ひひっくり返すと、『080524』と書かれていた。そしてその上には、『火野』という文字。

……あ、思い出した。これ確か、火薬運搬係りで一緒になった後輩の電話番号だ。連絡を取り合う必要があるかもってことで聞いてたんだっけ。

あちやー、そんなページを使うとは、ミスったな。まあ、急ぎだったし、番号自体は携帯電話に登録してるから問題ねえか。……あ、そういうや壊れてた。

無駄に精神的ダメージを負いつつも、俺は行動を再開する。

なんというか……あれだな。

振出しに戻る、ってな。

* * *

『砂礫の魔女』・パトラ。

名前にもその名残が残っているが、彼女はかのクレオパトラの子孫である。

一般にクレオパトラと言えば、印象的なのはやはりクレオパトラ7世だろう。自身、神にすら迫る美貌を持ちながら、激動の古代エジプトを、プトレマイオス朝を守る女王として生き抜いた女傑だ。

パトラもまたそんなクレオパトラ7世を髣髴とさせる玉容を誇るがゆえに、自らをクレオパトラ7世の生まれ変わりである覇王ファラオと信じていた。

そんな彼女は、世界的犯罪組織『イ・ウー』の構成員であった。

過去形なのは簡単な話で、つまりは今のパトラはすでにメンバーではないという意味だ。

もともとパトラは、数多の実力者が在籍する『イ・ウー』においてなお、『ナンバー2』を名乗れるほどの実力者だった。

しかし、素行の悪さ（一例として、同じくメンバーであるブラドに対し呪いをかけた）が目立ち、ついには『退学』——つまりは、組織から除名処分を受けていた。

にもかかわらず、パトラの姿は依然『イ・ウー』の本拠地であるボストーク号にあった。彼女は『退学』になった後も、『イ・ウー』のリーダーの座を狙い、この艦に留まり続けたのである。もっとも、ほかの理由もあったのだが。

しかし、除名処分となった人間をいつまでも在籍させておくほど『イ・ウー』という組織は甘くない。いかにナンバー2といえど、ナンバー1である『教授』の手にかかれば、瞬く間に排除できるだろう。ただし。

『教授』がその気になれば、の話だが。

(気味が悪いのう。妾を『退学』にしたくせに、いまだこの艦に残るところを認めるとは)

パトラは、ボストーク号の艦内を歩きながら、自身が置かれた状況に首を捻る。

パトラの滞在を認めているのは……舐められている、ということだろうか。確かに、パトラとて真つ向から『教授』を打ち破るのは至難だと考えている。

あるいは。

『教授』にとつて、パトラを『イ・ウー』に留めることが、何らかの意図を持っているか、だ。

(あり得そうな話ぢや。というか、あの男の行動には全て意味があると考えた方が自然かもしれない)

腕組みをしながら考えつつ、パトラは歩を進める。『イ・ウー』を乗っ取るうとは企んでいても、現リーダーには一定の敬意も持ち合わせているようだった。

——と、その時だった。

レッドカーペットを踏みしめながら進むパトラは、ふと視線の先にとある人物を発見した。

神が造形したような美貌。艶やかに流れる黒の長髪。その黒に負けないほど漆黒に染まるロングコート。冗談のような美男子が、そこにいた。

その姿を見た瞬間、パトラの鼓動が高鳴った。

(と、トオヤマキンイチ……!)

頬が上気する。耳が熱い。視野が狭まり、彼のみが瞳に映る。

遠山金一。

『イ・ウー』メンバーであると同時に、パトラが淡い恋心を抱いている(対外的には認めていないが) 男の名だった。

(ど、どうしよう。どうすればいいのぢや!?! は、話しかければよいのか……!?!)

自らを霸王とまで自称するパトラは、しかし恋する乙女モードに突入し、普段の尊大さは鳴りをひそめる。

だが、彼女はそこでは止まらない。ドキドキと心臓を高鳴らせながらも、関係を進めるために一步を踏み出す。

「おいっ、そこでなにをしておるのぢや!」

まあ、人間とつきにしおらしくもできないのだが。

(あ、あああ。妾のばかつ。これではまるで詰問しているようではないかつ!?)

内心で絶賛後悔中のパトラ。この場面はもっと柔らかい言葉でアプローチすべきだったはずだ。げに恨めしきは、いつでも不遜な物言いばかりする己の口か。

しかしそんなパトラの内情を知らない金一は、ゆっくりとパトラに振り向く。

——あ、かつこいいい。

それがパトラの偽らざる本心だったが、しかしそういうときに限って口は動かない。

代わりに、

「そ、その、ぢやな……そ、そう! き、今日はいい天気ぢやな!」

先ほどの失態を取り戻そうと、余計なことまで口走ってくれる始末だ。汚名挽回(誤字に非ず)である。

当然またもやパトラは心中で悔恨の念いっぱいいなわけだが、そこに追い打ちをかけるように、金一は無言でパトラを見返す。

沈黙が身に染みる。それに耐えきれなくなったパトラは、

「……? どうした、なぜ口を開かぬのぢや?」

できるだけなんでもないかのように装いつつ、金一に訊ねた。

しかし、金一はさらに無言を貫く。ぴつたりと口を閉じたまま、黙して語らない。

その態度がパトラの不安を煽り……最悪の考えに至らせた。

「な、なんぢや。まさか、妾むすめとは話したくないということか？ こ、このまえはカナの姿で、妾に『ケイタイデンワ』の使い方を教えてくれたではないかっ！」

喋らない。自分と話したくないという、若干過程をすっ飛ばした結論に涙目になりつつ、パトラは金一に詰め寄る。

引き合いにカナ——金一のもう一つの姿——に携帯電話の操作法を手ほどきしてもらったことを出してまで、それは否定してほしい考えだった。

余談だが、パトラは電子機器——というよりも、近代的なものや常識に疎い。ある程度は学ぶことで利用可能になるが、精密機械などは苦手分野だった。携帯電話の操作を習ったのも、金一といつでも連絡できるというメリットがあつたからこそだ。あとは、優しいカナが覚えやすいようにとある『ゲーム』を利用したことも一助になっていたのだろう。

それはそれとして、パトラの心配は杞憂に終わった。懐から取り出した手帳に文章を書き、風邪をひいて声がでなくなったことをパトラに伝える。

それを知ったパトラは、安堵すると同時に、チャンス到来を悟った。「な、なるほどの。それならその……妾が看病してやっても、よいのぢやぞ？」

恥ずかしさから頬を染めつつ、パトラは金一にそう言った。

ぐっじよぶ自分、とパトラは自らを褒める。これはなかなかいいのではないか？ 多少物言いはパトラ節を發揮してはいるが、健気さアピールしつつ、かわいさも乗せた。いかにも、『ちよつと素直になれない女の子が勇気を出してみた』といった感じだ。

……まあ、『部屋で休むから一人にしてくれ』と、すげなく断られてしまったのだが。

そう言われては、ついていくわけにもいかない。強引に押し切ることもできなくはないが、それで嫌われてしまったら、という不安がパトラの足を留めさせる。

ならばせめて見送りだけはしよう、と決めたパトラだったが、そこであることに気づいた。

「……うん？　なんか、お前……身長が、縮んでおらぬか？」

金一の発言に顔を落としていたパトラは、そこで目に映る金一の体の位置がいつもより低いことに気づく（パトラは恥ずかしさから金一の顔を直視できず、視線を下向けることが間々ある）。

困惑するパトラ。そこに投げられた金一の返答は、あまりに衝撃的だった。

『実は俺、普段は短足を隠すために上げ底の靴を履いてたんだ』

「なん……ぢやと……？」

パトラの瞳孔が開き、絶望感漂う顔に変化する。

まったく気づかなかった。確かに基本暑かろうがブーツを履いてはいたが、まさかそんな理由があるうとは。

乙女としては幻滅級の真実に、しかし、

（ま、まさかキンイチにそんな秘密があったとは……。ぢやが、それを隠そうとしていたとは、なんというか……可愛げがあつてそれはそれで悪くないのう。うむ）

恋は盲目とはよく言ったものだった。

パトラ的には問題なかったようで、「秘密は墓まで持っていく」発言をしながら、納得してみせた。

そんなパトラに対し、金一はこの場を去ろうとしたのだろう。体を反転させかけていた。

（あっ……）

ついてくるなどは言われたが、反射的に追いつがるように1歩踏み出してしまう。

が、その歩みが2歩目を刻む前に、金一はパトラに手帳を掲げた。

『君にひとつ、言っておくことがある』

（言っておくこと……？）

金一の言葉に、パトラの眉が疑問に歪む。

金一はそれを見てさらに何かを書き込もうとし……急になにやら慌て始め、急いで手帳に何事かを書いた。

それを手帳から破ると(その際に半ばで千切れていた)、彼はパトラの手の中に紙片を握りこませる。

手を握られてドキリとしつつも、走り去っていく金一にパトラは声をかける。

しかし金一が止まることはなく、そのまま何処かへ行ってしまった。

「な、なんだったのぢや……?」

残されたパトラは途方にくれながら呟く。

その時、手の中で紙片がかさりと鳴った。パトラはとりあえずそれを見ると、そこには『ついてくるな』とだけ書かれていた。

それを目にしたパトラは、わずか悲しみを感じた。わざわざこうやって念押しするほどに、自分について来られるのが嫌だったのか、と。

しかし、パトラは気付く。『ついてくるな』と書かれたその『裏』。紙片をひっくり返したそこには、数字で『33322』と記されていた。

最初は意味がわからなかった。しかし、遅れてパトラの脳裏にある記憶がよぎった。

それはつい先日、カナに携帯電話の操作方法を教わった時の話。

カナは、パトラが携帯電話ならではの文字入力に慣れるための一環として、ある『ゲーム』を行った。

それは、カナからの会話は、すべて紙に書いた数字と記号で伝えるという内容だった。それを携帯電話を手にしたパトラが打ち込みつつ解読する、というわけだ。

その甲斐あってか、今では文字入力に関してなら(まあ、まだ機能面では不慣れな部分が多くあるが)、パトラは完璧にマスターしたと言っただけだった。

具体的には、数字を見て、それを携帯電話なしで解読できるくらいには。

「なにになに……う？」

パトラは数字に目を走らせ、解読を試みる。

まずは「3」が3つ。これはさ行を3回で「す」になる。

ちなみに、「き」と「し」という組み合わせにはならない。区切る場合は、間を開けるようになってる。

気を取り直して、次は「2」が2つ。これはか行を2回で「き」になるだろう。

解読はこれで終わり。結果として繋げてみると、「す」「き」となった。

「なるほどのう。好き、というわけぢやな………え？」
理解した、瞬間。

ぼんっ！ と、パトラは沸騰した。

(な、ななななんぢや?! どういうことなのぢやこれは?!)

許容外の出来事に、パトラの脳が悲鳴を上げる。

なぜにこのタイミングで愛の告白か。まさか、この数字は暗号でもなんでもなく、ただの偶然だった？ 馬鹿な、そんなわけがあるか。たまたまこんな意味のある文章になるとは思えない。

と、いうことは。

「わ、妾、告白されてしもうた……っ！」

喜び半分、困惑半分で、両手を赤くなつた頬にあてるクレオパトラの子孫がそこにいた。

——遠山金一が『イ・ウー』を離反し、ボストーク号から脱走したのは、この数十分後の話だった。

『ついてくるな』とはそういう意味だったのか、と後にパトラは気付く。『イ・ウー』からの離反はすなわち、その全メンバーを敵に回すことを意味する。その危険な死出の旅路に、彼はパトラを巻き込むまいとしたのだ。

パトラが「次にキンイチにあった時は、敵対しないようにしよう」と心に決めたのも、同じく数十分後のことだった。

ちなみに。

この出来事に背中を押されたパトラが金一に告白し、一組の新婚夫

婦が誕生したとかしなかったとか。

* * *

移動することおおよそ10分。いまだ理子は発見できず。

……というか、マジでいねえんじやねえか？ あいつ。それだったら本気で困るんだが。帰れねえ。

かわりに、別のメンバーは発見した。銀髪ロングで灰色ブレザーと孔雀の羽付き帽子が特徴的な少女とかな。見つからないようにするの大変だったけど。

それと、ぐるぐるといろんなところを回ってみてわかったんだが——どうもこの艦は、住居目的の部屋だけではないらしい。

恐竜の骨格標本や名画などが並んだ、もう一つ博物館ミュージアムみてえな部屋とか、舞踏会でも開くの？ っていうくらいの大ホールとかがあつた。この分じゃ、室内プールとかカジノとかもありそうで怖い。さすがに無いだろうが。

一体なんなんだ、この艦は？ いや、そもそもこの組織自体がよくわかんねえんだが。

そんなことを考えながら歩き進めると、また新たな大扉が見えてきた。重厚な木扉に金の取っ手、わざわざ精緻な模様まで彫られている。これだけでいくらするんだか。

そして、その扉は開け放たれていた。耳を澄ますと、中からはかすかに話し声が聞こえてくる。

……誰かいる、な。

俺は足音を立てずに近づき、身体を大扉の陰に潜ませる。その間にも周囲の気配に気を配ることは忘れない。

そして、鏡を使って室内を覗き見て——愕然とした。

そこは、これまでにも何回か見たようなホール部屋だった。天井をシャンデリアが飾り、床には上品な刺繍がなされた絨毯が敷かれている。部屋自体に特異な点は見当たらない。

問題は、そこにいた2人の人物だった。

一人は、俺くらい若い白人女性だ。透き通るような、まるで光そのもののような、色素の薄い金の長髪。翠玉色エメラルドの大きな瞳と、それを一

層映えさせる雪のように白い肌。日本人とは違う、国に根差した美しさがある。

濃紺のロングスカート・ワンピース、ホワイトブリム——フリル付きのカチューシャ、そして純白のエプロン。いわゆるメイド服に白雪級のスタイルの肢体を包んだ、ヴィクトリアンメイドがそこにいた。

こいつは、まだいい。こんなところにメイドがいることは驚いたけど、少なくともこいつはまだ人間の形をしている。』。

だが……、

「なんだ、あいつは……」

俺は、メイドの正面に立っているもう一人……いや、一体に目が釘付けになる。

一言で言おう。

そいつは、『怪物』だった。

2メートルを超える体躯。大木のような腕や、一踏みで天井まで跳躍できそうな強靱な脚、それらを覆う獣のような黒く毛深い体毛。手足にはナイフほどもある爪に、口元からは牙が覗いている。オオカミに似た貌かおに嵌まった両目は、まるで血を流しこんだような真紅に染まっており、人ならざるおぞましさを連想させた。

……ああ、ジャンヌ。お前が言ってた意味がわかったぜ。

こいつは、確かに『怪物』だ。それ以外の言葉がいらなくらい、わかりやすい表現だったよ。

そこで、俺の考えも正しかった。あいつと戦う？ アホかよ、あの腕を見る。脚を見る。爪を見る。牙を見る。俺でさえ、あれらを見るだけで何通りもの死に方を予想できる。本人であるやつには、それ以上の殺し方があるだろう。

そんなやつに突っ込んでいったところで、俺に勝ち目なんて欠片もない。例えあいつが理子を縛る元凶だとして、じゃあヒーローみたいにぶちのめしてやれるかといえは、そりゃ答えはNOだろ。

情けないと、笑いたい奴は笑えよ。それでも俺にできることは、せいぜい理子をここから連れ出すことが関の山だ。

……悔しさは、ある。自分の実力不足で、女の子一人救えない自分

に、心底腹は立つ。

それでも、できることを冷静に実行できなきや、目的一つ果たせない。

だから、ここから去れよ、有明鍊。あんな怪物は見なかったことにして、今まで通りの探索に戻れ。一番生き残る確率の高い選択肢を選べ。

ぐるぐると、胸の奥で嫌な感覚がとぐろを巻く。

しかしそれを無理やり飲み込んで、俺は足を踏み出し――

『それにしても、あの雑魚「4世」は、玩具としてはなかなか優秀だよなア』

――止まった。

今……やつは、なんて言った？ 地獄から轟いてるみたいない気持ちの悪い声で、何を言いやがった？

俺が知る限り、『4世』という言葉が指す人物は2人しかいない。

一人は、神崎・H・アリア。名探偵シャーロック・ホームズの曾孫。つまりは、ホームズ4世。

もう一人は、峰理子。大怪盗アルセーヌ・リュパンの曾孫。つまりは、リュパン4世。

あいつが口にした4世という言葉が、そのどちらかを指していると限らない。

それでも、俺の足は縫い付けられたようにその場から動かなかつた。

背後から、声が届く。

『なあ、オイ。お前もそうは思わねえか、ジエヴオーダー？』

『リ……わ、私は、その、「理子」様のことは好きで……』

『チツ。つまんねえな、お前は。張合いもねえ。子孫ってのは、どいつもこいつもこうなのか？ まあ、おめえはまだ目覚めてない分、欠陥品と呼ばれるホームズ4世に負けるような、どうしようもねえゴミみてえなアルセーヌの曾孫よりは望みがあるがなア。ゲバババツ！』
……

『そ、そんなつ。理子様はゴミなどでは……っ』

『ああ？ 庇い立てするか、ジエヴオーダン？ なんならお前も、あいつみたいにボロキレにしてやつてもいいんだぜ』

『ひう……も、申し訳ありません。リサを、リサを傷つけないでください……！』

『くだらねえ。遺伝子検査ではつきりしているとはいえ、お前が本当にジエヴオーダンの血を引いてると思えねえな。……しかし、まあ訂正してやるよ。確かに、お前の言うとおり、リュパン4世はゴミじゃねえ』

『え……う？』

『あいつは……体のいい遊び道具であり、良質な5世を産むための牝犬だったよなア。ゲウウアババババツ！』

——振り返るな……ツ！

ギリイ……ツ、と碎けるかと思うほどに、俺は歯を食いしぼる。

クソ。チクシヨウ。なんなんだ、あいつは。俺の友達を、2人も侮りやがって。理子を、玩具だの牝犬だのぬかしやがって……！

そしてそれ以上に……なんなんだ、俺は。

仲間をあれだけ馬鹿にされて、それでも俺は飛び出せない。そんなことをしたって返り討ちにあうだけだったことがわかってるからだ。殺されるってことが、わかってるからだ。

いつ敵に見つかるかわからない状況で、そのくせ立ち去ることもできずに突っ立っている。どっちつかずの中途半端野郎だ。

動けよ、おい。ここから離れる。とっとと理子を探しに行け。

そんな風に命令してみても、俺の足は動かない。背後で垂れ流しにされる声を、ただ聞き続けるだけだ。

『まあ、その5世にしたって、まともなやつが生まれるかどうか怪しいところだがな。シャーロックの野郎の曾孫は、緋緋色金の力すら使えねえゴミだ。推理力も欠片も受け継いでねえ、牝犬と互角程度のお粗末な戦闘力。とんだ出来損ないだよなあ』

拳が、握りこまれた力の強さに音を鳴らす。

——耐えろ。

『そのパートナーにしたって同様だ。クソツたれのカナの弟だから少

しはやるかとも思ったが、実力はホームズ4世と同程度。しかも小夜鳴の話じゃあ、遠山金一の訃報以来、すっかり腑抜けになりやがったそう。ゲハツ、ゲハツ、その原因が「イ・ウーおれたち」とも知らずによ。おまけに、もう一人のパートナーは、遺伝子的にただのカスだ。同じく遺伝子に見放されたリユパン4世は、えらく評価していやがったがな』

聞き覚えのある名前がいくつか出たが、どうでもいい。そんなの関係ないくらいに、頭が熱くなっていく。

——耐えろ。

『お前が男だったら面白かったのになあ、ジエヴオーダン。そうしたら、あの繁殖用牝犬ブルード・ピッチと交配させて、あの生意気な狼風情を手駒にできたのによ。それとも、どこかから優秀な遺伝子を持った牝でも連れてきて、お前と交わらせてみるか？』

『うっ……うっ……おね、がいます。リサに、ひどいことをしないでください……っ』

事情はわからない。敵である『イ・ウー』同士でなにがあらうと、知ったこつちやない。ただ、女の子を平気で泣かせるあのクソ野郎には腹が立つ。

——それでも、耐えろ。

『ゲハハッ！ まあ、そんなことを試すとしても、そりやリユパン4世の交配で優れた次世代を生み出せるかの実験が終われば、だ。どのみち、あいつにはそれを試すつもりなんだしな』

『え……？ で、でも、理子様は仰つてました。初代リユパンを超えたことを証明できれば、解放されると……』

『つくづく間抜けだなあ、お前も4世も。お前らは、犬とした約束を守るのか？ オレは守らねえがな』

『では、最初から理子様を……』

『当然だろう。せつかく手に入れた優良種を手放すわけがねえ。だが、単に産ませるだけじゃ面白くねえんで、いろいろと趣向を凝らしてはみたがな。ホームズを斃せば解放すると約束してみたり、あいつが後生大事に抱えてた十字架を奪ってみせたりなあ。今頃、あの犬は』

必死に取り戻す方法を考えてることだろうよ。まあ、取り返したところで、すぐにまた奪ってやる予定だがなア』

言ってることが、なにを指しているのかは判然としない。ただ、それでもわかる。あいつがどんだけ、あのお気楽娘……いや、そう振る舞い続けてきた女を傷つけたのか。

——耐えろ。絶対に手を出すな。

『ああ……十字架を奪ってやった時は良かったなア。涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、オレの脚にすがりついてくるあいつを蹴り飛ばしてやったときは、最高だった。無理やり首元から十字架を引きちぎってやった時の絶望に染まる表情……あれも、いい。おかげで、後から思い出しただけで、この姿に戻れた。なかなか無えんだぜ、こんなのは』

『そんなことのために、理子様をあんなに……』

『あんな形でもなけりや、あいつは役に立たねえだろうが。……だが、そろそろ潮時かもしれねえな』

『潮時……?』

『あいつ単体の使い道なんざ、オレがこの姿に戻るための道具くらいだ。だが、そんなものは他にいくらでもやりようがある。残る道は、やはり5世を産むための母体とすることだが……あの分じや、望み薄かもしれねえな。こりやあ——』

その、続きを。俺は、なんとなく予想できてしまった。

やめろ。言うな。その続きを、口に、出すな……!』

——だが。

やつは、あつさりと言いやがった。

『——殺すことも、考えねえとな』

耐えろ、と。頭の中で誰かが言った。

動くな、と。本能が警鐘を鳴らしていた。

そんなにうるさくするなよ。言われなくても、わかっている。それが一番合理的な考えだってことは、少し頭を捻れば誰にでもわかる。

……ああ。

でも、さ。

——無理だろ、これは。

「……誰だ、お前は？」

遠雷のような低く重い声が、俺の鼓膜を震わせる。

音質は、さつきと比べて随分クリアだ。はつきりと聞こえてくる。そりやそうだ。その声は、俺が今対峙しているやつが出した声なんだから。

俺の目の前で喉を震わせる、『怪物』が出した声なんだから。

……なに、やってんだ俺は。

なんで飛び出した。なんで扉の陰から出て、押し入った。なんで、この怪物の前に姿を晒した。

馬鹿だ、俺は。

馬鹿だから、こんな風に言うんだ。

「テメエが泣かせたお姫様を救いに来た、馬鹿な勇者様だよクソ野郎」拳銃を抜き放ち、俺は眼前の怪物に照準する。^{ポイント}けれど、銃口はわずかに震えている。今更になって、後悔と恐怖が襲いかかる。

しかし、やつは小揺るぎもしない。泰然と立ったまま、まるで拳銃なんて一切恐れていないかのように口元を裂いた。

「ゲバババツ。侵入者か、おもしれえ。まさかここに潜り込むムシケラがいたとはなア。それで、勇者様？ お前は一体、オレに何の用件だ？ 悪いが、お姫様なんて高尚な存在に、心当たりは無えんでな」

やつは、言葉通り面白そうにそう言った。

仲間を呼ぶ様子もない。おおかた、俺みたいな『ムシケラ』にそんな必要はないと、舐めてやがるんだろう。

それに思うところはある。が、それ以上に自分にイラついていた。この期に及んで、何が『勇者様』だ。保身として名前を隠したところで、たいして意味はねえだろ。ここで死んだらな。あとで襲撃されるかもとか、今考えることじゃなかった。

俺は、ちらりと視線を逸らし、メイド姿の女の子を見る。

改めて見れば、本当になんてこんなところにいるのかわからないほど普通の女の子だった。さつき泣いてた名残か、目に涙をためて、全身を震わせながらおどおどとこちらを見ている。目が、合った。

なんとなく、この子は敵じゃない気がする。戦闘力的な意味じゃない、もつと根本的などころで。

俺は視線を怪物へと戻し、

「理……いや、テメエをぶちのめしたい理由が多すぎるな。潰してやるってことだけ言つとくわ」

咄嗟に理子の名を出そうとしたが、寸前で変更した。もちろん、殺す時まで言った以上、理子を死なせたくないってのが一番の理由だ。だが、こいつはそれ以外にもアリアを侮辱した。キンジを侮辱した。おまけに、金一さんの死がこいつらのせいだとも、そう言った。

戦いたくない理由なら、いくらでもある。けど、許せない理由の方が大きかった。

睨みつける俺に、怪物は愉快そうに笑い、

「そうか。丁度、オレも暇していたところだ。4世が盗みを始めるまでな。せつかくこの姿でいられるうちに……遊んでやるよ、鼠」

「そいつはどうも、獣野郎。猟銃より少しばかりいい銃で仕留めてやるよ。感謝しやがれ」

震えを抑え込め。前を向け。

もう退けない。きつと、ここで死ぬ。誰も称賛なんてしてくれないし、結局目的も果たせなかった。

それでも。

ここでこいつに立ち向かわなかったら、俺は死んでも死にきれない。だから。

——さあ、男を見せろ有明鍊。

リサ・アヴェエ・デュ・アंकに戦闘のセンスは全く無い。

それが、『イ・ウー』メンバーの現状での共通認識だった。

だからこそ、彼女の組織内の役回りは、非戦を念頭に置いたものだった。会計士、ナース、薬剤師、メイド。彼女が担う役割は多々あれど、そのどれもが戦闘に直結しない、いわゆる非戦闘員である。

光を織り込んだような薄い金髪が特徴的な、北ヨーロッパ——オラ

ンダ生まれの、少女。普通に生まれ、普通に生き、アムステルダム
のメイド学校で学徒となっていた、そんな普通の女の子であったリサ
は、『世界の裏側』など知らずに日々を過ごしていた。

しかしある日、北海へと進路を取った『イ・ウー』に勧誘を受け、一
般人リサはボストーク号に乗船したのだ。

人外魔境とも呼ばれる『イ・ウー』が、なぜそんな普通の少女を求
めたのかと言えば話は簡単で、つまりは彼女もまた、人外たる要素を
備えていたのだ。

『ジェヴオーダンの獣』。

18世紀のフランス・ジェヴオーダン地方に現れた獣の名だ。10
0人に迫る人間を襲い、しかしその黄金のごとき金の体毛の美しさで
知られる、大狼である。

しかしこの伝承には、続きがある。それは、ジェヴオーダンの獣の
正体は、大狼ではなく^{ルー・ガルー}狼——つまりは、狼男なのではないかとい
う説だ。

そして、この説は当たっていた。ジェヴオーダンの獣は、人間とし
ての一面も持ち合わせていたのだ。

その人間としてのジェヴオーダンは子を遺し、やがてその血脈は受
け継がれていった。そう——リサ・アヴェエ・デュ・アंकにも。

ゆえにこそ、その力を受け継ぐ少女を、将来性という意味で『イ・
ウー』は勧誘したのだ。

とはいえ、その誘いを断ること自体はできた。しかしリサは、自ら
の意思で参入を決意したのだ。そこには当然理由があった。乗船か
らすでいくつか年が巡った今でも、それは果たせていないが。

そんなリサは今、ある種の窮地に立たされていた。
「なあ、オイ。お前もそうは思わねえか、ジェヴオーダン？」

眼前でリサにそう問いかけたのは、ジェヴオーダンの獣に勝るとも
劣らない『怪物』、^{ドラキユラ}竜悴公（・ブラドだった。

実際ブラドは最強の生物の石柱、吸血鬼として、同じく最強の名を
冠するジェヴオーダンの獣のライバルだったそうだ。もちろん、力に
目覚めていない今のリサなど、爪の一撫でで殺せるだろう。

ではなぜそんな怪物の前にリサが立っているのか。

それを説明するには、まずブラドのとある体質について説明する必要がある。

まず、ブラドは常日頃からこの怪物の姿になっているわけではない。普段は小夜鳴徹さよなきとわという人間の優男として生活している。

これは、永の時がもたらした呪縛だった。もともと吸血鬼という種族は知性を持たず、ゆえに滅びを迎えることになったのだが、ブラドだけは人間の血を偏食していたため、人間の知性を備えたことで生き残ったのだ。

しかし人間の知性を失わないために、人間からの吸血を繰り返していたため、しだいに遺伝子が人間のものへと上書きされていき——ついに、『小夜鳴徹』という人間の殻に隠れる必要がでてきた。

普段は小夜鳴という、いわゆる『第2の人格』が行動し、とあるタイミングでのみブラドに成り変わる（互いの意思疎通は脳内で行われる）。

そのタイミングとは——小夜鳴が、激しく興奮したとき。つまりは神経伝達物質が大量に分泌された時だ。

長い時の中で大抵の刺激に慣れた小夜鳴が、遠山金一から『吸血』で写し取ったヒステリア・サヴァン・シンドロームを併用して異常興奮したとき、夜の王ブラドは降臨するのである。

つまりブラドが今この姿でいるのは、異常に興奮できる条件が揃っていたからだろう。

そして、彼がリサを、メイドという立場を利用して連れまわしているのは、その状態をより長く継続するためだ。

リサは、生来の臆病な性格から、わずかの威圧でも震え上がり涙を流す。嗜虐趣味サディズムで興奮できるブラドからすれば、これほど使いやすい者もないだろう。

加えてリサが、100年前のライバルの血を引いていたことも原因だろう。かつて己と伍した相手の子孫が、一切の抵抗なく屈服している。その征服感、ブラドの変身時間を伸ばすには十分な物だった。

以上の理由から、リサはブラドの興奮を継続させるための『娼婦』と

して帯同させられていたのである。

(どうして……どうしてリサがこんな目に……)

涙目になり、心中で不幸を嘆きながらも、しかしリサは抵抗できないままブラドの問いに答えていく。

自分に良くしてくれていた峰理子が蔑まれることに忌避感はあるものの、傷つけると脅されれば、リサは引き下がるしかない。リサは戦うことを、そしてなにより傷つけられることを恐れていた。

そんなリサに、ブラドは愉悦を満たすために、なおも言葉を続ける。理子を侮辱し、シャーロック卿の子孫を侮辱し、そのパートナー2人を侮辱する。

そして、ついではばかりにリサをただ良質な次世代を生み出すための『道具』へと、引きずりおろそうとしたのだ。

「うっ……うっ……おね、がいます。リサに、ひどいことをしないでください……っ」

リサはついに涙を流し、ブラドに懇願する。

アヴェ・デュ・アंकの女は、生涯たった一人の男とのみ添い遂げる。ただ次の世代を産み出すためにのみ抱かれるなど、本意どころの話ではない。それは、一族の誇りを失うほどの行為だった。

それを知ってか知らずか、ブラドは哄笑しながらリサへの脅しをひとまず取り下げた。

そして、その口で言ったのだ。『理子を殺すことも、やぶさかではない』と。

(そ、んな……理子様が、殺されてしまう……！)

リサのシミひとつない白い顔が、蒼白に染まる。

脳裏に浮かぶのは、いつも楽しそうに笑いかけてくれた理子の顔だった。リサとは比べものにならないほどつらい過去を背負って、それでもリサと仲良くしてくれた、友達の顔だ。

嫌だ。理子が殺されるのは、絶対に嫌だ。

けれども、リサは動けない。力がないという以前に、リサの臆病な心が行動を阻害する。

どうしようもできない悔しさに、どうしようももしない情けなさ

に、リサはまた落涙する。

それを止めるかのようにリサがぎゅつと目をつぶったその時、

「——あん？」

ブラドの、いぶかしげな声が聞こえた。

それに反応したリサが目を開けると、ブラドがリサの背後に視線を向けていた。

(ブラド様は、いったいなにを見て……?)

リサは、その視線につられるように後ろを振り返る。

——そこに、いた。

学生服に身を包んだ、黒髪の少年。視線だけで人を射殺せそうな鋭い目つき。見知らぬ東洋人が、屹立していた。

リサはこの少年を知らない。少なくとも、知っている『イ・ウー』メンバーに彼ははいない。

けれども、彼が着ている服は知っていた。肩のあたりに刺繍されているマークは、武偵高のものだ。すなわち彼は、リサたちの敵、武偵ということになる。

それに気づいたリサは、逃げるようにその場から距離を取る。ブラドと少年の間から抜け出るように。

そんなリサを尻目に、ブラドは喉を鳴らした。

「……誰だ、お前は？」

それは、当然の質問だった。

リサも持つ疑問に、少年は拳銃を抜き放ち、ブラドに向けて構えながら言い放った。

「デメエが泣かせたお姫様を救いに来た、馬鹿な『勇者様』だよクソ野郎」

その言葉を聞いて。

リサは確かに一瞬、時が止まったように感じた。

(勇、者様……?)

脳内で、少年が口にした単語を反芻する。

リサにとって……否、アヴェ・デュ・アंकの女にとって、その言葉は特別な意味を持っていた。

アヴェ・デュ・アंकは代々、『勇者様』——つまりは、己が仕えるべき武人にすべてをかけて尽くし、その庇護を得て傷つくことなく生き延びてきた。主の生活面すべてを完璧にサポートし、代わりに主には剣を、銃を、力を使って守られてきたのだ。己を守る絶対的な武者——勇者とは、つまりそこから来ている。

リサが『イ・ウー』に身を寄せているのも、その勇者が関係している。

リサは、ずっと悩んでいた。祖母や母にはいた勇者が、どうすれば自分にも見つかるだろうか。そんな折やってきた『イ・ウー』——その首領シャーロックに、『イ・ウー』には一騎当千の強者が多くいると聞いた。だからリサは自分だけの勇者を求めて『イ・ウー』に参入するも、結局見つかることはなかった。

そして、今日。リサの前に『勇者』を名乗る少年が現れた。

さらに、言ったのだ。「ブラドが泣かせたお姫様を救いに来た」と。明言は、していない。けれど確かに、リサはブラドの度重なる脅しに、幾筋もの涙を流した。

期待と不安が湧き出す。もしそうだったならという気持ちと、やはり違うかもしれないという気持ちと、交互にリサを揺らす。

そんな中、ブラドは少年を嘲るように笑いながら、

「ゲバババツ。侵入者か、おもしろえ。まさかここに潜り込むムシケラがいたとはなア。それで、勇者様？ お前は一体、オレに何の用件だ？ 悪いが、お姫様なんて高尚な存在に、心当たりは無えんな」心底愉快だと言いたげな口調に、なぜか少年はリサに目を向けた。視線が絡み合う。ナイフのように鋭い目が、リサを射抜く。けれども、なぜかリサにはそれが怖いものには思えなかった。むしろ、どこか頼もしさすら感じていた。

少年はリサから視線を外し、再びブラドを睨んだ。

「リ……いや、テメエをぶちのめしたい理由が多すぎるな。潰してやるってことだけ言っとくわ」

「——っ」

少年の台詞に、リサの喉が小さく鳴った。

今彼は、『リサ』と言いかけた。なぜ名前を知っていたのかはわからない。だがおそらく、名前を伏せることでブラドの興味がリサに移ることを防いだのだろう。

ここまでくれば、もう確定に近かった。

(この人が……リサの、勇者様)

リサは、大きく目を見開き、少年を見つめた。

懸念は、ある。以前シャーロックに条理予知——推理してもらったときに聞いた話とは、今の状況は少し違う。

まず、リサの勇者は東から来る。これはいいだろう、彼は東洋人だ。次に、ちよつと目つきが悪い。……ちよつと？ いや、まあ一応当たっているといえる。

3つ目に、喋り方がぶつきらぼう。聞く限りぶつきらぼうというよりも少し野蛮な感じだが、おおよそは合っている。

最後に、女たらし。これはさすがに現状ではわからないが、もしそうだとしたらリサは精一杯尽くすつもりだ。

問題は、それら人物像ではなく、リサと勇者が出会う際の光景。その予知だ。

シャーロックは言った。リサと勇者は、渡り蝶を空に見る時出会う、と。

そこが決定的に違う。違うが、すでにリサはようやく巡り会えたかもしれない勇者様に、舞い上がっていた。

(がんばってください、勇者様……！)

リサは、胸の前で両手を組んで、勇者様(仮)からひと時も視線を外さないように見つめる。

リサの視線の先。少年と怪物が、口上を述べる。

「そうか。丁度、オレも暇していたところだ。4世が盗み始めるまでな。せつかくこの姿でいられるうちに……遊んでやるよ、鼠」

「そいつはどうも、獣野郎。猟銃より少しばかりいい銃で仕留めてやるよ。感謝しやがれ」

忠誠の一族、リサ・アヴェ・デュ・アंकが見守る中。

勇者様と吸血鬼が激突する。

——後に。

シャーロックの予言通りの人物が現れ、リサは深く自戒することになるのだが、それはまだ先の話である。

* * *

悪意渦巻く人外魔境、『イ・ウー』本拠地ボストーク号にて、その戦いは始まった。

これは後に、世界の裏側で語り継がれることになる戦いだ。
なぜなら。

この戦いをきっかけとして、『ラウンズ』と『イ・ウー』の全面衝突、その戦端は開かれたのだから。

——世界が、揺れ始めた。

27. 正義の扉を開ける鍵

——前提として、この戦いに俺の勝利は存在しない。

当たり前前つちや当たり前だ。なんせ、今俺の目の前にいるのは、人ならざる怪物。2メートルを越える、鬼のようなこの獣に、俺はケンを売ったんだから。

ジャンヌの話によれば、こいつは桁外れに強いらしい。それこそ、凄腕の武偵3人と互角に戦ったジャンヌより、遥かに。

だから、もう一度言おう。

俺に、勝ち目はない。

——それでも。

拳の一発でも入れてやらなきや、俺の気が済まない。

「さあ、来いよ。それとも、オレから直々に殺しにいつてやろうか？」
獣のくせに人間のように噛いながら、そいつは俺に対し両手を広げ、迎え撃つように立ちはだかる。

俺は構えていた拳銃をコツキングしながら、

「それには及ばねえよッ！」

叫びながら、高速で引き金を3度引き絞る。すばやく抜き放って撃つ『早抜撃ち』^{フアスト}ではなく、連続ですばやく撃つ『早連撃ち』^{ラピッド}だ。

ガガガンツツ！ と、セミオートになつていた拳銃——グロック18C——の黒く光る銃口から、9mmパラベラム弾が音速で射出される。

3発の弾丸はそれぞれ別の目標を指しながら飛び——そして、獣の体に風穴を開けた。

着弾箇所は、左右の肩に1発ずつ。そして、右のわき腹に1発だ。あまり射撃のセンスがあるとは言えない俺だが、それでも今はうまく集中できているのか、珍しく狙い通りの場所に全弾命中した。

……命中は、したんだが、

「な……っ?!」

俺は、目の前で起こっている出来事を見て、目を驚愕に見開く。

俺が撃った弾丸は、確かに獣に当たった。やつの体の硬度が高いの

か、それとも単純に肉が分厚いからかは知らないが、弾丸自体は貫通していない。しかしそれでも、重傷を負わせたことに間違いはないはずだった。

しかし、現実には、弾丸を浴びて血を噴き出していたそれぞれの着弾箇所は、赤い煙を噴きながら、1秒足らずで治癒されていた。しかも、拳銃が排莢するかのように、体内から銃弾が排出されやがった。

おいおい……人間じゃないとはいえ、そんなのありかよ。銃で撃たれて1秒で完治なんてされてたら、俺は一生撃ち続けても、あいつにダメージを与えられないことになる。

絶望感に、俺の顔が青くなる。

そんな俺に、怪物が急に声を低くしながら、

「……オイ。お前、どこでこれを教わった？」

「……？」

質問の意図がわからず、俺は眉根を寄せる。

俺が今やったことなんて、普通に銃を3回撃ったことだけだ。それも、やつの上半身に描かれた、3つの目玉みてえな白い刺青に目がけて。

咄嗟にそこを狙ったことに、大仰な狙いはない。そもそも、こんな怪物と戦^やりあったことなんてねえから、どこを狙えばいいのかわからなかったのが一つ。それで、あの目玉模様、それも白の線と黒い体毛で描かれた強襲^{アサルト}科でよく使ってたマンターゲットに似てたつてのがもう一つ。あそこじゃ、蘭豹にしこたま撃たされた上に、外れりや怒声が飛んでくるからな。つい狙っちまった。まあ、おかげで命中したんだが。

だが、奴の言う『これ』ってのが何を指しているのかはわからない。

一体何のことを言ってる……いや。ひよつとして、『早連撃』のことを言ってるのか？

自慢じゃないが、俺は早撃ちを少しだけ得意としている。もちろん他の銃技に比べたら、という意味だが、数少ない俺の得意技と言える。それでも、プロの目から見たら普通レベルかもしれないが。

と思ってたんだが……どうやら、あの怪物が驚く程度の代物には

なっていたらしい。

俺は、奴の回復力に崩れかけた精神を立て直すために、せめて少しでも優位に立とうと、自慢げに言ってる。

「ローマでちよつとな。心配すんなよ、なんならもう使わねえでやろうか？」

これは嘘じゃない。俺の早撃ち技術は、去年ローマ武偵高に行ったときに、そこで出会った友人に習ったものだ。攻撃の手数を増やしたいと言ったときに、これを教えてもらったんだ。

俺がそう言っていると、怪物は肩をいからせ、

「お前……ずいぶんとこの竜^{ドラキュラ}倅公・ブラドを虚仮にするじゃねえか」

俺の言葉にキレたのか、怪物——いや、ブラドとやらは苛立たしげな声でそう言った。

いいぞ。怒りは行動を単調にさせる。その分、俺が生き延びる確率が砂粒程度は上がる。

しかし……、と俺はちらりと銃に目を向ける。

銃はもう使えない。撃つたところで全く効いてないつても問題だが、なにより○がでかい。電灯に虫が集まるみたいに、銃声につられてこいつの仲間が来る可能性はある。

——となれば。

「……それは、何の真似だ？」

「テメエを倒す準備だよ」

ブラドの質問に簡潔に答え、俺は拳銃を仕舞いながら、^{ファイティングポーズ}素手での構えを取った。

これが、俺の答えだ。

やつに銃は効かない。何十発撃ち込もうと、あの速度で回復されては意味がない。それに、銃声は敵を呼び寄せる。

刀剣類もおそらく無駄だろう。おそらくあれは、外傷に対する治療能力。それが^{ステルス}超能力によるものか、それとも個人的な機能なのかはわかんねえが、銃弾にだけ有効ってわけじゃなさそうだ。

——だが。

だったら、それ以外の攻撃方法ならどうだ？

俺は、両の手首リストにあるスイッチをオンにする。『スタングローブ』が起動し、スタンガン機能が動き始める。

装備科アムドの天才・平賀文が作成した、手首型スタンガン。これが俺に残された、唯一の攻撃方法だ。

確かに、外部に傷をつけても意味は無いかもしれない。だが、内部なら？ 感電という手段なら、ひよつとすると倒せるんじゃないか？ 「素手で俺を倒す、だと？ ゲハツ、ゲハツ……ゲウウアババババッ！ おもしれえ！ おもしれえぞ、餓鬼！ そんな間抜けは、古今東西いなかった。シャーロックも、アルセーヌも、ジャンヌ・ダルクも、どいつもこいつも武器でオレを殺そうとしてきた！ やれるもんならやってみろオ！」

未だその場から動いてさえないブラドは、呵呵大笑しながら、俺に槍のように鋭い爪を向けてくる。

悪いが、俺は一緒になって笑ってやれねえよ。代わりに膝が笑っている。これで許せよな。

恐怖で、俺はもうぶつ倒れそうだ。なんせ、俺が考えたことはつまり、ブラドと接近戦インファイトで戦うってことだ。そんな自殺志願者みたいな真似、本当はしたくない。

——でも、やる。一発殴ると、そう決めたんだから。

だから。

だから。

だから。

——行け！

「お、あああああああああああああッ！」

俺は叫びながら恐怖を誤魔化し、ブラド目がけて走り出す。

流れる視界。迫る巨躯。近づくほどに大きくなっていく怪物の姿に、自分の矮小さを思い知らされる。

走りながら、俺は防弾制服の内側から抜き取ったダガーナイフを、ブラドに投擲する。

狙いもなにもあつたもんじやないそれは、柱のようなブラドの剛腕にあつさりと弾き飛ばされる。

でも、それでいい。これで片腕は一瞬封じた。

その隙に俺はさらに距離を詰める。勝負は一瞬。チャンスは一度。一撃にかける……！

「舐めるなア！」

ブラドがまだ自由にできる左腕を、俺にむかって横薙ぎしてくる。思った通り、その速度はあまり早くない。剛腕ゆえに、動きはノロい。破壊力のみを追求したかのようなその腕じゃ、大した速度はだせねえだろ……ッ！

だから、ここだ。この一撃だけは、なんとしても避ける！

俺は、心臓が爆音を上げていることに気付きながら、思いつきり身を屈ませる。

頭上で、とんでもない質量が通り過ぎたのがわかった。ブラドの腕だ。風圧に、髪が持つて行かれるかと思った。

でも、避けた。連続じゃ無理かもしれないねえが、一度だけなら避けられる。

ありがとよ、蘭豹。あんたとの格闘訓練ストライキングで、文字通り豹みてえな俊敏さを見慣れてなかったら、この結果はなかったかもしれない。

俺は歯を食いしばり、顔を上げる。

目の前には、黒い剛毛に包まれたブラドの上半身があった。俺はそのうち、シルエット的に心臓がありそうな左胸に視線を飛ばす。

ダンッ！ と、地を踏み鳴らす。弓のように右腕を引き絞り、上半身を捻転させる。

そして。

解放された俺の右拳が、ブラドの左胸に叩き込まれる——その、寸前。

「ぎゃあっ!？」と。

離れたところで悲鳴が上がった。

な、に……？

俺は咄嗟に、その方向を見てしまった。

そこでは、金の長髪をしたメイドの少女が、頬を手で抑えて蹲っていた。その手の間からは、真紅に染まる血が流れている。

まさか……ブラドが弾いたナイフが、あの子に当たったのか!?

思考に一瞬、空白が生まれる。直接の原因はブラドだし、そもそも運が悪かったというだけの話の上、あの子は敵のメンバーだ。俺には関係ない。

それでも、彼女を傷つけたのは、俺が投げたナイフだ。そこに罪悪感と、心配する感情が出てしまった。

そして。

それは、明確な隙になる。

「――死ねよ」

端的な、宣告だった。

直後、大砲のような拳が、上半身をねじっていた俺の背中を強打した。

いや、強打なんてもんじゃない。それは、爆破されたようなものだった。俺の体が、まるで木の葉のように舞い、数メートルはあつたはずのホール壁まで弾き飛ばされ、激突しながら止まった。

「が、ア……!?!」

意識が飛びかける。額を壁にぶつけたのか、激痛と共に視界に血が映った。

そんなことを考える間に、俺の体は落下して、床に打ち付けられた。喀血まじりの息が、口から吐き出される。

生きているのが不思議なくらいだ。防弾制服と、背中に差していた柳葉刀のおかげだろう。殴られるとき、背中から柳葉刀が折れる音が聞こえた。あれが無かったら、折れていたのは多分背骨の方だっただろう。

そんなことをぼんやり考えていた思考が、千千ちぢに切れかける。ブラックアウトが始まり、意識が落ちそうになる。

ふ、ぎげんな……! このまま終われるかよ……ッ!

俺は咄嗟に、右拳を左腕に叩き付ける。瞬間、さつきは不発だったスタンガン機能が作動し、俺の体に電流を流し込む。

「ぎ、あ……!?!」

ビクンッ、と一度俺の体が跳ねた。単純に、痛い。

だが……意識は、戻ったぞ。防弾制服には、わずかだが耐電効果がある。加えて、この電気に俺は、数時間前に晒されている。強引ではあるが、気付けには成功したらしい。

俺は、震える腕を杖のように地面に突き立て、体を持ち上げる。まさしく満身創痍といったところだが、まだなんとか立ててなくはない。悪いが、こちとら武偵なんだ。打たれ強さには、一家言あるんだよ。

俺は、ふらふらになりつつも立ち上がり、せいぜいと息を吐きながら、ブラドに眼光を飛ばす。やつは、振りぬいていた拳をぷらぷら振りながら、俺を眺めていた。

「ほう……その状態で立つとはな。おもしれえ武器もん持つてんじゃねえか。お前のか？」

ブラドの言葉に、俺は舌打ちをしたい気分になる。

クソ……『スタングローブ』がバレた。こんなもん、一発芸みたいなもんだ。一度外せば、そういう武器だと認識されてしまう。

俺は息も絶え絶えになりながら、

「い、いや……借りモンだよ、こい、つは……」

と、再び意識を失わないように口を動かす。

事実、この『スタングローブ』はあややに借りたもんだ。俺の力じゃないしな。

と、その時、離れたところから声があがった。

「ご、ごめんなさい……！ リサの、リサのせい……っ！」

視線を向けると、メイド姿の少女が、涙をぼろぼろ零しながら俺に向かって謝っていた。

やつぱり、この子はこれまで会ったメンバーとは毛色が違う。本気で、俺に対して申し訳なく思っているらしい。

もちろん思うところがなかったわけじゃないが、俺はとりあえず、こつちが恐縮するほど謝っている少女に向けて言葉をかける。

「気に、すんなよ……あなたのせいじゃねえ……」

「勇者様……」

唇をわななかせながら呟かれた言葉に、俺は思わず苦笑する。

さつき俺が名乗った勇者なんて呼び名を、この子は律儀に呼んでいる。それが少し、肩の力を抜かせた。

そんな中、ブラドが呆れたように首を振り、
「ジエヴオーダン。お前は一体、どっちの味方だ？ まあ、仲間意識なんざここではあつてねえようなもんだけどな……ま、今はお前は どうでもいい。それよりだ、糞餓鬼。お前は、一体なんでまだ立ち上がる？」

「あ……？」

「その傷、軽くはねえだろう？ なのに、なぜまだ俺に齒向う？ 実力差がわからねえのか。そこで転がってりや、楽に殺してやったのによオ」

「……………」

ブラドの指摘に、俺は即座に返答できなかつた。

あいつが言ってることは間違つてない。どうせ殺されるなら、こんなに頑張る必要なんてない。

けど、違う。

そういうことじゃねえんだ。殺されるとわかっていても、それでも俺は戦う。

その理由なら、俺はいくらでも挙げられる。

「お前が、俺の大切な奴を、傷つけたからだ」

「あん？」

片眉を跳ね上げるブラド。俺は、なおも構わず言葉を続ける。

「お前が一体なにをやったのか、そんな具体的なことはわかんねえよ。でもな、お前は俺が大切に思ってるやつを泣かせたんだ。だから、俺はテメエが許せねえ。だから俺は、お前をぶん殴るって決めたんだ」

「その結果、お前が死んでもか？」

「たとえ俺が死んでもだ」

もう、俺はろくに戦えない。俺の体は、とつくに敗北を認めてる。けれど、心でも負けちまつたら、ここで飛び出した意味が本当になくなつちまう。せめてこいつに刻み付けろ。俺が心底こいつをぶつ飛ばしたいって気持ちを、前面に押し出せ。

俺は、眼前の怪物を睨みつける。俺にできる、ちっぽけな抵抗だ。それを見て、ブラドはやはり俺をあざ笑った。

「くだらねえ。塵みてえな命を、そんなことに散らすとはな。だってら望み通り一ひねりにしてやるから、遺言の一つでも言ってみたらどうだ？」

ずずん、ずずん、と重量を感じさせる重い足音を響かせながら、ブラドは一歩一歩こちらに歩いてくる。

それはそのまま、俺の命が消えていく音と同義だった。体は動かない。逃げ出す体力すら、もう残っていない。

だから俺は最後の力を振り絞って——ブラドに向けて、笑いながら中指を立てた。

「次はぶちのめすぞ、獣野郎」

「つまらねえ遺言だな」

精一杯の強がりに、ブラドは鼻を鳴らす。

そしてついに——奴は俺の目の前まで来た。

ゆうらり、と右腕が持ち上げられる。それはまるで、死神の鎌のように見えた。俺の命を一瞬で刈り取る、冥府からの使者だ。

ああ……死ぬのか、俺。

どこか冷静な頭で、俺は理解した。

当たり前の結果だ。これは。見て見ぬふりして逃げ出せばよかったのに、馬鹿だよなあ、俺は。

俺が死んで、泣いてくれるやつはいるだろうか。……うぬぼれでなければ、何人か思い浮かぶ。悪いな、みんな。勝手にくたばっちゃまって。

そんで……悪い理子。助けにきといてこのザマだ。ホント、情けねえよな、俺は。

脳裏にいくつもの顔が浮かんでくる。俺の場合、走馬灯はどうやら大切な連中の顔だったらしい。

人生で最後に浮かぶ光景がそれだったことに、どこか誇らしげになる俺に。

——死神の鎌が、振り下ろされた。

「勇者様っ！」という声が、耳に届く。

最後に聞く声が敵方のものかよ、と笑い――

そして、ブラドしにがみのかまの腕が、本物の鎌に弾かれた。

ガギイイイツツ！ という轟音とともに、濃紺に彩られた鎌が滑る。

衝撃に打ち負けたのは、ブラドの方だった。

「あア……!?!」

右腕を大きく逸らされたブラドが、困惑の声を上げる。

そして、困惑しているのは俺も同様だった。

今――信じられないことが起きた。

俺が叩き潰される、その寸前。俺とブラドの間に誰かがとんでもない速度で割り込み、一瞬のうちに手の中に現れた大鎌でブラドの攻撃を防いだんだ。

呆然と口を開ける俺に、大鎌の使い手は、こちらに振り返った。

「――大丈夫かしら?」

ハープのような、流麗な声だった。

そしてその声の持ち主は、声音以上に神秘的だった。

振り返った顔は、神話で語られてもおかしくないほど、俺がこれまで出会ったどんな女性よりも美しかった。黄金比と言う言葉があるが、まさしくそれだ。

草色のロングスカート・ワンピースに包まれた肢体は、ふくよかできてどこか包み込む母性のような雰囲気醸している。背中に垂れた三つ編みの茶髪も、透き通るほど艶がある。

両手に構えた濃紺の大鎌こそ異彩を放っていたが、文句なしの美人だった。

こんな人、一度会えば誰だって忘れないだろう。

だから、俺も忘れていなかった。

「あんだ……あの時の……!」

驚愕に、俺は目を見開く。

そして思い起こされるのは、去年の12月。とある人の葬式の日に出会った、絶世の美人。

まさしく今眼前にいる人と、寸分たがわぬ美貌だった。

どうしてここに——と咄嗟に訊ねようとする俺に、彼女は人差し指をちよんと俺の唇に押し当て、

「話は後。まずは、逃げましょう?」

「え?」

青みがかった瞳で薄く微笑み、どこから取り出したのか、一発の弾丸を宙に放り投げた。

瞬間。

その弾丸が爆発し、急激に白煙がホール内を満たした。

「うわっぶ……っ!」

これは……武偵弾『煙幕弾』か!?

1発100万円は下らないという、一流の銃弾職人バレットイスタが作成する特殊弾頭。それが武偵弾だ。今この人が投げたのはおそらく、そのうちの一つで、煙幕を作り出す武偵弾だろう。

そんなもんを持ち歩いてるとか、一体何者なんだこの人……!?

と思っていたら、急に肩を組まれた。耳元でさっきの女性の声が囁かれる。

「強引でごめんね? けど、こうなった以上、急がないといけないの。走れる?」

この人がなぜ俺を助けてくれるのかはわからない。

だけど本能的に、俺は返事をしていった。「はい」と。

途端、俺は引っ張られるように走り出していた。どこを指しているのかはわからない。ただ、引かれるままに足を動かす。

「カナア! テメエ、どこだ出てこいッ! バラバラに引き裂いてやるぞ!」

白煙で煙る視界の中、ブラドの音が響く。

しかしそれを無視して、俺たちはホールの出口にたどり着く。この煙幕の中、よく出口がわかるな、この人。

そして俺たちは廊下に飛び出し——そこで俺の足から、がくんと力が抜けた。

やばい、今になって足にダメージが……!?

倒れる——と思ったその瞬間、

「——恥ずかしいかもしれないけど我慢してね、男の子」

「へ? ……うわっ!？」

女性——おそらくカナという名前だろう——カナさんが、俺をひよいと持ち上げ、そのままいわる、その……お姫様抱っこされてしまった。

やめっ……やめろオ！ 俺を悶死させる気か！

しかしダメージの抜けきらない体は逆らうことができず……さらに最悪なことに、助かったことへの安心感からか、まぶたが下がっていく。

あ、こら、おい。なに気絶しようとしてんだ俺！ 耐えろ、このままこんな恰好でいいのかよ?!

しかし脳内抗議は受理されず……俺はそのまま、眠る様に意識を落とした——

* * *

体内に撃ち込まれた3発の弾丸を、ブラドは無限回復により即座に治癒していた。

——無限回復。

それはブラドが、否、彼の一族『吸血鬼』が持つ特殊能力だ。『魔臓』という特殊な体内器官が健在である限り、彼らはいかなる外傷であろうとも1秒もあれば完治してしまう。現に今も、瞬きの間で赤い煙を上げながら、治癒は完了していた。おまけに、銃弾は異物として、すでに体外に排出済みだ。

だから、撃たれたこと自体は問題ない。たとえ何十発この身に撃ちこまれようとも、その分回復するだけなのだから。

問題は。

その、着弾箇所だった。

「……オイ。お前、どこでこれを教わった?」

ブラドは、遠来のように喉を鳴らせつつ、発砲した少年に詰問する。ブラドが撃たれたのは、両の肩に1発ずつと、右わき腹に1発。丁度、ブラドの上半身に描かれた3つの目玉模様に、だ。

そして、なによりそれが問題だった。

先述したとおり、ブラドには無限回復がある。しかしそれは、『魔臓』という器官が健在ならばの話だ。

体内に4つある『魔臓』。そのうち3つは、まさに今しがた撃たれた目玉模様の位置にあった。

無論、これはブラドの意図したものではない。ブラドはその昔、『バチカン』——イタリア・ローマに根を張る宗教組織から送り込まれた聖騎士パラディンにより秘術をかけられ、『魔臓』の位置が目玉模様として浮かび上がるようにされてしまったのだ。

ゆえに、ブラドにとつての目玉模様は、そのまま弱点に直結する。幸い『魔臓』は4つ同時に破壊しなければ相互回復で復活するが、それでも弱点を知られているのはまずい。

そもそも、この弱点を知る者は少ない。いるとすれば、『イ・ウー』のメンバー。しかしそれでも3つ目までしか知らないはずだ。

残る可能性としては——

「ローマでちよつとな。心配すんなよ、なんならもう使わねえでやろうか？」

少年が、あざけるような口調でそう言った。

やはり、この少年は『バチカン』の関係者らしい。ブラドに消えない刺青を刻んだ奴らなら、『魔臓』の位置が伝わっていても不思議ではない。それでも、4つ目の位置が露見する前に襲撃者である聖騎士は撃退できたので、それは知られていないだろうが。

しかしそれよりなによりブラドの怒りに触れたのは、少年の言い様だった。

「お前……ずいぶんとこの竜悴公ドラキユラ・ブラドを虚仮にするじゃねえか」

ブラドには、夜の王としての矜持がある。

数百年の時を生き、そして生物の上位種として君臨してきたその年月こそが、ブラドを傲岸不遜な暴君へと変えていた。そんな自分に対し、上から見下ろすかのごとき発言。到底許せるものではなかった。

怒りに、真紅の両目をさらに紅く輝かせるブラド。

しかしその直後、彼の怒りは形を変えた。

「……それは、何の真似だ？」

「テメエを倒す準備だよ」

ブラドの問いかけに、少年はあっさりと答えた。

少年は、両腕を前に構えたボクシングスタイルを取っていた。その両手には、なにも握られていない。銃も剣も何一つ、だ。

それが示す答えは明白だった。

つまり。

少年は己の拳一つで、不死の怪物ブラドを打ち砕こうとしているのだ。

「素手で俺を倒す、だと？ ゲハツ、ゲハツ……ゲウウウアババババツ！ おもしれえ！ おもしれえぞ、餓鬼！ そんな間抜けは、古今東西いなかった。シャーロックも、アルセーヌも、ジャンヌ・ダルクも、どいつもこいつも武器でオレを殺そうとしてきた！ やれるもんならやってみろオ！」

ブラドは、内心から溢れる面白さを隠そうともせずには笑い、挑むように伸ばした人差し指を少年に突きつける。

そして、内心で嗤う。

（そんなちっぽけな腕でオレを倒せるというなら、やってみやがれ。オレはいつも通り、そういう思い上がった馬鹿を殺すだけだ）

ブラドに容赦するつもりはない。殺しなら、今までの時間の中で飽きるほど行った。いまさらそこに新たな骸むくろが増えようとも、なんの感慨もわからない。

だから。

叫びながら走り込んでくるあの哀れな少年の命もまた、ロウソクの火を吹き消すように散らしてやろう。

ブラドは迎え撃つために、両手を大きく広げて待ち構える。

そこに、少年がダガーナイフを投擲してきた。

（――フン。くだらねえ）

ブラドは一切恐れることなく、飛来したナイフを右腕で弾いた。

そこに大きな意味は無い。もちろんナイフが刺さったところで、ブラドはすぐに完治するだろう。しかし、払える羽虫は払うに限る。た

だ鬱陶しいから払った。ブラドにとっては、ただそれだけの行為だった。

しかし、それこそが少年の狙いだったらしい。ブラドに生じたわずかな隙に、少年は距離を詰めていた。

「舐めるなアー！」

ブラドは、樹齢を重ねた大木のような左腕を、少年の頭めがけて薙いだ。

直撃すれば、トマトのように潰れてもなんらおかしくない一撃。しかしその攻撃は、少年が身を屈ませることで回避された。

これで、ほんの数瞬だが、ブラドに決定的な隙ができた。

次に来るであろう少年の反撃を、ブラドは甘んじて受けるつもりだ。どのような攻撃であれ、ブラドの無限回復を抜けるとは思えない。

だがその反撃が来る前に、離れた位置からリサの悲鳴が聞こえた。そちらを見ずとも、何が起きたかはわかっていた。おそらく、さきほど弾いたナイフがリサ目がけて飛んだのだろう。なにせ、そうなるように弾いたのだから。

リサの悲鳴は、ブラドの血流を熱くさせた。これでまた、変身時間は伸びるだろう。

たった、それだけ。ブラドが狙っていたのは、たったそれだけだった。

しかしこの行動が、思わぬ結果を引き起こす。

なんと、少年が悲鳴につられて視線をブラドから逸らしたのだ。まさに千載一遇、そのチャンスを手放さるような愚かな行動だった。

そして。

ブラドは、そんな間抜けを見逃しはしない。

「——死ぬよ」

ナイフを弾いた右腕を、そのまま振り子のように引き戻し、少年の背中に叩き付けた。

バギンツ！ と何かが砕けるような音が響き、ブラドの剛毛越しに、固いものをたたき折ったような感触が伝わる。

水平に吹き飛ばす少年を目で追いながら、ブラドはほくそ笑む。

(今のは、背骨壊ったか？ それにしちや音が甲高かった気がするが……まあ、最近では串刺しばかりだったからなあ。折る感触すら忘れちゃったぜ)

ブラドの剛毛は、それそのものが鎧に等しい。大抵の衝撃を吸収し、さらに像のごとき分厚い皮膚が体内を守っている。

ゆえに、触覚が鈍いのが難点だ。現に今も、曖昧になにかを折ったとしかわからない。まあ、この状況なら十中八九背骨だろうが。

(これで終わりか。あの威力で骨を折ってやったんだ。立ち上がることもできねえだろうよ)

ブラドは静かに、戦闘の終了を確信する。己の完勝、という形で。しかし。

地面に落下した少年が右拳を左上腕部に叩き付けると、拳から稲妻が小さく迸った。

さらに、あろうことか立ち上がったのだ。激痛とショックで到底まともに動くことすらできないと踏んだ、その体で。

そこには、なにか理屈があるはずだ。根性論など信じないブラドは、そう睨んだ。

そして、気づく。

(あいつが自分で自分を殴った瞬間、稲妻が奔ったのが見えた。自分の体に電気を流し込んだのか？ てこたア……電流による肉体操作、か)

人体の駆動は、結局のところ電気信号で行われている。そして、その電気信号そのものを扱えるとすれば、人体を思うがままに操作することができる。痛みから行動にストッパーがかかった状態であっても、だ。

電気の超能力者には、そういった芸当ができるものがあると聞く。娘のヒルダも電気を操れるが、そういった細かい操作は向いていないらしい。力の大小ではなく、向き不向きの問題だ。

となれば、少年が動いていることにも納得がいく。

そしてそれはブラドにとって、あるいは収穫のチャンスかもしれない

かった。

「ほう……その状態で立つとはな。おもしれえ能力もん持つてんじやねえか。お前のか？」

ブラドは少年に、その超能力は天然のものかと尋ねる。

超能力者には、2種類いる。一つは、生まれつき超能力を備えた天然の超能力者。そしてもう一つは、『色金』イロカネという特殊な鉱石によって超能力を扱う、擬似的な超能力者だ。リュパン家の秘宝である十字架——それに使われる鉱石を使用して超能力を扱う理子は、後者にあたる。

そして、天然の超能力者は、血筋によって生まれる。つまり、その遺伝子に刻み込まれているのだ。超能力という、この世の神秘が。

ブラドは、常に優秀な遺伝子を集めていた。吸血鬼に伝わる『吸血』——つまりは、血からその人物の能力を写し取るためだ。そうして繰り返される『吸血』により、ブラドは強固な個体へと成長していった。だから、この少年がそうならば、殺す前に血を抜き取る腹積もりだったのだが、

「い、いや……借りモンだよ、こい、つは……」

少年は、今にも消えそうな声で否定した。

つまりは、これで少年をわずかでも生かす理由が消え去ったのだ。

なにやらリサとお遊戯している少年をつまらなそうに見据え、ブラドはゆるゆると首を振った。

「ジエヴオーダン。お前は一体、どっちの味方だ？ まあ、仲間意識なんざここではあつてねえようなもんだけどな……ま、今はお前は どうでもいい。それよりだ、糞餓鬼。お前は、一体なんでまだ立ち上がる？」

「あ……？」

「その傷、軽くはねえだろう？ なのに、なぜまだ俺に齒向う？ 実力差がわからねえのか。そこで転がってりや、楽に殺してやったのによオ」

完全に少年を殺す気になったブラドが、最後の暇つぶしとばかりに少年に訊ねる。

実際、ブラドにはわからなかった。なにが、ここまで少年を駆り立てるのか。

なかなか珍しい能力を持つてはいるようだが、しかしそれだけだ。銃弾は効かないし、体は満身創痍。すでに勝負は決したといっている。

ならば、できることなど、おとなしく死を受け入れるか、わずかな可能性にかけてみっともなく逃げ出すか。それくらいしかないだろう。

しかし少年は、そのどちらも選んでいなかった。死を覚悟した者でも、実力差に怯えた者の目でもなかった。

その深い黒瞳は、死んでいなかった。

そして。

少年は、答えを出す。

「お前が、俺の大切な奴を、傷つけたからだ」

「あん？」

「お前が一体なにをやったのか、そんな具体的なことはわかんねえよ。でもな、お前は俺が大切に思ってるやつを泣かせたんだ。だから、俺はテメエが許せねえ。だから俺は、お前をぶん殴るって決めただ」

「その結果、お前が死んでもか？」

「たとえ俺が死んでもだ」

言葉とは裏腹に、少年の目は決して折れない強さを秘めている。きつと、首を切り落としたところで、その強さは褪せないだろう。

けれど。

ブラドにとって、それは実にくだらない解答だった。

少なくとも、殺すことを止める理由には全くならなかった。

——だから。

夜の王ブラドは、少年の命を終わらせるために動き始めた。

* * *

——そして。

少年の『答え』を聞いたものが、あと2人いた。

一人は、リサ・アヴェ・デュ・アंक。自分の失態で窮地に立たさ

れたのに、恨み言一つ言わずにブラドに啖呵を切った少年の強さに、リサは瞳に涙を溜めながら、魅せられた。

もう一人は、戦場となった第3ホールの外にいた。

ホールの出入り口。その扉に寄りかかりながら、絶世の美人が少年の声を耳にしていた。

彼女は、『イ・ウー』構成員・カナ。本名を、遠山金一という。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム——通称『ヒステリアモード』。彼の家に伝わる特殊体質、そのトリガーは性的興奮とされている。しかし、金一は女装によるそれが、ヒステリアモードの発動条件に足ることを発見していた。

つまりはこの女性——カナは、金一の女装姿であり、ヒステリアモードが発動していることを示唆している。

ではなぜそんな状態でこんな場所にいるのか？

——その理由は、数十分前に遡る。

とある任務から帰った金一が『教授プロフェッサー』に報告を済ませ、自室に帰ると、脱ぎ散らされたコートとウィッグ。そして、己の顔を模したマスクが出迎えた。

この時点で、金一は何かが起こっていることを察した。この変装道具は確か、自分より階梯が下の峰理子が持っていたものだ。しかし彼女は今、この艦を出ている。

となれば、誰か別の人物が使用したということになるが……こんなものを使って遊ぶのは、メンバーでは理子くらいのものだ。

つまり、ほとんどあり得ないことではあるが——侵入者の可能性がある。そいつが理子の部屋から変装道具を盗み、利用した可能性だ。

この時点で、金一はカナへと変身を始めた。服を着替え、化粧をし、髪を三つ編みにする。本家ヒステリアモードは、場合によっては一瞬でなることができるが、金一流ヒステリアモードはその性質上、時間がかかる。

ようやく完全に（それこそ人格ごと）変わったカナは、室外に出て異常を探し始める。

そして、その数分後のことだった。ヒステリアモードで強化された

カナの聴覚が、銃声を捉えた。

『イ・ウー』内は私闘が禁止されていないとはいえ、さすがに艦内での発砲など滅多にない。胸騒ぎを感じたカナは、急ぎ銃声の発生源へと向かう。

そしてたどり着いた、ボストーク号第3ホール。そこでカナが見たのは、『イ・ウー』内でナンバー2の序列を誇る怪物ブラドと、一人の少年が対峙している姿だった。

カナは、扉の隙間からそつと様子を窺う。

(あの制服、キンジと同じ東京武偵高の生徒？ そんな子がどうして……)

カナ——いや、金一には一人の弟がいる。

名を、遠山キンジ。東京武偵高に通う、2年生だ。

そのキンジと今ここにいる少年は同じ制服を着ていた。なぜ、武偵高の生徒がここにいいのかは、聡明なカナであってもわからない。ただし。

その少年が誰であるかはわかった。

(あの子……有明、錬君?)

黒髪の隙間から見えた横顔に、カナは見覚えがあった。

彼は、弟であるキンジの友人だ。カナが彼に出会ったのは、たったの2回(正確には1回だが)。しかし、武偵の中でもなかなかいないような鋭い眼光は、記憶に残っていた。

なにより。

彼は、弟の恩人だったのだから。

(どうして……どうして、君がこんなところにいるのッ！ それも、ブラドの前になんて……!)

カナは、らしくなく顔を歪めながら歯噛みする。

なぜなら、カナにはわかるからだ。どのような理由であれ、錬とブラドは対峙している。ブラドの足元に銃弾が転がっていることから、錬が発砲したことは読み取れる。つまりは、戦闘状態なわけだが……その結末は、錬の死以外にあり得ない。それほどまでに、『イ・ウー』のメンバーは常識はずれの強さを誇っていた。

とはいえそれはそのままならばの話だ。ここでカナが鍊を助けに割り込めば、話は変わってくる。

しかし。

それは決して叶うことはない仮定だった。

（ごめんなさい……私には、使命がある。あなたを助けることはできないの……つ）

カナは、視線を下向けて体を震わせる。

——もともと武偵であったカナ……金一が犯罪組織である『イ・ウー』にいるのには、理由があった。

『潜入捜査』^{スリッパ}。

つまりは、仲間のフリをしていた、金一は。そうして『イ・ウー』の懐深くまで入り込み、彼らを殲滅する。それが、金一が『イ・ウー』にいる理由であり……去年の12月、浦賀沖で豪華客船アンベリール号をジャックした『武偵殺し』理子の誘いに乗り、表の世界から姿を消した理由だった。

その狙いは、もうすぐ叶う。正確には、そのチャンスが巡ってくる。だから金一はいまここで、組織を裏切るわけにはいかなかった。たとえ、弟の恩人を見殺しにしても、だ。

この苦しみは、何度も味わった。犯罪組織である『イ・ウー』に籍を置いてからというものの、人が人を殺す場面を何度も見てきた。武偵として、そして正義の味方を代々行ってきた遠山家の人間として、絶対に誅しなければならぬ悪を、幾度となく見逃した。悪の元凶——『イ・ウー』を丸ごと、叩き潰すためと言い聞かせながら。

それでも、慣れない。いつだって、金一は苦悩してきた。正義を志しながらも悪を見逃す、その矛盾に。

今もまた、金一は心を裂く。本当は今すぐ飛び出すべきだとわかっているのに、大義のためにそれができないでいる。

そんな中。

メンバーであるリサの悲鳴に次いで、轟音が響いた。

ハツとして、カナは顔を上げる。その視線の先で、壁に叩き付けられた鍊がぼてりと落下するのが見えた。

ほんの一瞬、また見殺しにしてしまったのかと黒い感情が湧き上がりかけるが、鍊は弱弱しくも立ち上がった。

それにほつとするも、状況はなにも変わっていない。結局、鍊が殺されることは変わりない。むしろ、現状から鍊に対抗する実力が無いことを悟り、さらに悪い事態に見えた。

絶体絶命。普通なら、泣きわめきながらみつともなく逃げ出してもおかしくない。

——けれど。

そんな窮地に立たされてなお、有明鍊は言い切った。

たとえ、死んでも。

大切な人を傷つけられたから、戦うのだと。

その言葉を聞いた、瞬間。

カナは、有明鍊の中に『義』を見た。遠山家がなによりも守り続けた、『正義の心』。理屈云々ではなく、ただ正しく在る。その生き方を、カナは鍊を通して思い出した気がした。

そして、もう一つ。

カナは、とある『約束』を思い出していた。

『有明鍊君。あの子を助けてくれたお礼を、いつか必ずするわ。その時がいつになるかわからないけれど……もしかしたら、してあげられないかもしれないけれど……勝手に、約束する。いつの日か、私はこの感謝を形にして、あなたに返すわ』

その『約束』を思い出して。

カナは、「しかたないわよね」と小さく呟いた。

(約束を破っちゃったら、おじいちゃんに拳骨もらっちゃうもの。それは、嫌だわ。とつても、嫌……だから、そう。これは、しかたないことよ)

自分にか、それともこんな気持ちにさせた鍊にか、カナは困ったように笑う。

——カチリ、と。

固く閉ざした心の扉が、開く音が聞こえた。

鍊の、言葉が。姿が。まさしく、その鍵だった。

カナの視界では、とどめを刺そうとするブラドが、すでに鍊のすぐ近くで立っている。

『次はぶちのめすぞ、獣野郎』

『つまりねえ遺言だな』

この期に及んで、再戦を挑む気である鍊に対し、ブラドが岩塊のように頑強な右腕を振り上げる。

その時にはもう、カナは走り出していた。ぐんぐんと、ブラドと鍊に近づいていく。

そして、2人の間に割り込み、振り下ろされたブラドの腕を、髪の毛の中にバラして収納していた連結鍊——『サソリの尾』スソルピオを瞬時に組立て、迎撃した。

鈍い音を響かせながら、ブラドの腕が宙に跳ね返される。そのことにか、それともカナが割って入ったことにか、ブラドが困惑の声を上げながらたたらを踏んだ。

「——大丈夫かしら？」

「あんた……あの時の……！」

振り返って訊ねたカナに、鍊が間髪入れず口を開く。

覚えてもらっていたことに少しくすぐったくなりながらも、カナは鍊を制して脱出を促す。

それに対する明確な返事を待たずに、カナは袖口に隠していた武偵弾——『煙幕弾』を投げ、煙幕を張る。

この弾丸は、武偵時代に手に入れていた武偵弾の一つだ。エアロゾルを空中に形成する、ケミカルD.A.L.化学武偵弾。手投げでも使える優れものだ。

煙幕にまぎれて部屋を脱出したカナは、体勢を崩しかけた鍊を横抱きにしなから、さらに走る。目指す先は、ポストーク号唯一の脱出口であるドックだ。

途中遭遇したメンバーは、相手が困惑しているうちにすり抜けた。見つからないように、など言っていられない。ここからは時間との勝負だ。

やがてドックにたどり着いたカナは、気絶したらしい鍊を器用に抱えながら、ドック入口に設置された操作盤に取りつく。ここから、潜

水艇が出航するためのハッチを操作できるのだ。

カナの操作により、ドックの下部で外海に繋がるハッチが開き始める。海水の流入と、別口からの排水が行われる。

カナは、万が一のときのために小細工していた（電波から現在地を知られないようにする仕掛けなど）小型潜水艇『オルクス』の一つに、鍊共々飛び乗った。

そして即座に潜水艇の操縦を開始して、カナと鍊を乗せた『オルクス』は、ポストーク号のハッチから、海へと飛び出した。

すぐに搜索は出されるかもしれない。しかし、海は広大だ。ヒント無しで追いかけるような、狭いステージではなかった。

つまり。

カナたちは、人外魔境『イ・ウー』本拠地から、瞬く間に脱出したのだった。

* * *

「——ハッ!？」

落ちるときはじんわりと落ちた意識は、唐突な覚醒を迎えた。

一瞬俺がどうして気絶したのかわからなかったが、すぐに思い出した。

ジャンヌが学園島に乗り込んだこと。

逮捕したジャンヌから小型潜水艇の隠し場所を聞いたこと。

単身ポストーク号に乗り込んだこと。

ブラドという怪物と戦って負けたこと。

そして——カナという女性に助けられたこと。

そこまで思い出した頃には俺の意識もはつきりし、状況を確認する余裕が出来た。

今俺は、どこかのシートに座っているらしい。それも、完全な密閉空間らしく、四方を鋼鉄の壁に囲まれている。明かりはほとんどなく薄暗い。唯一の光源といえば、そこかしこに設置された速度計やなんらかの計器が放つ緑やらオレンジやらの光だけだ。

……すぐく見覚えあるんだが、ここ。

……というかぶつちやけ……、

「俺が乗ってきた潜水艇じゃねえか……」

「あら、気がついた？」

「へ？」

完全に独り言だったつもりで返事が返って来た。

ついでとばかりに、前に見えていた座席の背もたれから、ひよこつと女の人が顔を出していた。左目には、黄緑色の片眼鏡みたいな

ヘッドマウントディスプレイ
H M Dがついている。スカウターかよ。

その顔を、俺は知っていた。

知っていたって言うか、

「カナ、さん……？」

「ハーイ、有明君。……あら？ 私、あなたに名前教えたかしら？」

ブラドに殺されかけた俺を助けてくれたとびきりの美人が、ひらひらと白魚みたいな手を振りながら、挨拶してきた。

「いや、それはブラドが名前言ってたから……てか、あん時もそうだったけど、どうして俺の名前を……いやそれよりこれはどういう状況なんで——痛ウ!？」

聞きたいことが多すぎて思わず身を乗り出した俺は、体に走った痛みに呻いた。

おおお……い、痛え……ッ！

「ここら、ちゃんと説明してあげるから、無理しないの。ブラドと戦って五体満足なんて、奇跡みたいなものなんだから」

潜水艇の操縦があるのか顔を引っ込めたカナさんから、諫めるような声で言われた。

これ以上無駄に痛い思いをしたくないので、俺は素直に従う。

気配で大人しくなったのを察したのか、「よろしい」とおどけたように言ったカナさんは、

「細かい話はまた落ち着いたらしてあげるから、とりあえず今必要な話だけ聞いたら、目的地に着くまでもう一度寝ておきなさい。船を止めたら、すぐに身を眩ませなきゃいけないんだから、それまでにできるだけ体力を回復させるの」

「目的地？ この船は、どこに向かっているんですか？」

「それも含めての説明、よ。それと、敬語じゃなくていいわ。あなた、その怖い目で敬語使つても違和感あるわよ？」

ちよつと失礼すぎませんか？

「……わかったよ。敬語は無しでいかせてもらう。そんなわり、もう俺の目をからかうのやめてくれ。これでも気にしてんだ」

「りよーかい。これからは、目のことだからかうことはしないわ」

「なぜだ……これからあなたにからかわれ続ける予感がびんびんしやがる……ッ！」

「ビンビンだなんてそんな……エツチね、有明君」

「ほらもー！ さっそくいじつてくるし！ つーか、あんたそんな女神みたいな顔しといて、下ネタオーケーな人なのかよ」

「ごめんなさい。口説いてくれるのは嬉しいけど、私ちよつと応えられないわ」

「どこらへんに口説いてる要素ありましたかねえ?!」

額に青筋を立てて、俺は頭を抱える。

ああ、なんか久しぶりだこの感じ。この人、タイプはまた違うけど、時雨とか理子とかと同じ匂いがする。つまり、人をいじつて楽しむ人間だろう。

しかしまあ……たまに、救われたりするんだよな。こういう人には。

今だって、さっきまで死にかけてたとは思えないほど、俺の気持ちは穏やかになっている。こういう気分はなんというか……悪くない。

なんとも複雑な気分になる俺に、カナさんは語り始めた。

「まず、私があなたを助けてからホールを出たのは覚えてる？」

「ああ。それに関しては、ありがとう。おかげで命拾いした」

「どういたしまして。それで、私は気絶したあなたを抱えてこの潜水艇『オルクス』に乗って、ボストーク号を脱出したの。で、今はその『オルクス』で航行中ってわけ。ここまではいい？」

「そこまでは、なんとなく状況からわかった。けど……あんだ、一体何者なんだ？ あの艦に乗ってたってことは……『イ・ウー』のメンバー、なんだよな？」

俺の質問に、カナさんは一瞬言いよどみ、

「……それについては、また後でね。次に話しておくべきなのが、この潜水艇の目的地よ」

「……わかった。あんたのことについては今はおいとく。で、どこを目指してんだ?」

「香港。もちろん、聞いたことあるわよね?」

「馬鹿にすんなよ、中国だろ? ……で、その理由は?」

「一つは、ボストーク号が停泊していた海域から近かったから。もう一つは、逃亡先として都合がいいから」

「都合?」

「そ。香港……というか、中国にはね、大きな組織があるの。そして私は、そこに貸しがある。あわよくば匿ってもらおうってわけ」

大きな組織……か。なんか、話がきな臭くなってきたな。

しかも、逃亡って。別に俺、そこまでする気ないんだが。

「連れ出してもらったってこういうのはなんだけどき……俺、日本に戻りてえんだが」

「そうしてあげたいけど、あなたも私も日本人だからね。たぶん、まっさきに網を張られてると思う。見つかって殺されるリスクが高いわよ?」

「うぐっ……」

俺は思わず呻いた。

まあ、そりやそうか。仮にも犯罪組織にケンカ売ったんだ。それぐらいは考えとくべきだった。

こうなったら、もうしかたない。とりあえずこの人味方っぽいし、言うこと聞いておこう。それが一番生き残る可能性が高い気がする。

「じゃあ、行先は中国ってことはわかった。でも、そこでどうするんだ?」

「ほとぼりが冷めるまで、身を隠すの。それに、私にちよつと事情があつてね。長期間、身動きが取れなくなるの。だいたい、10日くらいかしらね」

「? どういうこと?」

「んー……そこを話そうとすると、いろいろ説明しなきゃだしなあ。とりあえず、それも保留」

「全体的に説明不足だろ……」

「実際、まとめて説明しちゃったほうが早いよ。だから……うん。そろそろ寝なさい。中国に着いたら起こしてあげるから」

「……はあ。わかった、わかりましたよ」

この人もレキと同じだ。少なくとも今は言う気がないんだろう。で、多分これ以上無理に聞いても答えてくれそうにない。

それならもう、言われた通りさつさと寝ちまおう。俺が学園島を出てどれくらい経ったかわかんねえけど、ずっと気を張ってた上に、戦闘で大分体を痛めた。香港に着いてすぐ動くってんなら、確かに体力はなるべく回復させたい方がいい。

そう判断した俺は、背もたれに体を深く預け、目をつぶる。お世辞にも寝心地がいいとは言えないが、まあ文句は言えない。

途端、さつきまで気絶していたくせに睡魔が襲ってきた。意識の混濁が始まる。

深く深く水の中に沈んでいくような感覚の中で……声が聞こえた気がした。

「——おやすみなさい有明君。良い夢を」

* * *

古めかしい蓄音機がイギリスのクラシックを流す、小さな部屋の中で。

その男は、薄く微笑んだ。

27. 5. 終着点へ向かう物語

——友達の兄が死んだ。

そんなこと、そうそうあることじゃない。しかも、俺はまだ高校1年。その友達もまた1年生ということは、ほとんど必然的に兄も若かった。

19歳。それが、友人である遠山キンジの兄、遠山金一さんの享年だった。

2008年12月24日。その日、浦賀沖で大きな海難事故が起きた。

豪華客船アンベリール号。

クルージング中だったその船が、原因不明の爆発により沈没したんだ。

乗員・乗客のうち、犠牲者はたった一人。まさに、奇跡だ。助かった連中からしてみたら、な。

けどその奇跡は、神様が起こしたもののなんかじゃない。犠牲となった一人——アンベリール号に乗り合わせていた武偵が、最後まで避難誘導を行ったからこそ起きたんだ。

そしてその武偵こそが、遠山金一さんだった。

彼は、当初行方不明とされていた。しかしたったの1日で捜索は打ち切られ、死亡扱いへと変わった。

その背景には、やはり世論が関係していたんだろう。

曰く——『乗り合わせていたにもかかわらず、未然に事故を防げなかった無能な武偵』。

命を張って行動した金一さんは、訴訟を恐れたクルージング会社にスケープゴートにされたのだ。

人は、自らに起きた不幸に原因を求めたがる。ただ運が悪かったでは納得できない。

だから、一部の乗客にも同じ主張をする人間がでてきた。しかも、その時流に乗るかのようマスコミまでこぞって金一さんを非難した。きっと、武偵という職業が世間にあまり評価されていないことも

背景にあつたはずだ。

だからって、こんなにもふざけた話があるかよ。武偵はなんでも屋だ。でも、なんでもできるわけじゃない。武偵は、アメコミに出てくる超人とは違う。

……結果的に、金一さんの葬儀は、行方不明としては異例の早さで執り行われることになる。そして俺は、その葬儀に参列してくれないかとキンジに頼まれた。

そう言われて断るほど、浅い付き合いじゃない。コンビ組んでる相棒の頼みを、どうして断れる？

それに俺自身、金一さんとはたった一度だけだが面識があつた。キンジが持つてる古いゲームを貰いに、巣鴨にあるという実家までお邪魔した時、キンジの祖父母、そして金一さんが在宅だつた。俺なんかじゃ逆立ちしたつてなれないような美男子で驚いたんだが、キンジにこつそりと、金一さんは女装することでヒステリアモードになれることを教えて貰つたっけな。

忙しいらしくそれほど会話もできなかつたが、俺がキンジとコンビを組んでいることを伝えると、「弟をよろしく頼む」と頭をくしやりと撫でられた。俺に兄弟はいないけど……なんとなく、兄つてのがどんなものかはわかつた気がする。

なんせ何ヶ月か前にほんの少しだけ会つただけだから、もう顔がはつきりと思ひ出せないが……それでも、キンジとは到底比べものにならないが、俺も金一さんの死に胸が痛んだ。

だから――

「やるせなかつた、な……」

金一さんの葬式。それが終わって式場を出た俺は、正面玄関から少し離れた場所で、壁に背を預けて呟いた。

脳裏に思い出すのは、遺体のない棺。金一さんが遺したのは、キンジが遺品として渡されたバタフライナイフ一本のみだ。

「遺体もない葬式、か。なんて声かけりゃいいんだよ……」

言いようのない苦痛に、俺の顔が歪む。

正直に言えば、出席したことを後悔していた。あんな顔したキンジ

なんて見たことなかったし、見たくもなかった。あいつの方が、よっぽど死人みたいな顔だったじゃねえかよ……。

……情けねえ。友達が苦しんでんのに、何も言えないのかよ、俺は。と、そんな風に悔恨している時だった。

「——君。ちよつといいかね?」

「はい?」

急に声をかけられた俺がそちらに顔を向けると、喪服姿の壮年の男性が杖を片手に立っていた。フレームの細い眼鏡をかけ、どこことなく理知的な雰囲気醸している。

俺は困惑しながらも、

「えつと……俺に、何か?」

「いや、なに。君は、ひよつとして遠山金次君の友人かい?」

「ええ、まあ……」

「やっぱり。東京武偵高の制服を着ていたから、そうだと思ったよ。……一つ聞きたいんだが、金次君がどこにいるかわかるかい? もしよかつたら、呼んできてもらいたいんだ。この通り、足が悪いものでね」

「構いませんけど……あの、あなたは?」

「ん? ああ、すまない。私は……こういうものだよ」

そういつて男性が懐から取り出した手帳には、どこかで見覚えのあるバツジがついていた。

というか、これまさか……ぶ、武装検事の徽章きしやう、か!?

俺は、とんでもない大物の登場に咄然となる。

武装検事とは、平たく言えば俺たち武偵の上級職だ。普通の検事がさまざまな試験を突破した末になれる、不合格率99パーセントオーバーの超難関職業としても知られている。

だが問題は、そこじゃない。

武装検事には、発行されてるんだ。いわゆる、『殺しのライセンス』が。

日本で殺人を容認されている人間なんて、当然ながらほとんどいない。その数少ない内の一つが、武装検事だ。

なんで、そんな人がここに……？

と、一瞬疑問に思ったが、すぐに思い至ることがあり、俺は口を開いた。

「あなたは、ひよつとして、キンジの……」

「ああ、察しがいいね。君の考えている通りだよ」

しわが刻まれた顔で、武装検事は笑った。

やっぱり、そうなのか……。

俺は、自分の予想が当たっていたことに顔を青くする。

この人は多分、クルージング会社が雇った検事だろう。どこかのニュースで言っていた。アンベリール号のクルージング会社が、遺族に対して責任を求める考えを持っている、と。

つまりこの人は……キンジの裁判を担当する検事、ということなんだろう。

これは、キンジにとって最悪の展開だ。

なんせ、武装検事といえばその特異性——つまりは殺人込みの戦闘力に目が行きがちだが、もつと基本的なことがある。それは、武装検事が単なる検事としても破格の能力を持っている、ということだ。

こんな格言がある。

『武装検事が矛ならば、それを防げる盾は武装弁護士しかいない』。

つまり、無理なんだ。武装検事に裁判を担当してしまったら、同じく弁護士の上級職である武装弁護士に弁護を依頼しなければ、裁判の体すらなさずに有罪を決定されてしまう。

キンジに、武装弁護士を雇うことはできないだろう。あれは、相当な金を積まないと雇えない。武装弁護士はよくぼろ儲けできるとい
うが、それは逆に言えばその分依頼料が高いからだ。

——だとしたら。

この裁判を水際で食い止めるには……チャンスは、今しかない。この武装検事に、なんとか裁判を辞退してもらおう以外、道はない。

俺は、あいつが訴えられるなんて嫌だ。在りもしない金一さんの罪
なんかで、あいつが『世論』なんてものに潰されるのは見たくない。

だから俺は、拙いながらも、言いたいことを伝える。

汗で湿る手を握りしめ、

「あの……キンジは、呼んできます。必ず。だから——聞いてやって欲しいんです。あいつの話を」

「ふむ……どういふことかね？」

武装検事が、ごつごつとした手で顎を撫でる。

俺は言葉を間違えないように慎重になりながらも、続ける。

「今あいつは……うまく言えないけど、すごく苦しんでると思うんです。兄を亡くして、心が折れたんだと思います。だから……あいつの姿をちゃんと見て、あいつの言葉を聞いてやってください。そして、出来れば……考えてやってください。どうすることが、あいつにとつて一番いいのかを」

そう言つて、俺は頭を深く下げた。

直接的に、無罪にしてくださいとか、裁判を取りやめてくださいとは、言えない。言い逃れしようとしてるみたいで、それはあまりに印象が悪い。そもそも、部外者である俺がどうこう言ったところで、覆せるわけがない。

だから、ここがギリギリのラインだ。ここから先はもう、キンジ自身に任せるしかない。俺にできるフォローはここまでだ。

俺は、無言で頭を下げ続ける。

そこで、武装検事の声がかかった。

「頭を上げたまえ。まずは、金次君を連れてきてもらいたい。全ては、それからだ」

「ッ！　じゃあ、話は……」

「もちろん聞くと。そもそも、私が今日ここに来たのは、彼に話をするためであり……彼から、話を聞くためなのだからね」

そう締めくくった武装検事は、見る者を安心させるような笑みを形作つた。

……はあああああ。よかった。この人、普通にいい人じゃねえか。俺が説得するまでもなく、ちゃんとキンジと話し合うつもりだったのかよ。

まあ、これでお膳立ては済んだぜキンジ。あとは、お前ががんばれ。

金一さんがどんだけ凄いことをやったか、そしてお前がどう思ってるのか。その思いの丈をぶつけてやれ。

俺はもう一度頭を下げてから、

「じゃあ、その、すぐに連れてきますんで！ あの……ホント、よろしくお願いします！」

くるりと踵を返し、ダツシユでキンジを探しに行く。

まずは、式場内に入り、俺が式場を出る前にキンジを見た場所まで行く。が、そこにキンジはいなかった。移動したんだろう。

チクシヨウ、どこいんだよあいつは！ せつかく話が通じそうな人だつつつても、話せなきや意味ねえぞ。まさか、帰ったりしてねえよな？

クソ、このまま適当に探し回っても、埒があかねえ！

俺は、適当にその辺にいた人を捕まえ、

「あの、すみません！ 遠山金一の弟の、遠山キンジがどこにいるか知りませんか?!」

「さ、さあ。私も、式の後は見えないねえ……」

「そう、ですか……ありがとうございます」

俺の剣幕に圧されたのか、若干体を引き気味に答えられる。

俺は礼を言ってから、今度は違う人に訊く。それがダメなら次の人、それでもダメなら次の人……。

そうして走り回りながら訊ね続け、そしてようやく当たりを引いた。

「キンジ君かい？ 確か、彼ならマスコミが集まっている方に行つたよ。一応、大きなニュースにまでなってる事件だし、遺族の話としてインタビューされてるんだと思うよ」

「インタビュー……？ それ、どこでやってるんですか？」

「ほら、式場の裏手に広場みたいになってるところがあるだろ？ あそこだよ。多分、マスコミの数が多いから、スペースのあるあそこでやってるんじゃないかな」

外かよ、クソツ。そりゃ、ぐるぐるの中見て回っても見つからねえはずだ。

俺は、教えてくれた人に頭を下げ、再び正面玄関から外に出る。それから大きく迂回し、式場の裏手へと走った。

そこにあつたのは、芝生が敷かれた広場だ。普段は綺麗に整備されていたであろう芝は、大勢の足跡に踏み荒らされている。

その犯人は……俺の視線の先で集団になつている報道陣プレスの面々だろう。

「あれか……」

12月だつてのに、走り回っていたせいでうつすらと額に滲んだ汗をぬぐい、俺は小走りで近づく。

それに伴って、最初はざわざわと判然としなかったマスコミの聲がはつきりとしてくる。

1歩、2歩、3歩と俺は近づいて——そして、それを聞いた。

「お兄さんのせいで、大勢の人が危険に晒されたわけでしょ？」
——きつと。

その発言をした記者だつて、本当の意味で悪気があつたわけではな
いと思う。ただ、目に見えない流れみたいなものがあつて、それがた
またまこういう形を取っただけにすぎないんだろう。

けれど。

それでも、俺にはその言葉がひどく悪辣に聞こえた。たとえばこれ
がテレビの中での話だったなら、まだ不快に思う程度で済んだだろ
う。

だけど……それをよりによって『あいつ』に言うつてののか？

「……………」

俺は無言で記者の群れに向かい、口々に金一さんを——そして、『あ
いつ』を責める言葉を並べ立てている連中を、無理やり押しつけなが
ら前進していった。

当然、文句は飛んでくる。しかしそれらすべてを無視して、俺は記
者の波をかき分け……そして、ついに先頭まで躍り出た。

そこに、『あいつ』はいた。

「鍊……」

武偵高の学生服を着て、手には金一さんの遺影を捧げ持ったキンジ

が、弱弱しい声で俺の名前を呼ぶ。

俺はキンジの表情を見て……そして、顔を歪めた。

おい、お前……なんて顔してんだよ。お前、昔言ってたじゃねえか。金一さんは、悪を挫く正義のヒーローなんだろ。最後の最後までその生き様を貫き通した、そんなかつこいい人なんだろ。

だったら……なんでその弟が、そんな今にも泣きだしそうな顔してんだよ……ッ！

「——キンジ、ちよつと来い」

「え……う」

ぼんやりと、心が宙に浮かんでいるようなキンジの声。目線もどこかはつきりしていない。

……駄目だ。こいつをこのままここに置いてたら、駄目だ。今、それがはつきりわかった。

多少強引だが……無理にでも連れて行く。あの武装検事が待つてるし、なによりここはキンジがいていい場所じゃない。

俺はキンジの近くまでいって、右腕を掴む。続いて、牽引するように力を込めて引っ張る。……この年になって男友達の腕をひいてやることになるなんて思わなかったな。

キンジの脚が、俺に引っ張られることで一步を踏み出し——しかしそこで、背後から厳しい声が飛んできた。

「ちよつとちよつと困るなあ、君イ。今私たちが遠山キンジ君と話してるのがわからないかな？ 大人の仕事を邪魔するものじゃない」

「……あら？ あなた、それ東京武偵高の制服よね？ ということはキンジ君の同級生かしら？」

「だったら、ちよつどいい！ 君にも、話聞かせてもらっていいかな？ どうだい？ 君が志す武偵であり、友達のお兄さんである遠山金一

武偵が、あんな大問題を起こした心境は？」

……なんだ、こいつら。喧嘩売ってんのか？

思わず拳銃に手を伸ばしかけるが、それは自制する。そんなことしたって、迷惑がかかるのは武偵と言う存在そのものと、なによりキンジたち遺族の方だ。感情的になるな。

「……すいません。ちよつと、キンジに急用があるんです。みなさんにはご迷惑をお掛けしますが、失礼させていただきます」

声を荒げないように、なるべく静かに告げる。

しかし、それでも喧騒は止まない。

「急用っていつてもねえ、この状況でそんなこと言ったって、この場から逃げるための言い訳にしか聞こえないよ？ それに、なにより国民のみなさんが、『声』を求めているんだよ。そこの遠山キンジ君が今回の件についてどう考えているか……ひいては、武偵という存在の無価値さを知らしめた遠山金一武偵に代わって、世間に『謝罪』するその姿を、全国に知らせてあげなきゃいけないんだよ」

誰かが言ったその台詞に、周りが便乗する。やれ「その通りだ」だの、「君は報道の自由を侵害している」だの、ふざけたことばかりぬかしてやがる。

……ああ、クソ。このまま聞いてたら、本当に発砲しちまいそうだ。

俺は、その場で一度振り返り、

「——通してください」

今度は、静かながらも抑えきれない怒気を乗せながら、報道陣に言った。

ついでに、少しだけ睨みも効かせておく。あんたら大人なんだろう、ちよつとは空気読んでくれよ、という意味も込めつつ。

すると——

『……………』

なんかしらんが、全員ピタリと水を打ったように静まり返った。

中には若干青ざめているような人もいるが、一体なんだってんだ。俺、そんなに変なこと言ったか？

まあいいか。おかげで静かになった。

「行くぞ」

「え、あ……お、おいつ」

これ幸いと俺はキンジを引っ張り進み始める。慌てたようにキンジが声をかけてきたが、無視だ無視。今はこの報道陣の檻から抜け出す方が先だ。

そうして俺が報道陣の先頭に差し掛かると、彼らは門が開くように左右に広がっていった。なんだよおい、急に態度がころつと変わったな。モーゼの十戒かよ。

俺たちは、固まった報道陣を尻目に、ずんずんと先へ進む。

その間もキンジは何事かを言っていたが、とりあえず報道陣が見えなくなるまでは進みたい。また絡まれたら面倒だしな。

というわけで、式場の角を曲がり、広場から見えない位置まで来たところで、キンジが小さな声で言った。

「……悪かった」

「なにが？」

「お前に、損な役回りさせちゃった。いろいろと、記者連中に書かれるかもしれない」

ああ……そうだな。そういや、そういうこともありえるのか。

まあ、でも、

「別にいいよ、そんなくらい。昔剛気の覗きに付き合わされた挙句にバインフォルマレて、情報科の学校新聞に載せられたことに比べりゃ、大したことねえよ」

俺は歩きながら適当に答える。

これは、割と強がりでもなんでもない。だって、報道されたところで普通の人は撃ったりしねえからな。武偵ウッチ高チじゃ、覗きの事実が広まったりすれば、女子から多種多様な襲撃がある。それに比べりゃ、万倍マシだ。

それより……、

「お前のほうこそ、平気なのかよ。さっきのお前の顔を鏡で見せてやりてえよ。死にそんな面してたぞ」

「俺、か。俺は……正直、もうダメかもしれないねえ」

「あ……う？」

自嘲するような響きを持ったキンジの言葉に、俺は思わず手を離し、足を止めて振り返った。

同じくその場に立ち止ったキンジは、目を伏せがちにしながら、ぼつぽつと零す。

「ニュースとかで、世間が兄さんに好意的な目を向けてないのは、知ってた。けど……やっぱ、無理だ。実際にああやって面と向かって言われると、どうしようもなくなる。悪いのは兄さんじゃないのに、それを誰より知ってるのは俺のはずなのに、何も言い返せなかった。あのままお前が来ないままだったとして、じゃあ俺がキレて何かを言い返せたなんて、俺には思えない。きつと……呑まれっぱなしになっちまってただろうな。……ちくしょう、兄さんは何一つ悪くないのに……！」

「お前……」

つらそうに、悲しそうに、苦しそうに、悔しそうに。

そう独白するキンジに対して、俺はどう言えればいいのかわからなかった。

けれど、これだけはわかる。やっぱりこいつは、今回の件に関して、一切納得していない。

だったらやるべきことは、俺にそれをぶちまけることじゃない。それをするべき相手は他にいる。

だから、俺は早くキンジと武装検事を引き合わせようと考え……一歩踏み込んだ足元に違和感を覚えた。視線を下げてわかったことだが、どうやら走り回っている間に靴ひもが解けていたらしい。

なんだよ、クソ。急いでんのに。

しかたない……キンジだけでも、先に行かせよう。というか、そもそも本当は、俺はいらぬいな。

「……キンジ、お前正面玄関の方に行け。俺も後から行くから」

「……？　なんだってそんなところに……」

急にそんなことを言い出した俺に、キンジは怪訝な顔をする。

しかし、俺は後押しするように言う。

「いいから。行けばわかるから、なるべく急げよ！」

キンジは釈然としない様子だったが、それでも一応俺の言葉に従って駆け足で去って行った。

さて……とりあえず、俺にできるのはここまでだな。あとは、あいつ次第だ。

まあ、少しくらいは援護できるかもしれないので、俺も追いつこうと靴ひもを結びなおそうとしたところで、ちらりと後ろを振り返ってみる。

……よし、マスコミ連中は来てないな。足止めの必要もなさそうだ。

追従がないことを確認した俺は、改めて前を向き、靴ひもを直すために屈もうとして、

「——こんにちは」

背後から、流麗に響く声がかかった。

導かれるように、俺は再度その場で振り返る。

直後、俺はおそらく、人様に見せられないほど呆けた顔をしていたはずだ。

なぜなら。

そこには、俺の人生で……一番美人だと思えた女性が佇んでいたからだ——

* * *

遠山金一。

弱冠19歳にして武偵庁特命武偵の任を負う凄腕の武偵であり、遠山キンジの兄であるこの青年は今、己の葬式が行われている式場へと来ていた。

いや、正しくはこの女性は、だろうか。

カナ、と呼ばれる金一が女装した長髪の美人。超人的な能力を引き出すヒステリアモードを発現するこの姿で式場に来ているのには、訳がある。

金一は既に死んだことになっている人間。そんな人間が、堂々と表に出てこられるわけがない。さりとして隠れながらだとしても、通常時の自分ならば参列している一流の同僚たちに察知される恐れがある。それゆえの、ヒステリアモードを活用した隠遁だ。

そもそも、金一……いや、カナがなぜここにいるのかと言えば、それは見納めのためだ。

これよりカナは、とある作戦に移る。そうなってしまえば、目的を

果たすその日まで、もう容易に既知の面々に会うことはできないだろう。その前に、大勢の友人や知り合い——そしてなにより家族が集まるこの日に、カナは彼らを一目見ようとこの場に参じたのだ。

だが——結果として、それはカナを苦しめるだけだった。

彼らに会えなくなるのは、まだいい。それは覚悟していたことだ。仕方ないと割り切ることはできる。

しかし、家族に……とりわけ最愛の弟に、金一に向くべき悪意を一身に背負わせてしまったことは、大きな棘としてカナを傷つけた。

批判はあるだろう、とは思っていた。武偵は、まだお世辞にも世間に認められていると言い難い。だから、事故を未然に防げなかったことで、なにかしらの悪評が立つことは予想できていた。

それでも。

まるで獲物に群がる獣のようにキンジに言葉を浴びせかける記者たちの姿を、物陰に隠れながら目にしたとき、カナは己の甘さを悔やんだ。ともすれば、今すぐに弟の許へ駆け出してしまいかねないほどに。

あるいは金一のままの姿だったならば、カナと同じく心を痛めながらもきつと毅然としていたはずだ。

しかし、そもそもも亡くなった母親のかわりにキンジをなぐさめようとして編み出されたのが、カナだ。まるで野鳥に啄まれるかのように、言葉と言う刃で傷つけられているキンジを見て、当然、金一よりも深い悲しみに襲われていた。

そんな時だった。

「——キンジ、ちよつと来い」

記者たちの波をかき分け、一人の少年がキンジの許へとやってきた。

中肉中背の体躯に、適当なところで切りそろえられた黒髪。そして、東京武偵高の制服。

そこまで認めたところで、カナは少年の正体が、かつて一度実家では会った有明鍊というキンジの相棒だということに気付いた。

(あの子……参列、してくれてたんだ)

きつと、キンジが呼んだのだろう。それにしたところで、他人の葬式だ。わざわざ来てくれていたとは。

それよりも、だ。

問題はなぜここにいるのか、だが……それは、少し考えればわかることだった。

「キンジのことを……助けに?」

誰にも決して聞こえないような小さな声で、カナは呟く。

おそらく、鍊は記者に質問攻め（もはや尋問のそれだが）に晒されているキンジをこの場から救い出そうとしているのだろう。

しかしそれは当然のごとく『報道の自由』とやりに阻まれる。「急用がある」と鍊が話を逸らすも、それすら歯牙にもかけない。

このまま、結局鍊もまたキンジ同様に彼らの標的にされるのか、とカナが眉をひそめた——その、刹那。

「——通してください」

声は、大きくはなかった。

威圧感が籠つてはいたが、殺気というレベルではない。

しかし、それでも、彼らは一様に口を閉ざした。

その原因は……鍊の、目だ。少し長めに伸びた前髪の間から除く双眸が、その瞳を見た全員を、射すくめていた。

静まり返った集団の中を、有明鍊がキンジの手を引きながら去っていく。

その姿を、カナは少し驚きに目を見開きながら見送っていた。

（あの子、あんな目ができたんだ……）

巢鴨の実家で初めて鍊に会ったとき、カナが見た有明鍊はおおよそ普通の少年に見えた。少なくとも、キンジや祖父母たちと話している様子は剣呑さとはかけ離れていたし、カナ自身彼と話した時には温和なものを感じていた。

しかし、先ほどの少年の目は確かにギラリとした輝きを放っていた。ナイフのような、と形容される瞳があるが、彼の場合はもっと攻撃色が強い。さしづめ、銃弾のような瞳、と言ったところだろうか。

と、そこまで考えてから、カナはハッと我に返った。

ここで呆けていても仕方ない。無論、姿を現すわけにはいかないが、せめてもう少しだけ弟の姿を目に焼き付けておきたい。

カナは、やはり人目につかないように移動しながら、キンジと錬に追いついた。その視線の先、歩きながら話していた様子の二人が、ふと立ち止まった。

そこでようやく、カナは二人の会話がはつきりと聞こえる距離まで近づいた。ちょうど、キンジたちのほぼ真後ろの物陰に隠れる。

と、それと同時にだった。キンジが、ぽつりと呟き始めたのは。

「ニユースとかで、世間が兄さんに好意的な目を向けてないのは、知ってた。けど……やっぱ、無理だ。実際にああやって面と向かって言われると、どうしようもなくなる。悪いのは兄さんじゃないのに、それを誰より知ってるのは俺のはずなのに、何も言い返せなかった。あのままお前が来ないままだったとして、じゃあ俺がキレて何かを言い返せたなんて、俺には思えない。きつと……呑まれっぱなしになっちゃまってただろうな。……ちくしょう、兄さんは何一つ悪くないのに……！」

さざなみのように、深く静かにその声はカナの耳に届いた。

いまとなつては、もう真正面から聞くこともできないけれど、それでもカナはキンジの本心を知った。やはりあの最愛の弟は、カナのことを信じていてくれた。自分の兄は決してなにも間違つてはいないと、そう思ってくれていた。

そして、信じているからこそ、キンジは傷ついていた。信じていなければ傷つくこともなかっただろうに、何も疑っていないからこそ傷を負っている。

だから、カナは……遠山金一は、胸を押さえつけたくなるほど苦しむのだ。

(ごめんなさい……ごめんなさい、キンジ……！)

カナは、隠形おんぎようが乱れて気配が漏れ出るほどに、心を揺らした。

全てを話すことはできない。キンジは冷静に見えて、その実心根には遠山家の『義』の信念が宿っている。兄である金一が挑むことを知れば、キンジもまた『イ・ウー』に挑むだろう。いくらキンジがおそ

らくは歴代最強の才能を秘めているとはいえ、今の未熟なキンジでは死ぬ未来しか存在しえない。ならば、キンジを巻き込むことは絶対に許されない。

巻き込めない。しかし、助けない。

究極の二律背反を抱えるカナは、しかしやはり、キンジの前に躍り出ることにはなかつた。

——と、その時だつた。

唐突に、鍊がキンジをこの場から移動するように促した。困惑気になりながらも去っていくキンジに、カナも形のいい眉をわずかに顰めたところで、

ちらり、と有明鍊の目がカナがいる方向へと向けられた。

一瞬、カナの体が硬直する。まさか、ヒステリアモードでの隠遁が見破られた……？

いや、違う。先ほど、キンジの言葉による動揺で、カナは自らの氣配を抑え忘れていた。それにしたところでわずかなものだとは思いますが、おそらくはそれを察知されたのだろう。

やけに勘のいい少年に戦慄する中、ふいに鍊は視線を正面に戻した。

……見逃す、ということだろうか？ こちらに敵意がないことを見抜いたのか、放置することに決めたらしい。

(……………)

——例えば。

ここでカナもまた、鍊同様にいまのできごとをなかつたことにしたならば、未来はもつと違った形を描いたかもしれない。

けれど。

気づけば、カナは一步を踏み込んでいた。

「——こんにちは」

天上の調べを思わせる高い声で、鍊の背後に姿を晒したカナは話しかけた。

声に振り返った鍊の顔が、驚きに彩られている。おそらくは、見逃した相手がわざわざ自分から出てきたからだろう。

カナ自身、どうしてそんなことをしたのかはわからない。表に出ることは、自らに禁じたはずだ。いくらこの姿で錬と直接会ったことがないとはいえ、それでも『遠山金一の生存』にたどり着かれる可能性はある。ならば、こんな危険なことはするべきではないはずだ。

それでも、事実としてカナと錬は今、相対していた。
そして。

どうしてこんなことをしたのかはわからないままで、カナは言うべき言葉を口に乗せる。

「有明錬君。あの子を助けてくれたお礼を、いつか必ずするわ。その時がいつになるかわからないけれど……もしかしたら、してあげられないかもしれないけれど……勝手に、約束する。いつの日か、私はこの感謝を形にして、あなたに返すわ。……ごめんね、急にこんなこと言つて。でも、きつと、これが私の言うべきことで、せめてものお礼だと思っから。だから、勝手に宣言しておくわね」

「えつと、その……そもそも、あなたは……？ てか、なんで俺の名前……」

何が何だかわかっていない感じの錬に、カナはクスリと笑う。

それから、一本立てた人差し指を口元に持つていき、

「それは、秘密。もしかしたらいつか言う時が来るかもしれないけど、今は教えられないわ。そしてあなたは、誰にも私と会ったことを言つてはダメよ。それが、『お礼』をするための約束。どう？ 約束、守れる？」

「あー……『お礼』つてわりに条件付きとか、割と身勝手ですね」

「あら、女は身勝手なものよ。」

「そんな人には見えねえし、まあ正直意味わかんねえけど……俺の同級生に、あなたみたいにおつとりしたやつがいるんです。で、一回そいつとの約束破つたらひどい目に遭つたんで……とりあえず、その約束は守つときますよ」

おそらく、本当に意味がわからないのだろう。がりがりと頭をかきながら、錬はそう言った。

カナはそれを見て、満足そうに頷く。

——その瞬間。

12月の冷たい木枯らしが吹き荒れた。次いで、目に砂でも入ったのか、鍊が腕で両目を覆った。

その隙に、カナは身を翻し、ヒステリアモードの身体能力任せに、一瞬でその場から姿を消す。おそらく、鍊が次に目を開いた時には、すでにカナの姿は幻のように消え去っているだろう。

世を忍ぶかのように人目のない道を駆け抜けつつ、カナはそれきり葬式場を後にした。

もちろん、未だキンジのことは心配ではあったが……とりあえず、踏ん切りはついた。いまさらまた戻ってキンジに見つかればそれこそ意味がないし、あの少年で気づけたならば、他にもカナの気配を読み取った人間がいるかもしれない。これ以上あの場にいるのは、得策ではないだろう。

それに……、

(後のことは、あの子に任せよう。あんな不審者丸出しの私には最後まで敵意一つ向けなかつたくせに、明確な悪意があった人たちには、キンジのために銃を抜きそうなるほど怒ることができる。そういう子がキンジのそばにいてくれるなら……私の代わりにキンジを守ってくれる子がいるのなら、私も頑張れる)

心配事がなくなったとは言わない。しかしそれでも、後を託せる者がいた。その事実は少しだけ、カナの心を軽くしていた。

きつと、それがカナが鍊の前に出た理由なのだろう。最初に巣鴨の実家で会った時、そして記者の檻の中からキンジを連れ出してくれた時。おそらくはその時に、半ば確信していたのだろう。友達を作るのがあまり得意ではないキンジにとって、有明鍊は隣にいてくれる存在なのだと。

だから、カナは鍊にお礼を言ったのだ。先ほどの件と……それからこつそりと心の中で、これからも支えとなってくれようであろうことについて。それが、せめてもの誠意だと考えたがゆえに。

と、自らの行動原理にそう結論をつけたところで、カナはもう一つだけ理由を思いつく。

もしかしたら、

(私の存在を誰かに刻んでおきたかったから……なんてね)

苦笑するように口元を歪ませながら、カナは思う。

これよりカナは、表の世界から消える。死にながらにして裏の世界で暗躍する『亡霊』となる。結果如何によつては、文字通りの意味で。なにせ相手は、超一流の武偵であるカナをして命を賭すべき強敵なのだから。

だからその前に、自分に気づいてくれた人がいるならば……自分という存在を誰かに覚えていてもらいたいと思うのは、そんなに不自然なことだろうか？

もちろん、こんな想像は今となつては意味はないけれど。

それでも、錬がカナのことを覚えていてくれるなら、それはきつと嬉しいことだとカナは思った。

* * *

「やあ。久しぶり、になるのかな。遠山金次君」

錬に促され、正面玄関まで駆け足でたどりついたキンジを出迎えたのは、喪服姿の壮年の男性だった。

走ったせいですこし荒くなつた呼気が白く染まるのを視界の端に収めながら、キンジは瞳を困惑に揺らした。

開口一番「久しぶり」などと声をかけられたものの、正直に言えば見覚えが全くない。ここにいるということとは兄の関係者である公算が最も高かったが、しかし少なくともキンジの記憶の中にはいない。

どう返事を返したものが、キンジは悩む。参列してもらつたのに礼を失した返答は躊躇われた。

しかしそんなキンジの様子からおおまかな心情を読み取つたのか、壮年の男性が口元のしわを歪めながら、

「ああ、いや、いいんだ。君が覚えていないのも無理はない。なにせ、私が君に会つたとき、君はとても小さかつたからね」

「……？」

「私は武装検事だ……と言えば、わかるかね？」

「っ！ ひよつとして、父さんの？」

壮年の男性の言葉に思いあたる節があつたキンジは、その考えを口に出す。

とみやま こんじ
遠山金叉。

金一、キンジの父親の名であり……同時に、武検庁に所属していた武装検事の名だ。

そして目の前の男もまた、武装検事を名乗っている。加えてこの葬式に来ていたということは、父との繋がりがあある人物なのだろう。

果たしてその推測は正しかったようで、

「ああ。私は、金叉君の……君のお父さんの同僚であり、友であつた男だよ。君や金一君とは、君たちがまだ小さかつた頃に一度会つてい

る」

「そう、ですか……」

過去形で語られたその言葉に、キンジの気持ちちが沈む。
金叉は、すでにこの世にはいない。彼もまた、兄である金一同様に殉職している。武装検事はその能力の高さゆえに、自衛隊さえ困難を極めるミッションに駆り出されることしばしばある。武装検事の殉職率が20%を優に超えているのにはそういう理由があり、金叉もまたその内に入っていた。

すでに心の整理はついているとはいえ、この日ばかりは随分と堪えた。また一人家族を失つてしまったことを、殊更に理解してしまうからだ。

思わず表情を陰らせたキンジに、壮年の男性は話を変えるように口を開いた。

「いやしかし、最近の若い武偵は察しがいいね。君もそうだが、君を連れてきてくれるように頼んだ少年も、すぐに勘づいていたよ」

「え……ああ、鍊か」

一瞬誰のことを言われているのかわからなかつたが、すぐに思い至る。なるほど、鍊は自分をこの武装検事に会わせようとしていたのか。

しかし、鍊に父親が武装検事であることを話したことがあつただろうかと思ひ返し……、

(「そういや、じいちゃんの家ゲーム取り行ったとき、俺言ってたな。無駄に記憶力がいいというか……よく覚えてたな、あいつ」)

相棒の謎スペックに、キンジが少しだけ笑う。

それを見て口元のしわを深める壮年の男性は、本題を語る前に、頼みごとをした少年の願いを実行し始めた。

「実を言うと、その少年に願いをさせていてね。君の話聞いてあげてほしい、とね。まあ、頼まれずとも私も聞きたかったのだが」

「俺の、話……？」

「そうだ。といつても、何を話せばいいのかわからないだろうから……そうだね。君が今回の事件を通して思ったこと。それを、私に教えてくれないか？」

「……………」

キンジは、壮年の男性の言葉にしばし口を閉ざした。

はつきり言えば、どうしてこの男にそんなことを話さなければならぬのかという思いはあった。父の友人であり、完全な人格者でなければならぬとまで言われる武装検事である以上、単なる興味本位というわけではないだろう。しかし、だからといって自らの胸の内にある傷を切開してまで心情を吐露する必要がどこにある？　そういうのは、さきほどの質問攻めですでに懲りている。

……懲りては、いるのだが。

(まあ……『あいつ』が手を回したつてのなら、しかたないか。さっきの借りもあるし、な)

キンジは脳裏にとある友人の姿を思い浮かべ、苦笑する。

それから、ここ最近ですっかり重くなつた口を開く。

——そういうつもりが、あつたわけではない。

けれど、最初の一言を口に出した瞬間から、きつと遠山キンジはここで全部吐き出すことを決めていた。

「……俺にとって兄さんは、最高の武偵だったんです。そりゃ、場合によつては依頼料をもらわないことで武偵庁に迷惑かけてたりしたかもしれないけど、でも、やっぱり俺にとっては兄さんは最高の武偵でした。正義の味方だった、と言つてもいいと思います。それは、遠

山家がずっと昔から務めてきた役目で、兄さん自身もそのことは心にあっただろうけど、でも多分、それだけじゃなかったんだと思います。たとえば兄さんが遠山家に生まれた人間じゃなくっても、例えば犯罪者の一族に生まれていたとしても、きつと兄さんは今と同じような生き方をした気がするんです。家系とか、環境とか、そういうのが兄さんを形作ったわけじゃない。きつと、もつと根本的なところで、遠山金一は正義の味方になれてたんです。だから俺はそんな兄さんの姿を見て、兄さんに憧れたし、そんな風になりたいと思ってました。結局、全然兄さんみたいにはなれなかったけど、でも、兄さんは確かに俺の目標でした。

それに、兄さんは俺の中じゃ、最強の武偵でした。俺が本当に最強だと思うのは、父さんやじいちゃんだけど、武偵ってことなら、俺は兄さんより強い武偵を知りません。ガキの頃から兄さんには何度も相手してもらってるけど、俺、一回も勝つどころか攻撃を当てたことも無いんです。今だって、俺の記憶の中には兄さんが戦う姿は残ってるけど、100年かけてもそのイメージに勝てないと思います。兄さんはそれくらい強かったし、それこそ誰かに負けるような人じゃない。それくらい強くて……そして、それ以上に完璧だったのが、俺が知る武偵『遠山金一』でした。兄さんが相手した犯罪者は全員逮捕されたし、兄さんが手掛けた事件は全部、解決事件コンプワリートになってます。経歴は、まさしく完璧でした。……プライベートじゃ、結構弱点もあったんですけどね。じいちゃんの拳骨とか。

……だから、正直今でも信じられないんです。兄さんが自分一人逃げ遅れて、死んだなんてのは。もちろん、それしか手がなくて、どうしようもなかったっていうんなら、多分兄さんはその手段を取ると思っています。でも、それでも俺は、兄さんなら本当は自分も含めて全員を助けられたんじゃないかって、そう思うんです。……願望、かもしれないですけど。

だけど、同時にこうも思うんです。兄さんが本当に自分一人だけ犠牲にして乗員・乗客全員を救ったっていうんなら、それが多分、最上の結果だったんじゃないかって。兄さんにできる最上じゃなくて、武

偵にできる最上だったんじゃないかって。実際、俺にはどうしてもこの結果が非難されるようなものとは思えないんです。そりゃ、確かに被害は出ました。俺はバカだから、豪華客船一隻の値段とか、今回の事件で出た被害総額とか、そういうのは、正直わかってないし、想像もつきません。なんとなく、とんでもないものだと感じてても、それが乗員・乗客や、兄さんの命以上に重いなんて、全然思えないんです。人の命は平等だとか、命は金に代えられないとか、そういうことが言いたいんじゃないって、単純に、大勢の命が助かったなら、それが一番のはずなのに。なのに……それじゃ、ダメらしんですよ。それじゃダメだって、みんなが言うんです。兄さん以外、誰も死ななかつたっていうのに、それ以上の『完璧』を、世間ってやつは欲しかったらしいです。

だから……だから……ああ、クソ。なんで、それじゃダメなんだ。みんな、生きてたじゃねえかよ。それ以上なんてあるのかよ。じゃあ、お前らなら兄さん以上のことができたってのか。誰も死なないで、自分自身も生き残って、爆発は起きなかつたし、事故の原因も未然に防いで、みんな無事で航海を終える？ そんなの、誰にできるつてんだ。神様でもないし無理じゃねえか。なんで、あの船には神様が乗ってなかつたんだ……ああ、いや、違う。そういうことじゃない。そうじゃねえ。神様の次にすごいことやった兄さんが、どうして悪者みたいに言われなきゃならないんだ。どうして武偵おれたちはいつも、救えたものより救えなかつたものしか見てもらえないんだよ。誰かじゃなくて、なにかもを救わなきゃ認められないっていうんなら……武偵って一体、なんなんだよ……ッ！」

そこまで言って、キンジは血が滲むほどに拳を握りこんだ。

それは、まぎれもない少年の本心だった。途中から誰に向けた話かもわからなくなるほど、気づけばキンジは全てを吐き出していった。

それは、もはや嗚咽に近い。普段は口下手でぶつきらばうなキンジがこれほどまでに口を開くほど、世界は理不尽に満ちていた。キンジが向ける感情の矛先は、特定の誰かではない。その正体は『世間』というひどく不確かなものであり、そして同時に、どうすることもでき

ない『敵』だった。だからやはりキンジの述懐は、誰かに向けた抗議ではなく、どうしようもないなにかに対する泣き言にすぎない。例えばこの感情をあの手この手で連中にもそのまま伝えてやれば、きっとその言葉は『世間』には届くだろう。しかし、届くだけだ。爪痕すら残せずに、叩き潰されて終わるだろう。

それが無意識にわかっていたからキンジはあの時なにも言い返せなかったし、そんな少年の心情がわかったから、壮年の男性は慰めの言葉をかけなかった。それは、意味のないことだろうから。

だから、壮年の男性は代わりにこう訊ねた。

答えは、わかっていたけれど。

「……金次君。君は、これから先も武偵を続けるかい？」

「……いや。俺はもう、武偵をやめます。今日、はっきり決めました」「なぜ？」

「武偵は、世界で一番報われない職業だから」

「……そうかい」

間髪入れずに答えたキンジに、壮年の男性は静かに目を伏せる。

そして再び開いたときには、本題を語り始めていた。

「実はね、金次君。私が今日ここに来たのは、君に話を聞くためであり……そして、一つ提案するためだったんだよ」

「提案……？」

「そう。金叉君や金一君が亡くなったその日、君はきつと知ったはずだ。いかに自分が身を置いている世界が、死と隣り合わせているかを。だが、それでもなおこの道を進むつもりならば、私は君に、私が持てる技術のすべてを教えようと考えていた。そうすることで、君を死からできるだけ遠ざけよう、とね。それが、金叉君や金一君への手向けになると思っていた。だが君は……武偵という道から、撤退するんだね」

「……はい」

「責めてはいないよ。それは、一番いい選択だと思う。私自身、我々の職務を真つ当な道とは思っていないしね。ただ、これだけは覚えていてほしい」

「……？」

キンジは、壮年の男性の声に確かななにかを感じ、改めて彼を見た。そこにいたのは、杖をついてようやく立っていられるような、そんな男だ。しかし、その姿は、なぜかとても強いと感じた。あるいは彼が、キンジが失ってしまった信念を持っていたがゆえに。

壮年の男性は言った。

「いいかい、金次君。金又君も金一君も、最後はきつと信念の元に散って行った。武偵が、武装検事が、武装弁護士が、警察が、犯罪者たちと銃火を交えるすべての者たちが持つべき『正義』を胸に宿して、そうして最後の瞬間まで戦い続けたんだ。それは、どこの誰にも非難されるようなことじゃない。『世間』の誰が忘れても、君にはきつとこのことを覚えていてほしい」

「……………」

壮年の男性の言葉に、キンジは即答を返せなかった。

しかしそれでも壮年の男性は何かを感じたのか、少しだけ笑ってから、くるりと踵を返した。

「では、遠山金次君。そろそろ失礼させてもらうよ。この通り、足が悪いものでね。あまり長く外にいるのは好ましくないんだ」

「えっ、あ………はい」

ぼんやりと返事したキンジの声に押されるように、壮年の男性はゆっくりと、だが確実にこの場を離れ始めた。

少しずつ、少しずつ小さくなっていく背中。

と、その時感じた言い知れぬ焦燥感に突き動かされて、キンジは気づけば声をかけていた。

「——あのっ… その………ありがとうございました！」

なにに対してのお礼かは、自分でもわからなかった。

けれど、壮年の男性はひらひらと後ろ手に手を振って応えてくれた。

キンジには、彼の顔は見えなかったが。

その時、やはり壮年の男性の口元には、深いしわが刻まれていた――

「つたく……ひでえ目にあつた」

俺は、正面玄関までの道を歩きながら、げんなりとため息をついた。あの謎の超絶美人が突然消えた後、俺は首をひねりながらも、とりあえずキンジたちのところに追いつこうとした。

したんだが……それより早く、なんか武偵庁の特命武偵——まあ、つまりは金一さんの同僚が何人かやってきて、「今ここに金一がいなかったか!？」とか訊ねてきた。

当たり前だが、俺が見たのは謎の美人女性であつて金一さんじゃない。ていうか、そもそもあの人とは『約束』をしている。「今ここに超絶美人がいなかったか!？」と訊かれても、俺はNOと答えていただろう。

だというのに、いくらそう言つても食い下がらないので、「俺が一緒にいたのは弟のキンジです」と答えると、「弟の気配と間違えたのか?」「いや、でもなあ……?」「でも、この少年が金一に会つてないと言つた時、嘘ついてる感じじゃなかったしな……」とぶつくさ言いながらも、一応は納得してくれたらしく、引き下がっていった。なんだったんだ、あの人たち。

まあ、そんなことはどうでもいい。それより、キンジだ。あいつ、結局どうなつたんだ?

そんなことを考えながら歩いていると、やがて正面玄関にたどり着き、そこに一つの背中を見つけた。

「——キンジ!」

「……ん、ああ。鍊か」

声をかけた俺に振り返るキンジの顔は、どこかぼんやりとしていた。どうしたんだ? こいつ?

おつと、そんなことはどうでもいい。

俺はキンジに駆け寄りつつ、

「……で? お前、あの人には会つたか?」

「ああ、武装検事の人だろ?」

「ああ、その人その人。……で、どうだった? ちゃんと話してきたか

？」

「……そう、だな。話せることは全部話した」

「そっか。悪いな、すぐにこっち来れなくて。ホントは、俺もなんか言ってるやろうかと思ってるだけだな」

「いや、来なくてよかったよ。俺、なんかいろいろぶちまけてたからなあ。ちよつと、そういうの見られるのは恥ずかしいぞ」

視線を外しながらポリポリと頬をかくキンジ。

……なんか、ちよつといつもの感じが戻ってきてるな。裁判の話がどう転んだのかはわかんねえが、そう悪い結果にやならなそうさ。

俺は友人の様子に、さきほどとは違った意味でため息をついた。

——結局、この日はそれを最後に、後は大きな騒ぎもなく、金一さんの葬儀は終わった。

マスコミ連中は、どうもキレイなキンジのじいちゃんが追っ払ったらしい。すげえな、あのじいさん。

その後の俺にできることはなく、キンジもいろいろと忙しい日が続いたらしく、俺があいつとゆつくり話す機会はなかなか来なかった。

ただ、結局裁判は起こらなかったらしい。なんでも、キンジ個人に向いていた賠償請求を武偵庁が代わりに引き受けたそうさ。その間ではなんかまたごたごたがあったっぽいけど、そこは俺が関知するところじゃない。

そして数日後、ようやく学校に来たキンジと、武偵高の屋上で肩を並べながら、俺は話をしていた。

落下防止用の手すりに腕を乗せながら、キンジは視線だけは東京を——おそらくはそこに住む人々を眺めながら、語った。

「なあ、錬。一つ聞くけど……俺の兄さんは、間違ってたか？」

俺は手すりを背もたれにして、キンジに向けていた視線を冬の寒空へと向けて、

「バーカ。なわけねえだろ。武偵であの人を非難するようなやつはいねえよ」

「そうか……ありがとな」

「礼を言う相手がちげえな。言ったら、武偵なら誰でもって。俺だけ

がそう思ってるわけじゃねえよ」

「……そうか」

そしてまた、キンジは黙り、俺も黙って空を見上げる。

しかしその沈黙も長くは続かない。やがて、キンジはまた口を開いた。

「……街中を歩いてるとき、いろんな人とすれ違うわけだ」

「あん？　なんの話だよ？」

「いいから、聞けよ。それでな、俺は、思えなかったんだよ。今すれ違っている人たちを、自分の命を投げ打って救いたい、なんてさ」

「ああ……そういう話か」

「ああ、そういう話なんだ、兄さんがやったことってのは。実際その場面になったらどうかかわからねえけどな、でも、俺はそう思えなかった。だからやっぱり……そこが、俺と兄さんの差だったんだろうなあ……」

「どうかな。そんなの俺だっと思わねえし、金一さんだっと思っただったかもよ。ただお前が言うみたいに、その時になっただけでそう思ったのかもしんねえしな」

「そうかもしれない。けど、俺の中の兄さんはそういう人だったんだ。だから……俺は、きつと兄さんみたいにはなれない。少なくとも、俺の中にいる兄さんみたいには、なれない」

「……そっか」

「……………」

「……………」

「……なあ、錬」

「ん？」

「俺さ……武偵、やめるよ」

「……………」

「一般校に転校するんだ。こんな荒っぽい学校とはおさらばしてさ。俺が持ちたいのはナイフじゃなくて鉛筆だし、使いたいのは銃弾じゃなくて消しゴムなんだ。それに……あれだ、部活とかも興味あるな。自慢じゃないが、俺は友達が少ないから……そういうところで、友達

を作るんだ」

「……転出希望の申請はどうすんだ。もうとつくに申請期限過ぎてんぞ」

「ああ、だから転校するのは再来年の4月だな。それまでは、武偵を続けるさ。しかたないからな。だけど、意欲的には続けない。今度の^{テスト}検査もサボるつもりだしな。……だから、さ……」

「なんだよ」

「——俺とのコンビを、解消してくれ」

その、言葉は。

存外、俺の胸に重く響いた。

響いた、が……俺は、その提案に対して断る言葉を口に出せなかった。今回の件でキンジや金一さんが受けた扱いを考えれば、とてもそれは言えない。

だから、ただ一言だけを口にした。

「……そうか」

「……………」

「……………」

「……文句、言わないんだな」

「別に文句なんてねえよ。だって、別に学校で組んでるコンビを解消するってだけの話だしな。なにも、友達やめるってわけじゃない。なら、問題ねえだろ」

「そう、だな」

「ああ、そうだよ」

繰り返すように、俺はキンジに言った。

そして、

「……じゃあ、あれだ。お別れするか」

「はっ」

「解散式だよ。まあ、そんな大層なもんじゃねえけどな。ここで、お別れしとこうぜ。あの、こっぴड़ाかしい名前に」

「うげ、思い出させんなよ、それ」

「まあ、いいじゃねえか。解散するってなったら、あの名前もちよつと

名残惜しいだろ。……あー、クソ。ちよつと前まで眠りこけてたのが悔やまれるぜ。このまま解散したら、最後の事件は先月にあった、ストーカー退治のやつだろ？ こんなことなら、なんかでかい任務クエストやつとくんだったな」

「……………」

「キンジ？」

「……………そうかもな。でも、これでお別れだ。それは変わらない」

「へーへー。わかってんよ。……………さて、そんじやあ解散と行くか」

「ああ。……………じゃ、いつせーのな」

「あいよー……………いつせーのっ」

続く言葉に、打ち合わせなんてなかった。

けれど、自然と確信していた。多分、同じように言うんだろうな、と。普段はどっちも別れの挨拶は「じゃあな」を使うのに、この時だけは違った。

あるいは、それが。

俺たちが『コンビ』だったことの、何よりの証だったのかもしれない。

「……………さよなら、『アルケミー』」

二人、全くの同音でそう言つて。

そして、遠山キンジと有明錬のコンビは——『アルケミー』は、解散した。

28. かくして彼は境界線を越える

「——君。有明君。あーりーあーけー君っ」

「ん……」

ハープのような流麗な呼び声が俺の意識を揺さぶり、俺は小さく呻いた。

逆説的に、自分が今まで寝ていたことに気づく。

あー……：そーいや、カナさんに目的地に着くまで寝とけって言われて、その通りにしてたんだけ。

ということはもう中国に着いたのか、と目を開けると——

目の前に、カナさんの顔があった。

「どうわっ!?!」

俺は慌ててカナさんから距離を取ろうとする——が、とはいっても狭い潜水艇の中、しかも俺は座席に座っていたもんだから、その行動は無駄に終わる。

とうか、近い近い近い！　なんでわざわざ前の座席から身を乗り出してんの……!!

神様が彫刻したような美貌を間近にして、顔が赤くなるのが分かる。ブラドとの戦いなんて目じゃない位に心臓がドクドクと暴れだす。

船内が薄暗いこともあいまって、頭がくらくらするようなシチュエーションに感じてしまう。

これ以上見ていたらおかしくなりそうなので、俺は顔を逸らし、

「あー、その……カナさん、なんでわざわざこっちに顔出してんだよ」「だって、あなた前から呼びかけてもなかなか起きないんだもの。よっぽどぐっすりだったのね。武偵としては、ちよつと赤点かな?」「クスクスと、ある種蠱惑的な声が耳をくすぐる。

俺が起床したことで満足したのか、カナさんが前に引っ込んだのを気配で感じた。

俺は今だうるさい心臓を抑えるように左手を胸に当てつつ、小さく息を漏らす。

……あつぶねえ。今のは本当にやばかった。この人、いたずらっぽいところはともかく、割と好みにストライクなんだよな……。

もし俺にヒステリアモードがあつたら、とんでもない口説き方してたかもしれない。ヒステリア持ちじゃなくてよかった。

などとキンジにボコボコにされそうなことを頭の片隅で考えながら、俺はカナさんに訊ねる。

「それで？ もう、目的地には着いたのか？」

「んー、あと5分くらいかな。寝起きですぐ動き回るのは嫌だろうから、ちよつと早めに起こしたのよ。気持ち良さそうに寝てたから、起こすのが少し悪い気したけど……いい夢でも見てたのかしら？」

カナさんの質問に、俺はわずか口をつぐみ、ぼんやりとだがさつきまで見ていた夢の内容を思い出す。

金一さんの葬儀のこと、そこで武装検事に会ったこと、そして――

「……あんたと初めて会った時のことを夢に見た」

「……そう、あの時の」

懐かしむようなカナさんの声に、俺も目を細める。

それからふと思い出し、

「なあ、カナさん。あん時言ってた『お礼』があつたから、俺のこと助けてくれたのか？」

「んー……まあ、そう、かな？」

「……なんだよ歯切れわりいな。違うのか？」

「違うわけじゃないけど、それだけじゃないってこと。どっちかといえば……うん、そっちは後付けの理由になるわね」

「それだけじゃない？ じゃあ、なんで助けてくれたんだよ？」

他に何か理由あるか？ 俺、この人になんかしたっけ？

割と本気で判らなかつたので首を捻る俺に、カナさんは前を向いたままで、

「――それは、秘密」

少しだけ笑いを含んだ声で、あの日のようにそう言った。

* * *

「さつ、着いたわよ。船の揺れに注意してね」

カナさんの言葉に、俺は座席を掴んで体を固定することで応える。と同時に、覚えのある浮遊感が襲ってきた。俺はその正体が、潜水艇が浮上していることの証左だと知っている。

ということは、だ。

「くっ……い」

ガクガクと激しくシェイクされる船体。次いで、水音。もちろん外の景色など見えないが、おそらく今この船は、波間を割りながら水上へと飛び出したはずだ。

その証拠に、上部にある出入り口のハッチが開いても、水は入り込んでこない。

代わりに入り込んで来たのは……柔らかい、月光だった。

「そっか……もう、夜になってんだよなあ」

掌に透かして星が散らばる夜空を見上げながら、俺は呟いた。

俺が学園島を出たのが夕方だったからな。もう、そんな時間になってもおかしくないだろう。

俺の呟きに、カナさんが軽く伸びをしながら反応した。

「夜も夜、もう深夜よ？ 日付も変わってるわ」

「そっか……」

俺は、なんだか感慨深くなって小さく零した。

なんか……思い返してみれば、すげえ一日だったよなあ。

アドシアードが開催したかと思えば、初日からジャンヌが白雪を攫いに来るわ、間違って単身敵陣に乗り込んだ挙句、不死身の怪物とバトル。ホント、なんで生きてんのかよくわかんねえな。

そして……今は、謎の美人と共に中国くんだりまでやってきている。

事実は小説より奇なりと言うが……奇なりすぎだろ、俺の場合。

そんなことを頭の片隅で考えつつ、俺はカナさんに促されて船外に出る。

ハッチから体を出すと、月明かりに照らされた岩々で構成された海岸と、夜の闇を飲み込んだように黒々とした海が出迎えてくれた。なんか……ミステリーのドラマとかで犯人が追い詰められそうな海岸

だな。

そのまま視線を上空へ転じると、星空の中にひとときわ大きく光る月が見えた。形は、ほぼ正円。満月か……それに近いのだろう。

「月……か」

それを見てとある人物を想起するも、頭を軽く振って追い出す。今は、そんなことを考えている時じゃないしな。

俺はハッチの淵に足をかけ、一気に潜水艇から飛び出す。地面がごつごつしていて着地時にちよつとふらついたものの、ようやく地に足をつけることができた。

俺にとって数時間ぶりの大地であり……同時に、初となる中国の大地だ。

……ていうか、実感ねえなあ。俺、まさか初の中国がこんな密入国になるなんて思ってたよ。

つか、よく見つからずに来れたな。それだけ『イ・ウー』製の小型潜水艇のステルス性が優れているということだろうか？

俺は凝り固まった体を伸ばしながら、

「んっんー……くあつ。やっぱ、何時間も座りっぱなしだと、体凝るな」

「そりゃあね。気が済むまで体ほぐしといていいわよ。ここなら、『イ・ウー』に見つかることもないだろうし」

潮風が気になるのか、カナさんは髪をいたわるように触りながらそう言った。

世間の中にあつてなお艶やかさを誇る長髪を目にしながら、俺は首をかしげる。

「ここなら『イ・ウー』には見つからない？ どうして、そう言えるんだ？」

「ん……簡単に言うとな、ここは『藍幫』^{ランバン}っていう大きな組織がいくつか持つてる『エアポケット』だから、『イ・ウー』の監視の目も及ばないはずよ」

「う、ん……？ えーと……」

いかん、カナさんの言葉が飲み込めない。

俺の理解が及んでいないことを察したカナさんは、ちよつと苦笑して、

「うーん、じゃあ、もうちよつと丁寧の説明しましょうか。この世界にはね、『イ・ウー』や『藍幫』みたいな大きな組織がいくつかあるの。だけど、小規模なものとはちよつと、組織同士の大きな争いつていうのは起こってないのよ。どうしてかわかる?」

「あー……実力が拮抗してる、から?」

「惜しい。拮抗してるのは実力じゃなくて情勢、よ」

情勢?

「漁夫の利っていったらわかりやすいかな? たとえば大きな組織同士が激突するとして、負けた方はもちろん、勝った方だって疲弊する。そうして今度は、その勝った側が別の組織に狙われることになる。弱みにつけこまれて、ね。けれどその争いにもまた勝敗があつて、また勝った側が狙われて……そんな風に、泥沼の戦いへと陥ることを避けるために、彼らは互いに手出しをしない不可侵の姿勢を前提に置いているの。……もつとも、それだけが理由じゃないんだけど……そうね、とりあえずはこの認識があればいいわ」

「てーことは……ここが『藍幫』とかいう組織の『エアポケット』……縄張りの一つだから、『イ・ウー』はちよつつかい出せねえってことか?」
「そんなところ。『藍幫』は本当に大きな組織で、中国全土に影響力を持つてるけれど、さすがにイコール中国全部を手中に収めてるわけじゃない。ただし、ここみたいにくつかは絶対の領域^{テリトリー}つてもものを持つてるの。たとえば、香港支部の本拠地になつて浮島とかね。そういつたところには、うかつに監視とか刺客とかは飛ばせないはずよ。そんなことしたらすぐにバレちゃうし、敵対行動に取られちゃうもの」

「わかつた? という風に一本人差し指をピンと立てるカナさん。
なるほど、とりあえずの事情はわかつた。……わかつた、けど、

「……ちよつと待て。てことは、俺たちがここに上陸したこともバレてんじや……?」

「ああ、そつちは平気。私、『藍幫』の香港支部に、ちよつと貸しがあ

るの。正確には、そこのお偉いさんにだけど……まあ、それはおいといて。あなたが寝てる間に連絡を入れて、ここに停泊することは伝えであるの。というか……こっちから電話したら、迎えに来てもらうように頼んでるわ」

ころころと笑ってそう言うカナさん。

俺はその態度に、呆れたように笑うことしかできない。すげえな、この人。中国全土に影響力あるような組織を、アゴで使ってるよ……。

「だから、まあ……迎えを呼ぶ前に、少しお話しましょうか」「話？」

「そう。船の中で言ったでしよ？ 詳しい説明は後でまとめてって」

カナさんの言葉に、俺は視線を中空に向けつつ思い出してみる。

あー……そーい、言ってたなそんなこと。あん時は結局、目的地しか聞かされなかったもんなあ。

俺が思い出したことをなんとなく察したのか、カナさんはちようど突き出た岩に腰をかけ、その前にある似たような岩を手で示した。どうやら、同じように座れということらしい。

特に逆らう理由もなかったので、俺もまた岩肌を腰を下ろす。

それをきっかけとして、カナさんは語り始めた。

「そうね。じゃあ、まずは……自己紹介、といきましょうか。私は、カナ。あなたの友人である遠山キンジの姉です。よろしくね？」

「ああ、よろしく。俺は、有明………え？」

カナさんに対して名乗り返そうとして、気づく。

今この人、なんて言った？

遠山キンジの……姉？

「え？ は？ ……ええええええ!? き、キンジの姉ちゃん?!」

「んっ……ちよつと、急に大きな声出さないで。びっくりしちゃうじゃない」

「あ、すみません……」

両耳を手で塞ぎながら抗議を飛ばすカナさん。俺はそれに生返事に近い謝罪を返しながら、思考の海に沈む。

キンジの、姉……？ いや……そんな人、いるわけねえ。

なぜなら、俺は知っているからだ。キンジの兄弟は遠山金一という兄が一人だけ。もちろんあいつが言ってたというだけの話だが、わざわざそんな嘘つく必要があるか？ いや、でもだとしたらこの人は一体……？

困惑する俺。そんな俺に、カナさんがいたずら気に笑う。

「そういうわけだから、私に手を出すのはオススメしないわよ？ たとえば、今だって暗がり二人きりなわけだけど、もしも襲って来たりしたらきつちりお仕置きするからね。私、キンジより強いもの。特に、今の私は」

「そんなこと——」

——するわけねえだろ！ と、咄嗟に言い返そうとして。

俺は、唐突に今の台詞に既視感を覚えた。

『お前じゃ俺には勝てないよ。今の俺には、な』

俺は、こんな感じの台詞を、誰あろう遠山キンジから、1年に渡る付き合いの中で何度か聞いたことがある。

それも。

決まってキンジが『ヒステリアモード』の時に。

そして、

「……………あ」

俺は、ある考えに至った。

——キンジの言葉に嘘がないとするならば、キンジには兄が一人しかいない。

しかしキンジの姉を名乗る人物が今、俺の前にいる。

この矛盾に対する答えは——

キンジの兄である金一さんが女装した姿こそが、このカナさんなのは？

……いや、なにを馬鹿なことを言っているのかと思うかもしれないが、ここで俺はもう一つの証言を提示する。

キンジはかつて、こう言った。

『兄さんは「女装」することでヒステリアモードになれるんだ』——と。

そしてカナさんは、ヒステリアモードのキンジを髣髴とさせる言葉を口にした。

「これもう……クロなんじゃね？」

だが、もしそうだとすると、俺は……キンジの兄(男(♂))に対して、人生で一番の美人とか、急接近に心臓高鳴ったり、好みにストライクとか思ってた……？

「……………」

おい誰か俺にヒステリアモード持って来いよ。とんでもない自殺方法で死んでやる。

「……………」

「いや……てかぶつちやけ、あんたキンジの兄ちゃんだろ？」

「？」

俺の問いかけに、カナさんは首を捻る。まるで、何を言ってるのかわからないというように。

「……………」さては、しらばつくれる気だな。まあ、普通女装してることなんて知られたくねえだろうしなあ。

まあ、本人がそういうスタンスを取るなら別に無理に聞き出す必要もない、か。ヒステリアモードになる必要があつたってことだろうし、キンジもよくあつちのキンジのことは忘れてくれて言つてたしな。よくよく業が深えな、ヒステリアモードは。

それでも、だ。これだけは訊いとかねえと、な。

「あー……カナさん。さっきの質問はなかつたことにするから、一個聞いていいか？」

「なに？」

「あんた……生きてたんなら、なんでキンジの前に一度も現れなかつた？」

「……………」

——そう。

キンジの兄は……金一さんは、去年の12月に死んだ。少なくともそういうことになっていたし、キンジはそれ以来武偵という職業を忌避するようになり、金一さんの話題も極力避けていた。

だからきつと……あれ以来、キンジは金一さんとは会っていないはずだ。そりやそうだ、死人に会うことなんてできないんだから。けれど、俺の推測が正しければ、目の前の女性は金一さんで……つまりは彼の死は嘘だったということになる。

じゃあ、なんで……せめてたつた一度でも、あいつに会ってやらなかったんだ。

俺は、薄暗闇の中でカナさんをじつと見つめる。カナさんは、目を逸らさない。逃げるような態度は取らなかった。

「……理由があつた、つていうのは、言い訳にはならないわね。結果的に私はキンジとはあの事故以来会ってないし、おじいちゃんたちやあなたみたいな友達に、あの子のことを押し付けたんだもの。……そのことは、ごめんなさい。そして、あの子の友達でいてくれてありがとう」

「俺に謝る必要はないし、お礼もいらねえ。別に、俺に大したことができたわけじゃねえし、つるんでたくらいでいちいちお礼なんて言われても、その……困るよ。誰かに命令されてあいつの友達やってたわけじゃねえんだから」

俺は、頬を軽く指で搔きながら、適当に答える。まあ、そりや多少はほつとけない気持ちもあつたが……やっぱ、それだけじゃ友達なんて続けられないだろ。

あと、この人今さらつと自分が金一さんであることを認めたとよな。まあ、今更だけど。

それに、疑問が一つ解けた。この人が俺の名前をあの葬式の時点で知つたのは、この人自身が金一さんだったからか。そりや、知つてもおかしくねえよな。俺、名乗ったもん。

じゃあ、次の疑問も解かせてもらおう。

「それより、あんたが言う理由つてのは一体なんなんだ？ それと、武偵だったあんたが、なんで『イ・ウー』の本拠地なんかに住んだんだ？」
「その説明もちゃんとするけど……私としては、あなたこそどうしてポストーク号に居たのかを聞きたいわ。一体どうやってあそこまで辿りつけたの？」

「あー……俺は、ジャンヌってやつからさつき乗ってた潜水艇を借りたんだ」

「ジャンヌ？ あの子から……そうか、『GGG^{トリプルジー}作戦』。あの子、負けたのね……。ポストーク号まで来れた理由は合点が行ったけど、目的は何？」

質問を質問で返されたかと思えば、さらに質問を浴びせられる。

まあ、隠すほどのことでもない。とりあえずここは素直に答えておこう。

「……別に、大した目的なんてねえよ。ただ、その……ちよつと、友達を助けようと思っただけ。……まあ、結局失敗しちゃったんだけど」

「友達……なるほど、そういうこと。事情はわかったけど……ずいぶん無茶する子ね、あなたは」

困ったように、カナさんは苦笑する。

つか、事情わかったってマジで？ あんま詳しく説明したつもりねえんだが……。

とにかく、だ。

「俺の話はこんなところだよ。そろそろ、そっちの番だろ」

「……そうね、話してくれてありがとう。それじゃあ……前提として、有明君は『イ・ウー』についてどこまで知ってる？」

「大したことは、なにも。せいぜい、凄腕の犯罪者が多く所属してる犯罪組織ってことくらいだ」

「大まかには、それで間違いないわ。ただ詳しく説明するとね……

『イ・ウー』は、教育機関なの」

「教育機関……？」

「正確には、相互教育機関、かな。『イ・ウー』は犯罪組織というよりは、互助組織に近いわ。天賦の才を持った者たちが、互いが持てる技術を教えあい、どこまでも強くなっていく組織。それが、『イ・ウー』のコンセプトであり、正体よ。実際組織としての目的は無いし、ただ強さを求めた連中がそれぞれの目的を胸に集った結果が『イ・ウー』。そのリーダーである『教授^{プロフェッサー}』の命令にこそ従うとはいえ、集団と言った方が適切かしらね」

なるほど……ただでさえ強い連中が、さらに強くなるための場所。それが『イ・ウー』ってことか。

まあ、それ自体は、よくある光景だろうさ。教えあって強くなるって形は、言ってみれば武偵高でもやってることだ。やりたきやどうぞご勝手について感じだが……問題は、その連中がハイジャックだの誘拐だのやってること、だな。

目的のために、真の意味で手段を選ばない。そういう連中ってわけか。

……ふと、理子やジャンヌにもそういう『目的』ってやつがあるのだろうか、なんて考えが頭に浮かんだ。

犯罪に手を染めてまで叶えたい『目的』……か。

「……………」

「有明君？」

「……いや、なんでもねえ。とにかく、『イ・ウー』については大体わかった。それで……あんたは、そのメンバーなのか？」

「……ええ、そうよ。私は、『イ・ウー』のメンバー。それは間違いないわ。——表向きは、ね」

表向き……？

「実を言うとなね……私が世間から姿を消すきっかけになった浦賀沖海難事故……あれは、『イ・ウー』のメンバーが起こした事故、ううん、事件だったのよ」

「な……ッ!？」

俺は、衝撃の事実^に絶句する。

金一さんが死んだとされる原因となったあの事故が、実は『イ・ウー』が起こした事件だった？

そうか……だからあの時ブラドは、「金一さんの死は『イ・ウー』が原因だ」とか言ってるやつだったのか。

……だが、そうだとすると疑問が残る。

「じゃあ、なんであんたは生きてて、しかも『イ・ウー』なんかに所属してんだよっ！」

「どうも、あの事件は私を『イ・ウー』に攫うために起こしたものらし

くてね。燃える船の中で、私はメンバーに勧誘を受けたの。それを断って、そのまま倒しちやつてもよかつたんだけど……私はその誘いに乗ることにしたの」

「……なんで？」

「——潜入して、『イ・ウー』を丸ごと潰すため」

間髪を入れずに返ってきた答えに、俺はごくりと唾を飲み込む。

この人……マジかよ。あんな大きな組織を、壊滅させる気だったのか。

キンジ。お前の兄ちゃんは、本当にすげえ人だぞ。俺なんて、理子の敵一人倒せねえってのに……。

俺の中で、カナさんに対する株が急上昇する。いつかテレビの中で見たヒーローを目の当たりにしているようで、胸が熱くなる。

すげえ……この人、すげえ……！

「キンジの前から……というよりも、表の世界から姿を消したのもまた、『イ・ウー』が理由になってるわ。『イ・ウー』に関する情報はどこの国でも重要機密^{トップシークレット}。知ってるだけで国から消されるような、そんな組織よ。だから、誰に話すこともできなかつたし、巻き込まないために私は姿をくらませたの。……有明君にはいろいろ喋っちゃったし会っちゃったけど、もうメンバーとも戦ってるし、いまさらよね。日本政府に知られたら、消されちゃうかもしれないけど」

ひでえ……この人、ひでえ……！

カナさん株大暴落したんですけど。

まあ……うん、正直ふざけんなって言いたいけど、もう3人と戦っちゃってるし、確かに今更かもな。うん、今更今更。あはははは！

……もういやだ、この段々異常に慣れてくる感覚。

頭を抱える俺に「どうしたの？」なんて声をかけてくるカナさんに、緩やかに首を振る。

それをどう受け取ったのか、カナさんは話をまとめにかかった。

「……さて、と。これでおおざっぱには説明終わり、かな？」

「こつちも、大体聞きたいことは聞けたよ。それで？ これからの方針は？」

「……それなんだけど、ね」
「？」

歯切れ悪く口にするカナさんに、俺は首をかしげる。いきなりどうしたんだ？

「なんだよ、ノープランってことか？ そりやまあ、急にポストークから逃げ出したんだし、しかたな——」

「違うの」

「……カナさん？」

ばつさりと、俺の言葉はカナさんに遮られた。

怪訝な目で俺がカナさんを見つめる中、彼女はすつと立ち上がり、踵を返したかと思うと、ゆっくりと歩き始めた。

なんだ……？

唐突な展開に、俺は困惑することしかできない。咄嗟に立ち上がったのはみたものの、カナさんの意図が読めず、その場で佇むことしかできなかった。カナさんがなにをしたいのか、さっぱりわからない。

しかしカナさんの歩みは、それほど多くは刻まれなかった。せいぜいが、数メートル。それだけの距離を作った後、彼女は俺に背を向けたままで再び語り始めた。

「……さっき私は、言ったわよね？ 私が『イ・ウー』にいたのは、組織を叩き潰すためだったって」

「あ、ああ……」

「けれど、それには障害があった。私一人じゃ、組織全員を相手取っても、さすがに勝つことはできない。だから私は、ある作戦を考えた。

それが——『フォーリング・アウト同士討ち』」

『同士討ち』……潜入捜査の際に行われる作戦の一つで、犯罪組織を内部分裂させ、共倒れを狙う武偵用語。

言うまでもなく危険度が高い作戦だ。バレたら、まず確実に殺されるからな。

この人、そんなのを実行しようとしてたのか……。

「そして、『同士討ち』を起こすためにさらに必要になってくるのが、リーダー不在の状況を作り出すこと。『イ・ウー』はさっき言った通

り、かろうじて組織の体裁を保ってるだけの集団よ。圧倒的な力を持つリーダーがいて初めて、まとまりを得ている。だから、現リーダーがいなくなれば、次のリーダーを決める戦いを始めとして、多くの混乱が齎されるはず。それが、私が考えた『イ・ウー潰しの作戦』よ」

「そうか、確かにそれなら……」

上手くいけば、労せずには連中は自滅してくれるかもしれない。いや、そこまでいなくても組織がばらければ、各個撃破が可能になるし、少なからず疲弊させることもできる。策としては、かなり上等——あれ？

「でも、それって……」

「……気づいた？ ——そう、この作戦はもう、ほぼ不可能。少なくとも、真正面からは。現リーダーの排除は、現状私の裏切りがバレた以上、もう無理でしょうね。暗殺が最も可能性が高かったんだけど……もう一度潜り込むのは、多分無理」

「……ごめん。俺のせいで、あんたの裏切りがバレちゃったんだよね……」

「それはもういいの。終わったことだし、私がやりたくてやったことだしね。……でも、これで『第2の可能性』は消えた」

申し訳なさに声を沈ませる俺に、気をつかわせまいと朗らかに答えてくれたカナさんの口から、意味深な言葉が出た。

『第2の可能性』……？

「私はね、有明君。リーダー不在の状況を作り出すという作戦に対しても、また作戦を立ててたの。それも、2つ。そのうちの1つが、『第2の可能性』——つまりは、『教授』の暗殺だったの」

「第2……ってことは」

「そう。私はもう一つ、『第1の可能性』を持つてる。こっちは、『第2の可能性』に比べて、おそらく難易度はぐっと下がるし、今でも十分実行可能な作戦よ」

現リーダーの暗殺以外で、リーダー不在の状況を作り出す。それが、『第1の可能性』ということなんだろう。

そして、それは十分可能だとカナさんは言った。

だったら……、

「じゃあ……それを、したらいいんじゃないかねえのか？」

と、俺は詳細はわからないままでそう言った。

それに返ってきたのは、しかしイエスでもノーでもなく、質問だった。

「……ねえ、有明君。一つ、あなたに聞いていい？」

「え？ ……まあ、俺に答えられることなら」

「そう。じゃあ——」

ふわり、と。

長く艶やかな栗色の髪をなびかせながら、カナさんは振り返った。今までにはない、真剣みを帯びた青みがかった黒瞳が俺を見据える。

そして、

「もし、あなたにどうしても成し遂げたいことがあったとして……そのために、誰かを犠牲にする道を、あなたは選べる？」

そう言ったカナさんの瞳は、なおも真剣だった。

だからこそ俺もまた、真剣に——けれど、即答する。

「いや、選ばない」

「……どうして？ それが、唯一の解決策かもしれないのよ？」

「だって、そんなの自己満足だろ」

またも俺が即座に返せば、カナさんはわずかに目を見開いていた。

その光景を見ながら俺の脳裏に浮かんでいたのは、今から1ヶ月ほど前のハイジャック事件での一幕。

——あの時。

アリアを、キンジを、俺を、そしてバスジャックやハイジャックに巻き込まれた乗客を犠牲に何かを為そうとしていた理子を、俺は否定した。そのやり方は、間違ってるんだと。

その時の気持ちに嘘はないし、そして否定したからこそ、俺はここでもまた否定しなければならぬ。そうじゃなきゃ、嘘になるだろ。理子の前に立ちふさがったことも、助けたいと思ったあの気持ちも。

だから俺は、言ったんだ。それは、自己満足だ……って。

きつと……『第1の可能性』ってのは、そういうことなんだろう。さすがに、この場面で無関係とは思えない。だから、多分『第1の可能性』の先には、誰かの犠牲があるはずだ。

それを否定したところで、俺に代案なんてない。それどころか、俺はもうすでに一個作戦を潰してる。こんなこと、言える立場じゃない。

それでも、なんとなくだが……俺には、カナさんがその実否定してほしそうに見えた。ただの、勘違いかもしれねえけどな。

——果たして。

カナさんは、長く息を吐き……そして、キツと眦を釣り上げた。

「——有明君。私を、見なさい」

「は……？」

「月も、海も、大地も、何も見なくていい。私だけを、まつすぐに、まつすぐに、見つめなさい。そして……私に、見せて。君の可能性を。」

——『第3の可能性』を」

スツ——と、両手をだらりと垂れ下げ、足をわずかに開いた状態で、カナさんはただ突っ立っている。

な、なんだ？ どういうことだ？ カナさんは俺に、何をさせようとしてんだ？

まったく意図が見えない——が、とりあえず、俺にできること……というか、させたいことは、カナさんをじつと見ることだけらしい。

正直、意味がわからんが……まあ、そういうことならしかたない。

というわけで、俺は言われたとおり、視線をカナさんに固定した。どこを見ろとは言われなかったので、とりあえず全体を観察してみる。……俺はなにが悲しくて、男を見つめなきやなんねえんだろうか。

じつと……じつと、カナさんだけを見つめる。

「……………」

しっかし、見れば見るほど女の人にはしか見えねえんだよな、この人。顔は言うに及ばず絶世の美女だし、まあ、長髪は男でもいるからいいとして、なんで胸膨らんでんの？ どうやって偽装してんだろ。い

つか知れたら、アリアにも教えてやろう。

まあ、それらはいいだろう。メイク、カツラ、パッド。方法だけなら、俺でもできなくはないだろう。

けどさ。

なんで、そんなに腰くびれてんの？

いや、おかしいだろ。ラインが完全に女性だろ、それ。イカ腹のアリアとは、雲泥の差だ。非常にけしからん感じの曲線美を持っている。

一番どうやって実現してるのかわからない女性らしいポイントに、ちらつと……本当にちらつとだけ視線が移ってしまった。いや、違うけどね？ 俺、くびれとか興味ないけどね？ そんなちよつとマニアック嗜好とかじゃくて、なんというかほら、学術的見地からの知的好奇心が「有明君、あなた今……ッ！」うえええ!?

脳内でつらつらと言いつつ、そのことを並べ立てていると、カナさんがものつそい勢いでバックステップした。

ちよ……っ!?! そんな引かなくても!?

俺の顔がさあつと青くなり、カナさんの顔には緊張感が走っている。

待つて待つて待つて！ お願い、今の無しにして！ 友達の兄貴のくびれに思わず目がいつちやいましたとかもし広まったら、恥ずかしさで俺が逝っちゃいましたってなるから！

というか、え？ バレたの？ 俺、本当にちらつとしか見てねえぞ。……いやでも確か理子が昔、「女子って結構そういう視線気づいてるんだよー？」とか言ってたっけ。

しかし、これはマズイ。俺をからかっただけのカナさんのことだ。もし今後キンジに会うようなことがあれば、バラされてしまうかもしれない。いや、よしんばそれが無かったとしても、これをネタにいじられる未来しか見えない。

なんとしてもここで釈明しなければ、と俺は意気込む。クソ、なんで俺がこんな目に遭ってんだ。それもこれも、全部あのくびれが悪い。チクショウ！ あのくびれのせいで、あのくびれの……いやで

も、本当にすごい——

「——ッ！」

ざりつ、とわずかにカナさんのつま先が動いた音を聞いて、俺は正気に戻る。

俺の馬鹿野郎……！ どうして同じ轍を踏んでんだ……！

俺は慌てて、言い訳のようにカナさんに頼み込む。

「ちよっ、待ったカナさん！ 引かねえでくれ！」

「……その言葉。確証はなかったけど……やっぱり、見てたのね？」

両手を前に突き出しつつ弁明する俺に、カナさんはそう言った。

……え？ これ、ひよっとして自爆したパターンですか？

「えっと……はい。見てました」

俺は、あつさりと自白した。

なんとという誘導尋問リーディング。そうか、綴つづり先生に尋問された犯罪者たちも

きつと、こんな気持ちだったんだろうなあ……。

ああ、これはもう俺アリアに続いてカナさんのドレイ化決定かな……。ドレイの兼業とか聞いたことねえよ。

などと肩を落とす俺。そんな俺に、カナさんはつかつかと歩み寄り、

「有明君……お願いがあるの」

「はい……」

お願いか。なんだろう。中国中のブランドもの買い集めてこいとかかな（適当）。

諦観からそんなことを考えていると、カナさんは右手を俺に差し出し、

「あなたにまだ、『イ・ウー』と戦う覚悟があるのなら……この手を取って。ほんの少しでいい。私に協力してちょうだい」

「……………」

予想外の言葉に、俺は一瞬絶句する。

しかし次第に、その意味を俺は飲み込んでいった。

『イ・ウー』と戦う覚悟がまだあるなら……か。

——正直なところ。

あんな怪物ともう一度戦いたいかと問われれば……まあ、それはN
Oだろう。運よく生き残りはしたが、それは本当に運がよかつただけ
の話にすぎない。

だから、ここで降りるのが一番正しい選択なんだろう。

——けれど。

俺は、あのハイジャック事件の中で、理子に「たすけて」と言われ
たんだ。気のせいだったのかもしれないが、少なくとも俺はそう受け
取った。

そして、受け取った上で、俺はあいつを助け出そうと行動を起こし
た。

つまり……少し強引かもしれないが、そこで依頼は成立したんだ。

武偵憲章2条「依頼人との契約は絶対守れ」。

頼りないかもしれないが、武偵としてはまだ諦めるわけにはいかな
い。

——だから、

「……俺に、『イ・ウー』を叩き潰したいなんて正義感はない。俺は、あ
んなほど『正義の味方』にはなれないし、そんな覚悟もない。でも……
俺は、友達を助きたい。だから……その分だけなら、あんたに協力で
きるかもしれない」

そう言つて、俺はカナさんの手を取った。

『イ・ウー』全員を相手できるほど、俺は強くない。おまけに、『教授』
とやらの勝てるとも思えない。一度会ったことがあるが、あれは俺と
はまったく次元が違う。

その意味で言えばブラドだつて同じだが……まあ、なんだ。あいつ
一人分くらいなら、俺が担当するのはやぶさかじゃない。借りもある
しな。

「ありがとう」

端的にそう言つて、カナさんは笑った。

それから彼女はポケットから携帯電話を取り出し、

「それじゃあ、私は『藍幫』に連絡して、迎えを送ってもらおうね。こ
れから忙しくなるわよ、『神ノ眼』……いえ——鍊」

最後に俺の名前を呼んで、波音から遠ざかるためか、距離を取っていった。

なんか……少し、くすぐったいな。あの人に名前で呼ばれるのは、認めてもらえたみたいで、少し嬉しい。

というか、結局ちら見の件は許してもらえたのかな。なんも言われなかったのが逆に怖い。あとでなんかすごいこと要求されそうだ。

……あと、さ。カナさん。さつきは雰囲気的につつこむのは避けたけど……、

——『さーどあい』、つてなんですか？

* * *

「月も、海も、大地も、何も見なくていい。私だけを、まっすぐに、まっすぐに、見つめなさい。そして……私に、見せて。君の可能性を。」

——『第3の可能性』を」

そう言つて、遠山金一——否、カナは『無形の構え』を取った。

体から余分な力を一切抜き、両手を下げ、足を肩幅に開いた自然体……構えならざる構え。それはカナにとって、いかなる構えをも上回る戦闘態勢である。

そこから繰り出されるのは、必殺の銃撃『不可視の銃弾』インヴィジビレ。

通称『見えない射撃』と謳われた、カナの十八番だ。

(この技で試させてもらう。有明君……あなたに、『第3の可能性』を見出せるかどうかを)

カナは、心中のみでそう呟く。

——カナが世界的犯罪組織『イ・ウー』を潰すために立てた作戦が2つ存在することは、先ほどカナ自身が説明した通りである。

一つは、『第2の可能性』。

すなわち、『イ・ウー』内に潜伏したカナが、組織の首魁である『教授』——シャーロック・ホームズを暗殺する道。

しかしこの方法は、すでに実行は不可能だ。なにせ、『潜伏』という前提条件が、有明鍊を救出することで崩れてしまっているのだから。

残されたのは、もう一つの道——『第1の可能性』。

この作戦の明言を、カナは避けた。それは、そうだろう。なにせ、そ

の道の先には、犠牲があるからだ。

神崎・H・アリアという、鍊が『イ・ウー』に単身立ち向かうほどに大切に思う少女の犠牲が。

鍊が友達を助けるために『イ・ウー』に向かったという話は、つい先ほど聞き出している。そして、カナは知っていた。アリアが、母親である神崎かなえを救うために、キンジと鍊の両名と組み、『イ・ウー』に立ち向かっていることを。

であれば、鍊が濁した『友達』とは、おそらくアリアのことだろう。

そして、『第1の可能性』とは——そのアリアの抹殺を意味している。アリアを殺すことで、カナはリーダー不在の状況を作り出せると考えたのだ。

では、なぜアリアの死がリーダー不在につながるのか？

現リーダーは、シャーロック・ホームズ。これに、間違いはない。問題は。

そのシャーロックの死期が近づいている、ということだ。自然の摂理……すなわち、寿命によって。

シャーロック亡き後、組織は次期リーダーを決める動きに入るだろう。それは、問題ない。だが、『イ・ウー』の中にはその争いを避けた
い者たちもいるのだ。

『主戦派』と『研鑽派』
イグナティス ダイオ

前者が、争いを望む者たち。己こそがリーダーとなり、『イ・ウー』という強大な力で世界の覇権を握ろうと目論む一派。

後者が、争いを望まない者たち。『教授』の思想を継ぎ、自らを高めへと押し上げるためにこそ『イ・ウー』を存続させようとする一派。

ようするに、大々的に動きたい者たちと、陰で高め合いたい者たち
の間で考えが分かれているのだ。そして、『研鑽派』にとって『主戦派』
の誰かがリーダーになることは好ましくなかった。

だから彼らは探した。世界最強の名すら冠したシャーロックに代わり、圧倒的な力で組織をまとめ上げられる人材を。武力、超能力、不死——それら、『教授』を継ぐに足る資格を持った人物を。

そして彼らが目を付けた者こそが、真の意味での『シャーロックの

後継者』。

シャーロック・ホームズ4世——神崎・ホームズ・アリアだったのだ。

故に、カナは考えた。シャーロックの死去と、アリアの死去が合わされば、『イ・ウー』には、混乱が訪れるはずだと。すぐにも次期リーダーになりたい連中と外部から選定したい連中の抗争が——『同士討ち』が起こると。

これが、『第1の可能性』。シャーロックとアリア兩名の死を以って完結する、『イ・ウー潰しの作戦』の全貌だ。

ただし、これには時間制限がある。これは『第2の可能性』にも言えたことだが、実行はアリアが『イ・ウー』に勧誘される時までになければならない。

いまでこそまだ力不足故に誘致は受けていないが、シャーロックに後継者足りうると認められ、直接命じられれば、きつとアリアは受けてしまうだろう。尊敬する祖先の言葉に加え、シャーロックには不思議な魅力がある。アリアが誘いに乗ってしまえば、全ては元の木阿弥だ。

だからカナは、『第2の可能性』が潰えた今、可及的速やかにアリアの抹殺を行うべきだと考えていた。

……考えては、いたのだが。

——『だって、そんなの自己満足だろ』

鍊のその言葉を聞いて、カナはもう一つだけ残された……とうの昔に棄却した『可能性』を思い出していた。

もしも。

鍊が、犠牲を良しとしていれば、カナはこの『可能性』を考慮にも入れなかっただろう。

しかし、鍊は即答で以って『第1の可能性』を切って捨てた。

ブラドに立ち向かう姿の中に『義』を見た鍊が……切って捨てたのだ。

だからこそカナは、もう一度賭けてみたくなった。『イ・ウー』の中で消えかけた己の『義』を、もう一度貫き通すために。誰の犠牲も出

さずに『イ・ウー』を打倒するために。

——そのための、『不可視の銃弾』。

未だかつて誰一人として見破れなかったこの技を、鍊が破れるかどうか。その結果次第で、カナは『第3の可能性』を取ると決める腹積もりだった。

（もちろん、有明君にこれを見抜けたからと言って、『第3の可能性』の成否自体には関係しない。……けれど。私が欲しいのは、幻想が現実に変わる奇跡の実存。お願い、有明君。私に、それを見せて）

幻想は、所詮幻想。

そんな大人のつまらない諦めを、打ち破って欲しい。

『第3の可能性』は、夢のまた夢とさえ呼べる、まさに成功率ほぼ皆無の作戦だ。たとえどんな根拠を見せられても、それだけでは実行には踏み込めない。

だけど、もし。

もし、有明鍊がカナの切り札を破ることができたなら。少なくとも、カナから見て普通の少年にしか見えない彼に、そんな幻想のようなことができたなら。

この世にそんな奇跡があるのなら……もう一つくらい奇跡に賭けてみても、いいのではないだろうか？

だから。

（1発目では、きつと無理。2発目だっていい。だから——これを破ってみて、有明君！）

その瞬間。

カナの世界が急速に遅延を始めた。

1秒を数百秒に引き伸ばしたような、奇妙な時間感覚。そう錯覚するほどの極限の集中状態の中、カナの右手が腰元に伸ばされる。

ワンピースの腰部に開けられた、一見してはわからないスリット。

その奥には、19世紀前半に作られた名銃『コルト S A A』——

通称『平和の作り手』が収まっている。

この銃は回転弾倉式拳銃であり……同時に、拳銃史上トップクラスの『早撃ち』——『早抜撃ち』に適していると言われている。

——そう。

カナの切り札『不可視の銃弾』のからくりは、実は単なる『早撃ち』にすぎない。

ただし、抜銃、発砲、納銃、その一連の動作を目にも留まらない速度で行っている。故に、被弾者はいつ撃たれたかもわからず、銃さえ見えず、マズルフラッシュと銃声、そして着弾をもつてのみその攻撃を知るのだ。

——本来ならば。

カナが、不可避と断じた『1発目』。その発砲のためにカナがピースメーカーの銃把を握ったその瞬間、
有明鍊の視線が、カナの抜銃を捕えた。

(——なッ!?)

思わず、カナは靴裏で力強く大地を蹴り、後方へと跳んでいた。
着地したカナの額を、一筋の汗が流れる。

(そんな……まさか、見えていたというの……?)

驚愕の事実には、カナは荒く息をついた。

「有明君、あなた今……ッ！」

ありえない。

喰らってから技の正体を看破する、というならばまだわかる。というよりも、カナが求めていたのはまさしくそれだ。

けれど、有明鍊はその期待の上を行った。単純な動体視力のみで、カナの動きを完全に察知していた。

(偶然? わからない……なら、もう一度……!)

ざりつ、とカナのつま先がわずかに地を這う。『無形の構え』に大げさな動作はいらぬ。この程度の微調整で、すでに射撃体勢は整っている。

そして再びの『不可視の銃弾』。カナの右手が神速で動き、ピースメーカーのグリップを握りこむ。

さらに、人差し指が引き金にかけられた。残りは、銃を引き抜いて撃つ。これだけだ。

だがその最中、鍊の両手が動き、同時に口も開かれようとしていた。

そこに疑問を持ったカナが発砲を中止し、世界に速度が戻ったところ
ろで、

「ちよつ、待ったカナさん！ 引かねえでくれ！」

両手を体の前で振りながら、錬が慌ててそう言った。

その言葉が指すのは、たった一つ。

おそらく、彼には見えていたのだ。スリットの隙間から、カナが引き金に指をかけた場面が。

——つまり、

「……その言葉。確証はなかったけど……やっぱり、見てたのね？」

「えつと……はい。見てました」

カナの問いかけに、錬は簡素にそう答えた。

同時、カナは納得する。

やっぱり、と。

(これが、この子の能力^{ちから}。突出した性能を持った『眼』が、彼の真骨頂なのね。ヒステリア^{わした}モード^ちすら上回る視力を以って、身体能力で一般人を遥かに上回る私たちに追従している、か)

カナは錬の力に、そう結論を出した。

それならば、今までキンジの相棒や、アリアのパートナーを務められていたことも理解できるし、身体能力でゴリ押してくるブラドに敗北したのもむしろ納得できる。

——いや、そんなことよりも。

(この子は今、超えた。『不可視の銃弾』を。超人たちの境界線を。何より——私の中の、『幻想』という壁を)

それが、全て。カナが錬に求めた、希望。

有明錬は、確かにそれを見つけた。

口元に笑みが浮かぶ。それが、止められない。この世には確かに『奇跡』は存在するのだと、カナは教えられていた。

——ならば決めよう。覚悟を。

——ならば選ぼう。『第3の可能性』を。

カナは錬の許へと歩み寄り、彼に右手を伸ばした。

「有明君……お願いがあるの」

声に、鍊は返答を返す。

カナは、続けた。

「あなたにまだ、『イ・ウー』と戦う覚悟があるのなら……この手を取って。ほんの少しでもいい。私に協力してちょうだい」

断られるかもしれない。そんな不安は、なぜか無かった。

そして。

その予感、当たっていた。

「……俺に、『イ・ウー』を叩き潰したいなんて正義感はない。俺は、あんたほど『正義の味方』にはなれないし、そんな覚悟もない。でも……俺は、友達を助きたい。だから……その分だけなら、あんたに協力できるとは思えない」

そう言つて、鍊はカナの手を握り返した。

——それでいいと、カナは思う。

（この子の原動力は、『正義』じゃない。友達を助きたい。そんな、純粹な気持ちだけ。けれど……気づいてる？ 有明君。アリアを助けるために戦うつてことは、神崎かなえに罪を被せた全員と戦うつてことに。まあ……気づいてて、言ってるんだらうけれど）

志は、違う。カナは『正義』のために。鍊は、友のために。

けれど、向かう先は同じだ。

カナが定めた、『第3の選択肢』。

『イ・ウー』との全面衝突——『オール・ウオー全面戦争』。

カナは、この『賭け』の結果を以つて、その選択肢を選んだ。

「ありがとう」と礼を言ったカナは、『藍髻』とコンタクトを取るために携帯電話を取り出し、鍊から離れる。

その際、彼女はこう声をかけた。

「これから忙しくなるわよ、『サードアイ神ノ眼』……いえ——鍊」

今カナが決めた、鍊に対する『セカンド二つ名』を添えて……彼の、名前を。それからカナは暗記している専用回線用の番号を携帯電話に打ち込み、耳にあてた。

数回コールが鳴った後に聞こえたのは、若い男の声。

『もしもしお話は終わりましたか？』

「ええ、待たせてごめんなさいね、諸葛^{しよかつ}。こつちに迎え寄越してくれるかしら？」

『それは構いませんが……なにか、善いことでもありましたか？ 声が少し、弾んでいますよ』

「んー……そうねえ。武者震いつてやつかな。私ね、諸葛——」

潮風になびく髪を抑え、カナは黒く染まる海の向こうを見る。

その先にいるのはカナの怨敵。叩き潰すべき巨悪。

『イ・ウー』の名を頭に浮かべながら……カナは、宣言した。

「——おっきなケンカ、ふっかけるわ」

* * *

誰かの些細な行動で、世界が動くことはある。

ここでもまた一つ、きつと世界は動いた。

向かう先に、何があるかはきつと誰にもわからない。

——けれど。

時代の変わり目は、すぐそこに迫っていた。

29. 4000年の大地を歩きましょう

「うわ、すっげ……あれが藍幫城ランバンか」

俺はクルーザーの甲板で手すりに寄りかかりつつ、目前まで来た、洋上に浮かぶ異様な建物の様相に感嘆した。

その建物を一言で表せば、派手。それにつきる。

全高はおよそ500メートルの3階建て。奥行は50メートルほどだろうか。東京タワーが333メートルの高さを誇っていたことを考えれば、まさに威容と言わざるを得ない。

形としては、俺たち日本人が思い浮かべる普通の城とは違い、どちらかと言えば塔の形状をしている。立てた鉛筆の上に、日本という寄棟よりむねの天井——台形2つに三角形2つをくつつけたみたいな感じかな——がくつついたと言えば少しわかりやすいかもしれない。

まあ、しかしそんな構造をどうでもいいと思わせるくらいに、装飾はさらに華美だった。

中国のカラーといえば思い浮かぶ朱色と金色が、その主な原因だろう。全体的には朱色を基調とした外壁に、金色や薄青緑、白などで装飾が入り、ところどころ——訂正、外壁のほぼ全面に四聖獣たちが彫刻されている。おまけに、屋根にはしゃちほこじやなくて金の龍が乗ってるし。

日本ではほとんど考えられないほどごてごてして……しかし、不思議と違和感はない。どころか、まさしく芸術と呼べるほど調和が取れていて、中国と言うお国柄にマッチしている。国が変われば、価値観が変わる。これもまたその一例だろう。

……で、だ。問題は、今が夜だということだ。

つまりは、灯りに乏しいってことなんだが、ではなぜここまで詳細に描写できたかと言うと……ライトアップされてんだよ。城自体に取り付けられた照明で。

派手すぎだろ。いろいろと。

「まあ……その派手すぎる場所に、俺は今からお邪魔するわけだが」と、俺は手すりに腕を乗せ頬杖をつきつつ、ぼんやりと呟く。

——あの後。

カナさんが『藍幫』とかいう組織に連絡をとった後、ほどなくして夜闇の中から一艘の小型クルーザーが現れ、俺たちを迎えにきた……らしい。カナさんが言うには。

で、その船に乗ってた人（『藍幫』の構成員だろう）と中国語で話をつけたカナさんに促され、船に乗り込んだ俺たちはそのまま海上を進み、今こうして『藍幫』香港支部の本拠地——通称『藍幫城』の至近まで迫ってきていた。

香港に丸ごと根ざしている組織の本拠地が海上にでんと構えているというのは、意外にも思えたが、それを言ったら武偵高も似たようなもんか。人口浮島^{メガフロート}というには小さいが、しかし構造は似通っている。クルーザーの中で暇つぶしにカナさんに聞いた話じゃ、『藍幫』の起源はもともと海賊だったらしいし、古くからの流れを受け継いでるってことなんだろう。ただ海賊らしく、藍幫城はタグボートでの牽引が可能らしい。まさに、船と城の融合だ。

その船城こと藍幫城は、現在は藍塘海峡^{ラントン}に停泊しているらしい。といても、俺もいまいちわかってないんだが。

ここでカナさんに習った香港の立地を簡単に説明しておく、ぶつちやけた話二つに分かれる。中国本土にくっついた九龍^{ガウロン}、海を挟んでその南に浮かぶ香港島。間の海は、ヴィクトリア湾と呼ばれ、トンネルやフェリーでの行き来が可能になっている。

そして藍幫城がある藍塘海峡は、香港島の東側の海域にあり、藍幫城からは九龍、香港島を一望できるそうだ。ここまで行くともう、組織の本拠地というより観光地みたいになってんな。見た目も一見の価値あるし。

しかしまあ……九龍だのヴィクトリア湾だの、俺が知らない名前がポロポロ出てきやがる。こういうところで、見識の浅さが思い知らされるよなあ。

とてもじゃないが、武偵憲章9条——世界に雄飛せよ——は、まだまだ俺には難しいらしい。

そんなことを考え、ついたため息が出た時だった。

「——鍊。なにしてるの?」

背後から声がかかり振り返ると、丁度カナさんが船内から出てくる
ところだった。

俺は手すりに背中を預けてもたれかかりつつ、

「んー……ちよつと、俺には世界はまだ早いなあと感じてたところで
す」

「ふふっ、なにそれ」

鈴の音のような小さな笑い声と共に、カナさんは俺の近くまでやつ
てきた。

海風に、ワンピースと長い茶髪が遊ぶ。それを上品に手で押さえつ
けるその姿は、まさしく女の人にはしか見えない。

だが男だ。

「カナさんこそ、どうしたんだよ。確か、さっきまで中でお茶飲んで無
かったか?」

俺はまるでホテルの一室みたいな豪華な船内の様子を思い出しつ
つ、カナさんに訊ねる。

俺は別に喉がかわいてなかったんで断ったが、カナさんは『藍幫』の
構成員に給仕してもらっていたはずだ。

「飲み終わったから、こつち来たの。藍幫城に着く前に言っておくこ
とがあったし、ね」

「なにが?」

「ポストークを脱出した後であなたが寝る前に、私の事情で10日く
らい身動きが取れなくなるって言ったの覚えてる?」

んー……ああ、確かに言ってたな。そんなこと。

あんときはスルーしたけど……10日って、冷静に考えると随分な
げえな。

「覚えてっけど……結局、事情ってなんなんだよ?」

「……………」

「カナさん?」

「……………ん、ごめんなさい。ふわ……あ、今、なにか言った?」

返事がなかったことを不審に思い呼びかけると、カナさんはあくび

混じりにそう言った。律儀に、手で口元を隠している。

あくび……？ まさか今、寝てたのか？ 立ったまま？

まあ……、そりやそうか。なんせもう真夜中だ。俺はさつきまで潜水艇の中で寝てたからいいとして、カナさんはずっと操縦してたんだもんな。そりや眠くもなるか。

「その、ごめん。俺、カナさんが船の操縦してる間、ずっと寝てた。無理、させてたよな」

申し訳なさを顔に表しながら、俺は謝罪する。

しかし予想に反してカナさんは苦笑しながら、

「ああ、違う違う。これはね、起きてたから眠いわけじゃないのよ」

「？ どういうことだ？」

「んーと……錬は、HSS……うん、キンジ風に言えばヒステリアモードのことは知ってる？」

「ああ。一応、ざっとは聞いている」

「私の場合は、30分くらいの持続時間のあの子とは違って、それを長時間維持できるんだけど……代わりに、脳を休めるために、後でまとめて長い睡眠を取らなきゃいけないの。今のは、その前兆ってことだから、あなたが気にする必要はないわ」

カナさんの説明に、俺は「へえ」と相槌を打つ。

そういやキンジも、ヒステリアモードの後はちよつと眠くなるとか言ってたな。長時間ヒステリアモードになれる代わりに、長時間身動きが取れなくなるってことか。

しかし……てことは、その間は無防備になるってことだろ？ なのにならわがわが組織に匿ってもらうってことは、カナさんは割と『藍髻』を信用してんのかね？ まあ、よしんばなにかあったとしても、そんな時は起きるんだらうが。

いずれにせよ、そんなこと「何が起こっても大丈夫」って自信がないや無理だ。自分の強さをそこまで信じられるってのは……なんというか、羨ましい、な。

「……………」

「？ どうかした？」

「……いや、なんでも。それより……そろそろ、だよな」

「ええ……そろそろね」

二人、揃って船の舳先を見つめる。

その、さらに先。

中国最大組織『藍幫』——その本拠地である藍幫城は、すぐそこに迫っていた。

* * *

「ようこそ迎、藍幫城へ。到着をお待ちしていましたよ」

そう言っただけで俺たちに対して腕を広げながら歓迎したのは、カナさん曰く、『藍幫』香港支部のまとめ役、しよかつせいげん諸葛静幻という男だった。

なにやら色合いの派手な宮廷衣装に身を包んだ痩身の男、というのがまず彼の第一印象だ。ついで、丸眼鏡の下で糸みたいに細められた目と柔和な表情が、見る人に優しい印象を与える。

とてもじゃないが、大規模組織のまとめ役とは思えないほど、普通の人間に見えた。まあ、それを言ったら、キンジとかもパツと見は普通だしな。

なんてことを俺は、藍幫城の正面玄関に横付けされたクルーザーから降りながら思った。

まあ、だが……こういう奴ほど、みどりまつたける案外侮れなかつたりするんだよなあ。東京武偵高の校長である緑松武尊も確か一見普通の男だが（というか普通すぎててどんな顔か思い出せない）、その実教職員すら恐れている。人は見かけじゃ判断できない。

入口の両隣に立つ龍の像、その間に威風堂々と屹立する諸葛さんの姿に、俺はそう判断を改めた。

そんな俺の前方、俺より先に降りていたカナさんが諸葛さんに右手を出す。

「ごめんなさいね、急にこんなことお願いして。迷惑だったでしょう？」
「いえいえ、他ならぬ遠山——ああ、いえ今はカナさんとお呼びしましょうか。あなたには、いろいろとお世話になりましたしね。偶然いたからという理由で、香港の犯罪史に残るような大事件を解決してもらったのですから、借りは返しておきませんと」

その手を握り返しながら諸葛さんは薄く笑い、彼らは握手の形を崩した。

「気にしなくていいのに……と言いたいところだけど、今回は遠慮なくお世話になるわ。それで、あの4つ子ちゃんたちは？」

「なにやら『教授』^{プロフェッサー}と個人的に……というか、姉妹的に契約したらしく、今のところは全面的に『イ・ウー』に協力しています。なので、ここに居させてはあなた方の迷惑になりそうだったので、上海『藍幫』の方へ仕事として出向させておきました」

なにこいつ、怖。話の内容はいまいちわかんねえけど、笑顔でえぐいこと言ってるぞ。

「ありがとう、と言うべきなんでしょうけど、ちよつとあの子たちにかわいそうなことしちゃったかしら？ でも、いいの？ 『イ・ウー』とはいろいろと共同歩調を取ってるんでしょ？」

「答えがわかってて訊ねるのはいささか意地悪と取られますよ、カナさん。共同歩調とは、仲間という意味ではありません。他に優先順位が高い案件の前には、あまり意味のない言葉です。『受人滴水之恩、当似湧泉相報（一滴の水のような恩にも、湧き出る泉のような大きさでこれに報いるべし）』。なにより受けた恩に対しては最大限の感謝を示し、これに報いる。中国人の思想の一つです」

「あなたが義理堅い人物でよかったわ、諸葛」

カナさんが微笑みつつ、諸葛さんに礼を告げる。

俺にはよくわからなかったが、とりあえず話はまとまったらしい。

と、そこで今度は諸葛さんは俺の方に向き直り、

「あなたのことも、カナさんに窺っていますよ。有明錬さん、でよろしかったですよ？ 私は、諸葛静幻と申します。『藍幫』香港支部のまとめ役を務めています。以後、お見知りおきを」

「ども。お世話になります」

日本的な挨拶と流暢な日本語で、諸葛さんはさつきみたいに握手を求めてきた。ので、それに応じつつ俺も挨拶しておく。『イ・ウー』から匿ってもらうことは、この人は恩人だしな。てか、上手いな日本語。

といった感じで一通りの挨拶が終わると、俺たちは揃って入城し、象牙や翡翠、珊瑚の彫刻で溢れた玄関ホールに通された。

と、そこでカナさんが大きな欠伸を一つして、

「……ごめんなさい、諸葛。そろそろ私眠らなきゃいけないみたい」「おや。まずは食事で饗応、と思ったのですが……そういうことでしたら、どうぞ入浴後にご就寝ください。室内に浴室がついている部屋に案内させましょう」

頷いた諸葛さんはチャイナドレスの使用人らしき人を呼びつけ、カナさんに付ける。

カナさんはそれに「ありがとう」と言うと、俺に向けて言った。

「それじゃあ、鍊。おやすみなさい。後のことは諸葛に任せただから、なにかあったら彼に言っただけ。変装するのなら、街に出てもいいわよ」

「あいよ。んじゃあ、またな」

若干ふらつきながら去っていくカナさんに、苦笑しながら手を振る。

これから、例のヒステリアモード後の『睡眠』とやらに入るんだろう。

俺はその間日本に帰ることはできなくなるわけだが……まあ、しゃあねえか。どのみち、しばらくはほとぼりが冷めるまで隠れとかねえと、な。

まだまだ日本は遠そうだ、とため息をついた俺に、

「では、有明さん。カナさんの分まで、食事を楽しんでいただけますか？」

と、諸葛さんがやはり薄く笑いながら聞いてきたので、

「よろこんで」

俺は、腹を鳴らしながらそう答える。

……ぶつちやけアドシアドの開催前から何も食ってなくて、めちゃくちゃ腹減っていた俺だった。

* * *

どこのパーティ会場なの？ っつてくらい広い大食堂で噂に名高い満漢全席をなりふり構わず食いまくった俺は、どこの王室なの？ っ

てくらい広い大浴場で風呂をもらうことになった。

いつだったか中国には湯船につかる習慣があまりなく、ほとんどシャワーで済ませるといふ話を聞いて、風呂好きな日本人としては若干不安ではあったが、ここはそんなことはなく、立派な浴室だった。まあ、やはり随所に金があしらってたり、彫刻みたいなのも多くて派手派手しかったが。湯口が金の龍だったのを見た時にはふざけてんのかと思っただが。

「んっ……く、ああー……。なんつーか、生き返るなあ。身に染みわたるぜ」

湯船によりかかり、背伸びをしながら俺は大きく息を吐く。

実際、戦闘続きで久しぶりに安らいだ気がする。じんわりと熱が体を温め、ぼうつと視線を中空に揺らす。

そんな中で考えるのは、日本にいる連中のことだ。

特に、アリア。結局なにも言わずに日本を出る羽目になっちゃったからなあ。帰ったら怒られそうだ。

電話も、携帯電話がぶっこわれちまったしなあ。番号覚えてねえよ。武偵高なら調べりゃ番号わかるだろうけど……報告したらしたで、芋づる式に俺が『イ・ウー』に深入りしたことが武偵高の上——つまりは、日本政府に行きそうだ。そしたら、俺消されるじゃん。日本帰れなくなっちゃまうよ。

まあ……とりあえず、連絡はできそうもねえなあ。つか、そんな心配より今とにかく日本に帰れるかを心配しとかねえとな。

そんな風にぼんやりと考えていると、

「——失礼します、有明さん。ご一緒しても？」

と、腰にタオルを巻いた諸葛さんが、入室してきた。

ちよつとびっくりしたものの、特に断る理由もないので了承する。

「失礼します」ともう一度断った諸葛さんは、浴室に身を沈めた。風呂にまでつけてきた眼鏡が、湯気で一瞬で曇る。

「いや、すみませんね。急にお邪魔してしまいました」

「全然。お邪魔したのはどっちかっつたら、こっちなんで」

「それは、どうもありがとうございます。日本には、裸の付き合いとい

うものがあるそうですね？ 私も一つ、日本的な方法であなたと交友を図りたいと思ひまして。……そうだ、お食事はいかがでしたか？」
「すんげー美味かったです。どれも、今まで食ったことないもんばっかりで」

「それはよかったです。せつかくなので、^{ラーメン}拉麵もお出ししようかと思つたのですが……日本にあるラーメンとは、だいぶ違つてしまふと思うので、今回は中国ならではのものを多く供させていただきました」

へえ、ラーメンつて中国と日本でそんな違うのか。本場のラーメン、ちよつと興味あつただけだな。

「それでも興味がありませんか？ カナさんもあおつしやってみましたし」

「あー……変装してつてやつですか？ 俺、^{マスク}変装苦手なんだよな……。中国語もわかんねえし」

「おや、それなら変装道具、といつてはあれですが、いろいろお貸ししましょうか？ 假？——カツラなどもありますよ。確か、日本語を喋れる者がいたので、お付にどうぞ。あなたと年も近かつたので、親しみやすいかと思ひますよ」

「それはありがてえけど……なんで、そんないろいろやつてくれるんですか？ 俺はまあ、確かにカナさんの連れっっちゃ連れだけど、それだけにしちや、なんつーか……破格の対応つて感じなんですけど」

「……そう、ですね。正直な話を言つと、私はあなたになにかをする義理というのはありません。ですが……興味があるのですよ。あなたに」

言つて、諸葛さんは薄く歪んだ口元を、さらに歪める。

それを見て俺は……反射的に体を腕で抱きこむようにして諸葛さんから体を引いた。

「あ、いや、その……すいません、勘弁してください。俺、そつちの趣味はないんで……」

「ちよつ、待つてください。なにかとても不穩な誤解をされてませんか……？」

諸葛さんの頬がびくびくと動き、こめかみからたらりと一筋の汗が

流れる。いや、どっちかっつと冷や汗か。

しかし、考えてもみてほしい。眼鏡を曇らせて目が見えない全裸の男が、笑いながら俺に興味があると言ってきたんだ。もちろん、そういう意味はないんだろうが、ちよつと怖い。

なおも引き気味な俺に対し、諸葛さんは一度咳払いをすると、

「そうではなく、あなたがカナさんと行動を共にしていることが私の興味を引いたんですよ。あなたが知っているかはわかりませんが……彼女は、『イ・ウー』に入る前は、いろいろと各地で活躍していますね。各国の難事件や怪人などを相手取っていた彼女が、あなたを『戦力』として見ている。それはもう、それだけである種の保障なのですよ。あなたがかかなりの有能な人物だという、ね」

『戦力』……か。そういやさつきも、一緒に『イ・ウー』と戦ってみたいなこと言われたしな。

まあ、命を救われた相手だ。手伝うのはやぶさかじゃないが……とりあえずこの人の誤解は解いておこう。

別に俺はそんなに強いわけじゃない、的なことを言おうとし……しかしそれより早く、諸葛さんはとんでもない爆弾を落とした。

「もしかしたら、あなたに香港『藍幫』を継いでもらうことになるかもしれないし」

「え……はあああああああああああ!?!」

大理石の浴場に、俺の絶叫が響く。

いや、え、この人何言ってるの!?

「あの、それってどういう……?」

「いえいえ、ただのたとえ話ですよ。ただ、こういう地位についていると、なにかと危険もありましてねえ。不測の事態というのも考えられるんですよ。そうなった時のために後釜を用意するのは、そんなに不自然なことではないでしょう?」

「いやいやいや。それを、なんで外部に求めてんですか。普通そういうのって、組織内から出すもんでしょ」

「リーダーとは、縁ある者ではなく才ある者になるべきです。その点で言ってしまうと、今の香港『藍幫』は……いささか、不安が残ります」

す。私の次に地位のある者……というか、者たちは少々過激ですね。悪戯に香港を騒がせるだけの結果になりそうで、正直に言うとな安なのです。私は、今の香港『藍幫』を守りたい。地に根ざし、香港の平穩を守る今の『藍幫』を。ですので、できることなら、早急に次のリーダーが見つかることを望んでいるのですよ」

諸葛さんの言ってることは……まあ、わかる。自分の次の代が不安だから、自分で次の代を探す。それは、おかしいことではないだろう。けど……なんか、焦ってる気がする。急に俺みたいな余所モンにこんな話をするくらいには。

「まあ、今のは話の種くらいに思ってください。将来就職に困ったらいつでも『藍幫』へどうぞ。歓迎しますよ」

「って、勝手に俺を就職難民にしないでくださいよ」

「ははっ、申し訳ありません。そういえば、知っていますか？ 中国では——」

そのあとは、諸葛さんと他愛のない話を続けた。まるで、さっきの話を本当になんでもないものにするように。

香港を治める大組織のボスとこんな風に気軽に話してる状況には変な気分だが……不思議と嫌じゃないのは、この人の人柄故なんだろう。

そんな彼と話をするのは存外に楽しく……湯船に揺蕩いながらの時間は、ゆったりと流れて行った——

* * *

「ん……もう、朝か」

窓から差し込んでくる日差しに目元を覆いつつ、俺はあくび混じりで呟いた。

寝起きの気分はかなり良い。昨日までの体の疲れが吹っ飛んだみたいだ。

それもそのはずと言うか、俺が寝室として用意された2階の貴賓室には、10人は寝られそうな天蓋付きのベッドがある。おまけに素材まで拘っているらしく、半端ないふかふか感。これで熟睡できなきや嘘だぜ。

しかしまあ、本当に好待遇だよなあ。この部屋も、バカ広い上に豪華だし。シャンデリアとか久々みたよ。しかも、鳳凰の形って。

おまけの俺でこんだけもてなされるって、カナさんマジで昔何やったんだよ。

「とりあえず……起きるか」

俺は珍しく寝起きのいい体をベッドから引きずり出し、ベッド傍の床に置いてあった靴を履く。

それから、体を伸ばして眠気をさらに吹き飛ばしていると、自分の服装が普段の制服姿とは違うことを思い出した。

「そっか、昨日これ借りたんだっけ」

俺は胸元の生地を指で軽く引つ張る。

今俺が着てるのは、緑を基調とした中国服。それも、演服っていうのかな？ カンフー映画に出てくるみたいなのやつだ。昨日のバトルで制服が大分汚れてたからな。洗濯してもらおう代わりに借りたんだ。ついでに、ブラドの攻撃で折れた背中の柳葉刀も処分してもらった。しかし……いいなー、これ。かつこいい。頼んだら1着くれねえかな？

そんなことを考えつつ、俺は小さな物置棚の上に置いていた武装を、制服と同じ要領で装備していく。ついでに、黒い巾着袋も腰に吊る。この中には、スタンングローブが入ってるんだ。昨日風呂入る前に袋もらっつって仕舞ってたんだよな。

武偵は常在戦陣。別に『藍幫』を敵視してるわけじゃないが、まあ警戒しておくのは悪いことじゃないだろう。『イ・ウー』が中国に入り込んでいないとも限らねえし。

横に4、5人は並べそうなかい階段を降りて1階に向かう。

と、そこには丁度諸葛さんと、その隣に一人の少女がいた。

「おや、有明さん。おはようございます。昨日はよく眠れましたか？」
「おかげさまで。あんないい部屋貸してもらってありがとうございます」

「いえいえ。それより、丁度よかった。今、この子と貴賓室に向かうところだったのですよ——院^{ユテン}。挨拶を」

「はい」

諸葛さんに促されて進み出てきたのは、俺より少し年下くらいの女の子だ。まあ、国が違う以上あてにはならんが。

三つ編みでツイントールを作ったユアンというその子は、中国風にアレンジされたメイド服に包まれた体をぺこっと折り曲げ、

ユアンメイシー
「院美詩です。よろしくお願いします」

と、日本語であいさつしてきた。少し、訛ってはいたけど。

「っーか、よろしくって、何が？」

突然のバイリンガル少女の登場に困惑しているのがわかったのか、諸葛さんが説明してくれる。

「昨日、お話しましたでしょう？ 日本語を喋れる者がいるので、お付きにと。まあ、それは街にでかけるなら、と言う話でしたが……何分、私も忙しい身でして。あまりお付き合いできないので、それならいっそ彼女をつけていたほうがなにかと都合もよろしいでしょう。カナさんが起きるまで、彼女に世話を任せてください」

「はあ……まあ、そういうことなら」
こつちも中国語はしゃべれないから、その申し出は素直にありがたい。

俺は、ユアン……ちゃん？ まあいいや、ユアンに向き直り、挨拶を返す。

「えっと、こつちこそよろしく。有明鍊だ。俺、中国語はしゃべれねえんで、いろいろ迷惑かけると思うけど……まあ、その、よろしく頼む」

「はい。お気軽にお申し付けください」

うーん……かてえな、この子。

ユアンの態度に頬をかいていると、諸葛さんが朝食はどうするか聞いてきた。昨夜みたいに大食堂で取るか、それともさっそく街へ繰り出してみるか。自由に選んでいいと。

んー……そうだな。じゃあ、せつかくなら、

「それじゃあ、観光がてらちよつと外に出てみます。朝飯はそつちで……って、そーういや金が無かったか……」

「ああ、それなら——これを」

そういつて諸葛さんが俺に手渡ししてきたのは、1枚の封筒。中には……げっ、お金入ってるよこれ。

「いや、さすがにお金を受け取るのはちよつと……」

「ははは、それは私からではありませんよ。カナさんが持っていたお金を換金したものです。あなたに渡すように、と」

カナさん。あんた俺の母親かよ。

しかしまあ、諸葛さんからもらうよりかは大分受け取りやすい。ここは、ありがたく受け取っておこう。

その後、諸葛さんに案内された衣装室で適当なカツラ（茶髪のショートだ）を借りて変装……うん、まあ変装する。

で、そのまま出発しようとするど諸葛さんに止められた。

「あの、その服装で外出なさるつもりで……？」

「え？ ああ、一応そのつもりです。なんかこれ、動きやすいしかつこいいし、気に入ったんですよね」

なにせ、日本じやなかなか着る機会ないしな。しかも、本場中国だ。さすがに全員とはいかなくても、何人かはこういう服装の人もいるだろう。

「うーん……まあ、問題ないといえど問題ないんですが……そうですね。厄介払いにもなるでしょうし、その方が都合がいいかもしれません」

「都合がいい？」

「ああ、いえ、なんでもありませんよ。では、楽しんできてくださいね」

いまいちよくわからん台詞と共に、俺とユアンは諸葛さんに送り出された。

藍幫城に停泊しているクルーザーに乗り込み、まずは深灣遊艇會シヤンワンマリナーと呼ばれるヨット・ハーバーに向かう。さすがにユアンに運転はできないのでそこまでは送ってもらい、そこからは二人で香港島をぶらつく予定になっている。

で、深灣遊艇會からバスで移動する際、中国でのバスの乗り方は果してどんなだろうかと考えていた俺は、隣にせずと付き従う実に良妻的雰囲気醸し出すメイドさん（改め学生さん）。俺が変装道具を

選んでいる間に、白い学生服に着替えたらしいに顔を向け、
「なあ、ユアン。バスつてどう乗ればいいんだ？」

「はあ？ あんた、そんなことも知らないで中国に来たの？」

んー……聞き間違いカナ？

「ほら、お金貸して。……はい、これ持つて。もたつてたら怒られるから急いでよね」

あきらかに出発前より冷たいユアンに急かされ俺はバスに乗り込む。

こいつ……！ これが本性か！

「あ、あのー、ユアンさん？ なんかさつきと態度違う気がするんですけど……」

「そりゃ、諸葛様の前でこんな喋り方するわけないでしょ。でも、よそ者のあんたにまで気をつかう必要ないし。おまけに学校も休むことになったし。……それより、こういう態度取つてること、諸葛様に言わないでよ」

じろり、と年下の女の子に睨まれる俺。

しかし立場的に……は俺の方が客扱いなんだが、迷惑かけた分俺の方が低い。

「い、イエッサー」

「返事は是、よ」

「……しー」

中国に来てわかったことがある。

俺はどうやら、ツインテールで小さな子には勝てないらしい。

深灣遊艇會からほどなく進むと、黄竹坑道という道路がある。

とりあえずその道沿いにある店で朝飯を食べようということになり、俺とユアンは適当な店で向かい合つて座りながら朝食にありついていた。

俺が食べてるのは、朝飯と言うこともあり、お粥という軽いメニュー。昨日散々濃いのが食ったからな。

そこに油條ヤウ・テイウとかいう揚げパンを浮かべ、なんかやたら細い焼きそ

ばをセットで食っている。軽いは軽いんだが……美味しいぞ、これ。するするいける。

もそもそと食事を続けつつ、俺は向かい側で同じものを食べているユアンに訊ねる。

「で？　なんで俺がお前の分も払ってんの？　バス代もちやつかり2人分だったし」

「いいじゃない、案内料よ。それに、あれ10日やそこらの滞在で消える額じゃないわよ。あんたが3、4人いても多分保つわ」

「そういう問題じゃねえんだが……まあ、確かに案内役は感謝してるけどさ」

なんせ俺だけじゃ移動すらままならねえしな。

しかしその代償に金入り封筒はユアンが管理することになってしまった。スリ対策でもあるらしいが……これ、今日おごらされ続ける羽目になるんじゃないですかねえ……。

あとでカナさんに怒られる予感にビビりつつ、俺は気になっていたことを訊ねてみる。

「しかし、あれだな。お前みたいな学生も『藍幫』のメンバーなんだな」

「メンバーっていうか……あたしはさ、『藍幫』が経営してる学校の生徒なの。そこは親がいない子のために開かれてて、学費がタダなんだけど、代わりに『藍幫』のために仕事するときもある。だからまあ……正直、メンバーとは言いつらいわね。『藍幫』内での位階たちばも低いし」

「……わり。変なこと聞いた」

「なんで謝るのよ。別に、孤児なんて珍しい話でもないし、あんたが、えつと……遺憾に思う？　必要ないわ」

なんでもないように言いながら、ユアンは揚げパンを口に放り込む。

本人がそういうなら、これ以上なんか言うのも逆に失礼か。

なので俺は話をそらすために、ユアンの言葉尻を捕える。

「遺憾に思うって……こういう時に使う言葉じゃねえぞ。無理に難しい言葉使おうとしなくていいって」

「むっ……別に、無理してるわけじゃないわ。あたし、いつかは日本に

留学するつもりなの。だから、いろいろ日本語は使つときたいのよ。……だから、さつきみたいな訂正はありがたいわ。おかしなところあったら、教えてね」

「へえ、留学ねえ……なあ、ユアン。日本語を教えるのはいいいけどさ、その前に教えてくれ」

「なに？」

小首をかしげるユアン。

俺はそんな彼女に自分が着ている演服を指さし、

「……ぶつちやけ俺、浮いてるよね？」

「まあね」

「ちくしようツ！」

即答で返ってきた答えに、俺は頭を抱えた。

バス乗る時からなんとなく気づいてたよ！ 誰もいねえよこんな服着てる人！ 日本とおんなじだよ！

ああ、恥ずかしい。半端な知識でこの服着てるのが急に恥ずかしくなってきた。

羞恥に悶える俺。そんな俺の肩に、ユアンはぼんと手をのせた。

「猿も木から落ちる、ね」

「ちげえよツツツ！」

* * *

香港島は、4つの区分に別れている。

中西区、灣仔区、東区、南区の4つの行政区画のことだ。俺たちが今までいたのは南区で、そこから中西区にある中環ジョンフンという街にやってきた。

ここはユアン曰く、ビジネス街と、ごちやごちやした飲食店街や香港庶民の街が融合した街らしい。

ビクトリア湾を望む、九龍とは目と鼻の先の港町でもある。

そんな街中を、すでに慣れてしまった服装のまま、ユアンと練り歩く。

「鍊は、あれでしょ？ 高級料理とかより、もつと庶民的なの食べたいのよね？」

「庶民的つつつたらあれだが……まあ、高そうなのは夕べいっぱい食ったしな。なんかこう安っぽいけどなぜか美味い感じのが食べた」

「うっわ、贅沢。あんたそれ、絶対に？スラム民区で言っちゃダメよ。日本語わかる人いたら、ぼこぼこにされちゃうわよ」

「……うん、確かに今のはねえな。嫌味なやつだった」

「わかればよろしい。ま、そういうことならやっぱり中環こっちね。金鐘ガムチヨンとか上環シヨンワンはビジネス街の雰囲気が強いもの」

「雰囲気が強い……は、ちよつと微妙。正しいかはわかんねえけど、あんまいわねえと思うぞ」

「なるほど」

そんなことを言いながら、ふらふらと歩いていく。会話は、思ったよりも弾んでいる。まあ、どつちかつつたら旅行者とガイドさんみたいなもんだし、説明とかで自然と会話は繋がる。

「いやしかし凄えな、ユアンは。俺、自分が住んでるところでもそんな説明できるかわかんねえ。たぶん、訊かれても困る」

「それはいいこと聞いたわ。じゃ、あたしが日本に留学したら、あんたが案内してね。調べまくってオタク的なこと聞いてやる」

「なんでオタクとかは知ってんだよ。っーか、せめてマニアックと言え。……まあ、案内は別にいいけど」

後は、同年代に近いってのも円滑にいく理由だろうか？ いや、まあ諸葛さんとかでもそれはそれで楽しそうだが。

——と、そんなことを考えている時だった。

近くに建っていたビルに（日本に負けず劣らずによきによき生えている）備え付けられた大型ディスプレイに目が留まった。

なんととはなしに見ていると、それはどこかの動物園を映しているようだった。

なんだろうか。動物園に取材とかか？

「——ああ、あれ。なんか、今日本からすっごい芸の上手い猿が来てるとかでこっちで話題になってるのよ。たしか、こーちゃんとか言ってたっけ」

「ああ……そういやあつたな、そんな話」

俺の視線に気づいたユアンからの説明に、俺は思い出す。

こつちでも、確かに話題になった。東京武偵校からもそれなりに近い動物園にいた猿だ、確か。

「面白そうだな。俺、結局日本じゃ見てねえからなあ。暇あつたら行ってみようかな？」

「止めた方がいいわよ。あたし一回テレビで動物園の様子見たけど、すっごい人だったもん。たぶん、行ってもまともに見れないわね」

「げっ、マジかよ」

「ただ、あの動物園って『藍幫』が経営してるらしいから、諸葛様に頼んだら閉まった後に見せてくれるかもね。……そんなことより、ほら。ここに来るまでにいろいろ周ってお腹も空いたでしょ？ お昼ご飯食べましょ。お腹空いてるわよね？ てか、空かしなさい」

「いや、それお前が食いただけじゃん……」

ユアンの提案に乗って昼食に向かうころには、俺の意識はすでにまだ見ぬ昼食たちに移り変わっていた。

* * *

——事件は、昼飯を食べている時に起きた。

ユアンに手ごろな大衆店を紹介してもらい（ユアン自身も来たことはいらないが、見た目でわかるらしい）、俺たちは昼時の喧騒渦巻く大衆食堂へと入った。

運よく空いていた丸テーブルにつくなり、ユアンはメニューを取り出して、「注文は？」と聞いてくる。どうせ俺は文字も読めないのだから、おおまかな希望をユアンに伝え、そこから彼女がメニューを決めるんだ。

なので俺は、満を持して言ってやった。

「ラーメンだ」

「……あんた、本当にいいの？ 日本のラーメンをさらにおいしくした感じ、とか思ってたら想像と別物になるわよ？」

「構わねえ。ラーメン一択だぜ」

「まあ、あんたがいいならいいけど……店員さん服?!」

どこぞの司令官みたいに両手を組んで机に立てつつ頼む俺に、ユアンは呆れ混じりにため息をつきつつ、店員を呼ぶ。

「これ一つと？ 个要一份……？ あと、これも一つ要？ 个」

やってきた店員に、メニューを指さしつつ注文するユアン。

その姿を見ながら、俺は内心かなりわくわくしていた。

だって、ラーメンだぞ？ それも本場、中国だ。どんなすげえのが出てくるんだろうと、俺の期待はうなぎ上りである。諸葛さんやユアンには諫められたものの、これを食わずして日本には帰れない。

ほどなくして店員さんが運んできたのは、まずはユアンのワンタン麺。それも、ユアンが言うには海老ワンタンらしい。黄金色のスープに浮かぶ、大ぶりの海老ワンタン。実に美味そうだ。

そして、

「おまたせしました？ 久等了」

来たぜ、ラーメン……！！

ゴトリ、と俺の眼前に大きな碗が置かれる。

立ち上る湯気、ほのかな香り、そしてその奥には、待ちに待ったラーメンが存在した。

ほう……具は、少ないんだな。ほとんど麺しか入っていない。

しかし、ラーメンと言えば主役は麺とスープ。むしろそののみで勝負しているところに、自信がうかがえるというものだ。

いざ……実食……ッ！

俺は、箸をゆったりと持ち上げ、まるで最高難度の手術に挑む執刀医のごとく、スルリと箸をスメスープに滑り込ませる。

——その時だった。

「——鍊！ 下がって！」

「はっ？」

突如ユアンから鋭い声が飛び、俺がぽかんと彼女を見た瞬間。

何者かが、俺たちのテーブルに突っ込んできた。

ずがしやあツ、と轟音をまき散らしながら倒れるテーブル。および

……および……俺のラーメン……ッ！

ふ、ふぎけんな！ どこのだいつだクソツタレ！

腹立ちまぎれに箸を地面に叩き付けつつ椅子から立ち上がり、俺は吹き飛んできたおっさんに目を向ける。なんとも気弱そうな、普通のおっさんだ。

じゃあ……問題はこいつを吹き飛ばしたやつ、か？

そう思い、視線をおっさんと反対方向に移す。

そこには、黒スーツに黒いサングラスをつけた、いかにもな連中が3人ばかりいた。ありや……ウラ者もんだよな、どう見ても。

俺は、そいつらに視線を固定したままで、いち早く席から離れ、おっさんを介抱しはじめたユアンに訊ねる。

「ユアン。誰だ、あいつら」

「わかるわけではないでしょ……といたいところだけど、スーツについてるバッジ、あれ『貴蘭會』グイランファイの連中だわ」

「『貴蘭會』？」

「中国系マフィアのおつきなところよ。まったく、こんな昼間っから暴れまわるなんて……あれ、多分下っ端な上に新入りでしょうね。彼らは、治安を守ったりするようなところだもの。殴られた人に聞いたけど、強引に席を取られそうになって抵抗したら、いきなり殴られたそうよ」

なるほど、だからあんな急に暴れるような連中は下っ端つてことか。しかし、やること小さいなー。敵地である学園島に単身乗り込んできたジャンヌを見習えよ。

しかし……『貴蘭會』？ どっかで聞いたことあるんだが……。

……いや、しかし問題は。

「走開！どけ 你們妨礙的！邪魔魔だ」

スーツさんがこっちに向かってなんか怒鳴ってるよ。

「なんて？」

「そこどけてさ。あんたがいつまでも逃げてかないから、邪魔してるって思ってるみたい」

「へー。で、お前は逃げなくていいのか？」

「あんたが怖がって逃げるようなら逃げてたけど、そんな平気な顔してるなら平気でしょ。諸葛様も、多分あんたは強いだろうから荒事は

問題ないって言ってたし」

何言ってくれちゃってんの諸葛さん。

しかしまあ、確かにビビってはいない。だってぶつちやけ、ジャンヌとかブラドとかに比べたら……なあ？

しかも、それでなくともこちとら武偵高の生徒だぜ？ 普段から、

綴だの蘭豹だの頭おかしい連中に囲まれてんだ……ん？ 蘭豹？

「……あ」

思い出したぞ。

『貴蘭會』って、確か蘭豹の実家だ。確かそのボスの愛娘だって話を聞いたことがある。

ちつくしよう、あの野郎。こんなところでも嫌に迷惑かけやがって。いやまあ、さすがに関係ないけども。

……しかし、これはいい機会だ。せつかくならこいつら伝手に、蘭豹の親に告げ口してやろう。あいつが普段、どれだけ横暴か。マフィアのボスにそんなこと言ってもしかたないかもしれないねえが、治安維持に努めるような人なら、ワンチャンあるかもしれない。

とはいえ、そのためにはまずこいつらを抑えねえとな。襲いかかられたら話もできねえ。一応、拳銃ベレッタはあるが……勝てるかな？

という風に心配してたんだが……なにやら様子がおかしい。俺に怒鳴った黒スーツ（黒スーツ1と便宜的に呼称する）が、別の黒スーツ（黒スーツ2以下略）に肩を掴まれて諫められている……っばい。「なあ、なにやっつてんだあいつら？」

「どうも、あんたの服に気付いたみたい。『藍幫』は『貴蘭會』より遙かにおっきいもの。そこのお客だつてわかったから、怯んでるみたいよ」

「はあ？ なんでそんなのわかんだよ。俺、『藍幫』の名前なんて出してねえぞ」

「……服の後ろ、見てみなさい」

ユアンの指示に従って、一度上着を脱いで背中を見ると……げっ、なんだこれ。かなり崩れちゃいるが、円の中に『藍』の文字が入っているデザインになっている。何ゴンボールなの。

「それ、『藍幫』のえつと……ひ、ひが？　ひぎ？」

「庇護か？」

「それぞれ。庇護下にあるって意味だからね。下手したら抗争になるから、連中も手を出していいものか言い合いになってるわよ」

なるほどねえ。諸葛さんが言ってた厄介払いってこのことか。

……じゃあ、丁度いい。笠を着るようだが、このこつぱずかしい服に、役立ってもらおう。

俺はいまだにがやがや言ってる黒スーツどもに一步踏み出し、

「おい、お前らー！」

『ッ!』

俺の声に、連中は振り返る。よし、注意は引けたな。

いつの間にか介抱を終え、隣に来ていたユアンに視線をちらりと向けて、

「ユアン、通訳頼む。……お前らな、こんな昼間から暴れんな。『貴蘭會』ってのは治安を守ったりするんだろ？　言うなら、『藍幫』と同じなわけだが……これは、お前らのボスが望むことか？」

とりあえずまずは場を収める。そのための台詞を、俺は言う。

同時通訳のようにユアンが口を開くと、連中は呻いた。『藍幫』とボスとの効いたようにユアンが口を開くと、連中は呻いた。『藍幫』とボスに進言されるかも……とか考えてんだらうな。

マフィアやヤクザの世界は、厳しい。上司に害を及ぼすようなことがあれば、重い罰が待っている。そういう世界だと、前に蘭豹が酔っ払いながら言っていた。

だからこそ動揺させられてるんらうが……さらに追い打ちだ。

「もめ事を起こしたくねえのは、こつちも一緒なんだ。俺も、『藍幫』には世話になってる身だからな。問題があったら、報告する必要がある。そしたら、俺も迷惑かけちまう。『上』に迷惑かけたくねえのは、そつちもだろ？　だったら、この場は退けよ」

譲歩しつつ、強く出る。こういう交渉術は、ダギユラ尋問科にいる鈴木時雨という同級生に習った。

果たしてそのやり方は功を奏したようで、

「うまくいったっぽいわよ。一人冷静なやつ（黒スーツ2）がいたみたい。そいつが話を引き下がる方向に持ってつてる」

ユアンからの報告に、俺は内心で息をつく。

よしよし、第1段階はうまくいったな。

じゃあ、次は本題。あの暴力飲酒独身教師・蘭豹についての告げ口タイムだ。

俺が一番冷静と思われる黒スーツ2に視線を向けつつ、

「おい。お前ら、蘭豹つてやつ知ってるか？」

「ッ！^{おまえ} 你！^{お嬢を知っているのか} 知道小姐？！」

つと、反応早いな。ユアンに訳してもらおう前に黒スーツ2が言ってきた。

なんとなく、雰囲気わかる。なんで蘭豹のこと知ってんだよ的な感じだろ。多分。

「知ってんなら話は早い。お前からボスに伝えとけ。蘭豹が日本で暴力的すぎるから、少しは大人しくさせてくれってな」

と、俺は蘭豹の日本でのありのままを伝える。ついでに更生の願いも。

しかしまあ、これだけだとただの悪口にすぎないので、フォローも入れながらさらに詳細に語ろう。

「まあ、指導はちゃんとしてるから問題ねえっちゃねえが……俺は、何度も蘭豹に泣く目を見せられてんだぞ」

実際実力はつくから困りもんだよ、あれ。ただ代償に辛すぎる訓練で、なんで俺は涙目になったことか。

つと、それよりさっきのはちよつと日本的な言い回しだったか？ いや……ユアンは普通に訳してくれてる。問題は無さそうだ。

ちよつと間が開いたのは気になるが。

そのことに一安心していると、今度は残った最後の一人、黒スーツ3がなんか言ってきた。しかも、なんていうか……信じられない、みたいな顔で、わめいている。

なんだ？ 俺、そんな変なこと言っただけ？

「ユアン。あいつ、なんて言ってる？」

「えつと……』そんなわけあるか。そんなこと、できるはずがない』、つて」

「——はあ?」

俺は、思わずいらつとしてしまい、若干に声に剣呑さが宿ってしまつた。

できるはずがない……だと?

「……おい。お前ら、なんか勘違いしてねえか? お前らには、そんなに優しいような人間に見えたのか?」

なにをふざけたことを言つてんだ、あいつらは。蘭豹のやつがどれほどDSなやつかまるでわかつていない。

それともまさか、実家じゃおしとやかだとか? 「お父様、おはようございます。ほら、今日も小鳥さんが歌つてるわ」、みたいなの?

……やつべ、想像したら笑えてきた。

口元に浮かぶ笑みをなんとか抑えようと頑張りつつ、

「……なんなら、本当の姿を見せてやつてもいいんだぜ?」

と、俺は提案してみる。

そうだ、普段の様子をビデオにとって『貴蘭會』に送りつけてやろう。そうすれば、いくらなんでも真実に気づくだろう。いや、それとも生中継できるようにするか? それも悪くないな。

……つと、いけねえ。つい考え込んでた。

頭の中でいくつか案を出した俺が思索から戻り、連中に詳しく俺の素敵計画を話そうとすると……、

戻ってボスに知らせるぞ
「操! 返回報告!」

それを聞くより前に、連中はそろつて店を出て行つた。

……え、なんで?

唐突な遁走にぽかんとなる俺。そんな俺を、隣に居たユアンが見上げながら、

「あんた、結構すごかつたんだね。ちよつと見直したわ」

なんて言つて、意外そうな、でも少し笑いながらそう言つてきた。

……まあ。

もちろん、意味はよくわからなかつたが。

院美詩は、己も形式上は属する『藍幫』の食客、有明鍊の隣に佇みつつ、面倒なことになったなとため息をついた。

ことの起こりは数分前。鍊と食事をしていたところ、香港大手マフィア『貴蘭會』が起こしたトラブルが原因だ。

もつとも、そのトラブル自体はすでに収まったと言っているだろう。鍊は『藍幫』の客人という立場を利用し、その場を収めて見せた。問題は。

事態が解決した、後。鍊が放った一言だった。

「おい。お前ら、蘭豹ってやつ知ってるか？」

その台詞を、ユアンはそのままだがそうだったように、中国語で通訳しようとした。

しかしそれよりも早く『貴蘭會』のメンバー、その一人が反応したのだ。

『お前！ お嬢を知っているのか!？』

彼らは、日本語を理解していない。それは、今までの流れでわかる。だのに反応したということは、それは『蘭豹』という言葉に、だろう。それだけが唯一、人名として通じるからだ。

そして、それに対する『お嬢』という呼称。

つまりは、

(蘭豹……蘭？ まさか……『貴蘭會』のボスの娘?)

という推理を、ユアンは脳内で組み上げ、眉を顰めた。

実際、その読みは当たっている。現在東京武偵高に在籍している蘭豹という女怪は、『貴蘭會』のボス、その愛娘に当たる。

(これは、面倒なことになってきたわねえ……。鍊のやつ、なんでそんな人知ってるの？ しかも、呼び捨てだし)

なにやらきな臭くなってきた事態に、ユアンはもう一度ため息を小さくついた。

そんなユアンに構わず、隣に立つ日本人はさらに言葉を重ねる。

「知ってんなら話は早い。お前からボスに伝えとけ。蘭豹が日本で暴力的すぎるから、少しは大人しくさせてくれってな」

そこまでを言つて、一度考えるように言葉を切り、
「まあ、指導はちゃんとしてるから問題ねえっちゃねえが……俺は、何
度も蘭豹に泣く目を見せられてんだぞ」

と、続けて言った。

(つて、早い早い。少しは手加減してよ、もう)

そうは思いつつも、ユアンは慌てて鍊の言葉を訳し始める。

まずは、前半部。

『知ってるなら、話は簡単。あなたたちから、ボスに伝えて。蘭豹さん
が日本で暴れてるから、おとなしくさせてもらうように、と』

若干言葉が柔らかいのは、ユアンの独断だ。伝えるのは、なにせ自
分だ。喧嘩腰で伝えて矛先がこちらに来ては困る。

しかしそれはそれとして、後半部が困った。

(泣く目を見る……？ つて、なんだろう)

既に鍊には伝えているが、ユアンの日本語はまだ拙い。まだまだ日
本語の言い回しに富んでいるわけではなく……今回も、その例に漏れ
なかった。

しかし、単語区切りならば意味はわかる。ならば、とユアンは自分
なりに解釈を始めた。

(泣く目を見る……泣く、目……涙目つてことかな？ それを、蘭豹つ
て人に見せられてるつてことは……)

復唱、分割、解釈。さらに、前文と結合して再解釈。

ユアンは、いままでに得た知識を動員して、鍊の言葉をできる限り
正確に読み取る。

確認している暇はない。現状は、わりと逼迫している。一刻も早く
伝えることでこの厄介な状況を抜け出せるとユアンは考えた。

だから、

『指導はちゃんとしてるから問題はないけど……俺は何回も蘭豹さん
を泣かせてる』

と、答え合わせというプロセスをすっ飛ばして、ユアンは鍊の言葉
を伝えた。

これに慌てたのは、当然『貴蘭會』のメンバーである。

なにせ彼らは、蘭豹の噂をそれこそ誰より聞いている。一例を挙げれば、香港から出禁になるほど暴れまわったなど、枚挙に暇がない。だからこそ、目の前の少年が、女傑・蘭豹を指導したなどと、ましてや泣かせたなど信じられなかった。

だから、彼らはその思いを素直にぶちまけた。『そんなわけあるか。そんなこと、できるはずがない』、と。

それを、通訳を請け負っている少女が、少年に伝えた——その、次の瞬間だった。

「——はあ？」

雰囲気か。

明確に、変わった。

『——ッ!?!』

ユアンも、そして『貴蘭會』のメンバーも、一様に息を飲む。

声には刃のような怒気が乗り、眼光は弾丸のように『貴蘭會』のメンバーを射抜く。

只者ではない。彼らは、一瞬でそれを理解した。あるいは、さきほどの戯言が真実味を持つほどに。

そして。

さらに、通訳の少女が、宣託を受けたかのように少年の言葉を伝える。

『あなたたちは、何か勘違いしていないか？ そんなに、俺が優しくそんな人間に見えたのか？』

おそらくそれは、現実よりはずっと柔らかい言い方だったのだろう。それは、わかる。

けれどもはや、意味がない。言い方一つでは変わらない、凄み。それが、眼前の少年にはあった。

そして、まるで止めを刺すかのように。

少年は、不敵に……いつそ、凄惨とさえ言えるように笑いながらこう言った。

『……なんなら、本当の姿を見せてやってもいいんだぜ？』

——そこまでが、限界だった。

もはや彼らは少年の言葉を信じ込み、彼らがボスへとこの危険な少年のことを報告することを決めた。

追い立てられるように店を後にする『貴蘭會』。

その姿を見送りながら、ユアンは呆然として鍊を見上げる。

そこにいるのは、まぎれもなく今まで一緒にいた少年だ。一緒にバスに乗って、香港島を観光して、ラーメンに一喜一憂するような、普通の少年だ。

けれど。

それまでの印象すべてを払拭するかのようには、鍊は悠然と立ち尽くしていた。

だから、そのギャップが少しおかしくて……けれど、やっぱり意外に思えて。

ユアンは、困ったような笑ったような顔で、鍊に話しかけるのだった。

——後に。

今回の一件について行われた『藍幫』と『貴蘭會』の話し合いにおいて、諸葛静幻から見た有明鍊の印象が取りざたされ、さらに誤解は深まっていくのだったが……もちろん、鍊がそれを知ることとはなかった。

* * *

「——で？　いかがでしたか、お客様？　香港は」

「ああ、いいところだと思っぜ。すっげー楽しかった」

後ろ手に手を組みながら、いたずら気に微笑むユアンに、俺は満足げに答えた。

結局、『貴蘭會』に絡まれたあの後も、俺たちは香港島を周っていた。

『彌敦道』、『女人街』、『レパルスベイ』、などなどいろんな観光エリアを見て回った。トラムにも乗ったし、九龍まではフェリーも使って移動した。宵夜……夜飯は、上環で食うことになった。香港の夜の街は、ネオンがそこら中でキラついてて、仕事帰りの人々で活気がすごい。見て回るだけでも楽しかったなあ。

トラブルこそあったものの……正直、大満足だ。素直に、来てよ

かったと思える。

それもこれも、今隣を歩いている小さなガイドさんのおかげ、だよな。

「ありがとな、ユアン。いろいろ案内してくれて」

「別に、お礼はいらないって。こつちも仕事だったわけだし。……まあ、あたしもこんなに1日でいろいろ遊んだのは初めてだったし、楽しかったけどね」

「そりやよかった」

俺は、ユアンの言葉に胸をなでおろす。

なんだかんだで、迷惑かけてたんじやないかって、結構気にしてたからな。そういつてもらえると、なんつーか、ほっとする。

——ああ、そうだ。

「お礼に、どっか行きたいところとかないか？ 今度は俺が……」

付き合うよ、と言いかけて気づく。よく考えれば、ここはユアンの故郷だ。行きたいところなんていつでも行けるだろうし、なんか物の方がよかったか？

しかしそう改めて提案する前に、

「行きたいところ、かあ………しいて言えば、『山頂』、かな」

『山頂』？」

「そ。英語で言えば、ヴィクトリア・ピーク、かな。太平山っていう山があつてね。香港の中でも1、2を争う観光名所よ。そっちでも、100万ドルの夜景、とか聞いたことない？」

「ああ……まあ、聞いたことはあるよ」

「そこからの景色は、ホントにそう呼べるくらいの眺めらしいよ。特に、夜には。ビルの光が宝石みたいにキラキラ輝いて……星の海を見てるみたい、だってさ」

ゆらゆらとツイントールを揺らしながら、ユアンは人から聞いただけ、みたいな情報を俺に教えてくれる。

ふむ……100万ドルの夜景、か。

シメとしちや、悪くないんじゃないか？ 口ぶりからこいつも行ったことないみたいだし、礼代わりになるかもしれない。

「じゃあ、そこ行くか」と、俺は気軽に言おうとして……しかしほとんど最初に遮られた。

「行かなくて、いいよ」

「なんで？ 行ってみたいんだろ？ じゃあ——」

「それじゃ、意味ないから」

意味が、ない？

被せるような言葉に、俺は眉をひそめる。

そんな俺に、ユアンは苦笑のような、困ったような顔を見せて、

「……あたしが、孤児だつて話したの覚えてる？」

「ああ、まあ……」

「だからつてわけじゃないんだけどね……あたしが住んでるのは、香港島の北角。^{バック}その、路地裏……まあ、こういう言い方はあんまりしたくないけど、貧困街みたいなことよ」

「……………」

「つまり、簡単に言っちゃえば、貧乏なんだあ。だからあたしはいつか日本に行つて、お金持ち……つていつたら、ちよつと違うかな。なんというか……上に行きたいの。あんまりうまく言えないけど。だからいっぱい勉強して、日本語も覚えた。まだまだ下手だけどね」

日本に留学したいってのは……そんな理由があつただけだ。

でも、

「……それと、ヴィクトリア・ピークに行かないってのは、なんの繋がりがあるんだ？」

「……夢、なんだ」

夢……？

「ヴィクトリア・ピークから香港を見下ろすとね、目に入るのは、キラキラしたビルばかり。でもさ……そこに、あたしの居場所はない。見えない。光の奥の奥、そこが今のあたしの居場所で……だから、否定される気がするのよ。それを見ちゃうと、自分が」

「だから……見ないって？」

「そうよ。少なくとも、今は。いつか、あたしが『上』に行つて、またここに戻つてきたら……その時に、あたしは自分の目で見て、言つて

やるの。『あれが今のあたしの居場所なんだ』って。それが、あたしの夢。……一生叶わないかもしれないけどね。今貧乏だっということはハンデの一つだし……あたしは、特別頭がいいわけでもないから、きつとすつごく大変だと思うわ。正直、弱い人間だと思う。……でも、さ」

そこまで言って、ユアンはたたつと駆け出す。

止める間もない疾走に俺が目を丸くする中、急に立ち止まったユアンはくるつと俺の方へ振り返り、

「——弱いって、がんばらない理由にならないじゃん？」

につこりと笑いながら、ユアンはそう言った。

色とりどりのネオンに照らされ、しかしそれ以上に輝いた笑顔。弱いななんてとんでもない……強い、輝きだ。

それに魅せられた俺は、思わず立ち止まって彼女を見る。

それが気恥ずかしかつたのか、ユアンは手で俺を招きながら、

「あーもーなんか恥ずかしいこと言った気がする。これは、日本でやり返すしかないわね。——ほら、そろそろ戻るわよつ。あんまり遅いと諸葛様に怒られるじゃない」

「……ああ、わかった」

「ん、よろしい」

再び体の向きを反転させたユアンは、先導するかのように歩き始める。

俺は慌てて、その後ろを追いかけ始めた。

その最中、俺は……カナさんに『睡眠』のことを説明された時のことを思い出していた。

あの時俺は、よつほど自分の強さに自信があるんだな、と思った。

そして同時に、こうも思った。

ああ——この人は、俺とは違うんだな、と。

俺は、弱い。少なくとも、自分はそう思ってる。

だから、カナさんみたいな生き方は、できないと思った。俺には、あんな強くはなれない。

だから。

きつと、どこかで諦めていた。頑張ることを、無意識に。いつも、なんとなくでのっぴきならない状況に追い詰められていただけで、自分から何かをできたことが、俺にはあっただろうか？

きつと、ない。俺には、それがなかった。

——だから。

もし、俺が、弱くても頑張るべき時が来たなら……その時は、ちゃんと頑張ってみよう。俺の前に行く、年下の……けれど、強い少女のように。

異国の夜空の下、俺は一つの誓いを立てた。